

至高の一打

もぐもぐファンタ爺

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

野球を愛し、野球に愛されていた

極度に不器用なおっさんが

足りなかつたものと、余分なものを持っていたら

世代の関係上、オリキャラがかなり多くなります。

前編：西兄の青道最終学年まで

後編：西弟の青道卒業まで

前後編を通して青道高校を舞台とした話になります。

プロ編に関してはどのような形にするか考え中です。

目次

〔前編〕

プロローグ 1

シニア編

王様の始動 4

幼い黒豹の誓い 7

喜び、期待、悔しさ 10

苦渋の決断 13

逃げの代償 15

チームの輪と孤高 17

高校1年の夏

入寮と新たな仲間★ 21

洗礼に救済を 27

怪物たちの産声 30

騒ぎと託すもの 33

越えるべき壁 36

垣間見える本性★ 39

無情にも 42

春が終わる 45

一夜明けて 48

継承 51

時は流れ夏直前へ★ 53

過去と現在と未来と★ 57

打の青道 61

名将の思い 64

監督就任2年目の判断	67
覆す	70
3年生	73
怪物の更なる飛躍	77
西と東	81
流れを掴むのは	84
天海 賢治という少年	87
思いの強さ	90
主役はお前たちだけじゃない	93
試合の行方	97
エピソード	101
高校1年の秋とそれから	
プロローグ★	104
2年生と副部長の決意	107
勝ち残ったのは	109
ボーイの練習	111
怪物同士の戯れ	113
咆哮の嵐	116
今の青道と次の相手	118
忍者の一打	120
早すぎる分岐点	123
戦巧者	126
剥がれ落ちるメツキ、真なる鉄へ	129
はじめての挫折	132
名を知らしめる	135

エピソード	138
高校2年の夏	
プロローグ	141
ふせ!	145
エースになるために	147
打の青道(裏)	150
和解と決意	154
新たな挑戦	157
意地と実力	160
紅白デビュー	163
紅白戦(1打席目)	167
紅白戦(2打席目)	170
決断	173
夏合宿	177
準備	180
前哨戦	183
仙泉学園戦 part 1	186
仙泉学園戦 part 2	190
仙泉学園戦 part 3	194
仙泉学園戦 part 4	198
仙泉学園戦 part 5	201
仙泉学園戦 part 6	205
来年の構想	209
体制崩壊	213
エピソード	216

高校2年生終わりまで

プロローグ

閑話

リハビリ

秋の本戦に向けて

秋の都大会 3回戦 成孔

秋の都大会 準決勝 part 1

秋の都大会 準決勝 国士館 part 2

新入りの影響はいかに

紅白戦

春の甲子園大会 初戦

春の甲子園大会 準決勝 part 1

春の甲子園大会 準決勝 part 2

高校3年の夏

プロローグ

春の都大会 く4回戦

春の都大会 準々決勝

春の都大会 準決勝 part 1

春の都大会 準決勝 part 2

次に向けて

紅白戦 (1年生&2年生vs3年生) part 1

紅白戦 (1年生&2年生vs3年生) part 2

紅白戦 (1年生&2年生vs3年生) part 3

紅白戦 (1年生&2年生vs3年生) part 4

紅白戦のあと

王者の戦い	406
最初の夏と最後の夏	
プロローグ	399
エピソード	396
夏の西東京都大会	390
夏の西東京都大会	386
夏の西東京都大会	381
夏の西東京都大会	377
おっさんの休日	374
夏の西東京都大会	370
夏の西東京都大会	366
夏の西東京都大会	362
夏の西東京都大会	358
落合コーチの青道選手メモ (選手紹介)	353
抽選会を経て	350
夏合宿 part 5	345
夏合宿 part 4	341
夏合宿 part 3	338
夏合宿 part 2	333
夏合宿 part 1	328
次世代のエース part 3	323
次世代のエース part 2	319
次世代のエース part 1	315
3年生との差	311

〔後編〕

横綱対決	413
打者として	419
エピソード	427
閑話 3年生能力	434
閑話 休日	441
群雄割拠の訪れ	
プロリーグ	444
暗雲	448
本当の力	455
国体に向けて	464
国体 part 1	470
国体 part 2	477
国体 part 3	483
掲示板(ドラフト当日)	489
改めて新チーム	500
秋季東京都大会2回戦 明大一高戦	506
秋季東京都大会2回戦 明大一高戦	513
秋季東京都大会3回戦 市大三高戦	520
秋季東京都大会3回戦 市大三高戦	529
秋季東京都大会3回戦 市大三高戦	538
秋季東京都大会3回戦 市大三高戦	546
春休み明け	551
入寮日	557
閑話：がんばれ！かねまるくん！①	563
閑話：がんばれ！かねまるくん！②+おまけ	569

不安の種	—	574
ピスタチオの意地	—	580
次なる相手	—	588
春季都大会	準々決勝	part 1
593		
春季都大会	準々決勝	part 2
599		
春季都大会	準々決勝	part 3
607		
春季都大会	準々決勝	part 4
613		
春季都大会	準々決勝	part 5
619		
地元スポーツWEBニュース	—	626

「前編」

プロローグ

青道スカウトメモ

西 晴之 城南シニア出身

右投げ左打ち

中学3年時では主にショートを守っており堅実さからくるファインプレーが目を惹いた。

他にもセカンド、キャッチャーの経験があり、内野のリーダーとしての素質があるように見える。

打撃面では三振が極端に少なく、冷静に相手守備の穴を抜くような鋭い打球を幾度と放ち、ランナーおよび得点差に関係なく、結果を安定して出している印象がある。

安定感だけでなく長打力もあるため、将来的には打の青道のクリーンナップとして期待できるかもしれない。

シニアの監督から聞いた話では、守ったり走ったりするのが楽しいようで、チームメイトと積極的に守備、走塁に関して色々話ながら工夫しているようだ。好きなものは昆布、漬物らしい。

side 西

昔から野球にずっと打ち込んでいたが、私には全く才能がなかった。投げたら宇宙開発またはワンバンで相手がとれないし、バットをふっても掠りもせず肩が遠心力で外れるし、フォームもめちやくちやであった。一時期はそれが恥ずかしくて、隠れるように一人で何度も何度も狙ったところにボール当てをし、バットをゆつくりと遅くでもいいから振っていたものだった。

必死に野球の本を読みコツや感覚、フォームが常人のものになったぞと思ったときには、自身は50歳を越えていた。

遊びではあるが、仕事の合間に友人とキャッチボールをする、打ってもらったボールをグローブで捕って、相手が取れるようにしっかりと投げる。これだけのことがとても楽しかったのだ。

ある時、小学生の頃にバットを振って、脱臼したのを治してくれた近所の友達が久々に連絡をしてきた。人数合わせでもいいからと、週末に河川敷で行われる懇親会を兼ねた試合に誘いに飛び付いた。

キャッチボールをするだけでも、バッティングセンターで打つだけでも楽しいのに、チームで”野球”をするのはどれだけ楽しいのだろう。年甲斐なくワクワクとってしまった。

side 友人

小さい頃に走るのがめっちゃ早いのに、とにかく身体の制御が下手なやつがクラスにいた。

そう、力入れすぎちゃったと次々とおもちやをクラッシュしていくやつだった。高校の時に貸したエロ本を興奮して破かれたのは今も忘れていない。あれだけは許していない。

54, 5歳くらいになった時に、毎年やっていた地域の商店街の関係者での草野球の試合に、同級生からおもちやクラッシュヤーが野球できるらしいぞと言ってきた。30年ぶりくらいに実家経由で電話をして誘ってみると、懐かしいでかい声で「やる!!!」と参加表明してきた。少し耳が痛くて何を話したのかあまり覚えてないけど、楽しみにしていることだけは伝わってきた。

当日同じ年か?と言いたくなるくらい引き締まった身体をしていたおもちやクラッシュヤーがやってきた。

キャッチボールがすっかりとできていたので、相手も遊びだからと思つて先発を任せると、なんと三者連続三球三振してしまった。

後でキャッチチャーに聞くと、構えたところに狂いもなくボールがきていたらしい:

これでは試合にならないから、ノックを受けてある程度できると事前に聞いていたので、セカンドを任せるとファインプレイを連発して

いた。

打つほうも綺麗に守備の間を抜けるヒットを打ちまくっていた。

こいつが若いときからこんななんだったらプロ行つてたのかな？と思つたが、まあ同い年の54、5だったからなあ。

バット振つたら脱臼したり、変な球投げたりしたのが努力したらこんなになるんだなって感心したものだつた。

今ではわしは80歳になつたが、あんなに元気だつた脱臼野郎が先に逝くなんて世の中わからんものよな。

名物になつた野球爺さんとして天国でも野球してるのかもな。

side 西

まさかカキを食べてあたつてしまい、衰弱して逝くとは思わんかつた。なんかヒトみたいなのに会つて何かしてみたいことがありますか？と聞かれて、反射で野球！と答えてしまったけど大丈夫だろうか？

もう一度尋ねてきて「生まれ変わるとしたらどういふ風になりたいですか？」と言われたので、「自分の身体をしつかりコントロールできるようになりたい」と、そして感情が顔にめっちゃ出るから「顔に感情が出にくい」ようになったらありがたかつたなあと答えたら、「なるほど」とこちらの手を軽くポンポンと二回叩いて「頑張つてね」という声を聞いたら寝てしまった。

身体全身が痛い？ヒリヒリする？し泣き声も聞こえるしなんなんだろうな：これは

シニア編

王様の始動

side 成宮

ストレート、スライダー、カーブ

これが今投げれる球種で、小学生までは変化球はカーブしか投げられなかった。

昨秋の全国大会で優勝した城南シニアに入って1週間くらいしたときに、2年上の先輩でキャプテンの西さんから、俺にはスライダーが合ってると言われた。何故かわからないけど覚えてみる気になって投げると、たった2、3球で指にしつくりとくるようになった。

それが逆にイラツとしてると、「座ってやるから投げてみるか？」と聞かれ、俺の球が取れるもんかと思いつきり投げてやったのに、涼しい顔して全部いい音をさせて捕球されてしまった。

次の日に捕逸させてやろうと西さんに声をかけると、「俺はショートのレギュラーだからキャッチャーに受けてもらえ」と言われて呆然としていると、後ろから他の先輩に声をかけられ、その人とブルペンに入ることとなった。

こいつが取れなければあの人に受けてもらえるんじゃない？と思っで全力で投げたが、気持ちが入ってないと怒られるし、完璧ではないがしっかりと捕球されるわでムキになってしまった。

なんか3年の控えキャッチャーだったらしい。

ふと落ち着いて周りを見るとコントロールが悪いけど質のいい球を投げる先輩、変化球がすごい曲がるけどどっか変なところも同級生がいた。さっきまでの自分を思い返すと、総合的なレベルでは同じくらいじゃないかと思って、少し落ち込んでしまった。

練習終わりにキャッチャーの先輩に聞くと、最初はみんな西さんがキャッチングをしてどういう風に育てるか決めるみたいで、去年の新入生のピッチャーにも、俺みたいに荒れたやつがいたららしい。

同じようなことをしてしまつたみたいで恥ずかしくなつたが、ここで終わつたら他と変わらないから、西さんにピッチングについて聞くようになった。そこから俺の未来でのピッチングが出来上がつていった気がする。

side 西

小さい頃からいろんな事に既視感があつた。

例えば初めて見る写真、風景がこんなもんだつたなと感じたり、鉛筆で絵を描くと何故か周りより上手く、何回も描いていたかのように描くことができたりしていたのだ。

何故かやつたことがある感覚が気持ち悪くて、小さい頃は無表情ではあるが急に泣き出したり、どこかへ駆け出して行つたりと大変だつたらしい。色々試してみたが全然治らなかつたものの、時間が解決するだろうと、呑気に両親は考えていたらしい。

それが気にならなくなつたのは、5歳の誕生日に父親が買つてきたグローブとボールを見た時であつた。これだ、これしかない、これを求めていた：そんな声が頭の中で響いた気がして、今まで感じていた嫌悪感のようなものが無くなつた。

父親にキックをして奪い取つたグローブとボールを、必死になつて開封して触つたとき、とても安心し、やり方もわからないのに無性に使いたくなつた。父親にこのときのことを聞いたら、初めて年相応な笑いかたをしていたと言つていた。他のものに対する嫌な感じとかは、早く野球に出会えというものであつたのだろうか。

あと父親の鳩尾に足が入つたのは：うん：ごめん。

そこから野球を続け、城南ジュニアを経て、シニアに入ると、とりあえずポジションが手薄なところに入るように言われ、キャッチャーをすることとなつた。

自分を含めて同学年に3人キャッチャーいることになるのに、何故かと疑問に思つたら、2年生にキャッチャーをやりたい人がいないらしい：

ジュニアのころのキャッチャーの先輩が、親の転勤でいなくなつたらしく、私達が秋から何とかしなくてはならないらしい。

そこからは地獄だった。

秋からレギュラーレベルになる、いやさせてみせると言わんばかりに、コーチや3年生の集中指導を受けて、厳しい特訓をさせられ、キャッチャーとしてのコーチングや配球、全体の流れの把握など色々なことを詰め込まれ、夏の大会では、打力の関係で2番手キャッチャーとして、夏の大会に出場することとなった。東京大会で負けてしまったが、キャッチャーとして色々勉強ができた。

1年生の秋の大会から4番キャッチャーとして、チームを牽引したが、丸亀シニアや松方シニアなどの強豪に敗れ、全国へ行けないまま1学年上の先輩が卒業してしまった。

2年生の秋、最上級生としてキャプテンを任されると、負担軽減と同級生のキャッチャーが育ってきたことから、元々やっていたショートとして、グラウンド全体の管理を行うこととなった。

ショートとして試合に出場すると、巧みにポジションを変え、相手打者へプレッシャーをかけ、チーム一丸となり、秋のシニア大会で丸亀シニア、松方シニアを破り全国大会へ出場し、そのままの勢いで優勝を成し遂げた。

3年生になると、有望株としてピッチャーに成宮、外野手に神谷がシニアに入ってきた。

成宮にスライダーを勧めると、なんかすぐに投げれるようになったので、才能に驚いたが、ボールをとりあえず受けてみることにした。

そこから「俺にピッチングを教えてください」とか絡みにくるようになったが、教えるとしつかり自分の考えに落とし込んでできるようなっていくし、こいつすごいなと思った。

私が生まれるのが2年遅かったら、キャッチャーに志願して専念してたかもしれないと、すこし惜しく思った。

幼い黒豹の誓い

side カルロス

僕は友達との遊びも、運動も勉強も、常に1番だった。

ある日、友達が出るからと誘われて見に行つた野球の試合、そこで僕は圧倒的なものを見た。

4番ショートで試合を支配する怪物。

内野陣に逐一声をかけ、外野の守備位置の指示、他にもその時の自分ではわからないこともやっていたのかもしれない。

自分でチャンスを作り出し相手を崩して先制、圧倒的な守備、連携で封殺し、とどめに自分のホームラン。

何もかもが圧倒的だった。

大人ではない同年代に、本能的に勝てないと思わされた初めての瞬間だった。

城南ジュニアに所属していると聞き、初めて、自分を鍛えるために、あれに勝てるように、せめて並び立てるように野球を知り、できるように努力をした。

小学5年生になって入るとあれはシニアに移っていた。

打席に立つ前に盛大に空振りをしてしまった。

そしてそのジュニアを卒業して今、目の前にあの人がいる。

実際に、一緒に野球ができるのは半年もないかもしれない。

「西さ……！」

「俺にピッチングを教えてください!!!」

白いやつに邪魔をされた……

投手と野手は最初の自己紹介以降、あまり話をお互いにしてない。そもそも練習内容が異なる。

白いのは成宮というらしく、西さんにピッチングを教えてもらつてみたいだ。

成宮は1週間前からだが、僕は……俺は3年前から憧れて、認めてもらいたいと思つている……あいつにも負けられない。

side out

城南シニア恒例、5月の紅白戦

3年生には今の立場の自覚、努力の成果を

2年生には1年後の自分のなるべき姿を、引つ張るべき存在を

1年生には今の力を

チームとしては戦力の発掘を

2, 3年生を戦力として均等に分け、そこにポジションを考慮して1年生を振り分ける。これが例年の紅白戦であった。

今年は少し毛色が違う、というのも西のせいである。

その場にいるだけで存在感があり、常に冷静に全体を引き締めていく存在。というのもあり2, 3年生vs1年生+西となっている。

城南シニアの監督としても西という存在は、今までで最高の逸材であり、その雰囲気、姿を近くで1年生に感じ取ってほしかったのである。

先攻を1年生チームとして紅白戦が始まった。

1番の神谷が気迫から四球をもぎとると、すかさず2盗を決めた。

2番打者が緊張した面持ちで打席でバットを握り直していると、ベンチから鋭いが優しい声がかけられる。

何故かリラックスした表情となり、しっかりとバントを決めて神谷は3塁へ。

西から直接声をかけられた3番打者は、センター方向へゴロを放つと、神谷はゴロゴロでホームへと悠々帰還した。

ホームで西から誉められた神谷は、スキップしながらベンチへ戻っていた。

そして西が打席に入った瞬間、全体の雰囲気が一気に緊張したものとなった。

side 成宮

5番バッターとして、ネクストバッターサークルに入ると、ゾワッ

とくるものを感じた。

反射的に前を見ると、相手を俯瞰しているかのように眺めている西さんが、バッターボックスに立っていた。

突如2年生のピッチャーは制球を崩し、ストレートの四球となった。自分が投げていたらと思うと寒気がした。

バッターボックスに立つと、どうもピッチャーが集中できていないような気がする。

グリーンライトのサインが出た。西さんがどう動くのか気になるので、初球は捨てて、ピッチャーを見ながら西さんを見てみると、自然体でそこにいるのが見えた。だが、目だけはピッチャーから目を離さずにいて、そのじつとりとした視線はピッチャーにプレッシャーを与えていく。思わずピッチャーは牽制をするが、球が浮き、暴投し2塁へ進塁されてしまう。

2塁でリードを大きくとり、ピッチャーに重圧がかかる。そして不用意に投げられた甘い初球のストレートに、バットを思いつき振りぬいた。

side out

上級生チームのピッチャーは、なんとか2点で1回の表をしのぐと、ベンチでぐったりとした様子であった。

1点目は1番センターの神谷の足、チームプレイでとったものだが、2点目は西に明らかにもぎ取られたものであった。

そこからは上級生チームは反撃し、点数を重ねていくのに対して、1年生チームは神谷、西、成宮を中心に食らいついていく。

次々とピッチャーを試していき、4対7と突き放されるが、ついに、8回裏に5番レフトとして出ていた成宮が、マウンドに上がる。

それとともに、ショートにいた西がキャッチャーマスクをかぶった。

喜び、期待、悔しさ

side 成宮

「さすがに緊張するか？」といつもが無表情で、西さんが声をかけてくる。緊張しないし絶対抑えると伝えると、髪をわしゃわしゃとまで回された。父親：いやじいちゃんに撫でられるようで、不思議と悪い感じはしない。顔を見ると安心するし、声をかけられれば、何故か力が湧いてくる気がする。この1ヶ月だけでなんだかんだ頼りにしている先輩であった。

西さんがホームの向こう側へ座ると、右打者がバッターボックスに入ってくる。

1人目は自由に好きなどころに投げてこい、そう言われている。

1ヶ月前に教わったスライダーをインコースに投げて1ストライク。西さんの目が少し大きく開き、笑顔を見せた気がした。

インコース、ボールになるところにスライダーを投げて空振りを奪い、最後はアウトコース低めのストレートで見逃し三振をとった。

side out

成宮が8回を無安打無失点で抑えるも、9回表で得点できずそのまま7対4で、上級生チームの勝ちとなった。

紅白戦のため9回裏を行い、成宮が先頭の4番打者にヒットを打たれるも、後続をしつかりと抑えた。

成宮 2回 被安打1 無四球 無失点

神谷 6打席 4打数 2安打 1打点 2四球

side 神谷

ジュニアでの成績、そして紅白戦で結果を出したからか、レギュラー陣と一緒に練習するようになった。

チームの中でも走力、守備範囲では負けるつもりはない。

合間でコーチや西さんからアドバイスをもらい、徐々に周りからセンターは神谷として認められるようになってきた。

そして夏の大会2週間前に背番号が発表された。

1番から順番に背番号と名前が呼ばれていく。

「背番号6 西 晴之！」

「はい！」

いつもの無表情ではあるが、雰囲気ウキウキしている西さんが、ユニフォームを受け取りに行く。

「背番号8 神谷 カルロス！」

「……はい！」

ウキウキしているように見えた西さんを見ていたら、返事にどもつてしまい恥ずかしかった。しかしユニフォームを受けとると、嬉しさが込み上げてくる。

これでレギュラーに：憧れと並ぶことができた。

力が自然と入り、綺麗なユニフォームの形が少し崩れる。

やっとスタート地点にたてた、足手まといにはならないと、気持ちを新たにした。

side成宮

「背番号1 成宮 鳴！」

「はー！」

前もって言われていた番号で呼ばれ、元気に返事をする。

質はかなり良い、だがスタミナ、経験に不安があると1番はもらえなかった。2年生と比べても打力はあるが、3年生と比べると力はないのは、日々の練習から実感している。

使ってもらえるとしたらリリーフ、合間の先発か：

西さんにこの3ヶ月で、ピッチャーとは、エースとは、色々と問いかけられた。最初は何を言ってるかよく分からなかったが、3年生の背番号1を見てみると、なんとなくただ感じるものはあった。

対外の練習試合で投げる雰囲気が違う。

投げるボール自体は、自分のほうが良いと思うことがある。

でもここぞというところでは打たれない。

他のチームでは崩れるところで崩れない。

西さんが長く受けてきたピッチャーだから、それ相応にすごい才能の持ち主じゃないの？と思つてたらそうでもない。

目付き、振る舞い、周りへの声のかけ方が他のピッチャーとは違う。味方からの声のかけられ方、そして何より起用方法が違う。

でもそれがなんだ。

自分ならそもそも崩される状況になんてならない。

俺は俺だ。

あれに劣っていると、そう周りに、そして西さんに思われていることが何より悔しかった。

苦渋の決断

城南シニアは、夏の東京大会が始まると、強豪と当たることはなく、全学年を幅広く出場させ、1、2年生の経験を多く積ませることができた。城南シニアは強豪らしい、非常に強い勝ち方で決勝まで登り詰めた。

決勝の相手は強豪丸亀シニアで、松方シニアや、江戸川シニアなどを破ってきている。特に注目されているのが、キャッチャーの滝川で、2年生ながら4番を打つ大黒柱として君臨している。シヨートは1年生の白河が努めており、城南シニアの神谷と共に、強豪シニアでの1年生レギュラーとして、かなり注目を集めているようだ。

side 滝川

決勝の相手が城南シニアであることを何度も確認する。

しかし相手は何度見ても城南シニアだ。

去年の秋に自分は、リード面、経験の観点からキャッチャーとしてではなく、ファーストのレギュラーとして試合に出ていた。

先輩から城南シニアには、1年の秋で4番キャッチャーだった人がいると聞いていた。準決勝であった時、その人の名前はシヨートのところにあつた。キャッチャーでないことを残念に思った。だが試合が始まると悪夢が待っていた。

1回表、こちらの攻撃から始まると三者凡退、それも全部がゴロで簡単に打たされ、テンポの良いものだった。裏の相手の攻撃もいつも通り三者凡退、2回表も、良い当たりはあるものの、全員ゴロで三者凡退。

投手戦になる、うちのチームメイトはみんなそう思ったであろう。だが2回の裏に4番が打席に入った瞬間に、今まで感じたことないプレッシャーを感じ、守備陣全員の体が一瞬固まった。

打者に目を向けると、全体を見渡すような、どこを見ているかわからない、けれどしつかりとピッチャーを見ている、不思議な眼をこちらに向けてくる。深呼吸をし、なんとか気を取り戻したが、あの眼を

真つ向から見た、見てしまったエースの投じた初球、いつもなら後半の決め球として温存するスライダーを真芯で捉えられ、ライナーでスタンドへと運ばれた。

そこからはエースが連打され、そのままの流れで5回10点差のコールド負けを喫した。試合をあの一打だけで決められてしまった。他で何を挽回しようがかなわない、そう思わされた、打者の表情もあいまって無慈悲な、しかし美しい一振りであった。

あの光景、プレッシャー、雰囲気がい出さ：

「クリスさん！クリスさん！」

ハツと前を見ると、少し心配そうな顔をした白河がいた。

「監督からクリスさんをお呼びするようにと言われたのですが：体調が悪いようならお伝えしておきますが：」

言いかける白河に大丈夫だと伝え、監督室へと向かう。

ノックをすると返事があつたため入室する。

「お呼びとの事でしたがどうされましたか？」

「クリス：明日の相手は城南なのは知ってるな？」

「はい：先ほど知りました：」

しばらくお互いに無言でいると

「明日は、相手の4番 西を、全打席敬遠しようと思っている」

といつもよりトーンの低い、口の中で何か引つ掛かるような声が監督室に響いた。

逃げの代償

夏のシニア、東京大会決勝 城南シニア vs 丸亀シニア

場内は異様な雰囲気を満たされていた。

第4打席まで、シニア全国No. 1打者と称される4番 西 晴之が敬遠されているのである。しかし、城南シニアは強豪であり、走者として出た西の揺さぶりから、点が入ることが多く、点を取り合うシーソーゲームとなっていた。

そして5対4と城南シニアリードとなった8回裏、ここまで出番のなかった男に白羽の矢がたった。

side 成宮

俺の名前がウグイス嬢に呼ばれ、1年生だということに観客が驚きの声をあげる。そして、西さんがキャッチャー防具を着けて出てきた瞬間、場内が歓声の渦に吞まれた。その歓声に丸亀シニアの応援の声書き消される。

カルロスがよく買ってくる野球雑誌、それに西 晴之特集が載っていた。そのトピックの中に、キャッチャーとしてプロが注目している、というのが大きなトピックであったのを覚えている。

全打席敬遠され、見たかった打撃が見れなかった鬱憤があったのだろう。キャッチャー姿を見せ、俺の前に座っただけでこれだ。

フーツと長く息を吐く。

尊敬する先輩ではある。

でも歓声を受けて、誉められて、活躍し、また歓声を受ける。それは、一番は俺だというエゴがある。

一番の味方はあんた。でも、一番のライバルもあんただ。

呆けている打者に今までで一番のスライダーを投げ込んだ。

side 滝川

敬遠の指示を出したのは監督、だが実際にしたのは自分だと、対戦相手ではあるが申し訳なく思っていた。その心の乱れがリードに出ていたのだろうか、想定よりも城南打線に点を取られる。

バッターとして打席に向かおうとすると、成宮という聞き覚えのない名前が告げられた。そりゃ聞いたことない名前だから、この観客の動揺はあるだろう。しかも一年だとフツと緊張感が抜けてしまったのだろうか、いきなりの歓声にビクツツとしてしまう。

ああ：ここでその姿が、ここで出てくるのかと体がこわばる。

心の準備ができないまま打席に入る。あの目が、あの眼が後ろからじつくりと見てくる。それから逃れようとバットを振るが当たらない。気づけば試合は終わっていた。

side 白河

クリスさんが打席が終わってからおかしい。それを見た監督にすぐに代えられていた。打席で何かあったのか？と、ピンとこないままショートの守備につき、三者凡退で9回の表をしのぎきる。

粘り強い打撃に上手い守備、そう評価されての7番打者。

秋からは2番が濃厚と言われているし、次期上位打線として、同学年には抑えられるわけにはいかない。

いけすかないやつだ。第一印象はそれだった。

しつかりとボールを見て：なにこれ：

あれ？そういえば4,5,6番のうちの打者が連続三振してたのか。嫌だ！負けたくない！意地でストレート、スライダーに食らいついていく。この2球種なら！この速度はスライ：

「ストライク・アウト！」

カーブがスライダーと変わらないフォームから：こいつ：

じつと相手を見ながらベンチに戻る。

僕にできることはそれだけだった。

チームの輪と孤高

side 滝川

試合が終わってほっとしていた。

キャッチャーがしんどいと思ったことはある。

でも辞めたいと思ってしまったのは初めてであった。整列して挨拶が終わわり、道具を片付けていると、西さんがこっちを見ていた。また体が硬直する。

西さんが一步、また一步とこちらへゆつくり歩いてくる。きゅーつと胃が痛くなる。

「そんなに・私が苦手なのか・」

ハツと相手の顔を見ると、相変わらずの無表情だが、悲しそうな雰囲気をしている。すると隣から頭にチョップをくらっていた。

「お前の顔が怖いんやろうが！ガツハツハ」

城南シニアの選手・ではない？誰だろうと見ていると

「東、私は怖くない」

「能面魔王がよく言うわ！」

とじゃれあっている。東？・東ってもしかして

「おう、大阪のシニアで4番やつとる東 清国や！この能面と昨年秋のU-15でわしが6番、こいつが3番でボコボコにしてやったんや！」

「3三振の男！」

「うるさいわ！」

東さんはどうしてここに・と聞くと小さい声で

「わしら二人は青道にいくんや」とニヤツと笑った。

ふと西さんの顔を見ると、無表情ではあるがウキウキしているようで、いつもの怖い感じがしないなど安堵した。

「うちのチームが今季、コールドで勝てなかったのは初めてだ。次に一緒に野球するのを楽しみにしている」

と告げた後、東さんが周りで騒ぐなか、西さんはゆつたりとした足取りで、笑顔のチームメイトに迎えられていた。

一緒に野球を：か。

シニアで4番でも強豪校では、ベンチにすら3年を通して入れないものもある、と聞いている。挫かれたはずの心が、西さんのかけてくれた言葉で、新たな目標に勇気を貰った気がした。

泣いている先輩、同級生、そして、熱に浮かされたような後輩のところへ、拳を握りしめ、しっかりとした足取りで、ゆったりと歩き始めた。

side out

全国大会へ進出した城南シニアであるが、1, 2回戦は突破したものの、3回戦でU-15召集経験のある兵藤に、西以外が抑えられ、3回戦敗退を喫した。

兵藤は

「あいつには全く勝った気がしない、運がよかった」

と苦笑いしながら、インタビューに答えていた。

西との対戦成績は、4打数2安打1本塁打1打点であった。

side 神谷

東京大会では打率4割越えと、チームの中でも上位の打撃成績であった。しかし、全国大会の初戦、緊張のためか無安打で、なんとか四球を1つとっただけ。2回戦では調子がもどり2安打するが、3回戦、全国有数レベルのピッチャーになると、全く歯がたたなかった。夏の大会が終わり、3年生は8月いっぱいまで、練習には参加してくれるが、チームとして戦うことはもうない。

西さんや、他の3年生から必死に、外野の守備や、打撃、特に走塁について、8月いっぱい指導してもらったのだ。

side 成宮

無敵と思ってた先輩達が負けた。

ピッチャーとして受けてもらおうと、全能感を与えてくれ、援護として点数をしっかりとってくれる存在が。

全国大会の2回戦で、シニアで初めての先発を任された。西さんと相談して考えた、省エネの打たせてとるピッチング。思いどおりにポンポンとアウトになっていく相手打線。テンポよく守備が終わり、こちらはチャンスを作り、一方的に点を稼いでいく。

6回時点で5点差で勝っていて、初球のストリートが少し甘く入り、強い打球がセカンドへと飛んでいく。内野では唯一の2年生がエラーをし、次の打たせるように、あまり力のいれていないストリートが打たれ、簡単なフライをレフトの2年生がエラーをした。

2アウトながら1,3塁の場面、西さんがタイムで人を集め、エラーをした2年生に声をかけている。その後、ギアを上げて三振をとった俺を見る、一瞬複雑な表情をしているように見えた、無表情な西さんの顔が印象的だった。7回無失点完投勝利をあげた。

3回戦は出場機会はなかったが、先輩達の気迫に当てられて、精一杯声を出して応援した。5回表、セカンドの2年生が、雰囲気当てられたのか、ノーアウト1塁の場面で、無理に2塁でのアウトを狙って、送球が逸れ、ノーアウト2,3塁となってしまう。西さんが全体を落ち着かせ、声をかけるが、スクイズと犠牲フライで2点を失う。取ったのは西さんのソロの1点のみ。今日、俺が投げてたら、打席に入れるくらいの打力があつたら。悔しかった。

ふと、甲子園で勝つたためにはどうしたらいいのだろう。試合が終わった翌日、練習も休みになっていて、暇なので考えていた、考えてしまっていた。

全国大会で負けた原因は？：野手のエラー。

ピッチャー陣は、エースはそんなに打たれていない。でも負けた。点数を取れないと、エースが抑えててもエラーで負ける。

エースは：俺だ

なら足りないのは：西さんじゃダメだ。半年、つまり1年目が終わると卒業してしまう。同級生のセンターの不動のレギュラー、カルロスは欲しい。丸亀にいた白河はどうだろう。

俺を中心として、盛り上げてくれるような野手陣。

秋からは大変だ。俺が抑えても、エラーとかで足を引っ張るかもし

れない野手陣なのだから。

頼りになった3年生はもういない。

青道スカウトメモ

東 清国 天玉寺シニア

右投げ右打ち

大型のサードで、身体の大ききの割に、軽快かつ機敏な守備をする。他にもファーストの経験があり、声が大きく、全体を鼓舞することに長ける。

打撃面では粗削りなところがあり、三振率が調子によって変動が激しい。気分のノリ次第では3打席連続本塁打を記録したことがあり波に乗せると怖い打者である。

長打力はシニア1とされており、将来的には打の青道の4番打者として期待できるかもしれない。

シニアの監督から聞いた話では、風貌からは想像できないが、姉の影響か、少女マンガを愛読している。そして、よく食べる：ええ！本当にもう！とのこと。

高校1年の夏

入寮と新たな仲間★

梅が咲き誇り、早いところでは桜が花開いている。

東京にある高校のひとつである青道にて、新入生となる子供達が緊張した面持ちで、キョロキョロと周りを見ながら青心寮へと入っていない。ある部屋では大きな挨拶の声がある部屋では荷物が届いていないとの嘆きが、ある部屋では野太い悲鳴が轟き、青心寮は1年間で一番賑やかな様相を見せていた。

side 東

無表情なあいつは大丈夫かいな：

そう思いながら段ボールから、生活用品を出していくのは、特待生として入学する東 清国であった。

初対面の大きい挨拶で先輩から主導権を奪った彼は、意外にもテキパキと引越し作業を進めていく。

野球部としてのルール、生活リズム、入浴や食事の時間など、必要な事柄を細かくメモしていく姿に、先輩2人は好印象を抱く。

話は変わるが、青心寮にも出世部屋というようなものがある。

特待生や一般スカウトは同じ特待生、または一般スカウトされた先輩の部屋へ、一般入試組は一般入試組の部屋へと振り分けられ、境遇が同じような子供を振り分けると、自然と部屋のメンバーに差が出てくるのは仕方ないと言えよう。

先輩2人が東の持つ少女マンガの量にドン引きし、しかし、興味があるのをグツと我慢していると、東の持ち物の整理が落ち着いた。

同室の先輩は

3年生シヨートでキャプテンの江藤さん、2年生ピッチャーの川口さんであった。

side 西

何故か嫌な予感がしたので、城南シニアからのチームメイトで、外野手の神田 陽一郎にドアを開けてもらう。

頼まれると断れない性格の陽一郎は、ドアをあけた先にいた仮装をした先輩を見ると、情けなくはあるが球児として立派な、雄叫びのよ
うな悲鳴をあげて失神した。

先輩方はとても喜んでいたが、同室なのは私である。

私の無表情かつ冷めた視線を受け、必死にこれは伝統でとか、やらなければならぬと勝手に説明し始めた。

初日から先輩達は監督室へ、神田は常駐の保険医の元へ運ばれていったが、いつも通り冷静に日用品を捌いていく。

小さい頃は既視感だけであったが、脳の容量が増えたため段階的に解放されてきたのか、自分が転生したということを今は私は理解していた。

外付けHDに記録があるような、やったことがないのに知っているし、しつくりとくる。シニアの1年秋に4番キャッチャーとしてやってきたときにはそこまでではなかった。

ただ、上級生が抜け、キャプテンとしてやらねばならない、そう考え、最初の練習試合でいきなり負けたときに枷が外れた、そんな気がした。

負けるのは悔しい。なら使えるものはなんでも使う。

ただしフェアプレイで、礼儀正しく。

これは絶対に守らねばならぬ、誰かと約束していた気がした。

なんでも使う：ピッチャーをやってみようと思ったことがある。

しかし、なぜだろうか、会ったこともない50歳くらいの男に、試合で投げるのはやめておくれと言われた気がする。そしてそれを思い出すとピッチャーをやる気が失せるのだ。

色々今までのことを思い返していると、先輩達が部屋の外からドアを壁にしてこちらを覗いているのに気がついた。

入室を促すとルールや名前などを教えてくれた。

3年生キャッチャーの中山さん、2年生外野手の佐々木さん。

中山さんに久しぶりだということを伝えると、ぽかんとしていた。

キャッチャーの動きを私に叩き込んだのはあなたでしようが：

中山さんからは2、3年前から大人びていて、わからなかったと謝られた。佐々木さんから後輩を忘れるなんてなー、といじられながらも、丁寧に色々なことを教えてくださり、明日からさっそく朝練からスタートということで、早めに寝ることとなった。

side 中山

やはり初めての環境で疲れていたのだろう、西はさっそく寝てしまった。見違えた：というよりは中学1年の頃とは、全く違うと言っていいだろうか。

1年上の先輩キャッチャーがいないだけで、ここまで成長できるものだろうかと疑問を持つ。無表情なのは相変わらずだが、雰囲気で感情が分かるのが大きな違い、いい仲間に恵まれたのだろうな。1年の秋から4番キャッチャーとして要になり、2年の春からは後輩ピッチャーの総括も。そして、2年秋からキャプテンとしてチームを背負い、全国優勝を果たし、去年の秋に活躍した成宮の基礎を築いたと、城南シニアの監督から聞いている。

実績としては遥か上を行かれてしまったが、お前のキャッチャーの基礎を叩き込んだのは俺で、副キャプテンとしてお前にだけ背負わせることはしない。

少し素振りをしてから寝ることにし、バットを持ってドアノブに手を掛けた。

青道選手紹介

片岡メモから抜き取り

現在1軍に関わるネームド選手（現在青道に所属）

3年生 中山 勇太 副キャプテン キャッチャー
右投げ右打ち

的確なコーチング、正確な送球、高度なブロッキング技術からピッチャー陣の信頼を得ている、安定感が魅力
現在5番を任されているパワーヒッター
長打を安定して期待できる。

3年生 江藤 雅光 キャプテン ショート

右投げ右打ち

広範囲をカバーする守備範囲を誇る

どんな体勢からでも、力強いボールを投げることのできる身体能力、制御力の持ち主

現在セカンドが心許ないため非常に助けられている。

現在3番を打つ、広角に打ち分けることのできる、理想的なアベレージヒッター

得点力、長打力も兼ね備えた、欠かすことのできない存在

3年生 植松 利貞 ファースト

左投げ左打ち

守備に少し難があり、練習試合では、時々気の抜けたプレーをしてしまうこともある。しかし、ここぞというときの集中力には、目を見張るものがある。

現在4番を打つが安定感に欠け、ランナーのいない時には集中しきれないところがある。しかし、ランナーが1, 2, 3塁のどこかにいれば気持ちが入り青道随一のバッターとして点をもぎ取ってくる。
3番に江藤がいて本当に助かった：

3年生 遠藤 充 ピッチャー

右投げ左打ち オーバースロー

現在青道で唯一安定感のあるピッチャー

最速140キロ前半のある程度コントロールの目処がつくスト

レート、調子によって変わるが、スライダー、カーブ、SFFと計算のできる変化球をもっている。

監督、部長を含め遠藤引退後の、ピッチャー陣がどうなるのか不安でいっぱいである。

2年生 坂井 祐吾 ピッチャー

右投げ右打ち オーバースロー

最速130キロ後半のストレートにカーブ、チェンジアップ、シュートを武器とする。

ストレートとシュートに安定感はあるものの、カーブがゾーンに入らない、チェンジアップが高めに浮く、といった課題が多く存在する。ピンチになるとテンパリ、ストレートすら入らなくなるときがある。

2年生 川口 望 ピッチャー

左投げ左打ち サイドスロー

最速130キロ前半のストレートにスライダー、シンカーを武器とする。元々次期エースとして期待されていたが、1年生の冬合宿中の接触プレーで左肘を強打し、キレのあるストレートが劣化している。本人はしっかりと投げているつもりだが、腕を振り切れていない印象がある。

コントロールも現在はイマイチである。

2年生 藤堂 航 センター

右投げ右打ち

広範囲な守備範囲と強肩が売りの外野手

大きい声で全体を鼓舞し、2年生ながら外野のリーダーを任される突出したキャプテンシーの片鱗を見せている。

一般入試組の星であり、多感な時期の選手達ではあるが、藤堂がいれば丸く収まるなど、プレー内外に関わらず存在感が際立っている。

一番打者として、能力が高水準であるが、秋以降はクリーンナップに回すかどうか、監督の悩みどころではある。

2年生 佐々木 潤 ライト

左投げ左打ち

何故ピッチャーをやっていないのか、不思議なほどの強肩を武器とする鉄腕アーム。守備範囲はそこまで広くないものの、堅実な守備は玄人受けがよく、放たれるレーザービームで観客の視線を持っていく。打撃は地味ではあるが、コンスタントにヒットを打てる、小技もできると2番打者として出ることが多い。

青道スカウトメモ（入学してくれた現在の注目株）

東、西は省略

1年生 柳 圭司 外野手

左投げ左打ち

シニアでは全国までは行けなかったものの、地方大会でベスト4までチームを押し上げている。

長打力はあまり期待できないが、チームプレイを大事にした、シエアナバッティングが魅力的

一般スカウトとして入学した。

1年生 武藤 晃太 ピッチャー

右投げ右打ち オーバースロー

最速130キロ前半のストリート、スライダー、カーブと基本をしっかりと抑えているピッチャー。

中学3年時に、所属している江戸川シニアが、丸亀シニアと当たるまでは2試合14回1失点と安定した投球を披露していた。

丸亀シニアには3失点を喫したが、ピッチャー陣の将来の柱として期待。

一般スカウトとして入学した。

洗礼に救済を

高校球児の朝は早い。

本人に自覚はないが、精神的には爺の西は、しっかりと5:00には目が覚め、身体をほぐしていた。

中山さん、佐々木さんも、10分ほど遅れて起き出して、一緒に柔軟をし、ヨーグルト、バナナで腹ごしらえをする。

朝練のメニューを聞くと、その日によって違うと伝えられ驚いた。シニアでも週に何回かメニューが変わることはあったが、毎日変わることはなかった。その都度指示があるそうなので、しっかりとついていかなければならない。ボーツとしている暇はない。

6:00の5分前にグラウンドに着くと、あらかたの選手が揃っていた。1年生はこつちと案内を受けて列に並ぶと、寝癖の激しい東が立っていた。

「目を覚ませ」と小突くと結構痛かったみたいで「ぬぐんあ!」と変なうめき声を小さく出したが、目が覚めたようだ。

「なにすんねん」とまだ眠たいオーラを出して聞いてきたので、監督が来たことを伝えると、髪を整えピシッと背筋を伸ばした。

やればできるじゃないかと思っていると監督が喋り始めた。

side 片岡

例年、どこかの部屋の新入生が寝坊するが、今年は誰も寝坊したものがいなかった。2, 3年生はほとんどの者がいつも通りだが、1年生の空気は異様なものであった。

話ながらピリツとした空気を追ってみると、そこには無表情でこちらを見てくる男と、ヤンチャそうな顔でこちらを見定める男、威圧感を持った二人組が立っていた。

あれが2年連続でU-15に選ばれ、昨秋のU-15で4番、5番を任された二人か：

打の青道と言えは聞こえはいいが、現在のレギュラーでサード、セカンド、そして外野の1つが流動的なものとなっている。

つまり5つの席は埋まっているが、そこから繋がらない、物足りない打線となっている。

前任の榊監督が残してくれた、教えてくれたノウハウはあるものの、経験の浅い私ではしつかりとした打者を育成できないでいた。

side 藤堂 2年生 センター レギュラー

去年の自分達と何かが違う、1年生の空気を敏感に感じとりじつくりと観察をしていく。

無表情なやつと、今押さえつけていた寝癖がピンツ！と戻ったやつ。この二人が原因なことに気がついた。

あれが礼ちゃん期待のスラッガー共かと納得する。

目付き、体幹、そして監督の話への集中力が、他のやつらと違うことから気づかされる。

東と西：こいつらが秋以降、俺が引っ張っていくであろう青道に、どんな影響をもたらすのか、見極める必要があると気を引き締め直した。

しかし、大阪出身の東と、東京出身の西って逆じゃねえかよ、覚えづらいなと頭をかいた。

side 東

1年生全員の自己紹介が終わり、練習がアップから始まる。

1年生だけで集められているため、先輩はどうかかわらないが、やはりわしと西、そして柳というやつが飛び抜けている気がする。

一般スカウトと聞いていた武藤だけど、シニア以降サボっていたのか？あまりすごいという感じはしない。

昼飯ではご飯3杯食えと言われたので、ペロリと食べると、柳に化け物を見るような目で見られた。柳は頑張っていたが、フィジカルはまだまだやな！西はさりげなく食べきっていた。

昼からは能力テストがあり、西の化け物肩に驚かされた。

ライナーで100メートルで：

遠投じゃ！言うとのに浮かせたボールは使い物にならん、とか言

うし、柳も隣でうなずくんじやない！

打撃テストもすっかりこなし、わしと西、柳は明日から2軍に合流することが決まった。

side 武藤 一年生 ピッチャー志望

シニアの生意気な1年生の言うとおりに投げてやったら、上手い具合に最後の夏は抑えれていた。

丸亀シニアにはまぐれで打たれたのだろうと、青道からスカウトがきて、天狗になっていた。

入って思ったが体力が全然違う。

あの東、西、柳はなんだ？化け物じゃねえか。

先輩もあれだけ食べて、打って走ってケロツとしている。

俺はシニアで有力投手だと思っていた。

でも今はなんだ、周りのやつらの方が長距離を早く走れ、シニアで投げた8月以降はやりたい練習だけやっていたからか、周りに置いていかれている。

そういや、御幸って最初は俺の投げる姿を見て、先輩とならいい野球が、ピッチングができそうですって目を輝かせてたじゃないか：

生意気になったのは8月に入ってから、走る量が足りない、運動量が減ってるから食べる量が足りない、筋力が落ちてるって：生意気じゃねえわ：心配して言ってくれてたんだわ：バッテリーとして：恥ずかしくてこれじゃあ、江戸川シニアに顔出すことすらできない。

同期の、東、西、柳の楽しそうだが真剣な表情が目に入った。

ここからだ：俺ならやれる、やってやる。

周りの雰囲気当てられて、本来は辞めていくはずだったエースの卵が目覚めました。

怪物たちの産声

春休みからスタートした寮生活、野球部での練習

無我夢中でやっていたからだろうか、気づけば3月が終わりかけていた。

対外での試合はないものの、上級生のピッチャーとの対戦は、東、西、柳の確かな糧となっていた。

そして流動的であったサード、セカンド、外野の2年生、計3名を2軍に下げ、東、西、柳が一軍に昇格するという、片岡監督の思いきった判断が下された。

これには練習を見にきていた青道OBは驚くが、実際のプレーを見ると別格だと、片岡監督の経験の浅さを考慮しても、妥当な判断と納得せざるを得なかった。

4月となり、入学式を終えると、春季東京都大会が開催された。

青道のオーダーが発表されるなり、シニアに興味のない者は首をかしげ、シニアの情報を集めているものはうーんと唸った。

そして、相手である修北側スタンドからは、舐めているのかと言わんばかりの怒声は何カ所かから響いた。

青道オーダー

- 1 藤堂 センター
- 2 西 セカンド
- 3 江藤 ショート
- 4 植松 ファースト
- 5 東 サード
- 6 柳 レフト
- 7 中山 キャッチャー
- 8 佐々木 ライト
- 9 遠藤 ピッチャー

side 江藤 3年生 ショート キャプテン
相手側のスタンドから嫌なオーラが出ているが、これが今の青道のベストメンバーであることは変わらない。

というか西がどのポジションでも、どの打順でもやれますよ、とあの無表情から言ったときは冗談かと思ったが、俺や中山、藤堂を除いたやつらより、うまく全部こなすとはな：怪物め

本当に味方でよかったし、守備がめっちゃ楽になったんだもんな。本当に助かるわ。

うちの先攻で、藤堂が（遊んで）粘って四球、西が綺麗に右方向へ引っ張って、ノーアウト1，3塁。

後ろに植松がいるしまた1，3塁を作るのもいいなど、1年生に簡単に引っ張られて焦る相手エースの得意球のカーブを右中間へ狙って軽打する。1点入ってまたノーアウト1，3塁となった。

side 植松 3年生 ファースト

今までは藤堂が出たら、確実に佐々木がバントで2塁にランナーを置き、江藤がヒットで返して、俺が決めるというパターンだった。打てる打者を2番に置くと、まだノーアウトかつランナーが2人もいる状況。燃えるぜ：相手がどの球を投げればいいかわからなくなり、自信のある球のカーブを狙い打ち、ライトスタンドへと鋭い打球が突き刺さった。

side 東

あー、これは終わってんなあと相手ベンチを見ると、次のピッチャーが必死に肩を作るために、ブルペンへ走っていくのが見えた。とりあえず肩ができるまで時間かかるだろうからと、死んだ目をした相手エースから放たれた、力のないストレートを思いっきり引っ張り、レフト方向の場外へと打球は消えていった。

side 柳 1年生 レフト

うはー、初打席くる前に試合決まってるとか、やっぱうちの打線おかしいねー。打者5人で5得点とか、シニアではうちしか打たんやっ
たし、こんなん初めてだわ。

まあ次のピッチャーになったみたいだしって、めっちゃ睨んでん
ねー。これは内角くるつしよ！ほいつ！高校通算1本目ってね♪

しっかし、一番怖い同期が、大人しくチームプレイしてるのを見ると
少し申し訳ねーの。いつまで大人しくしてんのかな？

side out

5回表

片岡監督から何か言われ、うなずくとバッターボックスへと2番打
者が入っていく。

修北の守備陣の動きが急に悪くなったように見える。

ピッチャーからはまだ交代して1球も投じていないのに、滝のよう
な冷や汗が出ている。

1年生のピッチャーか：20点差以上もついた試合で、初試合なん
だろうな。

まあ5番、6番のホームランを2本ずつ打った、他の1年生の怪物
よりマシだろうと、バッターを見ると、そこにも怪物がいた。

恐らく高校デビューの球なのだろう。

少し自信なきげに放たれたボールは、見ていた誰もが理想的だと
言ってしまうようなスイングの軌道の煌めきに姿を消し、いつの間に
かライトスタンドへとライナーで着弾していた。

騒ぎと託すもの

東京のスポーツ新聞には

打の青道復活の文字が輝いていた。

昨年春に榊監督が退任した直後に、後任の片岡監督が甲子園にチームを率いて進出し、秋の大会の結果から、青道の打撃の指導が上手くいつていないのでは、という意見が多くなってきていた。

ピッチャー出身の片岡監督では打者の育成は難しい、エースにこだわりがありすぎて、なかなかピッチャーが育ちにくい環境にある、など言いたい放題であった。

それを先日の春季東京大会の初戦で、そこそこ強い修北を27―0で下したのは、打の青道に期待する人々、OBに眩しく映った。

特に1年生ながら本塁打を放った東、西、柳に注目が集まり、場外へと打球を飛ばした東には、U―15で4番であったこともあり、直接インタビューの申し込みがあつたほどだ。

side 東

ええい！わずらわしい！と叫ぶと、西が、お前の声の方がうるさいという雰囲気を出してきたので、食べ終わったバナナの皮を投げてやった。華麗に避けおつて：

んで柳！リアルゴリラや！うち怖いわ〜♪やないわ！このオカマ野郎め！柳にからかわれるのが多くてかなわん。

まあ、なんか気が紛れたけど、やっぱり取材多くないか？

練習の時間取られるのきついなーと言うと、黙っていた武藤がこれ以上ゴリラになるつもりなのか？と真顔で言ってくる。

ムキー！となっているとエースの遠藤さんがやってきた。

side 遠藤

こいつら4人、仲がいいなーと少し和む。

この中の3人が、修北のピッチャーの心を壊す怪物打者、そんなのが信じられないくらい和やかな空間だった。

武藤に声をかけ、自主練習に使っている広場へ向かう。

本当なら次は川口なはずだった。

でもあいつは腕を庇ってピッチングがうまくできない状況。

それなのに詰め込んだでは混乱するだろうと1年飛ばすことにした。時期としては早い仕方がない。

side 武藤

最近、同部屋ではあるのだが、遠藤さんと自主練習をする機会に恵まれている。仲良くなるうちに、江戸川シニアではエースだったけど、みんなの気持ちを裏切ってしまったのを後悔している。自分のなかで咀嚼して、言ってもいいかと思ったことだけは伝えた。

挫折は誰にでもある、いつも期待に応えなくてもいい、そう言われると少し楽になった。

「俺に足踏みは許されないけどな」

え?…と自分の時が止まった。

なんで遠藤さんには許されないのか分からなかった。

なんて聞いても

「俺が青道のエースだからだよ」と、いつもよりも大人びて、遠い人であるかのような雰囲気で答えてくれた。

知らない。そんなもの。江戸川シニアでエースだった時はそんな思いはなく、求められてもいなかった。

ただ一番のいいピッチャーがエースだと思っていた。

遠藤さんは確かにチームを裏切らない。

必ずゲームを作ってくれるピッチャー。

春季東京大会で勝ち上がるにつれ、ほかのピッチャーと比べるとそれが顕著だ。

ピンチでも何事もないと味方に声をかけ、味方から声をかけられ、マウンドから全体を支配しているかのような感覚。

それをショートの江藤さんが内野に伝え、外野は藤堂さんが、そして遠藤さんの想いをキャッチャーの中山さんが受けとる。

それがどういふものかあまり分からなかった。

声をかけるのは仲間だから当然だし、思いも言葉が伝わってるなら通じてるはずだろうと考えるとばかりだった。

今は分からなくてもいいが、忘れないでくれと、あんな真剣な目で先輩に、エースに頼まれたら承諾せざるを得なかった。

越えるべき壁

春季東京大会 準決勝戦 青道 v s 市大三高
青道オーダー

- | | | |
|---|-----|--------|
| 1 | 柳 | レフト |
| 2 | 藤堂 | センター |
| 3 | 江藤 | シヨート |
| 4 | 植松 | ファースト |
| 5 | 西 | セカンド |
| 6 | 中山 | キャッチャー |
| 7 | 東 | サード |
| 8 | 佐々木 | ライト |
| 9 | 遠藤 | ピッチャー |

【実況】

決勝まで進むと関東大会に出場できますから、お互いにベストメンバ―で挑んできてますね。

青道のスタメンは1回戦から勝ち進むごとに変化がありました。今日は上記のようなオーダーとなっております。

1番に入ってる柳くんの出塁率がとても高く、2番の藤堂くん、3番の江藤くんは万能プレイヤー。

4番の植松くんはチャンスに強い長距離ヒッターで、5、6番に安定感のある西くん、中山くんが並んでいます。

7、8番の東くんと佐々木くんは上位のメンバーと比較すると、打率は低いです。なんと言っても東くんには場外ホームランをうつつよくなパワーが、佐々木くんには器用さがあります。

先発ピッチャーの遠藤くんは、今日はどういった立ち上がりを見せてくれるのでしょうか！

対して今年の夏の大！大！大本命！市大三高の押しも押されぬエース！3年生の田辺 俊樹！右投げ右打ちの超高校級の右腕です。

2回戦では稲実に対し、ノーヒットノーランを達成し勝利しています。

休養充分で打の青道に立ち向かう！

150キロ前半のストレートにスライダー、カーブ、フォーク、チェンジアップと多彩な変化球を持っています。

特に伝家の宝刀のスライダーはなかなか打ち崩せないことでしょう。

市大三高の各打者も選抜ベスト4達成に貢献した猛者ばかりです。さあまもなくプレイボールです！

side 田辺

ビビツとくる感じ

これは強打者と相対したときによく感じるんだが、チームメイトにはよく分からないと言われる。

でもこの感覚を信じてから、しっかりと投球すると、変に痛打されることがなくなり、気づけば超高校級右腕と呼ばれるようになっていた。

そのビビツとする感じがマウンドに行く前からするなんてのは初めてだった。打の青道か：と気を引き締める。

何回か対戦経験はある。藤堂や江藤は厄介だし、植松、中山もいいバッターである。正直あまり当たりたくはなかった。

1番の1年生がバッターボックスにたつと、ビビツときた。

見ると成長しきっていないようで、これならなんとかなりそうだ。必死に粘ろうとしてくるが4球目のカーブを引っかけてさせてワンナウトをとる。

藤堂、江藤は四隅をつくストレートにスライダーを混ぜれば簡単にアウトにできた。

2回 先頭の植松からあっさり三球三振を奪う。

そして、5番打者が打席に立ったとき、ゾクツときた。

これは本気で相手をしなくてはならない打者と決め、舐めてかかっている表情をした、相方のサインに3度首をふる。

二人だけで決めた、”打たれる”可能性の高い打者がきたときの合図を出す。すると、相方の表情が真剣なものとなる。

プレートから足を外し内野を見ると、サードの後輩の動きが少し悪かったので足を動かせと指示する。

様子見にアウトコースのストレートを投げるが、打者に反応は見られない。ツーシームをインコースへ、ボールからストライクゾーンへ入ってくる、フロントドアのボールのサインが出ると、嫌な感じがあり、キャッチャーのサインに首をふる。

いったんプレートを外し、間を取る。

まだ2回なのに流れてくる汗がうっとうしい。だが、ここで雑になつてはいけなさと長く息を吐き、気を引き締める。

アウトコースに1つ外れたボールを投げ、1―1の平行カウントに。インコースの低めギリギリのところへ、今日1番のストレートが突き刺さり2ストライク、1ボールへ。

追い込んだ瞬間打者の雰囲気が変わる。

こちらの全てを覗き込むような、まるで、数多のピッチャーと対戦してきたかのような、何故か仙人かよと言いたくなるような眼で、こちらを見ている。

ギアを1段階あげて放たれたフォークは、迷いのない理想的なスイングを掻い潜り、キャッチャーのミットを揺らした。

垣間見える本性★

side 川口 2年生 ピッチャー

西が空振り三振をくらうと、ベンチの1年生達が動揺しているのが見えた。隣にいた柳を落ち着かせる。

今まで試合で、西が空振りをする事はなかった。めちゃくちゃ悔しそうな雰囲気だが、無表情で帰ってくる西に、お前でも当てれないボールがあるんだと言うと

「次こそは」

と眼をギラギラとさせながら呟いてきた。綺麗な金属音がしたグラウンドに目を向けると、相手先発の田辺は、西を抑えて気が抜けたのか、中山さんにツーベースを打たれていた。

次打者の東は：まあ、西の三振に動揺して、仲良く三振していた。

西は基本に忠実なバッティングをする。特に1打席目ではそれが顕著で、猫の皮を被ったような、あまり気迫のない雰囲気醸し出す。そして、その無害そうな雰囲気を出しながら結果を出していく。修北の最後の打席以来見せていなかった、野球を心から楽しむようで、それでいて相手の心を折る獰猛さ。

同じベンチにいればわかる。1年生で1番安定感があるのは柳だ。オカマ口調でふざけているように見えるが根は真面目だ。勝負を楽しんで、東や西と競うようにバットを振る。

東は年相応で、野球を楽しみながら精一杯やっている。

野生のゴリラのようであり、情に厚く、メモをまとめたノートをこっそりと、大事にしまっているのを見かけたことがある。

少女マンガに詳しい意外と繊細なやつだ。

西はチームメイトが楽しそうに野球をしていると、とても嬉しそうなお雰囲気を出す。かつてできなかったものを取り戻すかのように、チームプレイに過剰なほど執着することで、持ち味を失っているように感じていたのが、少し心配だと藤堂と話し合っていた。

スタメンが守備に移るためにグラウンドに向かう。

遠藤さんの調子を見るといつも通り、相手打線を抑えそうな感じが

する。だが、相手はあの超高校級右腕の田辺 俊樹だ。

あの西が修北の最終打席に見せた、おそらく本来の姿を、わずか1回の戦いで引き出した相手のエース。

珍しく投手戦になりそうだ。

ふと右手を左肘に添える。

去年の冬合宿の接触プレー、調子に乗っていつもなら取りに行かないフライを取りにいき、セカンドの同級生、角田とぶつかり、一緒にこけて、判断を間違えるほど練習で疲労していた俺の左腕に、角田の全体重がかかった。

骨折をした左腕が完治して、ボールを久々に投げると、全くしつくりこない。狙ったところにボールがいかない、キレもノビもない。どこかまだ違和感のある左肘を守るように、右手で擦りながら、左拳を強く強く握りしめた。

「実況」

春季東京大会の準決勝！

青道と市大三高の戦い、現在7回の裏が終わって、1―3と市大三高がリードしています。市大三高の田辺くんの前に、6回表の攻撃で、青道はなんとか西くんのツーベースから、中山くんのバント、東くんの犠牲フライでとった1点のみと、なかなか打ち崩すことができておりません。

先発の遠藤くんも粘り強い投球を続けていますが、選抜ベスト4を経験してきた打線相手に、非常に苦しい状態が続いています。

青道に登録されているピッチャーですが、ベンチには3年生の糸原隼人くん、2年生の川口 望くんがいますね。

おっと2年生の坂井 祐吾くんもいました、失礼しました。

この坂井くんの弟さんが、昨秋のシニアの大会で好成績を残してい

るとの情報もあります。兄弟で同じ高校になるとかはあるんですね。

話が脱線してしまいました。青道の遠藤くんがなかなか厳しい投手を続けていますから、そろそろ替えどきとは思いますが、片岡監督はどう動くのでしょうか。

地面のならしが終わったため、8回の表に移ります。

無情にも

8回裏 市大三高の攻撃

side 東

6回表に犠牲フライで点をとったが、それ以降も点がとれていない。それに西に対して投げているボールと、他のメンバーに対して投げているボールの質、配球が違うのも気になる。

確実に見下ろされて投げられていると感じる。

これが全国、これが高校野球かと体に力が入る。

シヨートの江藤さんに声をかけられ、集中し直す。

side 江藤

西は落ち着いてるが、東は少し打撃を引きずっているように感じる。声をかけたが大丈夫だろうか。

遠藤はしっかりと投げてくれている。この打線を3失点で抑えているのは、やはり頼りになるやつだと思う。

お前がピッチャーじゃなかったらキャプテンだったろう。それくらいに2、3年生は遠藤の大人びた精神性に魅せられ、信頼を寄せている。2年生の秋の大会以降球速が伸び、昨年の夏大会からの流れで背番号1だった糸原を押し退けて、今大会からエースを掴んだ遠藤の背中をみる。

選抜で更に成長した田辺に、打線は抑えられているが、遠藤も、それに俺たちも成長しているんだ。

気合いを入れ直し、パンツ！とグローブを叩き声を出す。

後ろからは呼応した外野陣の音が、横からは内野陣の音が聞こえてくる。相手の4番打者に対して遠藤がボールを投げた。

なんでそこで蹲ってんだよ：なあ：

side 東

一瞬見失うほどの早いピッチャー返しが、遠藤先輩の全体重がのつた左足に、鈍い音をたてて当たると。

マウンドの横に、すべてのエネルギーを失ったかのように、そこに落ちていたボールを掴むと、遠藤先輩は上半身の反動だけで1塁に送球し、バッターをアウトにした。

そして力尽きたかのように、脂汗を流しながら、左足を抱え込むような姿勢になった。

西がすぐさま駆け寄るが、江藤先輩と植松先輩は青白い顔をしたまま硬直していた。

side 糸原 3年生 ピッチャー

幼馴染みの遠藤が、担架に寄せられて去ることになったマウンドに、今、自分が立っている。

ジュニアからライバルで、ずっとエースを争ってきた。

コントロールが良くて、スピードがある俺がエースで、遠藤が2番手というのが基本だった。

ジュニア、シニアでは連投は基本なかったから、俺と遠藤の2枚看板でずっとやってきた。青道に入ると球速の早くて、コントロールの目処がたつ俺と、球速が遅くて、コントロールに粗がある遠藤、そして先輩ピッチャーの人数から、1軍と2軍と、初めて別れて練習し、経験を積んだ。

ずっと1軍だが、背が低いまま伸び代の少なかった俺と、背が高くなり伸び代があった遠藤。2年の秋までは俺が全て勝っていたのに、同じ練習をして、でも1軍の経験は俺の方が多くて。それなのに

才能は残酷だった。

ずっと上において支えられるだけだったエースと、下から積み上げ、仲間と共に駆け上ってきたエース。

片岡監督は遠藤を選び、俺の背番号は11になった。

遠藤はいいやつで、エースになってもいいやつで、憎めなくて。

それなのに打球が当たって、エースに戻れるかと思ってしまった自分が憎くて。

深呼吸して心を落ち着けていく。

お前が戻ってくるまで俺がやってやるよ。

でも俺がやる気になったからな。

戻ってきててもエースは俺のままかもな。

決意を胸に罪悪感を感じながら放たれたボールは甲高い音を鳴らした後、ボックスクリーンへと叩き込まれた。

春が終わる

side 青道野球部OBのおっちゃん

「くぁー！ビールうめえ！」

1人で飲んでるのについて口に出してしまった。

スーパーで買ってきた半額シールのついた刺身を、醤油にたっぷり浸して口に入れる。

最近野球部を見に行けてねえなと思いつつながら、朝、嫁さんが郵便受けから取って、布団に放り投げたであろう新聞を読む。

「うわー！昨日試合やったのかよー！」と叫ぶと隣からドン！と壁を叩く音が聞こえた。

隣から叩いてきただろう娘に、たくましくなったよなあ：と思いつつながらビールをまた1口。

昨日休みだったのになあと思いつつ新聞のスポーツ欄に目を通すと顔をしかめる。

遠藤が怪我か：怪我は嫌なもんだ：うん。

去年の冬辺りから、他のOBどもがあいつはよくなったって言うたかなと、刺身をもふもふ食いつつながら思いつつ出す。

しっかし5―7って結構接戦だったんだなと、負けた新聞を読みながら、ビールを飲んでいると、熱燗を用意してくれた嫁がドアをノックする。

お酌をしてもらい、青道のことを聞くと、元マネージャーでも今年は盛り上がりつつあるとか。

そりやなんたって打の青道だ！俺が4番打ってた頃からガンガンやってるぜいと力こぶを作ると、はみ出した腹をさすられ、いい笑顔を見せてくれる：

はい、痩せます：

しっかし、まあなんともうちは頼れるエースつてもんがいねえよなあと、7回裏までは3失点で抑えていたエースや、内容をよく確認することなく、熱燗を楽しむ始めた。

side 片岡

勝っていたはずであった。

遠藤が完投し、市大三高に勝ち、関東大会へ進む。

そして、春季東京大会の決勝で、まだ登板経験の少ない坂井に、強豪の空気を感じてもらい、川口へ継投する。2年生ピッチャーに経験を積ませる予定だった。

市大三高のエース、田辺のスタミナをじわじわと奪い、9回表には4点をとった。打線は非常によかった。

田辺から合計5点取ることのできる打線は、全国でもそうはない。紛れもなく遠藤は青道が求めていた、私が思い描いていたエースであった。しかし、離脱して、1ヶ月の療養期間、そこからリハビリをしていく。

ピッチング動作の最後に、全体重を支える左足の負傷であるから、走ることにできない。スタミナ、そして下半身の劣化による制球力、球速への影響。

これだけでも、遠藤本人だけでも課題がたくさんあるのに、精神的支柱であった遠藤の離脱により、2、3年生に元気がない。

これからどうするかと、市大三高戦が終わったバスのなかで、若き監督は必死に頭を働かしていた。

side 西

バスから降り、風呂に入って飯を食う。

チームの中心であった、遠藤さんが怪我したからであろうか。2、3年生の顔色は優れない。だが習慣から体が覚えているからだろうか、決められた時間に全員が、しっかりと風呂に入って、飯を食っていた。

部屋に戻ると、机に向かって今日の配球のコピーを、同じところを鉛筆で直しては塗りつぶし、直しては塗りつぶす中山さん。ボーツと布団の上に寝転がり、天を見上げる佐々木さんがいた。

唐突にギューっと力強く、蹂躪するかのようには、中山さんの肩を揉

みしだく。

「ぬおーん!!?」と悲鳴を、なんだその声は…こほん…あげる中山さんを素振りに誘う!。今はほつといってくれと言う中山さんを、無理矢理、自主練習の場所へと連れ出す。

誰もいないことを確認する。

「あの配球を何度見直しても、遠藤さんにピッチャライナーがいった。その結果は変わりませんよ。」

顔に衝撃を受けて、倒れていたことに、数秒して気がつく。
顔をあげると

「すまん…すまん…」と泣く中山さんが座り込んでいた。

一夜明けて

side 片岡

朝、集合し、練習が始まるが、不味い雰囲気を感じ取っていた。内外野別のノックをしているが、外野では藤堂がなんとかしようと、声を出して周りを鼓舞するが、周りがついてこない。

内野ではミスの少ない西がエラーを連発し、中山は指示間違いをする。江藤の声は小さく、逆に植松は声を張り上げる。東はどうすればいいか分からず、体の大きさの割にオロオロとしながらもいつも通りプレーしていた。

side 中山

「あの配球を何度見直しても、遠藤さんにピッチャライナーがいった。その結果は変わりませんよ。」

その言葉がぐるぐると、ずっと頭のなかを回っている。

カッとなって我を失い、ハッと冷静になって体を止めようとしたが、間に合わずに大切な後輩をなぐってしまった。

西は、泣きながら座る俺の前に立ち上がると

「それに、遠藤さんはサインに納得してボールを投げていました。遠藤さんとあなたの考えが一致したピッチング。今の青道にあれ以上のものはありません。」

そう無表情で、しかし、自分への信頼を確かに感じさせるような言葉を告げると、自主練習場から去っていった。

一晩中考えて結論を出す。

起きたらまずは西に謝ることを決意し、副キャプテンとして、プレーで、言葉でチームを引っ張ることを決める。よし！寝るぞと横になると、ベッドについているカーテンの外から日の光が差し込んでいた。5時45分：だと!?

ガシャン！と向かいのベッドから音がしたと同時に、自分はカーテンを開けると目の下にクマがある西と目が合った。

お互い無言で見つめ合っていると、5時50分のスヌーズが鳴る。昨日のことを西に謝り、着替えてグラウンドへと駆け出した。

side 東

周りの暗い雰囲気はどうにかしようにも、時間が解決するかと早めに寝て、翌朝の練習、キャッチャーの中山さんとセカンドの西が立派にクマのある目をして、ミスを連発しまくっている。

いや、江藤さんと植松さんは、遠藤さんの件で動揺してるのはわかる。でも寝不足ってなんや！二人で何しとったんや！と少女マンガに混ざってあった、姉のBL本をこっそり呼んだことのある東は、現実でそんなことが!?!とオロオロしていた。

side 藤堂

柳は普段通り、武藤は何か覚悟が決まったのか？だが他の連中がピリツとしねえ。

外野守備に帯同し、肩を強くする目的で一緒に練習するピッチャー陣も重症か…。ボーツとしてるやつらに、いつも以上に声をかけるが、事態は好転しない。

そこへ松葉杖をついた遠藤さんがやってきた。

「お前ら、藤堂と柳、武藤以外は、俺の仇をとってくれないのか？」

あまり大きくはないが、響くような声が聞こえた。

「声をだせ！しっかりボールを捕って投げろ！」

ボーツとしていた奴らが、最初は数人であったが、徐々に生き返ったかのようになり、全員が声を出し始める。

「リハビリ含めて3ヶ月かかるかもな！それまでに負けてたら承知せんぞ！」

ハアアつとため息をつく。

あれを秋から俺ができるようになるのか、少し不安になってくる。

エースからあんなに言われて、動き出さないやつは男じゃねえ。
松葉杖をつきながら、内野の方へと向かう大きい背中を見て、次期
キャプテンは未来を見据える。

継承

side 武藤

「俺は夏の大会に間に合わない。」

病院から帰ってきた、白目が赤く充血している遠藤さんに、部屋から連れ出されると、俺にそう語りかけてきた。な!?!と声をあげようとする、口を手で塞がれる。

「これは今は俺と監督、保険医しか知らない。あまり大声を出すな」

コクコクとうなずくと、手を離してくれた。

「監督も、俺も、足にヒビが入ったくらいだと思っていたが、病院で検査をすると、ポツキリいつてるらしい。しつかりとくつつくまでに4〜6週間、全治3ヶ月が妥当だろうと言われた。2週間は入院するのが普通みたいなんだが、お前らをほっとけなくてな。監督からも頼んでもらって、保険医が常駐してるからという理由と、経過の記録、連絡をする約束で、寮に戻るようになった。」

じつと黙って遠藤さんの話を聞く。

「俺の高校野球は終わってしまったが、まだ俺の同級生の高校野球は終わっていない。どうか、あいつらの力になってやってくれ!」と遠藤さんが俺に頭を下げってくる。慌てて顔をあげてもらう。

「たぶん糸原が暫定エースになるだろう。2年生の川口は怪我からまだ立ち直っていない。坂井は心が体に追いついていない。入部してからすぐ、挫折から立ち直り、自分と向き合えたお前の力が必要なんだ。」まっすぐな眼で俺を見てくる。

色々と話をしていると、1時間も経過していた。遠藤さんと毎日自主練習をすることを約束しながら部屋へと戻る。

翌朝、外野練習で藤堂さんが、声を全体へとかけていくが、どうもみんなの反応が悪い。柳とアイコンタクトしながら、どうにかならぬいかと思っていると、松葉杖をついた遠藤さんが歩いてきた。

「お前ら、藤堂と柳、武藤以外は、俺の仇をとってくれないのか？声をだせ！しっかりボールを捕って投げろ！リハビリ含めて3ヶ月かかるかもな！それまでに負けてたら承知せんぞ！」

真剣な顔をして叫ぶ遠藤さんの姿に、俺はどうしても耐えられなくて、でも見届けないといけないような気がして、誰にも気づかれないうように、泣かないように、歯を食い縛りながら、去っていくエースの姿を、藤堂さんの後ろから見つめていた。

side 片岡

松葉杖を伴った姿ではあるが、遠藤が声をかけていくと、全員が遠藤が復帰したときのためにと、練習に熱が入り始めた。

本当は私がしっかりと選手の気持ちをも、闘志を戻すように声をかけるべきだった。怪我というものは、自分が現役の高校球児だった頃から身近にあり、多くの選手を苦しめてきた。先輩、同級生、後輩、そして教え子の怪我を経験している。

だが、精神的支柱たるエース、キャプテンの怪我となると、経験したことはなかった。

教え子に救われた。ありがたい気持ちと、自分の経験の浅さへの恨みを味わいながら、この経験を糧にすることを誓った。

しかし、遠藤は復帰すると言ったが、全治3ヶ月だぞと、練習の後に思い出して頭を抱えることになるのは、今現在本人は知らない。

時は流れ夏直前へ★

それぞれの思い、決意を胸に、球児は練習に打ち込む。

自分で課題を見つけ、監督、先輩、同級生、そして後輩から指摘されて、自分の弱点を克服し、長所を伸ばしていく。

青道は練習試合を何度か行い、チームとしての武器や、弱点を見つけ出し、より良く、より強いチームを作り上げていく。

6月に入るとより一層、ピンとはりつめた空気となり、夏のベンチ入りメンバーを決める、夏の合宿が始まった。

野手達は

1日目は、1，2，3軍関係なく、基本的な動作、連携の確認が行われ、夏に戦う体力のないものをふるい落とす、過酷なランニング等が行われた。

2日目には、基礎的な体力があると認められ、1年生の大半が脱落した中、約50名が中心となるメニューが組まれていた。3日目も同じメンバーが選別のための厳しいメニューをこなしていく。

4，5日目は、更に選ばれた30名がノックやバッティング、ベースランニングなどをこなしていく。

それを横目にピッチャー陣は、フォームチェック、ランニングなどを行い、投内連携では混ざり、様々なメニューをこなす。

夏の合宿の仕上げとして、対外試合が生まれ、その結果をふまえた夏のメンバーが選出された。

背番号と名前が呼び上げられる。

- 1 糸原 3年生
- 2 中山 3年生
- 3 植村 3年生
- 4 西 1年生
- 5 東 1年生
- 6 江藤 3年生
- 7 柳 1年生

- 8 藤堂 2年生
 - 9 倉田 3年生
 - 10 川口 2年生 ピッチャー
 - 11 武藤 1年生 ピッチャー
 - 12 坂井 2年生 ピッチャー
 - 13 佐々木 2年生 外野手
 - 14 山岡 3年生 外野手
 - 15 伊達 3年生 セカンド、ショート
 - 16 手塚 3年生 サード
 - 17 間中 3年生 ファースト、サード
 - 18 横田 3年生 キャッチャー
 - 19 伊藤 2年生 ファースト
 - 20 蜂須賀 2年生 キャッチャー
- 記録員 佐藤 3年生
- 遠藤さんの名前が呼ばれることはなかった。

片岡メモ

倉田 栄次 3年生 ライト

右投げ右打ち

1年生が入ってきてから、最終学年だと実感したのか、積極的に練習に励むようになった。

長打力はそこそこだが、ボールにバットを当てる技術が、飛躍的に上がっている。

守備にも穴が少なく、肩の強さは並であろうか。

山岡 健斗 3年生 外野手

右投げ左打ち

長打力、バットコントロールは並みだが、選球眼に自信を持っており、出塁率は高め。

守備にも穴はないが、足が遅いのが気になるところ。

伊達 勇治 3年生 セカンド、ショート

右投げ右打ち

打撃には難があり、中堅校に通用するかどうかレベルであろう。守備は標準以上で、足の早さは部内有数である。

手塚 義光 3年生 サード

右投げ右打ち

力強いスイングが魅力的で、直球にはとても強い。しかし、変化球の対応が難しく、研究されれば難しいだろう。

送球に難があり、捕球までは完璧である。もったいない。

間中 王子 3年生 ファースト、サード

右投げ左打ち

鋭いスイングを持ってはいるが、ボール球をガンガン振ってしまう欠点がある。2年生の秋ではレギュラーだったが、ワンバウンドの球を3球連続で空振りしたため、罰として2軍に落としたこともある。守備は可もなく不可もない。

横田 重俊 3年生 キャッチャー

右投げ右打ち

中山と共に片岡監督に大事に育てられた。

穴のない打撃に、堅実な守備をこなす。

他のポジションへのコンバートの打診を監督から受けるも、食いぎみで拒否をした。

青道はキャッチャーが育ちやすいのだろうか？
今後も注目してみよう。

伊藤 叶 2年生 セカンド↓ファースト

右投げ右打ち

3月頃に怪我に折り合いが付き、リハビリの末ベンチへ滑り込んで

きた。

長打力はそこそこであるが、選球眼、バットコントロールは天才的で、1年生の夏の大会では1番セカンドとして活躍した。

1年生の秋の大会で足の靭帯をひどく損傷しており、かつて俊足であつた姿は見る影もない。

今大会は代打の切り札としての抜擢である。

蜂須賀 雄太郎 2年生 キャッチャー

右投げ左打ち

打撃面ではあまり期待できそうにない。

守備は青道の中でも上手い部類に入り、特にフレーミングに定評がある。リードを改善できれば更に、ステップアップができそうだ。

過去と現在と未来と★

side 倉田 3年生 ライト

新入生が入ってくると、同学年の山岡と併用で、使ってもらった場所を、1年生の柳にあつという間に、取られてしまった。

一緒に練習をするが、守備でも、スタミナでも、特に打撃で圧倒的な差を感じる。これが怪物ってやつかと周りを見ると、サードでは手塚と間中が東に、セカンドでは伊達が西に、それぞれ格の差を見せつけられていた。

2年間の差など関係ないと、実力を見せつけてくる怪物共に、去年、伊藤が入ってきたセカンドのように、3年生が場所を取られるのかと俯いていると、監督に呼ばれて、このままでいいのか？と問われた。何を言ったか覚えてはいないが、気がついたら素振りをしていた。喉が痛いし、手はいつもよりジンジンする。

バットを握りしめ、力強く振り切る。

何があっても、俺にはこれしかできねえんだ。

それに俺も一般スカウトで来た身だ。先輩にしてもらったように、同室でも、ライバルでもある柳の、怪物の面倒を見てやろうじゃねえかと、柳を自主練習に誘いに歩きだした。

side 伊藤 2年生 ファースト

痛む右足首を擦る。

秋の都大会、4回戦でのことだった。2塁へ盗塁する際に、無理をしてしまった。激痛が走り、動けない。足をただ抑えることしかできなくて、ようやく考えることができるようになったのが、痛み止めがようやく効いてきたころ。激痛を感じながら、本当にこれは痛み止めを飲まされているのか疑問に思うが、点滴で打たれたというなら納得するしかない。

チームは負けていた。

無理をしていたんだと思う。元から右足首に違和感を感じてはいた。夏の大会、唯一の1年生でのレギュラー。打の青道で他の先輩を

押し退けての1番バッター。

夏の大会が終わった、終わらせてしまったその日、甲子園から寄宿舎へと帰る途中に、踏み外し、右足首を痛めた。その痛みは翌日には違和感へと落ち着き、そのまま練習へ向かう。

3年生が抜けた穴を、1年生から共に夏の20人を選ばれていた藤堂や川口と共に埋めるため、必死に練習をし、同級生を鼓舞して、俺たち1年生がやってやるんだと持って行って：

キャプテンは藤堂、俺が副キャプテン、川口がエースになる将来像を語り合っていた。実現のために動いていた。

その矢先の怪我であった。

入院から戻ってくると、藤堂が荒れていたのを止め、次期エース候補の川口とも話し合う。

必ず戻ると約束し、療養し、冬合宿でリハビリメニューをこなし、このぶんなら春からやれると、俺たちが中心のチームが来年作れると思っていた目の前で、川口と角田の接触プレーが起こった。

今でも治ったはずの右足首が、痛みがあつてしょうがない。

side 藤堂

7月に入り、夏の都大会の抽選会が行われた。

順当に行けば、3回戦までは快勝するだろう。しかし、4回戦には仙泉学園が、5回戦では稲城実業が、決勝では市大三高と当たる可能性がある。

バットを振り、感触を確かめる。

いつもと変わらない鋭いスイングをする。

だだ少しだけ、バットが重い気がした。

side 片岡

都大会の3回戦を終え、チームの状況を整理していく。
爆発的な得点力、2年生ピッチャーの乱調。

この数字を見るたびに頭を抱える。

1回戦 シードにより回避
2回戦 24得点3失点 5回コールド
3回戦 25得点4失点 5回コールド

打の青道と言われるのはいいが、これはつらい。

糸原と武藤は計算できるが、川口と坂井が難しそうだ。

2回戦は糸原先発で、4回に坂井に任せると緊張したのか、四球を2つ与えてピンチになり連打を献上。武藤が最後まで抑えた。

3回戦は川口先発で、2回までパーフェクトピッチングをするが、3回に急に乱れて、ストライクが入らなくなり、糸原から武藤への継投となった。

2, 3回戦の、あまり振れていない打線に対して、乱調するのであるから、4回戦に当たることとなった、去年1人のエースが入ってからは、都大会で、昨年夏ベスト16、昨年秋ベスト4と好調の、仙泉学園での登板は、厳しいであろうと判断する。

仙泉学園戦は、糸原と武藤を軸に考えることを決めた。

side 中山

チーム全体で対仙泉学園のミーティングを行う。

エースとして主戦を務めるはずであった、遠藤が議長として仕切っていた。相手のピッチャーを見て苦笑いをし、各打者の情報を整理しながら戦略を共有する。ふと、ベンチ入りした3年生と藤堂、伊藤、川口を集めて遠藤から話を聞いた日のことを思い出していた。

side 川口

6月の半ば、急に引つ張られて集められた場所には、1軍の3年生と藤堂、そして椅子に座っている伊藤がいた。

そしてエースの遠藤さんが夏の大会、それも甲子園に行ったとしても出られないことを、本人から告げられた。

3年生は呆然とし、藤堂は上を向く、俺と伊藤は俯くしかなかった。

あの時託された想いをと意気込んだ3回戦では、ランナーが出ると気合いが入りすぎて、コントロールが荒れてしまった。

遠藤さんと話し合い、調整し、次の出番を虎視眈々と狙っていく。

打の青道

side 成宮 中学2年生になったよ

カルロスと一緒に、夏の都大会に貸し出されている球場へと入る。そこでは、仙泉学園と青道の試合が、行われようとしていた。

両校にお世話になった、キャッチャーの先輩がおり、対決を楽しみに待っていた。

青道のオーダーが発表される。

- 1 藤堂 センター
- 2 柳 レフト
- 3 江藤 ショート
- 4 植松 ファースト
- 5 倉田 ライト
- 6 西 セカンド
- 7 東 サード
- 8 中山 キャッチャー
- 9 糸原 ピッチャー

怖い打線だなと思う。西さんが6番にいるのが嫌すぎる。他の打者の実力はわからないが、試合前の素振りを見ると、高校野球はレベルが違うというのを、感じさせられる。

仙泉学園は4番にピッチャー今井、7番にキャッチャー二階堂と名前があった。

現在城南シニアのエースとして気になるのが、今井のことであった。西さんがキャッチャーに専念していた時期の、絶対的なエース。俺を肉体的に、精神的に鍛えてくれた西さんと、共に成長していったエース。才能はお前の方があると言われたが、俺よりも長く、西さんと野球をしていた事実が気に入らなかった。

side 片岡

相手の先攻で試合が始まる。

初回は糸原が三者凡退に仕留めると、相手の今井も三者凡退で2回表へ。

相手のエースで4番の今井が打席に立つと、青道守備陣を威圧していく。糸原の初球、アウトコースのストレートを逆らわずに切り払い、ツーベースヒットを放つ。

5, 6番となんとか糸原が抑えると、1年生の7番打者が打席に入る。初球のスローカーブを悠々と見送る姿に、冷や汗が出る。

間違いない場慣れしている。そう感じとり、バッテリーに注意を促す。ギアを1つ上げた糸原が9球目のツーシームで、サード方向への強烈なライナーを打たれるも、東のファインプレーで、なんとか3アウトを勝ち取った。

その打者はファインプレーに阻まれたことに興味なさそうに、淡々とキャッチャー防具をつけていった。

side 西

かなり危ない展開だった。

なんとか東が飛び付いてアウトになったからよかったものの、抜けていれば先制され、今一番頼れるピッチャーがノックアウトされる可能性があった。

4番の植松さんはセカンドゴロに、5番の倉田さんが粘って四球で出塁する。

今日は自由に打つていいと、片岡監督からオーダーされている。

打席に入ると、マウンド上の今井さんが一瞬ニヤツとし、後ろからはじつと観察するような視線を感じる。ジュニア、シニアと仲間として駆け抜けた、そんな二人が自分を倒そうとしてくる。

身体の芯から熱くなる。今井さんを凝視しながら、相手の守備陣全体を把握し、ヒットゾーンが目に見えてくる。自分は打てると暗示し、身体全体から力を抜く。

ピッチャーの息遣い、相手守備陣の動き、間合い、そしてキャツ

チャーから出てくる冷や汗が落ちる音、全てを把握する。

ピッチャーがリリースする瞬間の手の形、ボールの縫い目を把握し、インコース低めに放たれた、ノビのあるボールを、磨き上げたスイングで叩き潰した。

side 成宮

やっぱあれは反則だよなと言うカルロスの言葉にうなづく。

青道以外の高校に行つたとしたら、1年生の時に、更に成長した怪物と戦わなければならない。

しかもそれがタイプは違えど3人いる。

結果としてアウトになったが、初球のバームを強打し、ファーストへ強烈なライナーを放ち、グローブを弾いた2番柳。

西さんに続いてトドメとなるホームランを打った7番東。

この3人がクリーンナップとして並ぶ青道打線を想像し、武者震いをした。

チラツとスコアボードに目を向けると、2回裏の欄に7という文字が輝いていた。

名将の思い

side 鵜飼 仙泉学園監督

エースがここまで打たれたら完敗やなど、5回3―17でコールド勝ちされ、泣き崩れる教え子達を見る。

今井が5失点して、2番手にスイッチし、2点で抑える。しかし、2番手、3番手では力不足であったか、3、4回に5点ずつ取られ、5回表に出てきた2年生のピッチャーから3点をとるも雀の涙。流れを完全には掴むことができず敗退した。

仙泉学園は中堅校と言えば聞こえはいいが、実際には名の知れた強豪校から声がかからなかった、でも野球がしたい子供達がいる。強豪校に一步引いたような子供達をまとめ、データを基にしつかりと育てる、そんな自身の手腕によって40年程かけて、中堅校として存在している。

それが去年、全国にでも通用する才能の持ち主。強豪校でも圧倒的にエースになれるであろう逸材が転がり込んできた。1年生の夏でベスト16、秋でベスト4。

データを大事にし、チームを勝たせることを重視する。そんな自分に、このエースならばと、相方となるキャッチャーが入り、万全のメンバーとなった時、自分に隙が生まれた。

青道打線の分析はできていた。

若い監督のことだ、去年の伊藤の例があることから、1年生を比較的責任の重い一番打者や、クリーンナップにすることを、夏の本番となる大会では、無意識に避けるであろうとは読んでいた。

1、2、3番を抑え、集中力の欠いた4番を打ち取る、ここまではいつものデータ野球、というよりは今井だからできたこと。

5番の倉田があそこまで成長していたのは、予想外であったが、普段であれば、西を敬遠気味に歩かせ、力みがあるであろう1年生の東でアウトを狙う。

今井が強豪校を圧倒するのを見てみたい。手元の逸材が、去年から

大事に育ててきた子が、打の青道を抑え、強豪校に通用するところを見つめ勝負で見せつけたい。欲張ってしまった。

「わしもまだまだだっちゆうことやな。」と帽子をとり、頭をかく。

最初の頃は持っていたが諦めていた、育てた自慢のエースが活躍するのを見たいからと、勝負させた自分の采配ミス：

反省するのは、子供達のことが終わってからやなど、40年、毎年見続けてきている光景を見ながら歩きだした。

side カルロス

仙泉学園のエースは、いいピッチャーだったと思う。だが、西さんのたった1スイングで打ち砕かれてしまった。

自分にできるかと問えば、まだ無理だと思える、理想的なバッティングだった。

西さんはどの打順でも、場面でも、しっかりとチームに必要なバッティングができる。教科書や野球の本に書いてある、その通りの野球をする。1年生の夏は1番打者として立ち、1年生の秋からは3番打者として立つ可能性のあった俺は、西さんが1番打者として立つ時のバッティングと、3番打者として立つ時のバッティングを直接指導してもらっていた。

1番打者では球数をわざと稼ぎ四球やヒットで出塁し、盗塁、チャンスを作って、ホームを踏む。3番打者では得点圏ではしっかりと打点を稼ぎ、チャンスメイクもして、4番打者のための下地作りをする。

打順に合わせた、誰もが何番打者であればこうするのが普通と思う、そういったバッティングをしていくのだ。

基本的には6番打者は、チームによって色々なバッティングを求められる。成宮がうわあ：といった顔をしていたのはここに西さんがいたからだろなと想像できる。何をしてくるか、相手のチームのことをよく知っていないと、わからないからだ。

しかし、さっきの雰囲気と打ち方は、4番打者として出ている時や、テンションが上がった時についてしまうものであったはずだが、エースとして高校でもしつかりとやっている、今井さんとの対戦で気

分がのったのかな？と思った。

実力としてはかけ離れているだろうと感じたが、少しでも近づいために、帰ってからより一層、素振りに力をいれることを決めた。

監督就任2年目の判断

side 片岡

5回戦、対稲城実業戦のオーダーは、4回戦と少しかえて

1 藤堂 センター

2 柳 レフト

3 江藤 ショート

4 植松 ファースト

5 倉田 ライト

6 西 セカンド

7 東 サード

8 中山 キャッチャー

9 川口 ピッチャー

にしようと考えている。

川口は、2回戦では力んでの自滅があったが、気持ちが入りすぎていたためであること。4回戦では4回に登板し、地に足をつけて無失点で1回を、しっかりと投げ抜いたことから、試合を作ってくれるだろうと信じている。

川口よりも計算のできる、しかしながら、1年生である武藤にはあまり無理はさせたくない。糸原は3試合連続の先発登板で、疲れが貯まっている可能性が高い。

坂井は登板の度に失点している。ボールの質は今のところチーム随一なのだがな：

全員が自分なりに真剣に、野球と向き合っている。監督として選手を信じて送り出すのが役目だと、選手達の顔を見て、稲城実業戦の対策を練っていく。

side 国友 稲城実業監督

今年は1、2年生に素質ある選手はいるものの、現在プロ注目と呼ばれるような、スター性のある選手はいない。守備と打線に穴はないが、例年と比べると物足りない。春季東京大会では、市大三高の超高

校級右腕、田辺 俊樹にノーヒットノーランをくらい、OBからは、来年度のチーム作りを進めていくべきだという声があがっていた。

母校である稲城実業の監督に就任して6年、就任してから春夏合わせて10回甲子園へと導いた実績のある監督、私はそう世間から認識されている。それ故、指導力の問題ではなく、選手に問題があるのではないかと、選手へOBからの声が、公式大会のふがない成績を理由として、襲いかかってくる。

私が就任してから、2季連続で甲子園の出場を逃した世代として、OBから期待されず、ノーヒットノーランをされて、ため息をつかれる。しかし、あの子達が負けて涙を流した姿、バットを遅くまで振る姿、そして勝利した時の笑顔を思い出すと、今現在を懸命に、こいつらの監督としていようと思える。

俯き嘆くのはここまです。私の名声を信じて入学し、私の指導を信じて練習をし、指揮を信じて試合をする。来年のチームを作るためという言い訳で、私についてきた3年生を裏切りたくない。

王者として君臨していたカリスマが、今大会は挑戦者として、昨年の夏の都大会覇者、青道へと牙を剥く。

side 川口

片岡監督から、明日の先発が俺だとチームに共有された。正直、戸惑いのほうが強かった。糸原さんが3戦連続で先発をしていて、回避するのは妥当だとは思っていた。だが、なぜ武藤じゃないのか？

自主練習場に到着すると、フォームをチェックする。骨がくっついたのが2月、リハビリして、4月初めには投げられるようにはなった。だが完成度は低く。3ヶ月間何もしなかったわけではない。色々と相談しながら仕上げてきたつもりだ。

しかし、より結果を出して、チームの期待に応えているのは武藤だ。何で俺が先発で、なぜ武藤じゃないのか？

同じ事をグルグルと考えながら、フォームチェックをしていると、同学年の伊藤が歩いてきた。

「変な顔してフォームチェックしてんな。明日の先発が武藤じゃなくてお前なのを気にしてるのか？」

「・・・」

「望・・・お前ならやれるさ」

「結果を出していて、ふさわしいのは武藤だ。」

「・・・なあ、望。武藤がさ、遠藤さんがもう試合に出れないのを知ってるら、無理してるのを知ってるだろ？」

「ああ・・・」

伊藤が急に川口の胸ぐらを掴み

「おい！いつからそんな腑抜けになったんだよ！俺みたいに、満足にやりたいことができないやつを作らないでくれよ！」

泣きながらしやがみこむ。

川口はそれをバツの悪そうな顔で見下ろしていた。

覆す

ウグイス嬢が青道のオーダーを読み上げる。

- 1 藤堂 センター (右)
- 2 柳 レフト (左)
- 3 江藤 ショート (右)
- 4 植松 ファースト (左)
- 5 倉田 ライト (右)
- 6 西 セカンド (左)
- 7 東 サード (右)
- 8 中山 キャッチャー (右)
- 9 川口 ピッチャー (左投げ、サイドスロー)



先攻 稲城実業、後攻 青道

1 回表、稲城実業の1番打者が左打席に入ると、ルーティーンで左肩を軽く回す。守備位置を確認して、ファーストとサードが、偵察映像より、1歩ほど前に出ているのを確認すると、昨年覇者という肩書きに奢らず、しつかりこちらを研究していると感心する。

事前の2回戦、4回戦の偵察映像から、相手ピッチャーは、コントロールはまずまず、球速は120キロ後半から130キロ前半、変化球にスライダー、シンカーがあるという情報を得ている。

ただ投球回数が少ないことから、他の球種がある可能性も視野に入るようにと、チームで共有している。

監督からの指示は球数を稼げ、できれば出塁しろ。

初球のアウトコースのストリートが外れて1ボール、インコースのストリートが高めに浮いて2ボール。相手ピッチャーがロージンを手に取り間を取る。



2球入れるはずだったストレートが、共に外れたため、落ち着くためにロージンを手に取る。後ろからは内野陣の声が大きく、観客の応援で一部かき消されるが、外野陣の声も聞こえる。

ベンチの方向にチラツと目線だけ向け、バッターに集中する。

伊藤の顔を見たことで、落ち着き、腹をくくる。

得意球のスライダーを投げると、アウトコースの際どいところに収まり、1ストライク2ボール。

打者がタイムを取り、打席から出て何度か素振りをして戻ってくる。

そして、すぐにインコースの低めギリギリに、130キロ前半のストレートを投げ2ストライク、2ボールとなった。

▽

横から見てみると、かつての姿に戻ったように思える、いい顔つきになったと思う。インコースのゾーンから、打者に向かっていくシンカーで空振りをとる。川口が躍動し雄叫びをあげるのを、伊藤はベンチで座って、目に涙を浮かべながら見ていた。

▽

前評判で、投手陣に信頼できるピッチャーが糸原のみだが、有力な1年生が加わり、打撃力は全国区とされていた前回覇者の青道と、ここまで中堅校とすら当たらず、くじ運に恵まれただけで、安定感はあるが、打線も、投手陣にも今年は強みがないとされていた稲城実業との戦いは、青道圧勝の下馬評を裏切り、投手戦の様相を見せていた。

春まで勝っていないだけであった稲城実業には、成長した3年生エースと盛り立てる野手陣、そして将来大学生で2球団競合の末、ドラフト1位でプロ入りすることになる、2年生の天才、天海 賢治が才能を開花させつつあった。

そして、5回表にその天海が、川口からソロホームランを放つ。しかし、川口が踏ん張り後続を抑える。

続く5回の裏に、先頭打者の西が6番打者として、チャンスメイクとして出塁するが、東、中山、川口と凡打に倒れる。

相手エースを攻めあぐねる打線に、片岡監督が低めの変化球を捨てると、指示を出すも、逆手に取られて変化球攻めをされ、三者凡退で6回の攻撃を終える。1失点で抑えていた、久々に本気でボールを投げることができ、息のあがっていた川口にかわり、エースの糸原が7回表のマウンドに登る。

3年生

糸原は、怪我から復帰してから左肘を気にして、昨日まで、腕を振りきれていなかった川口が、鬼気迫る投球で、稲城実業の打線を抑えたのを嬉しく思っていた。



2年生、特に、藤堂、川口、伊藤は責任感が強く、幸運にも、1年生から甲子園を経験した選手として、先輩達が抜けた秋から、チームとして主力となっていた。1番伊藤、2番藤堂のコンビは後輩ながら頼もしく、遠藤が成長痛で苦しむなか、2番手ピッチャーとして力をつけてきた川口。

昨年の夏に、甲子園に出場できたのは、3年生の先輩達がしっかりとしていたから。その先輩達に大部分が甘えてしまっていた俺たちの世代。

なかなかそういった気質が抜けないなか、しっかりと自分を持った江藤、植松、中山：そして遠藤は飛躍し、俺や倉田達は、榊前監督がやめるかもという噂から、有力選手が少なかつたせいで、なあなあでレギュラーとして、使ってもらっていた。

片岡監督の練習は厳しかったが、それだけで、自主練習なんかしなくても、レギュラーとベンチを行き来し、使ってもらえる。

そんな俺達を突き上げてくる2年生の存在。そのままいっただけ、自分達も雰囲気には押し込まれて努力していたのだろうか。

しかし、伊藤が離脱し、次に川口が離脱した。

藤堂は自分がやらないといけないと考え、2年生を引っ張っていた。他の2年生は今大会ではレギュラー落ちしてしまったが、佐々木、蜂須賀、角田など、どんどん、続いていく存在が出てきはじめる。

そしてついに、1年生が入学し、怪物3人が呆気なく、燻っていた3年生の場所を取っていく。そういうこともあるよなど、半ば諦めかけていたが、本当であれば、エースとして背番号1を背負っていた遠

藤。あいつの怪我のおかげ、といつてはなんだが、3年生に火がついた。

もっと早くから真剣にやっていたら、スタンドでそう思わずにはいられなかった。

▽

7回表、糸原が、目を閉じて深呼吸をし、マウンドへ。

昨年の秋や、4月の春の大会とは違う、引き締まったオーラを纏った糸原を見て、稲城実業の打者は各々、警戒レベルを上げる。

糸原は元々は遠藤を凌駕するピッチャー。ほどほどに頑張るだけで、2年生の秋の大会でエースを任せられていた、素質溢れた選手であった。努力量の差で遠藤に先に行かれ、そのまま言葉だけ悔しいと述べる。才能の差だったんだと言い訳をして逃げていた、あの頃の糸原はもういない。

遠藤がいない、川口、坂井がそれぞれ苦しみ、そして、ひとつ間違えば伊藤のように潰れかねない、1年生の武藤で構成された投手陣。先輩に連れていってもらった甲子園に、今度は自分が後輩を連れていくために、俺がやらねばならないと、稲城実業のバッターを睨み付けた。

▽

7回表、1アウトをとり、6番打者である2年生の天海が右打席にたつ。

ボーツとした表情で、何を考えているかわからない天海を、キャッチャーの中山は観察する。

川口が投げているとき、5回表に先頭打者としてたつ天海は、先制ホームランを放っている。1打席目は追い込まれるまで反応がなく、インコース低めのスライダーを、まるで感触を確かめるように軽く当て、レフトへヒットを放っていた。

ホームランを打たれた2打席目では、インコースにツーシーム、アウトコースにシンカーで、2ストライクに簡単に追い込むが、そこから4球連続で粘られた。そして、アウトコースに外れるストレートの後、インコースに外れるスライダーを選択した。

身体にバットが絡み付いたかのように、綺麗に腕を畳んだまま、天海がその場でクルツと回転すると、芸術的な放物線を描いて、レフトスタンドにボールが落下した。

そんな前までの2打席を思い出し、どのボールで仕留めるかを考えていく。糸原の持ち球は、130キロ後半まで伸びたストレートに、スローカーブ、チェンジアップと緩急をつけるもの、ゴロを打たせるためのツーシームに、遠藤から託された魔球SFFがある。

ボールの質が6月辺りからよくなり、前ほど飛ばされにくくなったことから、ストレート、スローカーブ、チェンジアップの3球種のみで通用してきたため、いまだにツーシーム、SFFは隠しているままだ。

先程までの打席から、横にスライドする球、またはインコースが得意なものとして、リードを頭で組み立てていく

アウトコースへストレートを投げーストライク。アウトコースに外れるストレートで平行カウント。まだ天海に動きはない。

インコースにあえて全力でストレートを投げさせ、わざと高めに外して印象付ける。フロントドアのスローカーブで2-2の平行カウントに。天海はスローカーブをじっくりと観察をし、膝でタイミングをとっている。

そして、天海が得意と思われる、インコースの低めにツーシームを要求すると、しっかりとコントロールされた球に天海は強振し、鋭いゴロがレフト方向へと放たれるが、ショートの前江藤が横っ飛びで好捕し、ファーストへとストライク送球し、アウトとなった。



送球をして、セカンドの西とハイタッチをしたあと、定位置に戻る

際に、ふと江藤が天海をみると、天海は中山を見定めるように見ながら、駆け足でベンチへと戻っていった。

怪物の更なる飛躍

6回までで青道は柳が1本、西が2本のヒットを放っただけで、まだに得点を奪えずにいた。

7回裏、先頭打者の植松は、2、3年生が全く打てず、1年生のみがヒットを打っている現状に、苦々しく思っていた。

あらかじめ、偵察班から、稲城実業のコースは、140キロ前後のストレートに、高速スライダー、カーブ、スローカーブ、フォークとバランスのいい、右投げのオーバースローのピッチャーであることは伝えられていた。

打の青道と持ち上げられ、ここまで全て2桁得点をして、自分達の実力を過信していたのだろうか。いや違う。事前にわかっていた球種に、インコース、アウトコースに分けて投げられるシュートに、詰まらされての凡打が多いのだ。

初球、左打者の俺にたいし、バックドアのカーブが投げられ、アウトコース低めいっぱいに決まり、1ストライク。ワンバウンドになるスローカーブに、体勢を少し崩されるが、我慢をして1―1の平行力ウントに。

6回裏からストレート主体であった配球が、変化球主体へと変化し、全く別のピッチャーと戦っているような感覚になる。

バットを握る手に力が入り、思うようなスイングができず、インコースのストレートを打ち損じ、セカンドゴロとなった。



7回裏、2アウトで西が左打席に入る。じわじわと稲城実業に追い詰められている感覚を受ける。チーム内で冷静なのは藤堂さん、柳、中山さん、糸原さん、そして、あまり深く考えずノリで楽しんでいる東くらいであろうか。今大会初めて1点ビハインドで迎えた試合終盤、自然と力みが出て、焦りを覚えるのは、若者としては仕方ないものとして考える。むしろ、柳、東が落ち着いているのは大したものだ

と思う。

高校に入ってから更に身体、脳が成長したからか、前世と今世が更に溶けて混じったような気がする。前世で仕入れたであろう知識、そして魂に染み付いた技術、野球観、どう戦っていくか。

野球において、打撃は、打順によって基本的には役割が決まっている。1番は出塁することを大事に、2番は1番を進塁させ、また出塁もし、チャンスの拡大を狙うなど、チームによってほぼ確立された行動指針がある。

現在自分がいるのは6番打者で、チャンスであれば打点を、ランナーがいなければ出塁、チャンスを演出し、後ろへと繋げる役割である。今までランナーがおらず、6番打者として確実にヒットを打って東へと、中山さんへと繋げるバッティングをしてきた。

しかし、それでは、このままでは負ける。ズルズルと負けていく。そんな流れが来てしまうと、勘がささやく。

しかし、監督からは狙い球を絞って、確実にいけというオーダーがきている。ホームランを打てそうなボールだ。確実に出塁できるであろう。だがそれでいいのかと、初球のインコースのストレートを微動だにせずに見送る。

ピッチャーの手に汗が流れたのだろうか、ユニフォームのズボンで手を擦り、ロージンを持つて、丹念に利き腕の手で揉む。

ベンチの片岡監督のどこか焦ったような顔を見て、3年生の年相応の不安そうな顔を見て、決心する。ここで決めると。

気分が高揚し、打順に関係なく自分が勝負をしてしまう。それが出てしまったのは春季大会の市大三高戦であっただろうか。前世で得た知識では4番が勝敗を決めるのだと、そういった憧れのようなものが強くあり、また自分で試合を決めるといった、自分勝手なエゴのよいうなものを恥ずべきものと思っていた。

無理矢理自制していたものを解き放つ。6番打者なら、こうしなければならぬという枠を壊す。ここまで一緒にやってきた監督、中山さんを初めとした3年生のために、打順の役割というものを放棄する。



初球微動だにしなかった西が、ピッチャーが間を取っていると、打席を外して、いつもの無表情で味方ベンチを、何か考えるようにして見てくる。

目を閉じ、空を見上げて大きく息を吸って、ゆっくりと吐き出すと、打席へと戻る。

突如安定していた、相手のピッチャーが、意図的になのか、ボールをホームベースに叩きつけるような球を投げ、1ストライク1ボールとなる。ここまで好投していたピッチャーの顔が、強張っているように見えた。



ここまで柳、西が結果を出し、自分だけが打てていない。東はネクストのサークルでタイミングを取りながら、バットを握る手にいつも以上に余計な力が入っていると感じて、首を横にふって、気持ちを切り替える。

そうしていると、いきなり青道側スタンドを中心として、球場全体から歓声があがった。何事やと目線を上げると、西が右手拳を突き上げ、2塁手前をゆっくり走っているのが見えた。

何腑抜けた走塁をしとんのや!と怒鳴ろうとしたが、相手ピッチャーがその場で項垂れているのを見て、様子が違うことに気がつく。そして目の前に西がやってくると、「お前なら打てるだろう」と左肘を軽く叩かれた。



ニヤツと笑った東が、打席へと向かうのを見届けると、ベンチに向

かう。生まれて初めて、前世のセオリーに逆らうことを、わざと自分からしてしまった。だが、ベンチで喜び、安堵する監督、チームメイトを見ると、これでよかったのだと、前世に別れを告げるように、天へと突き上げた拳を、今度はベンチに向かって突き出した。

▽

スタンドに観戦にきていた成宮は、西を凝視しながら冷や汗を流していた。

西と東

西に打たれたエースをすぐさま交代させる。稲城実業の国友監督は、迅速に青道の1年生、西 晴之のホームランによって作り出された、青道の打撃に味方する流れを切るために、2番手のピッチャーをマウンドに送る。甲子園で怪物を、時に相手取り、時に教え子として導いた経験のあるカリスマは、ピッチャーをかえることで、対処しようとした。

青道の7番を打つ、ニヤついていた東も、長打力に関して言えば、怪物だと判断する。

怪物には怪物を：

奇しくもホームランを打った西と、同じシニア出身で、同学年の、シニア全国優勝経験のある1年生をマウンドへと送った。



おえー、初っぱなから清国ちゃんとか戦かよー、と少しやる気のないさげな、軽く天然パーマのかかった黒髪をぼそぼそかきながら、マウンドへ向かっていく。

稲城実業 1年生 南野 竜 ピッチャー 背番号12

シニア時代では、右のサイドスローながら130キロ前半のストレートを武器に、スライダー、カーブ、シンカーと、中学生とは思えない器用さで、相手を翻弄していた。

中学3年生の時には、U-15に西と共に選ばれ、先発したこともある。3年生の夏の大会で、全国大会の1戦目に登板し、ノーヒットノーランを記録している。残念ながらその全国大会では3回戦で姿を消すが、その試合での被安打は1、自責点0であった。



東が打席に入ると、タイムがかかり、相手の監督がピッチャー交代

を主審に伝える。すると見覚えのあるやつがだるそうにマウンドに。公式戦での対戦経験はないが、あの西とジュニア、シニアで野球をし、唯一、U—15で登板した全試合で無失点であった、頼れるピッチャー。そんなやつが敵として、目の前に立っている。

圧巻であった。アウトコースの低めに変化球と思わせるような、遅いストレートで1ストライク。ワンバウンドになるシンカーを、ひとつ前のストレートと同じ球速で投げられ、つい手が出てしまい2ストライク。

そして、スピンの多い130キロ後半のストレートを、アウトコースに投げられ、ボールの下を振り抜き、東は三球三振した。完全に東を知り尽くした投球であった。



片岡は難しい顔をしていた。表情に出てしまうところが、この監督の若さか。7回裏に東を三球三振に仕留め、次の回にも投げるであろう南野を、どう攻略するかを考えており、今現在の守備にあまり意識がいていなかった。

それが青道の実際に守っている選手に、伝染したのであろうか、稲城実業の先頭打者、一番打者のセーフティーバントを、東がお手玉してしまい、ノーアウト1塁と、勝ち越しのランナーが出てしまう。

「足を動かせ！バント！エンドランも頭にいれとけー！」と叫ぶショートの江藤に内野陣が応える。

不味いと片岡監督が思ったのはひとつ遅かった。気づけば、先程のエラーを気にして、半ば呆然としていた東の、股足を抜ける鋭いゴロをレフトの柳が捕球し、糸原が投げる前から走っていたランナーが2塁へと到達し、オーバースタートしていたのを牽制するところであった。タイムをとり、東に代わり3年生の間にサードを守らせる。

代わって出てきたピッチャーに抑えられ、エラーを2連続でしてしまつた東は、ベンチで泣き崩れる。

その姿を西は見ている。



これは勝たなければならぬ。東の泣く姿を見て思う。

西にとつて、東は初対面の時から、この無表情を気に掛けず、気さくに接してくれた大事な友達である。

中学2年生の秋のU-15に初召集された際に、「あいつ何考えてんのかわかんねーんだよな」と、周りが腫れ物扱いをするなか、持ち前の明るさを全面に出しながら、西に話しかけてくれ、他のみんなと繋いでくれた。

このまま、泣かせたまま終わらせるかよと声を出し、内野陣を江藤さんに負けないくらい鼓舞していく。

そして三番打者が放った、鋭く抜けそうなライナーを、2塁方向への横っ飛びで掴むと、グラブからそのままボールを放り、江藤さんがボールを受け取って、ランナーが帰塁する前に2塁を踏んだ。



「あのセカンドやベエー！」などと、叫ぶ観客の声を聞きつつ、稲城実業の国友監督は、コキコキと首を鳴らしながら、グラウンドで守備をする青道ナインを、真顔で見ている。

流れを掴むのは

国友監督がサインを出すと、4番打者が頷く。1塁にいるランナーは俊足の2番打者。先程の青道のセカンド、西のファインプレーにより、流れはどちらに傾くかわからない状況。

よく打つなどとは思っていたが、エラーが続き、更にミスしてチーム自体がそこで崩れて終わっても、おかしくない状況での、あのプレー。年相応であった東に比べ、精神力でも大したものだと、更に西に対して警戒をしていく。

相手のピッチャーの糸原くらいのレベルであれば、うちの打者、特に上位打線であれば、ある程度狙った方向にバッティングができる。実際に7回表ではツーアウトから、タイムニングをしつかりと確認できた7、8番打者は粘り、ヒットと四球を選んでいるため、上位打線であれば勝負ができるであろう。

ああいう手合いがいる場合は、守っている方向、つまりセカンドの手が届く範囲にボールを打たない、触らせないようにする。そして打者としては、エース以外には勝負をさせないに限る。

高校生になったばかりの1年生に対して、かなり警戒したような臆病さと取られるかもしれないが、こちらとしても負けるわけにはいかない。「えー、どんなもんか勝負してみたかったのになー」と言う南野を、先程のダブルプレーをくらった3年生捕手がなだめる。



サードを任された間中は、普段の練習から、東と同じポジションを守るものとして、食堂で一緒に飯をたくさん食べたり、野球のことについて、熱く語ったりと、意外と仲良くやっていた。

実力的にはかなり上を行く東だ。いきなり現れた、自分のレギュラーを脅かし、奪っていった存在。だが、あの練習量を見て、実際に一緒にこなしてみても、納得させられた格の違い。そして、憎めない性格に絆されていた。

ああいうやつがプロになるんだろうなど、本人には言わないが尊敬に値する、自慢の後輩。

内野陣に声をかけ、ピッチャーの糸原にも声をかける。

東と色々野球に関して話したことが、頭のなかを駆け巡る。代わったところをいきなり突いて、相手が落ち着かないうちに、試合を決める。「特にピッチャーによく言いますが、代わりつばなの初球を叩けって言いますよねー」と東が言っていたのを思い出す。

こっちの方向に打球がくる！根拠は東がかつて言った言葉のみ。だがそれを信じて極限まで集中していた間中は、東が言っていたことはそうでもないし、国友監督の意図していたものとも違うが、結果として3塁線に抜けそうな強烈なゴロを好捕し、ファーストでアウトをとろうとして、1塁へと送球した。



間中はしつかり集中していた。それ故になんとかこの形になったのだと、少し残念に思いながら、2アウト1、2塁になったグラウンドの状況を見る。間中の送球がバッターランナーの足に負けて、わずかの差で内野安打となったが、しつかりと前を向く間中の様子に片岡はほっとした。

サードを守るのは東を除けば、共に3年生の手塚と間中の二人。エラーによる動揺からの交代であったため、守備面から間中を送り出したが、とりあえずはうまくいったようである。

東にはこの経験を糧にするようにと、これからも力になってもらうから、今は休んでいるようにと伝えている。3人の怪物として、別格だと思っていたが、やはり1年生は1年生、無理をさせることはできないなど、右手拳を握りしめる。

そして、糸原は粘る5番打者に四球を与え、満塁のピンチを迎えていた。



8回表、2アウト満塁の場面と稲城実業のチャンスに、ネクストバッターサークルからゆらりと、6番打者の天海 賢治がバッターボックスへと歩いていく。その顔はいつものブーツとしたものど違い、鋭い視線をキャッチャーの中山に向けていた。

そして、右打席へ立つと、軽く見せつけるように1スイングし、「お願いします」と冷静に声を発した。

天海 賢治という少年

2アウト満塁で、5回表にホームランを打っている天海に打席が回ってきた。片岡は冷や汗を流す。昨年は絶対的なエースとまではいかないものの、試合を作れる3年生が二人に、糸原、怪我をする前の川口という、投手4枚をフルに使うことのできる、万全の体制であった。

今日は、不安要素のあった川口が試合を作り、なんとか稲城実業に食らいつき、糸原に繋いだ。そしてその糸原が連投の疲れか、前評判の低い稲城実業打線に対して、窮地に陥っており、本来であれば継投してもよいタイミング。しかし、ベンチを見ると、残っているのは1年生の武藤に、ピンチに弱い坂井。

国友監督のように、1年生ピッチャーを出すことで、流れを変えることも考えるが、先程の東の泣き顔が頭をよぎる。

ピッチャーの糸原のもとへ、伝令として伊藤を送る。糸原を信じて、任せることに決めた。相手打者の天海の表情に気がつかないまま。



伝令の伊藤から、気合いを入れてもらった糸原は、打席に入ってからに相對している6番打者、天海の闘争心を露にしたような表情に気がつく。

去年の伊藤のように気負っているようではない、気迫に溢れたオーラ。先程の間中に助けられて、長打にならなかった4番打者よりも危機感を感じる。まるで合宿中に対戦した、監督が持ち得るものを全て使っていていけど、指示をされた西が右打席に立って、こちらを威圧してきているようで、しかし、その時よりも強い圧迫感。

さつき対戦したのとは別物だと感じる。それを感じたのは自分だけではないのか、スタンドの観客は一瞬静まり帰ったあと、各々気を取り直し、再び応援し始め、守備陣も一拍遅れて、声を出し始める。

伝令によつて落ち着きを戻していた自分達が、浮き足立っているのを自覚し、プレートから足を外して内野陣のいる後ろを振り返る。「ボールいくから、頼んだぞ」

その言葉を聞いて、目を大きく見開いた後、笑ったショートの江藤は、「ここで止めて俺らが勝ち越し点を先にとるぞ！」と全体を引き締め直した。

▽

監督である国友としては、天海 賢治という教え子は、最初の体力テストの時には、将来レギュラーをとる選手になるとは全く思えていなかった。打つのは好きだが、ボーツとしていてトロいところがあり、勝負事へのこだわりの薄い普通の少年、そのような印象であった。

あまり深いことは考えず、練習を黙々とやっていく。先輩の教えてくれることを、できるようになるまで、じっくり、納得できるまでやり続ける、そんな子であった。中学2年生と、遅くから野球を始めたことから知らないこと、できないことは多いものの、真面目に練習をこなし、また先輩をしつかり尊敬し、礼儀正しいことから可愛がられていた。

そういう子がいるとチームにプラスになるから、全体としてはいいかと、夏の大会、秋の大会ではベンチ入りすらしていなかったが、アドバイスをしながら微笑ましく思っていた。

それが冬の合宿を越えた、新年の紅白戦で、4打席4安打と活躍をした。それは全てインコースを打ったものであった。

インコース打ちだと、レギュラー並みかもしれないと声をかけると、「インコースの打ち方が完成したので、そう思ってもらえた嬉しいです」と言われ、あれ…こいつも実はヤバイやつだったのか：と思わされた。

今は他のコースも練習しているようだが、インコースのみはどんな球でもヒットにしていたことから、天海の中では、それは完成しているのだろうか。

その天海が7回表に、そのインコースでアウトを初めてとられた。時間がたつごとに、だんだんと目が変わっていく天海。南野が「あの人も勝ちたいと思うんだな」と言っているのを聞き、理解した。自分の領域で戦って負けた、その悔しさを今嚙下し、初めて味わっているのかと。遅くから始めた素人が、今まで戦いの土俵に立ててすらいなかったものが、一足飛びにレギュラーに定着し、今年から勝負というものの経験を積んできていた。

今まで、インコースの打ち損じはないというのは、データとして確認している。かわりつつある教え子を見守り、打席へと送る。

今、天海 賢治の才能が開く。

思いの強さ

初球のストレートをアウトコースに外す。糸原は、こちらを見てくる右打席の天海に、一挙手一投足を全て観察されているように感じる。そして、天海が時折チラッと中山の表情を確認して、その度にバットを握り直す。

これは、俺ではなく中山を意識しているのか？視線は、全力の西と同じように全体を見て、こちらの隙をうかがっているようだ。だが、意識の割き具合が中山に比重が傾いている気がする。

2アウト満塁で普通はすることのない牽制を、サードに緩く投げる。敢えて間をとり、天海が打席を外して目を閉じ、深呼吸をする間に、キャッチャーの中山に手を小さく振ったあと、首を横に振る。

インコースへと投じられるはずだった、フロントドアとなるスローカーブのサインをキャンセルした。

そしてインコースの中段から真ん中の低め、ストライクゾーンからボールゾーンへと逃げていくスローカーブを投げると、体勢を崩されながらも天海が、必死な形相で食らいつき、1塁側スタンドに入るファールとなった。追い込まれていないのに？：

前の打席もそうだが、川口の時もアウトコースへの球には、追い込まれるまでは手を出していないことに糸原は気がついていた。そして、初球外のストレートに無反応、インコースから逃げていくスローカーブにノーストライクから過剰に反応してきたことから確信する。完全なインコースヒッター、それがこの天海。

他のコースは叩いてファールにし、四球を狙い、インコースにきたところを振り切るバッター、そうあたりをつけた。

インコースを中山がいつ要求するのか気になるのだろう。狙いが分かっているとは言え、この試合で、バットに簡単に当てられているような俺のボールでは、天海にインコースで勝負できるのは見せていない球、SFFだけであると分かっている。

さつきはストレートを意識付けて、情報のないツーシームでなんとかアウトにできたが、今回はどうか。

ボールを握る右手から汗が滴り落ちる。ロージンを手に取り、再び間をとる。

インコースの捌きかたは、さすが、2年生ながら稲城実業でレギュラーを勝ち取ったバッター。前の打席、川口が打たれたホームランを思い出してそう思う。

だか、追い込むまではそこまでは怖くないと、アウトコース低めギリギリいっぱいツーシームを投げ2ストライク1ボールに。

ここで、天海の表情に変化が現れた。感じるものがあるのだろうか、何故か動揺が見られる。バットを握る手に力が入りすぎている。深く、ゆっくりと呼吸をして投球動作に入ると、インコース中段から鋭く落ちるSFFで天海から空振り三振を奪った。



「うあ…：…なんで、くそ…：くそ…：くそ…！」

ベンチに戻り、自分自身のグローブに、拳を何度も何度も打ち付けながら、涙を流す天海を見る。既に天海の交代は申請している。

いつも温厚で、ポーツとした少年、どちらかと言うと、チームを癒してくれるようなそんな存在。

そんな天海が、こんなに感情を出して泣いている。

8回裏の守備に向かうメンバーはその姿を目に焼き付ける。悔しいという気持ちは全員にある。ただ、それは自分自身で折り合いをつけていくもの。余計な言葉はかけずに、全員が、いつものように天海の頭を順々に撫でていく。

「いくぞー！次こそ点をとるぞー！」と言う主将の言葉に天海を除くベンチに入ったメンバー全員が応え、グラウンドへ、自分の守備位置へと散っていく。

それを国友は頼もしそうに見ると、天海へと目を移す。

今回は気持ち大きすぎて、結果を出すことはできなかったが、スポーツ選手として大事な闘争心、悔しき。それを一気に得た天海は、これを取り越え、更に大きく成長してくれるであろうと信じている。

だが、チームとしては、センターかつ6番打者のレギュラーが欠けるのは痛いものがある。経験の豊富な国友と言えども、これがどう試合の展開に影響するのか、分からなかった。

主役はお前たちだけじゃない

ピンチの後にはチャンスがくる。それは相手も重々承知していること。前の回よりも圧力をかけてくる稲城実業の野手陣、そして前の回では、やる気がなさそうだった、マウンド上の1年生、南野の絶対に抑えるという気迫。

ベンチの中にいる伊藤でさえも、かなりのプレッシャーを感じていた。

青道の先頭打者、8番の中山さんが打席にはいると、青道側、そして稲城実業側のスタンドから、互いのチームを押し上げるような声援が浴びせられる。

相手のピッチャーの観察をしながら、攻守交代する前に片岡監督から

「次の回、中山がランナーとして出ても出なくても、糸原のところまで代打で使うぞ」

と告げられたことを思い出す。1年生ピッチャーである武藤を最終回に送るのかと、片岡監督の判断を意外に思う。

だが、この場面で任せてもらえるからには期待に応えたい。

相手ベンチからバットを握っているのを見えないようにしながら、感触を確かめる。

南野が中山さんに初球、ストレートを投げるがボールの判定。この場面でも冷静に、自分のバッティングをしようとする中山さんに敬意を抱く。2球目も低めに外れてボール。天海と同じように力んでいるのかと思いい、南野の様子をうかがうが、そこにいるのが当然と言わんばかりの自然体で、キャッチャーの返球を受けとっている。

インコースの低めにシンカーが投げられると、中山さんが反応するも、バットを止めて見逃し1ストライク2ボール。そしてアウトコースへ130キロ後半のストレートが投げられると、悠然と中山さんはそれを見逃す。

ベンチやスタンドから応援する声が大きくなる。三振を奪え！抑えろ！打て！負けるな！という両チームを後押しする声がグラウン

ドに響き渡る。

5球目、インコース低めに投げられた、加減されたストレートを、中山さんがフルスイングし、3塁方向への強い当たりが飛ぶと、球場に悲鳴や歓声上がる。だが、打球があまり上がらず、サードの正面へライナーとなり1アウトとなる。

代打 伊藤 叶とウグイス嬢がアナウンスすると、バットをもって打席に向かう。

「度胸のあるピッチャーだ、気をつけていけよ。あと球速を変えて球種を惑わせてくる」とすれ違う中山さんから声をかけられ頷く。

右打席から、南野を見据える。東、中山さんへのピッチングから精神的に強く、かなり器用な選手だという印象を受ける。さすが、シニアで全国優勝を経験し、U-15にも選ばれていたピッチャーだと感心する。西が同じシニアということもあるだろうが、1年生ながら、強打者に対しても臆することがないのは、敵ながらすごいと思う。

自分の後ろには藤堂、柳、そしてクリーンナップと、期待値の高い打者が続いていく。塁に出ることを第一に、相手の出方を観察していく。

初球、アウトコース低めにギリギリはいつてくるスライダーで1ストライク。2球目も同じコースにスライダーがくるが、変化量が大きかったのか、外れて1-1の平行カウントに。

一度打席を外して考える時間をとる。右のサイドスローで、ストレート、シンカー、スライダーがあり、球速と変化量を調整して打ち取ってくるピッチャー：どこのプロのベテランだよと思いつながら、2回軽く素振りをする。それに、決め球に知らない球種を、糸原さんがやってみたように投げてくる可能性もいれていく。

少なくとも1打席では、対応するのは難しそうだと判断する。再び南野に目線を戻して、少し短く持ったバットを構える。

インコースに沈み込むようなシンカーを、バットを止めてなんとか見逃し1ストライク2ボール。南野がロージーンに触れて少し間を調整する。

体に向かってきて、こちらに届く直前に、決るように曲がるスライ

ダーがインコースの低めに決まって2―2の平行カウントとなる。

体から力を抜いて、どんな球でも対応できるように、柔らかさを意識したフォームに切り替える。3球粘り、続いて投げられた、アウトコースから外へと逃げるスライダーを、ノーリアクションで見逃す。

南野がまたロージンを触り、深く息をつく。直感で次の球が勝負球なのだなど理解し、今までに投げられた球を全て思い浮かべる。アウトコースの低めに投げられた、初見のカーブをギリギリカットし、次のボールで四球をもぎ取り、ガッツポーズをし、代走の伊達さんと交代した。



2年生の伊藤から

「後は頼みました」

と声をかけられた3年生の伊達は、ファーストランナーとして周りを確認した後に、監督からのサインを見る。打席には頼れる後輩の藤堂、2年生ながらも不動のセンターを守る外野の要。

俺の強みは足の速さと、走塁の上手さ。昨年、2年生時の夏の大会では、それだけでベンチ入りし、試合後半での代走や、守備固めで使われていた。また、続く秋の大会では、セカンドのレギュラーの伊藤が足を怪我した直後、交代を告げられ代走に入り、そのまま打つことができずに負けてしまった。悔しくて素振りなどに力を入れたが、結局打撃は改善せずに、1年生の西にレギュラーを譲るような形になって、最後の夏の大会を迎えてしまった。

ベンチには入っていたものの、2年連続で、後輩に、それも新入生にレギュラーを取られたのは悔しいし、自分の実力不足に腹が立つ。だが、一緒にやってきた仲間だ。

昨年は負傷退場でやむなくの交代だが、今回は足りないものをお互いに補うための交代。こちらに声をかけてきた伊藤の目に、自分もこのチームのメンバーで、今共に戦っていると実感させられた。体が熱を持ち、観客の声など関係ない、ピッチャーの南野をよく観察する。

自分の視覚と、耳から入ってくるランナーコーチャーの声以外の情報
報をシャットアウトする。藤堂が南野から粘って、6球目のボールが
レフト方向へ放たれ、三遊間へと飛んでいく。ゴロになると判断した
瞬間、思いつきり地面を抉って2塁へと駆け出す。

シヨートが横っ飛びで好捕したのを横目で確認しながら2塁へと
頭から滑り込んだ。

「い・せー・せー・せー・せー・せー」

起き上がると体が勝手にガッツポーズをし、雄叫びを上げた。そし
て、ファーストへと目を向けると、アウトになり、闘志を剥き出しに
しながら、ヘッドスライディングをした後の格好で、藤堂が両拳を握
りしめながら叫び、立ち上がると次の打者である柳に左手拳を向け
た。そしてこちらに軽く一礼して、ベンチへと駆け足で戻っていっ
た。

試合の行方

声援がうるせえなど、スタンドの観客席にいる成宮は顔をしかめる。

共に甲子園出場経験のある高校で、そのうち青道は昨年の夏大会の覇者。そんなチームが、下馬評の低い、しかしカリスマ監督率いる稲城実業と1―1の接戦を、お互いがチャンスを作り、それを潰し合い、拮抗した戦いをしているのだから、無理もないかため息をつき諦める。

西さんと同じく、怪物と呼ばれる柳さんも粘ってはいるが、マウンドの南野さんのが上手のようだ。7球目のスライダーを引っ張り、打ち上げられたボールは最後に失速し、フェンス際のライトフライに倒れた。

9回表となり、攻撃は稲城実業へと移る。青道のピッチャーは1年生の武藤。1つ前の試合では、1イニングをしっかりと抑えていたが、表情に余裕はない。カルロスに

「あいつ、去年南野さんが投げてて、セカンドがミスした時の顔つきしてるよな、あの全国の3回戦のやつ」と言うと、苦笑いをしながら「青道の監督はまだ2年目らしいし、そこら辺がまだ見極めれてないんじゃないの？新チームからあまり結果出てないんだろ？ま、うちの監督も見逃してたけどな」と返してきた。

それでもなんか起用の仕方ブレがあるよなー。

と思っていたら、早速先頭の7番打者に四球を出していた。「あれされると守ってる方もたまったもんじゃねーよな」とカルロスが呟く。

ショートの人が声をかけたり、西さんが背中を優しくポンツと叩いたりしたおかげか、ようやく落ち着いたようだ。

俺ならそんな事してもらわなくても抑えられる、と思いながら戦況を見守る。ふと視界の端に動く人影に気がつく。

あそこで隠れながら、こそこそ見ているのは…江戸川シニアの御幸か？…

向こうもこちらに気づいたみたいで声をかけ、手招きするところつちへ屈みながらやってきて、軽く挨拶をして隣に座ると、静かにグラウンドに目を向けていた。

成宮も試合に目を戻すと、ちょうど8番打者がバントをし、1アウト2塁になるところであった。

そして、9番打者に入っていた南野さんに変わって、3年生の選手が打席に入った。隣の御幸がソワソワしているが、無視をする。

ここで青道としては、失点を防ぎたいからであろう、若干外野が前に出てきている。そしてファーストが前に、セカンドの西さんが少しだけ1塁方向へと寄っている。バントも警戒かと納得する。

ピンチになると、ピッチャーとしては点を取られたくないし、普通ならどこかで力むんだろなー、と考えていると、1ストライク2ボールの状況で、投げられたボールが、アウトコースに構えられたミットとは異なり、真ん中に浮いた棒球となり、打者がコンパクトなスイングで打ち返す。これが左中間へと抜けるヒットとなった。

2塁にたどり着いたバッターランナーが拳を突き上げると、それは対照的に御幸は頭を抱え込み、視界の下の方へ消えていった。

スタンドの興奮冷めやらぬなか、稲城実業の1番打者が初球をライトスタンドへぶちこんだ。

3点差、ここまで稲城実業の投手陣に、抑え込まれている青道が逆転できるであろうか。青道側スタンドが一瞬静かになるが、野球部を中心にまた声を出して、味方の先輩、同級生、後輩の応援をしていく。中には既に涙を流しているものもいる。

成宮はお前らの力が足りないから、こういうことになってるんだぞと、かなり厳しい見方をした。同じ怪物と呼ばれてても、どうも他の2人は西さんとは違うし、他が強くないと結局は勝てない。せめて絶対的なエースがいればよかったけど、その人は稲城実業に行っちゃったしなあと思う。

最後まで投げ抜く、マウンドを守りチームを勝たせるのがエース。俺が認めてるのは南野さんと、市大三高の田辺さんくらい。エースの周りにふさわしい選手が揃うのはどこかと考えると、やはり稲城実業

かこの試合を見て考える。

武藤は、ホームランを打たれてかえって正気に戻ったのか、2番、3番打者を抑えると、9回裏の青道の攻撃が始まった。

しかし、3番打者は、代わったばかりの3年生投手の球筋、球種を後ろに見せるのに精一杯で1アウト、4番打者は簡単に打ち取られて2アウトとなった。

▽

9回裏2アウトの場面、ランナーはいない、後がない、そんな場面ではあるが、5番打者の倉田さんは落ち着いているように、西からは見えた。

今マウンドにいるピッチャーが厄介なのは、球速が非常に速いから。恐らく140キロ後半は出ており、ストレーターの制球がとてもないのだ。変化球が入る時と入らない時があり、バラつきがあるものの、ストレーターが素晴らしい、この1点で江藤さん、植松さんはアウトにされていた。

ネクストのサークルで、倉田さんを応援する。ストレーターで押していくが、しつかり当ってファールにされるのに、痺れをきらしたのか、変化球を投げてボールカウントが増え、12球目に四球となり、倉田さんが叫ぶ。1塁へ到達するところを向いて何かを言う。「任せたぞ」と口の動きで判断し、右手で軽くヘルメットのつばを触って返事をする。

自信のあるストレーターを打ち砕き、こちらに流れを持つてくる。そう決意し打席に立つと、キャッチャーが自分から離れるように立ち上がる。

は？：と思考が止まったが、1球、2球と投げられると、敬遠されていることに気がついた。そのまま1塁へと向かう。

より一層激しくなった球場の周りの声に萎縮したのか、いつもの様子でない間中さんに声をかけることもできずに、打ち上げられたボールをファーストが、ファールゾーンでキャッチするのを、見ているこ

としかできなかつた。

エピローグ

8月1日、青道高校のグラウンドでは、1、2年生の野球部員達が汗を流していた。

片岡監督は、内野陣へのノックを打ちながら色々考えていく。センターにはキャプテンの2年生 藤堂、ライトには3年生がいたときからレギュラー争いに加わっていた副キャプテンの2年生 佐々木、レフトにオールラウンダーの1年生 柳。

サードは、1年生ながら長打の期待ができる、敗戦から立ち直った東、ファーストに足が遅くなっているが、それでもなお機敏な守備を見せ、打撃の上手い副キャプテンの2年生 伊藤を。

セカンドには守備範囲は狭いものの、打撃の確実性が上がってきたように思える2年生 角田、ショートは3年生がいたときから、打線の中核を担っていた1年生 西を持ってきた。

キャッチャーの2年生 蜂須賀は打てないものの、堅実な守備を誇っており、ピッチャー陣にも不満はなさそうだ。

そのピッチャーは2年生 川口、坂井、そして1年生 武藤が中心となる。各々課題がたくさんあり、まだまだエースとは呼べないが、1つずつステップアップする意志を感じさせ、雰囲気もよい。

また、前チームには1人しかいなかった副キャプテンを2人にし、責任感が強すぎる藤堂を、しっかりと補佐するための体制を整えようと画策していた。

練習をチラツと見に来た榊前監督には、このようにレギュラーが最初から固まるような年は滅多にないと言われたので、目の前の選手達を頼もしく思うとともに、少し、自身の采配が、この戦力を活かせるのか、不安に思う自分がある。

打順としては

- 1 藤堂 センター（右）
- 2 伊藤 ファースト（右）
- 3 柳 レフト（左）
- 4 西 ショート（左）

- 5 東 サード (右)
- 6 佐々木 ライト (左)
- 7 角田 セカンド (右)
- 8 蜂須賀 キャッチャー (左)
- 9 ピッチャー

として現在は考えている。夏と比べると、7、8番の打者としての格落ち感はどうしても否めない。だが、このオーダーで練習試合をこなしていき、打順の変更や、1、2年生関係なく、調子の上がつてきた者、実力を発揮できるようになってきた者を加えて、新チームをより良い形にしていくつもりだ。

そうして迎えた練習試合1試合目、川口が時折乱調するも、6回まで2失点に抑え、3年生の涙を見て、一回り成長した坂井が、残りの3回を無失点で抑えた。しかし、打線は藤堂、東、佐々木が気負いすぎて無安打に終わり、伊藤、柳、西の3人だけで点を重ねていくこととなり、5得点と、想定していたよりも、爆発力は今一つなものとなってしまうた。

その後の練習試合で、伊藤、柳、西が素晴らしい成績を残せば残すほど、他のメンバーが焦り、ミスをする。特にキャプテンの藤堂は、チームは勝っているが、自身もあまり結果は残せていない状況に、空回りし始めていると感じる。

その現状を見て、片岡はこういうときの立て直しをどうすれば良いか、それを真剣に考える日々を送っていた。

8月の甲子園での全国高校野球選手権大会が始まると、西東京代表となった、市大三高の活躍がテレビで放送される。

エースの田辺に、それを援護する打線。特に春季大会ではスタメンに名を連ねていなかった、4番打者、1年生の北川 小虎の活躍は目覚ましかった。

西東京では、打撃の派手さや爆発力で、青道という光の影に隠れてはいたが、中学時代は松方シニアの4番ショートを務め、高校デ

ビューを遅れて果たした北川は、ようやく注目を集める存在となり、甲子園という舞台で、全国へ名を轟かした。

惜しくもベスト8で甲子園を去ってしまうこととなるが、4試合で17打席14打数11安打、3本塁打12打点、3四死球と好成績を納めた。

それを見たムードメイカーの東が奮起して、復調し、他の面々もスイングが鋭くなり、迷いが消えていく。

今回は、自力でチームを立て直すことができなかつた片岡ではあつたが、他のチームの選手の活躍、雰囲気を感じることで、負けず嫌いの選手達は発奮してくれるのだと、こういうこともあるのだと、自身の経験に加えた。

また、全国の監督が行っている、1年生の起用方法を、テレビ越しではあるが、じっくりと観察し、去年は伊藤や川口、そして今年は東や武藤に負担をかけてしまったのを反省し、監督として前へ進もうとしていた。

それからは更に練習試合をチームは経験し、時は9月、秋の季節へと移り変わっていく。

高校1年の秋とそれから プロリーグ★

9月に入るとすぐにレギュラーの発表があり、背番号が発表された。

1	川口	2年生	
2	蜂須賀	2年生	
3	伊藤	2年生	
4	角田	2年生	
5	東	1年生	
6	西	1年生	
7	柳	1年生	
8	藤堂	2年生	
9	佐々木	2年生	
	ここまでがレギュラー		
10	坂井	2年生	ピッチャー
11	武藤	1年生	ピッチャー
12	小宮山	2年生	ピッチャー
13	加山	2年生	サード
14	田中	2年生	セカンド
15	神田	1年生	外野手
16	栃谷	1年生	ファースト
17	山崎	1年生	ショート
18	玉森	1年生	外野手
19	岸谷	1年生	キャッチャー
20	井手	1年生	ピッチャー

例年、この時期の1年生はまだまだ成長段階であり、去年はレギュラーに伊藤、藤堂の二人で、ベンチに入っていたのも川口、佐々木、角田くらいであったが、今年は2年生が1年生の激しい突き上げを食ら

う形となっていた。

エースこそは気まぐれに稲城実業に行ったものの、城南シニアから、神田、栃谷、玉森といった素材型の選手が入部しており、その3選手を中心として、メキメキと夏の大会中も力を付け、数多くの1年生がベンチ入りしている。

全国でも、今年の1年生は、既に主力級の選手が各地で活躍していることから、怪物世代と呼ばれている。

大阪桐生のピッチャー 兵藤

市大三高のショート 北川

白龍高校のセンター 蒲生

西邦のキャッチャー 飯岡

各々が中学3年生時にU-15に選ばれ、活躍した選手達。甲子園へ行けなかった高校のなかにも、西東京の稲城実業の南野や、青道の柳、東、西など、ほとんどの各ポジションに傑出した選手が揃っていた。



片岡は、実際にチームを組んでみると、1年生が丁度半分を占めることに驚きを隠せないが、納得もする。U-15の、それも4番と5番の2人が揃って入学する高校、その影響はかなり大きかった。西に引っ付いてきた神田、栃谷、玉森もそうだが、他にもシニアで活躍した選手が多く入ってきており、この世代が育つのを楽しみにしていた。

現2年生は一部の者達が、藤堂達に引っ張られて成長したのに対して、1年生は各々が意識を持って、シニアの延長として、2年生以上に真剣に野球をしている。既にほとんどの燻っていた2年生が、ベンチに入れない状況となっていた。

ノックをしても去年との違いを感じる。1年生にシニアで全国を経験したものが多いからか、こちらから逐一指導をしなくても、当たり前のように駆け足で動き、規律正しく練習を行う。恐らく最初は城

南シニアの子供達から始まったであろう、強豪校らしい雰囲気は既に1年生達から滲み出ていた。

6月時点では1年生は下の存在に感じていた、そんな2年生たちは既に追い込まれ、追い越されつつある。

そんなチーム状況を整理しながら、今日発表された秋季大会の組み合わせを思い出す。

同じブロックに強豪高校はいない。そのためたくさんの選手を試すことができる。

背番号は渡してあるが、本戦でのレギュラーは代わるかもしれない。暗くなった空を見上げながら1人、煙草を吸うのであった。

2年生と副部長の決意

ブロック予選で様々な打順、選手を試した青道では、キャプテンの藤堂が、ある発表を部員の前でしようとしていた。

「俺達はこのブロックになる。全64校でのトーナメントになるが、1回戦では朋大中橋と当たることになる。そして順当であれば、おそらく4回戦で国士館、準決勝では市大三高、決勝では帝東か稲城実業と当たると思われる。当たるであろう有力校はこれくらいか。」

全員が稲城実業のところで少し反応するが、藤堂は無視して話し続ける。

「3回戦までは比較的楽な試合になるだろうが、油断はするなよ。気持ちを切らずに！1戦1戦大事にして勝ち進んでいくぞ！」

「「「おー！」」」

みんなの反応を確認してミーティングを終える。

そして、藤堂は2年生のベンチ入りしたメンバーに声をかけて、自主練習場へ集まった。

「なあ、お前ら、去年と違って下級生にレギュラーの席を、それも最初から半分も取られている。俺達の学年はもしかしたら東や西、柳からしたら頼りない学年かもしれねえ。」

と言うとみんなは無言でうつむく。

「だが！甲子園の土を踏んでるのは俺達だ！あいつらはまだ踏み入れたことすらねえ！あの空気を、緊張感を知っているのは俺達だ！あの特別な時間を、あいつらにも味わせてやりてえんだ。」

そう言う全員を無理矢理こちらに向かせる。

「俺達は頼りねえかもしれないが、あいつらの先輩だ。俺達を甲子園に連れてってくれた先輩達のように、俺達もあいつらを甲子園に連れていってやろうぜ！」

と激励した。

それからそのメンバーで自主練習をしていく。

榊前監督が抜けて、1つ上の学年で頼りになる先輩が少ないから、俺達がちゃんとした学年としてやってやるんだ、そう思ってたのに、

下からこんなやべー奴らがくるんだもんな。うかうかしてると、俺や佐々木のレギュラーも危ういかもしれないと、危機感を感じていた。



去年、東、柳、武藤、そして西を青道に引つ張ってきた、有能スカウトである高島副部長は、シニアの夏の大会を見て、色々選手と交渉していたが、いい選手はほとんど他のチームへ取られてしまった。それもそうだろう、去年は青道がU-15の4番と5番を引っこ抜いていったのだ。他のチームのスカウトも警戒する。

なんとか最初から乗り気であった、丸亀シニアの滝川くんや、市大三高への入学がほぼ決まっている真中くんの、控えではあるが才能を感じさせる丹波くんの計二人の入学は決まっている。

だが他には全然成果を得られないでいた。昨年と違い今年は、有力選手にウケが悪い。

若い片岡監督の手腕を、疑問視する声が大きいのだ。怪物世代のU-15代表の中核を担っていた打者を、2人も獲得していながら甲子園を逃す。これがとても大きかった。

ちなみに稲城実業は決勝戦で市大三高と戦って破れたため、その余波は食らっていない。

甲子園で注目を浴びた市大三高の北川くん、大阪桐生の兵藤くん、白龍高校の蒲生くん、そして、西邦の飯岡くん、その4人が注目している同学年の選手として挙げた、東西の二人、このネームバリューに青道は、内側から思っている以上に押し潰されそうになっていた。

最近、校長や教頭が妙な動きをしているが、それもどう転ぶかわからない。でも自分にできることはチーム補強のためのスカウトのみと、今日も、全国を駆け回るのであった。

勝ち残ったのは

青道は順当に秋季大会本戦を勝ち進んでいった。そして、4回戦には、藤堂の予想通り、国士館と当たることとなった。

後攻の青道のオーダーが発表される。

- 1 伊藤 ファースト (右)
- 2 玉森 ライト (右)
- 3 柳 レフト (左)
- 4 西 ショート (左)
- 5 東 サード (右)
- 6 藤堂 センター (右)
- 7 角田 セカンド (右)
- 8 蜂須賀 キャッチャー (左)
- 9 坂井 ピッチャー

この国士館戦で、発表されるオーダーが、現在の青道のベストメンバーとなるだろうと、言われていたため、打線の2番から5番を、1年生が占めているという事に、他チームの偵察班は動揺を隠せなかった。



西はショートの定位置につくと、内野陣を引き締めるために声をかけていく。応えてくれる声を聞きつつ、坂井さんに声をかける。

「いつも通り、1つ1つアウトにしていきましょう。打者が違うだけでやることは変わりません。」

坂井さんが控えめに頷くのを見て、グローブを一叩きして、声を出す。内野陣全体のテンションを上げていく。

坂井さんが投じた初球のストレートを打たれ、2塁ベースへと向かっていくゴロとなるが、しっかりと回り込んで、丁寧に1アウトをとった。

坂井さんの表情が、先程よりも比較的リラックスしたものとなる。

だが、まだ足りない。2番打者が5球目となるスローカーブを3塁方向へ流したボールを、東がしつかりと抑え2アウト。そして、3番打者を坂井さんは三球三振に仕留めた。坂井さんの表情を見ると、気分が乗ってきているのがわかった。

1回裏の先頭打者、伊藤さんは粘って四球を選ぶと、続く玉森が右打ちをして、1、3塁とチャンスを拡げる。ピンチに焦ったピッチャーから投げられた、初球、僅かに甘く入ったストレートを柳はレフトスタンドへ放り込んだ。

自分の打席が回つてくると、未だノーアウト、そして後ろに東が続くため、プレッシャーをかけるために、6球粘った後に、わざとホームランを打たずに、右中間の深いところへ打ち返して3塁打に。東がきつちりと犠牲フライを打って4点目。

続く藤堂さんがセンター前のヒットを打ち、ランナーとしてプレッシャーをかけるが、後続が続かなかった。

これが今の青道野球、攻め続け、相手に息をつかせることなく、押し潰していく。打の青道たる、強い野球であった。

1番には出塁率の高い伊藤さん

2番には佐々木さんとのレギュラー争いに勝った玉森

3番には出塁、盗塁、長打となんでもできる柳

4番には状況によって最善の選択肢を取れるようになった西

5番には長打が魅力で打撃技術向上中の東

6番には総合力の高い藤堂さん

これが現在の上位の布陣である。7、8番を打つ選手：これが現在の青道打線の課題となっていた。

今日の試合はそのまま坂井さんが5回完封し、打線は14点をとってコールド勝ちを記録した。

ボーイの練習

圧倒的な得点力で、準決勝まで勝ち上がってきた青道に対して、反抗心を持った男が、打撃練習に勤しんでいた。

市大三高 4番 1年生 北川小虎

夏の甲子園大会の時よりも逞しくなった腕を、鞭のようにしならせ、身体全体の力でボールをスタンドへと運んでいく。バッティングピッチャーに志願したベンチ外の選手を、ボロボロにしていた。

俺達が打ち勝つと、既に試合が始まっていると言わんばかりのオーラを持って、ガンガン振って柵越えを量産する姿に、周りの選手は頼もしく思うと同時に、畏怖すら感じていた。

常にフルスイングで、ボールに食らいつき、チームがどんな状況でも、ヒットやホームランを放つプロ注目の打者へと成長していた。

しかし、北川の心の内はカッコいいものではない。

北川は元々サツカー少年である。運動神経抜群で、他の追随を許さないストライカーであった。しかし、それに待ったをかけたのが父親であった。野球ボールとグローブ、バットを買い与えられて、無理矢理松方リトルに入れられた。

小学生6年生になると、やる気はなくとも、才能だけで4番ショートを任され、俺様天狗状態となっていた。その状態で、城南リトルとの試合になった。

圧倒的な指揮力でチームを束ね、力で全体を鼓舞し、相手をねじ伏せる存在。城南リトルの全く同じポジション、打順の同学年に手も足も出ずに打ちのめされた。

そこから、負けてなるものかと、初めて本気で練習し、野球の勉強を始めた。手も足も出なかった初めての存在である西に憧れ、小学6年生の時に見たスタイルを真似た。

ショートの君臨する、グラウンドの王様としての佇まいと、相手ピッチャーの心を折る圧倒的なバッティングを。

中学3年生のU-15で、初めて一緒になった時は、ついはいはしゃいでしまう。周りからは実力からセカンドにコンバートされたと言わ

れていたが、実際は、隣で西のプレーを見たくて、自分からセカンドをやると、怒鳴り込みながら代表監督に申し出て、ドン引きされながらも、セカンドでコンビを組むことができ満足していた。力で押さえつける感じではなく、全体を優しく包み込むようなスタイルに西は変わっていたが、プレーを見ると、そこまで本質的なものは変わっておらず、相手のピッチャーの心を折る姿を、ランナーとして見て内心喜びまくっていた。

その自分の中でのヒーローが、チーム事情かは知らないが、シヨートとは違うポジションを守る。それが許せなかった。城南シニアの監督を今でも許していないし、青道の監督も許せない。

シヨートに戻っているから、まだ蹴飛ばさないでやるが、たかが2年上でそこそこ使えるか程度のやつが、西からシヨートを奪っていたのにイライラしていた。その結果がああ夏の甲子園大会。

フラストレーションをすべて野球にぶつけ、甲子園で相手のピッチャーの心を折りまくった。

そして、今回は待望の西との再戦に、天にも登るような気持ちでウキウキしている。顔はピッチャーを睨み、オーラはヤクザ、心の中はウキウキしているという、もはやよく分からない存在となっていた。

そんな北川の内心を、まったく知らないまま、市大三高の田原監督は

「夏にエースだった田辺ボーイとはまた違ったジーニアス！北川ボーイを中心に得点をメニー！メニー！取る！アタックはこれで、来年にはエース候補真中がくるから、デイフェンスも強くなる！チームメイキングがこれから楽しみだ！」

と1人叫んでいた。

怪物同士の戯れ

秋季大会の準決勝、試合が終わると、観戦していた記者の峰は「この試合は：ヤバかった：」と、スタンドで語彙力を失っていた。

前評判で、「青道、市大三高の投手陣は共に安定している、その投手陣をお互いに、打線がどう攻略していくかが鍵だ！」そう書いていた自社の若手を殴り倒したい気分であった。



城南シニア出身の青道の外野手、玉森は影が薄い。入部の挨拶の時に順番を飛ばされ、仕方ないので堂々と最後尾に移動し、自己紹介の挨拶をしても、何も疑問に思われにくい影が薄い。

背番号を片岡監督にもらえたのは嬉しかったけど、それと共に監督に認知されてたんだ、という驚きの方が強かった。

影が薄いから、アピールが足りないからスタメンじゃないのだろうなど、毎日落ち込みながら素振りをしていたが、試合となれば別だ。打席には1人しか立たない。ブロック予選でチャンスを手掴んで、ようやく監督の評価が佐々木さんを追い越した。

同学年、1年生で集まって自主練習をしている。いずれはスタメン全員が同学年になるくらいに、学年を引っ張ってやると、1年生のベンチ入りした戦力の底上げを、自主的に行っていた。でもまずは自分が、城南シニアで5番を打っていた自分が、活躍してやるんだと、市大三高戦に臨む。

先攻であるうちのチームの先頭打者、伊藤さんがヒットで出塁した。ケースとしては1番が作ったチャンスを拡げる役割を担う2番打者。しっかりと集中し、1度自分の鼻を擦って、自分に暗示をする。

これはシニアで絶対的な強打者であった西を見て、自分なりに編み出したルーティーン。リトル、シニアと一緒にやってきた西のスタイ

ルを模倣し、今何をすべきかを明確にして迷いを消す。馬鹿かと思われるかもしれないが、俺はこれで結果を出してきた。

だが、求める結果は同じでも、スイングは自分のもの、努力をした結果、作り上げられてきたものだ。

少し粘って球数を使わせた後に8球目のストレートをセンター前に弾き返した。

1塁で「やつぱ毎回は西のように上手くいかねえな」と苦笑いし、右中間に飛ばす筈だったスイングを思いだしながら、次の打者柳を見守る。

7球目のボール球を見逃して四球をもぎとり、ノーアウト満塁へ。
バッターは西

「いったれ！相手の4番に見せつけてやれ！」と2塁から叫ぶ。

西がニヤツと笑った気がしたが気のせいだったろうか？ピッチャーから投げられたボールが金色の煌めきにかけ消されると、球場の音が全てなくなり、一拍おいてスタンドから歓声が上がった。
ベンチで

「狙ったのか？」と西に聞くと、

「お前がやれと言ったからな」と返してくる。

本当・すげえやつと野球してるんだなと思いつながらハイタッチをした。



（うひよおおお！西はやっぱこれだよなあああ！）と北川は内心、狂喜乱舞しながら、オーラを出してピッチャーを睨み付ける。

「まだ初回だ！足を動かして次に備えるぞ！先輩なのに動揺したところを見せるな！しつかりしろ！」と周りに声をかけて締め上げる。

田辺さんの世代におんぶに抱っこだった2年生を、ゴリゴリにシバきあげ、1年生を積極的に自主練習に誘い、ついてくるやつだけを真剣に鍛え、相談に乗って切磋琢磨していく。

これにより北川は市大三高野球部では部員から、特に先輩から恐れ

られている。だが理不尽なことと言わないし、まともな事を言っているため、後輩でありながら尊敬もされていた。

スタメンが北川を除けば全員3年生であったから、一気に市大三高が弱くなるかもしれない、そんな周囲の声を吹き飛ばした北川は、既にキャプテン、いや、グラウンドの王様の風格を持っていた。内心はアレなのだが。

5番東の初球狙いの強い打球を、その場で高くジャンプし捕球する。着地して、審判に見せつけるようにグローブを向け、アウトの判定をもらう。「1つずつ積み重ねていくぞ！そっちにもボールいくかな！気合い入れろ！」と先輩後輩関係なく鼓舞していく。

これ以上やれるもんならやってみる。そう言わんばかりの鋭い眼光で、打席に入る青道キャプテン藤堂を観察していく。

咆哮の嵐

藤堂が右打席に立つと、強烈な視線を感じて、思わずそちらを見てしまう。そこには威圧するように、こちらを見てくる北川がいた。

西は無表情ではあるが、シヨートで、内野陣全体を優しく見守る、まるで、縁側でお茶を飲むお爺ちゃんのような、安心感を与えてくれる。それに対して北川は、闘志を剥き出しにし、チーム全体に力を見せつけて、尻をたたいて結果を出さなければならぬと思わせる、魔王のようなシヨートである、そんな印象がある。

先程、西がホームランを打ったときに凝視してたし、絶対ライバル視してて、相性悪いよなあと思う。東にはそんなことはなかったとは言われるが、あまり信じられない。いや、意外とヤンチャ魔王と歴戦の老執事系幹部で、上手くやれたりするのか？と東の持つている少女マンガを思い出し、妄想が暴走しようというところで、主審のストライクのコールで現実に戻る。

そしてそのまま三振してしまった。

威圧に気を取られたが、後の妄想部分は要らなかったなと思いつつ「しっかり集中して、1球1球大切にしていけー」と周りに言うのと、さすがに片岡監督にはバレていたのか、じとつとした視線を向けられて、冷や汗をかいた。キャプテンじゃなかったら代えられてたなど反省をする。

角田が強い打球を放つが、セカンドライナーとなり攻守交代する。

センターの守備位置からは、よく全体が見える。レフトの柳はサイドステップをして身体を温めているし、ライトの玉森は：どこだ？：あー、定位置にいた。定位置で普通にその場で軽くジャンプしている。

内野陣は、伊藤と西、角田と東のペアでキャッチボール、川口と蜂須賀は投球前練習をしている。

普段通りの光景だが、相手は市大三高。気を引き締めるよと、全体に声をかけると、1回裏の市大三高の攻撃が始まった。

1番打者が右打席に入る。確か、打撃はそこまででもないが、粘ってくるやつだったか。初球、川口はインコース高めめに、クロスファイヤーとなるストレートを投げ1ストライク。仰け反った打者を見て、アウトコース低めにストレートを投げ2ストライク。そして、焦った打者はアウトコースやや低めから、外へと逃げていくシンカーを振って三球三振となった。

今日は腕が振りきれてる、当たりの日かと安心する。まだ左肘を庇うように、腕を振りきれないことがある。それが、川口の一番の課題となっていた。

2番、3番を続けて内野ゴロに打ち取り、ベンチに戻るが、相手の北川がしきりに、市大三高メンバーに声をかけ、いや、叫び散らして、西とは違う方法でチームのテンションを上げていく。

確実にこちらが勝っているのに、相手の気持ちに北川の存在により、落ち込んでいられない。むしろ蹴り上げられていっているようにすら思える。蜂須賀、川口はゴロに仕留められ、2巡目の伊藤の会心の当たりを、またもや北川に止められて、アウトになる。

2回裏の先頭打者の北川が、初球、アウトコースから逃げるシンカーを微動だにせず、見逃して1ボール。そして、川口の気持ちのこもった、低めのクロスファイヤーを、こちらにまで風がきそうなフルスイングで叩き潰し、レフスタンドまで一直線に運んでいった。

これはまずいな…、と藤堂は思う。

クロスファイヤーは、今の川口が頼りにしている武器のうちの1つ。これを完璧に打たれると、崩れるかもしれないと不安になる。

そしてそれは的中し、この後更に3連打され、北川のソロホームランを加えると、計3失点して、1点差となった。

ここから血で血を洗うような、点の取り合いが始まり、お互いが投手陣を建て直せないまま、それが7回まで続いた。

今の青道と次の相手

片岡監督は今日の試合を振り返って、監督室で頭を抱える。

今日の市大三高の試合は、打の青道として、各打者が全員ヒットを打つという、名に恥じぬ働きをしてくれた。しかし、打の青道と言っても、決してそれは投手崩壊を許していいものではない。

かつて、自分がエースであった時代もあるし、試合を作ることできた先輩、同級生、後輩、教え子もちゃんという。

だが、市大三高との試合は、21―14で青道の7回コールド勝ち。バスケットボールの第一クォーター終了時点の点数とどっちかか聞かれれば、みんながバスケットボールと答える。そのような得失点であった。

先発の川口が3回7失点、2番手の小宮山が2回5失点、3番手の武藤が2回2失点。武藤は北川のツーランホームランのみであったから及第点としても、2年生の投手陣がこれだと、強敵と連戦する時にとっても辛いこととなる。今回は得点力で勝ったが、次も大量得点できる保証はないのだ。

明日の先発は坂井、2番手には武藤を出すとして、その後が続かないことにタバコを、もう一本取り出して、口に啜えて火をつける。

落ち着くために、野手陣のことを考える。

打線は非常に噛み合い、クリーンナップの柳、西、東全員ホームランを放つ大活躍をしてくれて、とても頼もしいと感じた。

また、よく分析をしてみれば、伊藤を除いた2年生の成績が、あまり好ましくないものであることがわかる。

特にキャプテンである藤堂は、チームが軌道に乗ってきた油断か、どこか集中できていないように思える。

上の学年がいなくなり、1番奮起をしていたが、いざチームが順調であれば、気が抜けてしまうのはわかる。それを監督としてどう導いてやればいいのか、色々考える必要がある。

1年生はクリーンナップの3人もそうだが、玉森がさりげなく4安打2打点と活躍していた。試合をしているときは活躍している感じ

は、あまりしないのだが、結果を見ると輝いている不思議なやつだ。他のベンチ入りしている1年生も頑張っているようだし、余裕があれば使いたいのだが、投手陣があればなとまた頭を抱える。

冷静になった。

よし、と気合いを入れて、次の相手のことを考える。

帝東

通称神のノックを打つ岡本監督が率いる、鉄壁の守備を誇る東東京の強豪校

今回は都立の王谷、稲城実業、修北、成孔を破ってきた、勢いのあるチームだ。

偵察班が伝えてくれた情報も、気になるところが多い。

打者には突出した選手はいないが、全員が粘り、相手を消耗させて攻略していくことを目指す、そういう野球をしていた。

ピッチャーもプロ注目するほどの選手はいない。しかしエースの伊賀は勝負どころを、しっかりと把握したピッチングをしてくる。

準決勝では、稲城実業に対して、打線は先発の南野から粘りに粘り、連投の疲れもあっただろうが、7回無失点でマウンドから引きずりおとし、そこから3点を奪った。守っては、伊賀が完投して、2失点で勝利している。

稲城実業の4番天海に対して、基本的にはアウトコースのみの組み立てで、徹底的にインコースを避けた。後半になると、インコースがこないとわかった天海が踏み込むようになるが、低めに外れる、攻めた四球で、正面からは勝負をしなかった。

稲城実業の新チームは打者としては天海、南野が突出しており、その二人に対してだけ、本気で投げているようなピッチングであった。それでも南野がツーランホームランを放ったのではあるが。

決勝戦は打撃の優れたうちのチームと、守備力の優れた帝東の戦い。どちらが勝つのか、誰にも予想ができないでいた。

忍者の一打

いくら偵察班からもらったビデオを見直しても、抑えられる気がしない。伊賀は頭をかきながら、市大三高から7回で21得点14失点した青道打線、投手陣を分析していく。

1番から5番まで、正直相手にしたくない打者が並び、6番は強豪らしい打者だが、集中しきれてないから、まだつけこむ隙はありそうだ。7、8、9番は安牌か、油断しなければ、確実にアウトをとれるだろうと感ずる。

また、相手先発として考えられるのは、右投げの坂井。130キロ後半の直球、シュート中心の組み立てで、時折カーブを混ぜてくる。要所でチェンジアップを投げて、緩急で相手の体勢を崩す。

国士館は手放して強い、と言い切れるチームではないが、恐らく、青道の打線の破壊力に浮き足だったのであろう。冷静であった打者はキャプテンくらいで、ヒットもそのキャプテンのみ。

じっくり見ていくと、チェンジアップが時折浮いて、甘いコースにいつている。カーブもゾーンには入るが、ストレート、シュートより精度は低そうだ。

チームミーティングで、各自考えたことを共有し、岡本監督がそれをまとめて、チームでの青道攻略方針を固めていく。そして試合当日となった。

試合前のじゃんけんで負け、帝東は後攻となり、伊賀は天を仰いだ。

1回表

青道の先頭打者、伊藤が右打席に入ってくる。去年の秋の怪我から這い上がってきただけに、変な揺さぶりは通用しそうにない。球数を稼いでくる打者だとわかっているため、力を抜いたストレート2つを、アウトコース低め、インコース高めに投げ、あっさり2ストライクをとる。

(涼しい顔して見逃してきやがる)

真ん中低めから、右打者のインコースへ滑り落ちるような、ツーシームで引っかけさせようとするが、見極められ2ストライク1ボールに。全国でもそうはいないであろう、いきなりの好打者に苦笑いする。

アウトコースの中段から、低めに落ちるようなフォークを投げるが、軽々カッツされる。

(稲城実業の打者はこれでアウトを量産できたんだがな)

力を抜いて投げるのをやめ、全力で抑えることにする。インコースの低めにツーシームを投げると、伊藤はその球を弾き返すが、ファーストライナーとなった。

(キレも球速も違うのにあんなに合わせる事ができるのかよ)と冷や汗が流れてきた。



玉森は右打席に入ると、直前に伊藤さんから「2段階のギアを使い分けてる。最初は緩めにくるかもしれないから、そこを思い切り打つてもいいかもね」と言われたのを思い出す。

ケースは1アウトランナーなし、好球必打。いつもならそれで終わるのだが、伊藤さんにアドバイスされた通り、甘いと思ったら思い切り振るというのを加える。鼻を擦って自分を落ち着かせ、バットを構える。

初球、インコース低めにきたコントロール重視のストレートを、自身のフルスイングで引つ張った。1塁へ一生懸命走り、その途中で、状況を確認しようとして、顔を上げると、1塁ベースに足をかけたところ、球場から歓声上がる。

何事かと周りを見てみると、審判の人が右手を上挙げて回していた。

ベンチに戻ると

「公式戦初ホームランおめでとう。中学で西の後を任されていたのも納得できるよ。だいぶ打席で落ち着けていたな」と伊藤さんから誉めてもらった。

ルーティーンをして、落ち着いてはいたが、フルスイングできたのは伊藤さんのおかげだと伝えると、掌を向けられる。何だ？と思っ

ていると「前の試合、西とハイタッチしていただろ？自分の時もしないとな」と言われ、笑顔でハイタッチをした。

そこから、相手ピッチャーの伊賀さんは、全力で投げるようになった。

柳は、7球目のインコースに入ってくるスライダーを、引つけてショートゴロに、西はまともに勝負されずに四球、東は情報になかったチェンジアップを投げられ、緩急に惑わされ、サードへゴロを打ってしまい、3アウトとなった。

早すぎる分岐点

1 回表を投げ終えた伊賀は、ベンチで頭をかく。

1 番打者の伊藤を打ち取って安心してしまい、それがわずかに甘くなったストレートとして出てしまった。コントロール良く投げられた球と思われるかもだが、あれは失投だ。1 年生の夏から特集された選手の雰囲気は、やっぱり違うなと思う。

あの 2 番打者、玉森が、思い切りのいいバッティングを、ランナーがいるときにしているのは、ビデオで確認はしていた。しかし、ランナーなしでは、出塁を 1 番重要視した、粘るバッティングを予想してただけに、ダメージはでかかった。割りきって、後続をしつかり抑えたのは我ながらよかったが。

実際に青道打線を相手にしてみると、GW に練習試合で対戦した夏の甲子園優勝校、西邦の打線よりも厄介に感じる。西邦の 1 年生キヤツチャー、飯岡もしぶとい強打者だったが、伊藤にはそれに近いものを感じる。玉森は掴み所がなく、これも厄介。柳はパワー以外の全てが超高校級、東はあの長打力に、更に技術がついてきたら、手をつけられなくなりそうだ。

ただ、この中でも、やはり西は別格で、わざと初球に外したストレートを、どのように打って、次の展開をどうしようか、試合の流れを選んでいような、鼻から勝負にならない印象を受けた。だから、今日の試合はあいつには全部四球。警戒して損はないだろうと思う。確実に勝つために、選んでいくのは打者の西だけじゃない、投手の俺もだ。そう簡単に流れは渡さないと、1 番打者が四球を選んだのにニヤツとした。

2 番打者が打席に入ったので、3 番打者の俺がネクストのサークルに入る。相手のピッチャーはビデオの通り、ランナーをととも気にしている。ランナーありの場面では、ほとんどがストレート、シュートでカーブ、チェンジアップは見せ球程度であった。だから、ストレートとシュートに絞ってバットを振り抜く。

ノーアウト 1、2 塁になり右打席に立って、ピッチャーの坂井を観

察する。ピンチになると顔付きが変わった？ 今大会でピンチの場面はなかったが、これはどうしたものか。マウンドでこちらを睨み付け、オーラを出してくる坂井に動揺する。

初球、アウトコース低めのストレートで1ストライク。球のキレが上がっている気がした。もしかしたらこいつヤバいと思うが、インコースから向かってくるシュートが、外れて1-1の平行カウントに。

一度打席を外して、一息つく。前情報でピンチに弱かったんじゃねえのかよと、内心毒づきながら、再びバットを構える。インコースの高いストレートを思わず振りにいってしまい、2ストライク1ボール。2球粘るが、インコースのボールとなるカーブを打たされ、セカンドにゴロとなり、4-6-3のダブルプレーをとられてしまった。(相手のピッチャーをしつかり観察して、畳み込むためにあえて3番打者にしてもらったのに、自分でチャンス潰すとはな)

悔しい気持ちを隠しながら、4番打者に、「インコースにストライクが入っていない。内を捨てて、しつかりと外に踏み込めばいけるかもしれない」と伝える。

続く4番打者は、伊賀の指示通り、3球目の外のストレートを踏み込んで右中間を切り裂く、強烈な同点となるタイムリーツーベースヒットを放った。

5番打者も迷いなく外のストレートを弾き返すが、当たりがよすぎでシングルヒットとなり、2アウト1、3塁となった。



青道のキャッチャーである蜂須賀は、監督を見て、タイムをとり、内野陣で集まる。坂井はピンチでも強い気持ちで、投げることができるようになったが、ピンチで、インコースにミットを構えると、余計な力が入って、ボール球になる。これが今の課題となっていた。上手くリードできていると思っただが、4番打者が、アウトコースに迷いなく踏み込んできたことから、3番に今日だけ入っている相手のエース、

伊賀に見抜かれたと感じていた。打線が安定して点を取ってくれるだろうと、あえてリードを変えなかったが、5番も同じように踏み込んできたため、確信した。

蜂須賀は打撃は杜撰であるが、守備に関しては、甲子園に行った先輩や、1学年上の中山さん、横田さんに育てられ、今では投手陣全体を任される、全国レベルのキャッチャーに育っている。

同学年に1人しかいないキャッチャーとして、投手陣や、後輩キャッチャーの育成を1人で引き受けており、打撃に回せる時間がほとんどないことから、激務なのがうかがえる。最近1年生の岸谷が成長著しく、高校野球に通用するか、くらいまではきたが、それでもまだ、自分自身を鍛えるべき時期だとして、すべてを1人でこなしていた。

坂井に対して、ストレートとシフト主体の組み立てを、これから変えること、正直にインコースがストライクに入らないのが、ばれていることを伝える。外中心で組み立てることもできるが、相手は甲子園常連と言われる帝東、何点かは覚悟しておいた方がいい。

「あえて、ここで：だな：インコースを投げる事ができるようになったら、坂井、お前が俺達のエースになるな」と左肩を軽く叩いて、ホームに戻る。

(チャンスが怖がつて腕が縮こまっていた坂井、そんな自分が嫌で、負けたくなくて夏から頑張ってたんだろうが！)

この程度乗り越えてくれると信じて、目付きが変わった坂井に対して、右打席にたつ、6番打者のインコースにミットを構えた。

戦巧者

タイムが終わり、西はショートの定位置に戻る。リードを変える話をしていたので、口を挟まなかったが、坂井さんはインコースに投げられるのか、守っていて不安があった。

前回の14失点を見ていると、蜂須賀さんの苦労が悲しくなってくる。武藤は大丈夫であったが、北川にホームランを打たれた後の川口さん、小宮山さんはひどいものであった。

川口さんは腕が振りきれず、球威が落ち、コントロールも落ち着かずに四球からズルズル点を取られる。小宮山さんは、ストレートか変化球かが、腕の振りの違いから分かってしまうので、弱点である、素直なストレートを狙い打ちされるのを避けるために、変化球のみでの勝負となる。

リード面で、しっかりとした持論があり、中山さんや私も認めるものであったが、頼れるキャッチャーが蜂須賀さんのみであるためか、すぐく大変そうで、こちらも心配になる。伊藤さん、角田さん以外の2年生レギュラー、ピッチャー陣が不安定なため、チームは勝っているが、どこかスツキリとしない。蜂須賀さんは単純に、役割が多過ぎるの過労である。

これ以上2年生に負担はかけれないと、声を出し、東に目を向けると、呼応して、大きい声を出してくれる。東のグラウンド全体に響くような大きな声は、心に響いてくるものがある。私自身の中では、自分達の代では、キャプテンは東だと思っている。それを私ともう一人、努力で1軍に後から上がってきた人で支えてやればいいだろうと思っている。

だが、それは将来のこと。今を勝たねば未来はない。坂井さんがインコースの低めにストレートを決めて1ストライク。小さくガッツポーズを蜂須賀さんがしているのを見逃さない。

更にストレートをインコース高めに投げきり2ストライク。ノックしてきた坂井さんに対して、蜂須賀さんはアウトコースにミットを構える。

すると、坂井さんは微かに笑って、アウトコースに自己最速となる141キロのストレートを投げ、空振り三振をとった。



(うわー、開き直った？なんか主人公みたいなおるわ)

坂井がアウトコースのストレートで、三振をとるのを見て、伊賀は厄介なことになったなーと思う。せめて3点くらいは取りたかったが、他にも弱点はあるから、じっくり攻めていくことにする。

2回表のマウンドに登ると、6番にヒットを打たせて、7番にわざと四球を出す。次打者の8番、蜂須賀がこちらをじっくりと観察するように見ている。打てないのは知ってるんだよと、強気に攻めて三球三振を奪う。続く坂井からも三振を奪って2アウト1、2塁、1番の伊藤と対峙する。

伊藤には厳しめに外れるところを投げて、さっさと四球で次の打者に移る。ボール球には手を出してこないから、打ち取ろうとしなければ楽だ。悔しそうなふりをするのを忘れない。キャッチャーに合図を出して、こちらに声をかけてもらう。そして、先程ホームランを打って、その感触が残っているのか、若干大振りになってしまっている2番の玉森を、ギアを上げて三球三振に仕留めた。

このペース配分だと恐らく自分は7回まで。抜けるとこは抜いて、強力打線の攻撃をいなしていくのは大変だ。

2回裏はこちらは三者凡退。リードを変えられたからか、対応するまで時間がかかりそうだ。だが次は1番からの好打順、点は取ってくれるだろうと思う。

3回表のマウンドに上がると、打者は3番柳。こいつには打たせるわけにはいかないので、チェンジアップも使って、全力で抑えに行く。8球目のツーシームを引っかけてさせて、セカンドゴロに仕留める。しっかりと深呼吸をして、西が左打席に入るのを見る。無表情ながら全体を見通すような眼。やはり真っ向勝負は避けると、インコースよりも更に内を通るストレートで、攻めている印象をつける。2球目の

アウトコース低めに、少し外れるフォークを、西が無理矢理掬い上げ、左中間へと運ぶ。

(はあ？嘘だろおい)

ツーベースでなんとか外野陣が抑えてくれるが、冷や汗が止まらない。

(これはもう攻めた感じを出すとか言ってられないな。おとなしく敬遠しよう)

チャンスになるとより怖い東を、簡単に四球で次の打者へ移り、藤堂を引っかけさせて6―4―3のダブルプレーで、なんとか凌ぎきる。

(点は取らせなければ、ランナーなんていくらでも出ていい。最後までえしっかりしてれば、青道打線も抑えることができる)

そう伊賀は確信した。

剥がれ落ちるメツキ、真なる鉄へ

サードの守備につく東は、あまり流れが良くないのを感じていた。青道の攻撃は、伊藤さん、西、藤堂さんの3人が、起点となって始まることが多い。帝東のピッチャー、伊賀さんは、その起点をキレイに潰しにかかっている。元々藤堂さんの調子が、ここ2戦崩れているものもあるが、伊藤さんや西が思うようなバッティングを、させてもらっていないことが大きい。

西が言うには、このまま相手に自滅してもらおう、ということだが、わしには全く分らん。とりあえず、守備で点数をできるだけ離されないように、今は集中すればいいとのことなので、大人しく守る。あ、声をかけろやったな。

「坂井さん！前の回のピッチング！よかったです！どんどんいきましょー！」

前向きに、ガンガン攻めていく。これはいつも通りやると、坂井さんに声をかける。

すっかり坂井さんが三者凡退に抑えると、相手の3番打つとる伊賀さんが、ぶつぶつ言いながらベンチに戻る。

なんか近寄り難そうな雰囲気しよるなー、と若干苦手な印象を受ける。

うちの4回表の攻撃は先頭打者の角田さんが、鬼の形相で10球も粘って出塁するも、蜂須賀さん、坂井さんと2アウトになる。

西が「ここで相手のピッチャーは四球とりにくるな」と言うと、伊藤さんは本当に四球で塁に出る。

「玉森！ホームランを忘れて、いつも通り鋭さを意識しろー」と西が声をかけると、玉森よりも、ピッチャーの伊賀さんの方が嫌な顔しとる。「2アウト1，2塁で次の打者は柳。ここでは四球は使えない。今の言葉で、玉森は前とは違って大振りにならない。まあ、そもそも同じ間違いをすることは思えないが。あのピッチャーはどうするかな」と西は伊賀さんを鋭く睨み付けている。

さすがに戦略に鈍いわしでも、わざと四球出して、打ちそうな打者

とは、勝負を避けとつたのはわかった。

ネクストのサークルにいる柳を見ると、笑顔ではあるが、ハイライトの消えた目で伊賀さんを見ていたので、怖くてスツと視界から外した。

伊賀さんや：たぶん色々考えて変なことやつとるけど：怪物怒らしてんで。柳と西の表情は違えど、睨まれる伊賀さんに心のなかで合掌する。

恐らく玉森に対して、わざとではなく、本当に四球を与えてしまい、相手の監督が、伊賀さんを冷静に見つめながらタイムをとる。よく見れば伊賀さんの汗の量が尋常ではない。打席のすぐ外では柳が既に、伊賀さんを静かに睨んで待っている。

左打席だから3塁側の相手ベンチには背を向けた形。柳の表情など見えはしないだろう。伊賀は柳に対しても四球を与えて、青道は押し出しで勝ち越し。西に対してはまさかの敬遠で押し出しの追加点。

エースつてのは大変そうやな、と思いながら、ここまで消耗しても自分を貫く伊賀に、やり方は気に入くないが、敬意を込めて、初球の、最初よりキレのなくなったストレートを、レフトスタンドへと放り込んだ。

(そりゃ、既に100球以上、うちの打線のプレッシャー浴びながら投げとるんや。疲れとるわな。)

ベースを1つずつ丁寧に踏みながら、今後対戦する時には柳と西が本気で崩しに行くんやろなど、伊賀さんに同情した。

青道 vs 帝東 11-5

青道の選抜出場確定



片岡監督は選抜出場を決めて、バスで青道へ到着すると、3年生に迎えられ、普段は見せない笑顔で応えた。

一通り東京都の秋季大会優勝を祝った後、選手たちが自主練習で、素振りをするのを横目に、監督室へと入り、電気をつける。そして、なんとか勝てたことにほっとしながら、椅子に座り、今日の試合について、記録を見ながら考えていく。

今回のように実力がありながらも、相手を想像して、勝負を避けて、安全だと思ふ打者を、選んでしまう投手がいる。そういう人間がいることは分かっているが、投手としては致命的な欠陥のように思える。一見クレバーで、良い投手に見えるが、東にホームランを打たれたように、大事なところでの勝負根性に欠けていた。

投手は勝負したい、勝ちたい、抑えたい、そういう強い気持ちがある。投手は勝つていたい。この気持ちを持ってない限りは、背番号は1でもエース足り得ない。

ピッチャーの伊賀が、柳、西に四球を出していた間も、その後も、しきりに帝東ベンチの岡本監督を見ていたにも関わらず、岡本監督は無視をして、あえて伊賀をうちの打線との勝負に挑ませた感じがあった。

岡本監督のインタビューを見たことがあるが、やはり熱い男なのであろう。伊賀の更なる成長を期待して、チームの勝ちのために嫌々勝負を避けることと、自分から逃げることは違うということを、トラウマにもなりかねない方法で、叩き込んだのだろうと思う。

果たして、自分がそういった方法でエースを育てる、つまり心中を覚悟するのか、それともチームの勝利を選ぶのか、答えは出ないままであった。

はじめの挫折

秋季大会に続いて、青道は、圧倒的な得点力で神宮大会を制覇した。神宮大会の3試合で、計37得点をあげた打線を、監督の経験が少ないからと、青道の誘いを蹴った、顔を青ざめさせたシニアの投手達や、青道に入ろうと決めていた、オーラを出して打者を見る少年や、「俺なら抑えてやるぜ！おらあああ！」と叫んで注意を受けた少年など、様々な観客が見守った。

しかし、喜んでばかりはいられない。地獄の冬合宿が始まり、全国一とされる打撃陣は更に成長し、コンバートする者や、自分の武器を磨くもの、新たな境地に至る者、そしてそれに乗り遅れるものが出始める。

個々人が己を見つめ直して鍛え上げる、そんな1週間を、全員が乗り越え、全体的に逞しくなった。

年が明けると、練習、紅白戦を行い、戦力の上澄みがレギュラーへと、監督のなかで決まっていく。そして、今年は1月末、対外試合が解禁される前に、背番号が決まった。

- | | | |
|------------|-----|-----------|
| 1 | 坂井 | 2年生 |
| 2 | 蜂須賀 | 2年生 |
| 3 | 伊藤 | 2年生 |
| 4 | 角田 | 2年生 |
| 5 | 東 | 1年生 |
| 6 | 西 | 1年生 |
| 7 | 栃谷 | 1年生 |
| 8 | 柳 | 1年生 |
| 9 | 玉森 | 1年生 |
| ここまでがレギュラー | | |
| 10 | 武藤 | 1年生 ピッチャー |
| 11 | 川口 | 2年生 ピッチャー |
| 12 | 井手 | 1年生 ピッチャー |
| 13 | 藤堂 | 2年生 外野手 |

14	加山	2年生	サード
15	神田	1年生	外野手、セカンド
16	加賀屋	2年生	ファースト、サード
17	佐々木	2年生	外野手
18	岸谷	1年生	キャッチャー

▽

藤堂は、実際に背番号として今の立場を突きつけられると、かなりくるものがあつた。1年生の栃谷のバッティングは、あの世代の城南シニアの3番を打っていたことから、とてもいいことは分かっていた。実際に、単純に打撃としては栃谷の方が上で、外野守備はまだ自身の方が上だが、目に見えて上達している。

チームが順調だからと、キャプテンだから外されないと、自覚のない油断をしていただろうか。これではいけないと思うが、焦れば焦るほど差が開いていくように感じる。1年生の躍進が著しく、2年生は苦境に立たされている人が多い。しかし、そのなかでも坂井、伊藤、角田は自身を磨いて、1年生の模範となり、蜂須賀に至っては、投手陣、キャッチャー陣のリーダーとして、しっかりと仕事をし、その立場に慣れたのか、自身の能力の向上にも努めている。

ベンチの同級生と素振りし、お互いに励まし合って、レギュラー奪還を狙う。基礎的なことから、チェックし合ってアドバイスしている。まだこれで決まった訳じゃない。確かに今回は背番号は譲ってしまったが、選抜までにセンターのポジションに戻るために、自身を厳しく戒めていく。

2月の対外試合を経て、片岡監督に、選抜はレギュラーから漏れたことを伝えられた。

両手拳を握りしめ、歯を食い縛って我慢しようとするが、涙が止まらない。やれることはやってきた。調子も上向きになり、前よりも成長したはずだった。だが、それでも柳、玉森、栃谷を上回ることはで

きなかつた。

まだチャンスはあるが、悔しいものは悔しい。リトル、シニアから常にセンターのレギュラーを譲った経験のなかつた、元青道の切り込み隊長はその日、一睡もすることはできなかつた。

名を知らしめる

春の甲子園選抜大会

神宮大会で名を轟かした、青道の打線を警戒して、大阪桐生の新エースとなっている兵藤は、青道の1回戦の試合を観戦することにしていった。

後攻の青道オーダー

- 1 玉森 ライト (右)
- 2 伊藤 ファースト (右)
- 3 柳 センター (左)
- 4 東 サード (右)
- 5 西 ショート (左)
- 6 栃谷 レフト (右)
- 7 角田 セカンド (右)
- 8 蜂須賀 キャッチャー (左)
- 9 坂井 ピッチャー (右投げ右打ち、オーバースロー)

オーダーを見て苦々しい顔になる。中学3年生の夏の大会で、1番投げにくかった、城南シニアのクリーンナップが揃っている。自身が絶好調であったから、ギリギリ抑えられたが、もう一度やれと言われたら、無理だと言える、そんな3人がいる、そしてそのうちの2人がクリーンナップ外で、1年生が5人の打線。今年もだが、来年も絶対に当たりたくないと思わされた。

オーダーを見て、藤堂さんや佐々木さんが、スタメンから外れていることにざわついていていたチームのメンバーは、さすがに大袈裟だろうと言うが、試合が始まると全員が真剣な表情となった。

1番の玉森が、軽々と8球粘った後に、ピッチャーの決め玉のカーブをセンターに運ぶ。2番の伊藤さんも粘って四球でチャンスを広げる。この時点で相手のピッチャーには、フラストレーションが貯まっている。

3番の柳が一転初球を右中間に運んで、走者一掃のタイムリーツ―

ベースを放つ。ランナー2塁で4番の東が入った時には、ピッチャーの汗の量が多過ぎて気の毒になってくる。東のオーラに萎縮してしまい、少し甘くなつたストリートは完璧に打ち返され、バックスクリーンに着弾した。これで4点、そしてまだノーアウトである。

5番の西が打席に入ると、ピッチャーはコントロールを乱し四球を出す。6番の栃谷が軽く右中間にボールを流して、ノーアウト1、3塁へ。7番の角田がレフトスタンドへスリーランホームランを放つた。

8番の蜂須賀が打ったボールはセカンドライナーとなるが、9番の坂井さんはセンター前にヒットを放った。

結局1回に12得点した青道は、後は流すようにして、坂井さん以外のピッチャーや、控えの野手陣に経験を積ませるような交代を行い、最終的に18―2で勝利した。

大阪桐生の選手たちは、これを見て沈黙し、兵藤に抑えられるかと聞いてくる。

「甲子園に出てきてはいますが、相手のピッチャーは、地方では中堅校レベルでした。私だったら9回なら5失点くらいに抑えることができるかもしれません」と言いきった。

ただ、1度波にのせると、この試合のように、切れ目のない打線が休む暇なく襲いかかってくる。それをしっかり切れと言われると更に難しそうだと言断する。

中学3年生の、夏のシニア全国大会で唯一ホームランを打たれた相手である西がベンチで野球道具を片付けるのを、静かに見届けた。



青道は二桁得点を取り続け、勢いそのまま選抜ベスト4を決めた。片岡監督は、準決勝の相手となる西邦に対して、色々と考えていた。

うちと同じく、相手を圧倒していく打線を持っている。そして、う

ちとは違って、絶対的なエースがいて、それをしつかりとリードするキャッチャーの飯岡がいる。こういう難敵のときこそ、自身の手腕が試されると感じていた。偵察班のメモを見る。

齊藤 和夫 2年生

右投げ右打ち オーバースロー

低い重心から安定して放たれる、最速150キロのストレートを主体に、武器となるスライダー、カーブ、フォークを混ぜてくる西邦の絶対的エース。他にもチェンジアップが確認されている。

昨年夏は2年生ながらエースを務め、準々決勝では、市大三高の田辺との投げ合いで勝ち、1年生ながら4番であった北川を3打数1安打1四球と、全試合マルチ安打を阻止した。

故障に対する不安があるのか、連投した記録はない。ただ準決勝で登板するのはこの齊藤だろうと思われる。

この投手を打ち崩すことができるか、また相手打線を、エースとして周りに認められてきた坂井が、抑えることができるのか。明日の試合になってみないとわからないが、自身としても最善を尽くすだけだと、温くなったお茶を一気に飲み干した。

エピソード

「実況」

春の甲子園大会準決勝の第一試合、青道と西邦の試合が今、始まろうとしています。先に攻めます、青道のオーダーはテレビ画面下に映っているものとなっています。

1	玉森	ライト (右)
2	伊藤	ファースト (右)
3	柳	センター (左)
4	東	サード (右)
5	西	ショート (左)
6	栃谷	レフト (右)
7	角田	セカンド (右)
8	蜂須賀	キャッチャー (左)
9	坂井	ピッチャー (右投げ右打ち、オーバースロー)

1 回戦から変わらぬ打順で、西邦の斉藤に挑みます。今大会では今のところ、全試合で二桁得点を記録していますが、この打線を昨年夏の甲子園優勝投手、斉藤がどう抑えていくか、高校野球ファンが非常に注目しています。

初回、1年生の玉森くんが右打席に入ります。こうして改めて見ると、強打の青道打線、1年生が5人スタメンに入っている若い打線です。若さゆえに怖いものなしか！

さあ、斉藤、初球インコースの低めにビシッと決めて1ストライク。打席の玉森は思わず後ろのキャッチャーミットを見ます。斉藤の魂の籠ったキレのある146キロのストレートに、ここまで高打率を記録している玉森も手が出ません。

2球目もインコースの低めにストレートを入れてきて2ストライク！一度玉森、打席を外して自身のスイングを確認します。

斉藤の外のアウトコースへ逃げていくスライダーに、玉森は三球三振！先頭打者を切つてとりました！

次に打席に向かうのは2年生の伊藤 叶。5番を打つ1年生の西

と共に、今大会ではいまだ三振を記録していません。

おお！打ちました。初球のアウトコース低めの、恐らくフォークでしようか、うまくバットにのせてライト前へ運んでいきました。唯一上位打線に入る2年生の意地を見せつけたか！

3番の柳はここまでの試合で2本のホームランを放っています。長打力もそうですが、このバッターも打率が高い。6番までは5割を越える打率を誇るバッターが続いていますから、さすがの斉藤も厳しいかもかもしれません。

この柳、追い込まれてから4球粘っています。斉藤の投球になんとか食らいついていく。ここでスライダー！空振り三振！三振した柳は斉藤を少し見つけたあと、ベンチに走って戻ります。

ここで現在の青道を象徴するホームランバッター！4番東が右打席に入ります。ここまで全試合でホームランを放ち、4本のホームランを記録しています。恵まれた体格に、高校生離れした圧倒的なパワーが魅力の強打者です。

打った！これはでかい！入るか？入るか？入ったー！

斉藤の様子見に投げたであろう初球！アウトコースのストリートを！逆らわずにライトスタンドへと運んでいきました！ツーランホームラン！これがまだ高校1年生のパワーなのか！ベースを丁寧に踏んで、悠々とベンチへと戻っていきます。

キャッチャーの飯岡、マウンドの斉藤に声をかけ、落ち着かせます。青道打線はここからも怖いだああーつと！これはどうしたことか！伸びる！伸びる！またまた入ったあー！東に続いて西もホームランを打ちました！

キャッチャー飯岡のリードを読んだのか、初球、恐らく落ち着かせるために確実に決めに来た、斉藤の自信のある球のスライダーを引張ってレフトスタンドへ。これでクリーンナップあわせると今大会10本目のホームランとなります。

これにはたまらず西邦はタイムをとる。立ち上がりはそう悪くないはずの斉藤、さすがにこの状況は予想外か。ここから斉藤は立て直

せるのでしょうか。



4月から西邦に入学する佐野 修造は、イヤホンから流れてくる実況を聞きながら、スタンドで試合を見ていた。監督の経験が足りない。その一点で周りの有力選手が青道に行かないというのは知っていたが、これを見ると、本当にそうなのかと疑問を抱く。

斉藤さんと対戦させてもらったことはあるが、自分ではあんな風に自身のスイングを貫くことはできなかったと思ひ出す。

闘志剥き出しに打者を食い破らんとする、攻めるピッチングをしてくる斉藤さんを初回から果敢に攻めていく。このような思いきったことを、自チームの打線を信じてやってくる。普通なら柳さんにバントをさせて、ランナーを2アウトでもいいから2塁に進めるだろうが、それでもバッターを信じて打たせる。実力もあるだろうが、青道の監督と選手の信頼関係を羨ましいと思う。

しかし、自分が入るのは西邦。確実に西邦よりも実力の高い打線の青道が魅力的に映るが、じわじわと点をとって、最終的には、投手力の差でなんとか競り勝った、西邦のナインが喜ぶ姿を見て、球場を後にした。

選抜春の甲子園大会

準決勝第一試合

青道 v s 西邦 11―13

坂井 5回4失点

武藤 2回3失点

川口 1回4失点

井手 2／3回2失点

ホームラン 柳、東2、西、角田

高校2年の夏 プロローグ

青心寮

ここにあの人達がいる。

どこかフワフワとしたような心を落ち着かせながら、しっかりとした足取りで歩みを進める。こまめに情報を取り寄せて、時には現地で、時にはテレビで見っていた。

川口さんと東さんの名前が書かれている名札の下に、自分の名前があるのを確認する。ドアをしっかりとノックして開け、はつきりと大きな声で挨拶をする。

「初めまして！今日からお世話になる伊佐敷 純といいます！よろしくお願いします！」

練習した挨拶が決まった！と思っていると、こちらを見下ろすほど大きい東さんが

「おう！これから一緒に生活していく2年生の東 清国や！よろしくな！」

と返してくださいったのに感動していると、先ほどすれ違ったでかいやつだと思われる悲鳴が寮内に響き渡った。

「あの部屋は今年もやつとんかいな」と東さんが出ていくのについていくと、テレビで見た西さんがドラキュラの仮装を無表情でしているのを見て、腰を抜かしているでかいやつがいた。

「いつものやつてるのか！」

「無表情やから怖いのか！」

と後から名前を教えてもらった川口さんと東さんが言いながら、でかいやつ、増子を部屋の中に運んでいった。佐々木さんは笑い転げて見っていた。

神宮大会や、春の甲子園で見たカッコいい姿とは違い、等身大の先輩たちの姿を見れた気がして、入学をした実感がしてきた。



おそらく、次期エースとなるであろう武藤さんと同室になり、部屋の物品の整理を終えたクリスは、武藤さんに付いて行って、自主練習を共にする。

キャッチボールを軽くしながら、柔軟などの自分のケアについて話していく。3年生の世代では怪我で主力が欠けたことがあるようで、2、3年生は軽めの怪我、違和感をすぐに報告し、徹底した管理をしているらしい。

ある程度の無理は仕方がないときもあるが、ひどいことになりそうな怪我、違和感は隠すなよと、武藤さんに強めに言われた。

確かにキャッチチャーというポジションは激務で、怪我をしやすいポジションだ。チームに迷惑をかけることがないようにしようと、心のなかで誓った。

翌朝、6：00な朝練習が始まるとのことだったので、5：15に起きると、既に武藤さんはベッドにはおらず、床で柔軟をしていた。早いですねと声をかけると

「2年生でベンチ入りしているやつは、たぶん全員やっている」と答えられ、既に心構えなどから違うのかと感心した。

武藤さんの柔軟に混ざって色々話していく。3年生の先輩がお前から早いなーと声をかけきて挨拶をして、全員でヨーグルトや、バナナなどを食べてグラウンドへ向かう。

快晴、絶好の野球日和であった。

グラウンドにテレビで見ていた、グラサンをかけた監督がやってくる。それだけで全体の空気が引き締まる。

順々に挨拶を新入生がしていく。

……

「風間中学出身 坂井一郎！外野手希望！一生懸命頑張ります！」

「よし次！」

「はい！綾上シニア出身！伊佐敷 純！希望ポジションはもちろん投手！憧れる投手はく……」

「待て待て待て、お前全ポジション言うつもりなのか？」

……

増子、丹波、小湊などの自己紹介もあり、続いて

「赤堂中学出身 結城 哲也！希望ポジションは特になし！！どこでも守れます!!」

その言葉に2、3年生が、特に2年生がざわつく。

「西みたいなんやつが来たんか？目付きもええし、やるやつなんかいな」

「好きな時代劇は子連れ狼です」

「聞いてねーよ」すかさず3年生がツツコむ。

……

自分の番が来た。

「丸亀シニア出身、滝川・クリス・優。希望するポジションはキャッチャーです」

おおー！と結城の時とは違ったざわめきが起こる。

何故か列から離れてメンチをきつてくる伊佐敷に、戸惑いながらも無言でいると

「コラア！そこお！何やってんだ!!」

「さーせん！」

と、大人しく列に戻っていった。

そして、練習が始まると、午前は軽めの運動をし、午後からは能力テストが行われた。

キャッチャーテストのため、ベンチ外のピッチャーの投球を受けることになるのだが、投手力不足、層が薄いと言われている青道だが、シニアで受けてきた投手とは明らかにレベルが違う。確かにコントロールの甘いところがあるのだが、まともに捕れるのは自分くらいであった。

ピッチャーテストでは凡庸な投手が多く、目を惹くのは二人くらい

か。うおー！と叫びながら、的外れな方向へボールを投げる地肩の強い伊佐敷、気弱ではあるが、ある程度まとまったところにボールのいく、120キロ後半のストレート、そしてカーブを投げることできる丹波。この二人がうまく育たないとなかなか厳しいかもしれない。

翌日から、自分だけ1軍に混ざり、練習させてもらっている。個人的で、体力も技術もない1年生を見て、東さんは

「おいクリス！お前もこれから大変やのく、お前らの代へボの集まりやないかい！」と笑って言い放った。

「あかんわコイツら……未来ないで……」

(そうかなあ……2年生が凄すぎるだけだと思っけど)

言われるとやはり不安になるが、今できることは1軍でしっかりとやっていくことだと気を引き締め直し、声を出していく。

ふせ!

クリスが1軍の2, 3年生にしごかれていた頃、3軍ではそれ以外の1年生全員が練習していた。片岡監督から、基礎的な体力が足りていないと、ランニングが主になり、その間に3軍の2, 3年生に混ざってノックを受け、トスバッティングをしていく。

周りの視線などが気になって、ピッチングにしっかり集中できない丹波、常に全力でコントロールの定まらない伊佐敷。

どこでも守れると豪語した結城は、ほとんどのボールを後逸したり、弾いたりしてろくに捕れず、先輩たちから

「何がどこでも守れますだ!どこも守れねえじゃねーか!おい、グローブのせいにするな!グローブは悪くねえ!」

と怒られる。キャッチャーの宮内は高校球児としては体が細いため、プロテインを勧められていた。逆に増子は食べ過ぎることを注意され、小湊はダボダボの大きいユニフォームを着て、将来でかくなるからと頑固さを見せつけた。

これを見て「未来ないわ」発言をした東は、クリスから報告を受けていた西含めた2年生の1軍メンバー全員に囲まれ、正座をしていた。た。

「申し開きは?」

と栃谷に詰められると、

「思ったことを言うただけや!何が悪うあうあういいいい?」

笑顔ではあるが目が笑っていない柳が、顔を掴みながら

「最初はあるが目も笑っていないね。まだ一週間もたつたらんのに、1年生のやる気削ぐこと言うて、変なことなったらどないするんか?」

と平坦な声で言い放つ。

1人ずつ1説法をくらい撃沈した東を見て

「俺達の代ではお前がおそらくキャプテンになる。体や声と態度がでかいだけのやつでは困る。盛り上げ上手なんだからもつたいない。もつと人のこと、特に今はできていないやつのことを考える。それとお前、太ったか?」

と西が発言する。

(転生して青道に来たけど、私がいなかったら変な暴君になってたんじゃないか?)

と心配になったが、太つ……た?……と絶望してお腹をなでている東を見て、いや、コイツはよくてマスコット枠だろうなと思いつく。「まあ、しっかり努力せえへんと、1年生の代は厳しいのは確かやね。それに夏に蜂須賀さんが抜けて、来年岸谷が抜けたら、キャッチャー陣の有力な選手はクリスのみになる。負担が大きくなりそうやんな。今から基礎力鍛える他のやつらはええけど、クリスは1軍の現実をしつかり見続ける。岸谷、他の1年生キャッチャーで見込みありそうなんはおらんのんか?」

と柳が聞くと岸谷は

「現状は厳しい……それに……俺達の代でも、俺以外は中堅校レベルのキャッチャー止まりくらいだろうな」

意見交換をしていくと思った以上に東がクリスに言った「大変やで」の言葉が的を射ていることに気づく。馬鹿なんだけどなーと、まだお腹をなでている東の頭を皆が思い思いに軽くポンポンする。変に鋭いキャプテン見習いは置いといて、自分達の代が最上級生になったときにどう1年生を導いていくかを考えていく。

今のところレギュラーはキャッチャー以外は2年生で固まってしまいかもしれない。俺達の代は別にそれでいいが、今の1年生がそれで苦労する。

西は誰か強い心を持ったやつが、中心となって1年生を引き上げてくれたらいいのだが、と考えながら、今日の練習が終わった後に、2年生が自主練習をしているなかで、ひっそりと1人バットを振り続ける結城の姿を思い出していた。

エースになるために

春季都大会に向けてのメンバーを発表した。

- 1 坂井 3年生
- 2 蜂須賀 3年生
- 3 伊藤 3年生
- 4 角田 3年生
- 5 東 2年生
- 6 西 2年生
- 7 栃谷 2年生
- 8 柳 2年生
- 9 玉森 2年生

ここまでがレギュラー

- 10 武藤 2年生 ピッチャー
- 11 川口 3年生 ピッチャー
- 12 小宮山 3年生 ピッチャー
- 13 藤堂 3年生 外野手
- 14 加山 3年生 サード
- 15 田中 3年生 セカンド
- 16 神田 2年生 外野手、セカンド
- 17 山崎 2年生 ショート
- 18 佐々木 3年生 外野手
- 19 岸谷 2年生 キャッチャー
- 20 滝川 1年生 キャッチャー

片岡はキャッチャーの滝川が入ってくれたおかげで、蜂須賀の負担が少し減ったことに安心していた。岸谷も成長著しいが、やはりクリスはそれでも別格であろう。キャッチャーという信頼が大事なポジションなので、いきなり柳、東、西のようにスタメンというわけにはいかないが、様子を見ながら、蜂須賀、岸谷、クリスで負担を分散できればと思っている。

他の1年生には今回突出した選手はいないが、練習でしっかりと声

を出してやる気は十分だろう。3軍で身体作りをして、夏までは基礎的な体力を増やしていくべきだろうと思う。

2年生は怪物と呼ばれる3人や、シニア有力選手を中心に、生徒が自ら育っていった学年であったが、1年生はクリスを除いて素材型の選手が揃っている。かなり苦勞するだろうし、1年生たちは苦しい時期を長く経験するかもしれない。

完全に榊監督の手がつけられていない、1から自分で育てなければならぬ1年生。ここで、監督の育成力が試されるなど気を引き締める。

タバコを落ち着くために吸う。

ここで、井手の直談判の内容を思い出していた。



1, 2軍のピッチャー陣は新たに加入したクリスによって、少し波乱が起きていた。父親であるアニマルの指導のもと、幼少から専門的な野球知識に触れることの多かったクリスは、今必要なピッチャーの練習を、蜂須賀、岸谷を交えて相談していった。

これに対して、そんな基本的なことをやっても変わらない、今の自分にはこういった課題があるんだ!と反発する者、その場だけ領いて、自分の練習をする者、しっかりと捉えて、実践する者に別れた。

よくも悪くも我の強いピッチャー。更に選抜ベスト4になったという自負が強く、年少者の意見を受け入れる者は1人しかいなかった。

その希少な1人とは、2年生ピッチャーの井手であった。120キロ後半のストレートは変わらず、ツーシーム、スライダー、シユート、すべてのボールが高精度であった。

ただ球が遅い。その一点において見極められて打たれてしまう。身体は大きくなって球速は上がらない。フォームを変えてみても上がらない。必死でもがいていた。そんな中でのクリスの登場に、井手は藁にもすがるような気持ちで教えを請った。

夏の大会にはフォーム改善は間に合わないかもしれない、下手をすればコントロールも乱れ、背番号を二度ともらえないかもしれない。そのリスクをとって、井手はクリスとしっかりと改善するために時間が欲しいと、片岡監督に直談判し、井手は2軍として、しっかり自身を見つめ直していくことになる。

打の青道（裏）

青道は、春季都大会も圧倒的な打力で、相手投手陣を粉砕し続けた。全試合二桁得点を当たり前のように奪い、トーナメントを駆け上っていく。くじ運もよく、決勝で仙泉学園に当たるまでは強豪に当たることはなかった。

関東大会出場は決まっているため、決勝戦では、控えメンバーで打線を組んでいく。

後攻 青道オーダー

- 1 神田 レフト（左）
- 2 佐々木 ライト（左）
- 3 藤堂 センター（右）
- 4 加賀谷 ファースト（右）
- 5 加山 サード（右）
- 6 滝川 キャッチャー（右）
- 7 田中 セカンド（右）
- 8 山崎 ショートの（右）
- 9 川口 ピッチャー（左投げ左打ち、サイドスロー）

滝川、田中、山崎の3人以外は、全員が甲子園の土を踏んでおり、精神的にも身体的にも成長を遂げているメンバーだと、片岡監督は思っている。キャッチャーは蜂須賀と岸谷を併用して使っており、クリスはこれまで代打↓キャッチャーの守備として試合が決まってから、楽な状況で使ってきた。ここで、対外試合では、どう1からリードするかを見ておきたい。

神田は足が早く、技術的にも高い俊足巧打の選手。佐々木はバランスのよい打撃と、様々な攻撃を展開できるバッター。藤堂はすべてが高水準だが、現レギュラーと比べると、今一つの印象、しかし、キャプテンシーは健在で、ベンチからチームを盛り上げ、時に引き締めてくれる選手。

加賀谷は典型的なパワーヒッターで、技術的にも成長を見せてきている選手。加山は集中しきれないときがあるものの、スイッチが入る

と、現レギュラー陣と比べても遜色ない強打者。田中は相変わらず守備範囲が狭いが確実性のある守備と打撃を持ち味とする選手。山崎は場数を一つずつ踏んで、順調に成長してきた期待の2年生。

半分以上が、強豪校の打線を担えるであろう控えを見て、頼もしく思う。この選手たちがレギュラー陣を刺激し、レギュラー陣の更なる成長に刺激されて、控えの選手も成長していく。

この自然とできた関係性を大切に、そして、この形をどうやって、2年生と1年生のあまりにも大きい差がある2学年で維持をしているのか、監督として考えることはたくさんあった。



〔実況〕 〈解説〉

「さあ！春季都大会も決勝戦までできました。これまで今大会、全試合で二桁得点を記録している青道高校と、エース今井くんを擁する、確固とした守備力を誇る仙泉学園の対決となっております。既に両チームとも、関東大会への切符を掴んでおり、おそらくこれから成長を期待する選手や新入生、そして次期チームの核となるような選手の出場が期待できます。」

へそうですね。両チームのスターティングメンバーを見ると、青道の6番を打つ、シニアで関東No.1キャッチャーと呼ばれていた、滝川・クリス・優選手に注目したいですね。〈

「関東No.1キャッチャーですかあ！青道には主にマスクをかぶる蜂須賀選手に、最近力をつけてきたという岸谷選手もいますから、レギュラー争いが激しくなりそうですね。」

へ今でさえ全国一と言われる、二桁得点をとり続ける打線に、打てるキャッチャーが加わって、更に重厚な打線となるのではないのでしょうか。これを抑えることのできるピッチャーはかなり限られると思いますよ。〈

「そうですねえ、夏の甲子園優勝投手の斉藤和夫選手を、春の甲子園で早い回でノックアウトする打線ですから、それが強化されるとなる

とかなり怖いですね。しかし、今日はメンバーがお互いにかなり変わっていますから、どんな試合を見せてくれるのか楽しみです。」



藤堂さんが今日のスタメンの輪の中に入る。

「望んでこの立場になったわけじゃない。俺達はレギュラー陣に努力で負けているなんてことはない。だが、今の立ち位置を受け入れ、しつかり地に足をつけ、実力で勝ち取ってこそレギュラー。今日は俺達がメインでアピールをするチャンスだ！試合をするのは今日は俺達だ！……俺達は誰だ……？」

「『青道！』」

「誰よりも汗を流したのは一一一」

「『青道！』」

「誰よりも涙を流したのは一一一」

「『青道！』」

「誰よりも野球を愛しているのは一一一」

「『青道！』」

「戦う準備はできているか？」

「『おおお！』」

「我が校の誇りを胸に、ねらうはただ一つ！全国制覇のみ！いくぞお！」

「『おおおおおお！』」

スタンドにいる1年生は、今日まで球場に来ることを許されておらず、初めて近くでこの掛け声を、青道野球部の一員として聞いた。

1年でベンチ入りし、2年でレギュラー、3年になったら甲子園出場。誰もが胸に抱いていた野望と少しばかりの不安。

あれがベンチで燻っている人達だと、世間で2年生にレギュラーを奪われたと揶揄される3年生中心のメンバーだと、あの掛け声をしている姿を見て、あの真剣な表情を見て思えるものがあるだろうか。

あの人達でさえ、あんなに一生懸命になっても越えられない、2年生を中心とした、全国一と言われる青道高校の野手レギュラー陣。
1年生は、上級生との覚悟の違いを今日、自覚した。

和解と決意

1年生でいきなり1軍に抜擢される。それは去年の東、西、柳を思い起こさせる。川口は今日バッテリーを組むクリスのことを考える。憎らしいくらいに礼儀正しい、しっかりとした芯を持つキャッチャー。守備では蜂須賀に一步劣るものの、打撃においてはキャッチャー陣随一であろう。現レギュラー陣の下位打線においても違和感がないくらいの実力者である。

今でも反発する1、2軍ピッチャーが多く、選抜ベスト4だからとクリスのアドバイスを、素直に受け入れられない者は多い。まだ認めたくないが、こちらを思っていることはわかる。クリスの前では実践していないが、真剣に野球が上手くなるために全てに目を通し、吟味もしている。

ただ、理論でいくら考えようが、腕を振りきれないというのは、自分で克服しないといけない。自身の課題を見定め、最速140キロを越えたストレート、これをしっかりと投げることさえできれば、そう打たれることはないはずである。春の甲子園大会の準決勝では、腕が振りきれなかっただけ、そう思いながらマウンドへあがる。

初回、先攻をとった仙泉学園の、左打席に立つ1番打者に対して、初球、インコースのストレートが外れて1ボール。

「とてもボールがキレてます!」

そう言いながらクリスが返球してくる。実力は認めているキャッチャーからの言葉に、腕は振れているようだと安堵する。

2球目のアウトコース低めに逃げていくスライダーを投げ、空振りを奪う。

(ん?…投げやすい?…)

主に井手や、クローザーの武藤と組むことが多いクリスと、本格的に試合でバッテリーを組むのは初めてだが、いつもよりボールが走っている気がする。蜂須賀に比べると、守備は全体的に粗いところがあるものの、天性のキャッチングの上手さか、投げやすいように感じる。(これは実際にバッテリーを組んでみないとよくわからない、そんな

才能だな。野手陣のレベルが高いせいかな、去年の柳、西、東のような衝撃はなかったから、単に同級生の1軍枠を奪いにきた年少のライバル。そう捉えられていたが、もしかして片岡監督はこれを見抜いて、期待していたから、今日のスタメンマスクを岸谷じゃなくクリスに任せたのか？)

そうであるならば、なるほどなど納得する。

(蜂須賀にも、岸谷にもない、努力を伴ったこの才能、青道の投手陣の救世主になりうるかもしれない。)

半ば確信し、

「クリス！ガンガン攻めていくぞ！」

と声をかける。実力では蜂須賀も負けてないという、同級生を思う気持ちを持ちながら、2才年下のキャッチャーのミットに全力で投げ込んでいく。

初回を三者凡退に終えると、クリスに声をかけて肩を組み、

「俺を輝かせてみせろよ、天才キャッチャー」

と、こちらを驚いて見てくるクリスに発破をかけた。

5回まで無失点で、クリスと言葉を頻繁に交わしながら抑えてきた。ヒットは3つ、四球を1つ与えたが、落ち着いて、1つ1つアウトカウントを増やしていく。

打線は藤堂を中心に点をとっていき、既に6点をとっている。4番の加賀谷にホームランも出ており、ベンチの雰囲気もいい。逆に、仙泉学園側の空気は悪そうだ。野手のレギュラーが1人も入っていない、同地区のライバルに6点もとられているのだ。実際に自分達はその立場なら焦るであろう。

「クリス、とても投げやすかった。それと、今まで悪かった。ちゃんと必要だと感じた練習は隠れてしていた。だからか、今日はうまく投げることができた……ありがとう……」

「……いえ……こちらも新参者なのに、いきなり言い過ぎました。私にはない高校での積み重ねがある。それを考えず、必要だと思って淡々と語った自分も悪かったです。」



川口がクリスを認めたの見て、ピッチャー陣のクリスを見る目が変わった。その瞬間を藤堂は静かに見ていた。

2年生にレギュラーをとられる、これは努力する姿、限界を越える姿を目の当たりにしていたから納得できていた。それが入ってきたばかりのぽつと出の1年生に、今のポジションを脅かされる。当の本人である蜂須賀は気にしていなかったが、周りの3年生、俺達は何故だと、言動には出さないが反発心を持っていた。

スタンドに、今日スタメンで出ると連絡したら、応援にかけつけてくださった、昨年度の3年生の中に間中さん、伊達さん、手塚さんがいるのを確認する。この3人は去年春までレギュラー争いをしており、新入生の柳、西、東にいきなりレギュラーを奪われた3人だ。

あの人達は悔しがる様子はあったが、それと同時に、お前らが青道のレギュラーにふさわしいように指導してやるぜ！と意気込んで、更に練習に力を入れ、後輩とコミュニケーションをとり、より一層の努力をしていた。

あの人達と比べると、自分達の小ささを実感させられる。右手を握りしめ自分の胸板を強く叩く。スタメン全員がこちらに注目しているのを確認して、深呼吸をしてから

「まだだ！まだ6点しかとっていない。俺達は打の青道！ベンチ一丸となって更に点を取っていくぞ！」

「「おおおー！」」

1番から始まる好打順、味方がチャンスを作ってくれることを信じて、藤堂は前を見据える。

新たな挑戦

ドオン!

春季都大会で優勝した、青道のブルペンからは、普段鳴ることのない、重い音が響き渡る。井手がフォーム矯正のために、2軍で調整をするという理由から、試合を作れる投手が坂井、川口、武藤の3枚となった。そのため、部員の中で投げることのできる者を、片岡監督は全員試して投げさせていた。

ブルペンで投げているのは西である。地肩がとても強いことは分かっていたが、ストレートは、ある程度のコントロールの目処がたちそうだ。スピードガンでは今のところ最速145キロを記録し、大きく荒れることはなさそうだ。

だが、慣れていないことだからか、打者が立つと、20球を越えたあたりからコントロールが悪くなっていき、40球を越えるとストライクゾーンにすら入らなくなってくる。本人は疲れた様子はないことから、精神的なものだろうか？

「西、何かイップスみたいなのはあるか？」

「……はい……恐らくイニングは投げれるとは思いますが、それ以上になると、上手くコントロールがきかなくなります。」

打線の中核でもある西に、あまり無理をさせるわけにもいかないので、試みを変えて、試しにスライダー、カーブ、フォーク、シユートの握りを試してもらうと、スライダー、カーブ、シユートは大丈夫そうだが、フォークは使い物にならなさそうであった。

急造投手ではあるが、妙に様になっており、夏までに精度、質を上げて、1, 2回を抑えてくれると、チーム事情的には助かる。

片岡監督は、ピッチャーの西が早ければ夏、せめて秋までには、より長い回を投げることができるようになればと思っていた。秋以降の新チームでは、今のところ計算できそうなのが、武藤のみとなることを危惧している。

西がピッチャーをしていることに、触発されたのか、坂井、川口、小宮山の3年生投手陣は、更に真剣に練習をするようになったことも収

穫だろうか。

このことは、完全にチームの外には隠す。相手の攻撃を完全に潰す時に起用するのが、1番効果的だろうと考える。

ピッチャー陣とキャッチャー陣の関係は良好であり、お互いに意見を言い合い、高めあっている。クリスが積極的に西に話しかけているが、何か共有するものがあつたであろうか。

片岡監督の頭の中には、先発に坂井、川口を使い、中継ぎに武藤、抑えに西という形が浮かんできていた。



関東大会に向けて練習を積んでいるのは、青道だけではない。群馬県にある白龍高校でも、グラウンドで守備練習が行われていた。

「あー！すまん！飛ばしすぎたー！」

と打球を放ったノッカーが謝るが、その飛球に一直線に向かっているとき、ダイビングキャッチをし、すぐに体勢を立て直して、中継役にストライク返球をする男がいた。

白龍高校に所属する2年生、蒲生 久英。圧倒的な加速でトップスピードに乗ると、前後左右関係なく駆け抜け、広範囲をカバーする守備力を魅せつける。

昨年の夏の甲子園大会では1番を打ち、先頭打者本塁打や、大会最多盗塁を記録した、全国屈指のリードオフマンの印象が強い。

だが現在、蒲生は白龍高校では4番打者となっていた。佐々木監督が就任してから、筋肉の分析などをして、足が早い選手を優先してとつた結果、長打を打てる選手が少なくなっていた。昨年度の3年生はそうでもなかったが、現2、3年生にパワー型の選手がおらず、総合的に蒲生が4番を打たざるをえないという、選手育成に失敗したというよりは、俊足巧打型の選手が集まった様子であった。

だがそんな状況でも蒲生は打ち続け、盗塁し、守備でも魅せ続けた。それがあつての関東大会出場。中学3年生のU-15では1番を

打っており、夏の甲子園の活躍から、リードオフマンの印象はつよいが、シニアでは元々4番を打っていた経験が生かされる。

今年の甲子園のインタビューで、注目する同級生として挙げた5人のうちの、2人、東と西が所属する青道と、関東大会で当たることを楽しみにしながら、日々の練習を行っていた。

意地と実力

GWの練習試合を経て、5月中旬、関東大会が始まった。全17チームで行われるこの大会では、東京からは2校、青道高校と仙泉学園が出場することとなった。

関東大会での初戦（2回戦）、青道オーダーは

- 1 玉森 ライト（右）
- 2 伊藤 ファースト（右）
- 3 柳 センター（左）
- 4 東 サード（右）
- 5 西 ショート（左）
- 6 角田 セカンド（右）
- 7 栃谷 レフト（右）
- 8 岸谷 キャッチャー（右）
- 9 坂井 ピッチャー（右投げ右打ち、オーバースロー）

と発表された。相手となるのは、埼玉の強豪、浦島学院。勝ち進めば、5日間で4試合をこなすこととなるため、投手陣の選手層が鍵となってくるこのトーナメントは、青道にとっては厳しいものとなるだろう、そういった意見が多数を占めていた。

片岡監督としては、投手の消耗を避けるために、ワールドでの勝ちを狙っていた。それに立ちはだかってくるのは、浦島学院の3年生エース、沖田 惣太郎。140キロ前半の非常に伸びのあるストレートに、スライダー、カーブ、スローカーブ、シンカーを投げてくる、サイドスローの右腕である。夏の大会も埼玉代表として出てくるのは、沖田率いる浦島学院が、大本命とされているため、投手陣豊富なチームとどう戦っていくか、その前哨戦として見ていた。

青道の後攻が決まり、選手たちは守備の準備を始める。選抜で経験を積んだ選手たちはきびきびと行動する。その様子を見て、非常に頼もしく感じる。このメンバーであれば夏の甲子園大会も行けるだろうと思う、静かにベンチで頷いていた。

しかし、実際に試合が始まると、初回、青道打線は沖田の前に三者凡退に倒れる。坂井も浦島学院の打線を、失点をしながらも、大怪我しないように立ち回る。

6回終了時点で、青道は東のホームランの1点のみで、4―1で負けていた。

▽

(全国屈指の投手に久々に当たったからやろか? なかなか糸口が見えないなあ。春の甲子園では、西邦の斉藤さん打ち崩してんけど、調子が悪くてキレ、ノビがいまいちな感じやったしなあ)

ここまで無安打に抑えられている柳は、ネクストのサークルで、沖田さんのピッチングにタイムリングをとりながら考える。

チーム全体で東のホームラン、西のシングルヒットの2安打のみ。西がランナーに出た時も恐らく意図的に、ダブルプレーをとられてチャンスが潰されている。

(6回裏まであんだだけ飛ばしとるんや。次の回、8回からは継投してくるんやろな。このまま抑えられた、このイメージを与えるのもあれやから、ここからやるしかないねんな)

伊藤さんが四球で1塁に向かうのを見て、1度深く息を吐いて左打席へ向かう。ここで、伊藤さんに代走が出され、神田が1塁ランナーとなる。

(ここで代走を出すつてことは、勝ちに行つとるんやんな。ここはしっかりやっていくか)

初球、インコース高めのストレートを見逃し、外れて1ボール。続いてスライダーが外れて2ボール。1塁ランナーの神田が、沖田さんを威圧していく。

「走った!」

内野手の声に反応して、沖田さんがウエストし、キャッチャーが2塁へ投げようとするが、ランナーが1塁へ戻っていることに気がつく。

(やっぱえぐいで、陽ちゃんの走塁)

アウトコース低めのストリート、恐らく1番自信のある球で、2塁へ送球しやすいようにコース指定された球を、逆らわずに打ち返す。ボールはぐんぐんと伸びていき、レフトスタンドへと飛び込んでいった。

(読みもスイングもドンピシャやたな。しかし、冬の合宿はきつかったけど、パワーがついて、逆方向にもえらい飛ばせるようになったんは良かったな。)

ネクストから歩いてきた東とハイタッチして

「初球やね」

「そうやな」

と短く言葉を交わす。ベンチに入ろうとしたところで、後ろから甲高い金属音が聞こえて振り向くと、東が見せつけるように右手を突き上げて、ベースランニングをする姿があった。

(ほんま、頼もしゆうなりよって。やっぱ西が認めた4番はさすがやな)

普段のマスコットの姿に目をつむり、オーラ全開に相手エースの心を折った東に、敬意を抱いた。

浦島学院ベンチはタイムを告げ、ピッチャーの交代が宣告された。

ピッチャーが代わっての初球を、右中間へ西がスリーベースを打ち、角田さんがしっかり犠牲フライを打って、あっさりと勝ち越すのを見て

(やっぱ東、西と同じ高校に来てよかったなあ)

と、自分以外にも頼れる打者が多い打線に感謝した。

紅白デビュー

浦島学院のエース、沖田を一度は退け、レフト送りにしたが、8回の裏にマウンドへ戻ってくると、吹っ切れたように全力投球をしてくる。1点差で勝っていたが、9回表に坂井が1点をとられ同点になり、延長に持ち越されてしまう。10回の表に、代わったばかりの川口が2失点すると、なんとか下位打線でチャンスを作り、玉森のタイムリーで1点は返すが、伊藤が三振となり、反撃はここまで。6―7で青道は初戦敗退を喫した。

エラーはなく、浦島学院のエース、沖田から5点を奪った野手陣は、期待どおりの結果を出した。それに対して、ここぞという時に無失点で抑えてくれるであろう存在、安心して任せることのできる、絶対的なエースの不在、これが雑誌に取りあげられた。

確かに坂井、川口、武藤のように、試合をある程度作ることもできる投手はいるが、0点で抑え続けることを、期待できる投手はいない。GWに行われた中堅校との練習試合、5試合の平均失点は4点であり、相手が浦島学院であったのを考慮すると、9回5失点の坂井はよく抑えた方である。

6月になると、片岡監督は、戦力の確認、および、2軍以下の選手から戦力を探すために、紅白戦を行うことにした。レギュラー陣を除いたメンバーで構成していく。

紅チーム

- 1 山崎 2年生 ショート (右)
- 2 佐々木 3年生 ライト (左)
- 3 神田 2年生 センター (左)
- 4 加賀谷 3年生 ファースト (右)
- 5 滝川 1年生 キャッチャー (右)
- 6 安達 3年生 レフト (右)
- 7 牟田口 3年生 セカンド (右)
- 8 道川 2年生 サード (右)

9 川口 3年生 ピッチャー（左投げ左打ち、サイドスロー）

白チーム

- 1 田坂 3年生 レフト（右）
- 2 栗原 3年生 ショート（左）
- 3 藤堂 3年生 センター（右）
- 4 加山 3年生 サード（右）
- 5 田中 3年生 セカンド（右）
- 6 岸谷 2年生 キャッチャー（右）
- 7 梅田 3年生 ライト（左）
- 8 結城 1年生 ファースト（右）
- 9 坂井 3年生 ピッチャー（右投げ右打ち、オーバースロー）

片岡監督は、このチームを組むときに、結城という1年生に注目していた。練習のあと、他の1年生が疲れ果て、寝込んでしまうなか、一人黙々と、自主練習でバットを振り続ける男。最近では2年生の居残り練習組に混ざって素振りをしており、特に柳に可愛がられている。最近では、左右反転した柳のようなフォームで、鋭いスイングをするようになってきている。

体はまだ出来上がっておらず、守備に関して拙いところはあるが、使ってみようか、そう思わせる何かを感じさせられていた。



結城は、紅白戦が始まると言われ、同級生と共にグラウンドに集合すると、いきなり名前を呼ばれて、白チームのファーストを守ることとなった。2、3軍の上級生を差し置いての抜擢に、手汗が止まらない。

昨日の自主練習が終わるときに、柳さんがニヤニヤしながら

「明日は頑張るなや〜♪」

と声をかけてきた理由はこれかと、天を仰ぐ。だが、いきなりきたこのチャンスをものにしなければ、このまま3軍で終わってしまうかもしれないと、気合いをいれた。

野手陣は、紅チームの1番〜5番、白チームの3番〜6番は1軍の選手で、それ以外は2軍の選手で構成されている。先輩に聞くと、これでも他の強豪校の打線並みとのことだ。

紅チームの先攻で始まる。初回、山崎さんが粘り、四球をもぎ取ると、佐々木さんがヒット&ランで、ライト方向の打球を放つが、セカンドの田中さんが上手く捌き、4―6―3のダブルプレーとなる。

先輩たちに鍛えられたおかげか、すっかり送球を捕球できたことに満足していると、3番の神田さんが、綺麗にセンター前ヒットを放つ。素晴らしい打撃だったなど、神田さんに話しかけようとする、真剣な目でピッチャーの坂井さんを見ていたので、話しかけることができなかつた。

牽制球に備えて、右足を1塁ベースにつけ、ファーストミットを坂井さんの方に向ける。右隣にいる神田さんのスパイクが、地面を蹴る音が鳴り続ける。

「ザッ…ザッ…ザッ…ザッ」

どうしても意識してしまう。するとチラッとこちらを確認した、4番の加賀谷さんが、鋭い打球を1塁方向へ放ってきて、集中しきれていなかった自分の股の間を、ボールが潜り抜けていった。

「おい！何トンネルしてんだよ！」

カバーに入ったライトの梅田さんが捕球した頃には、神田さんは3塁の手前まで来ており、そのまま更に加速して、ホームベースへと矢のように滑り込み、紅チームに1点が入った。

「落ち着いて深呼吸しろ。そうだ、あれが1軍レベルの打撃と走塁だ。疲れるかもしれない、気になるものがあるかもしれないが集中力をきらすなよ」

と田中さんに注意され、慰められる。

「こういう時こそ声を出せ。まだ俺は終わってないとアピールして、

自分を奮い立たせろ！」

「はいっ！さあ！こいいい！」

「よし！2アウト！ランナー2塁のケースだ！練習でしてきたものを見せてやれ！」

他の内野陣も応えて声を出していく。

一瞬ニヤツと笑ったような5番のクリスが、1塁方向への強い打球を放ってくるが、ダイビングキャッチをして、ボールがミットにあるのを確認した後、1塁カバ―へきた坂井さんにボールをトスした。

紅白戦（1打席目）

1回裏

先頭の田坂さんが三振に倒れるが、栗原さんがレフト前へヒットを放つ。1アウト1塁の場面で、打者はキャプテンの藤堂さん。

「よっしゃー！いいぞー！ここで畳み掛けろー！」

「キャプテンー！ここで確実に追い付きましょー！」

ベンチ内や、観客からの声援がより一層大きくなる。

少し照れた様子の藤堂さんは、アウトコース低めのカーブを引つ張って、左中間へツーベースヒットを放ち、1アウト2, 3塁へとチャンスが拡がる。

いかにも強打者といったオーラを纏った、4番の加山さんが右打席に立つと、球場の雰囲気が変わる。みんなが固唾をのんで見守るなか、確実に外野へ弾き返して、犠牲フライで、白チームは同点に追い付いた。

2アウト2塁のチャンスとなり、5番の田中さんはしぶとく四球を選び、2アウト1, 2塁と後ろへ繋げる。6番の岸谷さんは、チームの期待に応えて、左中間方向へ鋭いあたりを放つが、センター神田さんのファインプレーで、白チームは勝ち越すことはできなかつた。

2回表

1塁から周りをよく観察しながら

「坂井さんー！一つ一つ丁寧にいきましょうー！」

と声をかける。これは田中さんから、お前から声を出して言うてみると、言われたので、声をかけてみたのだが、

「結城ー！お前も落ち着けよー！また足元にくるかもだぞー！」

とからかわれてしまった。

ファーストミットを軽く2回叩いて

「さあーいー！」

と声を出す。改めてチームの一員になれた気がして、少し嬉しかった。

エンジンがかかってきたのか、坂井さんは、ゾーンにボールがまともり始め、6番、7番と連続三振を奪う。

「坂井さん！球走ってますー！どんどんいきましょー！」

とキャッチャーの岸谷さんが、相手に強気でいくぞとアピールする。しかし、それとは逆に、8番の道川さんに対して、変化球を要求して、わずか2球でショートゴロに仕留めた。白チーム全員でハイタッチしながらベンチに戻っていく。

2 回裏

7番の梅田さんが左打席に入るのを、ネクストのサークルで見送る。川口さんの持ち球は、140キロ前半のストレートに、スライダー、カーブ、シンカー。ピッチャーが弱点と言われてはいるが、かなりいいピッチャーだと思う。ただ、時々ボールがゾーンに来なくなるときがあり、そのせいで防御率が悪化していると、先輩たちから説明を受けている。

今日はいい日らしいが、打席では果たしてどのようなものか。

先頭打者の梅田さんが三振に倒れたので、俺は右打席へ向かう。

打席に入ろうとすると、クリスが

「ようやく来たか」

「一人で寂しそうだったから、早めにチャンスをもたらえてよかったよ。」

「これは真剣勝負だからな。チャンスをつかめるかどうかは、お前次第だな。」

お互いにフツと笑う。

「お願いしますー！」

そう言って右打席に入り、息を深く吐きながらバットを構える。

「1軍レベルとは初対戦だろー！思いつきりいけよー！」

「形はいいから食らいついていけー！」

ベンチからの言葉、打席に立てているからこそ、もらえるものを噛み締める。

初球、低めのクロスファイヤーを空振りして1ストライク。

「川口ー！大人げないぞー！」

「1年に何むきになってんだー！」

とからかいの音が飛ぶが、ピッチャーの川口さんの表情は真剣で、目はクリスのサインだけを見ている。バットを持つ手に力が入る。2球目の外へ逃げていくシンカーを、遠いと感じて見逃すが、2ストライクとなる。

すると、観客席でざわめきが起こる。自主練習をしていた野手レギュラー陣が、姿を現して紅白戦を見に来たのだ。打席を外してその方向に目を向けると、柳さんがこちらを指差しながら、東さん、西さんと話しているのを見つける。柳さんと目があつた気がした。

「打席ではいつも冷静に、心を落ち着けてバットを振り切ることが重要やね。リードを読んで打ったり、球種を絞って狙ったりと色々あるんやけど、そういうの苦手やんな？てつちゃんは来た球に反応して打てばええよ。何がなんでも食らいつきな。」

前にいわれた言葉を思い出す。磨いてきた自身のスイングを信じて、試合でそれをするだけ。練習でできることを試合でそのまま実行することは、とても難しいことである。しかし、それをやらなければ次へ進めない。

腹をくくってバットを握る手から力を抜いて、自然体を心がける。インコース低めに入ってくるスライダーを真芯で捉え、鋭い打球を放つが、サード道川さんのグローブに、直接入っていった。

「結城、いいスイングだった。次の打席も期待している」

「はーはいー！」

いきなりの監督からの声かけにビックリするが、スイングを誉められて、自分がやってきたことは間違っていないと確信した。

紅白戦（2打席目）

3回表

やはり1軍の選手が打席に入ると、雰囲気が変わる。結城は、1回表では恐らく、自分を見失っていたのだろうなと思った。改めて1番打者の山崎さんが右打席に入るのを見ると、オーラのようなものを感じる。

同級生、同ポジションに西さんという、圧倒的なレギュラーがいるため、目立ってはいないが、昨秋の時点でベンチ入りをしている実力者で、2年生居残り組の1人。物静かではあるが、時々ためになるアドバイスをしてくれ、努力を続ける人。

聞けば、シニアではそこそこであったが、高校に入ってから、根性で這い上がり、あの三人組のアドバイスを参考にしながら力をつけ、現3年生ショートを押し退けるほど成長した、努力の人らしい。

俺たちの世代は、不作の年と呼ばれるほど、最初から期待値は低い。しかし、山崎さんの話を聞いて、諦めかけていた心を奮い立たせて、山崎さんのようになるんだ、勝ち取るんだと、現在まで素振りを500回、全体練習の後に継続して行っている。

自分が理想とする将来像、それが打席にたつて、こちらをどう倒そうか、本気になって襲いかかってくる。武者震いが止まらなかった。「さあー！2巡目に入るぞー！振れてるバッターだ！声を出せー！足動かせー！ほれ！結城も何か言え！」

「!?が、がんばるぞー！」

「小学生かよー！」

内野陣の先輩達が笑うが、田中さんは「気の利いたことは言わないでいい。口下手でも声を出して、投手や他の野手に、ここに俺がいるとアピールしろ。」

「はいー！」

ファーストは俺が守る！そんな強い気持ちを持って、集中力を高め

ていく。3球目、山崎さんがアウトコースのストレートを引っかけ、1塁方向へゴロが飛んでくる。

(きたー)

しつかりとした足運びで正面に入って、グローブを突き出すと、勢いが強すぎて弾き、ボールはファール方向へ転がっていった。

「ゆうきいいー！」

「途中まで完璧だったのにやりやがった！」

スツとボールを取りに行き、田中さんにボールを投げ渡す。

「ノーアウト1塁！はりきつていいこー！」

「何事もなかったかのようにするんじやねー！」

内野陣から総ツツコミをくらった。

「こいつ大物になるかもなー」

「エラーしてもへこたれないのは、才能なのか、なんなのか」

あまりよく聞こえなかったが、言われたとおり声を出していく

「さあ！こつちこーい！」

「呼ぶな呼ぶな！」

リラックスしたような坂井さんが、2球目の力のあるシュートで佐々木さんを打ちとって5―4―3のダブルプレーとなった。

3番の神田さんが左打席に立つと、自分以外の内野陣が前進していることに気がつく。自分も前にいこうとすると

「普段と違うことはしない方がいい」

と田中さんに止められて定位置にぼつん。

内野陣が前に出ているのを、確認したはずの神田さんには、全く動揺が見られない。6球目の甘く入ったストレートを強打し、二遊間を抜けるシングルヒットを放つ。

「さっきの打席は、最後だけよかったな。冷静でほどよく力が抜けていた」

ハツと振り向くが、既に目は坂井さんに向けられて集中している。帽子のつばを軽くつまんで

「ありがとうございます」

と言うと、神田さんは軽く笑った。坂井さんが投球動作に入った瞬間

間、神田さんが走り出す。

「走った！2塁！」

あらかじめ外していたボールを、岸谷さんが素早く2塁へ送るが「セーフ！」

神田さんは余裕で盗塁を決めていた。そして、坂井さんが次に投げた、インコース低めのストレートを、4番の加賀谷さんが完璧に捉え、レフトへのツーランホームランとなった。

(これが……1軍選手のホームラン……)

唾をぐくりと飲み込み、身体の芯から熱くなる。

(やっぱりすごい。自分も打てるようになりたい)

決意を胸に、自主練習をこれからも続けることを決める。

4回裏

結城の打席がやってくる。ノーアウトランナーなしの場面。好きに打ってこいと言われている。

(来た球をしつかり捉える。リードも球種を絞るのも、後から覚えていけばいい。今やれることは、自身のスイングを落ち着いてすることのみ)

全身から力を抜いて、いつものように自然体に構える。

アウトコースの厳しいストレートを

(これは違う)

見逃して1ボール。2球目のクロスファイヤーを

(これも違う)

見逃して2ボール。川口さんは、地面をならして間をとったあとに、インコースにフロントドアとなるシンカーを

(これ！)

投げるが、鋭いスイングに巻き取られ、一直線にレフトフェンスに直撃するシングルヒットとなった。

1塁でガッツポーズをする結城の姿は、1年生の頑張りを象徴するように輝いて見えた。

決断

紅白戦が終わった後、部員全員が集められ、結城は1年生の列の端に並ぶ。片岡監督から、今年は新たな試みとして、6月の初めに1軍メンバーを固定し、そのメンバーを中心とした夏合宿を行う。そして、更なる精鋭として、夏の大会を迎えることを告げられた。

事前に聞いていたレギュラー陣以外で、驚く者は多いが、覚悟をしていたことが早くなるだけのこと。全員が前を向いて、片岡監督の話を聞く。

「紅白戦の結果を踏まえ、1軍メンバーを1枠入れ替える」

その言葉を聞き、全員に緊張が走った。

「昇格するのは、1年生の結城 哲也。降格するのは3年生の田中 栄太郎だ。」

(……え?……俺?)

固まっていると、柳さんがやってきて、いつもの自主練習の場所へと連れ出される。

「今は何も考えるなや」

そう言ってバットを渡してくる。追い付いてきた東さんに

「スイング見てやるから本気で今から振るんやで」

そう言われバットを振る。

振って

振って

振って

(3年生の田中 栄太郎さんって……紅白戦で、すごく声かけてくれてた人だよな……)

バットが手からこぼれ落ちる。

「泣くなや！泣くことは許されん!!」

東さんの大きな声にビクツとする。

「泣いてる暇があつてブーツとしとつたら、選ばれんかった者が浮かばれんで！お前の活躍する姿があいつらへの手向けになるんや！」

「死んではおらんのやけどなあ」

東さんにバットを持たされる。

「昨日の4回裏、レフトフェンス直撃のヒット、あの時のスイングに監督も感じるものがあつたんやろう。3年生への情と、1年生の将来の柱。監督はお前らの将来を選んだつちゆうこつちやな。」

「せやな。うちもあのスイングには感心したわ。普段の素振りもええけど、1軍のかかつてた勝負どころに強いのはええね。あんまり自覚はないみたいやけど。」

言葉に表せない感情が溢れていて、よく聞こえない。ただ、励ましてくれていたことはわかる。涙を袖で拭って、バットをしっかりと握りしめ、素振りを再開する。

「力が入りすぎとる！昨日のスイングを思い出しや！」

「そうだ、それでいい。力を抜いて鋭く振れ」

さっきまでいかなかったはずの西さんの声も聞こえる。がむしやらに、しかし聞こえる声にしっかりと耳を傾けながら、必死にバットを振り続けた。



「昨日3エラーの1年生を入れてもよかったですか？確かにヒット1本打ってますけど、ポロツポロでしたよ？」

「ですが、打撃においては、いつの間にか1軍レベルになってましたね。最近ではあの2年生居残り組に混ざって、毎日素振りをしているみたいですし。」

「柳、西、東の弟子みたいなもんなんですかねえ。しかし、安定感のある3年生を出した方が、無難だとは思いますが」

太田部長と高島副部長が話し合うのを、片岡監督は静かに聞いていた。

「・・・1人だけ・・・1人だけ結城は、3軍の1年生の中で練習後に素振りをしていました」

「それは知ってますよ！大方2年生の誰かが誘ったんでしようが」「いいえ、違います」

片岡監督は立ち上がった

「あいつは、初日の練習の後、1人で黙々素振りをしていました」

「初日からですか！他の1年生はすぐ寝込んでいたと聞きました」

「次の日も、その次の日も。それを続けたまま今に至ります。1人、強い思いを持って入学し、それを2ヶ月間とは言え継続できる精神力。結城の思い、行動に周りが気付き、現2年生が最初から形作っていた、切磋琢磨できる強固な集団。これが1年生でもできればと思っています。」

片岡監督は椅子に座り直す。

「今は3年生がいますが、秋からは絶対的な強さを持つ2年生と、まだまだ試合で使うには時間の必要な1年生、この2学年をチームとしてまとめていかなければなりません。ピッチャーの丹波を上げることも考えましたが、将来的にキャプテンとなりうる選手に、一足先に1軍の2年生が、試合で出す雰囲気を感じてもらおうと考えました」

「秋のことも考えての編成です。拙い判断かもしれませんが、このチームでよろしく願います」

そう言って太田部長、高島副部長に頭を下げた。

夏合宿

「さあいこー！声出せー！」

6月の2週目に入ると、青道では、選抜メンバー（1軍）の20人を中心とした、夏合宿が始まっていた。

ベンチ外の投手の投げた球を打ち返すフリーバッティング、他のものは内外野ノックを順々におこなっていく。

「こらあー！ゆうきいー！おろおろすんなあ！どこ見てる！」

「足運びはええんや！ボールにしっかり合わさんかい！」

結城はここぞとばかりに、内野ノックを集中的に受けていた。

「1つ1つ丁寧にやっていけー！腰を落とせ！まだまだ高い！」

田中さんが打つボールをしっかりと捕球し、伊藤さんに投げ渡す。

「俺の杵を勝ち取ったんだ！しっかり気合いいれてけー！」

（悔しいはずなのにここまで……絶対に活躍しないとイケないな……）

「もういつちよー！さあこーい！」

「よし！よく言った！」

ノックをこなした後は、順番になったので、フリーバッティングをしに行く。

相手は同学年の丹波だった。

（周りをキョロキョロ見ている集中できていない？どうしたんだ？）

「丹波！よろしく頼む！」

「はっ！はいっ！」

「おい丹波あー！緊張しすぎや！リラックスせい！」

「はいいい！」

（先輩の声にも挙動不審になっている……これは大丈夫なのか？……）

質のいいボールが、ゾーンの近くにはくるのだが、一向にストライクゾーンに入らないので、2年生の3軍ピッチャーにかわる。

（さっきのが俺達の代のエース候補か、不味い気がする。いや、今は打

つことに集中せねば！)

思う存分、2年生の3軍ピッチャーから打ちまくったあと、昼御飯になり、田中さんの隣に座る。

「やっぱり結城はすごい打つなあ。あの打撃を見せられたら、1軍になつて当然と思えたわ」

「いえ、まだまだです」

「もつと打つ気なのかよ！まあ、秋になったら、7番か8番くらいは打てそうだし、そのときはOBとして応援してやるよ」

お互いにおにぎりを、もつしやもつしや食べながら話す。

「栃谷が外野もできるから、ファーストを狙えるからな。あつ！そうだ、伊藤から今のうちにたくさん学んどけよ。あいつは唯一、2年生に1度もレギュラー取られたことがない天才だからな。まあ努力量も精神力もやばいんだけどな」

「さつきノックに付き合ってくれた、伊藤さんですか」

「おう！なんだかんだ西、柳よりも出塁率高いからな。バッティングも学ぶことあるだろうしな」

自分に渡されたおにぎりを食べ終わると、東さんが

「このおにぎりも全部食べや！」

と言っていたのを柳さんが

「なに考えとんやー！ノック潰けにするんやから！んな吐かせとく余裕ないやろが！」

と東さんをボコボコにしていた。

18人がポール間ダッシュ、ベースランニングをする中、伊藤さんに教えられながら、田中さん達3年生からノックを受けていく。

「足の運びはバッティングにも繋がるからな！これで好きなバッティングでも更に活躍できるようにするぞ！気張れや！」

ノックを受け続け、地面に倒れこむ。

「よし！1日目はこんなもんだろ！さあ！あいつらに合流してこい！」

と伊藤さんに言われ、残りの18人に合流して、声を出しながらグ

ラウンドを20周して、1日目を終えた。

合宿は2, 3, 4日と続き、5日目の16:00頃、片岡監督がノックを打ち始めた。自分は外れると言われ、クリスと一緒に先輩達の守備を見守る。

1時間がたち立てなくなる者が出始める。

「おい！角田！こんなものか！隣にいる2年生の神田は立ってるぞ！藤堂！声が聞こえん！もっと声を出せ！3年生！お前らはそんなものか！2年生に負けを認めるのか！」

ノックが更に激しくなる。

「まだ東、西、柳は元気に守ってるぞ！青道はこの3人だけか？」

気合いで他のメンバーが立ち上がる。

「もう、いっちょよー！」

「こっちにこーい！」

「ああああああ！」

「ちくしよーが！」

各々が声を振り絞り、監督の言葉に応える。

「よし！全員立ったな……ラスト一球……いくぞ！」

「「おおおお！」」

「この人たちと……野球をするのか……」

「結城、メンバーに入ったからには、お互いベストを尽くそう」

「ああ……そうだな……」

1年生2人は先輩達の勇姿を、最後まで見届けていた。

準備

夏の大会における背番号を、片岡監督は発表する。

- | | | |
|---|-----|-----|
| 1 | 坂井 | 3年生 |
| 2 | 蜂須賀 | 3年生 |
| 3 | 伊藤 | 3年生 |
| 4 | 角田 | 3年生 |
| 5 | 東 | 2年生 |
| 6 | 西 | 2年生 |

「背番号7、2年生 柳 圭司」

「はい！」

ここで全体にざわめきが起こる。

「柳がレフト？」

「え？センターじゃなくて？」

「背番号8、3年生 藤堂 航」

「っ！はい！」

一瞬理解できていなかった藤堂は、なんとか返事をする。

「紅白戦での気迫、見させてもらった。外野のリーダーとして頼んだぞ」

右拳を握りしめ

「はいっ！このチームで甲子園へ行きます！」

そう宣言してきた。

「背番号9、2年生 玉森 孝太」

「はい！」

玉森が駆け足で、片岡監督の元へ行くのを見届け、栃谷は静かに上を向いて目を瞑った。

10 武藤 2年生 ピッチャー

1 1	川口	3年生	ピッチャー
1 2	加賀谷	3年生	ファースト
1 3	加山	3年生	サード
1 4	岸谷	2年生	キャッチャー
1 5	栃谷	2年生	外野手、ファースト
1 6	神田	2年生	外野手、セカンド
1 7	山崎	2年生	ショート
1 8	佐々木	3年生	外野手
1 9	滝川	1年生	キャッチャー
2 0	結城	1年生	ファースト



時は流れ抽選会の日、片岡監督、太田部長、高島副部長はトーナメント表から当たるであろう高校を精査していた。

太田部長は

「1回戦はシード、2、3回戦は問題無さそうですが、4回戦では仙泉学園、5回戦は市大三高。そして、準決勝では稲城実業、決勝で成孔と、でしょうかね。」

と予想した。

「順当にいけばそうですね」

と高島副部長は応え、お茶を飲む。

「そのなかでも、エース今井擁する仙泉学園、4番 北川擁する市大三高。そして、エース南野と4番の天海を擁する稲城実業。この3チームは、甲子園に出てきてもおかしくない強豪です。」

片岡監督はお茶を飲み干し、

「現チームの打線なら相手を打ち崩すことはできるでしょう。しかし、勝つためには、ピッチャーがある程度抑えてくれること。勝敗はこれにつきます。これがうちの基本のオーダーとします」

- 1 藤堂 センター
- 2 玉森 ライト

- 3 柳 レフト
- 4 東 サード
- 5 西 ショート
- 6 伊藤 ファースト
- 7 角田 セカンド
- 8 滝川 キャッチャー
- 9 ピッチャー

「滝川をレギュラーにするんですか？」

「背番号は負担を考えると、19にしていますが、実力的にはレギュラーでも問題ありません。来年のことも考えると、できるだけ1年生でレギュラーとしてやっていける素材を、育てておきたいということがあります。なので、2, 3回戦まではこれで、4回戦からは蜂須賀、岸谷のスタメンを考えています」

「なるほど」

おそらく青道史上最強打線

弱点のない高いレベルの打撃、走塁をする1番 藤堂

変幻自在の打撃が持ち味の2番 玉森

超高校級の技術を持つ3番 柳

世代トップの長打力に勝負強さを持つ4番 東

チャンスをものにし、チャンスメイクもする5番 西

バットコントロールはチーム随一の6番 伊藤

東にも匹敵するパワーの持ち主の7番 角田

来年、2年生が更なる成長を遂げるかもしれないが、片岡監督自身、ここまで充実した打線は見たことがない。これで甲子園へ行けないことがあれば、校長、教頭から何かしらアクションがあるだろうと、頭の片隅にそんな考えがよぎった。

前哨戦

7月に入り、夏の都大会が始まった。

1回戦はシードであった青道は、しっかりと調整メニューをこな
し、疲労を取りきり、2回戦へと臨んだ。

オーダーとしては、片岡監督の初期の構想通り

- | | | | |
|---|----|--------|-----|
| 1 | 藤堂 | センター | (右) |
| 2 | 玉森 | ライト | (右) |
| 3 | 柳 | レフト | (左) |
| 4 | 東 | サード | (右) |
| 5 | 西 | ショート | (左) |
| 6 | 伊藤 | ファースト | (右) |
| 7 | 角田 | セカンド | (右) |
| 8 | 滝川 | キャッチャー | (右) |
| 9 | 武藤 | ピッチャー | (右) |

先攻をとった初回

1番の藤堂がいきなりセンター前へのシングルヒットを放つと、す
かさず盗塁をしかけ、ノーアウト2塁のチャンスとなる。

「おー！いいぞー！青道の切り込み隊長！」

「今回藤堂が出てるけど、これに栃谷、佐々木が外野の控えにいるんだ
ろ？！ただ青道の野手陣は層が厚いんだよ」

続く玉森が3球目のカーブをセンター前に運ぶと

「おっ！藤堂突っ込んできた！はえー！」

無駄のない走塁で本塁を陥れ、先制点をチームにもたらした。

「青道！青道！青道！」

観客席からも青道コールが響いてくる。

「3番 レフト 柳くん」

「おおおおお！」

青道側スタンドから歓声があがる。2年生中心ながら、高校野球に
おいて、全国一と言われる青道野手陣の、クリーンナップの登場に、場

のテンションが上がっていく。

この異様なテンションに、ピッチャーは制球が定まらず、柳は四球で出塁してノーアウト1，2塁へ。いくらか落ち着いた状態で4番の東を迎え、

「うおー！打球はえー！」

「初球かつとばしやがった！」

スリーランホームランで、さらに突き放す。ピッチャーは、ランナーがいなくなり、オーラなど微塵も感じとれない次のバッターを見て、安心したのか、不用意にアウトコースの甘いストレートを投げてしまい、レフトスタンドへのホームランを許してしまう。

「うおー！4番、5番の連続ホームラン！」

「面白いように点が入ってくな！」

5点とられ、1アウトも取れないまま、相手エースは交代させられる。

「去年もよかったけど、今年も期待できそうだな」

かわりつぱなの初球、6番の伊藤がセンターへ弾き返し、ノーアウト1塁となると、7番の角田が左中間フェンスへ直撃するツーベースヒットを放ち、ノーアウト2，3塁へ。

「8番 キャッチャー 滝川」

「おおー！こいつがアニマルの息子か！あの蜂須賀、岸谷差し置いてスタメンはやるなあ」

3球しっかりと見て、4球目のインコース甘めのストレートをレフトスタンドへと運び、チームに8点目をもたらした。

「おおおお！」

「どこでアウトがとれんだよ！」

青道側スタンドは盛り上がっていく。

青道は徐々に控え選手を出していき、26点差のついた4回表、

「代打 背番号20 結城くん」

「1年生はクリス以外、あまり期待できないって聞いてたけどどうなんだ？」

「せめて経験でも積ませようってやつかね」

結城は右打席に入ると

「お願いします！」

と言って力のほどよく抜けた、自然体を意識したフォームでバットを構える。

「体はまだ小さいけど風格あるなあ！」

「なんか入学したときの柳が、右打席に立ってるみたいだな。まあそうすごいのが続いて入るとかはないか」

初球、外に外れるストレートを、微動だにせず見逃し、ボールをじっくり見て、2―2の平行カウントになる。

「ゆうきいー！振ってけー！」

「クリス以外の1年生はまだ早かったんじゃないのかなー」

結城は集中力を増して、ピッチャーを観察していく。そして、強氣にきた、インコースのストレートを強振し、レフトスタンドへと運んでいった。

一瞬スタンドからの音が消え、1年生のいる場所を中心として、歓声が青道側スタンド全体へと拡がっていった。

その歓声を聞きながら、不慣れに右手を上げて、ベースを駆け足で踏んでいく結城のことを、ベンチ入りメンバーは優しい目で見守っていた。

仙泉学園戦 part 1

夏の都大会 4 回戦 青道 vs 仙泉学園

「実況」〈解説〉

「夏の甲子園へ行く高校はどこになるのか、本日は夏の都大会 4 回戦、青道と仙泉学園の実況を、私、平川がしていきます。解説には社会人野球で監督を勤められた、鮫島 五郎さんをお呼びしています。鮫島さん、本日はよろしくお願いします。」

〈はい、よろしく願います。鮫島 五郎と申します。〉

「本日は打の青道と名高い攻撃型のチームと、エース今井くん、キャッチャー二階堂くんのバッテリーを中心とした、堅実な守りを主体とするチームの戦いとなりますが、鮫島さんはどう見ますか？」

〈ええ、そうですね、青道はクリーンナップの柳くん、東くん、西くんの 3 人が 2 年生ながら、合わせて高校通算本塁打を 100 本越えて打ってますから、この 3 人を中心として、早いうちに今井くんを攻略したいですね。〉

〈対して仙泉学園はエース今井くんがどれだけ粘れるか、これにかかっていますね。普段は 4 番ですが、今回は 9 番に打順を下げてますから。かなり青道の攻撃陣に警戒はしていると思います。〉

「なるほど、青道は 2, 3 回戦の 2 試合で 50 得点以上していますから、爆発力に期待したいですね。また、今井くんはここまで 8 回投げて無失点ですから、対決が楽しみですよ。」

「ここで各チームのオーダーを、テレビ画面上に表示させていただきます。」

先攻 青道オーダー

- 1 藤堂 センター (右)
- 2 玉森 ライト (右)
- 3 柳 レフト (左)
- 4 東 サード (右)
- 5 西 ショート (左)

- 6 伊藤 ファースト（右）
- 7 角田 セカンド（右）
- 8 蜂須賀 キャッチャー（左）
- 9 川口 ピッチャー（左、左サイドスロー）

後攻 仙泉学園オーダー

- 1 江島 センター（左）
- 2 高田 セカンド（左）
- 3 三宅 ファースト（右）
- 4 二階堂 キャッチャー（右）
- 5 平山 レフト（右）
- 6 渡辺 ライト（右）
- 7 寺田 ショートの（右）
- 8 石垣 サード（右）
- 9 今井 ピッチャー（右、右オーバースロー）

「野手陣のネームバリューでは圧倒的に青道ですが、投手が心もとない感じは否めなさそうですね。」

「そうですね、今井くんは140キロ後半の直球に、カットボール、高速スライダー、バーム、縦スライダー、シンカーと豊富な球種がありますから、今日出てくるであろう投手では飛び抜けていますね。対して青道には絶対的なエースがいまいませんから、そこで出てくる失点をどう打線でカバーするか、そこが鍵となってくるのではないでしょうか。」

「はい、ありがとうございます。試合が始まるまで、もうしばらくお待ち下さい」

……

「さあ、夏の都大会 4回戦、青道と仙泉学園の試合が始まります。試合中は敬称略で失礼いたします。」

初球、アウトコースの低めのストレートに対して、藤堂は少し反応を見せるが、少し外に外れてボールの判定となる。

「慎重な入りかたですね。完全に外れてるわけではないですから、いいと思いますよ。」

2球目のストレートがインコースの高めに決まり、思わず藤堂は上体を起こす。続く3球目の外のボールを、藤堂はわずかに遠いと判断して見逃した。

「3球目は外に逃げていくカットボールが、わずかに外れました。ここで、今井はロージンを手に取ります」

「立ち上がりでコントロールにばらつきがあるのかもしれませんが、藤堂は足が早いので、できるだけ抑えておきたいところですよ」

「ここでインコース低めから鋭く落ちるスライダー！藤堂はこれを捉えることはできずに空振り！2―2の平行カウントになりました。さあここで今井はどのボールで攻めてくるのか」

藤堂は打席内の土を足でならして、バットを構え直す。キャッチャーの二階堂はその様子を見て、サインを決め、それを見た今井は頷く。

「バッテリ、サインは決まったか、今井が頷きます。あーっと！セカンドがしっかりとゴロを捌いて1アウトとなりました。少し手元で動いたように見えましたが変化球でしょうか？」

「おそらくツーシームですね。右打者の方向に僅かに向かっていくような変化がありました。140キロを超えるボールでこうも動かさないと、バッターとしては捉えるのが難しそうですね」

「ツーシームでしたか。青道の2番打者、玉森が右打席に入ります。小技もできる打撃の技術が高いバッターですが、ホームランを打つパUNCH力もあります」

「何でもできるというのはかなりの強みですね。それにまだ玉森くんも2年生ですから、今後さらに成長する考えると、注目していきたいですね」

「そうですね。初球！インコースのストレートが外れて1ボール！ここも慎重にボールから入ってきます、仙泉バッテリ」

「2番にはいますが他の高校であれば、クリーンナップを打てる打力がありますからね。気の抜けるところがないですよ」

キャッチャーの二階堂はじつと玉森を見て、冷や汗を流す。二階堂がアウトコースに構えると、今井はアウトコース低めにストレートを投げるが、玉森はしっかりと踏み込んで右中間へ弾き返した。

「打ったー！しっかりと踏み込んで右中間へ運んでいきました。……ツーベース！……初回からドラフト候補の今井を相手に、チャンスを作り出しています」

「困ったときのアウトコース低めですが、バッターの玉森はそこにくと、分かっていたような打ち方ですね」

「仙泉学園の今井、二階堂、青道の玉森、西、そしてベンチ入りしている栃谷、神田は城南シニア出身とのことですね」

「手の内が分かっている者同士のやり取りでしたか。そうなると5番の西に回る前に、このピンチを切り抜きたいですね」

「さあ、スタンドからの声が大きくなって参りました！ここから青道のクリーンナップが続きます！」

仙泉学園戦 part 2

「1回表、1アウトランナー2塁の場面、3番の柳が左打席に入ります。初回から苦しい展開となっています、マウンド上の今井！ここはどうでしょうか？鮫島さん」

「3番から6番まで、おそらく秋のU-18日本代表に選ばれるであろう選手が、4人も続きますから、なかなか厳しいですね。しかし、今井くんも召集候補ですから、他国代表を相手にするような、そんな気持ちで抑えていってほしいですね！」

「ありがとうございます。さあ注目の初球をつ！引つ張って！……ファール……ライトポールの右側を通過して、スタンドまで伸びていききました。」

「へっつかりとボールを見て、コンパクトに振りきっていますね。1年生の頃はパワーはそこまでというイメージでしたが、しっかりと鍛えてきてますね」

2球目、3球目と見逃し、2ストライク1ボールとなる。

「さあ、追い込まれました、バッターの柳！」

「へっつ込まれてから、かなり粘ってくるバッターですからね。今井、二階堂バッテリーは油断なく抑えてほしいですね」

「おっと！玉森が走った！柳はなんとか当ててセカンド方向に転がす！セカンド高田がボールを捕って、1塁へ送って2アウト！3塁に到達した玉森はホームには戻れません！」

「青道は仕掛けてきましたねえ、内野を抜けたら先制点、そんな場面でした。セカンドの高田が落ち着いて、投げる前にランナーを牽制したのが良かったですね」

「さあ……ここで4番の東が右打席に入ります！世代トップの長打力は、もう既にプロが注目するほど！エースと4番の1回目の対戦です！」

「4番の東は長打力に目が行きがちですが、チャンスでの打率が高く、勝負強さが魅力的ですね。パワーだけでなく技術もありますからね」

「なるほど、東のバッティング、期待して見ていきましょう！初球！」

今井が選んだのはアウトコース、外に外れるストレート」

へん、様子を見るときに、アウトコースのストレートを投げる決まりがあるのでしょいか、先程打たれているので少し修正しておきたいですな」

「鮫島さんでしたら何を投げさせますか？」

「色々場面によつては変わつてくると思いますが、先程は同じ場面でストレートを打たれていますから、球速のほとんど変わらない、カットボールやツーシームでゴロを打たせようと思いますな」

「少し変化をさせて打ち取るんですね。2球目は、フロントドアとなる、インコース低めに高速スライダー！これが決まります。東は全く反応しません」

「外を見せた後でしたから、普段より余計に、向かつてくるように見えたんじゃないでしょうか。この高速スライダーはいいですね。しかし東は反応を見せないですから、狙い球がわかりませんね」

「3球目はアウトコース低め！ギリギリ一杯に決まる縦スライダー！これで1ボール2ストライク！」

「あのボールを低めに決められたら、そうそう打てませんね。」

東は深呼吸し、バットを握り直す。そして、インコース、甘めにきたストレートを強振した。

「ここは今井に軍配が上がった！最後のボールはカットボールでしようか？」

「カットボールですね、インコース甘めにいききましたが、ストレートの失投と思つた東くんは、芯を外して詰まらされましたね」

「4番、東はレフトフライに倒れました。攻守交代しますが、鮫島さん、仙泉学園としてはピンチの後、チャンスがきそうな場面ですが、青道のピッチャー、川口をどう攻略していけばいいでしょうか？」

「川口は最速140キロ前半の直球に、スライダー、シンカーを織り混ぜてくるピッチャーです。コントロールもいいので、かなり有望とは思いますが、時折乱調で制球定まらない時があります。そこで自滅を誘うような戦いができれば、一気に崩れるかもしれませんね」

「さあ、仙泉学園の攻撃が始まります。1回裏、1番の江島が左打席

に入ります。」

〈これぞ1番、というような打者ですね、出塁率もチーム内では高め
で、足も速いですよ〉

「初球、インコース高めに、スライダーが決まって1ストライク。変
化球から入ってきました。2球目のアウトコースの……これは……
ツーシームでしょうか？引っ掻けてサードゴロとなりました」

〈僅かにシンカー気味に沈みますね。球威がありますから、ストレー
トとツーシームの投げ分けだけでも驚異となりますね。この調子で
テンポ良くいってほしいですね〉

川口は、2番打者にもストリート、ツーシームの2球のみで2アウ
トをとり、2アウトランナーなしで、仙泉学園グリーンナップを迎え
る。

「ここまで簡単に、2アウトになってしまった仙泉学園。3番の三
宅が、1回、2回と素振りをして、何か声を出して、右打席にはいり
ました」

〈気合いが入っていますね。4番の二階堂は2年生ながら、高校通算
15本の本塁打を打っている強打者ですから、その前にランナーを貯
めたいですよね〉

「3番、三宅に対する初球！インコースにズバツと決まる！クロス
ファイヤー！これには三宅もビックリか！」

〈左の、しかもサイドスローですから、かなり角度がついて迫ってくる
ように見えるでしょうね〉

「2球目も高めにクロスファイヤー！ピッチャーの川口、かなり強
気できてます！」

〈見ていて気持ちのいい投球ですね〉

「3球目のアウトコースへのシンカーを、三宅は上手くカットしま
した」

〈腰が引けて空振りしてしまうことが多いボールを、上手くファール
ゾーンに飛ばしましたね〉

「川口、ここでファーストの伊藤と声を交わします。ロージンに手
をつけ深く息を吐きます。ストライカー！空振り三振！最後はイン

コース低めにストレート！アウトコースと思って踏み込んだ、三宅の膝元をボールが抉り抜いていきました！」

ここから、お互いにランナーを許すものの、4回までは点の入らない、緊迫した投手戦が展開されていく。

5回表、青道の攻撃は7番角田から始まる。

仙泉学園戦 part 3

「ここまで膠着状態が続いております、夏の都大会4回戦、青道vs仙泉学園。早くも5回表、青道の攻撃となっております。先頭打者は7番角田、パワーは全国区、気合いでボールに食いついていくようなバッターです。鮫島さんはこのバッター、どう思いますか？」

「何と言っても、気持ちに乗ったスイングを毎回しています。技術的にはクリーンナップに、及ばない部分はありますが、3年生、最後の重みと言いますか、気合いが他とは違いますね」

「青道はここでチャンスを作り、先制点を取ることができのでしょうか？初球、インコースのカットボールを見逃して1ストライク。角田、全く反応を見せません」

角田は打席から、冷静にマウンド上の今井を見ている。

「2球目のアウトコース、低めのストリートが外れて1―1の平行カウントに。ここでも角田は反応を見せません」

「ボールがしっかり見えているのか、それとも狙い球を絞っているのか」

「あーっと、今井、力が入ってしまったか！ボールは2バウンドでキャッチャーの元へ！」

「角田が反応を示さないことで、力んでしまいましたね。前の2打席でかなり飛ばしそうなスイングをしてましたから、狙い球を絞られている、それがプレッシャーとして今井に襲いかかっているのでしょうか」

「かなり投げにくそうにしていますね。あーっと！これも外に外れて1ストライク3ボール！どうした今井！ストライクゾーンにボールが入りません！続けて縦のスライダーが低めに外れてフォアボール！ノーアウトでランナーが出てしまいました」

「これは青道チャンスになりましたね！バッターは蜂須賀、打撃もだんだん期待できるようなはなっています、どうでしょうか」

「ここで青道、代走が送られます。角田が変わって2年生の神田が出てきました」

〈青道では1番足が早いようですが、どう攻めてくるでしょうか！期待して見ていきましよう〉

「1球、2球と牽制をします、マウンド上の今井、かなりランナーを警戒していますね」

〈同じシニアだったとのことですから、かなり警戒しているのでは？〉

「神田が走っ！っと1塁に戻りました、ストレートは外れて1ボール。2球目もはずしてきます、仙泉バッテリー」

〈ランナーに気を取られて、フォアボールにならなければいいのですが〉

「3球目走った！セーフ！キャッチャーの二階堂の、2塁への送球も良かったですが、神田の足が勝りました！先程のインコースのフロントドアとなるカーブが、僅かに外れており、ノーストライク3ボールとなっています。続く4球目を、蜂須賀は確実にバントで送ってきて、1アウト3塁になりました」

〈仙泉はまたもやピンチになりましたね〉

「おっと、ここぞで……」



「代打 背番号20 結城 哲也くん」

自分の名前がウグイス嬢にコールされ、打席へと向かう。

「自分のスイングをしてこいよー！」

「おらああああ！俺だったらううううっ！」

ベンチやスタンドからの声を聞きながら、一礼して右打席に入る。

「お願いします」

地面をしつかりとならして、バットを構え、相手ピッチャー、仙泉学園エースの今井さんを観察する。

主軸はアウトコースのストレート。それにインコース、アウトコースを交互に直球、変化球を混ぜてくるリードが主で、それは5回表の現在でも変わりはない。球数は100球を越えており、仙泉学園の監

督の采配パターンだと、そろそろ投手を代えてくる頃合いだそうだ。俺はそこまで考えられないが、そう言われたから、たぶんそうなんだろう。

「ここで確実に先制点が欲しい、頼んだぞ」

今までは単に成長を見守るように、試合で使ってもらっていた。だが、今回はチームとして、この場面で活躍して欲しいから、点を取るための起用。吹奏楽部のルパン三世の楽曲がサビに入る。

あくまで自然体で、力の程よく抜けたフォーム。結城の目には、相手エースしか映らない。アウトコースの様子見として投げられた、ストレートをしっかりと振りきる！

「ファール！」

「……ふうー……」

しっかりと息を吐き、集中力を更に研ぎ澄ませていく。

「てっちゃんは来た球に反応して打てばええよ。何がなんでも食らいつきな。」

柳さんの言葉を思いだし、余計なことを考えず、相手エースを極限まで観察していく。2球目、インコース低めのカットボールを見逃して、1ストライク1ボール。

3球目の縦スライダーを、しっかりと見切つて低めに外れるのを見送る。4球目のアウトコース低め、ギリギリに入るカットボールを、見送り2―2の平行カウントに。

相手の今井さんはロージンを手に取り、こちらを睨み付けてくる。そして、インコース低めの高速スライダーを、体勢を崩しながらも

ライト方向へ弾き返した。



「前進していたセカンド高田が！ゴロを捕球をしてホームへ！投げれない！1塁へ送球しバッターはアウトー！青道！先制！代打、1年生結城の執念の1打！3塁ランナー、神田の好走塁で、仙泉学園エースから1点をもぎ取りました！」

〈外の直球を見せた後の内の変化球、確かに効果的ではあるのですが、もう少し強気でいっても良かったかもしれないですね〉

「先制点が入りましたが、試合がうごあああつと！藤堂！バックスクリーン一直線！ソロホームラン！青道、すぐに追加点をあげました！」

〈先制点が入ってからの初球を、思いつき振り抜きましたね。1年生に点を取られてダメージがあるなか、これは厳しいですね〉

「ここで仙泉学園は、エース今井をライトに下げます」

〈昨秋の都大会で、そのまま崩れたというデータがありますから、一度頭を冷やす意味でもいいかもしれないですね〉

「2アウトですが2番の玉森ですから、代わったピッチャーも、気を引き締めないといけません」

仙泉学園戦 part 4

「仙泉学園の2番手となります、2年生、小田切の投球前練習中です。これまで、今井と土田、共に3年生が先発し、この小田切が最後を締めるという形で勝ち上がってきました、仙泉学園」

〈小田切の変化球はスライダー、カーブの2球種ではありますが、直球は最速140キロ前半を記録しているので、かなり期待できる投手です。これまでではストレートで押してくる場面が多く見られています。青道打線の流れを切るために、早めに抑えピッチャーを選択してきましたね。この采配が吉と出るか凶と出るか〉

「初球、インコース低めのストレート！コースは少し甘いですが、想定以上のボールだったのか、玉森は反応を見せませんがバットが出ません」

〈外れると判断したボールが思ったより伸びたのでしょうか？振りにいくのを止めたが、思いがけずゾーンに入ってきた、そのような反応に見えますね〉

「2球目もインコース低めのストレート！空振りを奪います！」

〈先程よりも厳しいコースにきましたね。〉

「おおっと！バットは止まった！止まった！外へ逃げるスライダーにバットが止まります！なんとか見極めました、青道の玉森！」

〈インコースに2球見せてからのアウトコースへのボール球、よく見極めましたね〉

「低めに外れるカーブで空振り三振！仙泉学園はなんとか2失点で5回を終えました」

〈更に追加点が入るかと思いましたが、なんとか仙泉学園はふんばりましたね。ここからは、ピッチャーの川口に代打を出したので、青道も継投となるのですが、ベンチには武藤、坂井がいます〉

「坂井は3回戦で、5回を投げてますから、恐らくは武藤が出てくると予想されますが…お、ここで…そうですね、武藤がピッチャーに、神田がそのままセカンドの守備に入ります」

〈武藤は140キロ前半の直球に、スライダー、カーブ、SFFの変化

球を織り混ぜてきます。コントロールも良く、次期エースとして期待されていますが、厳しいところを攻めすぎて、結果として四球、甘い球を痛打されるところがあるようです。ここをどう割りきっていくのか、これによって今後が違ってくるかもしれません」

「責任感がありすぎて自滅する、そういうこともありますから、緊張するのは仕方ないですが、頑張っって欲しいですね」

▽

マウンド上にいる武藤が、キャッチャーの蜂須賀さんと軽く話すのを、ショートから見守る。蜂須賀さんが離れたのを確認して、武藤の帽子をポンツと叩く。

「どうしたんだよう？」

「俺達のエース、頼んだぞ」

お互いにニヤツとして別れる。……自分が笑えていたのかわからないが……

「ノーアウト！相手は8番打者！定位置で1つずつしっかり抑えていくぞー！」

内外野から応えてくる味方を頼もしく感じながら、打者の目線、グリップの位置を見ていく。

「内野！セーフティあるぞ！足動かしていけー！」

声と雰囲気、打者にプレッシャーをかけていく。

(武藤の助けに少しでもなればいいのだがな)

初球のスライダーが、インコース低めに決まって1ストライク。打者は少し仰け反ったか、見逃したというよりは、バットが出なかった印象を持つ。

2球目のストレートが、高めに僅かに外れて1ー1の平行カウントに。3球目は指が引っ掛かって、アウトコースにストレートが外れる。

「武藤！間を取って自分のペースで投げろ！」

伊藤さんの声が響き渡る。

4球目のアウトコース低めのストレートを、打者がコンパクトに弾き返すが、セカンドの神田が回り込んで、しっかりと1アウトをとる。

「9番 ライト 今井」

「うおおおお！」

仙泉学園側スタンド、ベンチが盛り上がる。打席には、点を取られたことを受け止めたのか、鬼気迫るような表情の今井さんがいた。

本来であれば、仙泉学園の4番は今井さん。一番危険な打者であり、勢いづかせてはいけないキーマン。武藤はしっかりと深呼吸をしてから、打者と対峙する。

初球、アウトコース、少し浮いたストレートを打たれ、ライト線より僅かに右にきれるファールとなる。武藤はマウンドをならして、蜂須賀さんのサインを見る。

武藤の渾身の、インコースのSFFを、今井さんは強振した。

センター方向へ強いゴロが飛んでくる。

（くそーとどけー！）

必死に飛び込むが、グローブの先をボールが跳ねていく。仙泉学園側からは、精一杯の歓声、応援が聞こえてくる。続く1番の江島に左中間のツーベースを打たれて、1アウト2，3塁のピンチを迎えた。

「まだこっちが勝ってるからなー！1つずつ丁寧にいこう！」

伊藤さんの言葉で2年生主体の内野陣は、なんとか落ち着きを取り戻す。

（先制点を取ったが、角田さん、川口さんがいなくなったのが裏目に出たか？このチームは、5回までで試合が決まっていなことが少なく、接戦で勝っている、つまり守ればなんとか勝てる試合に慣れていない。東と武藤が、妙に落ち着きがないのはこのせいかな）

いつもは率先して声を出す東も、何か動きが固い気がする。

（それにしても本当に急に動きが悪くなったな）

武藤はしっかりと腕を振って投げるが、コーナーを攻めすぎて、四球を与えてしまい、1アウト満塁となってしまう。

「1アウトー！満塁だから近いところー！1つ1つ取っていこう！」

そう言いながらも、西は不穏な雰囲気拭えないでいた。

仙泉学園戦 part5

甲高い音が聞こえ、右隣でボールが跳ねるのを見送る。

「ファール！」

聞こえた3塁審の声に安堵しながら、反応できなかったことに冷や汗が出る。

「タイム！」

気づくと、西に引つ張られて、マウンドの武藤のところへ向かうところだった。

「去年の夏のエラー……まだ引きずっているのか？清国」

西の言葉にドキツとする。

「これ以上不甲斐ない様を見せるようなら、監督に加山さんと替えてもらうよう頼み込むぞ？」

チームを背負った男に選択を突きつけられる。

「4月に、打撃はそこそこで、守備が下手な結城を見て、過剰に反応していたが、あのエラーが気になっていたからか？」

凶星をつかれ、ぐうの音も出ない。

「あれからエラーはたったの3回、今出たとしても、うちの打線なら相手を打ち崩せる。恐れることはない」

「そうだな、加山だってお前になら任せられるって、いつも言ってるからな」

西、伊藤さんの言葉が胸に響いてくる。

「なんや、ここでファインプレーでもして、もつと加山さんに認めてもらおうや」

言い返すと、周りの仲間達が笑う。

「そうだ、武藤、ここでズルズル終わるようなら、秋からのエースはもらうからな」

「は!?!」

「そりやそうだろ。5回なら常に計算できる投手と、自滅する投手、片岡監督がどっちを選ぶか、明白だろ？じゃーがんばれよ」

手をヒラヒラさせながら、西はショートに戻っていく。

サードにもどつて土を蹴る。

(そこまでか……そこまで演技するほどわしらはひどかったか……)

「1アウトやー！しっかりせえやー！」

声を出して自分を、味方を鼓舞する。

(甲子園でもあんな煽りかたはせんかった。去年とは違う、ここで止めてわしらが勝つんやー！)

気合いを入れて集中していく。3番打者が思いっきり引つ張った打球を、ダイビンググキャッチし、戻りきれないランナーを横目に、3塁ベースへ飛び付いた。



「サード！飛び付いたー！2あ、飛び込んだー！ランナー戻れず！1アウト満塁のチャンスが一瞬にして！儂く消え去りました」

〈打球に飛び付いて、そのまま跳ねるようにして3塁に突っ込みましたね。〉

「お腹を抑えながら、東がベンチへと戻っていきます。おっと、ベンチメンバーに囲まれて、お腹を撫でられたり、揉まれたりしていますね」
〈高校生らしさというか、幼さというか、強いというイメージがありませんから、この姿は想像できませんでしたね。東は普段からこういう扱いなのでしょうかね？〉

「どうなのでしょう。さて、6回表に移るわけですが、仙泉は交代などは見られないですね。3番柳が、おっと、いつも笑顔なのですが、今はなんとというか」

〈闘争心を全面に出していますね。しかし、こんなに雰囲気のあるバッターだったでしょうか〉

「初球！打ったー！これは入りました、入りましたね！柳がベースを踏みながら雄叫びをあげる！」

〈なんとやっていいのでしょうか、全てが完璧、そういったバッティングでした〉

「私も打った瞬間入ったと、思わず言っちゃいましたから、ええ。次

の打者の東も怖いですから、ピッチャーの小田切は、集中し直さなければなりません」

〈先程のファインプレーもありますから、ここは期待したいですね〉

「初球、ストレートが外れてボール！2球目も低めに外れました、2ボールになります」

〈東も先程とは別人のような、打席での振るまいに貫禄があります〉

「ファインプレーをして、怪物が進化したのか、お！これはファール！3球目のインコースのストレートを、高々とレフトスタンド、ポール際に運んでいきました」

〈完全にボールが見えてますね。小田切は頻繁にロージンを触っています。かなりしんどそうですね〉

「打ったー！これはいくか！いつてしまうのかー！入りましたー！

2者連続ホームラン！仙泉学園を突き放す、無慈悲な一撃！」

〈ライトにいる今井がしきりに声を出していますが、チーム全体が浮き足立っているみたいですね〉

「ここで仙泉学園はピッチャーを替えます、3番手、3年生の吉田がマウンドに上がります」

〈吉田は球速は130キロ後半で、変化球はカーブ、フォーク、シユートがありますね。安定感のあるピッチングが魅力的な選手です〉

「初球、インコースのストレートが外れて1ボール。まだ1球しか投げていないが、汗の量がすごいですね」

〈相手が打の青道、それだけでも投げにくいと思いますが、バッターが西ですからね。なかなか簡単には打ち取ることができないでしょう〉

「2球目を打った！これはでかいが、レフトポールから左へきれてファール！3球目も打っていった！これもライトポールよりも右に飛んでいきファールとなります」

「これで6球目になりますが、ここまで3連続でボール球が続きます、マウンドの吉田」

〈打たれた2球共、軽々と捉えられていますから、投げるボールがないですね。ここは四球でもいいとは思いますが〉

「バッターの西は、逃がさないと言わんばかりに、マウンド上の吉田を睨み付けています。少しアウトコースに外れるボールをファールにしました」

「ここでどめを刺す、そんな意思を感じますね。ここで勝負をしても打たれるでしょうし、敬遠すると逃げた印象が強すぎて、流れが更に青道側にいきそうですね」

「ボール！これでフォアボールとなります！かなり遠めに外してきました。おっと、ここで仙泉学園のライトにいた今井がピッチャーに、吉田がライトへ守備位置を替わります」

「この流れを止めることができるのは、エースだけ、ということでしょう。先程の打席での気迫があれば、かなり脅威になりそうですね」

「好打者、伊藤への初球、インコースのストレートで1ストライク！」

「交代する前より球が走っているように見えますね」

「2球目は、インコースの高速スライダーで空振りを奪います！マウンド上の今井、首を振ってなかなかサインが決まらない。打った！これはショート寺田の正面！ライナーで1アウト！」

「へっぴかりと捉えましたが、打球が上がらなかつたですね。エースがここで抑えるとまだまだわかりませんよ」

「打席には7番の神田が入ります。俊足のバッターですから、なかなか簡単にはアウトが取れなさそうです。西が走った！二階堂は2塁へ投げますがセーフ！得点圏にランナーがきました！打った！右中間！西がホームへ走り込んでくるが、外野からの返球はまだ！5点目がはいりました！青道の攻撃が止まらなくなってきました。」

「迷わず神田は2塁へいきましたね。先制点をとったランナーですから、仙泉学園も警戒はするでしょうが、ゴロになれば積極的に狙ってきますよ」

「仙泉学園、タイムをとります。このまま押され続ける流れをなんとか断ち切りたいですね。」

仙泉学園戦 part 6

今井は、マウンドをしっかりとやらして、深く息をつく。ランナー西を警戒しながら、神田の相手をするのは無理があったと、冷静になった今ではわかる。

簡単にヒットを打たれて、1アウトランナー2塁、ランナーは俊足の神田という、嫌な場面に汗が出る。西が本気でピッチャーの吉田を潰そうとしてきたのには、とても動揺してしまった。小田切はベンチへ、吉田はたった1打席で、気力を使い果たしてしまったように感じられる。

(……ここで崩れたら終わる……)

去年の夏、たった一振りで勝負を決められた記憶がよみがえる。

「1アウト2塁！ランナーは俊足です！1点くらい変わらないので、気楽に1つ1ついきましょー！」

目の前の二階堂が立ち上がって、全員に呼び掛ける。

ハツとして、首を横に振り、悪いイメージを消す。

(結局最後は後輩に立て直してもらったのか、情けない。シニアでは西の世代に助けられてばかりだったが、今でもそうだ。けどエースは俺、ここを抑えることができるのは俺だけだ)

バッターの蜂須賀をよく観察する。打撃はそうでもないと言われるが、とんでもない。青道のなかでは、そう枕詞がつくものであり、うちの打線だとクリーンナップをはっても、おかしくない打者である。

前の打席だって、ボール球をしっかりと見極めて、バントを一発で決めているのだ。油断していい打者ではない。ランナーを気にせず、8、9番でしっかりと抑える、これが今自分にできる最善のこと。

アウトコースのストリート、そのサインに首をふる。二階堂は内外を交互に使うリードを好みとしているが、これは完璧に読まれていると考えて、こちらで調整していく。

「今井ー……っち飛ばしてくれたら、確実にアウトだぞー！」

「いつも通りやればお前なら抑えられるぞー！」

二遊間の高田と寺田に声をかけられ、力が湧いてくる。

初球、インコースの低めに外れるカーブを見逃され、1ボールとなる。蜂須賀は目だけでボールを追い、特に大きな反応を見せない。

「いれてけー！一人じゃないぞー！バツクを信じろ！」

サードの石垣が声を出す。2球目のストレートを、インコース高めにいれて1-1の平行カウントに。バットを始動するが、すぐに止まる。コースを判断して止めたのか、球速からの判断かまだわからない。

3球目には、アウトコース、ギリギリ入るカーブでストライクを奪う。ストレート系に絞っている、または、インコースの甘い球狙いと当たりをつける。

「さあーそろそろ打ってくるぞー！腹から声出せ！ここを乗り切るぞー！」

キャプテンでファーストの三宅が、全体へ声をかける。インコースの低めに、カットボールを投げると、蜂須賀はコンパクトに打ち返すが、セカンド高田がギリギリ追い付き、1塁へ投げる。

「アウトー！」

「おい！バツクホーム！」

声を聞く前に石垣は、ホームへ転送しており、クロスプレーとなった。

「アウトー！」

「じゃあー！」

なんとか5点差に抑えることができたが、ここから逆転しないと意味がない。ベンチに戻ると

「ほんま、なんでこないに点数が取れんのかわからんわ、投手陣は7点差のワールドにならんかったらええって、最初から伝えとるけど、川口から点が取れんし、武藤もはつきり言っつていいピッチャーやな。ここまで打線が無失点でおるほうが……」

鵜飼監督は、いつも通りずっとぶつぶつぼやいている。あまり近づかないでおこうと、そっと離れようとするが、

「今井」

「はいー！」

「目は覚めたんやろな？」

「はい！すっかり抑えます！」

鵜飼監督はこちらをチラッと見ると

「頼むでほんまに……特に打線な……」

とベンチにいる全員に聞こえるようにぼやくと、また違うことをぶつぶつ言い始めた。

「二階堂いけー！」

「ここで一発でいこうぜー！」

チーム全体で4番の二階堂を応援していく。

「さっきは三宅さんがすっかり捉えてたからな！ここで一気に逆転するぞー！」

エースがマウンドに戻り、チームを鼓舞したおかげか、仙泉学園側に活気が戻ってくる。しかし、そんな雰囲気とは裏腹に、二階堂が相手ピッチャーの武藤に、威圧されているように感じるのは気のせいだろうか？

ズドン！

重い球が、キャッチャー蜂須賀のミットを揺らす。電光掲示板には145キロの文字が輝いている。サードの東のファインプレーに柳が引き上げられたのと同じく、青道の2年生、エースの卵が孵化の時間を迎えた。



「終わってみれば6―0で仙泉学園は、なんとかコールドを防いだ形になったか」

記者の峰は、スタンドで1人呟きメモを取り出す。

「青道は二桁安打の6得点に、投手陣は完封リレー。仙泉学園は結局エースの今井が、途中ライトに移ったが、8と2／3回投げて自責点

は3点のみ。あの青道を相手にしてかなり善戦したと言ってもいいだろうな。他の2人の投手があわせて1アウトのみで自責点3点はきつかったな。だが、エースを立ち直らせる時間と思えば仕方なしか」

メモを更に整理していく。

「川口くんは今日はいいい日だったのだろう。投げているときに違和感はないさそうだったな。しかし武藤くんは皮剥けたな。5回裏に登板したときはピリツとしなかったが、6回裏からは圧巻だった。今まで気持ちばかりが先走って、常に力が余分に入っていたようなピッチング。それがいきなり割りきったような、力が適度に抜けたピッチングに突然なった。」

「5回投げての無失点、8奪三振。しかも6回からはノーヒットで、仙泉学園の打者を全く寄せ付けなかった。元々怪物世代のエース格としては、西東京で名高かった武藤くんを育てきれない。その噂が払拭されれば、有力な選手、特に投手が避けていたのが、来年入ってくるようになる、青道はチームとして一段階上に行くことになる」

「今でも1、2年生に柳くん、西くん、東くん、武藤くん。そして玉森くん、神田くん、栃谷くん、岸谷くん、滝川くんといったタレント選手が揃っている。それに内部で育ってくる選手や、新入生の加わる来年が青道の勝負の年になってくるか」

「エース武藤を支えるもう一枚の投手がいれば、甲子園優勝を大本命として迎えるかもしれないな」

そう呟くと、次の試合の前に飲み物を買に行こうと、自販機を探すのだった。

来年の構想

明後日に5回戦を控えた青道では、選手達が軽めの調整メニューをしていた。

「東ー！1歩目遅れてるぞ！しっかり集中していけ！」

「武藤！走りすぎだ！そこまでにしとけー！」

その光景を見ながら、片岡監督は色々なことを考えていた。

（4回戦、全国区のピッチャーとの戦いは、チーム全体を大きく成長させてくれた。東、柳、西を中心とした、野手陣の更なる成長。そして、1番の収穫は、武藤が長い間陥っていた、スランプを抜けたことだ）
（元々シニアでは、武藤は責任感とは無縁で、伸び伸びと野球をするタイプの投手だと聞いていた。それがいきなり高校野球とのレベル差を感じて挫折し、同学年に引つ張られて頑張るものの、当時のエース、遠藤の怪我から、チームを背負うという責任感に、押し潰されていた）
再びグラウンドの選手達の練習を見守る。

「結城ー！いいぞ！正面はしつかり捕れてる！」

「ええ！田中さん！結城にダダ甘じやないっすか！」

「うるせえー！」

（結城の守備が安定すれば、あの打力だ。秋以降のレギュラー候補になりうるか。まずスタメンで使うためには守備がある程度できなければ、話にならない。夏の大会後は、1年生中心にノックを厳しめにして、2年生には各自ステップアップしてもらおうことにしよう）

うんと頷きながら、ふと横を見ると、太田部長と高島副部長が歩いて、こちらに向かってきていた。

「お疲れさまです、武藤さんの調子はどうでしたか？」

「なかなか良さそうですよね！片岡監督から見えてどうですか？」

太田部長と高島副部長が興味津々に聞いてくる、3人で監督室へ移動しながら

「なかなか良くなってきた。まだ1回しかあのピッチングを試合でできていないが、あれが本来の武藤なのだろうな。期待のエース候補だとしてもまだ幼かった。チームを背負って野球をする、それに見合う

身体は出来上がっていても、心までは付いていってはいなかった。だが、あの試合で東が最初に壁を超え、それに釣られるように2年生が各々壁を超え始めた」

そこまで言い切ると監督室に着いたので、中に入り、各自椅子に座る。

「このチームはまだ強くなると確信している。話は変わるが、チームの補強といえば、6月中にシニアの夏の関東大会などは終わっているはずだが、スカウトの調子はどうだ？」

片岡監督が聞くと

「近場では、江戸川シニアの御幸くんには、いい返事をもらってます。ですが城南シニアの成宮くん、神谷くん、丸亀シニアの白河くんには断られていますね。今年は稲城実業に、近場の有力選手がこぞって、入学希望をしているみたいで、なかなか厳しそうです」

「それって不味くないですか？現2年生が主力だから、来年までは大丈夫でしょうが、現1年生に来年有望株が入らないチームとなると、暗黒期に入ってしまうのでは？」

高島副部長と太田部長は、来年度の新入生の重要性を語り合う。

「現2年生は恐らく、武藤と西の二枚看板になる。それにフォームが完成してきた井手が入って、盤石な投手陣になるだろう。それに現チームの主力野手陣がほとんど残る。来年の夏までは現2年生をそのまま伸ばしていけば、甲子園でもいい成績が残せるだろうな。課題は来年以降の育成と補強、長い目で見ての世代交代になる。そういうえば、校長や教頭が進めていた、投手コーチの件はどうなっている？」

「現在では紅海大相良のコーチ、落合 博光氏を招聘するのが有力となっています。来年の3月末で現体制から変わり、契約が切れるようで、4月からの契約となりそうです。ほぼ確定事項ではあるので、それを強みにして、他地域のシニア有力投手にも声をかけています」

片岡監督はお茶を少し飲み、高島副部長に聞く。

「他地域だけじゃなく、近場でのスカウト、特に投手のスカウトを優先してくれ。他にも声をかけていない選手はいないのか？」

「そうですね……投手で言えば真木くんという高身長のパitchャーが

「いますぐ……丹波くんとタイプが被りそうで、声をかけていません」
「野手陣は結城、クリスを筆頭に育てていく予定だが、丹波の今の振る舞いを見ると、この3年間でエースにふさわしくなる可能性は、低いかもしれない。タイプが被るかもしれないが、真木にも声をかけてみてほしい」

「わかりました。そういうえば、千葉県に素行は悪いようですが、シヨートを守る身体能力の高い選手がいましたが、どうでしょうか？声をかけましょうか？現在は特に高校は決まっていない……というよりは推薦が全滅したようですが……」

突然太田部長が手を振り回しながら

「そんな選手を入れるなんて……とんでもないですよ！暴力沙汰になったら困りますから！やめましょう！ねっ！ねっ！」

と慌てたように片岡監督に言うと、

「中学でヤンチャしてた程度の小僧に、遅れはとらん。それに現2年生の振る舞いを見れば、更正もすぐだろう」

片岡監督はスカウトを是とした。

ミーティング室へ移動すると、ベンチ入りメンバー全員が揃って、自分達を待っていた。

「調整メニューは終わったか」

「はい！全員が怪我なく終わっています！」

とキャプテンの藤堂が答える。全員を見回して、今後の予定を簡潔に言う。

「明後日の相手は、偵察班からの連絡で、予定どおり市大三高だそう
だ。4番の北川が飛び抜けているが、他の選手達も十分鍛えられている。うちの先発は坂井だ。リリーフとしては川口を主に考えている。
武藤は、準決勝の稲城実業戦での先発を想定して、完全休養をしても
らう」

「はいっ！」

しっかりとした返事がきたことを、頼もしく思いながら

「この2戦、できれば稲城実業に対して、西をリリーフで使いたいと

思っている。西、準備はできているか？」

「はい、5回であれば、しっかりと投げきれるようになってきました。更に投球回を増やせるようにしますが、それくらいを目処に起用をお願いします」

「ああ、イップスは厄介だからな、仕方ない」

細かい打者、投手の特徴を共有し、ミーティングを終える。

「各自、怪我や違和感があればすぐに報告するように。3年の伊藤は違和感を隠してプレーして、半年間も離脱してチーム全体に迷惑をかけてくれたからな」

「うぐっ！そのときはご迷惑をおかけしました」

あらかじめ、伊藤にはからかうように、全体にこの事を話すと伝えてはいた。サツと全員を見た限りは隠している素振りなどは見えな
いが、何かあつては遅い。

自己申告がなくても気づけるよう、選手達をより見ていかねばならない。ベンチ外の選手に練習中の様子を聞いても、おかしいところはなさそうであるし、このままの戦力で市大三高、稻城実業と戦えるであらうと、少し安堵した。

体制崩壊

試合の前日、市大三高の1年生 大前は、全国一と呼ばれる、青道野手陣と戦うのに緊張していた。軽く素振りをしてても余計な力がいり、思うようなスイングにならない。

「おい！大前！1年のくせに余計なこと考えてんじゃねえ！目の前の投手を打つ！きたボールを捌く！それだけ考えてろや！」

「はいっ！」

北川さんに注意をされ、しつかりバットを振り続ける。

「振りきれてねえぞ！そんなへなちよこで打てんのか？納得できんのか？振り切れ！」

「っ！」

「おし、今のはいいぞ！少し休憩とれ」

その場に座り込み、北川さんを見上げる。

ブオン！

北川さんのスイングを見て、1年後に自分がそれをできるようになってる姿が浮かんでこない。それほど実力が隔絶していた。

「俺のスイングはまだまだだぞ」

「いや、そんなことは」

「ある！青道の西はこんなもんじゃない。今は周りに合わせてセーブしてやがるが、去年のエース、田辺さんとの対戦と今大会の差を見て確信したぜ。あいつは自分の本来のスタイルを無理矢理、精神力で抑えつけて、チームとしての戦いを優先しやがる」

「……チームのためなら……いいのでは？」

北川さんがこちらを睨んでくる。

「それで実力を半分も発揮できてなかったら意味ないだろうが。あいつは本当なら1人で試合を支配して、1人で勝利をもたらすことので

きる選手だ。現状に満足した無能に率いられてるのが問題よな」

「現状に……ですか？……」

「リトル時代から西を知ってるならわかるかもな。行った先が強豪であったが故に、城南シニアでチームプレイを教え込まれて、それを青道でも実践してる。少しマシにはなってきたけど、まだ本来の自分を出せてないんだよ」

北川さんはため息をつく。

「あいつは決して何でもできる、便利屋程度の男じゃねえ。本質は野球を純粹に楽しんで、チームの和なんか関係なく、敵味方まとめて力で圧倒するようなやつだよ」

「あいつがチームの調整役として振る舞う限りは、チームとしては強いかもしれないが、本領など発揮しようがない。自身のことよりチームを優先してしまう。監督がすべきことを全部グラウンドで西がこなすから、監督には順調に見えるだろうが、西が抜けたら青道はどうなるんだろうな」

オーバークワークそうなのも気になると、若干イライラしたように、北川さんは地面をスパイクで削り出す。空気をかえるために

「西さんの本来のスタイルって、北川さんみたいなんですね」

と言うと、北川さんはそっぽを向いて

「そう見えるかよ」

と言って、さっきまでの悪い雰囲気は嘘だったかのように

「飯いくぞー！」

と食堂へと向かっていったので、慌ててついていくのだった。



カキーン！

「打ったー！4番！北川のツーランホームラン！北川！青道ベンチを睨み付ける！これでこの試合、2本目のホームランです！青道有利とされていた夏の都大会 5回戦！8回表の時点で、7―4と市大三

高が青道に対して、3点リードしています」

「いやあ、乱打戦は予想してはいましたが、青道が打ち負けているのは予想しませんでしたね」

「昨秋の都大会では21―14で青道の勝利でしたが、今回はどう違うのでしょうか？」

「市大三高の2、3年生がとても鍛えられているのに加えて、1年生の大前が2安打と活躍していますから、田原監督が1人1人のケアをしっかりとしているんでしょうね。それに加えて王様、北川、小虎がチームをプレーで引っ張っています。秋大と比べてチームの完成度が上がってきてますね」

「青道は3回表、坂井が打線に捕まって4失点、西が登板してからは安定していましたが、7回表、1アウトを取ったときに、マウンドで突如右肩を抑えて、負傷退場しましたから、そこからの流れが悪いですね」

「最速148キロのストレート、それにスライダー、カーブ、シュート織り混ぜるピッチングで、市大三高打線は無失点に抑え続け、同点まで追い付いただけに、非常に残念でした。川口くんが変わってから既に3失点していますが、青道はここからどうするのか」

後攻 青道オーダー 8回表 1アウトランナーなし時点

- | | | |
|---|----|-------------------|
| 1 | 藤堂 | センター (右) |
| 2 | 玉森 | ライト (右) |
| 3 | 柳 | レフト (左) |
| 4 | 東 | サード (右) |
| 5 | 川口 | ピッチャー (左、左サイドスロー) |
| 6 | 伊藤 | ファースト (右) |
| 7 | 角田 | セカンド (右) |
| 8 | 岸谷 | キャッチャー (左) |
| 9 | 山崎 | ショート (右) |

エピソード

時は少し遡り、7回表、市大三高の先頭打者を、西が空振り三振に仕留めた後に、2年生の中で最初に我に返ったのは、柳であった。

「晴之がなんで肩抑えて、うずくまっとなや？」

そう呟き

「内野陣駆け寄らんかい！東！山崎！岸谷！何しとなや！」

外野からはマウンドに行くことは難しいため、声をかけるが3人も動けない。伊藤さん、角田さんが西の元へ走っていき、声をかけている。センターの藤堂さんは唇を噛みしめ、ライトの玉森は拳を握りしめている。

ベンチでは3年生と2年生の神田、栃谷が動いており、片岡監督や太田部長は固まったままで、指示を出せないでいる。

（くそやんな、経験浅い言うてもここまでかいな。）

西がマウンドから降り、既に自主的にピッチング練習をしていた川口さんが、我に返った片岡監督に呼ばれてマウンドへあがる。

（いやいや、東、山崎、岸谷は戦える精神状態じゃないやろ。サード加山さん、ショート神田、キャッチャー蜂須賀さんに変えなまっすいやろ）
運良くセカンドゴロ、レフトフライでその三人があまりボールを触ることはなかったが、監督からは交代の指示などは出ない。ベンチに戻ると、伊藤さんや神田に聞くことには、西は即、高島副部長と病院に直行してみたいだ。

マウンドで「すいません、先に肩が逝きました。無理矢理投球回増やそうと投げすぎましたね」と言って苦笑いしていたらしい。

ベンチでは「途中抜けになるけど、あとは頼んだぞ」これだけ言うのと、大人しく病院に行つたみたいだ。

（こればかりは恨むで……監督……、良く考えれば当然やったんや。西は責任感が強くてチームを優先する男や。イップスを無理矢理解消するために、肩の違和感を無視してでも投球回増やして、チームの力になるうとするやんな。ベンチに入れるピッチャーの枚数を減らせば尚更な。）

ふうーつと息を吐く。

(東やピッチャー陣を常に気に掛け続け、岸谷、クリス2人の若いキャッチャーのフォローをし続ける。3年生はいるが、次期内野リーダーとして、内野陣の統括を任されていた。その中で、さらにピッチャーとしてやれとか、改めて考えればやり過ぎやな。少しずつ役割が増えて、無意識ながら頼りすぎてたんやな)

三者凡退で終わったため、すぐに守備につくが、岸谷のリードが単調なものとなり、3失点し、ようやく内野の2年生がおかしいことに気づいた片岡監督は動いた。



「試合終了！市大三高が準決勝進出を決めました！終わってみれば8ー7とかなりの接戦となり」

高島副部長は病院に付き添いながら、青道が負ける瞬間をラジオで聞くことになった。青道では、3学年連続で精神的支柱たる選手の怪我が続いており、去年の卒業生の遠藤くん、現3年生の伊藤くんとか川口くん、そして現2年生の西くんと、大きく悪い流れがきている。

片岡監督は、しつかりと全体を見ているつもりではあるが、どうしても負担が大きくなってくる選手が出てくるのは事実、蜂須賀くんが西くんに言った言葉が

「お前も肩に違和感があるのを隠していたのか」

その言葉が、高島副部長にとってはかなり衝撃的であった。

(違和感などは自己申告を信じるしかない……か……)

選手の責任感が強いこと、これもあるだろうが、結局は自分が抜けたとしても、チームは大丈夫だというチーム状況ではなく、私や片岡監督、太田部長が選手達に、完全に信頼されていない証拠であるように感じられた。

(選手達への関わりかた、これを根本的に見直す必要がある。野球ノートの頻度を増やす、動画を撮影して、日々の送球姿勢やフォームの確認など、色々案を考えていかないと)

夏の大会が終わったばかりであるが、首脳陣の課題は山積みであった。

「西 晴之さん、診察室へおこしてください」

付き添って診察室へと入る。

「結果から言うと、しばらくは投球禁止ですな。腕を動かすとき、特に肩を上にあげるときに痛みがあるとのことですが、MRIのここですね、骨から腱の一部が剥がれてますね。幸いなことに完全に剥がれている訳ではないので、手術はせず、痛みの原因である炎症を抑えるためのお薬を飲んでもらって、ストレッチ、筋力の改善を図るための運動をしてもらいますからね」

「はい、わかりました。どれくらいの期間になりそうでしょうか？」

「腱が再びくっつく時期にもよりますが、リハビリ含めて3〜6ヶ月程度でしょうか、場合によっては手術も考慮しなければなりません」
「・・・わかりました・・・ありがとうございます」

診察を終えて、タクシーで青道に帰るまで、無言で1点を見つめる西くんに、かける言葉が見つからなかった。

高校2年生終わりまで プロリーグ

8月、太陽が容赦なく照りつけ、気温のとても高い過酷な環境のなか、青道の1、2年生は厳しい練習をこなしていた。

7月中は監督と選手の間で、密なコミュニケーションが図られ、野球ノートの活用、各選手の持つ疑問点の解消、改善案の検討を綿密に行っていた。

そして、発足した新チームは、神田がキャプテン、柳、栃谷を副キャプテンとした、精神的に強い選手を軸にすることとなった。夏大会前には東を新キャプテンにする予定であったが、西が負傷した際の姿を見て、難しいと判断された。

その頃西は、2軍所属ではあるが、チームから離れて、1人でリハビリメニューを黙々とこなしていた。肩を負傷しているだけなので、ランニングを主とした体力向上、下半身の安定、強化を目指したメニューに、肩周りの筋肉の改善、ストレッチをしていく。

「無理をさせ過ぎた、すまなかった」

そう片岡監督から頭を下げられたが、西本人としてはできるだろうからやったらできなかつた、ただそれだけであつた。

(前世、つまり全盛期の肉体と比べると、まだ高校2年生なのだから、許容量のズレがあつて当然だつた。違和感程度であれば、ケアさえ気を付けていれば、夏の大会は持つだろうと思つていたが、予想以上の北川などの市大三高の成長具合に、消耗が激しかった。私自身の認識が甘かつたのだろうか)

肩をあげる方向に持つていかなければ、痛みを感じることはないの
で、指導の元、しっかりと練習を重ねていく。中山さん達の世代が抜けてから、4番ショートとして、チームのことを常に考えてきたが、監督からは、今は自分のことだけを考えてほしい、そう言われている。

今できることは肩以外を使った練習をして、自分のレベルアップを

図ることだということは認識している。

(今思うと、私は前世でも肩をやったことがあったみたいで、どうすればいいのかがわかる。しっかりと栄養をとって、指導通りにリハビリすればいいだろう。しかしこのリハビリも野球のために自分と向き合っていると考えると楽しいな)

周りが心配するなか、本人は呑気に次の試合はいつかなと考えていた。

軽くバットを振ると、ズキツと肩が痛み、これでは振れないなと思うが、やはり素振りはしたい。型をなぞるようにゆつくりと、しかし肩に痛みを感じないようにバットを振り切る形まで持っていく。

(なんだ? こういうことをやったことがある気がする)

慎重に、自分が理想と思うような、バッティングの型をゆつくりとなぞり続ける。すると、前世で経験したものが、フラッシュバックした。

(そうか、これがわしの原点か)

昔を懐かしむかのように、理想の型をなぞり続けた。

……

ある程度型なぞりをした後には、ランニングをしながら、新チームのことについて考える。同級生に対しては、何もする必要はないだろうし、城南シニア時代から経験豊富な神田、玉森、栃谷、そして柳が中心となってチームを引っ張ると思うが、1年生が心配ではある。

クリスは抱え込むことがあるし、他のメンバーは個性が強いものも多く、かなりアンバランスに思えるのだ。1軍はクリス、結城、丹波以外は全員2年生が占めており、そのおかげで2軍には1年生が10人ほど所属している。

1軍は片岡監督がある程度見てくれるが、2軍、3軍に関しては人数が多過ぎて、手があまり回ってはいない。これは1学年に30人前後いて、3年生が抜けた今ですら60人前後を1人1人見ていくのは、片岡監督のみでは無理があるのは仕方がない。

（今年は2軍の選手、特に1年生への厳しいノックを敢行しているのを見かけるが……これが1軍、2軍所属の2年生を中心とした不満にしなければいいのだが……）

完全に前世を思い出し、チームから離れ、1軍という枠から外れて外から見ると、選手達の仲間意識や向上心を煽って、全員の面倒を見きれていないのをカバーしているが、不満を持ってやめる選手がいないうことが奇跡のように感じる、危うい状態であることに気がついた。

今はくをしておけ、という指示はあるものの、経過を時折確認するのみで、しっかりと聞きに来る選手のみにアドバイスを与える。実に教師らしい監督だと感じさせられる。

（問題点はたくさんあるが、一気に解決することは無理であろうな。まあ、わしにできるのは1年生の成長を助け、全体を片岡の坊主が見ることができるよう矯正することか）

そのためにも自分が西 晴之、そして、西 宗太郎としての野球をせねばならないなど、未来に向けた、明確な指針を立てた。

閑話

西から見て、片岡監督は、8月に入ると活き活きとしていた。そう、国語教師としての仕事は、夏休み期間中はほとんどないからである。学期中の監督の生活を、本人から聞いたことから思い出ししていく。

5時に起床、身支度、練習メニューの再確認、国語の授業の再確認をする。6時に野球部の朝練習で点呼、練習指示をしたあとに、1軍、2軍、3軍メンバーの練習を日替わりで指導する。(割合としては1軍が多くなる)

7時30分に朝練習を終え、食事をとって、8時に職員室へ、授業の最終確認をして授業を行う。昼食をとりながら、夕方の練習メニューを確認し、午後の授業へ。その授業の合間に、東と西の入学、及び、春の甲子園に出場して、話題が増えてしまったが故に、多くなりすぎてしまった取材のやり取りを行い、OB、後援会との付き合いをする。放課後、16時頃にグラウンドへ出て、夕方の練習を開始する。全員を見ることは不可能なため、何人かのグループに分けて練習をし、見てわかる程度に困っている子に声をかけ、問題を解決したり、アドバイスをしたり、野球ノートの内容を思い出しながら、指導をしていく。これを1軍＜2軍＜3軍の割合でしていく。8月は、3年生が抜けたから60人ですむが、夏大会前は100人前後に及ぶ。もちろん練習中にも視察にくるOBや後援会の相手をする。

練習を終えると、食事、風呂の後に、野球ノートの整理、返事を書いていく。時折ミーティングを開き、野球ノートが一段落すると、チーム状況の整理、問題はないかどうかの確認をし、教え子が自主練習するのを見守りながら、国語の授業の学校への報告書をまとめ、明日の授業の準備をし、朝練習及び夕方練習を考案してまとめる。気づけばだいたい0時、ときには1時を過ぎており、そこから就寝する。

西は、聞いた話から頭の中で組み上げた、片岡監督の生活を紙に書き出したものを見ると、

(ああ……これは過労死してしまう……)

と天を仰いだ。睡眠5時間未満で、こんな激務をしていれば、能力を十全に発揮できるとは思えない。監督業にあと2、3年慣れてきて、効率化できたら大丈夫だろうが、現時点では難しいであろう。(わしと東の入学自体が監督の過労に繋がって、活躍して甲子園に出たが故に、更に激務になっちゃったか)

と答えを導きだす。

(確かに榊前監督が少しは指導していたとは言え、中山さん達の世代はしっかり育成されており、3年生の藤堂さん、伊藤さん達の土台を形作るだけのメニューを考案できる、ある程度の指導力が片岡監督にはあるのだ。それに子供達の心を惹き付ける人望もある。問題は片岡監督本人というよりは、負担の大きすぎる現環境というわけか)

せめてOBと後援会の相手がなくなればいいのにと、思いながら後援会の相手をしている片岡監督を見ると、隣に突っ立っているだけの太田部長を見る。

(あれ?太田部長が専属でやればいいのでは?)

話を聞いて相槌を打つ、相手に気を遣って粗相のないように対応すればいい。これだけのことであれば太田部長でもできるはずである。何か伝える手段がないかと考えていると、高島副部長が1人の少年に野球部を案内しているのを見つける。

「ここでは2軍の選手が練習をしているわね」

「へー!礼ちゃん、1軍の方は見せてくれないの?」

「2軍に今、ある選手がいるからわざとこっちに来たのよ」

高島副部長の元へと歩いていく。

「あつ!西くんこっちに来てくれるかしら」

「えっ!?西さんこんにちわ、江戸川シニアの御幸 一也っていいます」

「君が御幸か、武藤から話は聞いているよ。よろしく頼む」

お互いに挨拶をして軽く話をしたあと、1軍の見学に1人で行かせて、高島副部長とOB、後援会の件について話をする。

「確かに、片岡監督が休んでいる姿を見たことがないわね」

その言葉に冷や汗が出る。思っているよりも監督が身を削っている可能性がある。

「負担が軽くなるように色々体制を相談してみるわ」

と言って高島副部長は御幸の相手をしに行った。

(これでもう少し監督に余裕ができるといいんだがな)

いまだ心配ではあるが、この内容を高島副部長に伝えただけでも、越権行為に近く学生のやることではない。ここはフォローをしながら、大人がどうするかを見守るしかないかと、自身のリハビリを進めていくのだった。

リハビリ

8月の中旬、西の怪我が発覚してからちようど1ヶ月後のことである。

「信じられません、もう臆がほとんどくつついていますよ。なんだか神様の後押しがあるみたい、綺麗についている。ふむ、これならもう1ヶ月程リハビリをしてから、徐々に負荷を加えていけば、1月頃には試合復帰できると思いますよ」

「ありがとうございます。先生の適切なご指導のおかげです」

医師に感謝を述べ、診察室を出て、高島副部長と合流する。

「おかげさまで、恐らく試合への復帰は1月頃になると思います」

「そう……やっぱり秋の大会には間に合わないのね」

「1月に復帰できるだけでもいい方です。それにその間は、2軍にいる同級生や1年生と一緒に練習しますから、チームにとってマイナスばかりではないかと」

高島副部長の運転する車で今後の話をして、青道のグラウンドに到着する。

「晴之ー！検査どうやった？」

柳が1番にこちらを見つけて駆け寄ってくる。他の1軍メンバーも続いてくる。

「10月始めくらいから負荷をかけて、1月くらいに復帰できるそうだよ」

「そうなんか」

東が落ち込んだ様子で返してくる。

「1軍に復帰できたら、いきなり春の甲子園だからな、気合が入るよ」

「!!?!」

「何を驚いてるんだ？俺達の世代がメインなんだぞ？いけるだろ？いやー、復帰戦が甲子園は滾るねえ」

そう言いつつ2軍グラウンドへ歩いていく。

「ぜってえー！甲子園に連れて行ってやるからな！」

「ざぼんじやねえぞ！」

後ろからの声を聞きながら、西は自然な笑みを浮かべていた。

……

9月中旬、リハビリを続ける西は、徐々に肩に負荷をかけていく。軽めのキャッチボールと素振りをし、感覚を養っていく。

(前世では40年くらいかかったけど、このぶんだと2,3日で感覚戻りそうだな)

「西さん！いいボールきてますよ！」

伊佐敷は久々に投げたとは思えない、綺麗な回転をした西のボールを誉める。

「伊佐敷もすっかりボール投げてるな。宮内からコントロール悪いと聞いていたけどどうした？」

「キャッチボールとか送球は狙ったところにいくんすけど、マウンドでキャッチャーに投げるとなるとダメなんすよね。外野手やってみないかとは言われてるんすけど、まだ諦めきれなくて」

キャッチボールを中断して、西はキャッチャー防具をつけ始める。

「なにしてんすか？」

「伊佐敷、お前のボール受けてやるよ、投げてみる」

「うえ!?!はいっす」

ブルペンに入ると、他のピッチャー、キャッチャーがなんだと見に来る。

「え！西キャッチャーすんの？」

「ばか、あいつ城南シニアでキャッチャーしてただろうが」

「ええ!?!できるんすか？」

(ガヤガヤとうるさいが、まあいいだろう)

「伊佐敷！いつも通り投げてみる！」

何も工夫なくど真ん中に構える。

「ういっす！投げまっす！」

初球は指にかかりすぎて、左バッターへのデッドボールとなりそう

なボール。2球目は先程のことを反省したのか、ボールを抑えきれず大幅に高めに外れるボールとなった。

(なるほどな)

「キャッチャーの構えたところに送球するつもりで投げてみる」

ボールがストライクゾーンより、僅かに上のところに投げられる。

「次は送球を意識しながら腕を振り切れ！」

ボールがストライクゾーンにくる。

「おお！なんか入りました！」

「送球を意識しているから野手投げなんだが、この感覚を忘れずに、投手として投げるフォームを調整してみてもどうだろうか？」

「やってみます！この感覚覚えるためにもう少しお願いします！」

初めての試みとしては、7割方ストライクゾーンに入ってきていたのでいいのではないだろうか。投手としての投げ方だと全然入らなかったのだが。

ここから西と伊佐敷は、肩のリハビリのキャッチボールを兼ねての練習を日課としていく。

……

キャッチボール？が終わると、2軍選手のバッティングを見ながら、軽く素振りをしていく。

「増子！大振りするな！コンパクトに振り切れ！」

「小湊！明らかに四球狙いのバッティングはやめろ！」

「楠木！最初から当てにいくな！」

目に入って気になったことをポンポンと声に出していく。1年生が口だけ出しやがって、というような雰囲気を作り始めていたので、断りを入れて打席に立つ。太田部長がオロオロとしているが関係ない。右肩は無理できないので、右打席に立って、左手一本のみで確実にヒットを20本連続で打ち続ける。

「右肩使えないからこれで勘弁な」

と言って再び素振りに戻ると、1年生だけでなく2年生が必死に

なつてバッティングしているのを見守る。

(1軍との差を感じてもらつて、刺激になればな)

そう思いながら、理想の型をなぞり続けた。



(なんなんだよ、あの人！)

1年生の小湊は内心荒れながら、バッティング練習をしていた。怪物世代の5番バッターであり、夏の都大会で2年生ながら、青道の5番を打っていた西 晴之。すごいことはわかつていたが、ここまで差があるとは思っていなかった。

しっかりとボールを見ても、なんとか見える程度で、ついていくのがやつとのピッチングマシンのボール。それを軽々と、しかもいつもとは逆の打席に入って、利き手ではない方の腕で片手打ち、それが20本連続でヒットになる。正直めちやくちやだ。

怪我人は黙っているよと思つていた2軍メンバーは、その怪我人よりもレベルが下だったのだ。どちらが黙る方なのかは明確である。

(足りないーこの程度の練習じゃ足りない！)

歯をくいしばつて練習をいつも以上に、真剣にこなしていく。練習が終わり、疲れがあるのを我慢して、8月半ばから1、2年生の一部で集まつて自主練習をしている場所に向かう。そこには当然西さんもいる。少しはなれたところで、相変わらずゆつたりとスイングを繰り返している。近づいてスイングを見せてもらう。

(あれ？毎回違う軌道のスイングをしてる?)

「えっと、西さん、毎回違う素振りしてるのって何故なんですか?」

「ああ、毎回相手が違うからだね。投げられたボールを打つための、理想的なスイングを毎回しているつもりだよ」

「はあ、そういうものですか」

「うむ」

(よくわからない、自分のスイングを貫くものじゃないのか?)

自分も素振りをしながら観察していると今度は反対側で、同じよう

に素振りをはじめ。

「反対でやるのはバランスを考えてですか？」

「そうそう、雑誌とか見えずっと続けてるよ」

常識的なこともするのだと安堵する。その日はお互いに素振りをするだけで解散となった。

秋の本戦に向けて

西が2軍で調整を続けるなか、秋の都大会本戦の抽選会が、9月27日に行われた。

キャプテンの神田が説明をしていく。

「去年と同じく、優勝するためには、7回勝つ必要がある。夏の大会で注目を集めた新鋭の高校や、伝統ある有力校と当たる可能性が高いのは、3回戦で成孔、準決勝で稲城実業、市大三高、帝東、王谷のどこか、決勝では仙泉学園、創聖、明大一高、仁王学舎、紅海大菅田。全部挙げたが、当たるのはこの中で3チームだけだ。偵察班は当たる前の2試合に絞って偵察をしてほしい」

片岡監督は立ち上がると

「投手陣はエースの武藤を軸として考えていく。井手をリリーフとして後ろに回し、遊佐を2番手先発に、丹波、槇原を機会があれば登板させていくつもりだ。」

登録選手一覧（9月1日時点で登録済、途中変更不可）

レギュラー

1	武藤	2年生
2	滝川	1年生
3	結城	1年生
4	神田	2年生
5	東	2年生
6	山崎	2年生
7	栃谷	2年生
8	柳	2年生
9	玉森	2年生

ベンチ控え

10 井手 2年生 ピッチャー

1 1	遊佐	2年生	ピッチャー
1 2	岸谷	2年生	キャッチャー
1 3	道川	2年生	ファースト、サード
1 4	坂本	2年生	セカンド
1 5	栗山	2年生	シヨート
1 6	藤谷	2年生	キャッチャー
1 7	城之内	2年生	外野手
1 8	石橋	2年生	外野手
1 9	丹波	1年生	ピッチャー
2 0	榎原	1年生	ピッチャー

「オーダーはこの紙に書いてあるものが、基本になると思っておいてくれ」

1	神田	セカンド
2	玉森	ライト
3	柳	センター
4	東	サード
5	栃谷	レフト
6	滝川	キャッチャー
7	結城	ファースト
8	山崎	シヨート
9	ピッチャー	

「クリスはわかるけど、てっちゃんレギュラーなんやな。これは守備練習もつときつくせなあかんね」

柳がそう言うのと、結城は冷や汗を流す。東が肩を組んで

「道川軍曹がしっかり守備練習つけてくれるやろうから、遠慮せんでええぞ」

「くっ!?!」

「おい！なに人を鬼みたいに扱ってんだよ！」

パン！パン！

神田が手を叩いて、場を静める。

「試合まで時間がないからな、疲労を残さないように基礎を確認しよう。相手チームの特徴は、偵察班から報告を受けたら分析、共有するとして、今は地に足をつけて、全員が一つ一つレベルアップを目指していこう。監督からは何かありますか？」

「そうだな、練習は引き続き疲労を後に残さないような、調整を含めたメニューをこなしていってくれ。それについてはキャプテン、副キャプテンと相談してメニューは作成する。2軍以下に関しては大会中は、どうしても太田部長が基本的に担当することになるが、西が張り付いているからそこまで心配はしていない」

「それに、以前から伝えていたコーチの件でひとつ。こちらに来られる時期が早くなるかもしれないとのことだったが、想像していたよりも落合さんが乗り気で、引き継ぎが更に早く終わりそうなので、10月中旬頃には合流できるとのことだ。11月からは2軍総括をしてもらい、3軍を太田部長に見てもらおうことになりそうだ」

その言葉に2軍メンバーを中心にざわめきが広がるが、すぐにおさまる。

「経験豊富な専任のコーチをやってこられた方だ。学ぶべきことが多々あるだろうから、頼りにするように。以上だ」

他の連絡事項等を共有し、ミーティングを終える。

西はいつもの自主練習の場所に行き、素振りを始める。徐々にいつもの居残り練習組が集まり、結城を中心とした1年生も合流し、素振りやシャドーを各々が始める。

それをじーっと観察しながら西は、マイペースにゆったりとスイングし続ける。

「小湊、集中」

「っーはいっー！」

「結城、フォロースルーが雑になっている」

「すみません！」

「丹波、こつちを気にしすぎだ。自分のフォームに集中しろ」

「はい！」

少しでも違和感があれば、遠慮なく指摘していく。

「坂井、もう休むのか？お兄さんは最後まで残っていたぞ？」

「ぐうーやります！」

自分だけでなく、他の2年生もガンガン1年生に、アドバイスしたり、気合いをいれたりしていく。

そうした日々を過ごし、チームは3回戦の成孔戦を迎えるのであった。

秋の都大会 3回戦 成孔

「秋の都大会 3回戦、成孔と青道の試合が、まもなく始まろうとしています。夏の西東京の都大会では成孔がベスト4、青道がベスト8を記録している両チーム、まだ3回戦ですが好カードとなっております。」

「お互いに打撃を持ち味とするチームですから、点の取り方に注目していきたいですね。ですが、青道は今のところ、エースの武藤が予選を含めた4試合のうち、2試合に先発してはまだ無失点です。成孔打線は武藤をどうやって攻略するのでしょうか」

「エースの武藤は最速146キロの直球に、スライダー、カーブ、SFFを混ぜてくる、西東京屈指の投手ですね。コントロールは多少粗いところがありますが、ガンガンゾーンで勝負してくるスタイルに、ファンが多いですね。」

「夏までは、ここぞというときの制球に苦しんでいましたが、開き直ってゾーンで勝負するようになってから、成績を急上昇させていますね」

「強気なピッチングスタイルから、青道の現監督、片岡鉄心以来の闘魂エースとして期待されています。今年の夏の甲子園準優勝を経験した、稲城実業の精密機械、エース 南野 竜と投げ合うことがあれば、面白そうですね」

「現2年生はこの2人が、西東京の投手としては飛び抜けていますからね、期待していきましょう」

「後攻の青道オーダーはこのようになっております」

- 1 神田 セカンド
- 2 玉森 ライト
- 3 柳 センター
- 4 東 サード
- 5 栃谷 レフト
- 6 結城 ファースト

- 7 滝川 キャッチャー
8 山崎 ショート
9 武藤 ピッチャー

「昨年度の春の甲子園で活躍を見せた野手が、数多く主軸に残っていますから、なかなか怖い打線ですね」

「これに本来でしたら西もいますから、飛車落ちで戦うような形になります。それでも全国屈指の野手陣だと思いますよ」

「今日はどういった野球を見せてくれるのか！期待していきましよう。プレイボールまでもうしばらくお待ちください」

……

「さあ、試合が始まりました。初球、インコース低めにストレートが決まって1ストライク！成孔の1番打者に対して、いきなり強気な攻め方をしてきます。」

「このストレートですよねえ、伸びがあつて迫ってくるように感じるでしょうから、なかなか初見では捉えることは難しいでしょう」

「2球目もインコースにストレート！空振りを奪います！さっ！3球目もストレート！空振り三振！」

「気合いが入ったストレートで押してきますね！フルスイングをしてくる成孔打線にこの攻め方は予想外です」

▽

（くそ、ガンガン振ってきやがるな）

4回表、2アウトランナー1塁の場面で、マウンド上の武藤は汗を拭う。ゾーンで勝負するようになったが、時々コースを攻めすぎてフォアボールになってしまう、その悪い癖が出てしまった。

いまだノーヒットに抑えているが、フルスイングしてくる打線に対して、体力の消耗は普段より激しい。クリスとこの2ヶ月間しっかり

と話し、お互いのプレーを見て信頼関係を築いてきて、ようやくリードの組み立ての妥協点が見出だせてきた。それ故の今大会無失点。

迷いなくクリスのミット目掛けて、要求された以上のボールを投げ込んでいく。

「ストライク！バッターアウト！」

「よっしゃ！よくやったで武藤！」

「後ろから安心して見ていられるよ」

東、神田に声をかけられながらベンチへと戻っていく。

8―0と打線が確実に点を取り、エースである俺がしっかりと抑える。

（西がいたらもつと点数取って心折ってんだろな）

8点取ってくれている打線を頼もしく思いながら、まだ点数を取り足りないと思うのは欲張りになったなど、渡されたスポーツ飲料を飲みながら打席に立つ結城を見る。

（この強い形を保ったまま、居残りで頑張ってる1年生が更に後押ししてくれば、甲子園優勝も夢じゃない。不甲斐ない投球をしても、諦めず使ってくれた監督のためにも。そして、無理をすればベンチ入りして戦うことができたであろうに、あえて秋の大会のメンバー入りを見送って、俺達を信頼して休養に専念した西のためにも、まずは優勝しないとな）

「おおおー！」

結城のフェンス直撃のシングルヒットで、球場全体が盛り上がる。

（結城もクリスも頼もしいね。後輩がいい感じで活躍していると、俺もやらないとなって気になってくるぜ）



クリスのホームランで10点差となり、5回表を武藤が3人で締め、参考記録ながら、ノーヒットノーランを記録して、13―0のコールド勝ちを挙げた。

これに驚いたのは他の東、西東京の強豪チームの偵察であった。前

チームの夏の状態と、ほぼ変わらないレギュラー戦力に加えて、成孔の強力打線をノーヒットノーランで抑えるエースの台頭。

西の登録メンバー落ちで、評価を下げていた青道だが、結果で周囲を黙らせ、優勝候補筆頭と称されるようになった。

秋の都大会 準決勝 part 1

青道ではミーティングが行われていたが、次にあたることになった
国士館の1年生に注目していた。偵察班の2年生が説明する。

「1年生でありながら国士館の4番でエース、財前 直行。夏の時よりも体が大きくなって、140キロを越えるストリートに、スライダー、カーブ、フォーク、ツーシームと既に完成度の高いピッチャーです。コントロールも抜群で、夏の大会では財前自身は無失点、他のピッチャーが失点して負けたみたいです」

「あいつ西東京にいないと思ったら、東東京にいたのか」

と神田が言い、玉森、栃谷が苦笑いをしながら反応する。

「城南シニアで昨年の夏、エースだった男だ。対戦経験としてはクリス達の方があるかもしれないが、1から育てた西としてはどうだ？」
全員が西の方を向くと

「リトルから一緒ではあるが、中学2年生の秋頃から急激に球速が伸びたピッチャーだ。野球センスで言えば、おそらく市大にいた田辺さんに匹敵するものがあると思う。育ちきれば全国トップクラスのピッチャーになるだろうな。だが、まだ成長過程、うちの打線なら攻略できると信じている」

西の言葉に1軍メンバー全員が頷く。片岡監督は

「前評判は低かったのだが、国士館は打線、投手ともに財前が突出しているチームだ。1回戦の王谷を7回無失点で継投につなぎ、4回戦では帝東、市大三高に対して連投したエース、南野を休ませた稲城実業対して完投、2-1で競り勝っている。しかし、ここまで勝ち抜いてきているということは、勢いだけでなく、実力も伴っているチームだろう。油断はせずにいきたい」

片岡監督から目配せをされた偵察班は

「財前は5回戦には登板していませんから、恐らく準決勝の先発は財前で間違いないと考えられます。打線は大量得点はないものの、バントを絡めて得点を積み重ねていく、堅実な試合運びのイメージが強いです」

細かい情報を更に共有して整理していく。片岡監督は

「ベスト4に残っているのが青道、国士館、トーナメントの向こう側が創聖、仁王学舎だ。創聖と仁王学舎はともにエースがしっかりしていて、守備重視のチームだ。打線もこの2チームの方がしっかりしている。この事を考えるとできれば決勝にエースを持っていきたい。井手！」

「はいっ！」

「……明日の先発……いけるな？」

井手は立ち上がると

「いけます！」

片岡監督はうなずき

「任せたぞ」

しっかりと井手の目を見て、準決勝の先発に指名した。その様子を、今日到着したばかりのコーチ 落合 博光は、静かに顎をさすりながら見ていた。



財前は投球前練習を終えると、バックスクリーンの青道オーダーを見る。

先攻 青道オーダー

- | | | |
|---|----|---------------------|
| 1 | 神田 | セカンド (左) |
| 2 | 玉森 | ライト (右) |
| 3 | 柳 | センター (左) |
| 4 | 東 | サード (右) |
| 5 | 栃谷 | レフト (右) |
| 6 | 結城 | ファースト (右) |
| 7 | 滝川 | キャッチャー (右) |
| 8 | 山崎 | ショートの (右) |
| 9 | 井手 | ピッチャー (左、左スリークォーター) |

(名前見ただけでもこえーよ！西さんを中心とした、あの城南シニアの化け物集団に、柳さん、東さんとか馬鹿げてるわ！これに更に西さんいたら先発拒否するレベルだわ。あのクリスが7番とかやべーけど、6番のやつってそんなすごかったか？)

と首をかしげる。

(でもこれって、西さんいたらクリスが8番ってことだよな…：西東京で助かったと思っただろいいのだろうか…：)

首を振って弱気になった自分を振り払う。

(とりあえず1人1人抑えていくか)

左打席に入る神田さんを見ると、こちらを懐かしむような目で見ている。

(舐めんなよつと！)

インコース低めにストレートが決まるが、神田さんは今のボールを目に焼き付けるように観察していた。

(舐めているというよりは、冷静に確認作業をしているのか。もうひとつストライクカウントもらつとくか)

アウトコース低めにツーシームを投げると

カキン！

綺麗にセンター前にヒットを打たれる。

「神田さんさすがー！」

「このままとつたれー！」

青道側スタンドから、こちらを押し潰さんばかりの声援が沸き起る。

(甘くないのに綺麗に打たれたな)

息を吐き、肩の力を抜く。西さんに教わった気持ちの切り替えの大切さ、次のバッターで抑えるという気持ちでまず負けないこと。エースの立場であれば自分の心の状態次第でチームが揺れる。逆にこれを束ね、強固なものとする。

「打たれちまっています！またボールいくんでよろしくお願いますー！」

ちやんと笑顔で言えているだろうか。あえて先輩達とは違う高校に進学したのは自分を更に高め、自立していくため。しかし、東東京に逃げたのは、その先輩達に勝てないと思っていたから。

（今、俺は国士館のエース 財前 直行。恩返ししたい相手は離脱してるが、この姿を見せつけてやる！）

玉森さんを三球三振に仕留め、財前は雄叫びをあげる。

秋の都大会 準決勝 国士館 part 2

結城はネクストのサークルでじっと、マウンド上の財前を観察する。現在7回表、ノーアウト1、2塁のチャンスの場面で、バッターは5番の栃谷さん。

6回裏まで、お互いのピッチャーが奮起して、点を取られはするものの、大崩れしない展開であった。3―4で負けてはいるが、財前の消耗を見る限り、7回表が限度であろう、それくらい先輩達のプレッシャーが強い。

今も栃谷さんは、簡単にアウトにならないように、粘り強いバッティングをして、フルカウントまで持ち込んでいる。その間にも、ランナーの柳さん、東さんがアピールをして、ランナーの存在を財前に意識させてプレッシャーをかけていく。

スタメンでの出場に慣れてきて、周りを見てみると、先輩達は今自分にできることをしつかりとこなし、チーム一丸となって相手投手を攻略しようとしている。自分のバッティングのみに集中していたことに恥じるとともに、このチームの一員に真の意味でなれるように、先輩がどう行動しているのか、どうプレッシャーを相手にかけているのかを見て学んでいく。

「ボール！フォアボール！」

「じゃあ！結城！リラックスな！」

後ろの打者を信頼して、後に繋げる。その姿を目に焼き付ける。返事として軽く頷いて打席へと向かう。

相手の財前は中学時代、手も足も出ないほどの実力差を見せつけられた相手。しかし、今の自分は2年生、特に柳さんにアドバイスを受け、確実に野球がうまくなっている。

（先輩の信頼は裏切れないし、努力は嘘をつかない）

そう思って、自然体でバットを構えて、財前を見る。11月になり、気温は低くはなってきたているが、汗の量がすごい。

（ノーアウト満塁でのプレッシャーはすごいのだろう。簡単な攻め方はしない。後ろにクリスもいるからな）

アウトコースから逃げていくスライダー、アウトコースの少し外れるストレートを見逃して2ボール。

(押し出しを嫌がって入れてくるか?)

インコース、甘めに来た球を弾き返す。

(くっ！ツーシームか！つい手が出てしまった)

シヨート後方へボールが飛んでいく。

「おちろおおお！」

シヨートが後方へ向かって飛び込むと

「アウト！」

すかさず3塁ランナーの柳さんが、タッチアップをして本塁を陥れた。

「おおおお！」

応援席やベンチから歓声が聞こえてくるが、あまり納得はできない。

「てっちゃん！めっちゃん叫んどったな！気持ち伝わってきて、えかったよ。バットを振りきれとったし、ちゃんとかういう時に点取れるのが大事やんな」

そう言いながら、俺の頭を撫でまくってくる。

「これで同点や。次はクリスを応援したらな」

柳さんの言葉に頷くと、大人しくベンチへと戻り、ハイタッチをしていく。クリスの打席を見守っていると

(お互い笑っている?)

同点で1アウトランナー1、2塁の場面、7番打者という字面だけ見れば希望はあるが、バッターはクリスである。1年生ながらエースとして堂々とした振る舞いをする財前と、完全な正捕手として投手陣をまとめるクリスが眩しく見える。

「うてえー！クリスー！」

大声で応援すると、クリスはチラツとこっちを見て頷く。

「丹波あ！お前も応援してやれよ！」

「はっはい！がんばれえ」

「シャキツとしろ！」

「がつがんばれー！」

その様子にクリスは力が抜けたのか、財前との勝負に集中する。その5球目、アウトコースへ逃げるスライダーを打つと、ライト方向への球足の速いゴロとなる。

「ぬけろおおお！」

セカンドが飛び付くが、グローブの先を抜けていく。

「とまれーとまれー！」

1点を阻止するために前進守備をしていた外野を見て、ランナーコーチャーが東さんを止める。1アウト満塁となり、更に球場の緊張感が増していく。財前は力を振り絞ってボールを投げる。

山崎さんが、3球目のカーブを打つが、サードへの正面のゴロとなり、5―2―3のダブルプレーで同点になんとか抑えた財前は、マウンドで雄叫びをあげるが、ふらついたところを内野陣に支えられてベンチへと戻っていった。

その財前の気迫に息を呑む丹波の左肩を、武藤さんが軽く叩いていたのが印象的であった。



記者の峰は本日行われた、青道 v s 国士館の試合をまとめていた。「今日の試合、結局青道は井手くんが4失点ながら完投したか。対稲城実業戦のように財前くんが完投して逃げきると思いきや、4失点でなんとか試合を作るも7回でスタミナ切れ。後の投手が8回に3失点、9回に5失点と抑えきれなかった。今日の財前くんの球数は140球越え、あの打線を相手になんとか粘ったというところだろうか。稲城実業に対しては9回で107球、打線の差で青道は勝ったのか」なるほどなと頷きながら記事をまとめていく。

「結果的には12―4と地力の差が出てしまった。国士館は財前くん以外の投手の育成、打線の成長がないと今後厳しいだろうな。青道は西くんがいない状態でこの破壊力、昨年の主力がほとんど残ってい

て、今年も全国一の野手陣と称してもいいだろうな」

記事の見出しや、この内容をどう記事に書いていくかを峰は夜遅くまで考えていくのだった。

新入りの影響はいかに

「続いてはスポーツの話題、本日、高校野球の秋の都大会、決勝が行われました。ここまですべての試合で二桁得点をしてきた青道高校と、エース 綿貫を中心とした守備のチーム 創聖高校」

「先攻の青道高校は初回、いきなりのノーアウト満塁のチャンスでバッターは主砲 東。創聖高校エースの綿貫が投げた初球のツーシームを、バックスクリーンに叩き込んで満塁ホームラン。豪快に先制点をあげました。」

「後続も打ちに打ち、1回に一挙8点を取ってエースをいきなりノックアウト。このまま流れを止めることができずに、2回、3回と青道は得点を重ねていきます」

「投げては青道の闘魂エース 武藤が、1人もランナーを出さないパーフェクトピッチング。9回32―0で勝利を挙げました。青道高校は昨年に引き続き、秋の都大会を制覇し、神宮大会および春の甲子園への切符を勝ち取りました」

「いやあ、青道の打線は相変わらずすごいね」

「昨年に引き続き、全国一の野手陣と言われていますね。昨年の主力がほとんど残っていて、その中に1年生が2人食い込んでいるみたいですね」

「新戦力もよく馴染んでるみたいだね。今年もいいチームそうだな。それに柳、東、西のクリーンナップは、高校生ピッチャーには脅威だろうしね。並みのピッチャーじゃ抑えられないね」

「西くんは怪我で今大会は離脱してたそうですね」

「あー……そう……早く治して帰ってきてほしいね」

……

落合コーチは別のニュースになると、テレビを消して現在の青道について分析をしていく。

野手レギュラー陣

1番 神田 陽一郎 2年生

右投げ左打ち セカンド (外野手)

選球眼、ミートに関しては全国トップレベル。高い出塁率を誇り、走塁、盗塁に関して右に出る者はいない。精神的に大人びており、冷静に判断を下せるタイプ。好不調の波が少なく、指揮官タイプのキャプテンとしてチームを牽引する。

2番 玉森 孝太 2年生

右投げ右打ち ライト

変幻自在のバツティングをする、すべてが高水準のバッター。器用さも兼ね備えており、バントなどの小技も熟すため、この打順となっている。長打力もあるため他の打順に置いても面白そうだ。

3番 柳 圭司 2年生

右投げ左打ち センター

打撃に関してはパワー以外は超高校級であり、夏よりも更に成長を遂げている。長打力も申し分なく、チャンスメイク、得点力共に穴がない。東が後ろにいるため、かなり勝負を挑まれるが、ことごとく相手を粉碎しており、国士舘戦では初回到財前からホームランを放つなど、かなり相手ピッチャーに対する脅威となっている。

4番 東 清国 2年生

右投げ右打ち サード

打線のキーマンの1人。この選手が打てば打線が止まらなくなるため、相手としては必ずこの男を抑えなければならぬ。ミート力は全国トップレベルであり、パワーに関しては即プロで通用すると言われるほど、恵まれた体の持ち主。最近では体が絞れてきており、俊敏さにも磨きがかかっている。正直敬遠が妥当。

5番 栃谷 薫 2年生

右投げ右打ち レフト (ファースト)

東が簡単に勝負を避けられないのは、この男が後ろにいるから。ミート、パワー共に全国トップレベルであり、勝負強さは東をも越える、強固な精神力を持っている。正直夏の大会で藤堂がレギュラー入りしたのは、片岡監督の情によるものではないかと思わされる。それが悪い方向にいかなければいいのだが……

6番 結城 哲也 1年生

右投げ右打ち ファースト

まだ粗いところが見られるが、集中したときのバッティングは、将来の4番は彼に、そう思わされるスラッガー。時折見せるエラーはこれからの経験で減らしていけばいいであろう。それを補ってあまりある打力の成長に今後期待したい。

7番 滝川・クリス・優 1年生

右投げ右打ち キャッチャー

打撃に関しては既に全国でも通用するように思える。キャッチャーという負担のかかるポジション、1年生でまだ体が出来上がっていないとの判断で、頼りきるのではなく、2年生の岸谷と併用して、片岡監督が念入りにケアをしているのが印象的か。

3年生の蜂須賀が、「肩に違和感があるままプレーするとかえってチームに迷惑がかかる、西の件でそれはわかるだろう。無理はせずに岸谷を、そして宮内を信じてやっていくように」と滝川に言っていたのはよかった。真面目が故に溜め込むタイプの怪我は正直見抜けないところがあるから、それを牽制してくれただけでもよかったと考える。定期的に検査をして大事に育てていくべし。

仲良くなったらクリスと呼んでみたい。

8番 山崎 恭平 2年生

右投げ右打ち ショート

ミートが上手く、守備もしっかり鍛えられている穴のない選手。他

の強豪だとレギュラーだろうが、西が戻ると厳しいだろう。

投手陣

注目すべきは武藤、井手くらいであろうか。他はこれからの成長に期待して、アドバイスをしていくべきだろう。

武藤 晃太 2年生

右投げ右打ち オーバースロー

最速146キロの直球、ツーシーム、スライダー、カーブ、SFFが持ち球。ストレートは非常に伸びがよく、強豪校にゾーンで勝負しても問題ないレベル。ほかの球種も精度よい。総合的に見て全国区と言つて間違いないだろう。先日教えたスローカーブをものにすれば、更に活躍してくれるのではないだろうか。

井手 勇太 2年生

左投げ左打ち スリークオーター

滝川とフォーム改良を重ねてスリークオーターになったとのこと。直球の最速138キロと、球速だけでは全国で戦うには少し心許ない。しかし、コントローラは抜群のため試合を作ることは可能であろう。持ち球はツーシーム、スライダー、スクリュー、シユート。縦方向に落ちる球、特に緩急となるチェンジアップを覚えさせたいところ。

神宮大会を戦う主要なメンバーをまとめ終えて、落合コーチは一息つく。この時期に既に、野手陣には1番から7番まで、ほかの強豪校であればクリーンナップを打たせても問題ない選手が並び、絶対的エースが完成間近。

(こんなチーム、自分で指揮してみたいなあ)

そう思わざるをえない陣容に、片岡監督を羨ましく思う。この才能の塊のような世代がいて、片岡監督のようなモチベーターがいる。そこにスルツとアドバイザーとして、ちよいちよいと方向を修正して、

更によい方向へ向かわせる。

(なんか黒幕みたいでかつこいじじゃないですか)

これだ!と思った。普段は若い片岡監督に矢面にたってもらい、肝心な時にしっかりと助言をする立ち位置。

(片岡監督は、栃谷や神田をレギュラーから外して、上の学年を使う情に厚い監督だ。厄介に思われるかもだが、情を無視した冷徹な指揮の提案、これをあえてしていくか)

雇われたからには、しっかりと仕事を全うする。これが落合 博光なのだ。

紅白戦

神宮大会を準優勝で終えた青道では、片岡監督ら首脳陣が話し合っていた。

「初戦と準決勝は武藤くんが投げきつて、9回1失点と9回2失点で相手を抑えることができました。しかし、準々決勝では先発の遊佐くんが4回3失点、榎原くんが2回4失点、井手くんが3回1失点。決勝では先発の遊佐くんが2回5失点、丹波くんが3回4失点、井手くんが4回無失点。投手陣は、武藤くんと井手くん以外の計算が難しくですね」

高島副部長はそう言うのと、ため息をつく。

「エースの武藤は昔の監督を思わせる投げっぷりがいいですし、井手はコントロールがとてもいい！いっその二枚看板でいきましょよ！」

と太田部長は捲し立てる。片岡監督はじっと聞いていて、なにも返さない。すると落合コーチが

「いっそのこと紅白戦で競わせてはどうでしょう？1軍の遊佐、丹波、榎原と2軍の後藤、伊佐敷の計5人を。後藤は最近安定しているようですし、伊佐敷もコントロールが改善しつつありますし、正直5人とも同じくらいのレベルでしょう。でしたら試合で結果を残せる投手を使うべきかと」

「ここで過去の結果を考えるより、よほど建設的ですね。冬合宿を終えた新年に、1軍のベンチ陣と2軍で紅白戦をしましょうか。このオフに成長を遂げる選手もいますから」

片岡監督はそう返して、お茶を飲む。つづけて

「野手陣も現レギュラーがほぼ2年生である現状、2軍の1年生の状況も確認したい。結果によっては1年生を1軍にあげることにはしましょう」

そう言う片岡監督の頭には、居残り練習を続ける1年生メンバーの顔が浮かんでいた。



1月になり、紅白戦のスタメンを見て、落合コーチは考える。

(野手をぐちゃ混ぜにして戦力を一部以外均等化したのか。果たしてどの選手がアピールするのか)

紅チーム 先攻

- 1 石橋 センター (左)
- 2 小湊 セカンド (左)
- 3 城之内 ライト (左)
- 4 道川 ファースト (右)
- 5 藤谷 キャッチャー (右)
- 6 栗山 ショート (右)
- 7 佐川 サード (右)
- 8 木村 レフト (右)
- 9 後藤 ピッチャー (右、右オーバースロー)

白チーム 後攻

- 1 清水 センター (右)
- 2 坂井 ライト (右)
- 3 会田 ファースト (右)
- 4 西 ショート (左)
- 5 増子 サード (右)
- 6 坂本 セカンド (左)
- 7 宮内 キャッチャー (右)
- 8 門田 レフト (右)
- 9 遊佐 ピッチャー (右、右オーバースロー)

(白チームは野手の半分が1年生。選ばれた1年生は全員、残って素振りなどをしているメンバードだが、こいつらがどうチームに貢献するか、見定める必要があるな)

果たしてチームとしての突き上げはあるのか、それを見ていきたい。

(それにしても、小湊が紅チームか……片岡監督は坂本よりも評価しているのか?……)

試合が始まり、選手がどう動いているか、光るものがあるかをチェックしてメモをする。外野は2年生の石橋、城之内がやはりいいな。惜しむらくは柳、玉森、栃谷といった全国クラスが揃っているから、出る場所がないといったところか。

内野はセカンドの小湊の守備に光るものがある。負けん気が強く、球際に強いのは魅力的だな。ミートも上手くなってきている。新チームでは主力をはれるか?

増子も大味なところはあるが、長打力に関しては光るものがあるな。守備で気が抜けるところがあるのが難点か。

宮内はもつと体を鍛えて、太くしていかないとな。

西は別格だが、この道川のバッティングもいいな。紅海大相良の新チームにこいつがいたらクリーンナップだろうな。藤谷はリードをどうにかした方がいいな。

(ん? あれは)

「こんにちは! まだ中学生なんですけど見学に来ちやいました!」

「……こんにちは……」

(いきなりヤンチャそうな中坊に話しかけられたナウ)

「いやあ、兄貴が出るって聞いてたんで見に来たんですよー! 元気そうにまた野球できてるの見てよかった! うん! 満足した! シニアはわざと違うところに行ってたんですけど、明後日青道の一般入試受けるので、受かったらよろしくお願いしますね! では!」

(一方的に話しかけられてどっか行ってしまったな。しかし今のやつ、見たことあるような気もしないでもないが、血の繋がりのありそうなのいたか?)

少し疑問に思うが、首を振って再び紅白戦を見ていくことにした。

…

紅白戦が行われた夜、青道の首脳陣は誰を18枠に選ぶか意見を交換していた。

そして現在当確なのが

投手

武藤、井手、丹波

捕手

滝川、岸谷

内野

結城、神田、西、東、道川、山崎

外野

栃谷、柳、玉森、城之内、石橋

計16名が決まり、残り2枠でヒートアップしていた。片岡監督が「トーナメントであるから、投手をもう1人入れておくべきだろう。遊佐、後藤、伊佐敷、槇原の4人のうち1人を挙げるなら伊佐敷がいと思うが、みなさんはどう考えますか?」

「伊佐敷に経験を積ませるのは大事だと思いますよ。次のチームの柱にするために」

うんうんと頷きながら落合コーチは答える。

「経験ということなら、守備が比較的しっかりしている小湊はどうですか?」

「たしかに上手かったですね!賛成ですよ!」

と太田部長は答え、特に反対意見もなかったので、春の甲子園のメンバーがこれで決定した。

背番号としては

1 武藤

2 滝川
3 結城
4 神田
5 東
6 西
7 栃谷
8 柳
9 玉森
10 井手
1 丹波
1 岸谷
1 道川
1 山崎
1 城之内
1 石橋
1 伊佐敷
1 小湊
となつた。

春の甲子園大会 初戦

「テレビの前のみなさんこんにちは！春の甲子園、1日目の第一試合が始まろうとしています。初っぱなから強豪同士の試合となります。先攻が青道高校、後攻は白龍高校となっています」

〈打の青道と機動力の白龍、どちらが今大会の勝利をいち早く手にすることになるのか、楽しみですね〉

「青道のオーダーはテレビ画面上のものとなっています」

先攻 青道オーダー

- 1 神田 セカンド (左)
- 2 西 ショート (左)
- 3 柳 センター (左)
- 4 東 サード (右)
- 5 栃谷 レフト (右)
- 6 結城 ファースト (右)
- 7 玉森 ライト (右)
- 8 岸谷 キャッチャー (右)
- 9 武藤 ピッチャー (右、右オーバーロー)

「白龍は4番の蒲生くんに期待していききたいですね。」

〈すべてにおいてトップレベルの選手ですから、この試合でも活躍してくれることでしょう〉

「初回、青道の攻撃は、1番神田から始まります。白龍のエース土井は粘りきれぬでしょうか？」

〈最速138キロの直球に、スライダー、スローカーブ、シンカーといった変化球を持っています。右のサイドスローで、少し独特なフォームが特徴的ですね〉

「さあ、プレイボールです！」



西は、サイレンが鳴ってから、ネクストのサークルに入る。横からボールの軌道を確認していく。神田が軽々とバットに当てていることから、そこまで脅威なピッチャーではないと把握する。

(変則的なピッチャーに見せかけるために、余計な動作が入っていて、十全に体を使えていないピッチャー、何を恐れることがあるのか)

神田が9球投げさせてから、センター前に軽くヒットを放つ。いつもの光景に青道ベンチは落ち着いたものだが、白龍ベンチは動揺を隠せない。

そして、ここからは青道にとつても普段とは違う。練習戦で試したことはあっても、公式戦では初となる打順構成。

「2番 ショート 西」

「おおおー！まっつたぞー！」

甲子園に怪物が戻ってきた。

西は打席に立つと、全く力感のない様子でバットを軽く構える。

(決め球のシンカー打ってみたいな)

大雑把にやることを決める。片岡監督からは、何をするかは神田と西に任せると言質をとっている。なので、やりたいことを2人でやらせてもらう。

「走ったー！」

神田が初球から果敢に2塁を陥れる。

(様子見に慎重に投げようとしてきたけど、初球の盗塁に焦ってボールが外れたのかな?)

ボールカウントが1つ増えて、ノーアウト2塁のチャンスとなる。

(バッターを気にしすぎて、ランナーが頭から抜けてるな)

バッターの威圧感に吞まれ、相手エースの土井は正常な判断ができていない。

(神田、相手のお株奪ってしまえよ)

「はっ！走った！」

インコースに攻めてきたスライダーを、わざと当てないようにフルスイングする。

「キャッチャー弾いた!」

白龍のキャッチャーはなんとか前にボールを落とすが、ボールをつかんだ頃には、神田は悠々と3塁に到達し、余裕の笑みを浮かべている。

(来るだろう?ここで自信のある決め球、シンカーがよ)

コースはしっかりと外角低め、しかし球種が分かっているには

カキイイイン!

逆らわず、それでいて力強い打球がレフトスタンドに突き刺さった。右拳を掲げてベースを踏んでいく。スタンドからの歓声を浴びながら、次の展開について考えていく。

ホームに到達すると、神田と柳に迎えられる。ハイタッチしながら小さな声で

「打ち頃だぞ」

と伝えると柳はニヤツと笑って打席に入っていく。ここから白龍高校の悪夢が始まった。



「試合終了!春の甲子園の開幕試合、強豪同士の戦いでここまで差がつくとは思いませんでした。初回到12得点をあげた青道高校は、そのままの勢いで白龍高校を31-2で下しました。3回までに24点とった青道は控え選手を次々と投入してきましたね」

へそうですねえ、白龍の投手陣がかわいそうになるくらいでした。それに対して青道は、エースの武藤は5回を投げて、打たれたのは4番の蒲生のヒット2本のみでした。投手力の差というよりは、打線の差がでかすぎましたね」

「白龍の打線も悪いわけではないと思うのですがね。後半に出て

きた1年生ピッチャー2人から、しつかり1点ずつとれていきますからね。4番の蒲生は3安打と1人だけ気をはいていましたね」
「青道の打線が規格外でしたね。1番から8番まで切れ目のない打線を、全国の好投手がどう抑えていくのでしょうか、注目していききたいですね」



初戦に快勝をして、宿に戻るレギュラー陣を見ながら、落合コーチはプルプルと震えていた。

（滝川を温存してこの得点力……地方大会レベルのピッチャーならあぁなってしまうか……）

明らかに意図的にチームの打線に火をつけた西を見る。

（色々と探ってみたが、この打線の相手になりそうなのは、大阪桐生の兵藤、稻城実業の南野くらいだろうな。それ以外だと神田、西の1, 2番コンビに崩されて、そのまま終わってしまいそうだな）

髪をポリポリとかく。

（スター集団に上位個体加わって、手がつけられないナウ）

西が加わっただけで、更に強力になった青道打線の完成形に、苦笑いするしかなかった。

春の甲子園大会 準決勝 Part 1

青道は打線の得点力を武器に2回戦、準々決勝を勝ち進み、ベスト4を確定させていた。次の相手は大阪桐生。

大阪桐生は、エースである兵藤と、2番手でありながら注目を集める館の二枚看板で、ここまで勝ち上がってきた。また野手の人材も豊富であり、青道打線の名声がここまで上がっていないければ、スター集団と呼ばれていてもおかしくない陣容であった。

ベスト4に残っているのが青道、大阪桐生、巨摩大藤巻、西邦の4チーム。片岡監督ら首脳陣は各高校の戦力を分析していく。

残る2校のうち、巨摩大藤巻は、打線は全国区ではあるが飛び抜けて強打者がいるわけではない。投手陣にも飛び抜けた選手はおらず、継投で繋いでいくチーム。

西邦は新2年生の佐野を4番に置き、3番にキャプテンでキャッチャーの飯岡が座る攻撃型のチーム。去年の斎藤のようなエース格がおらず、飯岡のリードを活かせる有力な投手不在なのが弱点となっている。

片岡監督は腕を組みながら

「決勝であたる巨摩大藤巻と西邦の投手陣ならば、うちの打線であれば打ち崩せるだろう。大阪桐生の兵藤の対策を練る必要があるな」

「そうですね。兵藤に対してエースを、武藤をぶつけるのが無難でしょうな。2番手の館もいますから、下手すれば武藤に完投してもらわねばなりません」

と言いながら、落合コーチは座っている椅子をいじる。

「うちの打線の起爆剤は東と西の2人。であればこの2人にチャンスを作ってもらうか、ものにしてもらうか。そのどちらかができれば兵藤に揺さぶりをかけ、攻略することが可能でしょうな」

「西のチャンスメイク能力と、東の勝負強さを全面に出せるような打順構成。相手を驚かせるものがあればなおいいかもな」

「ふむ、いつそのこと西を1番に置きますかな？それでチャンスに強い打者を後ろにごっさりもってくる。神田↓西への流れも捨てがた

いとなるとこうですか」

- 1 西 ショート (左)
- 2 柳 センター (左)
- 3 栃谷 レフト (右)
- 4 東 サード (右)
- 5 結城 ファースト (右)
- 6 滝川 キャッチャー (右)
- 7 玉森 ライト (右)
- 8 武藤 ピッチャー (右、右オーバーロー)
- 9 神田 セカンド (左)

「4番を動かすのはよくないと思い、こうしましたが、片岡さんはどう考えますかな？」

そう落合コーチが聞くと、片岡監督は落合コーチの方を向いて「いえ、神田が9番はもつたいたない気もしますが、打順が回ってくれば、4番栃谷のような打線でバランスはいいと思います。東もつづく打者が結城、クリスであれば敬遠もないだろうな」
こうして準決勝のオーダーは決定した。

▽

大阪桐生の兵藤は、青道のオーダーを見て戦慄する。

(1番厄介な西が先頭打者か……マウンドに上がってから落ち着く時間もくれないか……)

腕を軽く回してからぐつと伸びをする。

(つづく打者が柳、栃谷、東……どこのオールジャパンだよ……)

明らかに、1チームに所属しているいいメンバーではない青道打線に、嫌だなーと思うのと同じにワクワクしている自分に気がつく。

(事実上の決勝戦、派手に散ってやるか!)

気合いを入れ直してベンチから1番打者を応援する。

(幸いにしてこちらの先攻! 勢いをつけたいぞ!)
しかし

「ストライク! バッターアウト!」

青道エースの武藤が、大阪桐生打線に立ちはだかる。

「監督、決勝考えずに全力で投げるんで、お願いします」

「・・・せやな、1チームに1人いれば全国にいける。そんな打者が相手に何人もおるんや。館もおる、いってこいや」

「はいっ!」

三者凡退に仕留められ、兵藤はマウンドへあがる。

「さあー! 守備でリズム作っていくぞ! 確実に1つずつな!」

日本のエースとして負けられねえよな。強い心をもって自分の知る最高のバッターと対峙する。

(この圧倒されるような雰囲気、やっぱやばいな)

手の汗を拭い、キャッチャーのサインを見る。それに頷き、初球、インコースにドロップカーブを投げるが、西は反応を見せない。

「ストライク!」

西が素振りをする、今のドロップカーブをホームランにされる映像が、頭に強烈に浮かんでくる。

(もうこの球は西に使えない)

打たれる気のある球は投げれない。持ち球をフルに使って抑えるしかないが、それは後続に球種を伝え、見せることにも繋がる。

2球目はアウトコース低めのストレート。西の想像していたものより伸びていたのか、ファールとなる。そして3球目を同じコースへ

ガキイ!

球足の速いゴロが二遊間を抜けていくヒットとなる。

(情報のない初見のカットボールを、手首を捻って無理やり二遊間に転がしやがった! 普通ならアウトだろうが!)

ロージンを触りながら、想像していたよりも、相手が成長していることに対する動揺をおさめていく。

「2番 センター 柳」

再びスタンドから歓声が、津波のように襲いかかってくる。

(初対戦だが、こいつも同類だな)

直感で柳も別格の存在であることを感じとる。

「ザッザ……ザッ……ザッ」

(くそーランナーに西がいるせいで、柳だけに集中できねえ！)

気持ちを切らさないように、ルーティーンとして、軽く肩を回してセットポジションをとる。牽制を2球続けるが、西のリードは小さくならない。

2つのファール含めて6球で2―2の平行カウントになるが、柳は簡単にアウトになってくれない。

(まだ初回、冷静にいくぞ)

キーン！

決めにいったインコースのカットボールを、上手く当てられてファールにされる。続く外のストレートも合わせられてファールに。

「走った！」

咄嗟にアウトコースへストレートの軌道を変える。

カーン！

「くそっ！」

ゴロを打たれ、振り向くと、2塁ベースカバーに動こうとしたショートの、無理矢理3塁方向へ飛び込むが、そのグローブの先をギリギリボールが抜けていくのが見えた。

「セーフ！」

ラン&ヒットが成功し、ノーアウトランナー1、3塁となる。

「3番 レフト 栃谷」

中学時代よりも遥かに成長した、勝負師が打席に姿を現した。

春の甲子園大会 準決勝 part 2

結城は、ベンチでバットを握りながら、栃谷さんがボールに食らいつくのを見ていた。栃谷さんは、狙い球を決めてしつかりと打ち返し、それ以外の球種は反応だけで対応する、比較的自分と似たようなバッター。

自分よりも完成されているそのスタイルに、将来の自分を重ねる。
(…：体格差…：か。こればっかりは天のみぞ知るか)

体は中学時代と比べ、かなり大きくなってきているが、先輩達と比べればやはり見劣りする。

(精進あるのみ！今は試合に集中しろ！)

カキイイイン！

強烈な打球がレフトフェンスに直撃する。しかし、レフトがクツシヨンボールを素早く処理をして、柳さんは3塁でストップする。西さんはホームインし、先制点をあげる。

ノーアウト1，3塁の形がまたできあがった。

「よし！あの兵藤から先制いけたな！」

珍しくスタンドから、得点をあげたことを喜ぶ声が聞こえてくる。

(そう言えば、普通は点を取るの難しいことだったか)

怪物世代に毒された思考をもった結城は、ネクストのサークルに向かう。

東さんは2球見たあと、インコースのストレートを打ち返して、センター後方まで運んでいくが、センターのファインプレーに阻まれる。犠牲フライとなり、柳さんがホームへ。

「てっちゃん、兵藤のやつエンジンかかってきてん。東が差し込まれよった」

その言葉に驚く。

「まあ世代No. 1ピッチャーや。気楽に振っていくんやな」

背中を軽く叩いて、柳さんはベンチに戻っていった。

打席に入ると、確かに雰囲気のあるピッチャーだと感じる。財前との対戦以来の好投手に気合いが入る。ケースは1アウトランナー1塁。

(っ！)

浮き上がってくるようなストレートの、思わず手が出てしまう。

(1度打席を外して落ち着くか)

軽く素振りを2回して打席にもどる。2球目のアウトコースのストレートに手が出ずに見送る。

「ストライク！」

(これを先輩達は打ったのか)

インコースのドロップカーブに、なんとか当たってファールにする。

(これだけ少し精度が低いか)

次に投げられたインコースのボールを振り抜く。

「ストライク！バッターアウト！」

(ベース直前で急激に落ちた!?)

ストレートと違って始動してバットを振ろうとするが、落ちることに気づいた時には遅かった。

(球速が同じだったから、おそらくあのストレートですら加減して投げられていたのか)

最初から兵藤さんの術中にはまっていたことに、悔しさが込み上げてくる。東さんに急に頭をわしやわしやと撫でられ

「世代No. 1はすごかったか？」

「完全にやられました」

「稲城実業にも同じようなのがおるからな。まあ、変に考えずに思いつきりぶつかっていけや」

周りの先輩達もニヤニヤしながらこっちを見ている。

「なっ！なんですか？」

「びびってたら道川に変わってもらえって言うところやったけど、こっちは元気がよったらその必要もなさそうやな！残念やったな！道川！」

「ケツ！結城！中途半端は許さねえからな！」

ふんつとそつぽを向く道川さんに対しても、周りのみんながニヤニヤして見守っていた。



峰記者は、青道の取材のために、甲子園のスタンドでメモをとっていた。

現在8回裏が終わり、9回表、大阪桐生の攻撃の場面だが、いまだに青道エース 武藤を攻略できていない。現時点で7―1と青道がリードしている。打線は水物、兵藤が完封の可能性も、そんな見出しをした記事はあったが、予想は大外れ。青道の野手、一人一人が自分のできることをこなし、兵藤を攻略した。

兵藤は7回5失点、館は1回2失点と全国屈指のピッチャー陣ですら抑えることが難しい、青道打線は今後そういう位置付けになるだろう。

「打の青道、かなり大きく出た名前だと揶揄されることもあったが、この試合を見ると名前負けしない、よく鍛えられた打線だというのが分かる。片岡監督も若いだろうに、よくここまで育て上げたものだ」
武藤が9回1失点の完投勝利をあげたのを見届けて、席を立つ。

（絶対的エース 武藤、2番手に井手、冬を越えて戦力として育ちつつある丹波、伊佐敷。この4枚の投手陣に、去年よりも更に破壊力を増した全国一の打線。夏の優勝候補筆頭も青道で間違いないだろう）
そう確信する。

（とりあえずは腹ごしらえだな）

ずっと追っている青道が活躍しているおかげで、待遇が良くなってきていることに満足しながら、うどん屋へと入っていった。

後日、春の甲子園決勝で、青道は巨摩大藤巻を2―1―4で圧倒し、悲願の甲子園初優勝を遂げることとなった。

敗将となった巨摩大藤巻の新田監督は

「タイプの違う投手5人を育て上げたが、ことごとく全員が打たれた。継投して一時しのぐも相手全員がスター選手。なかなか打つ手がなかった。絶対的なエースを育てないと、あの打線を抑えることは難しいだろう。団結力では互角だったかもしれないが、圧倒的に個の強さで負けていた。それが敗因です」

そうインタビュに答えた。

高校3年の夏 プロリーグ

青道野球部が甲子園から帰ってきた翌日、春の甲子園を制覇したばかりではあるが

「連覇するには練習やな」

その東の一言から自主練習を既に始めている3年生に触発され、2年生の一部選手達もバットを振っていた。しかしその雰囲気はなかに「先輩達は更に打てるようになるつもりかよ」

「あれだけ打てたら十分だろうがよ」

自分達はここまで、練習をよくがんばっている。甲子園を優勝したから俺達青道は強い。そう思っただけを抜く者達がいたのも確かであった。

1つ大きな目標である甲子園優勝、それを成し遂げたことによる自信と傲慢。肌で甲子園の怖さ、強さを感じ取った1軍は問題ないが2軍以下の、今まで高校に入ってから持ち上げられてこなかったメンバーにこの傾向が顕著であった。

青道の野球部に所属しているだけで、すごいと言われる、そんな環境になってしまったが故の現象であった。

片岡監督、落合コーチはそれに気づくが、練習中に気合いが入っていないとかであれば注意できるが、そういうわけではなかった。浮かれています、練習はちゃんとやる。2年生に多いのが、甲子園に優勝したメンバーなのだから、レギュラーになれなくても仕方ない。課せられた練習をやって、上の学年が抜けたらそれで甲子園にレギュラーとしていける。

もちろんそれを是としない子達もいるが、大多数が現状に満足している、そのような印象であった。

そこへ、新入生が入寮、入部してきた。

朝練習の前に、真木、御幸、倉持など、シニアで結果を残した選手

達が自己紹介をしていった。そして最後の1人が

「松方シニアの西 影次です！スカウトの返事を保留してて、結局一般入試で入りました！ポジションは内外野一通りできます！兄を越えるために来ました！レギュラーを1年生のうちから取りにいきますので、よろしくお願ひします！」

「え、あの西さんの弟？」

「松方シニアの全国ベスト4の原動力になった主砲だろ？ちよつと粹やばいんじゃないかね？」

場がざわつくなか

「監督の片岡だ!!みんなも知つての通り、我が青道は春の甲子園の覇者として帰って来た。特に3年生にはスター選手が多い。高校野球の練習に徐々に慣れてもらうのはもちろんだが、君達には近くにいる全国に通用する先輩達の練習への姿勢、態度、心構えを目で見て、肌で感じてほしいと思つている。そのなかで、学年関係なく1軍、2軍に引き上げるつもりだ」

2年生の方向をサツと見て

「覚悟をしておいてくれ」

「っ！はいっ！」

(なるほどなあ)

浮わついていた雰囲気、2年生から少し消えたのを見て、落合コーチは安堵する。

(3年生がいたからこそその甲子園優勝、現2年生では結城、滝川以外は全国レベルではない。よくて都大会ベスト4止まりであろう。今成長を求められるのは2年生よな)

1年生の初練習、体力測定では西の弟が別格、次点で御幸であった。他にも白州、倉持、真木など優秀な結果を残す者がいた。

その日の夜である。片岡監督と落合コーチは監督室で、今年の構想を話し合う。

「まずは投手からいきましようか、新入生では真木、川上が特に見込みがありそうですね」

「私もそう思います。真木は丹波とタイプは被りますが、性格が違い

ますから、いい競争相手になりそうだ。川上はコントロールがいい、今後身体が大きくなって、試合を作ってくれる選手になればいいが」

2, 3年生に關しても話し合うが、見解は甲子園を経ても変わらなさそうだ。

「野手は西の弟、御幸の2人は試合にすぐ出しても大丈夫そうですね。新チームで2年生の突き上げを、もしくは現チームを押し上げてくれるかもしれない」

「あの2人には期待していききたい。せつかく3年生がいてくれるので、その中に放り込んで、レベルアップを図るのが面白いと考えている」

「なるほど、あの雰囲気慣れさせるのはいいですね。ちょうど春大会は枠が2つ増えますから」

そう落合コーチが答えると、片岡監督は頷く。

「世代交代を上手く進めるためにも、1, 2年生に経験を多く積みさせる。それができれば上々、しかし勝つことが第一。あまり変に弄って負けては目も当てられません。欲張らずに堅実にいきましょう。1年生2人を1軍へ、この一手だけで2年生の危機感を煽ることではとませんか？」

「……うむ……わかった、その後の反応を見て決めよう。話は変わるが、この練習は……」

青道の将来を見据えて、2人の話し合いは夜遅くまで続いたのであった。

春の都大会　　～4回戦

春の甲子園覇者 青道は1軍の枠からではあるが、色々な選手を試すこと、レギュラー等の疲労抜きを兼ねて、控え選手を積極的に試合に出していた。春の都大会　2回戦のスタメンは

- 1 石橋 センター (左)
- 2 城之内 レフト (左)
- 3 柳 ライト (左)
- 4 結城 ファースト (右)
- 5 道川 サード (右)
- 6 西 影次 ショート (右)
- 7 岸谷 キャッチャー (右)
- 8 小湊 セカンド (左)
- 9 伊佐敷 ピッチャー (右、右オーバーロー)

青道先攻で始まると、初回から石橋、城之内、柳の3連打で2点を先制すると、4番の結城が

カキーン！

レフトスタンドにホームランを放ち4点目、道川も続いて右中間へのツーベースヒットを放ち、再びチャンスを演出する。

「6番 ショート 西」

お、怪物の2人目かと思った観客が注目するが、右打席に入るのに疑問を持つ。そして観客の1人から

「もしかして西の弟の方か？」

この声を聞いて観客がざわめきだす。するとその初球

キーン！

コンパクトに振り抜かれたバットから、強烈な打球が放たれ、レフトフェンスに直撃した。

(ああ、左右は違うけど兄弟だなあ)

そう観客に思わせるような、綺麗で無駄のないスイング。青道ファンは3年生が引退したとしても、また新たな黄金期がくる、そう予感を感じさせる試合となった。

青道のコールド勝ち 14―2

先発 伊佐敷 5回2失点

本塁打 城之内(1)、結城(1)

▽

適度に甲子園の疲労が抜けた頃、春の都大会4回戦、対仁王学舎戦では、レギュラーをメインの編成にしていく。

- 1 神田 セカンド (左)
- 2 西 晴之 ショート (左)
- 3 柳 センター (左)
- 4 東 サード (右)
- 5 栃谷 レフト (右)
- 6 結城 ファースト (右)
- 7 滝川 キャッチャー (右)
- 8 玉森 ライト (右)
- 9 丹波 ピッチャー (右、右オーバースロー)

片岡監督は冷静にグラウンドに立つメンバーを見る。結城、丹波以外はシニアの頃からチームで模範となり、引つ張っていく存在であった心強いメンバー。その空気に染まって、1軍全員の意識が高くまとまっている。そして、西の弟、御幸の両名はしっかりと、メンバーの一員として馴染んできている。

初回から打線は点をとるが

カキーン!

「あー、打たれ始めると止まらないな」

「素材はいいけど長い回を投げると、最後まで踏ん張れてないな」

丹波は3回まで無失点で抑えていたが、4回に仁王学舎打線に捕まると、一挙6失点した。立て直すことが難しそうなのを見て、片岡監督は井手を投入。完全な火消しをして、以降無失点で抑えきった。打線は本塁打6本を含めた大量得点をあげた。

「2回戦で投げた伊佐敷は安定感が出てきたけど、時々力んで四球自滅があるからな」

「秋以降に残る野手は結城とクリス、それに西の弟に、小湊か。代打に出て、チャンスでツーベース打ってた1年生がいたけど、キャッチャーって話だし、クリスとかぶるよな。3年生抜けたら大丈夫なのか?」

熱心な青道ファンの中には、2年生ピッチャーの失点の多さ、不安定さを秋以降カバーできないのではないか?そんな声があがり始めていた。夏の甲子園大会が始まってもないのに、秋以降の話題も多く出てくる。それだけ青道に注目が集まり、期待を寄せられていた。

青道の5回コールド勝ち 23―6

先発 丹波 3, 1/3回 6失点

中継 井手 1, 2/3回 無失点

本塁打 西 晴之(2) 柳(1) 東(1) 栃谷(1) 玉森(1)

……

試合が終わり、いつものミーティングを行う。片岡監督は自身の感情を整理してから

「今日の試合、ご苦労だった。結果としては23―6と東東京の強豪、仁王学舎を圧倒した内容だった。野手陣には現在特に方針の変更はない。こちらからの指導もするが、1, 2年生に対して3年生から見ているということもあるだろう。遠慮せず言っていくように」

全員が頷くのを見て続ける。

「投手陣に関しては、3年生は特に心配はしていない。落合コーチと相談しながらフォームチェックや新球種の取得など、自己研鑽に勤しんでほしい。丹波、伊佐敷、自分の直すべきところはわかるか？」

丹波は

「打たれ出すと、そのまま崩れてしまうことです」

伊佐敷は

「力んでの四球っすね！」

片岡監督は頷き

「今まで長い回をあまり投げさせることがなかったから、見えてこなかった弱点だ。丹波は打たれるとフォームが崩れる、周りに意識がいきすぎて集中できていない、投げ急ぐ、そういった傾向が見られた。伊佐敷は純粹にピンチになる、または強打者がくると力み、前のフォームに近くなってボールが定まっていなかった」

「ちやうど今の時期に弱点が見つかったんだ。点数は野手陣が取ってくれる。1つ1つ課題を克服し、一歩ずつでいいから次の試合でいい投球をする。こういった心持ちで頑張つてほしい。秋以降のエースは2人のうち1人だけ。どっちがなるかな」

そう言いながら片岡監督は落合コーチを見る。

「どうでしょうなあ」

落合コーチは意味ありげに笑うと、丹波と伊佐敷の間に緊張感が生まれる。ここから次期エース候補をかけた争いが始まる。

春の都大会 準々決勝

「準々決勝のスタメンを発表する」

片岡監督の言葉に集中する。

青道オーダー

- 1 西 晴之 ショート (左)
- 2 石橋 センター (左)
- 3 栃谷 レフト (右)
- 4 東 サード (右)
- 5 道川 ファースト (右)
- 6 西 影次 ライト (右)
- 7 御幸 キャッチャー (左)
- 8 武藤 ピッチャー (右、右オーバースロー)
- 9 神田 セカンド (左)

春の都大会 準々決勝でのいきなりのスタメンに、御幸は驚くが、リードする相手が武藤さんだと言われると、ワクワクする気持ちの方が強かった。

(俺もシニアで注目集めたけど、武藤さんは今や甲子園を制覇したチームのエース。だいぶ差がついてしまった気がする)

……

Bannon!

「ナイスボール！武藤さん！いい球きてますー！」

(いってえー、本当にいい球なんだよな)

1回裏を6-0の大量リードで迎えた、投球前練習ですら、この気迫。シニアで淡々と自分のリードに従って投げていた、そんな投手と同じ人物とは思えなかった。

初球、インコース低めに構えると

「ストライク！」

構えたところに寸分違わずストレートが投げ込まれ、バッターは手が出ずに見送る。バッターの様子を見るが、明らかに顔が強張っている。

(強気にいきますよ、先輩)

再びインコースの低めにストレートを要求する。

「ストライク！」

(よしよし)

ドオン！

「ストライク！バッターアウト！」

インコース高めに構えたミットから、ボールを掴んで武藤さんへ投げ渡す。

「ナイスボール！1アウト！」

2年ぶりに結成された、元江戸川シニアバッテリーは、初回を三者凡退で終えると、武藤さんの方からハイタッチをしてきた。

「武藤さん、シニアの頃から変わりましたね」

「そうか？…だとしたら先輩達のおかげだな…：エースとは何か、そう考えさせてくる先輩達がいたんだよ」

そう言って武藤さんは、スポーツドリンクを1口飲む。

「結局1人で野球をするわけではないからな。そのうちわかる時があるよ。嫌でもな」

そう言って丹波さんや伊佐敷さんを見る武藤さんは、とても大人びて見えた。

「しかし、晴之の弟と同世代とは、御幸も大変だな」

「へ？」

「晴之には東、柳、栃谷、玉森、神田というスター選手が、自然と集まって周りを固めていた。それがあっての甲子園の活躍。お前達はそれと比べられるぞ。影次の周りにはいる選手の力が足りてるのかどうか。

間違いなくな」

じつと武藤さんはこちらを見てくる。

「それに秋以降、甲子園に出場した主力がごっそり抜けて、俺達が1年生の時の2、3年生のような視線にさらされるだろう。あの時は主力メンバーに怪我人が続出した。思うようにいかないことがあっても焦るなよ。あと同学年は大事にしろよ。お前ら見ると一匹狼みたいなのが多くて心配になるわ」

そう言っって苦笑いされてしまった。

……

そのまま武藤さんは相手打線を封じ込め、4回無失点と好投している。現在17―0とほぼコールド確定の状況。

5回表 1アウト1、3塁で打順が回ってくる。

（チャンスでしか打てないんですよね〜って、冗談で言ったつもりなのに、わかった！って必ずチャンスで回ってくる打線とか、やばいよなあ）

（しかもそのお膳立てをしてくれるのが、あのU―15で4番だった西 影次とか、ファンに知られたらボコボコにされるぞ）

そう思いながら打席に立つ。

（このピッチャーの決め球は、カーブだよな。それ狙っていいこう）

3球目までカーブが来なかったのでスイングせずに1ストライク2ボールとなる。

（武藤さんの言うこともわかる。西のお兄さんの世代の強さは、あまりにも眩しすぎる。あの人たちと比べられて心配……ねえ……）

上等じゃねえか！

（3年生が抜けても2年生と、そして俺達の世代でも甲子園で活躍してやるよ！）

そう決意して、力んで打ったボールはファーストファールフライと

なつた。

青道のワールド勝ち 17—0

先発 武藤 5回無失点

本塁打 西 晴之(1) 東(1)

春の都大会 準決勝 part 1

「春の東京都大会 準決勝をお送りしていきます。東東京の強豪と西東京の強豪の対決となります。先攻は帝東、後攻は春の甲子園覇者の青道。共に今年の夏、甲子園に出場する可能性の高いチーム同士の間争いとなります」

〈得点力が圧倒的に青道に分がありますから、下手すると一方的な展開になりかねないですね〉

「青道はこれまでスタメンを毎回変えてきていますね。1年生、2年生を3年生に混ぜて、確実に経験を積ませてきています」
〈実に強豪らしい起用でここまでできてますね〉

「はい、青道のスターティングオーダーはこちらになります」

青道オーダー

- 1 神田 セカンド (左)
- 2 西 晴之 ショート (左)
- 3 柳 センター (左)
- 4 東 サード (右)
- 5 栃谷 レフト (右)
- 6 結城 ファースト (右)
- 7 玉森 ライト (右)
- 8 滝川 キャッチャー (右)
- 9 井手 ピッチャー (左、左スリークォーター)

「青道、帝東共にベストメンバーで挑みます。甲子園で桁違いの得点力で覇者となった青道と、安定感のある投手陣、全国に通用するであろう野手陣を擁する帝東。どちらが関東大会への切符を手にするのでしょうか？」

〈帝東のエース 松尾は右のオーバースロー、最速145キロの直球に、スライダー、カットボール、フォーク、シュートを織り混ぜた投球をします。松尾がどれだけ粘れるか、これに限りますね〉

「松尾の好投に期待しましょう」

……

「これから4回裏、青道の攻撃がはじまります。現在、帝東が1点リードしております。これまで松尾は青道打線からランナーを1人も許していませんが、これはどうしたことでしょう」

「松尾は1人1人に対して、高い集中力をもって、バッターとの勝負に臨んでいますね。普段よりも丁寧に投げている印象がありますよ、失投がほとんどないですね」

「球数は3回を終えて既に60球を越えていまして、かなり打線に粘られていますから、なかなか厳しいようには思えますが、どうでしょうか？」

「青道打線は抑えられていますが、しっかりチームとして松尾を攻略しようとしていますね。各々ができることをして、消耗させていますよ」

「おっとここで、先頭打者の神田がフォアボールで塁に出ます。次に迎えるバッターは、ドラフト上位指名が期待されている好打者 西 晴之！キャッチャーが松尾の元へ向かいます」

「1番塁に出したくないランナーと、1番相手にしたくないバッターですから、帝東バッテリーは慎重に慎重を重ねていくでしょうね」

「インコース高めのストレート！帝東バッテリー！青道打線に真っ向勝負だ！」

「中途半端になるよりは、しっかり強気にきていますから、とてもいいと思いますよ」

「コンパクター！軽く振って、簡単にライト前へのヒットとなりました！神田はすかさず3塁へ！セーフ！」

「カットボールやシュートで芯を外されるケースが多かったですから、大振りをせずに軽く当てるようなスイングで対応してきましたね」

「豪快なイメージの強い打線ですが、こう、なんと云いますか、柔ら

かいバッティングができるのも強みですね」

「今日スタメンの神田、西、柳、栃谷、玉森がそういった対応が上手そうですね。高校野球のチームで、このレベルで1つのチームにそういったことができる選手がいることは、今までも、そしてこれからもないでしょうが」

「そうですね！次のバッターは今名前のでた柳ですが、ノーアウト1、3塁の場面、どういった攻撃を見せてくれるのか。おっと！ここでスクイズです！帝東の対応が遅れている！ホームイン！1塁も！間に合わないー！まさかと言ったところでしょうか、あの青道がスクイズをしてきました」

「今までの傾向を見ると打ってくると思ったのですが、まさかスクイズですか。いえ、通常であれば、相手エースを崩すためにスクイズは考えられるのですが、青道は、はい、ええ、そうですねえ。すいません、ちよつと水を飲みます…失礼しました…スクイズは考えて当然の場面でしたが、イメージがなくて完全に欺かれましたね」

「いやあ、私もスクイズがくるとは、あーつと！4番東のタイムリーヒット！強烈な打球がレフトフェンスへ突き刺さる！あー！レフトがクツションボールをお手玉！1塁ランナーもホームへ！これで青道3点目！主砲の強烈な一撃で、青道は勝ち越し！1―3と2点リード！エラーの間に東は2塁へ進塁しています」

「さすがの松尾も動揺したのでしようか、少し甘くなったカットボールをしっかりと捉えられましたね。打つ直前に反応してうまく打つてますね。もしストレイトだったらスタンドまで運ばれていたかもしれません」

「続くバッターは5番栃谷、この選手も高校通算で、ホームランを30本以上打っていますから、警戒していききたいですね。」

「本来ならこの栃谷も、甲子園に出てくるチームに、4番で出てきてもおかしくない選手ですからね。期待値は高いですよ」

「サード正面！5球目のスライダーを振り抜きましたが、惜しくもサードライナーとなりました。捕った方が驚いていますか？これは」

「なんか入ってた！そう言いたげな感じですね」

「6番の結城も粘りますが、セカンドへのゴロとなりました。東はその間に進塁して3塁へ」

「3年生の攻撃を常に間近で見してきた、結城くんらしい進塁打でしたね。詰まるとわかった瞬間に力を抜いて、セカンド方向に流しました。普通はできませんよ」

「あれは咄嗟に狙ったんですね。偶然かと思いましたが。7番の玉森はショートへのライナーで3アウト。4回裏、青道は帝東エース松尾から3点をとり、逆転をしています」

春の都大会 準決勝 part 2

結城は7回裏の攻撃をベンチで見ていた。

(不甲斐なし！……ここまで3打数ノーヒット、相性が悪いとして下げられてしまったが、全然打てないとはな)

帝東エース 松尾さんの鬼気迫る、粘りのある投球に圧されてしまい、7回表の守備につく際に、道川さんと交代させられてしまった。

現在2―4で2点リードしているが、いまだ松尾さんを完全に攻略できていない。先頭打者は8番のクリスで、ここまで2打数ノーヒット。絶対に塁に出て後ろに繋げる、そんな意思を感じる。

4球目のスライダーを引っかけて、三遊間にボールが転がっていく。ショートが逆シングルで捕って、素早く1塁へと送球し、クリスは1塁にヘッドスライディングを敢行する。

「セーフ！セーフ！」

「おっしやあおあ！よくやった！」

「ナイスガッツや！」

気合いで出塁したクリスは、珍しくガッツポーズをする。

(ん?)

一瞬ガッツポーズをした後のクリスの表情に、違和感を覚えたが、おそらく気のせいだろう。

井手さんのところに、代打として影次が出てくる。すると

カキーン！

アウトコースの少し甘めに入ってきたストレートを、ライトスタンドへと放り込んだ。

「おおおお！初ホームランきた！」

「影次ようやったー！」

全員で影次の初ホームランを祝う。

「ピッチャーの交代をお知らせします」

相手のエース 松尾さんはレフトへ。相手エースを攻略したという事実には、チームのテンションが上がっていく。

そこからは青道打撃陣が、帝東投手陣に牙を剥き、3点の追加点をとった。



井手さんからバトンを受けた丹波は、2―9となった試合を締めるために、8回表に登板したが、1アウトはなんとかとったものの、既に2失点していた。1アウトランナー2塁の場面で

(バッターに集中！フォームをいつも通りに！投げ急がない！)

キーン！

インコース、甘めに入ったストレートが痛打され、左中間へと運ばれ追加点を献上してしまう。5―9となり、帝東ベンチも活気づいている。クリスがマウンドにくる。

「丹波、色々克服しようとしているのだろうが、気にしすぎてテンポが悪くなっている。一度全部忘れて、思いっきり腕を振ってみてはどうだ？」

「っ！わかった、やってみる」

クリスに返事をして、マウンドの土をならす。

(集中、集中！)

クリスのミットに向かって投げるが、ストライクゾーンに入らない。

「ボール！フォアボール！」

「いい感じで勝っているのになあ、これじゃ台無しだよ！」

観客の声に頭が真っ白になる。

「ピッチャーの交代をお知らせします。丹波くんが変わりまして、背番号1 武藤くん」

片岡監督の視線が怖かった。武藤さんがマウンドへやってくる。

「丹波、頭冷やしてろ。一人相撲だったな」

ハツとして武藤さんの方を向くと、言葉とは裏腹に心配そうな目でこちらを見ているのがわかる。

「……すいません……」

「チームは勝ってるからな。次出番がきたら結果を出せるように努力を重ねる、それしかないぞ。ほれ！監督のところへいけ！」

「はいっ！」

頭をがしがしやと撫でられ、流れ出てくる涙を拭いながら、ベンチへ駆け足で向かう。自分で課題を掲げての登板だっただけに、悔しさが溢れてくる。

「丹波、武藤のここからの投球をしっかりと見ておけ」

片岡監督に言われ、アイシングすらせずに戦況を見守る。

武藤さんはマウンドで深呼吸をすると

「丹波が1アウトとつてくれたから、アウトはあと2つだけだ。1つ1つしっかりとつていくぞ！」

「1アウトー！1, 2塁のケース！内野近いところでオーケー！1, 2点取られても取り返せるから確実にいこー！」

武藤さんの言葉から西さんが繋げて、全体の意識をまとめていく。

ドオン！

「ストライク！」

バッターが、インコースのストレートに思わずのけ反る。

「バッター！ボール見えてないよー！ゲッツーいけるいける！」

西さんがそう言うと、サードの東さんが一歩前へ出て、バッターを睨み付ける。

続くアウトコースのツーシームを、力んでいたバッターは引っかけで、4―6―3のダブルプレーとなり、簡単に無失点でピンチを切り抜けてしまった。

その先輩達の姿を見ていた丹波に対して、片岡監督は

「丹波、お前はいつから一人で野球をやるようになった？周りのことを気にしすぎるな、そうは言ったがクリスの言葉を上の空で聞くほど、自分のことに集中、いや、自分をも見失うほど追い込めとは言っていないぞ。後ろには頼りになる3年生がいる。全部いつべんに修正する必要はない。1つずつ自分のできることを、課題をクリアしていけばいい」

「はいっ！」

「焦るなよ。お前のボールの質は甲子園でも通用したんだ。結果を残せる投手だと自分で証明しているんだ。勝てば、次の試合では伊佐敷からの継投で投げてもらう。チャンスはあるから次に活かせ。……じゃあ岸谷に怒られに行くんだな……」

片岡監督の言葉を聞いて岸谷さんの方を向くと、腕を組んで難しそうな顔でこちらを見ている。嫌だなと思うのと同時に、まだ期待してもらっている、そう感じて、腹をくくって岸谷さんのもとへと駆け足で向かった。

「こつちくる前にアイシングしろ！」

「っ！すいません！」

帝東 v s 青道 5—11

先発 井手 7回2失点

2番手 丹波 1／3回 3失点

3番手 武藤 1 2／3回 無失点

本塁打 西 影次（1）、柳（1）、道川（1）

次に向けて

春の都大会 決勝では、青道と稲城実業の試合が行われていた。

先攻 青道オーダー

- 1 石橋 センター (左)
- 2 山崎 ショート (右)
- 3 神田 ライト (左)
- 4 道川 ファースト (右)
- 5 西 影次 サード (右)
- 6 岸谷 キャッチャー (右)
- 7 城之内 レフト (左)
- 8 小湊 セカンド (左)
- 9 伊佐敷 ピッチャー (右、右オーバースロー)

関東大会行きを決め、夏の大会のために、手の内を明かしたくない両校は、お互いに控え選手をメインにしたオーダーを組んでいた。

しかし、野手陣の差はかなり大きく、稲城実業の控え投手では、青道打線を抑えることができない。特に勝敗を分けたのはキャッチャーの差であった。青道のキャッチャーは、守備においてはクリスに並び、信頼感では凌駕さえする岸谷であったのに対して、稲城実業のキャッチャーは、中堅校の域を出なかった。

「ゲームー」

試合が終わり、記者の峰は感嘆する。

「青道の背番号1桁メンバーは、キャプテンの神田のみ。それでいて攻撃意識高く、稲城実業投手陣を全員で崩していく攻めの野球。守備では岸谷の、1年生投手の特徴を活かしたリード。伊佐敷を5回1失点、丹波を2回2失点でリードしきった。」

「後のない3年生の強い思いか、控えとは思えない粘り強さ。稲城実業は気迫に圧されて、一方的な展開になってしまった。特に2年生の結城、滝川にレギュラーをとられている道川、岸谷の存在感。レギュラー同士の戦いであれば違うのだろうが、12―3での7回コールド。選手層の差が如実に出たな」

メモをまとめていく。

「今年の青道が飛び抜けて強いわけだ。各ポジションをスター選手が埋め、控えにもそれに追随する選手がいる。言葉としては変かもしれないが、並みの強豪校では相手にならないだろう。夏の本命でいいだろうな」

そうまとめると球場を後にした、

▽

青道は春の都大会で優勝し、次のGW連休中の練習試合や、関東大会に向けて練習をこなしていた。

片岡監督は全体的様子を見て、ある種の達成感を得る。

（相手も控えメインではあったが、稲城実業にコールド勝ちしたのがよかったのだろう。更に自信をつけて、練習に打ち込んでいる。伊佐敷、丹波も相手打線を抑えることができる。それを自信にして更にステップアップを狙いたいものだ）

こういった時に一番怖いのが怪我だ。練習している様子を注意深く観察し、異常がないことを確認していく。

（うん、特に問題無さそうだ）

そう判断して監督室へ戻り、落合コーチと合流する。

「片岡監督、お疲れさまです。現在、投手、捕手に問題は無さそうです。大会が終わったので軽いスクリーニング検査、聞き込みをする予定ではありますが、動き自体は悪い選手はいません。それどころか決勝で火が着いて、むしろ動きが良くなっている感じすらしますね」

片岡監督は頷き

「後のない3年生は意気込みが違う。特に道川、岸谷には頭が上がらない。1年生の頃から東達に追い付くんだと、練習を続けてきた者達だ。努力量は私がエースをはっていた頃の野手陣のものよりも多く、逞しく育ってくれたと思っている」

「あいつらに追い付け追い越せ、そういった雰囲気維持し、育て上げたのは、片岡監督の手腕もあってこそと考えますが。まあ、ここで怪

我などされては面白くないですし、より慎重に磨き上げていきましよう」

お茶ではあるが乾杯をして飲み干す。

「ではブルペンに戻ります」

そう言つて落合コーチは退出していった。

片岡監督は再び直接指導するために、グラウンドへと向かう。

（書類仕事やOB、後援会への対応を気にする必要がなくなって、かなり余裕ができてきた。そのぶん選手達にしっかりと指導ができていくことに感謝せねばならないな）

（それに、落合コーチがきて、指導する姿を見ていると気づかされた。怒った姿を見せて、選手達に考えることを要求して、大体の方針を提示する。教師としてはそれが正しいと思っていたが、言葉でしっかりと説明し、論じて導いてやる。そういった指導の方が自分に向いていくことがわかった。）

「結城！当てにいこうとするな！意識が行き過ぎてスイングが鈍くなってるぞー！」

「はいっ！」

「西！影次のほう！調子に乗って、セカンドの守備に混ざるんじゃない！シヨートにもどれ！」

「げっ！ばれた！はい！」

「今から俺がノックする！受ける元気があるやつは残れ！」

「しやあああ！やってやるぜー！」

こいつらと野球ができるのも、ノックをしてやれるのもあと4ヶ月。悔いのない練習を、試合を、結果を。今できることを精一杯に片岡 鉄心は指導していく。

紅白戦（1年生&2年生 v s 3年生） part 1

GWの連戦を全勝で終えた青道では、片岡監督ら首脳陣が、監督室に集合していた。

落合コーチがまとめた、2軍に所属する1、2年生で、新チームにおいて1軍に上がってきそうなメンバーを、ピックアップした資料を見る。

2年生

増子 透 サード

右投げ右打ち

率はまだ悪いが、パワーに魅力を感じる。直球への対応は及第点、変化球への対応が課題。その一方で守備の意識が低いところが欠点か。時折凡ミスをする。食事量の調整が下手で、体重過多の傾向あり。本人の意識改善が必要か。

宮内 啓介 キャッチャー

右投げ右打ち

身体をはったブロックキングで、他の捕手と比べると後ろにそらすことが少ない。リード、打撃は平凡か。

坂井 一郎 外野手

右投げ右打ち

全体的にバランスがとれているが、1軍と比べると物足りなさがあ
る。特筆すべき点は特にない。

門田 将明 外野手

右投げ右打ち

守備に関しては坂井より安定している。打撃面はあまり期待でき
なさそう。

楠木 文哉 ショート

右投げ右打ち

守備に関しては期待できそう。打撃に関しては小技に頼るところがあり、あまり期待はできなさそう。

槇原 勇太 ピッチャー

右投げ右打ち

最速132キロの直球、持ち球はカーブ、フォーク。コントロールはそこそこで、中堅校に対してはいい勝負をするかもしれない。

1年生

真木 洋介 ピッチャー

右投げ右打ち オーバースロー

身長は既に180センチを越えている。高いだけでなく、身体はできあがっており、パワーもある。

入学時から更に成長し、最速137キロの直球、持ち球はスライダー、カーブ、フォーク。安定感で言えば丹波、伊佐敷を越えているだろうか。現在は2軍で試合に登板させ経験を積ませている。身体のケアなど、基本的な事柄を教え込んでおり、関東大会以降に1軍デビューをさせて良いのではないかと思わせる逸材。無理はさせず将来のエースとして、基本からしっかり育成すべし。

秋以降は外野を守らせて、打撃を活かすのもありか。

川上 憲史 ピッチャー

右投げ右打ち サイドスロー

最速128キロの直球、持ち球はスライダー、シンカー。コントロールは比較的良い印象。内気でインコースに投げきれないところが、課題ではあるか。これからの成長に期待したい。

白州 健二朗 外野手

右投げ左打ち

身体能力はかなり高いものがある。ここから高校球児としてのスタミナ等がつけばレギュラーとして、将来的に活躍できそうな期待感がある。

樋笠 昭二 サード

右投げ右打ち

そこそこの打撃と、そこそこの守備。「しゅしゅしゅ、はいや〜」
とうるさくはあるが許容範囲。

倉持 洋一 ショート

右投げ両打ち

俊足堅守で運動神経は、西 影次、真木を除けば1年生随一か。1軍のショートの手層が厚くて、2軍にいるが、秋以降は確実に1軍にレギュラー格として食い込むだろう。両打ちにする意味はわからないが、2軍で結果をだしているため、少し様子を見ることにする。

全員が見たことを確認して、落合コーチは

「現3年生と比べること自体がおかしいですが、戦力として秋以降は、大幅にダウンすることは避けられません。むしろ今年が異常なだけだと思っていてください」

片岡監督、太田部長、高島副部長は頷く。

「このメンバーに2年生の丹波、伊佐敷、結城、滝川、小湊。1年生の

西 影次、御幸が加わって、秋以降戦うことになるでしょうな」

そう言つて顎をかく。

「丹波、伊佐敷、真木の3本柱に、滝川、結城、西のクリーンナップに、倉持、小湊が1、2番ですか？既にこのような構想ができるのはとてもいい。この戦力に何人か伸びてくれれば、秋以降も強いチームになるでしょうな」

落合コーチはそう締めくくった。

「その3本柱に、コントロールのいい川上が加われば、言うことなしですわね！」

と太田部長は満面の笑みで言う。

片岡監督はもう一度資料を見た後に

「かなり本音に近く書いていただいているので、現状がとてもわかりやすい。秋以降に想定されるチームで打線を組んで、3年生チームと紅白戦をさせてみよう」

「ふむ、相手としては3年生の1軍の控え組主体がよいですね。やってみましょう」

「落合コーチには、3年生チームをお願いしてもいいですか？」

落合コーチはチラツと片岡監督を見て

「わかりました。私好みの選手が何人かいますから、色々させてみましょう」

「ありがとうございます」

こうして、秋以降を想定したチームと3年生チームの紅白戦が決定した。



紅白戦当日になると、3年生達は1、2年生に対して、本気の威圧感を向けていた。

「なあ、倉持」

「んだよ、御幸」

「先輩らやばくね？」

「ああ、ただ事じゃねーよな、単なる紅白戦で」

その言葉に反応して、白チーム 4番サードの道川さんが、こちらを睨み付けてくる。

「お前ら、覚悟してろよ」

そう言い捨てて、自軍ベンチへと入って行った。

「なあ、俺ら地雷踏んだ？」

紅白戦（1年生&2年生VS3年生） part 2

青道 紅白戦

先攻 紅チーム（1, 2年生）

- 1 倉持 ショート（両）
- 2 小湊 セカンド（左）
- 3 西 影次 センター（右）
- 4 結城 ファースト（右）
- 5 滝川 キャッチャー（右）
- 6 増子 サード（右）
- 7 坂井 レフト（右）
- 8 門田 ライト（右）
- 9 丹波 ピッチャー（右、右オーバースロー）

後攻 白チーム（3年生）

- 1 石橋 センター（左）
- 2 山崎 ショート（右）
- 3 城之内 レフト（左）
- 4 道川 サード（右）
- 5 会田 ファースト（右）
- 6 藤谷 キャッチャー（右）
- 7 坂本 セカンド（左）
- 8 木村 ライト（右）
- 9 後藤 ピッチャー（右、右オーバースロー）

片岡監督は、困惑している紅チームの1年生達を見て

「2年生は薄々分かっていいると思うが、今日の紅白戦での活躍を、1軍と2軍の入れ換えの判断材料にしていく。3年生は夏の大会が最後。本気でお前達を倒しにくるだろう。」

その言葉に1年生達は息を呑む。

「白チームの3年生を控えと思って侮るなよ。メンバーの中には甲子

園でホームランを打った者、大学から既に声がかかっている者もいる。スタメン1番く5番打者は、甲子園に出る高校でもレギュラーをとれる人材だ。必死に食らいつけ！」

「はいっー！」

「うむ、いい返事だ。1軍に合流するメンバーが、1、2年生から更に増えることを期待している。各自準備運動をしておけ！以上だ」
各々グループになって、準備運動をしていく。

▽

倉持は左打席に立つと、いきなり内野陣がグツと前に押し出してきた、圧迫感を感じる。

(やつべえ、なんだこれ。2軍の試合ではなかった緊張感がある)

初球、いきなりのインコースのボールにのけ反る。

「ストライク！」

「くっ！」

(初球、フロントドアのシュートかよ)

パアン！

(遠い?)

「ストライク！」

まずいと思って打席を外す。落ち着くために素振りを一回して、打席に戻る。

(三振はいけない！なんとか食らいついていかねえと！)

(あれ？ボールがこない?)

「ストライク！バッターアウト！」

アウトコースのチェンジアップに、タイミングを完全に崩されて簡単にアウトになる。

「よしー！アウトー！予定どおりー！いいよー！」

キャッチャーの藤谷さんが、見せつけるようにボール回しをしてく

る。

(くそっ！)

ベンチに戻ると、御幸の隣に座る。

「倉持、先輩達本気できてんな」

「ああ、正直実際に打席に立つまで舐めてたわ。なんで1軍に行けないのかって不満だったけど、あのプレッシャーとか感じると全然ちげえわ」

「へへっ、俺はそれくらいやべーって知ってたけどな」

御幸のからかうような笑顔に殴りたくなってくる。

「うるせー、ベンチ野郎が。次は打ってきてやるよ」

「ほー！言ったな？まあ見ててやるよ。途中から俺も出ることになってるし頼むぜ」

「おう」

キーン！

その音で、グラウンドを見ると、影次が打った打球を、ショートの上野さんがダイビングキャッチをして、ショートのライナーで紅チームの攻撃が終わったところであった。

(三者凡退か・・・まあうちのチームの先発も1軍の先輩だし、なんとかなるか・・・)

そう思いながらショートの守備につく。

白チームの1番打者は、センターの石橋さん。丹波さんの投げボールを、簡単にファールにして粘り、フォアボールで出塁する。

「走った！」

すかさず2塁への盗塁を企画してくる。滝川さんの送球がそれでワンバンになるが、なんとか捕球してタッチしに行く。

「セーフ！」

「すまん！握りが甘かった！」

滝川さんは謝罪して、ホームへと戻っていく。3球目のストレートを滝川さんが捕ると、2塁へと牽制するが、セーフとなる。

(さつきは変な送球だったけど、今回はドンピシャ！)

さすが1軍の正捕手だと感心する。

2番打者の山崎さんは、軽く右方向に打って、セカンドゴロとなるが、その間に石橋さんは3塁に進塁する。

「1アウトー！打球くるぞー！足動かしていけ！」

ファーストの結城さんが声を出し、チームを盛り上げていく。3番の城之内さんは、5球目のアウトコースのストレートを、しっかりと踏み込んで振り切り、サード増子さんの頭上を越える、レフト線付近のタイムリーツーベースヒットを放った。

「よっしゃー！城之内ー！さすが点取り屋！」

「控えだけど甲子園でも活躍してたからな」

観客からも多くの声が聞こえる。そして

「おおおおお！」

「青道の代打の切り札ー！がんばれー！」

「道川ー！ホームランいったれー！」

白チームの4番 道川さんが打席に入ると、グラウンド全体の空気が変わる。ピリツとした、まるでこれが公式戦とでも言わんばかりの圧力がのし掛かってくる。

(この感じはまずい)

すると、滝川さんが立ち上がった

「1アウトー！しっかり1つずつな！」

「倉持！周りに2年生がいるからな！気負うなよ！」

「っ！ウスッ！」

(あぶねー、助かった)

エラーをするだろう、そんな予感が消え、身体がいつもどおり動くようになる。その初球

カキイーン！

右腕を突き上げ、ゆつくりとベースを踏んでいく道川さんの姿を見て、ホームランを打たれたことを遅れて認識する。そして、2塁付近にきた道川さんを見ると、こちらを睨みボソツと

「浮わついた雰囲気は消えたな。頑張れよ」

そう言つて3塁方向へと、駆け足で向かつていった。

紅白戦（1年生&2年生 vs 3年生） part 3

片岡監督は回が進むと、ポジション毎に構想を練っていく。

ファースト、サード

増子はまだ、1軍に上げるのは早すぎるとして除外するが、サードの道川、ファーストの結城、会田の3人のうちの2人を1軍にと最初は考えていた。しかし、3人全員が好パフォーマンスを見せつけている。

道川 3年生

右投げ右打ち

冬の合宿で急激に成長し、ランナーの有無に関わらず、少ない打席数でも結果を残す強打者。代打の切り札という位置付けになっているが、例年であれば、4番を任せることのできる信頼感がある。

結城 2年生

右投げ右打ち

ホームランを打つ力はあるが、現実性を重視したバッティングをする。身体が成長して、更に力がつけば不動の4番として、秋以降の打線を牽引してくれるであろう期待感がある。

会田 3年生

右投げ右打ち

生粋の長距離バッターで、率は他2人と比べて低いが、それを補うパワーの持ち主。2軍では常に4番に座り続け、公式戦ではないが二桁本塁打を記録している。

片岡監督は、正直なところ、この3人を全員1軍で使えたらと、この紅白戦を通して考えを変えていた。

（御幸をあえて2軍で、試合を多く経験させるのもいいかもしれない。野手陣は1軍で使ってみたい、そう思わせる選手が多いのだが、そ

の一方で、投手陣はなかなかに厳しいな)

投手陣

7 回終了時点で

紅チーム

先発 丹波 4 回 7 失点

2 番手 伊佐敷 3 回 2 失点

白チーム

先発 後藤 4 回 4 失点

2 番手 遊佐 3 回 1 失点

(投球回以上に失点している丹波、後藤は2軍行きが濃厚か。伊佐敷は比較的良いが、稲城実業、市大三高などの打線に対しては、3回で四球3つは少し不安がありそうか?)

遊佐が8回表を、ランナーを出しながらも無失点で切り抜け、4回1失点となった。

(元々1軍経験のある遊佐が、1, 2年生チーム相手ではあるが4回1失点。課題を克服し、十分計算できる投手に成長してきているな)

ここで遊佐に関する評価を上げる。投手陣に関しては、変則的に4回ずつ投げてもらって、紅白戦は12回まで。コールドなしで投げきるようにしているため、紅チームの真木、白チームの井手の投球を見てからでも判断は遅くはない。武藤、井手は確定として、遊佐、伊佐敷、真木の3人のうち、どの2人を1軍に加えるべきか、これから見定める必要がある。

(しかし、1, 2年生チームは井手を打てるだろうか?)

4回とはいえ、1点のみに抑えられたことに、遊佐の成長を喜ぶ反面、1, 2年生の野手陣に少し物足りなさを感じる。伊佐敷は8回裏を1失点しながら、なんとか4回を3失点で投げきった。

他のポジションに関しては、1軍と2軍の入れ換えはなさそうだと判断する。そして9回の表、1アウトで9番に打順が回ってきたため、打撃においても期待のできる真木を代打に送った。



(青道に来てよかった)

真木は、シニアで結果をある程度は残していたものの、夏の大会中には、仙泉学園などの高校からスカウトが来ていたが、本命の青道スカウトは声をかけてこなかった。

ずっと待つつもりだったが、意外にも7月中に声がかかり、しかも世代のエース候補として、特待生での待遇を約束するスカウトであった。思わず飛び付いたのは言うまでもないだろう。

入部してからは即2軍に昇格して、経験豊富な落合コーチの指導のもと、自分の投手としての力が、どんどん磨かれていくのがわかり、野球が更に楽しくなっていた。そしてこの紅白戦。

(憧れの1軍が相手で、ピッチャーは甲子園でも活躍していた井手さん、夢みたいだ)

一瞬浮わつくが、気をすぐに引き締める。そして打席に入ると、独特な緊張感を感じる。

(……これが1軍のプレッシャーか……)

初球、アウトコース低めギリギリに、ストレートが決まって1ストライク。次にインコース高めにシユートが決まって2ストライクになる。

(球速は140いくかどうかだが、伸びのあるストレートに、抜群のコントロール、やっぱりさすがだ)

3球目の外のチェンジアップにかろうじて当てるが、セカンドゴロになってしまった。

(すごい！自分にはない武器を持っている！早く同じ立場になって、野球のことを話してみたい！)

アウトにはなったが、青道のこれぞエース格という投手のピッチングを間近に見て、1軍への意欲は増していくばかりであった。

紅白戦（1年生&2年生vs3年生） part 4

御幸は、門田さん、真木、倉持が井手さんに簡単に打ち取られたのを見て

（チェンジアップを覚えてから、更に投球の幅が広がって、手がつけれなくなってきたな。武藤さんもスローカーブはいいぞって言ってたし、落合コーチの言うとおり、緩急をうまく使われるとやべーな）（岸谷さんの無駄球を使わないリードも参考になる。コントロールがいいからゾーンで勝負して、たまにボールゾーンへ逃げる球で誘う。自分も攻めのリードをと心がけているけど、参考になるわ）

そう思いながら9回裏、マウンド上の真木に話しかけに行く。

「よつす！確認だけど、ストレート、スライダー、カーブ、フォークでいいよな？サインはこれでいいか？」

「それで大丈夫だよ」

「オツケー、じゃあ先輩達を抑えていきますかね」

そう言つて真木に笑いかける。すると真木が

「落合コーチ、片岡監督からは、君のリードにまずは従うようにと指示を受けてる。この回は首を振らないから、1番から始まる好打順。どういうリードをするか見させてもらおうよ」

と挑戦的な言葉を投げ掛けてきた。

「はっ！上等！お前を使いこなしてやるよ」

味方ではあるが、実力を示さねば信頼は得られない。ホームへと戻りながら、御幸はバッターの情報、投球前練習のボールの質を整理し、どうリードしていくか考えていく。

初球をインコースに構え、ストレートを要求すると、真木が少し笑みを浮かべた気がした。

（偉そうに言うんだから投げ込んでこいよ）

ドズン！

「ストライク！」

(っ！あいつ！投球前練習で手加減してやがった！)

球質の重たいストレートが、ミットで暴れる。丹波さんにも、伊佐敷さんにもない、威力のある直球に心が躍る。

「ナイスボール！」

そう声をかけて真木に返球する。

しかし、その直球に変化球を混ぜても、簡単には白チームを打ち取れない。1番の石橋さんは7球粘ってセカンドゴロ、2番の山崎さんは6球目のカーブを捉えるが、打球が上がらずにファーストライナーで、2アウトとなった。

(このレベルのピッチャーに対して、初見でこうも粘ってくるのやばいな。しかもここから3番か)

左打席に城之内さんが入る。この城之内さんと道川さん、会田さんのクリーンナップは、他の強豪校であれば、そのままスタメンレギュラーのクリーンナップとして、存在してもおかしくない。

アウトコースのストレートが、わずかに外れて初球はボールとなる。

(微動だにしないか……内側はどうだ？……)

インコース低め、ギリギリにフォークが決まるが、城之内さんは反応を示さない。

(くっそ！前の打席もそうだが、全然読めない！)

その後、際どいボールはカットされてフルカウントになる。そして、8球目のストレートを投げると

ガキイ！

詰まりながらもセンター前に運ばれてしまう。ここでバッターは4番の道川さん。真木の様子を窺うと、萎縮するどころか目が輝き、勝負を今か今かと楽しみにしている雰囲気であった。

真木の元へと向かう。

「ランナー出たっつのに楽しそうだな？」

「甲子園に出てたメンバーとの対戦だからな。そりゃ楽しいさ。とい

うかそろそろ一人相撲やめたらどうだ?」

「はっ? なんのことだよ」

真木はため息をついて

「リードを見せてもらおうってのは言葉どおりだけど、バッテリー組むの初めてなんだから、どういう配球するのか興味が湧くのは当然だろ? 何が使いこなしてやるだよ」

「うぐっ」

「分かつてはいると思うけど、ピッチャーはキャッチャーの操り人形じゃないよ。僕にも投げたい球とか、今はこれは危なそうとか考えがあるから、それを聞いてほしいな」

そう言って軽く笑いかけてくる。

(舞い上がってたのは俺の方だったか?)

「首振ってもいいから、道川さん抑えようぜ」

「あの人打ちそうだから、それは約束できないかな」

「なんだそれ」

お互いに笑みを浮かべて離れる。

「2アウトー! バッター打ってきますよー! 内外野よろしくお願いしまーす!」

大きい声を出して、一旦落ち着く。

初球、インコースの低めに外れるカーブに、道川さんは反応を見せるがスイングしない。2球目はインコース高めにストレートを要求し、1ー1の平行カウントとなる。

3球目はアウトコースへのスライダーを要求すると

カキーン!

ライトポールの右側へ切れていく、特大のファールとなる。

(あつぶねー! 狙われてたか? アウトコースを続けるか、インコースに攻めにいくか。2ストライク1ボールだしボール球使うか)

真木は首を二回振り、球種が決まる。アウトコースの外へはずれるカーブを、道川さんは見送る。そして

キーン！

道川さんは、インコースのストレートを、上手く腕を畳んで左中間へと弾き返す。

「ストップ！」

3塁ランナーコーチャーが城之内さんをとめ、2アウトランナー2, 3塁となる。続く5番の会田さんを変化球攻めして、2―2の平行カウントになる。

ドズン！

「ストライク！バッターアウト！」

会田さんのフルスイングしたバットの上をいく、渾身のストレートが御幸のミットに収まった。

紅白戦のあと

13回からは全選手入れ換えて、結局16回まで延長した紅白戦が終了し、御幸は多少の疲れを感じていた。しかし、2、3年生が元気に素振りや、シャドーなどの自主練習をしに行くのを見て、自分も自主練習をすることにした。

(伊佐敷さんと組んで2回1失点、真木と組んで4回1失点の守備はいいとして、チャンス以外でとことん打てないのはまずいよなあ。あつ、飲み物忘れた)

取りに戻るのも億劫だったので、少し離れたところにある自販機に向かう。

「クリス、お前肩を痛めてるんじゃないか？」

(ん?)

角を曲がった先から岸谷さんの声が聞こえてくる。

「去年の蜂須賀さんと同じ投げ方になっていた。投げることはできるが、元の投げ方だと痛みでコントロールが効かない、そうだな？」

「……はい……肘を肩より上にして投げると痛みが出るので、若干下にして投げていました」

「いつからだ？」

御幸は聞き耳をたて、壁に密着する。

「原因として考えられるのは、春の大会の準決勝、1塁へのヘッドスライディングですかね？その試合は大丈夫だったのですが、次の日に痛みが出て、決勝は観戦のみだったので休養、その次の日は痛みがひいていたので、普通に練習に参加していました。あつても違和感程度だったので大丈夫かと思ったのですが、今日の紅白戦で初めて痛みが出た感じですね」

「なるほどな。それで送球時のフォームを修正したのか。このことは監督には？」

「伝えていません」

御幸ははまだ内容が信じられず、動けずにいた。

「今の軽いうちに伝えておけ。西みたいに痛いのを我慢しながら腕が

一時的に動かなくなったわけじゃないんだ。すぐに戻ってこれるだろ」

「しかし、それではチームが」

「ダアン！」

「自惚れるなよ？お前がいない時からチームを支えてる俺と藤谷がいるんだ。クリス、お前がいなくても今のチームは回るぞ。」

「・・・」

「でも秋以降はそうはいかねえぞ？」

それを聞いて御幸は顔を上げる。

「1軍でなんとかやっていけそうなのが、2年生の宮内に1年生の御幸くらいか。クリス、今を考えてくれるのは3年生として嬉しいよ。でもな、蜂須賀さんから教えを受けた、弟子でもあるお前が、元気に活躍する姿を見たいってのもあるんだ。俺に任せてくれないか？」

少し間があいた後に長く息を吐く音が聞こえる。

「分かりました。大人しく監督に伝えることにします。」

「付き添うわ」

「ありがとうございます」

そう言うと、雑談しながらこちらへ向かって・・・向かって？・・・

(やべっ！いやまてよ?)

そのまま角を曲がってきた、岸谷さんとクリスさんと対面する。

「リハビリの間にレギュラーもらうんで、ずっと休んでいてもいいんですよ？」

「フツ、すぐに奪い返すさ」

御幸は盗み聞きをしていたことで、岸谷さんにアイアンクローをされたあと、2人に付いて行って、監督室へ向かうのであった。

▽

時は少し遡り、青道首脳陣は監督室で会議をしていた。落合コーチ

が早速仕切り始める。

「まずは簡単に整理していきましようか。先に片岡監督と話し合つて、夏の大会の1軍は現時点ではこのメンバーが確定、そしてこちらが残り枠を争ってもらうメンバーと考えています。」

1軍確定枠

投手

武藤、井手、真木

捕手

滝川、岸谷

内野手

結城、道川、会田、東、神田、西晴之

外野手

栃谷、柳、玉森、城之内

以上15名

残り枠（左から期待値高い）5枠を争う

投手

遊佐、伊佐敷、丹波

捕手

御幸、藤谷、宮内

内野手

西影次、山崎、小湊、倉持、増子

外野手

石橋、坂井、門田、白州

「残り枠は5つ。候補もかなり絞ってありますが、このメンバーが妥当でしょうか？」

うんうんと頷きながら、落合コーチは説明していく。

「捕手の負担を考慮してもう1人、内野手、外野手を1人ずつと考えるとフリー枠が2つですか。片岡監督はどうお考えで？」

「概ねその構成で大丈夫だろう。守備面を考慮すると、内野手枠に西影次、外野手に石橋を推薦したい。捕手は次を考えると御幸がいいだろうか」

「御幸はいい選手ではありませんが、まだ線が細い。無理はさせず2軍で育てるのがいいのでは？藤谷もいいキャッチャーですし」

と太田部長が2人の会話に割り込む。落合コーチも

「御幸は1軍の空気を感じてもらいましたし、身体作りに専念してもらって、じっくりクリスの後の正捕手として育てる。私もこれがいいとは思いますが」

と言って片岡監督を見る。お互いに意見を交わすが平行線で決着がつかない。その時、

コンツコンツコンツ！

とノックの音が部屋に響く。

「3年生の岸谷です。片岡監督にお伝えしたいことがあって伺いました。入室しても大丈夫でしょうか？」

「ああ、はいれ」

「失礼します！」

そう言って岸谷、クリス、御幸が入ってくる。ちょうど捕手の枠で話し合っていたところであったため、太田部長はギョツとした顔をすする。クリスが肩を痛めたこと、違和感が前からあったことを説明し、報告しなかったことを謝罪をする。

すると、片岡監督は怒るでもなく

「よく自分から言ってくれた、すぐに病院へ手配をする。高島副部長、付き添いを頼めるか？」

「はい！手続きもこちらでいたします」

そう言うと、高島副部長はクリスを連れていき、岸谷、御幸も退出していった。

予想外の出来事であったが、不幸中の幸いか、現3年生が残っている時期であった。

「落合コーチ、藤谷と御幸を1軍確定枠に頼みます」

「怪我ばかりは仕方ないですな。わかりました。それでいきましよう」

その後も太田部長を含めた3人で話し合い、今後のことを決めていくのであった。

6月の1軍固定まで、残り2枠をかけた戦いが始まる。

3年生との差

クリスの怪我に対して、1年生は衝撃を受け、動揺していた。しかし、先輩達の怪我の後の振る舞いや、主力である西の怪我を経験していた2、3年生は、いつもどおり、いやそれ以上の気合いを持って練習をする。それにつられて1年生もいつも通りに戻っていく。

御幸から見ても、特に藤谷さんの気迫はすごかった。キャッチングは岸谷さんと遜色なく、コーチングも上手い。自分は1軍で藤谷さんは2軍であったため、間近でプレイを見ることはなかったのだが、物を教えるのがとても上手いのだ。

（小野が言ってみたみたい、問題点があれば逐一指摘してくれる。真木だけでなく武藤さん、井手さんからも信頼されている。総合的に見れば岸谷さんが上だけど、ブロッキングに関しては抜けてるな）
同ポジションであるが故に、能力差を突きつけられる。

（何で俺が1軍で、藤谷さんは2軍だったんだろ？直接聞いてみるか）

「藤谷さん！」

「なんだ？」

「これだけ上手いのになんで2軍にいたんですか？」

そう御幸が言うと、藤谷さんは一瞬顔をしかめるが

「選抜での枠漏れと、そのまま4月から真木を2軍で育成するためだな。俺は片岡監督みたいに指導者を目指してるから、落合コーチの指導のもとで、真木と一緒に学んでいたんだよ」

「なるほど」

「しかし、岸谷は後輩の教育してねえのか？御幸！」

突然の大声にビクツとする。

「疑問に思ったこと、問題点などを、相手にはつきりと伝えるのはいいことだ。先輩に対してそれができる度胸は買ってやる。だがな、それは相手がどう思っているのか、その言葉でどんな気持ちになるのかを、しっかりと考えてから言うべきだ。なんで2軍にいたんですか？って普通は直接言うもんじゃねえ。言うための理由、目的がわからない」

「う、うす」

「紅白戦の時も見てたから言うが、キャッチャーはグラウンド全体を把握するポジションだ。特に向かい合う時間の長いピッチャーのケア、全体の流れの把握をしないといけない。そのなかで、時に自分の言葉を使って、ピッチャーのコントロールをしてやるのも大事だ。だがそれはピッチャーの事を思つての言葉、またはチームとして必要な言葉でないといけない」

藤谷さんは、真剣に聞く御幸のことをじつと見てくる

「相手のフィールドに、土足で入り込むような言葉を発して、自分が主体となって自立しなければならぬ、強くきつめの言葉を使わないといけない環境だったのかもしれないが、青道はそうじゃない。全員が甲子園を、そして優勝を目指して一丸となっているチームだ。もう少し素直になつてみたらどうだ？」

「いえ、これが素です」

「なお悪いわ！……まあ……頑張れよ。クリスの復帰が8月以降になるのが決まつたんだ。岸谷と2人でみっちり仕込んでやるよ」

ギロリと藤谷さんが睨み付けてくる。

「お、お手柔らかに」

「どうか」

キャッチングや、送球体勢へのスムーズな移行、ブロッキングの仕方など、基本的なことを厳しく指導され、癖があれば細かく指摘され、御幸は体力をガンガンに奪われていくのだった。



1, 2年生の1軍、2軍は合同で2グループ作り、1軍3年生の打線のゲーム形式のバッティング練習で、守備についていた。3年生の打線は

1 神田

2 西 晴之

3 柳

- 4 東
- 5 栃谷
- 6 道川
- 7 玉森
- 8 会田
- 9 城之内

となっている。

ファーストを守る結城は、いつもは打線に組み込まれるが、今回は守備組になっていた。

(こんなに抑えないものなのか?)

3回ぶんのアウトで交代のはずだが、打者一巡してもノーアウト。ピッチャーの丹波は息が既にあがっている。キャッチャーの御幸も、マウンドにきて声をかけるが、打者のプレッシャーが尋常ではなく、丹波はなかなか落ち着かない。

普段は声をかけ、ワンプレーで雰囲気をかえてくれる先輩達は、敵として立ちほだかっている。

キーン!

また神田さんに簡単にヒットを打たれ、8点目が入り、ノーアウト1, 3塁となる。ここで西さんの打席になり、とてつもない威圧感に圧倒される。

「タイム! 丹波、交代だ」

片岡監督に告げられ、丹波が安堵したような顔をする。

「交代を告げられて安心するやつがあるか! いいと言うまで走ってるだ!」

「っ! はいっ!」

「守備も交代する! 2グループ目! 守備につけ! ピッチャーは伊佐敷だ!」

次のグループが守備につき、ケースそのままに再開される。グラウンド脇に座って、水分補給をして、なんとか気持ちを落ち着かせる。

カキーン！

容赦なく、西さんが伊佐敷からスリーランホームランを放つ。キャッチャーの宮内も驚きが隠せていない。後続も伊佐敷のボールを見極め出塁、ヒットを放っていく。

（これが3年生の、青道が誇る強打者たち。自分達の世代のエース格が全く相手になっていない。紅白戦でいい戦いをしたと思っていたが、クリーンナップだった城之内さん、道川さん、会田さんの3人が軒並み下位打線を担っているのは、かなり差があるのだと感じさせられる）

自責点4ながらも、伊佐敷はなんとか3アウトをとるが、既に肩で息をしている。

「伊佐敷は外れて水分補給！真木！マウンドへ！」
「はいっ！」

唯一紅白戦で3年生に通用した、1年生ピッチャーの真木がマウンドにあがる。その初球を

キーン！

神田さんが鋭い当たりを放つが、ライトライナーとなる。真木の様子を見ると、楽しそうにしている。

（純粹に3年生と対戦できるのを楽しんでいるのか。これは丹波や伊佐敷にはないものだな）

しっかりと真木が腕を振り切れていることに、納得をする。そのまま真木は3回を5失点で抑えきった。点を取られはしたものの、真っ直ぐに強打者を見据え、自分のやりたいピッチングを貫いた真木に、結城は将来の青道エースを見た気がした。

次世代のエース part 1

結城はいつも通り、2、3年生の居残り組練習に参加していた。最近は、練習してから少し余裕のある影次、真木も参加している。御幸は藤谷さんの指導で、体力をかなり使うようで、参加できないでいるようだ。

クリスは右肩を痛めてから、西さんから個別に指導を受けていた。

「右肩に負担がかからない程度に、ゆつくりとバットを振って、一切ブレがないように。結城もこっちくるか？」

「はいっ！」

「2人とも相手ピッチャーを想像して、投げてくるボールをイメージして素振りをするんだ。やっているとと思うが、これは大事なことから、真剣に集中して、実際に対戦したら100%打つことができる。そう思えるくらい振るといい。そのときに自分の想像する理想的な軌道に、スイングがのっていたら面白いだろう」

言われたようにやってみるが、投手のイメージがあやふやである。そうして悩んでいると影次がやってくる。

「最初目を閉じてやるといいですよ！まあ俺もいまだに目を閉じてやってるんですけどね」

目を閉じて、素振りをしていく。50回したぐらいであろうか、ようやく上手くイメージすることができるようになってきた。そんな気がした。

「結城はようやく身体が出来上がってきたからな。体力と型をつけるための今までの素振りを続けながら、鮮明に相手投手をイメージしてバットを振り抜く。そういったことに意識して取り組んでいくべきだろうな」

「はいっ！」

イメージしながらの素振りを続ける。影次が

「兄ちゃん！俺にはアドバイスないの？」

西さんは影次の方をチラッと見ると

「技術的なことはしつかりとできている。身体が成長したらズレが生

じるから、それを素振りなどしながら、調整すればいいだろうな。わ
s、俺よりも思いきりがいいところがあるから、あまり変に気にする
ことはない」

「結局素振りか〜…まあ、やるけどね…」

そうして影次は素振りを再開した。

クリスは、時々西さんがやるような、ゆっくりとした素振り、とい
うよりは、バットが出るべき軌道を丁寧になぞっている。

少しでも3年生に追い付くために、他の先輩のアドバイスも聞きな
がら、懸命に素振りを続けた。

▽

5月の中旬になり、関東大会が開催された。1回戦はシードで、初
戦は2回戦となった。先攻、青道のスターティングオーダーは

- 1 西 晴之 ショート (左)
- 2 小湊 セカンド (左)
- 3 玉森 ライト (右)
- 4 道川 サード (右)
- 5 結城 ファースト (右)
- 6 城之内 レフト (左)
- 7 石橋 センター (左)
- 8 真木 ピッチャー (右)
- 9 藤谷 キャッチャー (右)

確定メンバーに加えて、2年生の小湊、伊佐敷が1軍となっていた。

スターティングメンバーが発表された時に、球場がざわつく。

「ピッチャー1年生？丹波とか伊佐敷じゃないのか」

「え、この時期の1年生登板って、相当期待されてるんだよな？あの打
線を育て上げ、武藤、井手を覚醒させた若き名将、片岡監督のことだ
し、変なことはいないだろうけど、あの選手層に割り込むってやばく

ないか?」

記者の峰は必死にペンを走らせる。

「1年生だよな? 180cm以上あるんじゃないか?」

「身体も結構がつしりしてるな」

ドズン!

球速は138キロと、1年生にしては速いという印象を受けるが、高校野球としてはそこまでではない。注目すべきはその球の威力、重さ。相手打者がバットに当てたとしても、まともに外野に飛んでいかない。キャッチャーの藤谷も、簡単に飛ばされることがわかっているからか、ゴロを打たせるような配球をして、球数を節約している。(相手も関東大会に出てくるような高校だ、打線が悪いわけではない。しかし、あの落ち着きようと、打者の力を見切ったような投球はなんだ?)

真木の1年生らしからぬ落ち着きと、目の前の打者に自分の力を試してみたいという、年相応の目の輝きを見ていく。

(青道には他にも気になる点がある。ベンチ入りメンバーに、次期エース候補の丹波がいないのは、真木の存在に納得させられたが、滝川がいないのはなぜなのか。藤谷も相当いいキャッチャーだが、打力を考慮すると滝川の方が総合的には上に思える。普通、外すなら1年生の御幸だろう)

結局、5回コールドで13-0と青道が完全勝利を遂げた。試合が終わってから峰は青道の選手登録について、考察していく。

(ゴシップ的なのは書かないが、滝川が外れるとすれば怪我の可能性か。滝川の穴は藤谷で完全に埋まるだろうが、秋以降には岸谷、藤谷はいない。そうか、そのために御幸を1軍に残したのか。滝川の怪我次第では、秋以降、王者青道の牙城が崩れるかもしれないな)

峰はそのような展開を予想した。

(小湊、結城、御幸、西影次、真木、丹波、伊佐敷が残る。豊富な投手陣に、確立された3、4番を打てる打者。あれ? これでも十分強い)

か?)

未来の青道を心配しながらも、現在の青道に目を焼かれた記者は、今日も腹ごしらえにうどんを食べに行くのだった。

次世代のエース part 2

青道は選手を入れ換えながら、結城、小湊、伊佐敷、真木、西影次、御幸に経験を積ませ、圧倒的な力で関東大会のトーナメントを駆け上っていく。

そんななか、丹波は2軍ブルペンで落合コーチの指導を受けていた。

「丹波、正直なことを直球で聞か、オブラートに包んで伝えてほしいか、どっちだ？」

丹波は唾を飲み

「ええつと、しよ、正直な方でおねがいます！」

声を裏返らせながら答えた。落合コーチは首をかしげながら、ふむ、と顎をさすり

「まずは球種についてだが、直球とカーブだな。それ以外は？」

「ま、まずは今あるものを磨こうと思っけていまして！あの、その2つだけ……です……はい」

「うむ、それだと当然レギュラー野手陣から、アウトを取るのは無理だな」

落合コーチはため息をつく。

「同学年の伊佐敷はスライダー、フォーク。槇原はカーブ、フォーク、シュートと2種類以上の試合で使える変化球を持っている。直球とカーブだけで、紅白戦を4回投げることができた。これは評価しない。十分その2つは甲子園でも通じる球だろう。だがその2択しかない、その前情報があれば話は別だ。関東大会前のレギュラー陣みに、ガンガン打たれるだろうな」

「はい……すいません……」

「目指す方向性がずれている。直球とカーブの質はいいのにもったいないぞ。他に覚えてみようと思った変化球はないのか？」

落合コーチは若干呆れたように聞く。

「や、やるのであればフォークを覚えようかなって、思っています」

「他には？候補はあるのか？」

「ええつと、フォークも咄嗟に浮かんだもので、実はまだ何も」

はあーと落合コーチはため息をつき、丹波はビクビクする。

「直球とカーブである程度の緩急になる。フォークで一息つくのもいいだろう。タイミング外しができるなら、あとは詰まらせるボール、または空振りを奪えるボールを覚えるべきだ。」

ふんふんと丹波は頷く。

「それでだ。お前が咄嗟に思い浮かべた縦に落ちる球、フォークではなくて武藤の使ってるSFFを、エースから受け継いでみないか？」

丹波はその言葉に固まる。

「覚える気があるのか？どうなんだ？」

後ろから武藤さんがやってきて、肩に手を置いてくる。

「それとも何か？バレバレの球種で、全国の打者に通じると言うほどお前はすごいのか？」

「いや、そんなことは、あの」

「目指すものがあるのはいい。市大三高の真中だったか？でもここでは、青道ではあの程度のレベルでとどまってもらっては困る。」

丹波は目を見開いて武藤さんを見る。

「バッターの反応をみる限り、球質は既にお前の方が上だろう。なぜカーブに拘るのは知らないが、使えるものはなんだって使う。それくらいの気概がないと、お前はこれから完全に真木の後塵を拝することになる」

「そ、それでも、かつちゃん俺の憧れです！俺はあいつみたいにチームのエースになりたいんです！あいつは高速スライダーを磨いてエースになった！俺はカーブで！っっ！」

じつと武藤さんが真剣な目で見てくる。

「……わかった……熱意を認めるよ。カーブを好きにだけ投げればいい。落合コーチ、すみません、先に1軍ブルペンに戻りますね」

そう言うと、武藤さんはこちらの方を見向きもせず、立ち去っていった。落合コーチは何故か残念そうな顔で

「意志は固いか。丹波、今ある武器をしっかり磨くために、せつかく2軍にきたんだ。まだお前は線が細いから体重を増やし、身体をもつと

作っていくぞ。下半身を主に強化して直球とカーブの球速を底上げしているこう」

「はいっ！がんばりますー！」

そう言うのと丹波はランニングをしに、グラウンドへと走り出した。冷めた目をした落合コーチを残して。



武藤は丹波の言葉に覆せない、いや、覆してはいけないものを感じ、説得を諦めた。1軍ブルペンに戻ると、井手、伊佐敷、真木が各々調整メニューをこなしていた。伊佐敷がこっちに気づくと手を振ってくる。

「武藤さーん！用事ってなんだったんスか？」

「少し落合コーチに呼ばれてたんだ。もう少ししたら落合コーチもここに来ると思うよ」

「おおー！マジっすか！今チェンジアップがいい感じになってるんで、確認してもらおうように頼むのと、新球種なにか面白いのなか相談したかったんスよね！井手さんにチェンジアップ合格もらったんスよ！ね！井手さん！」

井手は汗を拭いてこちらを向くと

「及第点レベルだ。1軍レギュラーには通用しない。ボールが高い」

「うええ！そりゃないっスよー！あんなに誉めてたじゃないっスかああー！」

と伊佐敷が泣きつく。

「うるさい、離せ」

「伊佐敷さん、みつともないですよ？」

ひょいっと伊佐敷を真木が持ち上げる。

「やめろおおお！真木！小人扱いしてんじゃねえ！」

「僕から見たら部員の半分小人ですから。御幸とかちっちやいっちっちやい」

「ブッ！」

ああ、冷静な井手のツボに……あいつクールなのにもすぐ笑うんだよな……

「練習やってるか?」

落合コーチが1軍ブルペンに入ってくる。

「少し話をしていました。先程の件についてはみんなに話しても?」

「いや、今はあのままでしょうがないだろう。話す時期としてはもう少し後の方がいい」

「わかりました」

落合コーチは4人を真剣な目で見る。

「おそらく夏の大会は、この4人の投手陣で乗り切ることになる。武藤、井手は今ある力を十全に発揮するように。伊佐敷は次へ向けてチェンジアップの精度を高め、投球の幅を増やす。真木は現在のボールをしっかりとコントロールできるような、下半身を安定させるメニューを優先させていく。緩急に関しては夏の大会が終わってから課題にしよう」

「はいっ!」

「各自!1つ1つのレベルアップを図る、明確な目標を設定するように!野球ノートで片岡監督に考えていることをしっかりと伝えてくれ。では練習に戻るように」

伊佐敷以外はすぐに、練習に戻る。

「コーチ!チェンジアップ見てください!今日のはいけるっス!」

「昨日も同じことを言っていたな阿呆が」

「言ってみましたっけ?」

落合コーチは頭をかき

「見てやるからしっかりと投げろよ」

「ウスッ!」

目を輝かして伊佐敷は、低めにしっかりとコントロールされた、チェンジアップを一発で投げた。

次世代のエース part 3

青道は関東大会を制覇し、自身の力を高めるために、実践形式多めの練習をしていた。そのなかで、西 晴之はバッティング練習のため、1年生の川上に投げてもらっていた。

カキーン！

「相変わらず飛ばすなあ」

「あの1年生、川上だったか、右のサイドスローでスライダー持ちの。いい球質してるけど、あの球速だとレギュラー陣にとっては打ち頃だもんなあ。しかし、打ち損じがないのすげえな」

西は淡々と処理するように、川上の投げたボールを捌いていく。川上に、こちらに対して遠慮するような様子が見えたため、声をかける。「川上！俺に当ててもいい、それくらいの気持ちで投げろ！全部避けてやるから今のうちにそれくらいやっつけ！」

「ええ!?は、はいっ！えっと、西さん！それだったら試したいボールがあるんですけどいいですか？」

「よしーんじー！」

ブオン！

川上の投げたボールは、西のスイングを掻い潜ってキャッチャーのミットにおさまった。

「おおー！空振り！」

「おいおい！晴之なにしてんねん！」

「もーもう一球いきますー！」

ドガア！

ライトフェンス直撃のあまりにも強烈な一打に、グラウンドは静ま

り返る。

「空振りを取れるいいボールだった。興に乗った、わしが本気で相手してやる。川上、こい！」

「はいっ！」

川上は滅多打ちにされ、打者に当たる軌道のボールすらも打たれた。しかし、今まで感じたことのない強烈なプレッシャーの中、西に当てる心配がないとわかった川上は、左打者に対してフロントドアとなるシンカーを、西の膝元に投げ込むことができるようになっていった。

「ありがとうございます！」

「ああ、こちらこそありがとう。身体ができてきて、球速、球質が更に良くなれば、直球、スライダー、シンカーでいい線いけると思うよ」

「はい！今日の感覚を忘れないようにします」

西は頷くと

「テッドボールは避けられない方が悪い。そういう気持ちで投げたらいい。川上は優しいからどうしようと思うかもだが、わざとじゃなければ仕方がない。そう割りきって気楽にやっつけていけ」

「はい！」

「落合コーチに、シンカーの件をすぐに報告して、試合に使えるように仕上げていくといい。悩んだらあのコーチに相談してみると、あらかた解決すると思うぞ。あと、右打者に投げたかったら東に頼め。今の高校球界最高の右バッターだからな。期待してるぞ、じゃあ守備練習に行くからまたな」

「ありがとうございます！」

東に頼むの怖いなあ、そう思ってそうな川上を放置して、片岡監督がノックを打つ守備練習に加わる。

「影次！バツティング交代だ！次でラスト打ってもらえ！」

「はい！」

しっかりとした足運びと、それに連動した上半身の動きからの送球。教えたことを実践できている弟を見て頷く。駆け足でやってくる弟に

「川上の相手をしてやってくれ」

と告げ、理由を聞かれるが、いいからいいからと、情報なしに向かわせる。片岡監督に向かって

「お願いします！」

順々にノックを受けていく。現在ノックを受けているのは、バッティング練習をしている者以外の1軍のメンバーであり、ミスは全くと言ってもいいほど見られない。それに対して片岡監督は満足そうにし

「1年生は抜ける！もつと強いノックをいくぞ！誰が最初だ！」

「こつちこいやー！」

「外野こーい！」

更に激しいノックが行われる。すると、さすがに3年生のなかでもエラーが出てくる。

「おい！東！その腑抜けた守備はどうしたー！それでいいのか？またエラーするのか！」

「もういっちょー！」

「神田！今のへなちよこ送球はなんだ！相手に向かってビシツと投げんか！」

「くそー！もう一球お願いします！」

この時期に合宿最終日のノックをしているのか？と見間違えような、激しいノックに小湊、結城をはじめとした2年生がついていけなくなり強制的に、抜けさせられていく。しかし、3年生は誰一人脱落することなく、片岡監督のノックを受けきった。1時間半もの集中ノックをした後、少し休憩を挟んで、3年生はまだ足りないと言わんばかりに、バッティング練習をする。

「小湊！体力切れか？坂本と1、2軍かわるか？ああ？」

「いえーやれます！」

全体のレベルが上がれば、練習の内容もより高いものとなる。それについていこうと、2年生、1年生も必死になっていた。

そのなかで、西はエースである武藤と3打席勝負をしていた。今

ちょうど2打席終わり、結果は右中間への長打とレフト線へのヒット、2打数2安打となっている。

「西、お前インコースのスローカーブの後の、アウトコースの直球を綺麗に流し打ちって、やりすぎじゃね?」

「緩急使うんだろうなくってバレバレだ。直球だと流し、変化球だとセンター前、スローカーブだと引っ張るか、くらいの感覚でいたら対応可能だ」

「普通できないと思うんだがなあ」

武藤は軽いため息をつき、西の方を真剣に見てくる。

「いつか全部アウトにしてやるからな!」

「望むところだ」

お互いに相手を威圧しながら3打席目の勝負に入る。

初球、バックドアのスローカーブで1ストライクとなる。続いて、同じコースにカーブを投げるが、変化量の差から1ストライク1ボールとなる。

ズドオン!

最近150キロを越えたストレートが、インコースの高めに決まり、2ストライク1ボールと追い込まれる。

ギーン!

対角線上のアウトコース低めへのストレートを、軽くカットする。

パン!

「切れが抜群だったな」

「しゃああああ!」

バットを振り切った状態で、岸谷のミットにおさまったボールを見る。3打数2安打1三振、完全に抑えられたとは言えないが、初めて

西から奪った三振に武藤はガッツポーズをした。

(あのSFFはうちの打線でも、3巡目がないと厳しいのではないかな?)

「西が三振したのって、3年生になってから初めてやんね? こうちやんすごいやんか!」

そう言っつて柳は武藤に抱きつきに行く。

「ええい! やめろ! 次はお前と勝負だ! さつさと打席へ行け!」

「ええやんか! ♪ちよつとくらい!」

じゃれつく2人を見ながら、確かなエースの成長を感じたからか、西は微笑んでいるように見えた。

夏合宿 part 1

5月末から6月初めにかけて、青道では、関東大会後の1軍最終選抜が行われていた。直近では、1軍確定メンバーを除いた、候補メンバーを中心としたチームで、対外練習試合を行っていた。

また、投手陣はメンバーが確定していたため、武藤、井手、伊佐敷、真木は、基本的に1軍レギュラー陣の形成する打線との対戦形式で経験を密に積み、更なるレベルアップを図った。

そして、6月の2週目、夏合宿直前に1軍メンバーが確定した。

投手

武藤、井手、伊佐敷、真木

捕手

岸谷、藤谷、御幸

内野手

結城、道川、会田、東、神田、西晴之、西影次、小湊

外野手

栃谷、柳、玉森、城之内、石橋

関東大会と同じメンバーで、夏の大会に臨むこととなる。

片岡監督と落合コーチは、選手起用について話し合っていた。

「基本的なスタメンは、完全な実力主義でいいですか？」

「ああ、本人達、特に外される選手自身がわかっているだろうな」

「ではこれが合宿前、現状での評価におけるスタメンです」

1 神田 セカンド

2 西 晴之 ショート

3 柳 センター

- 4 東 サード
- 5 栃谷 レフト
- 6 玉森 ライト
- 7 道川 ファースト
- 8 岸谷 キャッチャー
- 9 ピッチャー

ベンチ野手控え

藤谷、御幸、結城、会田

小湊、西影次、城之内、石橋

スタメン全員が3年生という事実には、2人して難しい顔をする。

「道川が急激に力を伸ばしたとはいえ、それを凌駕する3年生スタメン野手陣の成長には驚かされました。」

「元から強い学年ではあったが、ここまでくると恐ろしく感じる。そして、その野手陣と真つ向勝負を続け、1軍投手陣は精神的にかなり成長を遂げた」

「延々と勝負し続けてましたな。かなり度胸がついたように思えます。並みの、というよりは東京都で、市大三高の北川以外には気後れしないでしょうな」

お互いに、かなりの成長を遂げた教え子達を思い、お茶で乾杯する。「油断せずにこの夏を取る。次の世代のことはとりあえず、夏の大会以降考えることになる。今できることは1軍にいる1、2年生に経験を積ませること。こう割りきるしかないな」

「そうでしょうな。合宿で3年生に気合いを見せてもらって、この青道を受け継ぐ。それを実感させることが、まず最初にできることでしょうか。こういうことは焦らず1つずつ、課題をもってこなすのが吉ですな」

「うむ。合宿のメニューなのだが……」

2人は綿密に、合宿メニューを組み立てていくのであった。



唐突だが、練習で恐怖心を抱いたことはあるだろうか？

ドゴオン！

夏合宿2日目、小湊は、エースの武藤さんと3打席勝負をしていた。(以前と言っても2月だから4か月前か。あの時よりもノビ、キレに磨きがかかって、全然捉えられない！特にSFFのキレがおかしい！それに威圧感というよりは殺気みたいなのがっ！くっ！)

結局、小湊は3打数ノーヒット2三振と、完璧に抑えられた。圧倒的な力でねじ伏せられ、悔しさが溢れてくる。

「小湊！次は守備だ！早くいけ！」

1軍漏れした先輩に急かされ、ノックを受けに行く。セカンドには西さんと神田さんが、お互いに気になることを言い合いながらノックを受けていた。

「腰が高い！1cm高い！もうバテたか？晴之！」

「交互に打ってるからって先に走り出すな！神田！地味にせこいぞ！」

(いや、じゃれあってるだけか)

「バッティング終わったんで交代お願いします！」

「おう！晴之いつてこい！」

「ああ、行ってくる。小湊がんばれよ！」

ノックを受けていると、神田さんに話しかけられる。

「足の運びが鈍くなってきたぞ！もつと腰を落とせ！」

「はいっ！」

エラーをするたびに神田さんに指導してもらう。

「しつかり正面に入れ！適当になって半身で最初から取りに行くな！」

「はい！」

西さんが戻ってきて、神田さんがバッティング練習に向かう。

「まだ下半身と上半身の連動がぎこちないところがある。せつかくの練習だ、もう少し意識してみろ」

「はいっ！」

守備の後はポール間ダツシユや、ベースランニングなど、20人に限定されているからこそ、出番が多くなるきつい練習を乗り越え、今日の練習を終えた。

合宿で、まだまだ余裕のありそうな先輩達だが、意外にも、3年生で自主練習をしている者はいなかった。

(先輩達はさすがに完全休養なのかな?)

そうなれば暇なので、練習で気になったことはなかったか、聞きに行くために神田さんの部屋に向かう。その途中で結城とバツタリ出会った。

「あれ? 哲は今年も泊まるの?」

「ああ、さすがに合宿中はきついから、通学は危ないとのことだな。来年も泊まることになるだろうな」

「そうかそうか」

2人して神田さんの部屋に向かう。

「キャプテンの神田さんの部屋に泊まることになったんだ。昨日から3年生が入り浸ってるよ」

「え、そうなの? なんかずつと野球のこと話してそうだけど」

「いや、普通に音楽の話とか、ゲームの話とかしてるよ。俺達と何の変わりもないさ」

コンツ! コンツ! コンツ! ガチャ!

「お! 哲! やつとききたか! 相変わらず西さん将棋強いんだって! 変わってくれ!」

「ぬ!?!」

「よろしくお願いします」

オーラを出しながら結城は、冷や汗をかき西さんに挑んでいく。

「いやあ、さすが哲だぜ、8手目にして既によくわからんことしてるな。二歩するにしても早すぎだろ、なあ、亮介」

「いつもの雰囲気だと強そうなんだけどね」

伊佐敷と話しながら、小湊が周りを見渡すと、影次と御幸、真木が道川さんから、身体のケアについてレクチャーを受けており、栃谷さんは壁に寄りかかって爆睡している。玉森さんは一人で黙々とマジックを披露し、それを柳さんと東さんが

「ええやん！全くわからんけどすごい気がするやんな！」

「ぐう！なんでこつちにあつたボールが、お前の帽子から出るんや！孝太！ずるしてないやろな！」

と騒ぎ立てるが、玉森さんは黙々とマジックを続ける。

そのなかで、岸谷さんはノートに今日の配球など、かなり細かいことを書いていた。

「岸谷さん、打撃に関してなんですけど、俺を抑えるとき何を意図してましたか？」

チラツと岸谷さんはこちらを見てから

「よく西に指摘されている当てにいつている、そう言った感じがすごく感じられた。2年生のなかではミートは上手いけど、武藤に対しては分が悪く、ストレートをまともに打ち返す力はない。低めのストレートを軸に変化球で終わり。それくらいだな」

「……なるほど……」

「厳しいことを言うようになるが、そのスタイルは格上には通用しない。粘ることも大事だが、それでスイングが鈍って打てるものも打てない。中途半端なスイングだから、ストレートで押し付けて。逆を言えば、しっかり振り切れば、配球を変えていた。」

岸谷さんはペンを机の上に置く。

「パワーがないと、自分から決めつけるのはよくないんじゃないか？あの神田だって2年生の春頃まではパワー不足で、苦しんでいたんだ。簡単に自分で未来を狭めるなよ」

「はいー」

少し心がすっきりした小湊は、玉森さんのマジックを近くで見るとにするのだった。

夏合宿 part 2

現3年生がこなす合宿メニューは、1、2年生には早すぎた。結城、影次以外は脱落し、木陰に倒れこみ、休息を取っている。

そうした現状に対して、片岡監督は

「2年生の榎原、丹波、増子、1年生の川上、倉持、白州。以上6名は3年生1軍の練習に混ぜられ。お前達から1軍を奪い取った奴らが脱落した練習、お前らが引き継げ」

「はいっ！」

こうなるとわかっていたかのように、2軍にいる秋以降の戦力を1軍に混ぜる。最初はキレよく動いていたが、2日目、脱落組が復活しても、支援組に回ることは許されず、3年生を追い込むメニューを同じように課される。

(やべえって、なんでこの人達こんなに動けるんだよ)

昨日脱落して、今日復活した御幸は、重いからだを動かし、岸谷さん、藤谷さんを見る。ノッカーのクリスさんに前後左右に走らされる。

(キャッチャーフライ、落としたらベースランニング一周してすぐもう一回とか鬼畜過ぎんだろ)

昨日3連続落球しダウンしたため、今日は落球なしでいきたい。すると、クリスさんがボールを自分の前に転がしてくる。

「ボール2つ！」

すかさず拾って2塁へ投げる。

「2塁に誰もいないのに投げるやつがあるか！指示があってもカバーがいなかったら投げるな！ベースランニングゴー！」

「くそつたれがあああ！」

全力で一周した後、キャッチャーフライを打たれる。なんとかキャッチして藤谷さんと交代する。息を整えていると岸谷さんが

「クリスのやつ、変にバリエーション増やしてきて鬼畜だな」

「ぜえ…ぜえ…ですね。すごく嫌なことしてきますよ」

「ボール3つ！」

捕球した岸谷さんが反応しかけるが、投げのをやめる。3塁を見ると、東さんがニヤニヤしながらこちらを見ている。

「サードに東さんが控えていたのに投げないのはダメですよ！ベースランニングゴー！」

「くそやろおおお！」

岸谷さんが走らされる。

(クリスさん容赦ねえな)

そんな日々が続く、合宿メニューの最後に監督ノックが行われたが、1, 2年生は全員が脱落し、3年生の西さん、柳さん、東さんだけが最後まで立っていた。

「もういっちょよー！」

「まだまだいけるやんなー！」

「さあこいやー！」

ラストはこの3人が10球ずつ、ミスなしでノックを切り抜けた。

「ありがとうございますー！」

明日から2日間、合宿の締めとして練習試合が行われる。明日は2試合、明後日は1試合の予定である。

御幸は、今日は早く寝て、明日の朝、相手について研究することを決めて、布団にもぐった。

……

「おきろー！」

先輩の声にハッ！と目を覚まして時間を見ると7時10分、朝練習は合宿の翌日として休みであったが、ご飯を食べねばまずい時間。

ご飯をかきこみ、準備をしてグラウンドに行くと、今日の練習試合の相手、国士館と白龍高校のメンバーが準備運動をしていた。

(あつ、相手研究してねえ……どうしよ……)

今日第一試合のスタメンマスクをかぶる予定の御幸は、盛大にやら

かしていた。

第一試合の青道のスタメンは

- 1 石橋 センター (左)
- 2 小湊 セカンド (左)
- 3 結城 ファースト (右)
- 4 道川 サード (右)
- 5 玉森 ライト (右)
- 6 西 影次 ショート (右)
- 7 城之内 レフト (左)
- 8 御幸 キャッチャー (左)
- 9 武藤 ピッチャー (右、右オーバースロー)

国士館の投手はエース財前が先発である。

昨秋の時点で最速141キロ、持ち球はスライダー、カーブ、フォーク、ツーシームと豊富である。

御幸はかろうじてその情報は覚えていた。

(攻撃の時にベンチでサツと復習するしかないか)

こちらが先攻なので、早速スコアブックを見ようとベンチに入ると、隣に武藤さんが座る。冷や汗が垂れる。

「今日のバッターの特徴は〜」

1番打者から簡単な特徴を説明される。

「すぐに爆睡したと報告を受けてな。まだ身体ができあがってないんだ。無茶をするなよ」

「う、うす」

「罰として試合が終わったらグラウンド10周だからな。監督にも最初から言っている」

御幸はうなだれ

「はい、走らせていただきます」と言うしかなかった。

投手戦となると思われたが、2回表に先頭打者の道川さんのツーベースヒットと、玉森さんのセンター前ヒットの連打で青道は先制点をとる。その回は後続は続かないで追加点はお預けとなるが、4回表にも石橋さんが四球で出塁すると、亮さんがバントでランナーを得点圏へ送る。1アウト2塁で哲さんが、レフトフェンス直撃のタイムリーヒットを放ち、2点目をとると、道川さんのシングルヒット、玉森さんの四球で1アウト満塁のチャンスとなる。

バッターは今日6番に入った西 影次。

「影次いったれー！」

「怪物を継ぐものー！いけいけー！」

財前さんのカーブ、ストレートに食らいつく。

パアン！

「ストライク！バッターアウト！」

「あぁー！見逃し！」

「満塁だぞー！積極的に行けー！」

過剰な期待、合宿の疲れで動きが鈍ったか、影次はインコース低めのフォークを見逃してしまった。

「ドンマイ！ドンマイ！」

「次もチャンス回ってくるぜー！」

「城之内ー！仇とったれー！」

キーン！

決して大振りではないスイングで、しっかりと捉えられたボールは、右中間を破っていく。

「まわれまわれー！」

「おおおお！打ったー！さすが怪物世代！」

2, 3塁のランナーはホームへ到達し、2点追加した。青道は4-0と国士館からリードし、なおも2アウト2, 3塁のチャンス。

「8番 キャッチャー 御幸一也」

「まだまだちっこいのー!」

(うるせえ、もつとでかくならあ!)

若干イラツとしながら、ピッチャーの財前を観察する。

(ストレート、カーブを主軸に、時折フォークを投げてくる。ストレートの140中盤くらいは出てるかな。さっきはカーブでやられたし、カーブ狙うか)

2球続けてインコースのストレートを投げられ、手が出ない。

(そろそろくるか?)

ギーン!

(いつてえー!)

カーブに詰まらされ、セカンドゴロとなった。

(あまり曲がらないけど威力のあるカーブだった?前の回とは違う種類のカーブか...厄介だな...)

武藤さんは無失点のまま、軽快に国士館打線を6回まで抑え続ける。財前さんは5回以降も曲がらないカーブを使って、出塁すら許さない投球をし、7回表終了時点で4-0と、試合の動きが停滞していた。

夏合宿 part 3

「ムービングの一種だろうか」

「え？曲がらないカーブじゃないんですか？」

クリスさんの言葉に、真木は疑問を持つ。御幸から聞いた限りだとあまり曲がらない、キレの良いカーブだが、どうなのだろうか。

「普通のカットボールだと、ストリートと同じくらいの球速から、直前に変化して詰まらせて凡打を狙う形になるが、遅いカットボール、スローカットだとタイミングをずらしながら、詰まらせることも可能なボールになる。チェンジアップのように使う事が多いみたいだが、財前は独特の沈む変化を利用して、カーブと曲がる場所が同じくらいになるように調節し、変化量の差で惑わせるような使い方をしているよ
うだ」

そうクリスさんに説明される。納得するが、一応はクリスさんの見解なだけなので、完全には信用するなよと、自分でも分析するようにと言われる。

「おおおおおー！」

「ここでエラーかあ」

7回裏、先発の武藤さんは、打たせて捕るピッチングで球数少なくていていたが、先頭打者である1番打者が、セカンド小湊さんのエラーで出塁する。内野陣が集まり、小湊さんは背中をバンバン叩かれている。

次の打者を打ち取るが3番にヒットを許し、1アウト1、3塁のピ
ンチとなる。

「闘魂エースから点をとれー！」

「国士館ふぁいふぁい！」

国士館側観客席からの声援が大きくなる。

「4番 ピッチャー 財前 直行」

「ぎいぜえええん！いけええん！」

「点取れ財前！」

打席に財前さんが立つと、さらに応援が大きくなる。ベンチにいる

真木は

「エースで4番ってどうなんですかね？このチームにきてからは、想像できないんですけど」

とクリスさんに疑問をぶつける。

「毎日試合するわけではないから、可能だとは思いますが、精神的にかなり厳しいものがあると思うぞ。4番でエースの聞こえはいいが、自分の出来次第で試合の勝ち負けが決まるのは、負担がかなり大きいし、チームとしては安定感は望めないだろうな」

「なるほど、こういった場合はどうですかね？」

そう言って真木は、打席に立つ財前さんを見る。

「新球種のスローカットが上手く機能して、テンポが上がっている状態だ。ここで打てば国士館に流れがいくだろうな。」

そう言われて、武藤さんと財前さんの戦いを見守る。

ここまで3球投げて1ストライク2ボール。慎重に投げているのがこちらからもわかる。

ギーン！

若干詰まったような当たりが三遊間を抜けていき、タイムリーヒットとなる。

「いいぞー！国士館！財前！」

「おおおおお！」

ドゴオン！

武藤さんがギアを上げ、たった一球で相手の逆転ムードを壊す。5番、6番打者をそれぞれ、三球三振で仕留め、これ以上点を取れる希望を摘み取る。

「クリスさん……これは……」

「俺も驚いてるよ。投手は野手と比べて、練習を軽めにはしているとはいえ、合宿直後のきつい時だ。身体は重く、十全な動きはできないは

ず。万全でなくとも国士館打線を抑え、ペース配分して、ここぞという時に相手を挫く。これが今の青道のエース。野手陣もそうだが、投手陣も頼もしくて仕方ないな」

苦笑いしながら、ベンチに戻ってくる武藤さんを迎える。

「ナイスピッチー！」

「ここから追加点とるぞー！」

先頭打者の武藤さんは打ち取られ、1アウトで1番打者の石橋さんが打席に立つ。8回の表で財前さんの球数は120を越えてきており、かなり厳しい表情をしている。

石橋さんは、財前さんのスタミナが切れかけているのがわかっていするため、しっかりと粘ってからセンター前にヒットを放つ。続いて小湊さんがレフトへの流し打ちで1アウト1, 2塁へとチャンスを広げると、さすがに国士館は投手交代する。後続の投手ではクリーンナップを抑えることが出来ず、4点追加して8回表を終える。

8回裏、8-1の7点差がついた展開で、武藤さんは7番から始まる下位打線をゴロ3つの三者凡退で締め、青道は8回コールド勝ちを決めた。

合宿の疲れ、財前さんの粘りがあったものの、力、精神力で上をいき、結果としてコールド勝ちをおさめる青道。しかもスタメンはほぼ控えの選手であることに、もう1つの練習相手である白龍高校の主砲、蒲生さんは、青道レギュラー陣に春の甲子園大会で大敗した試合のことを思い出し、武者震いしていた。

夏合宿 part 4

練習試合の第一試合で、国士館を8回、8―1の7点差コールドで下した青道メンバーは、第二試合の白龍高校vs国士館の試合を見ていた。

お互いに2番手ピッチャーが登板し、じわじわと点をとっていくが、キーマンとなる選手の多さで、白龍高校が勝利を掴んだ。

7回裏、3―3で同点、ノーアウトの場面で、期待の新戦力である1番打者の美馬がツーベースヒットを放つと、2番打者のバント、3番打者の犠牲フライで勝ち越す。そして、4番の蒲生がソロホームランを放って2点リードする展開となった。

国士館は4番の財前がシングルヒットで出塁して、チャンスを作ろうとするが、後が続かずに結局は3―5と力負けをしてしまった。昨秋と比べて投手陣に目処はたってきたものの、引き続き打線に関しては力の底上げが、重要な課題としてあった。

休憩を挟み、第三試合である青道vs白龍高校の試合が始まろうとしていた。後攻の青道は

- 1 神田 セカンド (左)
- 2 柳 センター (左)
- 3 栃谷 レフト (右)
- 4 東 サード (右)
- 5 西 晴之 ショート (左)
- 6 岸谷 ライト (右)
- 7 会田 ファースト (右)
- 8 藤谷 キャッチャー (右)
- 9 井手 ピッチャー (左、左スリークォーター)

東、西 晴之、柳の揃った打順に青道ファンは歓喜し、応援の声が増していく。また、春の甲子園大会、1回戦の再現となる青道vs白

龍高校の練習試合だけに、注目度は高かった。

白龍のピッチャーは、春の甲子園では初回到1アウトもとれずに降板したエース土井。青道打線へのリベンジに燃えている様子を見て、土井はあの敗戦を糧にしてどう成長したのか、西はおそらくこうなっているだろうというイメージを持ち、素振りですべて完全に打てるという感覚をもって試合に臨んだ。

1回表、白龍高校の攻撃から試合が始まると、井手は低めを丁寧に攻める投球を心がける。ノビ、キレは合宿の疲れでいつも通りとはいかないが、コントロールに関してはピカ一である。先頭打者の美馬は球数を稼ぎ、ショートへ転がすのが精一杯であった。打球を西が積極的に前進して捕球すると、ランニングスローで1塁フォースアウトとなる。続く2番、3番も内野ゴロで初回を三者凡退で終える。

攻守交代した1回裏、神田が打席に立つと、青道側応援席からの歓声がグラウンドで守備をする白龍ナインに襲いかかる。しかし、完全にアウトな環境で白龍エースの土井は甲子園の借りを返すために燃えていた。

神田を緩急で翻弄してセカンドゴロに打ち取ると、2番の柳に真っ向勝負を挑む。インコースへのストレート、アウトコースへ逃げるシンカーを軸にした組み立てで、柳を7球でなんとかサードライナーに仕留める。

ここから中軸、3番の栃谷に対しては、右打者のため配球を変える。ストレート、スライダー、スローカーブと出し惜しみのない投球で追い込み、最後はインコースに沈むシンカーで空振り三振を奪い、青道の強力打線を初回三者凡退と、土井は甲子園での汚名を返上した。

ここから投手戦がと思われたが、2回表に白龍の4番、蒲生がツーベースでチャンスを出すと、5番の内野ゴロ、6番の犠牲フライで先制する。

それに対して、2回裏では、青道の4番、東がソロホームランを放ち、すぐさま同点に追い付く。西は厳しいところを攻められ四球で出塁するものの、続く岸谷、会田が抑えられてしまう。

7回表終了時点まで、ジリジリとお互いに点をとる展開が続き、4

―4の同点でいい試合をしていたが、7回裏に青道打線に全力投球を続けていた土井が神田、柳、栃谷から3連打をくらって合計6失点でスタミナ切れのため降板し、1アウト2塁の場面で、2番手ピッチャーの朽木へとスイッチする。

朽木も春の甲子園では、初登板でガチガチに緊張し、青道から7失点をしていたが、その敗戦を今乗り越えようとしていた。ノビのある直球にカーブ、フォークを持ち球とし、粘り強い投球ができる有望な2年生だ。

しかし

カキイン！

東の本日2本目となるツーランホームランをいきなりくらって、果然と打球の行く末を見つめる。更に

カキイン！

二者連続となる西のソロホームランで、朽木の心は折れ、白龍高校の監督は焦りながら3番手ピッチャーをマウンドへ向かわせる。しかし、そのまま流れを断ちきれずに白龍は7回裏、4―1―1で青道にコールド勝ちを献上した。

試合が終わり、西はグラウンドのトンボ掛けをしながら

(東は完全に4番として覚醒したな。詰まっても軽々とスタンドに運ぶのは流石のパワーと言ったところか。柳にはそのパワーがないぶん打率は低くなるが、木製バットだと立場は逆になりそうだな。柳はすぐ適応するだろうが、東は金属バットで押しきる癖を直さないと、プロでは厳しいかもな。)

と考えていた。

(まあ適応するのは高校野球が終わってからでいい。今は青道に、片岡監督に春夏連覇を捧げることだけを考える)

ミシミシと木製のトンボが軋む音を聞いて、力を緩めると、グラウンド整備を続けていった。

夏合宿 part 5

夏合宿の最終日、青道のグラウンドには、昨日よりも多くの高校野球ファンが詰めかけていた。

青道 v s 西邦

春の甲子園では実現することのなかった幻の好カード。それが今日、青道グラウンドで行われようとしていた。お互いのオーダー発表にどよめきが起こる。

青道の先発投手は1年生の真木 洋介、それに対して、西邦の先発投手は1年生の明石 聖也。両チームが将来のチームの柱を、この試合に持ってきたことに、コアな高校野球ファンは歓声をあげる。

先攻 青道オーダー

- 1 神田 セカンド (左)
- 2 玉森 ライト (右)
- 3 西 晴之 ショート (左)
- 4 東 サード (右)
- 5 栃谷 レフト (右)
- 6 柳 センター (左)
- 7 道川 ファースト (右)
- 8 岸谷 キャッチャー (右)
- 9 真木 ピッチャー (右、右オーバーロー)

対する西邦はクリーンナップに、3番 飯岡、4番 佐野、5番 明石の3人が並んでいた。

ドオン!

「ストライク!」

「おおおお! はえええ!」

「いいぞー! 聖也ー!」

青道の先頭打者、神田に対する初球のストレートは、神田にとって、見たことのないスピン量をした、鋭いものであった。

(この1年はやばい！)

すぐさま当てることを優先にし、球数を投げさせようと画策する。

ドオン！

「ストライク！ツー！」

「神田が空振り2つ？」

「地方大会で明石はかなり活躍してたけど、あのストレートもしかして相当やばいのか？」

ドオン！

神田は3球すべてを空振りし、三振に終わった。観客はどよめき、青道の応援席からは悲鳴のような声さえ聞こえる。

「孝太、スピんがえぐい。かなり伸びて見える、気を付けろ」

「りよーかい！」

2番の玉森の打席を神田は見守る。

(スピんのかかったストレート、球速はだいたい140キロ前半くらいか。変化球をまだ投げていないが、緩急があればうちの打線でも、攻略に時間がかかるかもしれない。しかし、ストレートの質で言えば、あの大阪桐生の兵藤以上かもしれないな)

冷や汗をかきながら、西邦のルーキー、明石 聖也を分析していく。低めにボールが集まり、玉森は5球目のストレートで空振り三振となった。青道打線からの二者連続三振スタートに、観客からの声が大きくなってくる。

「明石ー！！すげえぞー！」

「西邦のスーパールーキーー！これはくるぜ！」

ドゴォー！

西の放ったライトフェンス直撃の豪打に、観客席の声が一瞬途切れ、おおおと感嘆するような声が響く。

(あつ、空気が変わった)

ガイン！

4番 東の放った打球がレフト後方に落ち、タイムリーツーベースヒットとなる。

「青道先制ー！東ー！いいぞー！」

「スーパールーキーを初回から攻略ー！」

青道応援席からは息を吹き返したように、声援が聞こえ始めた。

カキイン！

綺麗な金属音が聞こえ、グラウンドを見ると、右腕を天に掲げた栃谷がダイヤモンドを一周していた。

(得点圏での薫は、東よりも怖いからなあ)

柳は四球で出塁するも、道川はストレートの球威に負けて、センターフライに倒れた。初回から3点をとられた西邦のピッチャー明石はワクワクした表情をしていた。

(目の前のプレーに全力で、野球を楽しんでいる。1年生、ルーキーであるが故の振る舞い、活躍か。乗せると危うい、なんとか点をとり続けて勢いづかせないようにせねばならないな)

そう思いながら、神田はセカンドの守備につく。

(西邦は強力打線と言われるが、飯岡、佐野の2人が突出したチーム、5番にあの1年生が入っているがどんなものか)

真木も1、2番打者を簡単に抑えると、3番の飯岡に粘られる。それでも真木は根気よくゾーンで攻める。

ガイン！

二遊間に強烈なゴロが転がってくる。なんとか飛び付き、そのままショートの西ヘグラブトスをする。西は右手で直接ボールを掴んで、ファーストへ送球した。

「アウト！」

飯岡の足が遅いことにも助けられ、3アウトでチェンジとなった。真木がベンチに戻りながら話しかけてくる。

「先輩ありがとうございます！」

「なんとかなってよかったな、俺らの世代No. 1キャッチャーって言われてるやつはどうだった？」

「ストレートの後、初見のカーブに、下半身が最後まで崩されないのはすごいと思いました。打撃に関しては間違いなく世代No. 1って言われても、文句は出ないと思います」

ベンチについて、スポーツドリンクを飲む。

「さっきもヒット性の当たりだったからな。だが、おそらくセンター前へのヒット狙いだったのをゴロにできたんだ。力は負けてない。合宿の疲れもあるだろうが思いきってやってみろ」

「はいっ！うちの打線よりは脅威ではないですから、積極的に攻めてみます」

そう言って真木はネクストサークルに向かっていった。明石はエンジンがかかったのか、ストレートのキレが更に上がり、カーブを混ぜて緩急を上手く使ってくるようになる。飯岡のリードにより上手く手綱をとって、青道打線を抑えようとするが、青道打線でも別格の西、東、栃谷、柳の4人を完全に抑えることができずに、少しずつ失点を重ねる。

それに対して真木は二巡目の飯岡にヒットで出塁されると、

佐野のタイムリーツーベースで1失点目、続く明石のツーランホームランで計3失点をして、5回を投げきったところでマウンドを降り、伊佐敷と交代した。

明石は異常なほどのスタミナで9回を投げきり、6失点で完投。伊佐敷は6回から登板すると、4回3失点でなんとか引き分けに持ち込

んだ。

春の甲子園で、高校No. 1右腕、大阪桐生の兵藤が青道打線を7回5失点したのに対して、明石は1年生ながら、甲子園優勝校に対して、9回6失点で引き分けに持ち込んだ。このことから、明石の元から高かった評価が更に上がり、1年生世代のNo. 1ピッチャーとして、高校野球ファンの中で持ち上げられることとなった。

抽選会を経て

落合コーチは、夏の西東京都大会の抽選結果を見ながら、ミーティングをするチームを見守る。それとは別に、頭の中で現在の情報を整理する。まずは選手の背番号

- 1 武藤 3年生
- 2 岸谷 3年生
- 3 道川 3年生
- 4 神田 3年生
- 5 東 3年生
- 6 西 晴之 3年生
- 7 栃谷 3年生
- 8 柳 3年生
- 9 玉森 3年生
- 10 井手 3年生 ピッチャー
- 11 伊佐敷 2年生 ピッチャー
- 12 真木 1年生 ピッチャー
- 13 藤谷 3年生 キャッチャー
- 14 会田 3年生 ファースト
- 15 結城 2年生 ファースト
- 16 小湊 2年生 セカンド
- 17 西 影次 1年生 外野、ショート、サード
- 18 城之内 3年生 外野
- 19 石橋 3年生 外野
- 20 御幸 1年生 キャッチャー

3年生を中心とした、紅海大相良でも経験したことのない、磐石な体制に、油断すると笑みがこぼれそうになるのをグツと我慢する。しかし、このチームですら確実に勝てるわけではないということを、合

宿最終日の西邦戦で思い知らされた。

西邦の明石の他にそんな存在はいないか、なりうるものはいないかと探してみればいるではないか。同じ西東京の、それも強豪の稲城実業に入った、去年の城南シニアのエース 成宮 鳴。

右の明石、左の成宮。中学時代に場所は違えど、そう持ち上げられた2人の逸材。U-15日本代表としての登板経験のある2人は、世代の中でも飛び抜けた存在であることは明白。

西の弟の方、影次は成宮から2打席連続の本塁打を記録してはいるが、兄とは違って、試合によりムラのある影次のことだ。本当に絶好調のときに、成宮と当たったのだろうことを考えると、明石の例があるため、楽観視はできない。

稲城実業のエース 南野を打ち崩したとしてもリリーフとして成宮が出てくると考えた方がいいだろう。

具体的な高校名が出てきたので、当たるであろう高校をトーナメントから予測していく。

1回戦はシード、2、3回戦までは弱小校との戦いとなる。しかし、4回戦では市大三高と成孔の勝者と、5回戦では創聖、仙泉学園、紅海大菅生の勝者、準決勝にはどこが上がってくるかわからないが、決勝にはおそらく稲城実業が上がってくるだろう。

完全にこちらのブロックに名の知れた高校が、固まっているトーナメント表を見て、顎をさすりながら色々と考えをまとめている。

ミーティングが終わると、選手達は後悔のないように自主練習として素振りを始める。

(いつでもどこでも、就寝時間以外は誰かしらバットを振り込んでいる。これが片岡監督の信頼に応えようと、選手達が作り上げてきた雰囲気、普段の上級生の行動からくるもの。3年生がやっていたものを2年生が引き継ぎ、それに1年生が加わってきた。こういうチームは強い)

目をキラッと輝かせ、自主練習している場を離れる。



(少しでも長く！少しでも上へ！)

そういう思いで結城は、3年生との素振りの時間を大切にしている。去年は西さんの怪我というアクシデントがあったとは言え、唐突に伊藤さんの世代と野球をする時間が終わってしまった。

西さんのマウンドでうずくまる姿、頼りにしていた先輩達が泣き崩れていく瞬間は忘れもしない。

「今の調子で行けば大丈夫だ。スランプに陥ったとしても、今の自分を貫く。深呼吸をして適度に力を抜く。それさえできれば、お前なら次に何をすればいいかわかってくるはずだ」

西さん、柳さん、東さんに言われたこと、アドバイスをされたことを思い出しながら、3年生と練習する時間を噛み締める。おそらく4回戦で当たるであろう、市大三高にリベンジを果たすために、ひとつひとつの動作を大切にこなしていく。

(甲子園で優勝したとしても後2ヶ月弱……学ぶべきところはまだまだたくさんある……俺の代でもチーム全員で相手投手を崩す攻めかたができればいいのだが)

最近自分が自主練習をする周りに、同学年の亮介、増子、純を中心としたメンバー、そして後輩の影次や倉持、御幸も一緒になってバットを振りにくる。

自分が1年生の頃に憧れた2、3年生の面影を、自分達に重ね合わせる

(先輩達のように、言葉で、プレーで下の学年を引っ張ることはできないかもしれない。だが、その先輩達を見て俺たちも成長している。)

受け継ぐべきものを受け継ぎ、秋以降のチーム事情が頭に浮かんでくるが、頭を振って打ち消して、素振りに集中し直すのであった。

落合コーチの青道選手メモ（選手紹介）

背番号順

武藤 晃太 3年生

ピッチャー 右投げ右打ち オーバースロー

最速150キロのノビのある直球

ツーシーム、スライダー、カーブ、スローカーブ、SFF

安定感抜群のエースで、2年秋から登板した試合では負けなし。緩急も自在に操る、今大会N.O. 1右腕。

岸谷 琉斗 3年生

キャッチャー 右投げ右打ち

強気なリードと堅実な守備が持ち味。打撃に関しても穴はなく、安定感がある。

道川 尚樹 3年生

ファースト 右投げ右打ち

巧打、長打のバランスの良い強打者。ランナーに関係なく自身のスタンスを貫く打撃にファンが多い。

神田 陽一郎 3年生

セカンド 右投げ左打ち

常に冷静さを心がける理性的なキャプテン。走塁、盗塁では現在高校野球トップと言える。選球眼、ミートする力は全国トップレベルであり、西邦 明石のストレイトにも第2打席から対応した。

東 清国 3年生

サード 右投げ右打ち

やんちゃな印象が強いが、春の甲子園優勝後から完全に4番としての貫禄が出てきた。即プロで通用するであろう打撃に、機敏な守備を持ち味とする。決して足が速いわけではない。

西 晴之 3年生

シヨート 右投げ左打ち

走攻守すべてがトツプレベルであり、即プロで通用するであろう選手。自由に打たせておけば勝手に結果を出す、コーチとしてはやりがいはないが、非常に頼もしく感じる。

栃谷薫 3年生

レフト 右投げ右打ち

得点圏では右の西と言っても良いほど、ずば抜けた集中力から結果を出すクラッチヒッター。ランナーなしでの打率もよく、頼れる強打者である。

柳 圭司 3年生

センター 右投げ左打ち

打撃技術に関しては即プロに通用するであろう。パワーについては、金属バットであるから技術でホームランを打っているが、木製だとどうであろうか。プロのスカウトは将来の安打製造機として期待しているようだ。

玉森 孝太 3年生

ライト 右投げ右打ち

掴み所のないバッティング、何をしてくるか分からない怖さを持つ。得意コースもなければ苦手コースもないため、ピッチャー視点だとかなり攻めづらい。能力としてもすべてが高水準。

井手 勇太 3年生

ピッチャー 左投げ左打ち スリークォーター

最速142キロの直球

ツーシーム、スライダー、シユート、スクリユー、チエンジアップ
抜群のコントロールで相手を翻弄する。緩急も使えるため、打者と

しては的が絞りにくく、大量失点はまずない。

伊佐敷 純 2年生

ピッチャー 右投げ右打ち

最速140キロの直球

スライダー、フォーク、チェンジアップ

コントロールはまずまずだが、ボールのキレがよく、三振を奪える。長いイニングにはまだ不安が残るが、チェンジアップが西邦打線に通用したため、期待していいだろう。

真木 洋介 1年生

ピッチャー 右投げ右打ち

最速139キロの重い直球

スライダー、カーブ、フォーク

武藤から伝授されたSFFを練習しているが、まだ試合では使えない精度である。高いところから放たれるボールには角度がついているため、なかなか捉えづらいため、球質が重いいため、外野には並みの打者では飛ばすことが難しいだろう。

西邦クリーンナップレベルだと打たれてはいたが、それも二巡目であることを考慮すれば、1年生でこれは立派なもの。

藤谷 進一 3年生

キャッチャー 右投げ右打ち

堅実なリードを好む。コーチングが上手く、ブロッキングにおいては2年生の宮内が憧れの目を向けるほど、自分の身体をはった覚悟を感じるものがある。打つときは打つが、打てないときはとことん打てない、ムラがある。

会田 衛 3年生

ファースト 右投げ右打ち

パワーに関しては東に次ぐ。ミートする力に少し課題があるが、技

術が伴えば、たぐいまれなホームランバッターに成長するであろう。

結城 哲也 2年生

ファースト 右投げ右打ち

本塁打を打つ力はあるが、一発を狙うより率を重視したバッティングをする。片岡監督曰く、約1年前の栃谷よりも実力は上とのことで、来年期待したい選手である。

小湊 亮介 2年生

セカンド 右投げ左打ち

ミートする力に関しては、結城と互角くらいであろうか。パワー不足、選球眼の差で遅れをとっているが、身体の成長及び、試合経験でより育ってくれることを期待する。

西 影次 1年生

外野手 右投げ右打ち

パワーに関しては1、2年生合わせても、増子に次ぐものがある。技術もあるが、兄と違って集中力にムラがある。そこを直し、安定感が出てくれば4番として信頼できるが、調子の乱高下がある今は難しいであろう。

やりたいことはとことんやるが、興味がないことはやりたがらない性格にも難がある。

城之内 貴之 3年生

外野手 左投げ左打ち

チャンスに強い点取り屋。かといってランナーがいないと打てないわけでもなく、純粹にチャンスで打席に立つ場面が多いだけである。打撃に関して高水準である。

石橋 孝雄 3年生

外野手 右投げ左打ち

足の速さは神田に次ぐ。盗塁はうまいが、ベースランニングは少し苦手か。打撃に関して穴はなく、期待感は充分である。

御幸 一也 1年生

キャッチャー 右投げ左打ち

リードはまだ不安定なところがあり、身体もまだまだ出来上がっていない。今回は経験を積んでももらえればよし。肩の強さは申し分なく、更に成長してくれるだろうと期待している。将来の正捕手となってくれるかどうか。

夏の西東京都大会 4回戦 part 1

「夏の西東京都大会 4回戦、春の甲子園覇者の青道と市大三高の試合が始まるうとしています。両校とも強打のイメージがあります。青道には西、東、柳が、市大三高には北川といった打者のドラフトの目玉がいます」

へかなりレベルの高い打者が揃っていますからね。今名前が挙がった選手の他にもいい選手がたくさんいます。投手にも注目していきたいですね」

スターティングオーダー

先攻 青道

- 1 神田 セカンド (左)
- 2 西 ショート (左)
- 3 栃谷 レフト (右)
- 4 東 サード (右)
- 5 柳 センター (左)
- 6 玉森 ライト (右)
- 7 道川 ファースト (右)
- 8 岸谷 キャッチャー (右)
- 9 武藤 ピッチャー (右、右オーバーロー)

後攻 市大三高

- 1 神宮寺 セカンド (右)
- 2 石川 センター (左)
- 3 大前 サード (右)
- 4 北川 ショート (右)
- 5 根岸 キャッチャー (右)
- 6 星田 ファースト (左)
- 7 堀田 レフト (右)

- 8 上田 ライト (右)
- 9 真中 ピッチャー (右、右オーバースロー)

「そうですね！各チームのスターティングオーダーは、以上のものとなっております。各チームの先発は、青道は3年生の武藤、市大三高は2年生の真中と、両校ともエースを起用してきました」

〈青道のエース 武藤は、最速150キロ越えの本格派右腕。対して市大三高のエース 真中は、キレのあるスライダーを武器とする投手ですね。両投手の立ち上がり值得期待のところです〉

「ここまでの両校の成績を振り返っていきましょう。画面上に出るでしょうか」

青道

2回戦	22-0	5回コールド
3回戦	28-0	5回コールド
市大三高		
1回戦	14-2	5回コールド
2回戦	17-3	5回コールド
3回戦	18-13	vs 成孔

「お互いに二桁得点を続けてきています。その一方で青道は無失点、市大三高は失点が目立ちますね」

〈そうですねえ、今年は青道の投手陣はエースの武藤を中心として、井手、伊佐敷という甲子園を経験した投手に加えて、関東大会で活躍した1年生の真木が加わり磐石な投手陣となっています。それに対して市大三高は2年生の真中がエースで、次点投手が2年生の村上、1年生の天久、三崎と比較的経験の浅い投手が多くなっています。打撃は北川がいますが、投手には柱となる絶対的な存在がないのが懸念ですね。実際、昨秋の都大会と春季大会では、失点の多さで早めに敗退してますからね〉

「なるほど、投手陣の出来次第では、市大三高に厳しい試合になりそ

うですね。さあ、夏の西東京都大会 4回戦が始まります。青道の先頭打者は、キャプテンの神田です。俊足巧打の魅力溢れる選手ですが、どういったバッティングを見せてくれるのか！」



市大三高の歴代最強の4番打者、北川 小虎は憤っていた。

(上の世代と下の世代に好投手がいるのに、同期投手が全員結局花開かぬえとはな……大学に行けばなんとかなりそうなやつはいるが……真中や天久、三崎に頼らなければならぬ現状が歯がゆい)

シヨートの守備位置につき、青道の先頭打者 神田が打席に入るのを見つめる。

「バッター足が速いぞ！練習通り下半身を意識して、捕ったらすぐ送球！慌てずに確実にいけ！」

「はいっ！」

「じゃあー！バッターこいいい！」

(青道の野手陣はさすが、鍛えられてるがそれはこっちも同じこと。堅実なものにしゃべり方が異様な監督にすっかり指導してもらってるからな。最後の夏、こちらがもろうぞ！西！)

カキーン！

真中の3球目の決め球、スライダーをいきなりライトスタンドへ運ばれる。明らかに真中の顔色が悪くなる。

「真中あ！落ち着け！10点くらいならひっくり返ししてやる！」

その言葉に真中は顔をひきつらせながら

「はいっ！すいません」

(あれはいかんな、飲まれてやがる)

次のバッターは西、青道打線で1番警戒しなければならぬ。監督の方を見るが、田原監督は首を振り、真中統投の意思を示す。

(この打線との戦いを糧にするってか？平凡な投手に任せるよりは、

天久に期待した方がいいだろうに)

その後、西から玉森まで5連打され、更に4失点すると

「ピッチャーの交代があります。ピッチャー 真中くん に代わりまして、天久くん、背番号11」

「天久、すまない、頼んだ」

そんな真中の言葉に反応せず天久は

「俺がここから無失点で抑えたら、かなり目立っちゃいますよね？ファンがめっちゃついて彼女も簡単にできますよね」

北川は、内心ブチギレながら

「そうだな、抑えたらお前はヒーロー、彼女の1人や2人簡単にできるだろうよ。だが、ボコボコに打たれてみる、負け犬扱いだ。全国トツプの打線を1年生の天才が抑える。それがお前だと示してやれや」

「うつつ！北川さんもなんだかんだ俺のこと認めちゃってるんじゃないすか！ちよちよいと抑えちゃいますよ！」

(くそつたれが！三崎の方に才能があってくれたらよかったのによ！)

「ああ、点は俺たちが取るから、お前はバッターを蹴散らしてくれたらいい。いくぞ」

「っ！はいっ！」

最後のドスのきいた声に内野陣は、気圧されたように返事する。

初回で5点差、いまだノーアウトでランナー2塁のピンチの場面。北川に認められていたと思った天久は躍動する。

道川をショートゴロに抑えると、岸谷、武藤と続けて三球三振に仕留めた。

生意気な天久が本能的に、唯一認めていた先輩、北川の認めていた発言に本来以上の力を発揮し、青道打線に立ちはだかった。

夏の西東京都大会 4回戦 part 2

市大三高ベンチで、天久が3人でピンチを切り抜けたのを見て、半ば放心状態だった真中は、どこか霧やモヤがかかったような頭で思考する。

(あれ?なんで俺はベンチで座っているんだろう)

さすがのように北川さんを見るが

「落ち着いて座って、現実を見る。お前が何をやったのか、どう受け止めるのか」

そう言うと、大前の隣に行って話し始める。ボーツとしてしていると、1回裏の攻撃が三者凡退に終わったので、立ち上がって前に踏み出すが

「真中ボーイ、どこへいくんだい?」

「マウンドに行かないと」

「真中ボーイ...君の出番は終わったんだよ...」

少し嬉しそうな目をしながら、田原監督は俺の左肩に手を置いて、語りかけてくる。

「私は真中ボーイをうちのエースだと思っている。だが、先頭打者本塁打を打たれた後のピッチング。あれはエースとは呼べない。本当なら今、天久ボーイではなく、真中ボーイがあのマウンドに立っていないといけなかった」

カキイン!

グラウンドを見ると、天久は苦笑いしながら、北川さんに背中を叩かれている。青道の2番、西がダイヤモンドを1人、悠々と回るのが見えた。

「打たれても、落ち着いて周りを見渡し、そこから最善を掴むのがエースだ。打たれて心が折れたと思ったが、体はマウンドに勝手に向かっていた。グッドだ。君はまだまだ強くなれる。今回はいきなりの本塁打に我を失ってしまったが、こういうことはある。それが今日出た

だけだ」

「フオアボール！」

田原監督はグラウンドをチラツと見て、冷や汗をかく。

「この経験を糧にして、更に強くなろう」

「はいっ！」

「さあ、まずは応援だ」

ベンチにいた先輩達に、不甲斐ないピッチングをしたのを謝るが

「俺らの代に頼れるピッチャーがいないのが悪いんだ。あいつらが本当なら背負うべきもんを背負わせてすまねえな」

「これも経験さ、今から打ちまくってやつから気にすんなよ」

そう声をかけられ、不意に悔しさが込み上げてきて、涙が止まらなかった。



（真中さんかつちよわりー！って思ったけど、この打線やべー！北川さんみたいなバッターが並んでるのおかしいだろ）

天久は天久で試練を迎えていた。2回表、先頭打者の神田は抑えたものの、2番 西にソロホームランを打たれ、3番 栃谷に四球を与えていた。

そして、迎えるは青道の4番 東 清国。

（2番の西さんもやばかったけど、この人もオーラみたいなのがおかしい。どのボール投げようと思っても全部ホームランにされるイメージしか湧いてこねえ）

「おい！天久！ぐだぐだ考えずにぶつかっていけや！」

北川さんに言われ、もうどうにでもなれや！と腕をしっかり振りきることだけ考えて、投げ込んでいく。

初球のアウトコースのストレートを見逃し、続くアウトコースに逃げるスライダーを微動だにせず見逃され、1―1の平行カウントになる。

（あのスライダー、振りにこなかったのは見えていたのか、それとも）

アウトコースギリギリいっぱいに決まったスライダーを、東は空振りする。

(見えていなかった！じゃあクルクル三振しちゃいなくて)

インコースのボール球を挟んで、アウトコースにスライダーを投げる。

ギイン！

球足の速いゴロを、北川さんが好捕すると2塁へ送球し

「アウト！」

送球を受けた神宮寺さんがすぐに1塁へ投げる

「アウト！スリーアウト！チェンジ！」

なんとか1失点で切り抜けた。ダブルプレーをくらった東がこちらを睨んでくる。

「おー、こわー！ゴリラ先輩に睨まれっ！いてえ！」

「ごちやごちや言わずにベンチに走れ！」

「うすっ！」

北川さんに頭を軽く叩かれ、ベンチへ向かうと、タオルに顔を押し付けて泣いている真中さんがいた。

「真中さん！仇とつてきましたよー！俺がガンガン抑えるんで！次はエースらしいところを見せてくださいよ！」

真中さんは真っ赤な目をこちらに向けてくるが、涙を抑えられず、またタオルに顔を隠す。

(打たれて泣くってよくわかんねーな。いつもはある程度抑えてるし、たまたま相性悪かっただけなのに、何をこんなに熱くなってるやら)

カキイン！

「おおおおお！さすが4番や！」

「しやああああ！反撃だあああ！」

バツ！とグラウンドを見ると、北川さんがこちらを指差しながらダイヤモンドを一周していた。

「ヒュー！かっくいいー！4番って存在はやっぱすげえな」
「そうだな」

消え入りそうな声で、真中さんは返事をしてくる。北川さんはベンチに戻ってくる

「後輩をやられて、後輩にピンチを救われて、ここで終わる俺たちじゃねえだろ！声を出せ！相手を潰せ！踏み潰せ！相手が王者なんざ知るか！1人の男として死力を尽くせ！」

「おおお！」

ギーン！

「抜けるや！おらあああ！」

5番の根岸さんが打ったゴロは、ショート 西のグローブの先を抜けて、レフト前ヒットとなる。

「6番 ファースト 星田くん」

「おっしやああ！同級生の天久が頑張ってるんだ！いけえええ！」
スタンドからの声援が大きくなる。

(これが・・・北川さんが作り出した雰囲気・・・)

普段からサボり癖があり、気分の乗った時だけ真面目に練習をしていた天久にとって、1人の選手が作り出した、市大三高の追い風となるようなこの高揚感溢れる雰囲気は、何か感じるものがあった。

夏の西東京都大会 4回戦 part 3

「舐めんじゃねえよ」

ドオン！

「ストライク！バッターアウト！」

武藤はストレート3つで、星田を見逃し三振に仕留める。追い上げムードだった市大三高の応援の勢いが少し弱まる。

パアン！

「っ!？」

SFFを全く捉えられずに、岸谷のミットを二度見する7番堀田を空振り三振に。続けてストレートとスローカーブの緩急差に、体勢を崩した上田を、最後はストレートで空振り三振と、後続を完全に沈黙させた。

(省エネで抑えるつもりだったが、北川はやはり別格か。流れを渡さないように少しだけギアを上げたが、他には大前、根岸に気を付ければいいくらいだな)

そう判断してベンチに戻る。

「武藤！ナイピッチー！」

「さすがエースや！」

スタンドからの歓声に応える。

「武藤、市大打線はどうだ？」

片岡監督に聞かれると

「クリーンナップに注意しておけば、そこまではないです。北川が飛び抜けてますが、そこでギアを上げて打ち取れば問題無さそうです」

「そうか、前の試合投げた真木は無理だが、井手、伊佐敷が控えているから、球数で交代を相談しよう」

「わかりました、油断する気はありませんが、ここで消耗しきるわけにはいかないですからね」

渡されたスポーツドリンクを飲んで、ベンチに座る。

「5番 センター 柳くん」

「うおおおおお！やなぎいいい！」

「うてうてえええ！」

（青道は相変わらず、打者に対しての応援は激しいな。全員にヒッティングマーチがあるのも吹奏楽部様々か）

心のなかで支えてくれている人達に感謝をする。

カキーン！

柳が天久の決め球、スライダーを狙い打ってライトスタンドへ叩き込んだ。

「おおおお！青道！青道！青道！青道！青道！」

「やなぎいいい！ないばつちいいい！」

「6番 ライト 玉森」

「いけいけー！玉森ー！つづけー！」

（本当、この打線が味方でよかったよ）

キーン！

アウトコースのストレートを逆らわずに右中間へ運び、スリーベースヒットとなる。市大三高側はタイムをとり、内野がマウンドに集まる。打席の外では気合いを入れた道川が天久の表情をじつと観察している。

市大三高のタイムが終わり、各自守備位置に戻る。その初球

ガキーン！

高々と放物線を描いた打球は途中で失速し、センターは深い位置で

捕球する。

「ゴ―！」

玉森は犠牲フライでホームへ到達し8―1の7点差となる。だが、まだ天久の目は死んでいない。岸谷、武藤を内野ゴロに仕留め、失点を最小限抑える。

（最初から天久が先発だったらわからなかったな）

そう思いながら武藤は3回裏のマウンドに上がる。

▽

そこからは武藤、天久の投げ合いが続ぎ、6回終了時点で8―1と、スコアが動かない膠着状態になっていた。

「空振りさんしーん！天久！なんとか青道打線を7回表も無失点で抑えました！」

〈青道打線も天久くんを追い詰めはするのですが、あともう一押しが足りませんねえ。このまま市大三高は点を取ればコールドになつてしまいますが、どうでしょうか〉

「7回裏の市大三高の攻撃は3番の大前からですが、ギアの上がつてきた武藤に対して、市大三高は3回裏からランナーすら出せていません。厳しいでしょうか」

〈明らかに2回表、根岸に打たれてからピッチングがかわつてますね。特にクリーンナップに対して厳しい配球をしていますよ〉

「ストライク！おお！見てください！151キロです！ここで最速を更新してきました！闘魂エース武藤！」

〈いやあ、ここであのボールを、インコース低めギリギリに投げられたら対応できませんよ〉

「大前、打席を外して間を取りますが、続くスローカーブに膝をつく！」

〈あの緩急が本当に厳しいですよ。球種も豊富でいくつかの配球パターンがあるのも強いですね〉

「空振り三振！最後は天久も投げるスライダーで大前から空振りを

取りました！これで1アウト。市大三高はここから次の回に繋げることができているのか？4番 北川が打席に入ります」

〈3回目のエースと4番の対決ですね。ここまでは2打数1本塁打ですね。どちらが勝つでしょうか？〉

「ええ、注目していきたいですね！初球、スローカーブがインコースに決まり1ストライク！北川は冷静に見逃しています。2球目はインコースのストレートをファール！武藤のボールに北川ついていきます！」

〈手に汗握るとはこの事でしょうか。この勝負を勝ったチームが勝者になる。そんな気がしますねえ〉

「3球目があああつとー！これは！武藤は必死にボールを掴むがっつ！投げられない！ショートの内野が駆け寄る！内野の周りの選手もタイムをとってマウンドの武藤の元へ駆け寄ります！」

「これは……大丈夫でしょうか？……武藤は周りの選手に肩を借りて青道ベンチに入ります。武藤の治療のため、しばらく試合は中断となります。」

〈これは心配ですね。足でしょうか？直撃してましたね〉

夏の西東京都大会 4回戦 part 4

伊佐敷は肩を温めながら、武藤さんの治療が終わるのを待っていた。

「純！監督が呼んでるぞ！」

「おう！哲！ありがとよ！」

駆け足でベンチに戻ると、足を頭よりも高い位置で冷やしている武藤さんと、その横に立っている片岡監督がいた。

「倒れはしたが、打撲だ。折れてはいない。精密検査をする必要はあるが、そこまでではないだろう」

「そうですか！よかった！」

思ったよりも武藤さんが元気そうで安心し、ふうーつと息を吐く。

「伊佐敷、あと2人のところすまないが、抑えてくれ。俺のお師匠みたいにせめてアウトを！って思ったけどボールが上手く握れなかったわ」

武藤さんは悔しいだろうに、笑顔で話しかけてくる。

「大事をとって、今日はこのまま下がるけど、まだこのチームには井手、伊佐敷、真木がいる。」

こつちの目をしっかりと見ながら

「次期エース、頼んだぜ！青道の未来を見せてくれよ」

「うっす！頑張ります！」

「岸谷！こいつのこと頼むぜ！」

武藤さんはそう言うがそこに待ったがかかる。

「俺じゃねえぞ、伊佐敷とよく組んでる藤谷だぜ」

「伊佐敷、2人で終わるぞ」

「うっす！」

武藤さんと岸谷さんの正バッテリーに見送られ、マウンドへ上がり、投球前練習をする。

（次のエースは丹波？真木？いやちげえよ。第2先発は譲ったが、次のエースは俺なんだよ！）

パアン！

「ストライクー！」

鬼気迫る表情とは裏腹に、初球チェンジアップを投げ、相手の5番根岸さんの体勢を完全に崩す。2球目にインコースのストレートを投げると、詰まらせて、ボールは3塁方向へ転がっていく。

「おっしやあいー！」

サードの東さんが右手で直接掴んで、2塁へ投げる。

「アウト！」

神田さんはそのまま1塁に投げる。

「セー！セーフー！セーフー！」

ギリギリセーフとなる。

「あああ！もうちよつとだったのに！」

「東ああ！ファインプレーヤーー！」

スタンドからの応援に力をもらう。ベンチを見ると、笑顔で武藤さんがガッツポーズをしている。

（俺達は西さんの怪我を乗り越えて、強くなってきたチームなんだ。この程度の苦難！屁でもねえよ！）

1年生ながら6番を務める星田を簡単に追い込むと

ギイン！

「オーライ！オーライ！」

ファーストの道川さんのグローブにおさまった。

「アウト！ゲーム！」

整列をして

「8―1で青道の勝利！お互い！礼！」

「ありがとうございました！」

西さんと北川さんが握手しながら話をしているが、2人のオーラが

すぐくて近くに行けそうにない。大人しく撤収を始めているベンチに戻ると

「伊佐敷！よくやってくれた！本当頼りになるピッチャーになったなあ」

と武藤さんが目に涙を浮かべていた。

「あざっす！」

自分ももらい泣きしそうになるのをグツと我慢して

「エースとしての振る舞い、ピンチではどうするか、チームのために見えることは。常に武藤さんに考えさせられ、背中を見て教えられました。ただのノーコンが治って、使えるようになったかくらいの俺を成長させてくれたのは武藤さんです。ありがとうございます」

そう言って頭を下げようとすると、止められて頭を軽く叩かれる。

「まだ早い！一年後にエースとして甲子園優勝してから、そういうこととは言えや」

そう言ってベンチから、岸谷さんに介助されながら外に出ていった。



「武藤、足は？」

「軽い打撲だろうな。今改めて立っても問題ないな」

西と武藤はチラツと視線を合わせ、それに神田、柳、東も反応する。

「稲実戦まで怪我をしたことにしよう」

満場一致で仮病が決まる。

「具体的には帰ってからだが、とりあえず精密検査を受けてみないことにはな。病院行ってくるわ」

「はいよ！まあ、怪我してても甲子園には連れてくから！そのつもりで」

「おうー！」

そう言って武藤は、高島副部長に連れられ病院へ向かう。

……

「とりあえず軽い打撲だったわ。咄嗟に右足を引いたのと、当たったのがスパイクだったから、そこまでだった。ひびも骨折もなし！」

改めて武藤から病状を聞いて、全員が安堵する。

「端から見たら右足がぶっ飛ぶ感じだったもんな。観客から見たらえぐかったろうな。遠藤さんの時は、地味そうに見えたけど、そういうときの方がダメージが大きいのかな？」

「なんか、当たってからボールに動きがないほうがダメージでかいて聞くけど、今回は右足に当たってから、ボールが元気にバウンドしてたもんな……あれしっかり握れてたらアウトにできたんじゃない……」

「痛いもんは痛かったんだよ！ちくしょう！ボール握れねえし、足は滑らすしついてねえ。打球の打撲よりも転倒で怪我しそうだったわ！」

3年生でわいわい話していると、片岡監督と落合コーチがやってくる。

「武藤、病状はどうだ？」

「はい、特に異常はありませんでした。ひびも骨折もなく、打撲としてはボールが当たったから痛かったね。そういう程度だったみたいですよ」

片岡監督と落合コーチは心底安心したように息をついた。

「それで……この打撲での退場を利用してなんです……」

3年生の悪だくみに片岡監督と落合コーチはニヤリとした。

おっさんの休日

週刊誌○○

王者青道の連覇に翳りか？

先日、夏の甲子園への出場権をかけた、西東京都大会 4回戦、青道高校と市大三高の試合が行われた。

先攻の青道高校は初回、市大三高エース 真中 要（2年生）から先頭打者本塁打を皮切りに一挙5得点をあげ、いきなり相手エースをノックアウトした。

写真（真中がベンチで泣き崩れる様子）

しかし、市大三高も西東京屈指の強豪である。2番手として出てきた天久 光聖（1年生）は、ドラフト候補の西 晴之、柳 圭司から本塁打を打たれたものの、7回3失点の好投で味方を鼓舞した。ランナーを出すが必要を締めるピッチングで、青道の最強打線を抑え続け、味方の援護を待った。

しかし、市大三高の打撃陣は、2回裏の4番 北川 小虎のソロ本塁打のみで、エース 真中 要の初回KO時の失点を、市大三高の打線では補いきれずに、7失点差の7回コールド（青道高校―市大三高 8―1）で4回戦で姿を消すこととなった。

強打を持ち味とする強豪高校同士の戦い、この明暗を分けたのは投手力と言えよう。青道高校にはドラフト候補となる武藤 晃太（3年生）という高校BIG3の1人がエースとして存在するのに対して、市大三高にはエース 真中 要（2年生）以外は無名であり、天久 光聖（1年生）が青道打線を抑えたこと自体に驚かされたものであった。

写真（青道の4番 東を抑え、北川とハイタッチする天久）

春の甲子園覇者 青道高校には、全国一と称される打線があるが、チームへの貢献度を考えると、1番貢献しているのはエース 武藤晃太である。

投手の大事さは、今回の青道高校と市大三高の戦いで証明されている。現在も地方で勝ち上がっている高校には、絶対的なエースが存在する。

大阪桐生の兵藤 浩平、稲城実業の南野 竜、青道高校の武藤 晃太。特にこの高校BIG3を擁した3校はかなり安定したチーム状態で、トーナメントを駆け上がっているのである。

しかし、ここで1つ問題が生じた。青道高校のエース 武藤 晃太にピッチャー返しが直撃し、負傷退場するという事態が起こってしまったのである。

青道高校が甲子園に行くためには、決勝でエース 南野 竜を擁する稲城実業から勝利をせねばならない。エースの存在の大きさは、戦況をかなり左右するものである。しかも、稲城実業には城南シニアのエースであった成宮 鳴（1年生）がベンチ入りし、実際に無失点でここまで好投をしている。

大事なところを投げてきたエース不在の青道高校と、万全のエースと次世代のエースが台頭してきている稲城実業。どちらが甲子園に行くかは明白であろう。

青道高校は打線は最強であるが、打線は水物という言葉がある。稲城実業エース 南野 竜の前に沈黙する可能性もある。

春の甲子園覇者に試練がやってきた。頼りきってきたエース不在を跳ね返せるのだろうか？今のところは準々決勝は真木 洋介（1年生）、準決勝は伊佐敷 純（2年生）が完投勝利をあげているが、次は強豪 稲城実業。若き名将 片岡監督の真の実力が問われる時がきたのだ。

この勝敗いかんによっては、多くのドラフト候補を擁した戦力で勝てない無能監督として、監督の実力に疑問視する専門家も少なくないかもしれない。

(ペンネーム：Uーブルーロード)

……

「ぶはあー！」

ビールを流し込み、適当に買った週刊誌を読む。

「なんじゃー！このクソ記事はよー！」

年をとって、怒りにくくなつた、穏やかになつてきたと思つていたが、完全に青道を舐め腐つた記事に苛立ちを隠せず、床に叩き捨てる。「OBとして実際の練習を見に行つたが、武藤の負傷にもめげずに、井手を中心として投手陣はよくまとまっていた。武藤の姿が見えなかつたのは仕方がないが、さすが甲子園を制覇した世代。雰囲気はピリツとしていて、俺が現役の頃よりも強いチームだと本能で察せられた」

グビツともう一口ビールを飲む。

「それを打線は水物、エース不在だからで片付けてんじゃねえよ！あいつらの努力、勝ちへの執念はこんなへなちよこライターよりも俺達OBの方が見てきてんだ！」

「こうしちゃいらねえ！ビール飲んじまつたからあれだな。母さん！青道の練習場いくぞ！車出してくれ！」

「さっきからうるさいわね！休日くらい大人しくできないのかい！それに明日は決勝の応援に行くんでしようが！そのときに声かけときなさいよ！それともなに？昼間つからビール飲んで、家事も手伝わないで、挙げ句あたしや運転手かい！」

「すいません」

男はビールを飲み、青道グラウンドに行くのをあきらめ、明日行われる青道と稲実の試合を楽しむにするのであった。

後で皿洗いの手伝いをした。断じて怖かつたわけではない。

夏の西東京都大会 決勝 Part 1

記者の峰は、青道の記事を書くために、西東京都大会の決勝が行われる神宮球場へ来ていた。

「さすが名門同士の対決、応援席はほぼ全てが埋まり、ピリツとした独特な雰囲気がある」

そう呟いて席に座る。

「現3年生の有望選手がほとんど入学した青道、現1、2年生の有望選手が多く入学した稲城実業、どちらが勝つか。2年前、田辺くんの元に選手が集まった市大三高が覇権をとり、次に西くん、東くんの元に選手が集まった青道が覇権をとっている。そして、今年は成宮くんの元に有望選手が集まった最初の年であり、西、東世代の最終年でもある」

ふうーつと息を吐く。

「1年生の西、東世代は3年生の田辺世代に負けた。1年生の成宮世代は3年生の西、東世代に勝てるのか、かなり見物ではある」

1口お茶を飲む。

「青道はほぼ3年生の成熟したチーム。それに対して、稲城実業は1、2年生多めの比較的若いチーム。個人的には青道有利と言いたいが、知らないが故の勢いというものもある。強豪と当たっていないかったとはいえ、稲城実業が強いことには変わりはない。特にエース南野がいる限りは大崩れはないだろうしな」

「右のサイドスローで最速146キロの直球。3段スライダー、2段カーブ、シンカー、高速シンカーを操る正真正銘の全国区エース。南野がどれだけ青道打線を抑えることができるか。それにかかっているだろうな」

周りを見渡して、そろそろ試合が始まりそうな雰囲気を感じとる。

「先攻は稲城実業で、予想通りエース南野先発。青道は左腕の井手が先発か。武藤がいれば青道が圧倒して終わり、そういう意見が多かったが、井手だと五分五分だろうか。まあ井手も大学からプロに行くだろうと言われるくらい安定感のあるピッチャーだ。簡単に崩される

ことはないだろうな」

青道と稲城実業の選手が整列し、挨拶をしたところで、真剣に試合を見る体勢に入った。



俺達の世代のエースは誰だ？そう聞かれば兵藤と答える人が多
いだろう。実際に対戦してみて打ちづらいと思ったのは誰だ？そう
聞かれば。

「ストライク！バッターアウト！」

神田が三球三振、それも見逃しによるものであることに南野も成長
していると実感する。ネクストサークルから出て

「お願いします！」

左打席に入る。高校野球で西が南野と対戦したのは、実のところ1
年生の夏、西東京都大会 5 回戦での1打席のみ。しかもそれは敬遠
という、西にとつても、南野にとつても納得のいかないものであった。
あの3年生の夏を終わらせた相手との再戦に、そしてリトル、シニ
アで共にエースと4番、途中でバッテリーでもあった相棒との戦い
に、西は自然とやる気が沸き上がり、経験の浅い稲城実業守備陣を威
圧する。

それにキャッチャーの原田は冷や汗を流し、内野陣は固まり、外野
にいるカルロスも居心地の悪さを感じる。

「1アウト。簡単にはいかないぞー。適度からだ動かしておけ
よー」

気の抜けたような声を南野が野手陣に向け、ふにやっとした笑顔を
見せる。

「飛んでいくからー、よろしくなー」

(相手の気を削ぐようなマイペースさは相変わらずか。だが眼が違
う。間違いなく稲城実業を背負った、チームを背負ったエースの眼。
お前も見ないうちに色々あったんだろうな)

バットを握り直して構える。

(それはこちらとて同じこと。簡単にはいかせないさ)

城南シニアの元エースと元4番の真剣勝負が始まった。

初球、バックドアとなるスライダーを見逃す。

「ボール！」

右肩を軽く回して、再びバットを構える。南野は深く深呼吸して原田のサインを覗き込み頷く。

キーン！

強烈なライナーがライト方向へ飛んでいく。

「っ！ファール！ファール！」

これで1ストライク1ボール。1度間をとって、軽く理想の軌道をなぞり南野を見ると、南野が顔をひきつらせる。

(あれなら確実に捉えることができる)

打席内に戻り、右肩を回してバットを構える。4度南野は首をふり、ようやくサインが決まる。

カキーン！

アウトコースの高速シンカーをレフト方向に流し打つ。バットを置いて1塁へと走っていると

「ファール！」

「おおおおお」

観客席からのどよめきが聞こえてくる。

(少し振り遅れたか)

南野は汗をふき、再び深呼吸をする。そこから2球ボール球が続き、2ストライク3ボールとなる。

(ん？あれは)

キーン！

インコース低めのスライダーを、右中間方向へ弾き返す。

「おおおおー！」

後ろ目で守っていたはずが、少し前に出てきていたセカンドの平井。ジャンプして捕球しようとするが、グローブが届かない。

「クソッ！」

ライト線に寄っていた加藤の前を、球足の速いボールがバウンドしていく。センターの烏丸が捕球し、中継に投げようとした頃には、西は2塁を回っていた。

烏丸は焦らず平井に送球し、内野にボールを返す。

スリーベースヒット。初回からいきなり、稲城実業にピンチの場面が訪れた。

打席には全国的にも有名な勝負師 栃谷が入り、稲城実業の1、2年生たちは浮き足立つ。

(ここに終わらせろ)

そう心のなかで西は呟いた。

夏の西東京都大会 決勝 part 2

(やっぱ晴ちゃんは別格だね)

そう思いながら、南野はマウンドをならして一息つく。冷静に周りを見回すと、1、2年生の動きはぎこちない。

(初回から飛ばす、これしかないな。2年の井口、1年の成宮もいるし、できるだけ点を取られない。これが大事だよな)

常に1点、2点を争う戦いをしてきた南野は落ち着いていた。

パン！

「ストライク！」

初めて見せるスローカーブでカウントを稼ぐ。続いてフロントドアとなる曲がりの弱いスライダーで2ストライク。

「次飛んでいくかもだから足動かしてねー！」

そう言つてセットポジションに。

ギーン！

外へ逃げる1番曲がるスライダーを、栃谷は打ち上げ、ファーストファールフライとなる。

「ツーアウトー！あと1人でピンチぬけるからねー」

(薫も初めて見る1番曲がるスライダーについてきた。晴ちゃんなら普通に見逃してたんだらうけど、やっぱり差があるよね。次は清国ちゃんだから、芯をずらすだけじゃだめだから、どう抑えるかな)

右打席に目を向けると、強打者特有のオーラを放った東がこちらを睨み付けてくる。初球、インコースのストレートを東は空振りする。(偵察の映像も見ただけど、本当にプロへいくようなバッターに成長してたんだな、清国ちゃん。振りが鋭いわ)

パン！

アウトコース低めギリギリに入るカーブで2ストライクとなる。ロージンを手にとり、精神を落ち着かせる。

ガキイ！

インコースの低めに外れるストレートを引っかけて、3塁方向へのゴロになる。

「ファール！」

強い打球がくると思って、ワントempo遅れたサードの吉沢が捕球するのが遅れ、3塁線をきれる。

「ツアアウトだよー！まだ初回だし落ち着いて！ボール1つでいいからねー」

「はいっ！」

しっかりとした返事に満足する。

(だいぶ青道打線の出す空気にみんな慣れてきて、落ち着いてきたかな?)

カキイン！

「ファール！」

しっかりと捉えられるが、ライトポールの右側に打球がきれる。南野と東、お互いに一筋縄ではいかない相手に、自然と笑顔になる。

(全力だっぞっ！)

ドオン！

全力ではあるが、低めにコントロールされたストレートに、東は空振りをする。

「スリーアウト！チェンジ！」

ピンチを切り抜けてキャッチャーの原田とハイタッチをすると、視

界には楽しそうにする西と東の姿が映った。

(本当、まあ勝負を楽しんじゃって……それでこそ俺の4番だよ……晴ちゃん)

南野はベンチに戻りながら、次はどう抑えるのかを考えるのであった。



(チャンスに強い薫、清国を翻弄するなんてな。竜……やつぱりお前はいいピッチャーだよ……)

西は東と話ながら、原田とおそらく次の展開を話している南野を見る。

「チャンスは活かせなかったがまだ初回！まだまだ回はあるからじつくりいこう！」

「おう！」

キャプテンの神田の言葉に全員が応え、守備位置に散らばる。

「ノーアウトー！ランナー俊足！セーフティーあるよー！」

神田の言葉を受け、東は一步だけ前が出る。

先頭打者のカルロスは、2球目のスライダーを引っかけて、簡単にセカンドゴロとなる。

「1アウトー！いつも通り三者凡退！無理せずー！」

そう西が言うと、サードの東、ファーストの栃谷が少しだけ前に出て、セカンドの神田が少しだけ後ろに下がる。2番の白河はバットに当ててなんとか付いていこうとするが、3球目のチェンジアップに体を崩されて空振りをしてしまい、結果として三球三振に仕留める。

「ツーアウトー！ランナーなし！打たれても問題ないよー！捕ったらファーストねー！」

キーン！

「アウトー！」

横っ飛びした西のグローブに直接ライナー性の打球が入る。

「スリーアウト！チェンジ！」

コントロールよく抑えてくれた井手とハイタッチをする。

「圭司、俺みたいに球数投げさせとけばまたチャンスくるから！頼んだ」

「はいよ！粘ってくる！ついでにヒットも打ってくるから先制点をうちらがとるで」

柳がニヤツとしながら返事をする。

柳はゾーンにきたボールを全て丁寧にかットしていく。それに南野は気づくと、10球目のカーブをわざとボールにし、四球で逃げる。

続く玉森は1塁方向にバントを綺麗に決め、1アウト2塁のチャンスとなる。バッターは今日スタメンの城之内。

「いけー！城之内ー！ここで決めろー！」

「点取り屋ー！いけー！」

深く深呼吸をして城之内が打席に入る。

「セーフ！」

南野は1球牽制をして、内野陣に向かって何かを話す。

（青道ベンチからは聞こえないな……何をたくらんでいるのやら……）

西は、南野のあまりすることのない牽制の意思を考える。

カキーン！

しっかりと弾き返された打球はレフトへ飛んでいく。

「いけー！」

「うおおおおー！」

「アウトー！」

カルロスのダイビングキャッチに、スタンドからの大声援が球場を揺らす。そこに全員が注目している間に、抜け目なく柳は3塁へタツチアアップして到達する。

「8番 キャッチャー 藤谷くん」

「藤谷ー！ここで打てよー！」

しかし

「ストライク！バッターアウト！チェンジ！」

全力で南野が抑えにかかり、藤谷は5球目のアウトコースのストリートを見逃してしまった。

（順調に竜の体力を削っているが、相手にもいい打者がいる。早めに点数をとっておきたいが、焦りは禁物。できることをしっかり実行していかないとな）

そう思いながら西はショートの守備位置についた。

夏の西東京都大会 決勝 part 3

「ここまで稲城実業のエース 南野と青道の井手、2人ともが無失点の好投で投手戦となつていきます！夏の西東京都大会 決勝！7回表 ツーアウトまでできていますが、稲城実業は6番 原田のヒット1本のみ。それに対して青道も、2番 西のヒット2本と5番 柳の四球のみで、チャンスは作れているもの、もう一押しができません」
「井手のコントロールの良さに、稲城実業打線は完全に抑え込まれていますね。南野も多彩な変化球で翻弄して、西以外からは打たれていませんから。両チームとも継投が難しいのではないでしょうか」

「そうですね、稲城実業の4番 烏丸！7球目のインコースのストリートをファール！甘いところには一切ボールがきませんが、必死に食らいついていきます！」

「こうして見ると井手もいいピッチャーですね。しっかりと強豪に対して試合を作れるのは素晴らしい。何よりこのコントロールですよ」
カキーン！

「打ったー！バット一閃！打った瞬間に入るとわかる強烈な打球！入りました！男・烏丸！魂のソロホームラン！高々と手を挙げたあと、ベンチにいるエースを指差しガッツポーズ！稲城実業に待望の先制アーチが出ました！」

「試合が膠着して、ピッチャーが疲れ始めた頃ですよね。ああ、リプレイですが決して甘い球ではないですよ。フロントドアとなる低めギリギリいっぱいに決まるスクリーンを、レフト方向に引っ張ってスタンドまで運んでいましたね」

「青道ベンチは動きませんね、井手が続投するようです…空振り三振！…いやあ、強烈なホームランを打たれたあともしっかりと抑えました。7回表、稲城実業が先制しています」

「エースの武藤不在の中、よくやっていますね。失投ではないですから、打った烏丸を誉めるべきですね」

「そうですね、ここから青道の追い上げはあるのか！期待していきたいですね」



「ごめん、しっかりコントロールしてただけど、たぶん読まれてたわ」

井手はベンチに戻ると、開口一番に謝罪を口にする。

「援護できてない俺らが悪いんや、すぐに追い付いたるから、座って休んどれ」

東は比較的優しく井手に声をかける。

（ここで打たな負ける。相手の4番が打ったんや、打の青道たる4番の俺がここで打たんかったらあかん）

東は覚悟を決めて打席に入る

「お願いしますー！」

ここまで2打席無安打で完全に抑えられているが、南野に余裕は見られない。

ドオン！

「ストライク！」

（最初よりも球威は落ちてきてるな）

地面をならしてバットを構え、南野を睨み付ける。

ギイン！

ボール球を見極め、6球目のスライダーまで丁寧にカットして2—2の平行カウントとなる。

（さあ、何でくるー！）

キイン！

「おおおお！まわれまわれー！」

「あずまあああ！」

レフト線近くをボールが転がっていく。カルロスは回り込んで捕球すると、2塁へ送球した。

「セーフ！」

「おっしやあああー！」

東は2塁ベース上で雄叫びをあげた。青道側スタンドや、ベンチから歓声があがる。

「ここで選手の交代があります。ピッチャー 南野くん に代わりまして、成宮くん 背番号 11」

（ん？南野は点を取られていないのにもう下がるのか？）

1年生坊主が投球前練習をする。

Bannon！

（こいつ、左腕で既に140キロくらい出すのか）

チラツと打席を見ると柳がウインクしてくる。

（味方を信じて堂々としておくか）

ギロリとピッチャーの成宮を睨み付けながら、2塁から第1リードをとる。柳が2球、3球と軽くカットすると、白髪小僧がイライラし始める。

（なるほど）

ザツ！と1度大きく土を蹴り出すと牽制球がきたので、悠々と帰塁して白髪小僧をなんでもないような顔で見る。さらにイライラし始めた。

キーン！

柳の打球はセカンドの平井を越えて、右中間でバウンドする。

「東！ノースライ！」

しっかりとホームベースを踏んで玉森とハイタッチをする。二者連続ツーベースで同点となり、青道側スタンドの歓声がさらに大きくなる。

（あの小僧はつと……なるほどな……打たれて逆に心が燃え上がったか。）

ギアが上がり、マウンド上の成宮が躍動し始める。

パアン！

「ストライク！バッターアウト！」

玉森も粘るがバツクドアのスライダーに対応できず、見逃し三振となった。続く城之内はセカンドへの進塁打を放つが、藤谷は三球三振に仕留められ、7回裏は同点止まりで終わってしまう。

8回表も井手がマウンドに上がり、先頭打者の6番 原田にセンター前ヒットを打たれるが、後続をシャットアウトし切り抜ける。

東がベンチに戻ると、結城がバットを握っていた。

「結城、お前打てよ。来年あの小僧はお前たちに立ちはだかってくるで。前哨戦や、かましたれ」

「はいっ！」

「9番 井手くんに代わりまして、結城くん 背番号15」

結城は打席に入ると、深く深呼吸して成宮と対峙した。

夏の西東京都大会 決勝 part 4

「この回も成宮、お前に任せる」

「当然！」

そう言つてマウンドへ駆け出す生意気な1年生を送り出す。国友監督は南野、成宮は青道打線に通じるが、2年生の井口には荷が重いと判断していた。

（ここはなんとしても成宮に2回とも抑えてもらわなければ、うちに勝ちはない。不安定な1年生に全てを背負わせるのは申し訳ないが、打つ手がない……頼んだぞ……）

「原田」

「はい！」

「成宮がこれ以上無理だとお前が思ったならこちらに合図を。こちらからもしっかりと見るようにするが、強気な1年生、いつ崩れるかわからん」

そう伝えると原田は頷き、グラウンドへ出ていく。

（南野は西、東以外を全力で抑え、力尽きた。あのまま続投させていても柳に打たれていただろう。結果としては同じこととなったが、それで成宮が奮起したのは好材料だった）

「9番 井手くんに代わりまして、結城くん 背番号15」

（結城 哲也……関東大会までレギュラーとして活躍し、甲子園でも本塁打を放った次世代の青道の主砲……ここで勝負を仕掛けてくるか）

青道ベンチの片岡監督と目が合う。

バアン！

「ボール！」

打席上の結城は微動だにせず見送る。2球目のスライダーを見逃し、3球目のストレートを軽くカットする。

（成宮のボールを初見で軽く当てるか。新チームでも要注意な打者になりそうだ）

そして4球目のアウトコースのストレートを

キーン!

結城は綺麗に打ち返し、右中間にボールが飛んでいく。回り込んだセンター 烏丸が確実に捕球し、内野へ送球する。その間に結城は2塁を陥れる。

「おおおおお!てつー!いいぞー!ナイバッチ!

「結城いいい!」

青道側ベンチ、スタンドが更に騒がしくなる。

「1番 セカンド 神田くん」

「かんだあああ!」

(ここから要注意な打者が6人続く…成宮…頼む)

神田は南野の時とは違い、軽くカットして球数を稼いでいく。すると成宮はイライラしてきだした。原田が成宮のところへ向かい、落着かせる。

「成宮!ボール1つ!」

神田がバントしたボールを捕った成宮は、1塁へ送球しアウトをとる。

「1アウトー!さあここでとめて次の回勝ち越すぞ!」

ドゴオン!

音のした方を向くと、青道ブルペンでエースの武藤がピッチング練習をしながら、マウンドの成宮の方を見下すように見ている。

「武藤じゃん!怪我してたんじゃねえの?」

「ここからエースくるのか!」

(武藤?怪我をして離脱したのではなかったのか!?完全な状態で臨むのであれば、1点勝負になる、まずい)

次の打者 西を敬遠するように原田に伝える。サイン通り成宮は敬遠するが、その3球目

「あつ！」

誰の声かはわからないが、その声がした後、3塁にいた結城がホームに到達し、マウンドで呆然とする成宮がいた。

「井口、肩を急いで作ってくれ」

「はい！」

「成宮……すまない……」

成宮をすぐに交代させ、井口をマウンドに行かせる。

（1年生には明らかに荷が重い場面だった。完全に私の配慮ミスだった）

ベンチに連れてこられた成宮は俯いたままであった。

「よくここまで投げてくれた。後は井口に任せろ」

「……」

何の反応も見せないままの成宮を周りの3年生が座らせる。

カキーン！

西の敬遠後、打席にたった栃谷がツーランホームランを放ち、ベースをまわっていくのを、国友監督はベンチで見ていることしかできなかった。

▽

カルロスはレフトから、栃谷さんがダイヤモンドを一周する姿を見届ける。

（南野さんが力尽き、鳴が戦闘不能状態か。そして、相手はエースが準備運動中……無理ゲーだな……）

空を仰ぐ。

（でもまあ自分で選んで西さんとは別の高校に来たんだ。半端なプレーをあの人目の前でするなんて自分が許せねえよな！）

ギーン！

懸命に背走をしてジャンプをし、グローブを突き出す。産み出した速力を抑えきれずにヘッドスライディングする形となる。

「アウト！」

「うおおお！すげえええ！」

グローブの中に綺麗におさまったボールを白河に送球する。

「まだ俺らは終わってねえんだよ！」

そう叫ぶと

「カルロスの言う通りだ！まだ9回表がある！逆転するぞ！」

「おおお！」

烏丸さんが全員を叱咤激励する。離れる際に

「カルロス、ありがとよ」

そう聞こえたが、照れ臭くて帽子のつばを掴むことで返事とした。

「1アウト！次もいくぞー！」

キャッチャーの原田さんの声がこちらまで聞こえてくる。

（まだ俺たちは終わってねえ。最後まであがいてやるよ！）

そう覚悟を決め、5番打者の柳さんの殺気にも似た威圧に対抗する。

カキーン！

「わあああ！」

「柳ー！よくやったああ！」

（さすがにホームランは取れんわ）

悠々とダイヤモンドを回る柳さんを見送る。その後、井口さんはなんとか6失点で抑える。

（1―8か…決勝じゃなかったらワールドだったな…）

そう思いながら打席に入る。ピッチャーは青道のエース 武藤さん。

ドゴオン！

「ストライク！」

(くっそ！井手さんもいいピッチャーだったけど、ボールの質が全然
違い！こんなん1打席で対応しろとか無理)

「バッターアウト！」

結局三振に仕留められる。

「格が違い、がんばれよ」

そう白河に言うのと驚いた顔をする。白河も三球三振に仕留められ、
3番に代打で出た矢部も三球三振に終わった。

(最初から投げられてたら勝負は簡単に決まってたかもな……甲子園
は遠いな……)

そう思いながら審判の指示に従って整列した。



「ゲーム！」

青道は結果としては8―1で圧勝した。西は、稲城実業ベンチで泣
きじやくる成宮に一言声をかけたかったが

(プライドの高い鳴のことだ。直後に言っても逆効果か。落ち着いて
から言うようにするかな)

そう思って、あえて声はかけずにおいた。

「1回しか投げてないから体力が有り余ってるわ」

結局温存されまくった武藤は愚痴を言うが、実際に成宮が敬遠で失
投したのはランナー3塁、バッターが自分で次はクリーンナップ、
更にエースの登場。この要素がすべて揃って、成宮は自身で気づかな
いくらい緊張してしまっていたからだ。西は結論づけていた。

「晁太、ナイス圧力だった」

「おうよ」

お互いをねぎらいながらベンチを片付け、閉会式の準備を手伝う。

……

閉会式が終わり、バスから降りて青道に戻ると

「おめでとうー!」

「よくやったぞー!怪物世代ー!」

といった歓声があがったり、各々の名前を呼ばれたりして、ああ、優勝したんだな。甲子園にまた行けるんだという実感が今更ながら湧いてきた。

「なあ!晴之なに泣いてんねん!」

「ほんまや!めっちゃ泣いてるやんね!」

東と柳に指摘される。涙をぬぐい

「春の甲子園は連れていってもらって、申し訳ない気持ちがあった。今やっと、チームの一員として、甲子園へ挑戦する権利を勝ち取ったんだと思うと、涙が止まらなくなってきた」

そう言うとき笑顔でみんなに背中を叩かれる。

「ほんま、最後の夏、夏の大会は初めてや。青道に入る前に2人で目指そうって言った、夏の大会に行けることになってよかったのう」

「ああ、そうだな」

東としみじみと思いつく。

「クリスー!お前もチームの仲間だぞー!」

「おらあああ!大人しく胴上げされろや!」

「や!やめろ!」

賑やかで楽しそうな2年生たちを見て、心が暖かくなる。

「こいつらの代も甲子園へ行けるんやろか」

「努力次第だろうな」

自分達が後輩たちにしてやれることは、甲子園までの練習と、甲子園での先輩らしい姿を見せること。未来の青道の模範となるべく、3年生たちは各々決意を固めていくのであった。

エピローグ

片岡監督と落合コーチは、甲子園大会では地方大会の20枠から更に2枠絞られるため、ベンチ入りする18人を選考していた。

「投手陣はそのままとして、野手陣から2人除外することになるでしょうな。真夏のキャッチャーの負担は大きいですから、3人体制は崩したくない。となれば候補としては、外野5人のうちの1人、ファーストの結城、道川、会田の中から1人除外するのがベストでしようか」

「都大会中、そして後のゲーム形式バッティングの成績や特徴を見る限り、石橋と会田を外すことになりそうだな。外野は神田、影次の2人も守れるし、いざとなれば岸谷、藤谷、伊佐敷、真木が守る手もある」

「そうですね。御幸はキャッチャーしかしたことがなく、守備に不安がありますからな。武藤、井手は打撃が不得手ですからあえて外野に置く必要はないでしょう」

お互いに意見を述べ合う。

「1, 2年生に経験を積ませつつ、優勝を狙っていく。普通なら難しいことですが、今年に限っては戦力が充実していて、投手陣が4本柱すべてがしっかりしているので可能でしょう。結城、影次は問題ないとしても、小湊、御幸にうまく経験を積む機会を与えねばなりません」

「当たる相手にもよるが、スタメンを1回は経験しておいてほしい。小湊、御幸はバラバラに起用するとして、結城、影次は3年生と同じ扱いでスタメンに組み込んでいこう」

「了解です。抽選結果が出てから、おおまかの予定を立てていきますか」

2人の会議はまだまだ続くのであった。



青道では、甲子園大会直前のミーティングがグラウンド行われてい

た。キャプテンの神田が、甲子園大会のトーナメント抽選結果の書かれた紙を配る。

「さすがに夏の甲子園大会に出てくるチームだ。油断してもいいチームなど一つもない。投手、野手共にある程度の質をもったチームばかりだ。」

神田は1度深呼吸をする。

「そのなかでも大阪桐生、西邦が群を抜いている。大阪桐生はエース兵藤を軸に、2番手の2年生 館が本格化してきた。3年生を中心とした野手陣もタレント揃いで、優勝候補の1つに数えられている。西邦は圧倒的スタミナを持つ、1年生エース 明石が基本的に完投してくるだろう。打線は夏合宿の時と変わらず飯岡、佐野、明石のクリーンナップが強力だ」

片岡監督はその言葉に頷くと、

「要注意な高校としてはその2つが挙げられるだろう。だが、抽選結果を見てもらえばわかるが、その2校と当たるのは決勝だ。それまで全員を組み替えながら試合をこなしていく。そして結果を残した者をその決勝でスタメンとして使う」

その言葉にミーティングルームに緊張が走る。片岡監督はニヤリと笑い、

「誰が出てても勝てるように、ここまで厳しい練習をさせてきたはずだ。お前らも自分が出たらチームを勝たせることができる。そう思っているだろうか？背番号は先ほど発表した通りだ。だが、与えられる機会はこちらからの活躍で増えることがある。決勝のスタメンは甲子園の結果で勝ち取れ！いいな」

「はい！」

「神田！」

「はい！」

「今あれをやれ」

神田は頷くと全員意図を察して輪になる。

「この円陣を俺たちが、このメンバーで組むことができる回数はあと

わずか。その回数を限界まで増やすために、片岡監督、落合コーチを笑顔で胴上げするために、最後までバットを振り抜くぞ！……俺たちは誰だ？……」

「「青道！」「」

「誰よりも汗を流したのは一一一」

「「青道！」「」

「誰よりも涙を流したのは一一一」

「「青道！」「」

「誰よりも野球を愛しているのは一一一」

「「青道！」「」

「戦う準備はできているか？」

「「おおお！」「」

「我が校の誇りを胸に、ねらうはただ一つ！全国制覇のみ！いくぞお！」

「「おおおおおお！」「」

「後編」

プロローグ

目を覚まし、時計を見ると、普段通りの時間である5時を示していた。布団の中でグツと伸びをして、勢いよく起き上がる。周りを見てみると、いつも見る景色とは違うことに気がつく。

寝間着から普段着に着替え、歯磨きをして、顔を洗う。

「うへっ！冷てっ！」

朝の5時だからか、8月とは思えない水温に思わず声が出る。庭に出て、軽くストレッチをして体をほぐしていると、後ろから誰か来るような気配がした。

「おはよう、影次。相変わらず早いな」

「哲さん！おはようございます！」

振り向くと、短い黒髪で、キリツとした目が特徴の結城 哲也さんがいた。自分よりも一学年上の頼れるスラッガーである。

「開会式が今日ですからね！興奮が抑えられないです」

「俺は少し緊張しているよ」

お互いに笑い合う。そうしていると、寄宿舎の3人部屋、最後の1人が伸びをしながら起きてきた。

「お前ら早いなあ、今日は朝練習はないし、開会式だけだからのんびりしてりやいいのに」

3年生の栃谷 薫さん。俺の兄貴と共に城南リトル、シニアから研鑽を積み、今やドラフト候補と言われるクラッチヒッターだ。

「習慣って怖いですね。きっかり5時に目が覚めましたよ。ちよつとバット振ってきますね！」

「おう！俺も後から行くわ」

哲さんと一緒に、あらかじめ寄宿舎側から、ここならバットを振つていいと伝えられている場所へ向かう。古くからあるらしい寄宿舎からは、夏の朝に軽めに吹く爽やかな風が、どこか懐かしいような木の香りを運んできて、精神的に落ち着きをもたらしてくれる。しばらく

く歩いていると、誰かがバットを振る音が聞こえてきた。

「たぶんあの入場だろうな」

哲さんの声を聞いて、自主練習場へ入る。

ブオン！

目を瞑ったまま、素振りをする3人組がいた。誰よりも大きく、誰よりも力強いスイングをしているのは3年生 東 清国さん。静かで、ブレがほとんどなく、安定したスイングをしているのは3年生 柳 圭司さん。そして誰よりも鋭く、誰よりもブレのないスイングをしているのは、自分の兄である3年生 西 晴之。

「おはようございますー！」

哲さんと2人で、自分達の尊敬する強打者たちに挨拶をする。

「おはようさん♪」

「おう、おはよう」

「おはよう」

三者三様の挨拶が返ってくる。残り少なくなったら、一緒に練習できる時間を大切に、一振り一振りを手を抜かずに振りきっていく。いつの間にか太陽が全員を照らし、挨拶をして素振りをするメンバーや、シャドーをするメンバーが増えていく。

18人全員揃っても、バットを振る音、少し荒れた息遣い、タオルを振り切る音のみが、自主練習場を満たしていく。

ピピピピピ！

不意にアラームの音が鳴り始める。

「よし、あと20分したら朝食の時間だ。軽めに汗を流して食堂に集合するように」

「はいー！」

神田さんの指示に全員が返事をして、各自の部屋に戻って軽くシャワーを浴び、身支度をする。朝食後、身体の動きを軽く確かめて、専用バスに乗り、甲子園球場へと向かっていく。

途中で、開会式を見にきているらしい通行人に手を振られ、律儀に

会釈をして返す。バスの窓越しから聞こえてくる声に耳を傾けると、

「あれが王者青道ナインを乗せたバスか！」

「今回はどれだけ点を取るんだろうな？」

「エースの武藤も乗ってんのかな？」

そういった声が聞こえてくる。打線だけでなく投手陣への期待の
声が聞こえ、以前の打の青道への歓声とは、少し違ったものとなつて
いた。隣に座っている兄貴に

「甲子園への移動っていつもこんな感じなの？」

と聞くと、兄貴は

「だいたいこんな感じだな。青道にもイメージがあるから、バスの中
で寝たり、見えるところで鼻をほじったりするなよ。テレビに映るか
もしれないからな」

「そんなことしないよ……たぶん……」

自分の素行に自信が持てなくなったが、甲子園球場についたので、
バスからおりて監督の指示を待つ。

「よし、全員いるな。指定された位置まで移動して、大会委員から連絡
があるまで待機だ。」

「はいー」

そう返事をして片岡監督に全員についていく。ふと見上げると、甲
子園球場が視界に映る。

緑のツタが綺麗に整えられ、自分の身長よりも遥かに高く、こちら
を見下ろすように、目の前に立ちはだかっていた。これからここで野
球をやる。確かに積み上げられてきた歴史と、しっかりと整備されて
いるツタから職人の魂が感じられ、何か言葉にできないが、気圧され
るものが確かにあった。

「影次、行くぞ」

兄貴に声をかけられ、我に返ると、自分と真木、御幸以外は先の方
へ進んでいた。

「ごめん！ほら！真木！御幸！行くぞー！」

同じようにボーツと甲子園球場を見ていた2人を正気に戻して、駆
け足で先頭集団に追い付く。片岡監督がこちらをチラツと見た気が

したが、特に何も言うことはなかった。

初めての甲子園球場に、キヨロキヨロと周りの設備を見ながら、1年生で固まっていると

「周りの選手を見てみるよ、めっちゃ注目されてね？」

と御幸が小さい声で話しかけてくる。そう言われてみればと冷静になると、他の高校の選手達がこちらを見ていることに気がつく。感激している者もいれば、挑戦的な目を向ける者、睨み付けてくる者など様々な人がいた。校旗を持った神田さんがやってくると

「気にすんな。実際にやるのはいつもと変わらない野球だ。実力を見せてやればいい」

堂々と言い放って、先頭へ行く。2，3年生を見ると、周りからの視線など関係ないと、普段通りの振る舞いをして、逆に他の高校を威圧していた。そんな姿を見て誇らしく思っていると、行進の順番となったようだ。列が進んでいく。

グラウンドの中に入ると、より一層大きくなる歓声に包まれる。先輩達に合わせて行進をして、所定の位置につき、サツと周りを見渡すと、神宮球場で感じた以上に、どこか感慨深いものがあった。

これが出場する選手として感じる聖地。甲子園球場の土、風、そして雰囲気貴重な経験として味わう。その雰囲気に当てられ、何か前で人がしゃべっているがよくわからず、気づけば球場の外へ出ていた。

テレビで聞いた、そして、兄貴を応援したときに、スタンドで聞いたサイレンが鳴る。1日目の第1試合が始まったことがわかるが、自分達は別の場所で練習である。他校同士の試合が気になり、後ろ髪を引かれるような思いであったが、バスに乗って練習場へ移動する。

「選手として初めての甲子園、どうだった？」

と兄貴に聞かれたので

「よくわからないけど、独特な雰囲気があって、とにかくすごかったよ」

と答えると、兄貴は頷き、そうだろう、そうだろうと和やかな雰囲気ですげに良かった。練習用のグラウンドに着き、試合用ユニフォームか

ら、練習着にサツと着替えて、ストレッチしながら待機する。片岡監督が来ると、全員ストレッチをやめて、横並びに整列する。

「開会式」苦労だった。私が監督となって、教え子が出るのはこれで4回目となる。とても立派だったぞ」

と微笑みながら言われ、少し照れ臭さを感じた。それは3年生もそうだったみたいで、いつもよりも緩んだ空気が流れる。片岡監督はすぐに表情を戻し、

「では、初戦のスタメンを発表する」

一言で空気が引き締まる。片岡監督が合図をすると、落合コーチが紙を拡げる。

- 1 西影次 ショート (右)
- 2 柳 レフト (左)
- 3 栃谷 ファースト (右)
- 4 東 サード (右)
- 5 西晴之 セカンド (左)
- 6 神田 センター (左)
- 7 玉森 ライト (右)
- 8 真木 ピッチャー (右)
- 9 藤谷 キャッチャー (右)

「つしやー」

練習試合ではあつたものの、公式戦で初の、しかも甲子園大会の試合で、兄貴と二遊間を組めることに、思わずガッツポーズをしてみせた。

「す、すいません」

と謝るが、周りにニヤニヤと笑われ、
「お前、すぐ感情が行動に出るよな」

と隣にいた御幸にからかわれてしまう。

「ごほん！」

片岡監督は咳払いをすると

「バッテリーを除いた、この初戦のメンバーが、現在決勝でスタメンになる可能性の高い者達だ。点差がつき次第、また活躍によっては交代を積極的にしていく。甲子園の晴れ舞台だ！いつ出てもいい準備をしておけ！」

「はいっ！」

「今からボールを使って練習するぞ、ノックを受けるグループ、トスバッティングするグループに別れる！2軍の選手達が準備してくれているから行け！」

指示に従ってノックとトスバッティングをして、それが終わると、ポール間ダツシユなど、様々な練習をこなし、いつの間にか午後2時となっていた。

「よし！ダウンしておけ！まだ試合まで期間があるから、徐々に疲労抜きをしていくぞ！今日は以上だ！自主練習はほどほどにな」

「はい！」

バスで寄宿舎へ帰り、風呂からでるとテレビをつけると、いきなり歓声が聞こえ、実況が興奮したように

「打ったー！西邦の主砲！佐野 修造！まだ2年生ながら高校通算40本目を記録しました！怪物がいるのは青道だけじゃない！西邦の怪物が咆哮を轟かす！」

と叫んでいた。結局、試合は西邦が11―2で勝利した。投げては明石が2失点完投勝利を記録し、主砲の佐野さんは2本塁打を放っていた。来年は兄貴の世代が抜けた戦力で、エース明石、4番 佐野さんという、完成度の高いチームを相手にしなければならぬと思うと、自然と手に力が入る。

「まだまだ自分の実力じゃ、このチームに勝てない」

口から思いがこぼれ、テレビを消す。自主練習場へ行くと、哲さんと亮さん、そして純さんが素振りをしていた。

「お疲れさまですー西邦が初戦勝ってましたよ」

と伝えると、哲さんはオーラを出し、亮さんは若干黒くなり、純さんは

「俺なら西邦完封してやらあー！」

と叫んでいた。頼もしい人達だなと思い、この人達となら、次も甲子園に挑戦することができるかもしれないと、沈みかけていた気持ちをもち直し、新チームへの希望を持つ。

兄貴と力をあわせて、主力として甲子園へチームをつれていく。そう思って入学したのに、結果として自分はスタメンにすらなれず、稲城実業戦では出場すら叶わなかった。甲子園決勝でのスタメンが有力であること。自分が認める人達が数人、チームに残ることを実感して、生まれかけていた諦めという感情が払拭されていった。

しかし、兄貴達の世代ですら、5回のうち3回しか行けなかった甲子園。自分達の世代ではどうなるのか。これが唯一の機会になるのではないかという不安が、いまだ影次の中には大きく存在していた。

最初の夏と最後の夏 王者の戦い

照りつける太陽の光、観客の視線が突き刺さってくる。おそらく、テレビでも自分が見られていることを自覚し、軽く1スイングして、バットを構え、相手ピッチャーを見据える。すると、アナウンスが聞こえる。

「お待たせいたしました……第2試合……まもなく開始でございます」

独特なサイレンの音が鳴り響く。相手ピッチャーが勢いづくために投げてきた、インコースのストレートを、その場で回転するように打ち払う。

カキーン！

大きい金属音が耳に届き、一瞬顔をしかめるが、全力で1塁へ走る。サイレンが鳴り終わり、一瞬すべての音が途切れる。何事かと周りを確認しようとすると、

「うわああああ！」

球場全体が歓声に包まれる。1塁コーチャーをしている道川さんに

「ナイスホームラン！ベース踏み忘れるなよ！」

と言われ、ようやく自分がホームランを打ったことに気がつく。なるべく平静を装いながら、ベースを1つずつ丁寧に踏んでいく。ホームでは笑顔の柳さんが待ち構えていた。

「甲子園デビューがホームランとか、やっぱ兄弟やんなあ」

ハイタッチをして、ベンチに戻ると

「お前かますなー！」

「思いきりのいいバッティングだった！」

頭と背中をべしべしと叩かれる。めっちゃ痛い。

キーン！

鋭い打球が右中間を突き破る。柳さんはボールの行方を確認せず、1塁コーチャー 道川さんの指示を信じて、2塁まで駆け抜けた。

「おおおお！ナイバッチー！」

「もつと点とつてけー！」

「なんで不用意にインコースを攻めるかなあ！俺だったらよお！アウトコースでピシツとよお！決めたるぜえ！」

知らないおじさん達の様々な声が、スタンドから聞こえる。西東京都大会では、少なくとも地元の人しかいなかったから、選手を否定するような言葉は少なかったが、全体から見れば少ないものの、ヤジが目立つ。

「色んな人が見に来ているからな。あそこではビールを飲んでるおっさんもいる。嫌な言葉が聞こえてきても無視すればいい」

そう兄貴に言われて、それもそうかと思う。とりあえず、そんな声は無視して試合に集中する。

「3番 ファースト 栃谷くん」

ノーアウト2塁の場面で、ヒツティングマーチの See Off が流れ始める。栃谷さんの普段、少しいい加減そうな雰囲気が消え、相手打者を食い殺さんばかりの威圧が、相手ピッチャーを襲う。哲さんのここぞというときの集中力もそうだけど、栃谷さんはそれ以上に感じる。

キーン！

コンパクトに確実性を重視したスイングが、相手ピッチャーの決め球 スライダーを捉え、センター前へ飛んで行く。2塁ランナーの柳さんは、3塁を蹴ってホームに突っ込んでくる。外野からの送球がそ

れを追いかけるように、キャッチャーの元へ向かってくる。

「セーフ！」

「ボール2つ！」

キャッチャーが2塁へ投げようとするが、すでに栃谷さんは2塁に到達していた。初回から果敢に相手ピッチャーを攻める青道を、後押しするように球場の歓声が響く。

「4番 サード 東くん」

更なるチャンスを盛り上げるように、ヒッティングマーチのアゲアゲホイホイを、青道側スタンドから吹奏楽部が、汗を流しながら演奏する。地鳴りがなるような応援に、相手ピッチャーは更に飲まれていく。

ピッチャーは落ち着くために牽制を挟み、初球、ボール球を投げるが、東さんの集中力は増していき、雰囲気は落ち着けないまま

「ボール！フォアボール！」

東さんが四球でノーアウト1，2塁になる。次の打者は

「5番 セカンド 西 晴之くん」

ピシッと雰囲気が変わる。味方には絶対に点が入ると思わせる、安心感を与える兄貴の佇まい、ルーティーンは、相手にとっては絶望を与える準備運動に思えるだろう。表情は変わらないが、ピッチャーとの対戦を楽しみにしているのが自分には分かる。その初球

ドゴォー！

バックスクリーンに突き刺さるボールを見届け、グラウンドに目を戻すと、ゆつくりと甲子園の土を踏みしめる兄貴の姿があった。自分の実力を信じて、それに見合った結果を大舞台でも出しきる。勢いに任せてホームランという結果を出した自分とは違う、ある種覚悟の決まった強打者。これこそ自分が3年生になった時に、なっていなければならない姿。

あまりにも高い壁に臆しそうになるが、これくらいの打者にならないければ、青道の主軸を打つにふさわしくはない。ベンチに戻ってきた

兄貴とハイタッチをしながら、やつぱりこの人は、別格と言われる青道打線でも、更に別格なのだと言われた。

……

初戦を27―0で勝利し、青道ナインは専用バスに乗って、寄宿舎に帰る途中、今日の試合のことを思い出す。6打数4安打1本塁打3打点。甲子園デビューとしては、かなりの好成績だと自分でも思うが、兄貴の2打席連続本塁打を思うと、かなりの差があることがわかる。

ほぼ全員の野手が出場し、バスの中で御幸、真木は若干興奮が覚めないような様子であったが、それとは対照的に、自分は秋以降、こういったチームが自分達で作れるかどうかを考え、頭が冴え渡っていた。

横にいる兄貴がそれを感じ取ったのか

「焦るなよ、チームはじっくり出来上がっていくさ」

とボソツとこちらに呟かれるが、その焦りの原因の世代に言われてもなあ、という思いと、心配してくれてありがとうという思いが半々であった。

寄宿舎につくと、早速自主練習場へ行き、集中して素振りをしていく。

ブオン！

目を瞑り、更に鋭く、そしてブレがないように、まるで兄貴の鏡写しをしているかのような軌道を想像し、出力していく。

「お前と俺は違う」

青道に入学してすぐの練習が終わった後に、最初に言われた言葉が思い出されるが、首を振って打ち消す。自身が思う最高の打者、兄貴を思い浮かべ、理想のスイングを辿っていく。

カチツと嵌まるスイングがあったが、それは想像したものとは違う

もの。修正を加え、加え、加え……更に加え……自分の思う最高の打者へ近づけていく。

これだと思つて、それを続け、身体に無理矢理染み込ませていく。これなら打てる。そう思つて素振りを続ける。

「おいっ！おいっ！」

そう呼び掛けられて、ハッと気がつくのと、辺りは暗くなっていた。

「飯の時間に来ねえから心配したぞ、まだあがってなかったのか」

苦笑いをする栃谷さんが、横に立っていた。

「すみません、つい熱が入ってしまった」

「俺が自主練習し始めるより早くきて、風呂あがってもやってるって、すごい集中してたんだな。飯は残しておいてもらうように言つとくから、早く風呂入つてこい」

そう言われて、風呂に入りに行く。風呂、夕食を済まして、部屋に戻ると、栃谷さんと哲さんが将棋をしていた。

「何勝何敗ですか？」

「くっ！栃谷さんが強くてな、俺が全敗している」

そうでしょうねと思ひながら、ペットボトルのお茶を飲んで一息つく。

「影次、お前は根を詰めすぎだ。今は甲子園大会中。疲労を残すようなことをするなよ。練習で実力を上げるのは、大会後だと割りきれ。変に疲労を残して結果を出せなくなる方が迷惑だ」

そう栃谷さんに強く言われ、心当たりはあるため反省する。そして、正直に

「秋以降、相手投手陣を打ち崩せるのかと考えていたら、不安で焦っていました。すみません」

と謝った。栃谷さんと哲さんはびっくりしたような顔をしていたが、

「そんなことを考えていたのか。確かに、俺も秋以降は不安だが、亮介にクリス、伊佐敷、真木、御幸。そして影次、お前がいるから、じっくりみんな考えていけばいい。そう思っている」

と哲さんは優しい声で答えてくれた。それに続けて栃谷さんは

「俺達の代が異常なだけだ、心配すんな。普通は2, 3人レギュラー当
確かな? ってやつがいて、他をみんなが競い合うんだと思うぜ。今年
のチームでベンチ入りできなかつた、会田、山崎、石橋、増子、丹波、
倉持も他のチームだったらレギュラー格だぜ。そんな心配すんなよ」
「それに、次の夏の甲子園まではあと1年ある。それまでお前は成長
しないのか? どうなんだ?」

そう問い詰められる。

「青道の誇れる、誇らしく思われる4番になります!」

と力強く栃谷さんに言い返す。すると隣からオーラが沸き上がる。
「なるほどな、俺と4番の座をかけて競うか。いいだろう、相手にな
る」

と言われたので

「臨むところです。西 晴之の弟として、負けられません!」

お互いに向き合う。

「お願いします!」

パチンツ! パチンツ! と将棋の駒を進めていく。

「勝った!」

と言つて俺はガッツポーズをし、

「ぐう、お前が4番か」

と哲さんが四つん這いになる。

「次の青道の4番を将棋なんかで決めてん……じゃ……」

将棋を貶されたと思った哲さんの、試合中並みの眼光に栃谷さんは
怯む。

「お願いします!」

「くそ! 8回目だろうが! いい加減諦めやがれ!」

そう言いながらも律儀に、将棋に付き合う栃谷さんに笑つてしま
う。次はお前が相手をしろよという視線を無視して、ふうつと畳の上
に横になる。

秋以降の問題が消えたわけではないが、少し心が軽くなったような
気がする。明日以降は無理な自主練習はしないことを決め、今日は早
く寝ることを決意した。



青道は初戦から全国の強豪を蹴散らし、決勝まで、何の障害もなく駆け上がる、下馬評通りの戦いを繰り広げた。しかし、トーナメントの反対側では、青道首脳陣が決勝の相手になると予想していた西邦は、明石を休養させようとした3回戦で敗退し、準決勝は国士館と大阪桐生の戦いになっていた。

国士館はここまで、全試合を財前が完投し、勝ち進んだのに対して、大阪桐生は兵藤、館を温存しつつ、投手4人で負担を分散してきていた。

国士館の先発は財前、大阪桐生の先発は館。大阪桐生の攻撃から始まった試合は、序盤、中盤と投手戦を繰り広げ、お互いに得点を許さない、緊迫した投手戦となる。

試合が動いたのは7回裏、4番財前がツーベースヒットでチャンスを出すと、5番打者がバントを一発で決め、1アウト3塁という絶好の得点の機会が訪れる。6番打者が放った大きなレフトフライが、捕球されるや否や、3塁にいた財前がホームベースを陥れ、国士館が先制点をとった。

しかし、その走塁が財前の体力を奪ったのか、8回表にとうとう大阪桐生打線に捕まり、4失点を喫してしまう。国士館エース 財前はそれでも諦めず最後まで投げきり、9回を147球完投するが、チームは援護できず、1-4で準決勝敗退となった。

決勝のカードは青道―大阪桐生となり、春の甲子園準決勝以来となる、武藤と兵藤の直接対決に、高校野球ファンは、盛りあがりを見せているようだ。

横綱対決

甲子園球場に入るまで、若干湿気を感じられた風は、グラウンドに入ると、乾いた風のように身体に襲いかかり、炎天下の中、照りつける太陽も相まって、まるで砂漠で野球をしているかのようであった。

「6番 レフト 西 影次くん」

自分の名前がアナウンスされ、打席に入る。直前のプレーへの歓声がやまないなか、理想のスイングを1回なぞり、相手ピッチャー 兵藤さんを見る。

最初から全力で抑えにくる兵藤さんに、一巡目の上位打線が完璧に抑えられる。そう思わされたときの一打であった。兵藤さんの決め球のフォークを難なく掬い上げ、兄貴は左中間にボールを運んでいった。チャンスを作ってもらったの打席。

現在お互いに無得点の2回裏、1アウト2塁、確実に先制点をとりたい場面。自然と手に力が入るが、一度深呼吸をして、力を抜いた状態でバットを構える。

初球、インコースのストレートが、こちらに向かってくるように

ドオン！

「ボール！」

完璧に見えていたボールを、目を切らさずに、少し身体をよじることで避ける。このストレートなら打てそうだと判断する。2球目の縦スライダーをじっくり観察して見送る。

「ストライク！」

あの球も当てただけなら、いくらでも大丈夫そうだ。ストレート、縦スライダー以外に情報があるのは、ツーシーム、ドロップカーブ、SFF、フォークの4種類。新球はきた時に考えることにする。

「ボール！」

直感で、ストレートには何かが違うと、あえて見逃したボールが、ホームベースに到達する直前に沈んで、ストライクゾーンから外

れた。今のがSFFと記憶し、次は何かとじつと相手を観察し続ける。ん？これは丹波さんのカーブに似ている？と思い、おもいつきり引っ張る。

キーン！

完璧に捉えられた打球がレフトへ飛んで行くが

「アウト！」

当たりが良すぎてレフトライナーとなる。ああ、と残念がる観客の声が聞こえたが、今のは仕方ないと切り替え、ベンチへと戻る。最後のドロップカーブは、丹波さんのカーブと比べるとキレで劣るため、次も捉えることができると確信する。

パアン！

「ボール！フォアボール！」

つづく栃谷さんは厳しいところを攻められ、四球となり、2アウト1, 2塁になる。続く岸谷さんは、兵藤さんの変化球に翻弄され、空振り三振となった。

150キロ前後のストレート、ツーシーム、ドロップカーブ、SF、縦スライダー、フォークのなかでも、ツーシームとフォークの精度は抜群らしいが、それを自分に投げてきていないのが気になるところ。

バッティングセンターのように、球種をこちらが決めるわけではないから仕方がないが、ツーシームとフォークを見たい、打つてみたいという、打者としての欲が出てきていた。

武藤さんは大阪桐生打線を圧倒し、ランナー1人すら許さない投球を続けていく。試合が進み、4回裏に先頭打者の柳さんが四球で出塁する。

「4番 サード 東くん」

ノーアウトでやってきた先制のチャンスに、球場のボルテージが上

がっていく。初球のフォークを東さんは空振りする。両者の高校生
離れた変化球、スイングに歓声があがり、応援に熱が入る。

「ボール！」

アウトコースに外れるストレートを、じつくりと観るように見逃
す。兵藤さんは汗を拭って、一度深呼吸をする。3球目、インコース
低めのSFFを見送りボールとなる。

今度は東さんが首を振って、自分の頭を軽く2回叩いてバットの先
を見つめ、再び構える。4球目

カキーン！

レフト方向へと打球が、大きな放物線を描いて飛んで行く。

「ファール！ファール！」

「ああああああ」

観客のため息、歓声、怒号が球場を満たしていく。2―2の平行カ
ウントとなり、エースと4番の対決は緊張感を増す。太陽光が強く球
児に降り注ぎ、ジリジリとした暑さは体力を少しずつ、そして確実に
奪っていく。

パアン！

「スイング！」

東さんはバットを止め、キャッチャーが1塁審に判定を求めるが、
1塁審は手を真横に広げる。フルカウントになり、兵藤さん、東さん
の気迫がぶつかり合い、緊張感がこちらにも伝わってくる。

キーン！

鋭い打球がライト線を襲う。スライスした打球が、右方向へときれ

ていく。

「ファール！」

約20cmくらいであろうか、僅かにライト線の右に着弾し、柳さんは再び1塁へと戻る。さつきから、柳さんもリードの大ききなどで、兵藤さんにプレッシャーをかけるが、全く動じていない。

「走った！」

ギーン！

東さんはなんとか右方向にゴロを放つ。

「アウト！」

1塁フォースアウトとなるが、ランナーの柳さんは2塁へ。チャンスで兄貴の打席になるが、

「ボール！フォアボール！」

敬遠をされ、1アウト1，2塁の場面で自分の打席が回ってくる。

「お願いします！」

と声を大きく出して、全身から余分な力を抜いてリラックスする。ストレート、ツーシーム、縦スライダーは見切った。これなら打てる。そう思つてバットを構える。

ドゴオン！

先程よりも威力、キレの増したストレートに手が出ない。

「ストライク！」

アウトコースの低めに外れるかと思つたボールが、目の錯覚か、浮き上がつてストライクゾーンに入ってきたように見えた。これが本気かよと、気合いを入れ直す。

ガキイ！

ストレートになんとか当て、1塁線をきれていくファールとなる。

「ボール！」

インコース低めに外れるフォークに、全く反応できなかった。しかし、軌道を知れたのは大きい。イメージの中で、1打席目よりも変化、キレ、ノビを増したボールを想像していく。

ストレートの、縦スライダー、ストリートと3球カットし、7球目のフォークが、ボールゾーンに外れるのをしっかりと見極める。2―2の平行カウントとなり、より集中力を高めていく。インコースの直球を振りにいく。

ギーン!!

くっ！ボールの上つ面を叩いたのか？これが兵藤さんのツーシュームか！

詰まらされてもなお、力強い打球がサード正面へ転がっていく。サードがしっかりと捕球して3塁を踏むと、1塁へと送球する。

やめろ……やめろ!!……

懸命に走って、1塁ベースに向けてヘッドスライディングをする。

一瞬の空白の後、

「アウト！チェンジ！」

「くそっ！」

思わず声に出してしまう。せつかく先輩達が、兄貴が作ってくれたチャンスを潰してしまったことに、悔しさが隠せない。

「おらっ！」

ポコンツと頭をグローブで軽く叩かれ、

「またチャンスで回すから頼むで！」

と笑顔で東さんに励まされる。

「次こそは」

そう言いながらグローブを受け取り、守備位置であるレフトへ駆け足で向かおうとすると、後ろから栃谷さんが

「進塁打だったけど、お前も普通にアウトになってたもんな」

「うっせ！次こそホームラン打つたるわい！」

という言葉が聞こえてくる。まだチャンスがある。そう自分に言い聞かせて、外野で柳さんとキャッチボールをする。ボールをベンチに返して、深呼吸をして、頭のなかでノーアウトのケースでやるべきことを思い浮かべる。

ボールが飛んできても、しっかり対応する準備はできていたが、武藤さんは5回表も大阪桐生打線を圧倒し、外野にボールは飛ばず、攻略の糸口すら掴ませない。テンポもよく、全く点を取られる気配がなかったため、1点も与えることができないというプレッシャーが、大阪桐生の守備の動きを固くする。

そういった状況でありながら、エースの兵藤さんは冷静で、5回裏先頭打者の栃谷さんを三振に仕留めると、岸谷さんにシングルヒットを許したものの、続く武藤さんを三振、神田さんをセカンドゴロに仕留め、流れを青道に渡さない。

高校BIG3と言われる投手同士の戦いは、お互い無失点のまま、6回へと進んでいくのであった。

打者として

6回表、大阪桐生の先頭打者はフルカウントまで粘る。レフトからは遠くて、表情はわからないが、精一杯食らいついているようだ。あつ、外へのスライダーで空振り三振。

これで打者16人に対して10個目の三振。相手エースの兵藤さんが絶好調で、うちの打線を抑えるのに呼応してか、武藤さんの調子も更に尻上がりに良くなってくる。

8番打者はショートゴロに、続く9番打者を三球三振仕留め、6回を投げて、完全試合ペースの武藤さんに、球場全体から拍手が送られる。

「ボール！フォアボール！」

その球場の雰囲気の後押しされてか、6回裏、玉森さんが四球で出塁する。

「3番 センター 柳くん」

2打席目では、しつかりとボールを見極め、四球で出塁した柳さんが打席に入る。いつもの笑顔とは違い、相手を射殺せんばかりの眼光で兵藤さんを貫く。様子の違いに大阪桐生に僅かではあるが動揺が見られる。その初球

「走った！」

キーン！

アウトコースのストレートを、柳さんは丁寧に捌き、三遊間へ流し打ちする。しかし、ショートはランナーの盗塁に釣られずに、逆シンブルで捕球すると、そこから踏ん張って1塁へ送球し、1塁フォースアウトとなる。

あのショート凄いなと思っていると、兄貴がネクストサークルに向かう準備をしながら、

「春の甲子園でやったラン&ヒット、1点の攻防で緊張する場面だが、1度やって見せた攻撃だ。さすが大阪桐生、しつかり対応してきた

な」

その言葉にそういえばと、スタンドから見ていた青道の攻撃を思い出す。あのときはランナーが兄貴で、柳さんが今回のようにショートに転がしていたか。

「影次、前までの打席を忘れて、きた球を打て。俺みたいに、配球はどうだとか考えるんじゃないで、何も考えずに反応して打つ方がお前らしいと思うぞ。この大会の初戦、ストレートを反射的に打ち返して、先頭打者本塁打を打ったときの方がな。まあ、ごちやごちや難しく考えず向かっていけ。お前まで回すから頼むぞ」

「…俺らしく…」

自分がするべき打撃とは何か、それを後少ししかない時間で考えていく。その間に、東さんは兵藤さんに8球投げさせるが、最後はライトフライに抑えられ、2塁ランナーの玉森さんは、タッチアップで3塁に行く。

「5番 ショート 西 晴之くん」

兄貴の名前がアナウンスされると、球場が歓声に包まれるが、キャッチャーが立った瞬間にブーイングに変わる。

「逃げんなよ!」

「正々堂々やれや!」

など自身のプライドよりも、チームの勝利を優先する兵藤さんに、心ない言葉が浴びせられるが、兵藤さんは淡々と4球投げ終えた。

「6番 レフト 西 影次くん」

3度目となるチャンスでの打席に入ると、色々な声が聞こえてくる。

「弟だけど今のところノーヒットだろ?」

「チャンスをごとごとく潰してるよな」

「兄が凄いからって優遇されてるんじゃないの?」

という声があれば

「打てー! 影次! 将来の青道主砲ー!」

「落ち着いていけよー!」

「3度目の正直や!」

後押ししてくれるような、よく知った声も届いてくる。兄貴の言ったように何も考えずに、兵藤さんの挙動だけを見つめる。

「走った！」

パン！

「ボール！」

兄貴は楽々と2塁を陥れ、2アウト2、3塁となる。じーつと兵藤さんを観察する。2球目が投げられる。これは外れるなど思い、軌道を目に焼き付ける。

「ボール！」

アウトコース低め、外へわずかにずれたフォークを見逃す。兵藤さんの動きと、2ボールというカウントだけを頭に、投げられるボールに集中する。

ドゴオン！

インコースのストレートを見逃し、1ストライク2ボールへ。4球目、これだと直感する。インコース低めの直球を、身体力を抜いて、上から押し潰すように振り抜く。ストレートの軌道から僅かに沈んだボールと、迷いのないバットがかち合い、スライス気味の回転をしながら、サード方向への強烈な打球となる。

「抜けろおおお！」

サードが2塁方向へと横っ飛びをするが、ボールはグローブから逃げるように跳ね、ショートも後ろに回り込んで取ろうと追いかけるが、ボールの方が速かった。

俺は必死に1塁を駆け抜け、自分がアウトになっていないことを、歓声や道川さんの表情から把握すると、右腕を突き上げ

「おっしやあああ！」

と雄叫びをあげた。青道側スタンドの応援が更に活発になる。外野が前進守備であったため、兄貴は3塁でストップしているが、待望の先制点に青道は盛り上がる。

「7番 ファースト 栃谷くん」

2アウト1，3塁、先程と同じケースでチャンスにとっても強い栃谷さん。

「打たれちまったが、ここを抑えて逆転するぞ！」

相手エース 兵藤さんは、落ち着いた様子でチームを鼓舞する。その初球

カキイン！

低めに外れる、様子見であったであろうフォークを力強く叩き上げ、これ以上点をやらないと、気合いを入れた外野にボールが飛んで行く。2アウトのため、打球を確認せずに懸命に次の塁へ駆け抜けていく。

「行けるぞ！回れ回れー！」

3塁コーチャーの城之内さんの声を信じ、3塁を蹴る。ネクストバッターの岸谷さんが

「影次！すべりこめええ！」

と絶叫するのを聞いて、キャッチャーのいる右側に滑り込み、キャッチャーの足の隙間から、左手でベースをタッチする。それに一瞬遅れて、脇腹に衝撃を受け、地面を転がる。

「セーフ！」

審判の宣言を受け、ガッツポーズをするが、痛みで立ち上がれない。歓声と悲鳴がうるさい。

「影次！ゆっくり息をしろー！」

そう言われて自分が息を止めていたことに気がつき、意図的に呼吸をしようとする。ズキズキと痛む脇腹が気になるが、兄貴に肩を貸し

てもらって立ち上がり、ベンチへ向かう。片岡監督が慌てたように

「影次よくやった！1塁コーチャーに藤谷！行ってくれ」

「はいっ！」

「影次、道川と次の回から交代だ。脇腹をすぐ診てもらえ」

出たい気持ちはあるが、本当に痛いのでベンチに戻ってきた道川さんに

「後をお願いします」

と言うと、道川さんは笑いながら

「お前よりも打ってやるよ」

と言ってファーストミットをスポーツバッグから取り出す。球場から落胆の声が聞こえたので、グラウンドに目を移すと、岸谷さんがセンターフライに倒れたところであった。

太田部長に付き添ってもらって裏に行き、救護班の方に診察してもらおう。

「派手に吹き飛ばされてたからヒヤヒヤしたけど、これは軽い打撲でいいだろうね。息を吸って……吐いて……痛みが酷くなる感じはあるかい？」

「いえ、痛いですが、特に変わりはありません」

「大丈夫そうだね。なるべく冷やしておいて、後から精密検査を受けるように。いいね？」

頷き、お礼を言っつてベンチに戻る。大丈夫か？と尋ねようとしたメンバーは、太田部長の表情を見て、大丈夫そうだなと判断する。太田部長が

「え？みんな聞いてこないの？」

とボソボソ言っているのが気になるが、普段ならそれでも声をかけてくる先輩達が、懸命に出場している選手達に声をかけるのを少しおかしいと思い、目をマウンドの方に向ける。

その先には、ランナー1、2塁にいる状態で、マウンドに内野手が集まっているという光景が広がっていた。

「そんな……安定したピッチングをしていたのに……どうして」

そう言うと、哲さんが説明してくれる。

「武藤さんの調子が良すぎたんだ。先頭打者を追い込んだあとのSFのキレがありすぎて、空振りを取ったのはいいが、岸谷さんがワンバウンドしたボールを後ろにそらして振り逃げ。それにテンポを崩されたのかフォアボールで、今の状態、ノーアウト1，2塁になっている」

「なるほど」

大阪桐生打線も全国屈指の実力。さっきまで1点を争う緊迫した状態だっただけに、3点先制した直後、本人の気がつかないところで綻びが出てもおかしくない。それが今出てしまっているのだろう。

しかし、さすがエースであろうか、マウンドにいる武藤さんに焦った様子はない。内野陣が各守備位置に散り、3番打者への初球、インコースのストレートを投げきる。

「ストライク！」

電光掲示板には152km/hと表示され、青道側スタンドからは歓声が聞こえる。2球目のSFで空振りを奪い、ボールはワンバウンドするが、岸谷さんは身体で止め、ランナーを進めさせない。

先程そらしたボールを、気合いで止める岸谷さんに拍手が起こる。

ドゴオン！

「ストライク！バッターアウト！」

電光掲示板に153km/hと、自己ベストを更新する数字が表示され、ノーヒットノーランの期待もあり、武藤さんを応援する声が増えていく。

「4番 ピッチャー 兵藤くん」

エース同士の対戦に、青道ベンチ、大阪桐生ベンチ共に精一杯声を出して応援していく。

「武藤さんー！ー！つづついきましょー！」

脇腹が多少痛むが、声をしっかり出していく。

初球のストレートに、兵藤さんはなんとか当ててファール。2球目のスライダーを堂々と見逃すが2ストライク。1度打席をはずして

素振りをして、再びゆったりとバットを構える。

キーン！

少し甘く入ったストレートを弾き返し、鋭い打球が左中間を突き破っていく。

「回れ回れ！」

大阪桐生の2塁ランナーはホームへ到達するが、1塁ランナーはセンター 柳さんからボールが返ってきたのを見て、3塁でストップする。1アウトランナー2，3塁とピンチが続く。

3―1となり、試合を楽しみにきた観客は、ノーヒットノーランがなくなったのを嘆くのと共に、点が入ることに期待し始める。

「5番 ライト 館くん」

2年生の強面2番手投手が打席に入る。強面なのに笑顔を絶やさない選手で、顔がとても印象的であるが、次期4番でエースはこの館さんだと言われているほどの素晴らしい選手である。

キーン！

「アウトー！」

サード東さんが横っ飛びで直接ライナーを掴む。

「去年のボコボコ打たれたときより、しっかり抑えとるんや！晃太！ガンガン投げてけや！」

「ありがとよ」

東さんから武藤さんにボールが渡る。次は今日2三振の6番打者。2球ストレートで簡単に追い込むと、SFFで空振りを奪うが

「そらした！走れ！」

試合中に更にキレが鋭く進化したSFFを、岸谷さんは再びそらしてしまう。すぐにリカバリするが、3塁ランナーはホームへ突入し追加点、2塁にいた兵藤さんは3塁へ、2アウト1，3塁の形となる。

1点差になるが、青道ベンチに焦りはない。武藤さんはなんとか7

番打者を三振に仕留め、青道は1点リードの3―2で7回へと移るこ
ととなった。

武藤さんはベンチに戻ると

「おう、影次、生きてたか。点取ってもらってなかったら危なかったわ
！ありがとな」

「いえ、自分はチャンス潰してしまっていたんで、なんとか打てて良
かったです」

「チャンス潰した量で言えば清国の方が多いんだから気にすんなよ」

なにをー！と東さんは憤慨するが、ベンチの雰囲気は和やかだ。

「じゃあ行ってくるよ」

そう言う武藤さんが、打席に向かうのを見送った。

エピソード

7 回裏 先頭打者の武藤さんが打席に入ると、大阪桐生は前進守備をとる。武藤さんは力を抜いて、手に衝撃がいかないように、球数を投げさせることだけに専念する。無理はせず、5球目のフォークで見逃し三振となった。

1 番打者の神田さんに対しても、大阪桐生は内野のみ前進守備のままでいた。兵藤さんは投げ込んでいくが、4巡目の青道打線。疲れの出してきた兵藤さんのボールに食らいついていく。

8 球目のストレートを流し打ちして、レフト前ヒットとなり、大阪桐生は伝令がマウンドへ向かう。

「2番 玉森くんに代わりまして、結城くん。バッターは結城くん背番号14」

玉森さんに背中を叩かれ、哲さんが打席に向かう。

「哲ー！ いけー！」

「ここでぶっぱなせーっらああー！」

ベンチ、スタンドから哲さんへの声援が飛んでいく。

「走った！」

その声に反応して、兵藤さんはアウトコースに投げるが、神田さんはすぐさま反転し、1塁へと戻る。

「ボール！」

神田さんが塁に出ると、全然状況が変わってくるのがわかる。これまで乱れる様子を見せなかった兵藤さんが、ペースを乱している。

「ボール！」

2球目のフォークが外れ、2ボールとなる。哲さんはピッチャーに集中し、かなり打ちそうな雰囲気を出している。

「走った！」

兵藤さんは構わず、バッターに対してボールを投げる。

「ストライク！」

キャッチャーが送球すらせず、2塁を諦める。1アウト2塁の場面、チャンスとなり、哲さんの集中力は更に増していく。

キーン！

低めのストレートを、綺麗にセンター前へ打ち返す。神田さんは快足を飛ばして3塁を蹴り、更に加速していく。中間守備のシフトを敷いていたセンターが捕球して投げるが、神田さんは内野にボールが届く前にホームを陥落させた。

2点リードとなった場面で、バッターは柳さん。

「走ったー！」

兵藤さんは完全にランナーから意識が外れており、哲さんが2塁への盗塁を成功させる。先程の回の攻撃で、たくさん走って疲れが蓄積しているからか、肩で息をし、大量の汗を拭う。

「ここでもエースでいくんだ？」

そう兄貴に聞くと、

「エースでいくか、館に代わるか悩みどころだが、恐らく兵藤のままだろうな。こういった場面は頼れるエースを選択せざるを得ないだろう」

なるほどと思い、試合の行方を見守る。

柳さんは粘って四球で出塁し、1アウト1，2塁となる。続く東さんは

カキーン！

あまりにも強烈な打撃がレフト前と飛んでいく。レフトが身体をはって止め、すぐさま内野に送球する。1アウト満塁の場面で、バッターは兄貴。初球のストレートを見逃して1ストライク。それを見て、さすがにこの場面では敬遠しないかと安堵する。

兵藤さんは首を2回振り、頷き、投球モーションに入る。ワインドアップした瞬間、甲子園がざわつく。恐らく1番自信のある球であるボールを、兄貴に対して投げる。

兵藤さんが投じたボールを、金色の軌跡が拐っていくと、綺麗な金

属音が響き渡り、ボールはどこにいったか探すが見当たらない。ボールが落ちたであろう外野席の方から、さざ波のように、ゆつくりとこちらへ広がっていくように感じた歓声が球場を埋めつくし、兄貴がゆつくりとダイヤモンドを一周するのを見て、ようやくホームランを打ったことに気がつく。

あまりにも自然なフォーム、流れからのホームランに、ベンチのみんなも感嘆の声を漏らしたり、目を見開いたりしていた。バットが身体に一体化したような、あれこそ全く無駄のない理想的なスイングだと直感するものはとても美しく、それはまさに至高の一打と言っているもので、目に焼き付いて離れなかった。

「ナイスバツティング！」

そう兄貴に声をかけると、

「ありがとう、お前も自分のスイングを見つけろよ。俺もまだまだではあるけどな」

と兄貴は返して、他の3年生のところへハイタッチしに行った。自分のスイングか……今までは、兄貴のスイングがいいと思って、それに近づけるようにと思っていたけど、あの違和感、ズレた感じがしていたのはそういうことなのだろうか？自分の身体にとつての理想のスイングはあれではない……そういうことを言いたいのかな？と思わされた。

兵藤さんは、兄貴と勝負して満足したのか、交代を受け入れると、少し涙目になっている館さんに笑顔で

「すまないな、後は頼んだぞ」

そう言つてマウンドを降り、ライトの守備についた。館さんは奮起して、道川さんをショートゴロ、栃谷さんをファーストフライに抑えた。

8―2と6点リードになったが、大阪桐生の打線も侮れない。

代打で出た哲さんは城之内さんに交代して、そのままライトの守備に入る。

8回表、武藤さんは、SFFを封印した状態で、ストレート、カーブ、スローカーブを軸に、スライダー、ツーシームを混ぜた配球に変

更するが、先頭の8番打者は、点差が広がったのも関係なく、ボールをじつくりと見て、粘っていく。

投球の軸であったSFFが使えないため、打者はかなり食らいいついてくる。

「ストライク！バッターアウト！」

なんとか7球目のストレートで見逃し三振を奪うが、武藤さんもこの炎天下のなか、打線のプレッシャーを受け続けている。汗を拭い、ロージンを頻繁に手をつける。

キーン！

前の回に続き、甘く入ったストレートを狙い打たれ、バッターランナーは2塁に到達する。打者は武藤さんのボールに慣れてきた1番打者。片岡監督は伝令を出す。

「1点でも入れば、ピッチャーを代える。井手！準備してくれ」

「井手さんはこの回が始まると、ブルペンに行きました！」

「・・・そうか・・・」

若干恥ずかしそうに、片岡監督は帽子を深めにかぶって、戦況を見つめている。

14:00頃から始まったため、徐々に気温は下がってはきているものの、いまだ太陽は照りつけ、ピッチャーの体力を奪っていく。

「武藤さん！エース！頼みます！」

各々が思い思いの言葉をかける。武藤さんは笑って、1度伸びびをして笑う。

「琉斗、捕ってくれるだろ？」

「死ぬ気で止めてやるよ」

「じゃ、SFF投げるんで！頼むぜ、相棒」

お互いのグローブをぶつけ合い、マウンドとホームに別れる。初球

パアン！

「ストライク！」

SFFをしっかりと岸谷さんはミットで捕球する。武藤さんの決め球には流石に目が追いつかないか、さすがの大阪桐生が誇る1番打者も、1度打席を外して間をとる。次のスローカーブに体勢を崩され、2ストライクとなる。

3, 4球目と粘り、アウトコースの高めに外れるストレートを、しっかりと見逃す。あのバッターは速球に強いのか？と思っていると、岸谷さんもそう感じていたのか、次はゾーンにカーブを要求する。

ギーン！

完全に崩されても、片腕一本を残し、なんとかファールにしてくる。6球目のSFFをバッターは空振りするが、再びワンバウンドする。岸谷さんはしっかりと正面で止め、2塁ランナーを牽制し、動きを止めた。これで2アウト2塁。

SFFを岸谷さんが止めたことで、武藤さんの表情が若干明るくなる。

ドゴオン！

力を振り絞って投げられたストレートが、岸谷さんのミットを揺らす。三球三振に仕留め、8回表を切り抜ける。

8回裏のマウンドには館さんがそのままあがり、重い球質を活かした投球で岸谷さんをショートゴロに抑える。片岡監督はそのまま、武藤さんを打席に送る。1度も振ることなく、三振に終わり、2アウト、神田さんの打順となる。

兵藤さんとは違い、力で押してくる投球とは相性が悪く、バットに当てることはできたものの、打球が上がらず、セカンドゴロとなった。

武藤さんはそのまま、9回表もマウンドにあがる。

「ノーアウト！最終回も1つずつしっかりとこう！」

もう同じチームで聞くことができないかもしれない、そんなかけ声

をしつかりと受け止める。

「1アウト！ナイピッチ！ボールまだまだキレてるよ！ガンガンいこー！」

その瞬間が徐々に近づいてくる。

自分の持てる限りの力を相手にぶつける。それを体現した俺達のエース 武藤さんが、大阪桐生の4番 兵藤さんを圧倒していく。

「ストライク！バッターアウト！」

2アウトになり、打席には泣き笑いをして、顔をぐしやぐしやにした館さんが立つ。

1つ、ストレートの下をバットが掠めファール。

2つ、S F Fがバットを搔い潜りミットを揺らす。

3つ、スローカーブがストライクゾーンから外れ、2ストライク1ボールとなる。

その瞬間を今か今かとベンチで眺め、球場全体がその瞬間を待ち受ける。

ドゴオン！

「バッターアウト！ゲーム！」

甲子園球場が揺れ、あらゆるものに押し潰されるような感覚を無視し、マウンドへ向かって走り出す。自分が何をしゃべっているかわからないし、何を話しかけられているのかも分からないが、とても高揚し、チームの一体感に溢れていた。

そのなかで確かに覚えているのは、泣きながら感謝する岸谷さんの背中を叩きながら、武藤さんが

「やっ！これで俺もエースになれたよな」

とボソツと呟いた言葉であった。一瞬、何のことか聞こうと思ったが、歓喜に溢れた場では無粋だと思い、この話題は避けることにした。

……

武藤さんは、決勝を9回2失点の完投勝利で胴上げ投手となり、青道は甲子園大会の春夏連覇を達成し、怪物世代は歴史に名を刻んだ。

閉会式が終わり、バスに揺られて寄宿舎へ帰って来た。とても濃厚な時間を過ごしたため、脱力感に襲われる。身体はまだまだ元気であるが、どうも何かやるうという気は起こらない。

まずは風呂に入って汗を流し、脇腹に当てていた氷嚢のタオルを、清潔なものに変えて、大人しく部屋の畳の上で横になる。

「あつ、精密検査どうしよ」

これから祝勝会という時に、自分だけ病院というのもいただけない。怪我を隠してもいいことはない、そういうことは兄貴に酸っぱく言われているし、兄貴が2年生の秋を、それで棒を振ったのは知っている。

片岡監督に申し出ると、急を要しないため、明日病院に行くこととなった。やることが1つできると、他にもないかなと考えてしまうのは自分の性分。自分だけのバッティングスタイル、スイングを探求していくこと。

兄貴もまだまだということはかなり真髓は深いのだろう。とりあえずなんとかなるかと、祝勝会まで、時間を潰すことにした。

「哲さん、将棋しましょう！」

「受けて立つ」

閑話 3年生能力

- S 球界屈指レベル
 - A タイトル争いするレベル
 - B リーグ上位
 - C プロ1軍主軸レベル
 - D プロ2軍主軸レベル（高校トップレベル）
 - E 甲子園常連校主軸レベル
 - F 強豪校主軸レベル
 - G 中堅校主軸レベル
- パウプロのステータスだと、これくらいだと思っています。

原作例

- 轟 雷市 2年夏
- ミート：C
- パワー：B
- 走力：B
- 肩力：C
- 守備：F
- 捕球：G

轟はこれでもチートですね。

ステータスに関してはペナントレースで、高卒として現れたら、そういうイメージでつけています。これならもつと高い、低いなど、あると思いますがご容赦ください。

投手の変化球に対しては、プロに通用しないであろうものは、原作ゲームに従って省略しています。

ある球団のスカウトメモを添えておきます。

……

武藤 右投げ右打ち（オーバースロー）

最速 153 km/h

コントロール：D
スタミナ：C
ツーシーム
スライダー：2
SFF：4
ノビB、キレB、対ピンチB
闘志、根性、尻上がり

甲子園春夏連覇を果たした、世代有数のピッチャー。気迫溢れる投球で、チームを勝利に導く姿はお見事。高校2年生の秋の大会から頭角を現した。競合必至のドラフト1位候補だ。

……

井手 左投げ左打ち（スリークォーター）

最速142km/h

コントロール：C

スタミナ：E

スライダー：3

チェンジアップ：2

テンポ○、低め○、クロスファイヤー、緩急○

緩急で相手を翻弄する技巧派ピッチャー。ドラフト志望届けを出せば、下位指名ありえるが、本人は大学進学を希望している。今大会でも活躍した屈指の左腕だけに、将来のリリーフ、ストッパーとして、目を付けている球団は複数ありそうだ。

……

岸谷 右投げ右打ち（キャッチャー）

ミート：F

パワー：F
走力：G
肩力：E
守備：E
捕球：E
意外性、キャッチャーD

決勝でエースの決め球をそらしていたが、高校レベルを逸脱したボールであったため、仕方ないであろうとは思う。リードに関しては改善の余地があるが、高卒捕手としては良い方であろう。しかし、積極的に指名する気にはなれない。

……

藤谷 右投げ右打ち（キャッチャー）

ミート：G
パワー：E
走力：F
肩力：E
守備：F
捕球：D
キャッチャーE、ブロック○

キャッチングが上手く、ブロックにも秀でたものを感じる。打撃には期待できないが、成長すればパンチ力のある打者になれるか？リードは平凡であり、ドラフトとなると厳しいかもしれない。

……

道川 右投げ右打ち（ファースト、サード）

ミート：E

パワー：E
走力：F
肩力：F
守備：E
捕球：E
代打○、いぶし銀、対エース○

将来性を感じさせるバッター。特に代打で出てきたときの集中力に目を見張るものがある。高卒野手として穴はなく、使い勝手は良さそう。即プロは難しいものがあるかもしれないが、大学、社会人と経験を積んだら道は拓けるかもしれない。

……

神田 右投げ左打ち（セカンド、外野手）

ミート：D
パワー：F
走力：A
肩力：E
守備：D
捕球：E
かく乱、盗塁A、走塁A

正直、走ることにかけては、即プロで通用するほど。打力の向上があれば、将来のリードオフマンを任せたい、そう思わせる逸材。下位指名できれば理想だが、上位指名もありえる。

……

東 右投げ右打ち（サード）

ミート：C

パワー：A
走力：E
肩力：C
守備：C
捕球：E
パワーヒッター、広角砲、メツタ打ち
チャンスB、威圧感

ドラフトの目玉の1人。プロでも上位に食い込むのではないかと
いう打力を兼ね備え、すぐに打線の中核を担えるであろう怪物打者。
将来は日本の4番に。高校通算82本塁打。

……

西 晴之 右投げ左打ち（ショート、セカンド）
ミート：A
パワー：B
走力：C
肩力：B
守備：S
捕球：S
精神的支柱、安打製造機、パワーヒッター
逆境○、広角打法、守備職人
いぶし銀、送球A、威圧感

豊作とされる高校生の中でも群を抜いた逸材。全てにおいて文句
なく、プロでもすぐにやっていけるだろう。今年はこの男を取り合う
ドラフト。高校通算64本塁打。

……

栃谷 右投げ右打ち（ファースト、外野手）

ミート：D

パワー：C

走力：F

肩力：E

守備：D

捕球：D

勝負師、パワーヒッター

チャンスに滅法強い、素材として一級品の打者。例年であれば、高校生の目玉に挙がる選手だが、豊作過ぎて下位指名でもとれる可能性がある。高校通算44本塁打。

……

柳

ミート：B

パワー：D

走力：C

肩力：C

守備：B

捕球：C

安打製造機、チャンスメーカー、盗塁B

走塁B、粘り打ち、カット打法、威圧感

ドラフトの目玉の1人。将来性のあるヒットメーカー。高校では金属バットであることから本塁打を量産していたが、それは技術によるものが大きい。木製に順応すると、ホームランは減るだろうが、将来的に首位打者のタイトル争いをするようになるだろう。高校通算67本塁打。

…

玉森

ミート：E

パワー：E

走力：E

肩力：E

守備：E

捕球：E

チャンスメーカー、粘り打ち、盗塁C、走塁C
意外性、逆境○、バント○

青道打線の中で地味ではあるが、何でもできる男。下位指名で獲得して、球団戦力の底上げを狙いたい。

…

城之内

ミート：E

パワー：F

走力：F

肩力：E

守備：F

捕球：F

チャンスC、初球○

出場した試合で結果を出すのは良い。しかし、地力的にプロとしてどうかと言われると、現状は厳しいかもしれない。

閑話 休日

夏の甲子園大会で優勝し、青道高校に凱旋した青道ナインは、2日間の休みを満喫していた。国体を目指すことになる兄貴は、部屋移動をすることとなるので、その荷造りを手伝い、今終えたところである。

荷造りが早く終わり、今日は休養2日目のため、練習はない。朝食を食べたあと、久々に兄弟2人で外に出かけることにした。青心寮を出て、徒歩で散策していく。とりあえず都心部へ行ってみようかということで、電車を利用しようと、駅までは徒歩で向かうこととなった。「兄ちゃんと出かけるのは久々だなあ」

と言うと、確かになと兄貴は頷く。自分で選んだ道ではあるのだが、小学生では同じ城南リトルを選び、ずっと兄貴にベツタリはまずいと思った。そこであえて中学生では松方シニアに移籍して、1年生からずっと4番を打つことになった。

中学1年生のときはまだ兄貴は自宅にいたのだが、中学2年生になると、兄貴は高校生。青道に入学し、青心寮に入寮したため、ほぼ完全に交流がなくなり、お盆休みや正月に家族団欒するくらいであった。

久々に兄貴と2人きりでのお出かけに、少しテンションが上がる。まだ2日しか経っていないのに、甲子園球場のグラウンドで感じたような、刺すような日光ではなく、暑くはあるのだが、どこか優しさを感じるものであった。

木陰をできるだけ通るようにしながら、舗装されている道を歩いていく。時々寮の外に出て冷やかに入る本屋や、文房具屋を通りすぎで、ゆっくりとした足取りで明るい道を進む。

駅に着くと、他の人がピッ！ピッ！と鳴らすICカードを見て兄貴が

「あれは何だ？」

と聞くのがおかしくて笑ってしまふ。野球のことに関しては知らないことはない、そんな兄貴とのギャップが激しく感じられる。

「ICカードだよ。野球部で移動するのは基本バスだし、中学も近く

で縁がなかったけど、結構便利らしいよ」

と言うと、そんなものかと兄貴は納得する。あまり興味はないようだ。そういえば甲子園に行く際にも、駅で同じ事を聞かれた気がする。

兄貴が切符を買おうとして、振り返って戻ってくる。

「どうしたの?」

「都心部に行くと言ったな?」

「そうだけど」

「都心部って今いるところじゃないか?」

「……あつ……」

……

とりあえず、少し遠い場所に行くことにし、切符を買って電車に乗る。揺れに身を任せながら、向かい側の窓を通して、移り行く景色をボーツと見る。

上野駅に着き、しばらく歩くと動物園があったが、人が多すぎて、なかなか入れそうになかった。

「パンダはおあずけか」

そう寂しそうに兄貴が言うが、この炎天下でじっと待つのはしんどい。また今度ということ諦めた。そのままとんぼ返りするのもあれなので、近くにある公園で過ごす。

時期は過ぎ、気温が高くなっていたので、花は咲いていなかったが、広大な池を多い尽くす蓮に圧倒され言葉が出なかった。蕾からチラチラと見えるピンク色がアクセントとなり、非常に綺麗なものであった。花が咲いていたらどれほど素晴らしいものであっただろうか、そう思い、次に来るときは早朝にすることを決めた。

最後に弁天堂に行ってみたが、弁財天は音楽や芸能の守り神だ。果たして野球に効果はあるのか分からないが拜んでおく。それでも兄貴は満足したようだ

「野球関連以外で一緒に出かけるのは久々だったからな。観光だけで

も楽しかったよ」

そう言つて、嬉しそうにしていた。

道中、兄貴が木刀に興味を示したくらいで、正午前に青心寮に戻ると、哲さんが1人で素振りをしていた。これを見ると、帰つてきた実感が湧いてくる。

「てか、哲さん、何で今日学校に来てるんですか？」
そう聞くと

「今日から練習だと思つて来たら誰もいなくてな……とりあえず走つていたんだ。8時頃に起きてきた先輩達に休みだと知らされたが、アップも終わつていて引つ込みが付かなくてな……」

哲さんは恥ずかしそうに頬をかく。

「昼食食べたらせつかくなんので練習しますか？確か、明日から練習だから午後は身体を動かすつて言つてた人もいましたし」

そう話していると早めに昼食を食べ終わった、2年生の先輩達がやってくる。

「おう！哲！寂しそうにしてたから来てやつたぜ！」

そう純さんが言うと、思い思いに各人が哲さんに声をかけていく。

これからはこの人たちを中心とした青道が始動する。そう思うと自分の中のワクワク感が抑えられない。

束の間の一般的な高校生の休日を過ごしたが、やっぱり自分には野球というものに一番興味を引かれるし、気がたかぶってくる。

「兄ちゃん、あとで俺のスイング見てよ」

自分達で勝ち取つた時間を大切に、最大限に活用しながら、新チームの躍動する姿を頭のなかに思い浮かべるのであった。

群雄割拠の訪れ プロローグ

9月、夏の暑さはそのままでありながら、聞こえてくる虫の鳴き声だけは、季節の変化を感じさせる秋への入り口。グツと伸びをして椅子から立ち上がり、コップに残っていたコーヒーを飲み干す。

早朝であるからか、比較的冷たい水でコップを洗って、身支度を整えると

「いつてきます」

と小さな声で呟く。娘を起こさないように、そういうパパの配慮は大事である。

青道グラウンドにつくと、結城と影次が既に素振りをしていた。

「おはようさん」

「おはようございますー！」

元気な声が返ってきて、実に高校球児という感じがする。朝練の始まる6時まで暇を潰し、ちょうど10分くらい前にグラウンドへたどり着く。

国体があるとはいえ、3年生と1、2年生はグラウンドを分けて練習する。新チームを意識させるためではあるが、午後からは合同練習にして、3年生からアドバイスを積極的にしてもらおうようにはお願いしている。

新チームの構想ではあるが、打順で説明した方がわかりやすいであろうか。

思いきりの良いバッティング。高い身体能力からの守備。天性の走塁センスを持ったリードオフマン。1番 ショート 倉持 洋一。

甲子園を経て以前より成長が見られる。パワー不足を補う技術と選球眼を持ち合わせる。守備に関しても期待ができる。2番 セカ

ンド 小湊 亮介。

新チームの主将。守備にまだ粗があるものの、打撃に関しては自己研鑽の賜物か、前チームでも状況によっては上位打線を任されるほどであった。主将という立場の重みがどう影響するかわからない中距離バッター。3番 ファースト 結城 哲也。

怪物の弟も怪物か。甲子園の決勝で何か掴んだのか、更に化けた新チームの主砲。既に全国区の強打者である。4番 センター 西 影次。

肩の怪我から復帰したものの、いきなり公式戦で捕手を任せるには、3ヶ月のブランクは長い。そのため、打撃への貢献を重視し、一時的なコンバートをした。他の者の成長によつては外野固定もありえる。5番 レフト 滝川・クリス・優。

チーム1のパワーの持ち主。確実性がついてくればいいのだが。身体を張った守備をするが、どことなく不安定である。6番 サード 増子 透。

チャンスはものにするクラッチヒッター。長打力も兼ね備える。しかし得点圏以外の打撃ではイマイチ集中しきれない。守備に関しては問題は少ないだろう。7番 キャッチャー 御幸 一也。

野手ではこの7人がスタメンとして妥当であろうか。全体的に、昨年秋よりもかなりスケールダウンしてしまうのは、致し方ないこと。しかし、クリーンナップとそれ以外との差が激しいのが気になるところ。

投手陣はエース伊佐敷を筆頭に丹波、楨原、真木、川上と豊富であり、今年も期待できそうである。打撃の良い伊佐敷、真木を外野手として使う案があるため、8人目となるライトは固定しない可能性は高い。

秋の大会への選手登録は済ませており、以下の通りとなっている。

- 1 伊佐敷 2年生
- 2 御幸 1年生

3	結城	2年生
4	小湊	2年生
5	増子	2年生
6	倉持	1年生
7	滝川	2年生
8	西	1年生
9	門田	2年生

10	真木	1年生	ピッチャー
11	丹波	2年生	ピッチャー
12	榎原	2年生	ピッチャー
13	川上	1年生	ピッチャー
14	宮内	2年生	キャッチャー
15	樋笠	1年生	サード
16	楠木	2年生	ショート
17	田中	2年生	ファースト
18	遠藤	2年生	セカンド
19	坂井	2年生	外野手
20	白州	1年生	外野手

クリーンナップ以外はどんどん選手を試すため、背番号はほとんど関係ない。というより、打撃に関してはほぼ横ばいで、これからの成長に期待せねばならない面が大きいのだ。

片岡監督の言うように、試合を経るごとに成長する。そのようなチームでありたいものだと思う。今の守備練習を見ても、西弟が別格で、それに次いで滝川、あとは小湊、倉持、御幸に光るものはあるが他は心もとない。打撃では西弟、結城、クリスはいいが、他はまた横ばい。パワーがあるぶん増子が目立ち、チャンスで打てるから御幸も良さそうに見える。そういうところである。

怪物世代で肥えてしまった目をこの世代に合わせて、しっかりと育成せねばならない。明らかに大きな差を見て、青道の暗黒期と呼ばれ

ぬよう、精進せねばならないと気を引き締める。

不作と言われた2年生、元から粒揃いの1年生を上手く調和させ、1つの良い方向へと向かわせる。すぐに団結した3年生と比べると、2年生はみんなで這い上がってきた、そんなまとまりがあるのだが、1年生は我が強く、やりたいことをやるという毛色が強い。

昨年の比ではない重労働、心労の予感に顎をさする手が加速していくのであった。

片岡さん、ノックに凄く気合が入っているナウ。

暗雲

青道は夏の甲子園大会の覇者である。しかし、覇者であるがゆえに、新チームの始動が全国で1番遅れていた。新しい1軍メンバーで行った試合は部内試合の2回のみで、どこまでも勝ちきってしまった夏の影響がここに出ていた。

甲子園大会が終わってから、わずか10日後に、新チームの公式戦が行われるのが早すぎるだけかもしれないが、青道は、怪物世代が抜けてからの対外試合初戦を、公式戦にせざるをえなかった。

秋季東京都大会1次予選、初戦の相手はいつも3、4回戦敗退の中堅校。

なかなか難しい戦いになりそうである。その試合を前日に控えた夕方、俺は監督室に呼ばれていた。こんな時期に呼び出しとは何かやったかな?と自身を振り返るが、特に思い当たることはない。

向かう途中で真木と鉢合わせて、一緒に向かっていく。
「いったい何の用事なんだろうな?」

「さあ?影次も呼ばれてるから、投手関連とかではなさそうだけどね」
監督室のドアをノックして許可をもらったので入室する。中には片岡監督、落合コーチ、太田部長、高島副部長が勢揃いしていた。

何を言われるのかソワソワしていると、片岡監督が

「ご苦労。明日の試合だが、これから引っ張っていく2年生の行動を見ておきたい。チームの雰囲気が悪いと思っても、3回が終わるまでは自発的な行動はしないように頼む」

いきなり言われて唾然とする。

「えっと、何かあっても2年生がチームを立て直すのを待て、そういうことですか?」

と真木が聞くと、そうだと言わんばかりに片岡監督、落合コーチが大きく頷く。太田部長はわたわたした様子を隠せていないが、高島副部長は面白いものが見れるとばかりに、うっすらと笑みを浮かべている。

「プレーは本気でやっていいのでしたら、大丈夫です」

真木の方を見るが、異論は無さそうだ。

「歯痒いかもしれないが、2年生が自力でどうにかするのを見守ってほしい。後輩となるお前らに言うのは違うと思うが、踏んできた場数が違う。頼んだ」

……

昨日のことを思い返しながら、整列して挨拶をしたが、うちのチームはどこか地に足ついていないような気がする。

片岡監督、落合コーチ両名は気づいているようだが、昨日言っていたように、あえて様子を見るようにしているのか、動きはみられなかった。大丈夫そうなのは純さん、クリスさん、亮さん、真木くらいであろうか。御幸は集中できてないな。

懸念があるなか、後攻の俺達は各々守備位置につく。

「プレイボール！」

そのまま試合が始まる。じつくりと球を見てこようとする先頭打者の石井に対して、純さんは簡単に2球で追い込むと、ボールゾーンへ逃げるフォークで空振りをとる、三球三振に仕留める。

これで勢いに乗ってくれればと思うが、まだ全体の動きは硬い。

ガキィ！

どん詰まりのゴロが3塁方向へと転がっていく。増子さんはしっかりと捕球するが、ステップが1つ多い。1塁へ投げると

「高いっー！」

哲さんは懸命にジャンプして腕を伸ばすが届かない。バッターランナーは1塁を駆け抜けた後、方向転換して2塁へ進塁しようとする。

パアン！

「セーフ！」

増子さんが投げる前から、1塁後方へカバーに走っていた真木がなんとか2塁に投げるが、1アウト2塁のピンチとなる。

「1アウト……ここはしっかりやっていくぞ」

哲さんが内野陣に声をかけるが、哲さん自身が緊張した状態であり、かえって増子さん、倉持に緊張が移る。亮さんは大丈夫そうだが、今まで自分より頼れる3年生と野球をしてきたのだ。こういうときの声のかけ方、タイミングがわからず、不安そうな顔をしている。

「また飛んでくからよ、頼むぜ！」

いつもの対戦形式のバッティング練習と変わらない様子で、純さんは笑顔ではあるが、力強く、内野陣に呼び掛ける。それに呼応して

「さあ……い……」

小柄ながら精一杯大きい声を亮さんが出し、それに続くように全員が声を出していく。3番打者の橋本は3球目、アウトコースのストリートを弾き返して、二遊間にライナー性の当たりが飛んでいく。

「あああああ……」

雄叫びをあげながら亮さんは、2塁方向へ横つ飛びしてボールを掴むと、2塁へグラブトスをする。しかし、倉持の反応が遅れており、ランナーの帰塁の方が速く、2塁はアウトにできなかった。

「あのセカンドうめえぞ！」

「あいつ甲子園で活躍してた小湊じゃん！なるほどなあ」

「おい、ショート西ならゲッツー取れてただろ今！」

亮さんは顔を若干赤くしながら

「2アウト……ここからどんどんいくよ！」

と声を少し裏返ししながら、チームを鼓舞する。ここで迎えるは相手の4番 高橋。打てる捕手として名をあげている、西東京の有力選手である。

キーン！

高橋は3球目、インコースのストレートを引っ張って、レフト方向に弾き返す。

「回れ回れ！」

「クリスさん！ボール4つ！」

クリスさんは捕球すると、ホームへ送球するが、ボールに指が少し引っ掛かったのか、1塁方向へとそれる。

「セーフ！」

「2つ！おい！御幸！ポケットとすんな！」

御幸がランナーにタッチをして、審判の判定を気にしている隙に、バッターランナーが2塁を陥れる。再び2アウト2塁の場面、打者は5番 佐々木。

「うぎぎぎぎぎ！」

御幸がマウンドに呼ばれて、純さんに頭をグリグリされている。あれは痛い。だがそれで目が覚めたのか、気の抜けたような状態からは脱したようだ。増子さんも1点とられて、気を引き締め直したみたいだ。

キーン！

シヨート正面に強烈なゴロが放たれ、ランナーと交錯する。

「抜けたー！」

倉持がゴロをトンネルし、ボールが外野で跳ねる。

「何してんだ！くそやろうが！」

思わず口汚くなるが、回り込んで捕球態勢をとる。

「ボール4つ！」

クリスさんの声を聞いて、全力でバックホームする。倉持の頭上の空間を切り裂き、白球は一直線にミットに収まった。

「アウト！」

相手のキーマンである主砲 高橋が、ホームを踏むのを阻止できなかったのは大きい。

罰の悪そうな顔をした倉持の頭をグローブで叩き、無言でベンチへ

と戻る。

「やったエラーに取り消しはきかない。だが、それを反省し、集中してこれからに活かせ、2度としないよう肝に銘じておけ。1点先制されたがここから巻き返すぞ！」

「おお！」

片岡監督の言葉で若干雰囲気を持ち直すのが、2年生からのアクションは特にならない。哲さんは何か言おうとしているが、上手く全体にかける言葉が見つからない様子。純さんは御幸と次の回どうするか相談するので忙しい。

亮さんはネクストサークルにいて、打撃のことで頭がいっぱい。クリスさんは何も言わず、時折片岡監督を見ているから、俺や真木と同じように見守るようにと言われている可能性がある。他のメンバーは初めての1軍での試合ということで、ガチガチになっていたり、変にハイテンションになっていたりと様々であった。

初回に先制を許した裏の攻撃、先頭打者の倉持は先程のエラーを取りかえそうと、張り切っているように見える。相手エースが右投げのため、左打席に入る。積極的にバットを思いきり良く振っていくが、初球、ボールゾーンへと逃げる変化球に、簡単に手を出してファーストゴロで1アウト。

片岡監督の額に青筋が浮かぶ。

亮さんは相手に球数を投げさせ、8球目のストレートを見逃し四球で出塁する。ネクストサークルに移動して、哲さんの打席を見守る。

「うてええ！てつううう！」

「いけるぞキャプテンー！」

声援を受け、更に哲さんの手に力が籠るのがわかる。

ガキイ！

普段なら長打を打っているであろう、甘いストレートを打ち損じ、6―4―3のダブルプレーとなった。チラッとベンチを見ると、片岡

監督の苛立ちが増している。さっきまでは我慢していたのが、少しオーラのようなものが漏れ出しているのに戦慄する。

あの人は自分で言った、3回までは我慢するというのを守れるのだろうか？そう疑問に思いながらセンターの守備につく。

ここまで純さんがまともに打たれたのは、3番のセカンドライナーと4番のレフト前ヒット1本のみ。しかもそれは、御幸の気が抜けた雑なリードであったから。ストレート3連続で3番を押しきろうとするなんて、純さんの球質でやるもんじゃないよな。真木ならわかるが。

2回表は6番打者をセカンドゴロ、7番打者を空振り三振に仕留め、テンポが良くなり始めると、8番打者の3塁線のゴロを増子さんがしつかりと処理し、三者凡退でしのいだ。

2回裏、1点差で負けている状況、エースがテンポ良く相手打線を抑え始め、チームにリズムが生まれてきた。ここで4番としてできること、それは

キーン！

打球方向を確認し、スタンディングで2塁に到達する。声をかけることが制限されているのであれば、打線の繋がりの切っ掛けを作り出す。それが今の俺ができる2年生へのエール。右手を突き上げ

「しゃああああー！」

2塁上で雄叫びをあげる。打の青道として、攻撃による圧迫感を相手に与えていく。次の打者は試合に飢えていた強打者。

カキーン！

クリスさんのバットから炸裂した火の出るような打球が、レフトスタンドに突き刺さる。4番、5番のパワフルな攻撃に、グラウンド全体のボルテージが上がり、簡単に逆転した青道新チームへの期待が高

まる。

しかし、続く増子さんは変化球に対応できず三振し、真木はいい当たりであったもののレフトフライ、御幸は簡単に凡打に倒れ、相手エース攻略を期待していた観客は、肩透かしをくらう。

夏までは、中堅校にすら2回で10点差を平気でつけていた怪物世代との落差に、厳しい顔をするOBが出始めていた。

本当の力

3回表、純さんは更にテンポ良く投げていく。先頭打者の中村をショートゴロに抑え、二巡目を迎える。純さん、御幸バッテリーはストレートの、フォークを軸にしていた配球を、ストレートの、スライダーを軸にしたものへと変更する。

1番 石井をインコースに突き刺さってくるようなスライダーで、空振り三振にきつてとると、2番 山本を最後はインコースのストレートで、セカンドゴロに抑える。

エースの好投は流れを引き寄せる。3回裏、先頭打者の純さんはアウトコースのボール球を無理矢理外野へ運び、シングルヒットで出塁する。倉持はバントをしてランナーを2塁に置くと、バッターは2番の亮さん。

「亮介ー…ここで追加点頼むぞー！」

「うおおおお！小湊ー！」

応援の圧が強くなる。初球のストレートをじっくり見て1ストライク。

キーン！

2球目のアウトコースのスライダーを弾き返し、センター前へとボールが飛んでいく。

「ストップ！ストップ！」

外野が前進守備をしていたため、ホームへ帰ることはできなかったが、1アウト1，3塁。追加点が期待できる絶好のチャンスに、バッターは哲さん。

「哲ー！いけるぞー！」

「哲さんー！」

数多くの声援が哲さんに届けられる。しかし、

ガキイ！

セカンドへのゴロとなり、4―6―3のダブルプレーでチャンスを潰してしまう。

「くっー！」

「さあ！守備からリズム作っていいこー！」

これで3回は終わり。自分から声を出して、積極的にチームを盛り上げていく。

哲さんはいきなりの声に、ビックリしたような顔をするが、後輩にばかり頼ってはいけなと思ったのか、

「すまん。しっかり足を動かす！いつも通り！1つ1つやっさいこう！」

「おおー！」

ただたどしくはあるが、言いたいことは伝わってきた。3回までで2―1と、夏までの青道では都大会であまり見られなかった点数。しかし、哲さんの緊張状態が少しとけて、チームとしてはまとまりが出始めてくる。

まだチームとして慣れていないため、ぎこちないのは確かだ。それでも、各々がしっかりと声を出し始め、ケースや連携を確認し、エースの純さんを押し上げていく空気が生まれてくる。バッターは3番橋本。前の打席で亮さんに阻まれたものの、しっかりと純さんのストレートを捉えていた好打者。

初球のストレートを見逃しーストライク。前の打席とは違い、更に気合いの入った純さんのボールに驚いたか、橋本は一度屈伸してからバットを構え直す。

ギーン！

「ファールー！」

ストレートを2球続け、弾き返された鋭いゴロが3塁線をきれる。そして、

パアン！

「バッターアウト！」

この試合初めてのチェンジアップに、態勢を完全に崩され、橋本は右膝を地面についた。あまりの球速差、キレに愕然とした表情をしている。このチェンジアップこそ純さんの投球の要。

4番の高橋はチェンジアップを意識したためか慎重になり、スライダーになんとか合わせるがショートゴロ。5番の佐々木は初球のストレートを打ち上げ、セカンドフライでこの回三者凡退で相手クリーンナップを沈黙させる。

やっぱりあのチェンジアップはすごいなと思わされる。1つ見せただけでこの反応。落合コーチの教え方が上手なのか、前エース 武藤さんのスローカーブ、井手さんのチェンジアップも落合コーチ直伝というのだから、コーチの指導力をとても頼もしく思う。真木も今後緩急を使えるようになっていけばいいのだがな。

4回裏、チームとして機能し始めた今、ここで相手エースを崩しておきたいところ。右打席に入り、バットをゆったりと構えて、相手エースを観察する。

バアン！

「ストライク！」

初球、アウトコースのストレートを微動打にせずに見逃す。相手エースを睨み、威圧し、追い込んでいく。

キーン！

違う、違う、これも違う。首をふった末に投げられるストレート、カーブを全て、ボール球であつても軽々とカットしていく。

逃がさない

もう投げるボールはあれしかないだろう？早く投げろよ。そうそう、これだっ！

カキイン！

相手エースが、本能的に投げるのを嫌がっていた決め球 スライダーを、バックスクリーンに叩きつける。ゆつくりとダイヤモンドを一周し、ホームベースを踏む。

「狙ったな？」

クリスさんに言われたので

「もちろんです」

と笑顔で答える。

パンッ！

軽くハイタッチをしてベンチに戻る。

「ナイバッチ！」

「よくやった！」

と言われるがそれはただの受け身の反応。実に好ましくない。

「後が続かないと意味のない一発ですよ」

そう言って増子さん、倉持を見る。あんたらはあの人たちの背番号を受け継いで、この場に立っているんだ。中途半端なプレーは許さない。特に倉持。

「ボール！フォアボール！」

クリスさんが四球で出塁し、ノーアウトで追加点を取るチャンスがやってくる。相手エースは完全にペースを乱した状態で、バッターは増子さん。この攻撃で相手エースを攻略するか、復活させてしまうかが決まる、そんな大事な局面。増子さんのまなざしは、第一打席の浮かれたようなものとは違い、しっかりと投手を捉えている。

この程度の投手を、チーム全体で攻略することができなければ、市大三高の真中さん、天久、国士館の財前さん、西邦の明石、稲城実業

の成宮を打ち崩すなど夢のまた夢である。

自チームの打線を見定める。

増子さんは、初球のカーブを見送り1ストライク。先程のように、ブンブンと振りにいかず、じつくりとボールを見ていくようだ。続く低めに外れるカーブに手が出そうになるが、頑張つて我慢して1—1の平行カウントに。

「増子さん！ボール見えていますよー！」

全員で大きく声をかけていく。

ウガア！と返事をする増子さんを見て、固さがなくなつたなど思つてみると、

キーン！

インコースのストレートを、増子さんは上手く左中間に弾き返した。

「回れ回れ！」

1塁ランナーのクリスさんは迷いなく3塁を蹴り、ホームベースを左足で踏む。意外と足の速い増子さんは3塁を陥れガッツポーズをする。

「うが!!」

増子ガッツポーズ!

「M!G!P!」

それに対して、元々2軍にいた選手達もガッツポーズして返す。初めて見るからよくわからないが、お決まりのポーズなのかと納得する。あのクリスさんもガッツポーズを返しているから、まあ、そうなんだろうな。次からは返せるようにしておこう。

ノーアウト3塁、続く打者は真木。しっかりとボール球を見極め四球で出塁し、ノーアウト1, 3塁で御幸の打席となる。その初球、

キイイーン!

ストライクを欲しがって投げた甘いストレートを、力の限り引つ

張って走者一掃となる、ライトライン際へのタイムリーツーベースヒットとなった。

これで6―1の5点差となる。ここで相手はエースを諦め、2番手をマウンドに送るが、次の打者は絶好調の純さん。

ギイン！

「抜けるぞーらあああー！」

ポトリとセカンド後方に打球が落ち、タイムリーヒットとなる。追加点が更に入って1番の倉持に繋がり、いまだノーアウト。

「走ったー！」

純さんが走り、倉持がボールにバットを当てて、なんとか3塁方向へと転がす。サードが懸命にダッシュし、ボールを掴んで1塁へ投げる。

「セーフ！」

「あいつ足はえー！」

「お、おい！3つ投げろ！」

足を緩めず、純さんは3塁を陥れる。亮さんは相手の球種を引き出して四球で出塁すると、

「3番 ファースト 結城くん」

ノーアウト満塁で哲さんが打席に立つ。ここまで2併殺でいいところは無いが、元々チャンスに強い強打者。相手に与えるプレッシャーは並大抵のものではない。

ギイン！

澄んだ金属音がグラウンドに響く。

「ファール！」

哲さんは余分な力を抜くように、体を捻って再びバットを構え直す。そうそう、もつと力を抜いて自然体で。

ギイン！

「フアール！」

「まだまだ力入ってますよ！」

余分な力を排除し、一打に全てをかけた、侍を幻視するかのようなオーラを纏う。

カキイン！

鋭く振り抜かれたバットが、インコースのストレートを叩き潰し、木霊するバットとボールの衝突する音に遅れて、ボールが揺さぶられた音が耳へと届く。

上を見上げた観客が目をグラウンドに戻すと、そこには控えめなガッツポーズをしながら、2塁ベースを踏んで3塁へと向かっている、安心したように微笑む哲さんの姿があった。

「うおおおお！」

「やつべ、鳥肌だった」

隣で凄いものを見た、そういつた表情の御幸に

「あれがうちのキャプテンだよ」

そう俺は返した。

……

あれから更に点をとって、13-1の5回コールドで、青道は初戦をものにした。

夕方、夏よりも早く太陽が沈み始め、暑くはあるのだが、どこか涼しく感じさせるような虫の声が聞こえる。

「真木、足の調子はどう？」

「やっぱり運動のあとは痛くなるね。」

軽く素振りをしながら真木は答えてくる。

「さすがにヤバイなと思って、今日監督に言って検査してもらったんだけどね。成長痛らしい。ピッチングはできることなら、今は避けた方がいいみたい」

そう言う真木は悔しそうな表情を浮かべる。

成長痛、中学生の時期に起こることが多いのだが、真木は既に180cmを越えるにも関わらず、一昨日あたりからそれが起こっていた。

夏の大会が終わり、さあ、エース争いと思っていた矢先のこと。ピッチャー登録されているが、今の投手陣の厚さから、秋に真木が登板することはないであろうと思われる。

エースの純さん、カーブの使い手丹波さん、オーソドックスなオーバースローの榎原さん、サイドスローの川上。いずれも落合コーチに技、体を鍛えられ、片岡監督に心、体を鍛えられた投手。

俺達の代からエースを、そう思っていただけに悔しさはあるが、先輩たち、特に純さんには、これぞエースといった貫禄すらある。現に、今日の初戦でも慌てず、チームを鼓舞するピッチングをしていたのだ。

「まあ焦らず行こうぜ、真木。層の厚い投手陣よりも、中堅校エースをまともに下位打線が捉えられない。こっちの方が問題あると思うけどな。」

「そうだな」

前チームでは8番を主に打っていたクリスさんが、新チームではクリーンナップ、そう言えば打線の格落ち感が伝わるであろうか。クリスさんですら、キャッチャーでなければスタメンに入れなかったのだ。前チームがどれだけ強力だったかがわかる。

しばらく振っていると、前園がやってくる。

「外野は影次以外固定がないし、内野もまだまだある！バット振ってアピールすれば、次の大会レギュラーだってありうるんや！」

そう言って前園は、バットをがむしゃらに振っていく。確かにその

通りであるが、前園は試合に出るにはまだ身体ができていない。器用さがあれば別だが、そのようなタイプではないので、現状、1軍に割って入るには難しそうに思える。

だが、一生懸命にバットを振る姿は、非常に好ましく、そして頼もしく思える。将来、1軍で一緒にプレイすることがあるかもなど思い、アドバイスをしながら、バットを振り込むのであった。

しかし前園……お前の顔怖いな……

国体に向けて

秋の都大会1次予選をなんとか突破し、青道は本戦出場を決めたが、2回戦、3回戦の内容はよくなかった。

2回戦はいわゆる弱小校との対戦。先発の川上がストレート、スライダーの2球種で、4回までランナーを出すものの抑えた。打線は哲さんと俺を敬遠気味に勝負を避けられるが、クリスさんと、その試合、6番に入った御幸の連続タイムリーで先制する。

しかし、5―0で迎えた5回表、シンカーを解禁した川上が3連続死球を与え、ノーアウト満塁になると、生命線のスライダーがすっぽ抜け、ランナーがそれぞれ進塁し、1失点。続く打者に力のないストレートを打たれ3失点。だめ押しタイムリーで計4失点し、降板となる。

5―4と詰め寄られ、いまだノーアウト2塁。槇原さんが登板するも、川上に引きずられたのか、いきなりの乱調で連続四球でノーアウト満塁に。これには片岡監督も我慢ができず、成長痛で休ませるはずであった真木が緊急登板。

ストレートで押していく力強いピッチングで1失点はしたものの、5―5の同点で踏ん張った。結局真木が6回までは投げ、丹波さんが7、8、9回をパーフェクトに抑えた。川上、槇原さんの乱調で、打線もリズムがおかしくなり繋がらず、9―5と辛勝することとなった。

狂った歯車は簡単には直らない。3回戦は打線がほとんど機能せず。クリーンナップ以外は沈黙し、なんとか4点とったものの、大量得点を期待していたOBからはため息が聞こえてきた。

その中で輝いていたのはエースの純さん。この試合は最初からチェンジアップを使い、2塁を踏ませぬピッチングを披露。9回無失点被安打2の完封勝利をあげた。

この結果を受けて片岡監督は、経験不足の投手陣に、プレッシャーのかかる場面を経験させるため、3年生野手陣相手に実践形式のピッ

チング練習を行うこととなった。

カキイン！

軽く振ったバットに弾き飛ばされたボールが、外野にはつてあるネットに突き刺さる。

「うお、東さんスイングがより一層コンパクトになったな」

力任せでないが力強さを感じる頼もしいスイングを心地よく感じる。しかし、それを産み出す本人はというと、

「コラア！ピッチャー何じゃその腑抜けた球は！俺をなめてんのか？こんなんじや練習にもならんやろうが！もつと活きたボールをインコースに投げてこい！こんくらいでバテんな川上！」

と大層ご立腹でうるさかった。

「しゃんとせえ！しゃんと！一回失敗したくらいで縮こまるんやないわ！やる気がねえなら田舎に帰るか？このドアホ！川島に代わってもらうんか？」

「や、やる気はあります」

「だったらさっさと投げーや！」

カキイン！

強烈な打球がライナーでネットに到達する。

「かあー！全然手応えあらへん！こつちまでへタになってまう！お前もうええ！代われ代われ！まずはシャドーで腕の振りをとり戻せや！」

あーあ、川上は今の状態じゃ厳しそうだな。東さんの言うとおり自分を見つめ直す時間をとるべきだわ。

「なんだよそれ！」

なんだ？あのでかい声だしてるチビは。

「フン……何が野球留学だ……覚悟や向上心は立派かもしれないねーけどよ、ここじゃあ力のある奴は何言っても許されんのかよ」

そんなわけないよと心のなかで思いながら、チビは真剣な顔で言っているの聞いてやる。チビが東さんのところへ向かって歩いていく。

「練習に付き合ってくれた仲間を罵倒し、田舎に帰れとか1人で違うことやってるって。たとえ世間が認めても……俺は絶対に認めねえ……」

そしてとうとう東さんの目の前に立ち、東さんを睨み付ける。

「たった一人じゃ野球はできねえんだ。名門と呼ばれるこの学校じゃあそんな大切なことも忘れてんのかよー！」

そう言いきると更に東さんを睨み付ける。周りの俺達はこいつが何を言いたいのかわからなくてポカンとしていると、東さんも応対に困っていたようで、とりあえずチビを睨み返すことにしてみたみたいだ。頭は悪そうだけどすごい度胸ある奴だなあ。

そこに高島副部長が若干笑いながら歩いてくる。東さんに何か耳打ちすると、いつの間にかチビと東さんが勝負をすることになっていった。なぜか御幸がキャッチャーをするようだけど、どうなるのだろうか。ただ、高島副部長が御幸に言った言葉、

「御幸くん……君が受けてくれると助かるわ。あの子おもしろい球投げるから……だけど本人は真実の自分に気づいていないの。そのポテンシャル限界まで引き出してもらえる？」

青道野球部のエースを見てきた高島副部長が、それだけ言うピッチャーはどのようなものか、少しばかり興味が湧いてきた。あのチビ自身も

「ぶつけられても文句言うんじゃないぞー！」

という強気な言葉をあの東さんに向かって発していたので、いつの間にか勝負を楽しみにしている自分がいた。キャッチボールをみる限り、球速、球威は並以下でコントロールもバラつきがあると言ったところ。何の魅力も見出だせない。しかし、直感が気持ち悪いボールだということを告げてくる。

その気持ち悪さの正体を知るために、チビを観察していく。初球、ワンバウンドに叩きつけられたボールを、御幸がしっかりと前で止めて捕球する。東さんにビビったのか？

「すいませんー！ちよつとタイムー！」

御幸が間を取るためか、マウンドのチビのところへ向かう。チビと御幸、2人とも表情豊かに話してどこか楽しそうだ。あのチビは何か気づかされた？あと恥ずかしがっているのか？とにかく硬さがとれ、余裕が生まれている。東さん、こういうピッチャーは厄介ですよ。

パアン！

「ストライクー！」

さりげなく球審になつている兄貴が宣告すると、東さんは若干驚いたような顔をしている。2球目、同じコースにボールがいくが、ストライクゾーンからは少し外れていたため1ー1の平行カウントとなる。東さんは打席の中で半歩前に行き、試合で見せるような威圧感を出し始める。チビの顔が強ばつたものとなる。

後ろから兄貴が東さんの頭を軽くはたく。

「バカタレ、中学生を潰す気か。この程度なら軽くて打てるだろう」

挑発するように言う兄貴に対して、チビは激昂するが、あのままであれば、確実にチビが潰されていたのは事実。兄貴に感謝するんだな。さすがにあれだというので、代打として道川さんに入ってもらおう。わざと挑発して、道川さんとの勝負で納得してもらおうことにする。うん、この子はお馬鹿だ。丸め込めた。

投げ込む度に荒れるコントロール、予測できない方向に暴れまわるボール。道川さんですらうまく捉えられないストリート。ここまできればわかる。七色に変化するナチュラルなムービングボール。潜在能力、なるほどね。

パアン！

道川さんのバットをかわすようにボールがスライドし、御幸のミットに届いた。

「バッターアウト！」

兄貴がそう宣告すると、感動したようにチビが雄叫びをあげた。

……

後から高島副部長にチビの名前が沢村 栄純であることを伝えられるが、御幸は全く聞き覚えはないという。長野県で軟式出身、1回戦負けの弱小校エースらしいが、果たしてあのムービング使いがくるのかどうか、楽しみになった。

何より代打として出てきた道川さんを三振にとつたのだ。期待値としてはとても高いだろう。

それはそれとして、今は国体をどう戦っていくかが大事になってくる。ベンチ入りメンバーの発表があったが

- 1 武藤 3年生
- 2 岸谷 3年生
- 3 栃谷 3年生
- 4 神田 3年生
- 5 東 3年生
- 6 西晴之 3年生
- 7 玉森 3年生
- 8 柳 3年生
- 9 西影次 1年生
- 10 井手 3年生 ピッチャー
- 11 伊佐敷 2年生 ピッチャー
- 12 遊佐 3年生 ピッチャー
- 13 滝川 2年生 キャッチャー、外野手
- 14 藤谷 3年生 キャッチャー

- 15 結城 2年生 ファースト
- 16 道川 3年生 ファースト、サード
- 17 山崎 3年生 ショート
- 18 城之内 3年生 外野手

となっている。青道は2回戦からの出場で、勝ち進めば計3回戦うこととなる。最後の最後で拵んだ1桁ナンバーのユニフォームを大切に保管し、国体まで兄貴たち3年生と練習を共にして、自身を磨き上げていくのであった。

国体 part 1

国体は夏の甲子園大会とは違って、どこか落ち着いた雰囲気があった。ガラガラとした思いをぶつけ合うのが甲子園大会だとすれば、円熟したチーム同士が実力を確かめ合うのが国体であろうか。

大学へ進学する者、高校で野球をやめる者、そして、プロへ行く者。それぞれが高校で野球をする、本当に最後となる大会である。甲子園では当たることのなかった、有力チーム同士が当たるということもあり、スタンドには多くの観客が詰めかけていた。

特に今年は怪物世代最後の年。青道のスターティングメンバー発表にざわめきはあるものの、3年生のいなくなった新チームで、別格さを見せつけられた人々は納得せざるをえない。

怪物世代を押し退け、3学年全体でのクリーンナップに俺、西影次は嬉しさが隠せない。

まだまだ暑いはずのグラウンドは、自分にとっては明るく、そして爽やかに感じられ、気分が高揚し、全身に力が漲ってくるようだ。

試合が始まった初回、神田さんが粘って出塁すると、夏よりも更に成長した柳さんが打席に立つ。相手エース 吉田さんはかなり投げづらそうにしている。

ストライクゾーン近くのボールは全てカットされ、明らかに逃げるようにして四球となる。連続四球にスタンドから戸惑いを感じられるが無理もない。

続く兄貴が初球をホームランにし、東さんも続いてホームランを放つ。

自分が打席に入り、相手エースを見ると、試合が始まる前と同一人物とは思えないほど憔悴している。

カキーン！

しっかりとトドメをさす。ストライクとボールがはつきりしていたので、比較的楽に打つことができた。走りながらバックスクリーン

に直撃した打球を見送り、ホームベースを踏みベンチへ帰る。

「高校通算10本目おめでとさん！」

「ありがとうございます」

東さんを筆頭に先輩たちに祝われとても嬉しく感じる。

キーン！

「栃谷さんナイバッチー！」

上位、下位関係なくヒットが打て、切れ目のない強力打線。新チームになってマークがきつくなり、自由に打てなかった後で味わうこの環境に、とても恵まれていたのだと感じる。そして、現時点で同学年に頼りになる打者がおらず、かろうじて御幸、真木が試合で使えるかどうかという事実には眉をひそめる。

現2年生はクリスさん以外は中学での実績がなかっただけで、実際はクリスさんに加えて哲さんという強打者がいたのに対して、自分の代は俺1人のみ。

現時点でもギリギリなのに、2年生が抜けたら更に物足りなくなるであろう打線に危惧するが、今はそれを考えても仕方ない。まずはこの試合だと、宝明との戦いに集中することにした。

……

結局途中でメンバーをほとんど入れ替え、青道は19―2で勝利をあげた。翌日の準決勝は先発を遊佐さんが務め、5回を投げて2失点で試合を作り、残りの4回を純さんが1失点で締め、17―3で勝利をおさめた。

連日の大量得点に高校野球ファンはやはり、青道の強力打線は頭ひとつ抜けていたことを再認識した。

そんな中、名將 片岡監督と名参謀 落合コーチは決勝での対大阪桐生戦でメンバー、打順を大幅に入れ替えたのであった。

…

国体 決勝戦

後攻 青道 スターティングオーダー

- 1 玉森 センター (右)
- 2 神田 セカンド (左)
- 3 結城 ファースト (右)
- 4 西 影次 サード (右)
- 5 滝川 レフト (右)
- 6 城之内 ライト (右)
- 7 山崎 ショート (右)
- 8 藤谷 キャッチャー (右)
- 9 武藤 ピッチャー (右、右オーバーロー)

先攻 大阪桐生スターティングオーダー

- 1 飯田 セカンド (左)
- 2 名倉 ライト (左)
- 3 有働 サード (右)
- 4 兵藤 ピッチャー (右、右オーバーロー)
- 5 土門 キャッチャー (右)
- 6 梅田 ショート (右)
- 7 堂上 レフト (右)
- 8 斉木 センター (左)
- 9 勅使河原 ファースト (右)

オーダーを聞いて驚きが隠せなかったが、監督、コーチ、そして東さんたちは楽しそうにしている。兄貴も表情は変わらないが、イタズラが成功したような浮わついた雰囲気を出している。

「新チームのクリーンナップに、周りを頼りになる3年生で固めた形となる。晴之、東、柳、栃谷を抜けばお前たち3人の打力は3年生含

めても高いレベルにある。先に3年生には話を通してある」

片岡監督はそう言うのと軽く笑う。落合コーチが引き継ぎ、

「3年生の世代、武藤と同じくBIG3に数えられる兵藤との対戦。お前たち3人の大きな糧になるだろう。思いつきり戦ってくるように」

「そういうことだ。思いつきりぶつかってこい」

「はいっ！」

そう返事すると、東さんが

「無理そうならいつでも言うんやで、俺らが甲子園みたいに打ったる」

「先制タイムリー打ったのは俺の弟だけだな」

兄貴はジト目で東さんを見ていた。

スターティングメンバー発表時に再びどよめきが起こるが、こちらとしては予想していたので問題はない。しっかりと集中する。

1,2年生が入っている青道とは違い、大阪桐生側は全員が3年生。大阪桐生の4番ピッチャーは前回同様、兵藤さんであったが、夏の甲子園大会で5番を打っていた館さんは今大会、登録すらされていない。秋季大会に専念しているようだ。

試合が始まると、先攻となった大阪桐生の1番打者 飯田さんが、鋭いスイングで武藤さんと真つ向勝負をする。自分の力がプロへいくであろうピッチャーに通用するかどうか試したい、挑戦したいという強い意志を感じ取れた。

結果としては三振に倒れるが、夏の甲子園大会準優勝校のリードオフマン。素晴らしい選手だなと思わされる戦いであった。それがわかるほど、自分も一生懸命についていけただった前回とは違い、相手のこと、そして自分達のことがよく見えるほど成長していた。

武藤さんは初回を三者凡退で抑え、青道の攻撃となる。先頭打者の玉森さんは、兵藤さんのアウトコース低めに決まったSFFに手が出ず三振に抑えられる。

両者三振から始まった試合、明らかに兵藤さんの調子が甲子園の時よりもいい。2回戦、準決勝を打者として出場し、完全にこの決勝に

ピックを合わせてきているようだった。

試合前には、兄貴達がスタメンでないことに気がつくのと、残念そうに電光掲示板を見ていたが、勝負は勝負。試合が始まると自身のメンタルを整え、玉森さんを三振に抑えた勢いで、続く神田さんをセカンドゴロ、哲さんをピッチャーゴロに抑えた。

ネクストサークルで兵藤さんのボールを見たが、夏の時にゾーンに入ってきていなかったフォークが、哲さんとの対戦ではストライクゾーンの低めにしつかりとコントロールされており、カウントをとるために使っていた。

2回表は武藤さんがしつかりと大阪桐生打線を抑え、再び三者凡退に終わる。

ついに本日の第1打席がまわってきた。2回裏 ノーアウト、内外野共に深めの守備で大阪桐生のメンバーは、こちらの一挙手一投足を見逃すまいと集中している。

ふうーつと息を長く吐き、全身の余分な力を抜いてバットを担ぎ、打席から見ることでできる景色を頭に刻み込む。高校野球最高峰の戦い、その場に4番として立たせてもらえるなど、なんと幸運なことか。

これが兄貴の盟友、東 清国が見ていた景色。4番 サードとして大地を堂々と踏みしめ、相手エースと対峙する。堅苦しく経験してこいなどと言われたが、こんなに興奮し、本能が喜びを感じる場面など他にはないだろう。楽しまなければ損だ。

自身の努力、才能、実力を信じて、相手としてこの上ないプロ注目ピッチャーへと挑む。

初球、アウトコース低めに直球が投げられるが、少し違和感を感じたためじっくりと観察すると、ホームベース直前で鋭く沈み、ミットを揺らす。

「ボール！」

夏よりもキレがいい。これが4番に対する投球かと気を引き締める。

ドゴオン！

唸りをあげるような直球がインコース、膝元に突き刺さってくる。
「ボール！」

観客の緊張した雰囲気を感じ取りながら、大きく伸びをして硬さをとり、気持ちのリセットする。ボールは見えている。あとはそれに合わせるだけ。若干甘めにボールがくるが、思ったよりボールがこない。

パン！

「ストライク！」

甘いと思って振りにいきかけたバットを止めるが、アウトコース低めにドロップカーブが決まって1ストライク2ボール。

実戦で使えるレベルの球種が豊富で、なおかつコントロールのいいピッチャーは厄介だと改めて感じる。

1度打席を外して間を取る。自分のペースで、相手に引き込まれない。打の青道 4番打者として堂々たる態度で相手に食らいつく。

ギーン！

「ファール！」

インコース低めに鋭く落ちるフォークになんとか当てる。今のファイニッシュに使われたら、新チームだと打てるメンバーはいないと苦笑いする。ぐいっと身体をひねってバットを構え直す。

きた！低めのストリート！

パン！

くそっ！SFFか！

「バッターアウト！」

以前見た時よりも手前で変化し、急激に視界から消えていこうとするボール。見えてはいたのにバット操作が間に合わなかった。なるほど、これなら玉森さんも三振してしまうのも仕方ないなと思う反面、次は打ってやると兵藤さんを睨み付け、ベンチへと戻っていった。

国体 part 2

本格的な秋という季節まで、あともう少しといった気温だと朝の天気予報では言っていたが、大声を出して応援する観客の熱や、ハイレベルな戦いに対する自身の興奮によって、夏の甲子園球場並みの気温に感じられる。

青道エース 武藤さんと大阪桐生エース 兵藤さんはお互い一歩も譲らない投手戦を繰り広げる。武藤さんはボールのキレがよく、ストリートとスライダー中心の配球で三振をとっていくのに対して、兵藤さんはツーシーム、ドロップカーブを中心とした組み立てで打たせて取る対照的なピッチングであった。

俺の2打席目は8球粘ったものの空振り三振。他の打者に対する打たせて取る投球ではなく、完全にギアを上げた状態での対戦であった。最後は低めに外れる今日1番のフォークにバットが回ってしまった：：あれは絶対止まったのに1塁審め……

6回終了時まで両エースは、ランナーを出さないパーフェクトピッチングであったが、7回表、武藤さんが3球目に投げたアウトコースのストリートを、大阪桐生の先頭打者 飯田さんがなんとかセンター前へ運んで、両チーム合わせての初ヒットを記録する。

そして、1塁ランナーに2盗を決められ、バントで更にランナーを送られてしまい、1アウト3塁のピンチになる。大阪桐生のバッターは3番 有働、準決勝で3打点と大暴れした主軸の1人。

スイングは鋭く、パワーがあるため、なかなか侮れないバッターである。ホームベースに被さるように立ち、武藤さんを睨み付けている。

俺の近くでは3塁ランナーの飯田さんが、絶えずプレッシャーをかけてきており、最低でも内野ゴロで1点を獲ってやろうという思いを強く感じる。

ドゴオン！

「ストライク！」

打者の目の前を通るインコースへの厳しいストレートを、有働さんは避けることなく、歯を食いしばって見逃して1ストライク。手が出なかっただけのようだが、油断はできない。

パアン！

鋭くインコース低めへ落ちるSFFを空振りして2ストライク。たった2球で大阪桐生の好打者 有働さんを追い込む。

ドゴオン！

「ストライク！バッターアウト！」

さすがに外へくるだろうと、思いきって踏み込んだ有働さんの胸を挟むようなストレートが、インコースで唸りをあげて藤谷さんの持つミットの中に入って音をたてた。

ランナーは動けず、2アウト3塁で4番 兵藤さんの打順になる。初球、キレの増したSFFが兵藤さんのバットを避けるように鋭く落ちてワンバウンドする。

兵藤さんは冷静にこちらへ左手を向けてランナーを制する。その後ろでは身体の正面でボールをしっかりとブロックして、右手でボールを掴み、3塁ランナーの飯田さんを睨み付ける藤谷さんがいた。1ストライク、知らず知らずのうちに止めていた息を軽く吐き、1回深呼吸をして気持ちを整える。

夏よりも気温が下がっているはずだが、緊張感が尋常ではなく、自分が大量の汗をかいているのが分かる。

「さあー！2アウトー！1つずつしっかりいくぞー！」

1歩目を早くするために足を軽く動かし、チームメイトに声をかけて集中をきらさないようにする。

ギーン！

鋭く放たれたゴロに飛び付く。

グローブの中に捕まえたボールを握って1塁へと全力で投げる。

「ファール！」

ボールのみを見て、それ以外を意識から外していたからか、3塁線をきれていたことに気がつかなかったようだ。

「ナイスガッツ！」

「いい動きやったでー！」

ベンチからの声に帽子を取ることで応え、しっかりと被り直して気持ちいを再び作っていく。絶対に後ろにはいかせない！

キーン！

反射的に2塁方向へ飛び込む。

俺のグローブの少し先を、ボールが通っていくのが見えた。

しかし、ボールの行き先にはショートの山崎さんが回り込もうとしており、逆シングルでボールを捕球すると、足を懸命に踏ん張って1塁へと送球した。

起き上がって状況を理解しようとする。

ホームベース近くでは大阪桐生の飯田さんがガッツポーズをし、藤谷さんは歯を食いしばっている。

「セーフ！」

観客席から大きな声援、叫び声、悲鳴、怒号が混ざりあつて、俺達青道ナインに襲いかかってくる。くそっ、先制点をとられたか。

「2アウト！追加点を与えないことが大事だ！切り替えて次の回やってやるぞ！なあ！結城！」

「はっ！はいっ！その通りです！」

セカンドを守る前キャプテン 神田さんが、余裕の笑みを浮かべてチームを引き締め、哲さんをイジる。

「声が裏返ってんで結城！キャプテンが1点取られたくらいで変な声だすなや！」

ベンチから東さんの大きい声が聞こえてくる。

「次から代打でわしからも出るからさっさと終わらせてこいや！晃太！エースやろが！締めてこい！」

「わかってるよ！」

武藤さんも点を取られたのにリラックスをして笑っている。山崎さんが

「なんで笑ってるのかって顔をしてるな。純粹に大阪桐生との試合が楽しいからさ。普段の大量得点で勝つのもいいけどさ、こういうった最高峰の舞台で1点のビハインド、相手はあの大阪桐生。こんな場面なんて滅多にないぞ。ワクワクするだろ」

と話しかけてくる。

「晴之達に感謝してるんだぜ。今日出てるメンバーだけじゃ到底この場はもちろん、甲子園にも来れなかったんだ。最後にスタメンとして出させてもらえただけでも嬉しいよ。それでさ、欲張りだと思うけどさ、俺にとつての最後の公式戦は勝って終わりたいんだ。影次、力を貸してくれないか」

「っ、もちろんですよ。この回を抑えて逆転しましょう！」

グータッチをしてお互い定位置に戻る。ずっと兄貴の控えて、それでもずっと努力し続けていたのに、自分が1軍枠に入ってしまったが故に最後の夏を奪ってしまった先輩。おそらく葛藤があったに違いないし、もしかしたら恨まれているかもしれない。

それでもあの真剣な目で、チームメイトとして力を合わせよう、そう言われたら否が応でも身体の芯から力が湧いてくる、そんな感じでした。思い返せばさっきのゴロは、本来なら自分が処理できていた打球だ。

知らず知らずのうちにあった力みを身体を軽く揺らし、ほぐして万全の態勢をとる。

キーン！

3塁方向へ山崎さんが横っ飛びして、ワンバウンドした打球を捕球

する。

「山崎さん！」「影次！」

自分の進行方向へ勢いよくグラブトスされたボールを直接右手で掴み、1塁へと全力で投げきる。

パアン！

ファーストミットの音が鮮明に聞こえる。一瞬の間があり

「アウト！」

1塁審の声を聞いて思わず飛び上がり、起きあがったばかりの山崎さんに抱きつく。

「よくやった影次」

「ありがとうございます！」

「2人ともよくやってくれた！」

神田さんにも感謝される。

今この瞬間、言葉では伝えられていたものの、本当の意味で怪物世代を擁したチームの一員として認められた気がした。

ベンチに戻ると哲さんと一緒に東さんに撫でられまくった。

「ようあそこで止めたで！ああいうプレーができたってことは、やつと肩の力がぬけたつちゆうこつちやな」

ニヤリと東さんが笑う。柳さんが続けて

「試合が始まる前の片岡監督が言った言葉を意識しすぎやんな。自分らだけで点をとろうなんて気負わんでええんや。」

「周りを頼ってプレーで盛り上げろ。そうすれば新チームでも上手くいくな」

と兄貴が締めくくった。……盛り上げるか……

「まずはできるのは応援や！影次！結城！そして遅れてきて寂しそうにしているクリス！声を出せ！どんなときでも声を出して迷う姿を見せるな！」

「はい！」

3人が声を揃えて返事をして、打席にたつ7回裏の先頭打者 玉森

さんを応援していく。

カキーン！

「おお！」

鋭いスイングから放たれた打球はバックスクリーンへと消えていった。

「玉森先輩！ナイスバッティング！ナイスホームラン！」

「全員で点取ろういうときにいきなりホームランかますやつがあるかい！」

東さんが怒鳴るが、ベンチに帰って来た玉森さんはどや顔でガッツポーズを決める。飛びかかる東さんをいなしてからかい続ける玉森さんは、久しぶりに目立てたからか生き生きとしていた。

国体 part 3

玉森さんの本塁打ですぐに追い付いた青道は、イケイケムードであったが、大阪桐生エース 兵藤さんはすぐに立ち直って、球数は使ったものの神田さんを空振り三振に仕留める。

流れを切るために本気で抑えにかかった投球を見て、兵藤さんでもやはり疲れが隠せていないのが分かる。本来主軸の4人が打線から外れてはいるが青道の強力打撃陣を打ち取るために奮起していたのだ。

点を取ったことで一瞬集中力の切れた隙を穿たれ、同点に追い付かれたところで更に好打者が続く場面。武藤さんのように三振を奪えずに、打たせて取るのが精一杯であった兵藤さんの体力は消耗していた。現在7回半ばで球数130を越えていることから分かるであろう。

誰もが簡単にはアウトにならず、相手エースを消耗させていく打線。怪物世代のどこからでも点が取れるというのは、青道というチーム全体で控え選手ですらそれが徹底できているから。チーム特有の雰囲気は相手エースを泥沼へ引きずり込んでいく。

ギーン！

3番打者の哲さんが、7球目の三振をとりに来た低めのフォークを1, 2塁間へと綺麗に転がし、打球の速さでファーストとセカンドの間を食い破るシングルヒットを放つ。

「しゃあ！ナイバッチー！」

「いけいけー！この回で勝ち越すぞー！」

打席に向かいながら、ベンチで監督に言われた言葉を思い出す。

「後ろを信じて繋げ。お前の後ろにはクリス、そして代打の用意をしている道川が控えている。自分のバッティングをしてこい」

自分のバッティング・・・自分の打ちたいものを打っていくのか？

4番としてどうするかを考えて打っていくのか？・・・

いきなりそういうことを言われてもよく分からない。ただ兄貴には自分の理想とするスイングを探せと言われたのは覚えている。

「ボール！」

完全に見えている。ストレートが外れていくのを見送る。

兄貴は自分もまだ理想的なスイングは見つかってはいないと言っていたが、どういうことであろうか。あれほどの打者ですら自分のことをはつきりと理解していないのか。

「ストライク！」

インコース低めギリギリに決まるフォークの球筋を、しっかりと記憶するように目だけで追う。

兄貴ですら理解していないものを考えるだけ無駄かと開き直る。来た球をただ自分が持ちうるもの全てを出しきってぶつける。結局兄貴とは違って、自分みたいな凡才はそれしかできないのだ。何も考えずに次にくるボールを打つと決める。

サインだけ確認し、頭のなかを空っぽにして、兵藤さんの動きだけに集中する。集中する？できているのか？これは。

全てがスローモーションに見え、兵藤さんのボールを持つ手がツーシームを投げようとしているのが分かる。

これはインコースの低めに決まる。何故かそう思えたのでスイングを始動する。身体に力は入らずただただ自分の持つバットが煌めき、いつも素振りをしている軌道上を素直にバットが滑り降りていく。

その軌道とは少し外れていたはずのボールが、ホームベース直前で軌道に吸い寄せられるかのように沈む。

その瞬間、下半身のみを動かし全ての力をバットからボールへと注いでいく。

「……」

全ての音が消え、バットを振り切った瞬間弾かれたように1塁へと走る。ランナーコーチャーの回す手が見え1塁を蹴る。1，2塁間半

ばで

「影次！すべれー！」

頭から2塁ベースへと突っ込むと、ベースに触れた数瞬後に背中に触れるものがあつた。

「セーフ！」

ベースを踏んだまま起き上がり、哲さんが3塁にいることを確認する。お互いに拳を突き出す。

「5番 レフト 滝川くん」

1アウト2，3塁、青道絶好の勝ち越しチャンス。

「クリスさん！行けますよー！」

そう言つて軽く足踏みする。

初球のストレートを見逃して1ストライク。余裕のある雰囲気です。クリスさんは兵藤さんを見つめる。

キーン！

鋭く速い打球がサードを越える。懸命に走るが

「ファール！」

3塁審の声で止まって2塁へと戻る。そこから兵藤さんは感じるものがあつたのかフォーク、ストレートの連続で外れて2―2の平行カウントとなる。

ガギン！

ピッチャー前で高く跳ねる打球となつた。哲さんはその間にホームを陥れ、俺は3塁へと走っていく。チラッとサードコーチャーを見ると腕を回している。兵藤さんを見ると、頭の上を越えた打球を捕球しようと1塁を確認しながら2塁方向へと身体を向けていた。

いける！

3塁を蹴り、更に加速してホームへと向かう。視野の左側では兵藤さんが反転して1塁へと送球するのが見える。

自分の限界を越えて足を回転させていく。

「ホーム！ホーム！」

こちらに気づいたキャッチャーがファーストへと声をかける。

滑り込んで左手でホームベースを触り、スツと立ち上がり哲さんと右手でハイタッチをする。

「セーフ！」

審判の宣告を聞いて左手でガッツポーズをする。

「じゃあ！」

ホームへと投げられたボールをキャッチャーが後逸しており、カバールがないためクリスさんは2塁を陥落させる。

「6番 城之内くんに代わりまして道川くん。バッターは道川くん

背番号3」

勝ち越した後、続く1アウト2塁のチャンスで代打の切り札 道川さんを投入する青道に対して、応援が更に激しくなる。大阪桐生エース 兵藤さんは笑顔を見せると、道川さんへ真っ向勝負を挑んだ。その3球目

ドゴオン！

「バッターアウト！」

今日1番のストレートがインコース高めにズバツと決まり、道川さんを三球三振に仕留める。明らかに限界を越えたエースの力投に、大阪桐生側からの応援が強くなっていく。

そのままの勢いで兵藤さんは7番 山崎さんをショートゴロに抑え、ピンチを乗り切った。

ドオン！

青道ベンチからミットを揺るがす重苦しい音が聞こえる。音のした方を見てみると兄貴が岸谷さんに対してボールを投げていた。

「きんぐー」

そう思わず声が出てしまうが

「影次はショートへ！山崎と交代で東はサードへ！玉森と交代で柳はセンター！道川と交代で栃谷はライトへ！藤谷と交代で岸谷はキャッチャー！武藤のところへ晴之！久々の公式戦でのピッチャーだ。やってこい」

「はいっ！」

青道オーダー

- 1 柳 センター (左)
- 2 神田 セカンド (左)
- 3 結城 ファースト (右)
- 4 西影次 ショート (右)
- 5 滝川 レフト (右)
- 6 栃谷 ライト (右)
- 7 東 サード (右)
- 8 岸谷 キャッチャー (右)
- 9 西晴之 ピッチャー (左、右オーバーロー)

兄貴の登板にスタンドからざわめきが聞こえる。

その初球

ドゴオン！

打者の膝元へ全く垂れないストレートが突き刺さる。電光掲示板を見るとそこに記されていた数字は151km/h。余力を残してゆったりと投げられたはずなのにこの球速。

それにスライダー、カーブがポンポンと低めに決まり、ストレートと思えばシュートで詰まらされる悪魔のようなピッチングを、ここまですら十分な兄貴が試合後半から繰り広げる。

それに対して、大阪桐生打線はなす術なく凡退をしたが、兄貴の投球に呼応するように兵藤さんは意地を見せつけ、8回3失点で完投を

成し遂げた。負け投手ではあったが、ドラフト注目選手を多数擁した青道打線を唯一5失点以内で抑えきった投手として、兵藤さんはプロ注目筆頭となった。

また兄貴は国体の後のインタビューで、投手としてもプロで通用するかチャレンジしてみたいと答え、ドラフト会議を目前として爆弾を放り込んだのであった。

掲示板（ドラフト当日）

334：名無しの代打

ドラフト会議の放送始まったな

335：名無しの代打

監督紹介とかいいから早く始めろよ

336：名無しの代打

焦んなよ（笑）

337：名無しの代打

各新聞社によるドラ1予想貼つとくわ5社な

中日 兵藤、兵藤、兵藤、武藤、南野

横浜 東、西、西、東、東

ヤク 兵藤、兵藤、蒲生、南野、兵藤

巨人 柳、柳、柳、蒲生、柳

広島 武藤、武藤、武藤、武藤、兵藤

阪神 西、西、西、西、西

福岡 西、西、柳、西、西

千葉 柳、柳、柳、柳、柳

ハム 西、西、西、西、西

オリ 飯岡、東、東、飯岡、東

楽天 南野、兵藤、武藤、南野、南野

西武 東、飯岡、西、東、飯岡

338：名無しの代打

全球団高校生のみで草

339：名無しの代打

とりあえず1人とれたらドラフト大成功って言われてる特S選手

のみ紹介貼っていくわ

兵藤 浩平 (大阪桐生高校)

ピッチャー

右投げオーバースロー

150キロを越える速球に落ちる系統のボールを巧みに操る本格派右腕。打力もかなりのものがあり名門大阪桐生の4番を打っていた。青道高校の最強打線に立ち向かって粉碎されるが、ある程度抑えていたことから投手評価は今ドラフト随一

340：名無しの代打

武藤 晃太 (青道高校)

ピッチャー

右投げオーバースロー

春夏連覇した青道の絶対的エース。150キロを越える速球にスライダー、SFFを混ぜ緩急も使ってくる本格派右腕。2年秋から実力を発揮し始め、一気に全国区ピッチャーへと成長を遂げた。全国区の打線をしっかりと抑える力があることは分かるが、青道打線との対戦データが世には出ていないため、評価としては兵藤には一歩劣るか？

南野 竜 (稻城実業高校)

ピッチャー

右投げサイドスロー

2年時、夏の甲子園で躍動した技巧派右腕。技巧派とは言うが140キロ後半の速球を投げるため、指先の器用さからかなりの逸材と考えられている。3年夏の西東京大会では7回途中ながら青道打線を無失点に抑えたため評価は上昇。競合もありうる。

341：名無しの代打

飯岡 奏 (西邦高校)

キャッチャー

右投げ右打ち

打撃と守備に欠点のない万能キャッチャー。足が遅いのはご愛嬌。

足以外は即プロで通用するであろう逸材で、1年夏から西邦打線の中核を担い、正捕手として甲子園に君臨し続けた。5季連続甲子園出場はお見事。足は遅い

東 清国（青道高校）

サード

右投げ右打ち

あの怪物打線の4番を担った長距離砲。他の追隨を許さぬパワーで、甲子園出場投手の心をへし折りまくった。例年のドラフトであれば複数球団競合の目玉であるが、他にも逸材が多いためどうであろうか。将来の主砲が欲しければ確保しておきたい

342：名無しの代打

柳 圭司（青道高校）

外野手

右投げ左打ち

パワーに関しては高校生らしさがあるが、技術的には超高校級。守備が上手く走ることもできるため、将来的なヒットメーカーとして期待が寄せられる

西 晴之（青道高校）

ショート、セカンドとか色々、ピッチャー？

右投げ左打ち

青道の産んだ怪物の中の怪物。プロで即タイトル争いをするのではないかと言う専門家がいるほどの打力の持ち主。高校通算打率は7割を超える今ドラフト注目の打者。打力に目が行きがちだが守備に関しては別次元であり、それだけでも欲しい選手。ピッチャーをしたいと言いだしたが大丈夫か？

343：名無しの代打

蒲生 久英（白龍高校）

外野手

右投げ左打ち

足の速さでは今ドラフト随一。足だけではなく確かな技術から繰り出される流し打ちは見事でパワーも兼ね備えている。守備範囲がとても広く、球際に強いたため、即レギュラーを見込めそうなほどの逸材

これくらいか

344：名無しの代打

今年の高校生が豊作過ぎてヤバイよな

名前出てる誰を取ってもそのポジション10年以上安泰やろ

345：名無しの代打

やっぱり阪神はショートの欲しいよな

346：名無しの代打

どこかの球団が狂った指名して欲しいわ

347：名無しの代打

1人でもいいから推しの球団に欲しいよな

……

520：名無しの代打

さあ！一巡目始まった！

521：名無しの代打

は？なんでそうなる！

522：名無しの代打

「悲報」広島、地元の社卒NO.1投手1位指名へ

523：名無しの代打

いやいや！怪物世代取りにいかんかい！

524：名無しの代打

初手から波乱なんよ

525：名無しの代打

ひいひい！かぶつてるうう！

526：名無しの代打

西のピッチャーやりたい宣言で大荒れなの草

……

650：名無しの代打

とりあえずドラ1指名まとめたぞ

中日 兵藤（大阪桐生）

横浜 兵藤（大阪桐生）

ヤク 兵藤（大阪桐生）

巨人 柳（青道高校）

広島 西山（JES社）

阪神 西（青道高校）

福岡 西（青道高校）

千葉 柳（青道高校）

ハム 西（青道高校）

オリ 兵藤（大阪桐生）

楽天 南野（稲城実業）

西武 東（青道高校）

651：名無しの代打

青道が半数占めててすごいなって思いました（小並感）

652：名無しの代打

東が山賊に一本釣り（（；。∩））

あの打線が更に強化されるのか

653：名無しの代打

広島は絶対に西の書き間違い

監督はやりきったって顔してるけど絶対ミス

ふざけてやがる

654：名無しの代打

シヨートが欲しい阪神と世代No.1獲りたいハムはやっぱりぶ

つかったか。

実績あるからハム行ってみて欲しいわ

655：名無しの代打

あいつは虎、俺が決めた

660：名無しの代打

キター！（。▽。三。▽。）
!!!!!!

661：名無しの代打

虎の正シヨート見つかる

662：名無しの代打

西は阪神かー：：別リーグなら素直に応援できた…

663：名無しの代打

将来的には球界の至宝になるんやぞ、応援しろや

664：名無しの代打

西は思ったより競合しなかったな。
みんな他のを取りに行つたみたいだな

……

212：名無しの代打

1位出揃つたな

外れ外れ1位までで終わつてスムーズ？だった

中日 兵藤（大阪桐生）

横浜 兵藤↓武藤↓鹿嶋（関東大学）

ヤク 兵藤↓栃谷（青道高校）

巨人 柳↓飯岡（西邦）

広島 西山（JES社）

阪神 西（青道高校）

福岡 西↓飯岡↓蒲生（白龍高校）

千葉 柳（青道高校）

ハム 西↓武藤（青道高校）

オリ 兵藤↓武藤↓岬（亜細亜大学）

楽天 南野（稲城実業）

西武 東（青道高校）

213：名無しの代打

特Sになつてためぼしい高卒は取られたな
まだ社卒、大卒の即戦力ピッチャーがかなり残つてはいるが

214：名無しの代打

阪神は西取つたからどんな選手指名しても安泰やな

ピッチャーとショートの大刀流は現実味ないしどちらか一本に絞るやろ

215：名無しの代打

おいー！競合避けたにしても素材型の栃谷とつてる場合じゃねえよ！兵藤打ったから評価上がったにしてもやりすぎ

216：名無しの代打

ふあ!?阪神2位に北川 小虎(市大三高)とかショート2人も取んなや！

1人じゃ心許ないとかトラウマでもあるんか？

219：名無しの代打

U-15でショート西、セカンド北川やってるから、その二遊間がそのまま阪神で再現できるんじゃない？

220：名無しの代打

WETUBEの会見で北川が男泣きしながら西と同じ球団に行けて嬉しいですとか言つとる

221：名無しの代打

ホモかな？

222：名無しの代打

同世代同地区同ポジションの憧れの選手だったらしいで？

223：名無しの代打

北川の全盛期は高校1年の夏やろ

しかも田辺におんぶにだっこやった世代での甲子園出場やろ

西はプロでもいけるやろうけど北川2位指名は高すぎんか？正直4位、5位でもいけたやろ

224：名無しの代打

数年前に投手1位って言われてたのにいきなり野手1位指名したときくらい納得いかんわ

今ではそいつが4番打ってるのが救いやけど

225：名無しの代打

巨人はさりげなく正捕手候補を取れたのはよかった

西邦を5連続甲子園へ導いた扇の要だし外れ1位で競合したのも納得だわ

226：名無しの代打

てかまじ広島は武藤一本釣りいけただろ

社卒は外れ1位でもよかったのに

227：名無しの代打

阪神が北川指名した瞬間ほぼ全球団がやられたー！って渋い顔したのウケる

そんな顔するなら早めにとつとけばいいのに

てかそんな反応したってことは阪神フロントはファインプレイしたのか？

228：名無しの代打

ポジション被るのを取ったってことは……西はピッチャー枠……
てコト!?

……

555：名無しの代打

来年のドラフトはどう？

既に高校生で目ぼしいのはおる？

556：名無しの代打

スレ違いだとは思うがまあ、打者だと青道高校の結城、滝川、西邦の佐野は熱い

557：名無しの代打

投手だと国士館の財前が完全にずば抜けてるよな

558：名無しの代打

さんくす！とりあえずその4人チェックしとくわ！

559：名無しの代打

まあた青道かよ！他のももつと気張れや

560：名無しの代打

今夏の甲子園での青道打線えぐすぎな

決勝での打順これや

1 神田 陽一郎↓ドラフト4位（福岡）

2 玉森 孝太↓ドラフト5位（広島）

3 柳 圭司↓2球団競合ドラフト1位（千葉）

4 東 清国↓ドラフト1位（西武）

5 西 晴之↓3球団競合ドラフト1位（阪神）

6 西 影次（現1年生）

7 栃谷 薫↓ドラフト外れ1位（ヤク）

8 岸谷 琉斗↓大学進学予定

9 武藤 晃太↓3球団競合ドラフト外れ1位（ハム）

561：名無しの代打

ドラフト1位の間に挟まる現1年生：…どんな化けもんなんや

562：名無しの代打

人数足りないからって西分裂はやりすぎ

563：名無しの代打

結城、滝川押し退けて、ドラフト上位陣に混ざっても見劣りしてなかつたよな

確か夏の甲子園決勝で先制打放ったのは弟くんや

564：名無しの代打

あー！ きゆうたいからあなをくりぬいてドーナツにするバイトつかれたわ

565：名無しの代打

新チームで4番みたいだから青道はこれからも期待できそうだな

566：名無しの代打

春夏春夏の4連覇期待しよ

567：名無しの代打

前チームと違って、クリーンナップとエース以外ボロボロらしいけどな（笑） 不作の世代（笑） まあ期待しておいてやろう（笑）

568：名無しの代打

外れだとしてもドラフト1位が高校野球で7番打ってる打線とかあるわけないだろ！ いい加減にしろ！

目を覚ませ

569：名無しの代打

結城、西の弟、滝川のクリーンナップだけでも脅威なのよな

570：名無しの代打

スレチだからためえら早く専用スレいけや

改めて新チーム

ドラフト会議の裏でも高校野球は止まらない。その放送1週間前には秋季東京都大会の本戦抽選会が行われていた。

哲さんに太田部長が付き添う形で青道はくじを引いたが、今回はどこかのブロックに強豪が集中するということとはなかった。

注目されている高校としては我々が青道高校を筆頭に、エース 財前さんが君臨する国士館。総合力の高い帝東。1年生に粒揃いの選手が揃った稲城実業。青道の対抗馬として真中さん、天久のダブルエースと主砲 大前さんを抱える市大三高。

前回の青道1強とはうってかわって、この5強であろうという前評判であった。これら5校は以下のように別れた。

Aブロック：青道、市大三高 Bブロック：帝東 Cブロック：稲城実業 Dブロック：国士館

その中でもエースの純さん、そしてクリーンナップの哲さん、俺、クリスさんを抱える青道は、力を落としたが優勝候補筆頭と噂されていた。しかし、その前評判とは異なり、実情として青道はたくさん問題を抱えていたのである。

まず1つ目として打線があまり機能しないこと。クリーンナップの3人は大丈夫だが、1番 倉持は積極的に振っていくのはいいのだが出塁に難があり、2番 亮さんは倉持のぶんも球数を稼ごうとして結果的にスランプに陥っていた。

6番に昇格した御幸はクリーンナップがお膳立てしたチャンス以外に打てず、7番 増子さんはパワーはあるものの大振りしていて率が残せない。ホームランは打てるのだが確実性が欲しいところ。

8番 門田さん、坂井さん、白州は今のところ横ばいで、誰が出ても厳しいだろう。真木が外野手として入ることもできるが、成長痛のため無茶はさせれない。この3人に頑張ってもらいたい。

次に2つ目の問題として投手陣が挙げられる。こちらの方が深刻

なのだが、エースである純さん以外が計算できないのである。真木は成長痛で無理はできない。丹波さんは突然の乱調と、ヒットを打たれると腕の振りが鈍って連打されてしまう欠点がある。

川上は連続死球からいまだ立ち直っておらず、マウンドを任せるのは酷であろう。武器であったスライダーのキレが失われている今、登板しても傷を広げるだけ。榎原さんは四球癖、安定感のなさが新チームで登板機会が増えると露呈してしまった。

最後にこれが一番大きいのだが、丹波さんがゲーム形式でのバツティング練習を終えた後、右肘の違和感をクリスさんに相談したところ即病院へ。結果として秋大会の本戦出場が絶望的になったのである。

カーブをより曲げようとしたり、キレを鋭くしようとしたりと試行錯誤をするうちに肘へ負担がいつていたようだ。聞いた話だからこれが正しいかは分からないのだが。

丹波さんを枠から外し、1年生ピッチャーの川島が登録されたものの、力量としては中堅校に通用するか疑問がある程度。焼け石に水である。

現に練習試合では川島、榎原さんが7回5〜7失点↓純さんが締め上げるパターンと純さんが完投するパターンのみの継投？状態となっており、丹波さんが抜けた穴は大きかった。

こうなってくると川上をただ置いておくわけにもいかない。

そういうことで1軍メンバーである1年生、全員ではないが俺と御幸、真木の3人は川上をなんとか使える状態にできないかと、哲さんや純さんに相談されていた。

「ダメエら何かいい案でもあるか？無理そうなら俺がガツンと言つてやろうか？」

「純、やめておけ。1年生の間で壊れたガラスのノリちゃんと呼ばれてるんだ。お前の語気で直接的な言葉を聞いたら粉々になるぞ」

「チツ！情けねえ」

純さんと哲さんは頭を悩ましている。それを見て苦笑いをしていた御幸が

「ああいうのは自分で乗り越えるものですし、そういった強さがないと今後もやっていけないでしょ」

とニヤけながら言う。一見突き放すような言葉に真木は少しムツとした顔になるが、こらえて咄嗟に出そうになった言葉を飲み込む。仕方がないので

「でも御幸、川上がいないと甲子園へは行けないぞ。正捕手として何かしないのか？」

俺がそう聞くと

「投げればなんとかなるだろ。実戦形式の相手が3年生だから厳しいように見えるけど、ドラフト1位の先輩にしっかり投げきってんだ。倉持が壊れたガラスのノリちゃんってからかってるけど、あいつはとうに前を向いてる。女房役としては大丈夫だと思ってるぜ」

そう自信ありげに補足するので、真木はそれならばと静観することにしたようだ。御幸も冷たいやつではないが、ポンツと結論を言って肝心なところを伝えない。自身がどう思っているかを上手く伝える術を心得ていないように感じた。

キャッチャーとしてグラウンドに立つ時はしつかり相手に想いを伝えるのに、普段の等身大の御幸はある種不器用なようだ。不器用と言えば真木も自分のことはあまり周囲に話さないタイプに思えるので、注意が必要だろう。

川上の話題はそれでよしとして、野球雑誌の特集について話題が移っていた。純さんが

「かぁー！眼鏡姿が端正な青道の1年生イケメン正捕手 御幸 一也に迫る！得点圏で必ず回されるから最多打点とつてるだけのやつがデカデカと取り上げられやがって！いい気になんやチクショー！」

と御幸に絡んでいた。そう、純さんは最速140キロを越える直球を投げる青道のエースなのだが、身長が低いため伸び代がないだろうと、実績があつてもライターからの評価は低めで、特集自体は少ない

のだ。

ポツと出の活躍したての御幸に嫉妬しまくっていた。特に御幸のリードがいいから純さんで抑えることができている。そう書かれていた記事すらあったため、純さんは若干ピリピリとしていた。

それでもガンガン言いたいことを言ってスッキリして、実際の試合ではエースとして相応しい振る舞いを続ける姿には尊敬しかない。意外と御幸にはこういう言いたいことをしつかり言うタイプのピッチャーが合ってるのかもしれない。

川上は俺や真木、御幸、特に倉持には遠慮がちな態度をとるため、自分たちからも関係を改善したり、他の選手、例えば樋笠や白州と仲良くなってくれればと思う。兄貴の世代とバリバリやっていた俺達3人に遠慮するのは他の2軍選手と同級生にもいるから分かるが、倉持のは相性だろうな。

「ちよつと飲み物買ってきます！いるものとかありますか？」

「いや、大丈夫だ」「おう！おれもこいつがあるからいいや」

「わかりました！行ってきます」

少し歩きながら1人で考える。

野球やるより人間関係のが難しい……

今思えば兄貴の世代が特殊すぎたのだ。兄貴を筆頭に大人びたシニア組がチームを引っ張り上げ、先輩に言うのはあれだが、お調子者の東さんが場を盛り上げる。武藤さんはメンタル的に不安定だったらしいが、それも2年の秋には改善して弱点のない覇権チーム。

羨ましくないと言えば嘘になるが、御託はいいから素振りだ！を地で行く、言葉ではなく背中を見せて引っ張るキャプテンの哲さん。オラついて煩いが決めるときは決めるエースの純さん。顔からして高校生を逸脱した存在感のクリスさん。

軸となる3選手がいるため、前チームからはかなり劣るものの、1つ1つ積み重ねていけば強いチームになる。俺は今までの雰囲気からそういうふう感じていた。そう、秋の1次予選が始まるまでは、キャプテンとして迷いを見せるが、持ち直した哲さんは再び迷い、

崩れるときがくるかもしれない。小さい体にチームを背負い、1人で秋の都大会を投げ抜くと覚悟を持ったエース純さんが大会中に潰れるかもしれない。

そんな不安が自身の中で大きくなっていく。

「珍しく辛気くさそうな顔してるな」

いつの間にか地面を見ていた自分に声がかけられる。顔をあげるとそこにはクリスさんがいた。

……

「なるほどな。確かにそういったことは今後あるだろうな」

納得したようにクリスさんはうなずく。

「クリスさんは不安に思うことはないんですか？」

俺がそう聞くと

「確かに不安に思うことはある。だが、前チームも最初はこんな雰囲気だったよ。西さんが離脱した直後は最悪だった。東さんは塞ぎこんで練習に出てこない。柳さんはどこか上の空」

クリスさんは思い出しながら懐かしむように笑う。

「キャプテンの神田さんはチームをまとめようと空回りして、栃谷さんとは意見が合わずに衝突。玉森さんは一匹狼のマイペースで我関せず。岸谷さんと武藤さんはそれぞれキャッチャー、ピッチャーをまとめるので精一杯。その前のキャプテンだった藤堂さんはやっぱり偉大だったと思い知ったよ」

「え！そんな状態で秋大会優勝したんですか？」

「前の代が西東京大会で破れて準備期間が長かったのもあって、徐々にまとまりが出てきたんだが、西さんの一言でチームが甲子園へ動き始めたんだ」

クリスさんはそう言ってこちらを力強く見てくる。

「確か復帰戦が甲子園か〜みたいなのを言ってみんなに火を着けたよ。」

「……」

「全員で1つの目標を持ったチームは強いぞ。完成度は藤堂さんがまとめていた時の方があつたが、ここぞという時の力強さは西さんの世代の方が強かつたと思うよ」

「1つの目標ですか」

買ったお茶を一口飲み喉を潤す。

「ああ、今のチームに足りないものだな。前チームには劣るが、そこまですべて俺達は捨てたもんじゃないと思ってる。しかし影次、お前は1年なのに色々と考えていたんだな」

「いえ、国体で感じたものをまとめていただけなので。何か自分がやらないとって気持ちがありました」

「フツ、お前らの代の方が大変だろうに。俺らも大概だがお前らは個性派の集まりだからな。個が過ぎればまとまりがなくなり、チームがバラ……いや……そうだな」

そう言いかけるとクリスさんは軽く笑う。

「どうしたんですか？いきなり笑って」

「いや、なに。東さんはすごいなと思っただけだよ」

「はあ……」

よく分からないがあまり聞かない方がいいだろうか。

「とにかく、影次は青道の誇る4番打者としてどっしり構えてくれていたらいい。チーム全体のことは俺達2年生がどうにかする。4番打者たれ。これはお前にしかできないことだ。頼む」

そう言ってこちらに頭を下げてくるのを慌てて止める。

「ええつと!!わかりましたから！頭上げてくださいよ！」

そこからはいつものように、たわいのない話をするのであった。

秋季東京都大会2回戦 明大一高戦 part 1

少し肌寒さを感じ、木の葉が赤く色づき始めるなか、秋季東京都大会の1回戦がおこなわれた。

青道の先発はエースである純さん。ストレートとチェンジアップの緩急に加え、9月中旬に覚えたツーシームで詰まらせて凡打の山を築き上げる。

打線はクリーンナップ中心に低く鋭い軽打を心がけ、7回までに大量得点をあげて、8―0で青道勝利に終わった。

しかし、そのなかでも倉持、亮さん、増子さん、門田さんの調子は上がらず、この4人が繋がればもつと大量に点数を取れ、5回コールド勝利できていたかもしれないと思わされた。

OBはコールドしたことに満足したようで、1次予選の後から出ていた、打線を不安視する声は一旦おさまったのだが、明らかに力を出しきれていない打線に対して、片岡監督、落合コーチら首脳陣はよりよい打順を模索していると、哲さんからは聞いている。

試合前のミーティングが始まると、偵察班から2回戦の相手である、明大一高の情報が提供された。

まとめると、エースは左腕の2年生ピッチャー 酒井さん。最速138キロのオーバースローで、スライダー、シュートと武器とする。安定感があり、基本的に試合を作るのはこのピッチャー。

そして、このチームのキーマンは、4番ショートの2年生 相田さん。非常に身体が大きいが機敏な動きのできるスラッガーで、ほとんどの得点に絡む攻撃の要といったところ。

打撃が相田さんなら守備に関してはキャッチャー、キャプテンの斉藤さんがキーマンであろうか。的確なコーチングに、常に落ち着いた穏やかな物腰でチームをまとめることに長けている。

個々の力では青道の方が上だが、チームとしてはどうなのか？それが試される試合になりそうだと俺には感じられた。

片岡監督は

「明大一高は新チームながらよくまとまったチームだ。油断はできない。エースである伊佐敷を登板させたいところだが、3回戦ではおそらく市大三高と戦う可能性が高い。連戦よりもしつかりと準備してもらった方がいいだろう。そこでだ」

と言いながら、スツと1人の選手を見る。

「榎原！お前に明大一高戦の先発を頼みたい。やってくれるな？」
「はいっ！」

緊張した面持ちで榎原さんは答える。

榎原さんも小柄なピッチャーではあるが、最速137キロの直球にカーブ、フォーク、シュートを混ぜ合わせて打ち取っていくタイプだ。四球癖さえなければいいのだが、なかなか治らない。

そんな榎原さんが先発であることに不安はあるが、今現在のチームでは現状2番手。頼らざるをえない。

榎原さんは1学年上にいた井手さんの投球に憧れて、今までであればどこに投げようとしていたのだが、ストライク先行を意識して、多少甘くなってもゾーンで勝負することのこと。御幸とのやりとりを聞いていたが、果たしてそれができるかどうか。

そこが明大一高戦の肝になってくるだろう。出来が悪ければ、そこから川上、川島が投げるだろうし、最悪の場合は純さんが投げきって、3回戦の市大三高戦も完投することになるだろう。

丹波さんが抜けたのが痛すぎる。そう思わずにはいられなかった。
「続いて打順だが……」

……

秋季東京都大会 2回戦

後攻 青道 スターティングオーダー

1番	セカンド	小湊	左打	2番	ショート	楠木	右打
3番	サード	西	右打	4番	ファースト	結城	右打
5番	レフト	滝川	右打	6番	キャッチャー	御幸	左打
7番	ライト	坂井	右打	8番	ピッチャー	榎原	右打、

右オーバースロー 9番 センター 白州 左打

先攻 明大一高 スターティングオーダー

1番 レフト 長谷川 左打 2番 センター 江川 右打
3番 ピッチャー 酒井 左、左オーバースロー 4番
ショート 相田 右打 5番 サード 佐藤 左打 6番 ラ
イト 飯島 右打 7番 キャッチャー 斉藤 右打 8番
セカンド 君嶋 右打 9番 ファースト 海老名 右打

*打順太字はキャプテン

昨日のミーティングで打順を聞いてから、4番を外されるという事
実をうまく消化できないまま、試合時間になってしまった。

試合直前にベンチ前で片岡監督の話を聞く。

「準備はいいか！」

「おう！」

片岡監督は1つ大きく深呼吸をする。

「榎原！先発として役割を果たしてこい！川島！川上！お前ら2人は
リリーフとして待機しておいてくれ！……いけるな？……川上」

「はいっ！やれます！」

「よし！いつてこい！」

「おう！」

返事をして3塁へと向かうが、いつもより足取りが重い気がする。
これではいけない、迷惑をかけてはいけないと思い、グツと伸びをし
てから、気持ちを試合に切り替える。

榎原さんは明大一高の先頭打者 長谷川さんに対して、アウトロー
の直球から入りストライクをとる。続く2球目、インハイへのスト
レットをファールにされるが、3球目のボール球となるフォークを振
らせて空振り三振に仕留め、いいスタートをきった。

「1アウト……ここからテンポよくいこう！」

久しぶりのスタメンで、ショートを守る楠木さんは笑顔でチームを
盛り立てていく。その影響か隣を守る亮さんの足取りは軽く、内野陣

の雰囲気は良さそうだ。

「さあーん！ー！」

ボールを呼んで自分の気持ちを、チーム全体の気持ちを高めていく。

ギーン！

「ショート！」

楠木さんはしっかりと回り込んで捕球して、1塁へと送球する。

「アウトー！」

「2アウト！槇原いいボールいってるよ！」

「おう！」

兄貴や神田さんの教えだろうか。楠木さんは倉持とは違って、しっかりと周囲に声をかけながら、常に笑顔でチームを鼓舞していく。

「影次！次ボテボテの打球注意ね！」

「はいっ！」

新チームではスタメンにいなかったタイプの内野手のおかげで、哲さん、亮さんもよい方に引っぱられて声を出していく。

「槇原！こつちに打たせてこい！こつちなら踏むだけですむぞ」

「こつちに打たせてもいいよ。俺が3アウト目はとってあげるよ」

槇原さんに発破をかけていく。槇原さんも調子が出てきたのか、しっかりと試合に集中しているようだ。

パアン！

「ストライク！バッターアウト！」

インコース低めギリギリに決まるフォークで空振り三振をとり、初回を無失点と好投する。

ベンチに戻ると

「いい守備だった。攻める方でも相手を圧倒していくぞ！小湊！」

「はいっ！」

「自分らしく、思いきってやってこい」

片岡監督は力強く亮さんの背中を叩いて打席へと送り出す。

「初回から相手にプレッシャーをかけていくぞオマエら！」

「おう！」

純さんの声に返事をして試合に集中する。

亮さんはストレート、スライダー、シユートを後続に見せると、役目はすんだとばかりに軽打してライト前ヒットを放つ。

続く楠木さんはバントをして、1アウト2塁で俺が打席に立つ。ここはしっかりと打点をあげる場面だが、いまいちしっくりとこない。打席に立つとなぜ4番から外されたのかを考えてしまう。

キーン！

「あっ」

打球が上手く上がらずにショートライナーとなる。

「ナイススイング！当たりは良かったぞー！」

若干自分の思い描いていた軌道とはずれていたため、それを修正するためにベンチに戻ってからも、邪魔にならないようにバットを軽く持つ。こんな状態では4番にふさわしくない。

続く哲さん、クリスさんの連続ヒットで先制点をあげ、更に2アウト1、3塁の場面。

カキーン！

御幸の放った打球はライトスタンドに吸い込まれていった。

「あはは、入っちゃった」

「御幸ー！強打の正捕手いいぞー！」

「ガンガン打ってけー！」

ボーッと同級生が活躍している姿を見る。

「スリーアウト！チェンジ」

……

「おい！影次！守備いくぞ！」

「はっはい！」

グローブを準備して3塁へと向かう。

その後、榎原さんは安定した投球を見せて、3回までパーフェクトピッチングを続ける。しかし、相手エースは持ち直したのか、2回を三者凡退で抑え、3回に哲さんがヒットを放つものの、楠木さん、俺、クリスさんは打ち取られてしまった。

俺にもいい当たりは出るが、どうも打球が上がらない。

……

「ボール！フォアボール！」

4回表、榎原さんは先頭打者である1番 長谷川さんに四球を与えてしまった。

「榎原ドンマイ！次に切り替えよう！」

すぐさま楠木さんは榎原さんに声をかけて、立ち直らせようとする。

しかし

「フォアボール！」

連続四球でノーアウト1、2塁のピンチとなる。打席には相手エースの酒井さん。自分の失点を取り返そうと打ち気が全面に出ている。御幸はたまらずマウンドへ向かう。こういう時の御幸はピッチャーをのせるのが上手いので、完全に任せておく。

内野はゲッツーシフトをとり、外野は中間守備をとる。その初球

キーン！

速く鋭い打球が2遊間を越えて外野を強襲する。

「前へ出るな！後ろだ！」

そう言ったものの、それでは遅かった。1歩目を前に踏み出したセ

ンター 白州は伸びていく打球に対処できず、ボールは頭の上を越えていく。ライトの坂井さんが懸命に回り込んでボールを中継へと投げるが、ランナーを一掃するタイムリーツーベースヒットとなった。打ったエースの酒井さんは2塁上で雄叫びをあげ、それに呼応するように相手ベンチからは歓声上がる。

この流れはまずい。チラツとベンチを見るが片岡監督は動かず、榎原さんを真剣な目で見ている。落合コーチは冷静に川上に投球練習を指示していた。

そういつたベンチの動きを見て榎原さんは腹をくくったのか、腕をしっかり振り切り、思いつきり投げるようになった。すると面白いようにコースにボールが決まり始める。

ギーン！

打ち取った打球、サツと亮さんがボールを右手で掴むと、こちらへボールを投げてくる。素早くタッチするが

「セーフ！」

ギリギリのところランナーの手の方が早かった。連続フォアボールに連続エラーでピンチが広がる。4―2とリードはしているが、いまだノーアウト1、3塁。バッターは5番 佐藤さん。

この場面を抑えるかどうかでこの試合が荒れる。そう直感が告げる。

「タイム！」

審判の声が聞こえてベンチの方を向くと、伝令として純さんがこちらに向かってきていた。

秋季東京都大会2回戦 明大一高戦 part 2

内野陣全員がマウンドに集まる。4回表ノーアウト1、3塁のピンチ。全て自分達のミスが連鎖して追い詰められている状態。

伝令である純さんがマウンドにくると、槇原さんの背中を叩いて「おう！武藤さんや井手さんが守ってきたマウンドだぞ！そんなしょっぱい顔してんじゃねえ！代わるか？ああ？」

といきなり槇原さんにガンをつけ始めた。

「いや、投げきるよ。ちよつと力が入っただけだ」

「ふんっ！どうだかな！井手さんに憧れんのもいいけどよ。それで井手さんの、青道投手陣が守ってきたマウンドを汚すんじゃねえぞ！2つのエラーはお前の四球が原因だ！反省しろコラ！」

「……」

槇原さんは無言で頷き、気合いの入った顔つきになる。

「哲！亮介！やっといい顔になった新米先発ピッチャーを頼むぜ！槇原！ここで負けたら怪我した丹波の霊が出てくるからな！」

「俺はまだ死んでない」

「オマエらを信じて肩は作ってないからよ。頼むぜ」

そう言う純さんはベンチへと戻っていった。

「ふがいない投球をしてすまん！ここから力を貸してくれ！」

槇原さんはとても悔しそうな顔をしている。そんな槇原さんの左肩に哲さんが手を乗せる。

「確実に1つずつアウトをとっていくぞ。俺達はチームだ。槇原……お前だけに背負わすことなどしない……やるぞ！」

「ああー！」

その言葉を合図に各ポジションに戻る。

3塁から全体を見渡そうとすると、哲さんが深呼吸して喉の調子を確かめているのがわかる。1回領くと

「さあ……ここから抑えていくぞ！足を動かせ！ボールがくるぞ！」

「おうー！」

哲さんの言葉に自然と返事をさせられる。言われたように足を動

かして、次の打球に備える。

槇原さんは初球、インコースのストレートで空振りを奪うと、2球目は様子を見るように、ボールゾーンへ落ちていくカーブを投げて1ー1の平行カウントとなった。

「スクイズあるぞー！3塁ランナー挙動不審だよー」

目だけが笑っていない楠木さんが3塁ランナーを牽制する。それが怖かったのか、3塁ランナーの酒井さんのリードが小さくなる。

ギーン！

打球が1塁方向へ転がっていく。哲さんがボールを捕球し、スタートの遅れた3塁ランナーを目で抑えると、3ー6ー4のダブルプレーで2アウト3塁となる。

「しゃあ！小湊カバール早かった！」

「内野動けてるぞー！次の打者で切るぞー！」

せめて守備ではと集中していく。派手なプレーはなくていい。今やれることを1つ1つこなすことが大事。打撃がスランプだと感じている時は尚更そうだと兄貴に言われている。

キーン！

体の正面で強烈な打球を止め、しっかりとボールを掴むと1塁へと送球する。

「アウト！」

「影次ー！ナイスガッツー！」

ショートの楠木さんに背中をポンツと軽く叩かれ

「気合い入ってたね。さすがだよ」

「いえ……打撃で役に立てていないので……」

「……？……！」

ベンチに戻り、御幸を応援する。

ポコン♪

テンポよくピッチャーゴロを打ち、1アウトとなる。

「ビヤハツ！御幸！集中しろ！」

「得点圏以外は相変わらずか」

倉持はスタメンから外れたからか声を荒げ、先輩達は苦笑いしている。坂井さん、榎原さんも続いてアウトになり4回裏は無得点で終わってしまった。

「榎原！6回まで頼むぞ！」

「はい！」

マウンドに立つ榎原さんは完全に落ち着いたようで、先頭打者の7番 斉藤さんをセカンドゴロに仕留める。井手さんほどコントロールは良くないが、低めに丁寧にボールを集め、8番、9番も内野ゴロを打たせてテンポよくアウトにした。

「榎原さんナイピッチ！」

声をかけると笑顔で右手をガッツポーズして応えてくれた。ベンチに戻ると片岡監督は

「よく持ち直した。榎原は次の回がラストだ！しっかり締めるぞ。倉持！代打でいけるな？」

「はい！」

「倉持から小湊、楠木、影次へと繋がっていく。形としては上位打線となる。影次！」

「へ？はい！」

いきなり名指しされてびっくりする。

「4番から3番に変わってもらったが、期待しているのは実質4番としての仕事だ。打者としては新チーム随一と思っている。影次……頼めるな？……」

「はい！命にかえましても！」

「キャラちげえぞ！」

我ながら単純なのだろうか、自分が足りなかったから、そういった理由で代えられたのではないと知って、いや、監督に信頼されている

と改めて全員の前で言葉にされて身体に力が漲る。

「少しは西さんに恩を返せたかな？」

倉持は初球の難しい球を上手くサード前へ転がし、ギリギリで1塁セーフとなる。

「あの足で強襲セーフテイやべえ！」

「あいつクソ速いぞ！」

まわせ

倉持は相手エースを塁上から翻弄し、2球牽制を引き出すがリードをそのまま大きくとる。続く亮さんは右中間に綺麗に弾き返した。

「ボール3つ！いや4つだ！4つ！」

倉持は最短距離でダイヤモンドを駆け回り、明大ナインを嘲笑うかのようにスライディングなしで本塁を陥れる。

「おい！ポケットとすんな！」

意識の間隙について亮さんは2塁を陥れる。楠木さんはこちらを見て微笑むと右打席に立つ。

まわせまわせ……やり返させろ

漲って抑えきれそうにない力を少しでも発散するために、普段から使っている相棒とも言うべき黒バットで素振りをする。ネクストサークルだが関係ない。身体の動くままに本能に任せてバットを振っていく。

すると、相手エースと目が合う。何やら顔をひきつらせているが怖いものでも見たのであろうか。顔色は良くない。こっちはばかり気にしてもいいのか？今日の前にいるのはおそらく兄貴と神田さんの弟子だぞ？

キーン！

確かに突出した才能はないかもしれない。しかし、今できる極限まで磨かれたであろうスイングが、インコースのストレートを薙ぎ払う。

「小湊まわれー！」

センター前へ弾かれたボールを見て、亮さんはホームへと突っ込む。

「セーフ！」

キャッチャーは同じ失態は繰り返さないと言わんばかりに、捕球後すぐにバッターランナーを警戒する。
きた

待ちに待っていた打席に口角が自然と上がる。

「お願いします」

短く告げバットを構えるが、キャッチャーはタイムをとってマウンドへ向かう。極限まで神経を研ぎ澄ませるが、あいつはやばいだの敬遠しようだの聞こえてくる。

その程度のピッチャーなのか？と相手エースの目を抉るように見つめる。

結局キャッチャーは立ち上がって敬遠することになったが、そのボールはおぼつかなく、たった4球の中に暴投になりそうなボールが3つ含まれていた。

哲さん、あの程度のピッチャーなら甲子園で山程打ち崩してきました。一気に決めましょう。

キーン！

哲さん、クリスさんはホームランを狙わずに、丁寧にセンター前へと運び、得点圏で御幸の打席となる。

ホームを踏んでベンチに戻ったところで、ようやく打順の意図に気づいた。9番の白州を1番に見立てたダブルチャンス打線。御幸を活かすために哲さん、クリスさんが後ろへ繋ぐように連打を重ねていく形。それなら素直に白州を1番にすればいいのになあ。

「頭が冷えたようで良かったよ」

「お荷物のまま代えられなくて良かったね？」

楠木さんと亮さんに言われ、右頬をかいてごまかす。

「自分の中で4番つてのは特別だったんで。城南リトル、初めて兄貴

が野球の試合しているのを見たのが、4番ショートで相手を圧倒しているところ」

そう言ってスポーツドリンクを飲む。

「俺はまだこのチームで4番やるの諦めてないですよ。それに、ショートで出ることも」

楠木さんを見ると嬉しそうにしている。

「いいよそれで。倉持には足以外負けそうな気がしないからね。ショート争いしようよ」

求められて右手で握手をする。

「でも、まずはこの試合勝たなきゃね。全力を尽くそう」

「はいー」

「俺を無視していい青春してるね」

「ゲツ！亮介！すまん」

「すみません」

亮さんは黒い笑みを見せると

「これは倉持は2軍落ちかなー？」

わざと大きい声を言う。御幸のタイムリーツーベースヒット。その後には3連凡を成し遂げた役者の1人がビクツと反応する。

「足だけじゃだめだよ。守備も目立とうとして派手にやるけどミスが多いし、打撃も1軍の中ではいいわけじゃない。足で内野ゴロをなんとかしてるだけ。守備は連携が大事ってリトルで習わなかったの？」

「お、おいそれは言いすぎじゃ」

「影次はセンターへ！増子は倉持のところに入ってサードへ！門田は坂井のところへ入ってライト！」

「はいっー」

6回表、10ー2と青道の8点リード。倉持がベンチの中で落ち込むのを横目に守備に集中する。槇原さんは1番から始まる上位打線を丁寧なピッチングで、三者凡退に仕留めてすぐに6回裏、青道の攻撃となる。

先頭打者の亮さんが立ち直ろうとするエースから四球を選ぶ。続く楠木さんは亮さんが走ったのを見て、三遊間へ打球を低く鋭く転が

す。2塁へカバーに走ったショートは虚を突く打球に相手が浮き足立つ。

ノーアウト1、2塁。ここで打席に立つのは俺。先程は逃げられたがここで終わらせる。そう意気込んで打席に立つ。俺から逃げても後ろには哲さん、クリスさん、そしてチャンスに滅法強い御幸がいる。「いけっ！影次！」

チームメイトからの応援が力になる。4番を外された程度でこの声に気づかなかった自分の小ささが少し嫌になる。チームのために。そして自分のためにバットを振り抜く。

身体が勝手に動く、いや、動かされる。甲子園や国体ですら感じたことのない高揚感を感じながら飛んでいくボールを見届ける。

「君！早く走りなさい！」

その言葉で現実に引き戻されると、1塁から順々に踏みしめて、ホームベースを最後に確かに踏む。そこから見る景色の中には、笑顔のチームメイトとはしゃぐ太田部長がいた。

秋季東京都大会3回戦 市大三高戦 part 1

西東京の雄 市大三高、3年生エース 田辺さんと1年生主砲 北川さんを擁した夏以来、青道と稲城実業に甲子園への道を阻まれている。打線における大きな核である北川さんはいたものの、同学年には絶対的なエースと呼べる存在がいなかった。

雌伏の時は終わった、そう言わんばかりに甲子園から遠退いていたチームの、水面下で磨かれ続けていた才能が開花し始めた。グラウンドの王様 北川小虎という存在が市大三高に残したものの。それは厳しい言葉、練習についてきた後輩たち。

夏の敗戦を糧に、精神的な成長を果たしたエース 真中さん。北川さんの後を託された、新キャプテンで主砲 大前さん。投打の核がはつきりとした世代が中心となるチーム。市大三高史上最強打者はもういない。しかし、全体的に力があるのは投手力も揃った現チーム。新チームはそういった評価を受けていた。

秋季東京都大会 3回戦

先攻 青道高校 スターティングオーダー

1番	セカンド	小湊	左打	2番	ショート	楠木	右打
3番	センター	西	右打	4番	ファースト	結城	右打
5番	レフト	滝川	右打	6番	キャッチャー	御幸	左打
7番	サード	増子	右打	8番	ライト	門田	右打
9番	ピッチャー	伊佐敷	右打、右オーバースロー				

後攻 市大三高 スターティングオーダー

1番	セカンド	平川	右打	2番	ショート	神宮寺	右打
3番	センター	宮川	左打	4番	サード	大前	右打
5番	ファースト	星田	左打	6番	ライト	中津	右打
7番	キャッチャー	清水	右打	8番	ピッチャー	真中	
右打、右オーバースロー				9番	レフト	田中	右打

*打順太字はキャプテン

始まる前から感じる真中さんのオーラ。決して本塁打一本打たれただけでへこむような、夏大会時の水風船みたいなこけおどしではなく、しつかりと実の詰まったものに感じる。洗練された動き、腕の振り投球前練習を黙々とこなしていく。

偵察班からの情報では、夏と変わらず直球は最速140キロに満たないものの、スライダーのキレは一級品であるとのこと。時折混ぜるカーブはカウントを整えたり、見せ球として使ったりするようだ。

打線において特筆すべきはやはり主砲である大前さん。強打の市大三高においても突出した北川さんの愛弟子は、既に全国区のバッターと言われており、甲子園出場はないながらもプロのスカウトが注目しているほど。

その両脇を固める宮川、星田は粗削りながらも、長打に魅力のある打者で注意が必要であろう。

このメンバーだけでも大変なのに、来年にはあいつまで加わるのだから嫌になる。しかし、甲子園への道は険しければ険しいほど達成感がある。試合が始まるのが楽しみでしようがない。

……

1回表、青道の攻撃。先頭打者は出塁率の高い亮さん。初球、2球目のストロークを見逃して1ー1の平行カウントになる。

ギーン！

亮さんの振ったバットの根本に当たり、1塁線をきれるファールとなる。珍しく顔をしかめて痛みを我慢しているのがわかる。

右投手のスライダーをミートしやすい左打者であり、チーム内でも当てるのが上手い亮さんが、ギリギリバットに当てることができレベル。その域まで進化している真中さんのスライダーに冷や汗が出る。

ドオン！

「バッターアウト！」

ストライクゾーンよりも内側を抉ってくるスライダーの後に、アウトローのストレート。亮さんはしっかりと踏み込むことができず、空振り三振に仕留められた。

「1アウトー！真中いいぞー！」

「じゃあー！まずは1つ！夏の借りを返すぜ！」

市大三高のテンションが上がっていく。この勢いのまま裏の攻撃に回るとまずい。しかし

ガキイ！

楠木さんは粘ろうとするものの、4球目のゾーンから逃げていくカーブに手が出てしまいセカンドゴロとなった。

「3番 センター 西くん」

名前を呼ばれて打席に入る。2アウトランナーなしで、相手エース真中さんのエンジンがかかりきっていない初回。ここで何か仕掛けてみたいところ。

「影次ー！打てー！」

「お前ならやれるぞー！」

声援の圧に身を任せ、本能のおもむくままに真中さんを眼で捉えてバットを構える。あのスライダーが打ちたい、打ってみたい。そんな欲を抑えることなく前面に出していく。こいよ。

初球、インコース低めに外れるストレートで1ボール。2球目、インハイへのスピンの効いたストレートがくる。直感で外れると感じ、微動だにせず見逃す。

「ボール！」

キャッチャーが返球する間もバットを構えたまま、真中さんの目を見つけて全ての動作を見逃さないようにする。

「ボール！フォアボール！」

結局1球もストライクゾーンにこなかった。とりあえず真中さんが作り出したチームの勢いが、緩やかなものになったことにほっとする。

「哲さん！頼みます！」

グツと右拳を向け合う。第1リードを大きくとって、真中さんにプレッシャーをかけていく。ランナーに出すこと自体が危ないと思ってももらえれば勝負してもらえる。そう考えて真剣に次の塁を狙う素振りを見せる。

「セーフ！」

牽制をくらうがリードはそのまま大きく。神田さんから指導を受けたように真中さんの全身を見て反応する。

「セーフ！」

思った以上に効いているみたいだ。走るよりもここでプレッシャーをかけていた方が良さそうだと判断し、盗塁のふりだけをしていく。

初球、アウトコースへのスライダーを哲さんが空振りする。哲さんが空振り？青道側ベンチがざわつく。俺が打席に立った時に投げられたのはストレートのみ。スライダーの軌道を見ていないから正確な判断ができそうにない。

パアン！

「ストライク！バッターアウト！」

「じゃあ！」

フロントドア、膝元を抉るような7球目のスライダーに哲さんは反応すらできなかつた。俺との勝負を避けて哲さんと真つ向勝負できるスライダー。今日この日のために全てを調整してきたのだろうか？哲さんを三振させた真中さんに凄みを感じる。それにしてもあの大きな変化量でコントロール抜群なのがヤバイ。

あのスライダー……もしかすると今日は右打者ノーチャンスかも

な……

だが、真中さんを前チームは楽々と攻略したのは事実。チームとしての力が圧倒的に足りない。そう思わされる初回の攻撃であった。

……

闘志剥き出しに青道打線に立ちふさがる真中さんとは対照的に、純さんは冷静に市大三高打線に挑んでいく。チェンジアップがあるとこの情報で当然相手は掴んでいるはずだ。

その市大三高打線に対してストリートで押して、同じ軌道から落ちていくフォークを決め球にしていく。チェンジアップは一切使われない、そんな投球で三者凡退で1回裏を乗り切る。

出塁はしなかったが純さんのボールにくらいつき、10球粘った2番 神宮寺さんは警戒しないといけないだろうな。大前さんと同じく1年夏からレギュラーを掴み、セカンドとして北川さんとコンビを組み続けた俊足巧打の内野手だ。最上級生になってシヨートを守っているが、守備に関しては北川さん以上のものを感じる。

「おっしやあー！攻撃もガンガンいこうぜ！」

チームに先制点を！エースの順調な滑り出しを見て、真中さんと対峙するが

パアン！

「バッターアウト！」

「クリスさんも空振り三振!? どんだけあのスライダーきれてんだよ！」

2回裏、先頭打者のクリスさんが三振に仕留められると、青道ベンチは驚きを隠せない。新チームとして初めて当たることになる好投手に対して、チームが浮き足立ち始める。

初めての壁ってどこか。これを越えない限り甲子園は夢のまた夢だな。

「まだ一巡目だ！しっかりとボールを見ていけ！普段通りの攻めかたでいい！」

「はい！」

片岡監督の声に落ち着きを取り戻しつつあるが、全員が立ち直ったわけではない。

ガキイ！

続く御幸はスライダーに当て、いいところに転がるが神宮寺さんのファインプレーでショートゴロに、増子さんは全球スライダーで、大振りなスイングを嘲笑うかのようなリードでかわされ三振に。

やはりキーとなるのは左打者か。今日は倉持がスタメンではないため、左は亮さん、御幸の2人のみ。ここからどうやってチームで攻略していくかを考えていく。

監督からの指示はいつも通り、おそらく球数を使わせて消耗させていくのであろうが、今日の真中さんが展開する神がかった投球に、それだけでは足りないと感じる。

「4番 サード 大前くん」

2回裏、マウンド上の純さんを睨むように、オーラを纏った大前さんが右打席に立つ。

初球、インコース低めに外れるストレートを大前さんは見逃して1ボール。目だけでボールを追って悠々と見逃す姿に貫禄を感じる。

続くインハイ、打者に向かって抉るように沈むツーシームで1ー1の平行カウントに。大前さんは身体に近いボールに仰け反らず、冷静に打席内の土をならしてバットを構える。

とてもアウトコースへと投げづらい。そう感じさせる見逃しかただ。

パアン！

大前さんはしっかりと踏み込むが、アウトコース低めに外れる

フォークを空振りする。少しでも浮いてゾーンに入っていれば打たれる危険なボール。攻める御幸のリードとそれに応える純さんに震える。あの人たちが勇気あるな。

2ストライク1ボールと追い込んだ場面、大前さんはバットを短く持ち、重心をわずかに低くしたように感じる。

ギーン！

「ファール！」

決して大振りせずに、コンパクトなスイングでクサイところはしっかりとカットしてくる。

「ボール！フォアボール！」

12球目のスライダーを見逃されてノーアウトのランナーが出る。チェンジアップで体勢を崩されても食らいついてくる執念に、北川さんの影を見る。タイプは違えど市大三高の4番を任されるだけあって怖いバッター。

「5番 ファースト 星田くん」

シニア時代から有名だった長距離砲の星田。左打ちということもあり、引く手あまただった大型内野手。夏には6番に座っていたがクリーンナップに昇格したあたり、順調な成長を遂げているのである。

夏は武藤さんに抑え込まれて印象は薄いのだが、元々地力のあるバッター。打席でゆったりと構える。

初球、バックドアとなるスライダーで1ストライク。星田は打席で不気味な落ち着きを見せ、スライダーには無反応であった。

2球目、インコースに食い込むストレートを見逃して1ー1の平行カウントに。これにはさすがに少し仰け反る。

3球目にはアウトハイのストレートを空振りする。

「純さんいいボールきてますよー！」

ドオン！

「ボール！」

アウトハイにストレートを続けるが、若干浮いて2-2の平行カウントになる。身体がでかいだけじゃなくて、選球眼がいいな。同じボールだと判断して、内野へのポップフライを打ちそうなものだが我慢している。

御幸からツーシームのサインが出て純さんは頷く。引っ掻けさせでのダブルプレー狙いか。そう単純にいくかわからないがどうなるかセンターから見守る。

「走った！」

1塁ランナーの大前さんが動く。その言葉に気をとられたのか、ツーシームがインコース、若干甘めのところへ投げられる。

ガギイン！

確かに芯を外せはしたが亮さんの横をボールが鋭く抜けていく。

「門田さん！序盤ですからしつかり止めていきましょう！」

そう声をかけるが、門田さんは3塁で刺そうとして少し半身になって捕ろうとする。

「あつ！」

グローブでボールを弾いてライト線に向かってボールが少しだけ転がっていく。

「よりによつてそつちに！」

門田さんは慌ててボールを掴むと亮さんに送球する。

ノーアウト1、3塁。大前さんと星田の足の遅さに助けられたが、市大三高ナインは歓声をあげ、先制点の入りそうな雰囲気。球場のボールテージが上がっていく。

「切り替えるー！ここから抑えていくぞー！」

「おうー！」

「門田！切り替えるー！」

哲さんの言葉に応じて冷静でいようと心がける。次の打者は6番

だが穴のない打線だ。悔ることはできない。青道に本格的なピンチが訪れていた。

秋季東京都大会3回戦 市大三高戦 part 2

攻めたフォアボールとヒットでノーアウト1、3塁。エースである純さんが投げているとはいえ、1点は覚悟しなければならぬ場面。

データでは市大三高の6番 中津さんは、長打ではなく単打を狙っていくスタイル。外野は前進し内野はゲッツーシフトをとる。ランナーは2人とも足は速くないためトリッキーなことはできないであろうと判断してクリスさん、門田さんに声をかける

「落ち着いていきましよう！」

「おう！」

「次はミスしない！」

前にきた打球をしっかりと捌いてゴロなら1塁ランナーを3塁へ行かせないこと。フライなら3塁ランナーのホーム突入を阻止しなければならぬ。ぐっと伸びをしてその時を待つ。

初球、2球目とストレートで強気に押していくが、中津さんはしっかりとバットに当ててついてくる。

「まだ2回！後ろにだけはそらさないように堅実にいきましよう！俺達なら点数とれますよー！」

門田さんが少しかたいなど感じる。先程のはミスしていなくてもランナー1、3塁になっていたが、グローブで弾いたのを気にしているようだ。

ギーン！

ストレートの下を叩いた力のないフライが左中間へ飛んできくる。

「オーライ！おれがいきます！」

クリスさんに向かって自分が行くことを伝えて、落下点に一直線に入り、確実に捕球して楠木さんに送球する。

「1アウトー！純さんボールキレッキレ！」

「おうよ！次も頼むぜ！」

「はいっ！」

アウトを捕れたことで全員の硬さが少しとれる。

「7番 キャッチャー 清水くん」

守備は並みだが打撃はいい。そういった評価を受けている攻撃型キャッチャー。神宮寺さんや大前さんが注目されているが、清水さんも安定した打撃力がある。

ランナーに足はないため、長打警戒で外野は深め。内野はゲッツーシフトのまま。外野に飛ばば1点は仕方ないと割りきって守っている。

ギーン！

三遊間に引つ張った鋭い打球が飛んでいく。

「うがあー！」

増子さんが精一杯飛び込むがグローブの先をボールが抜けていく。

「クリスさん！ ゆっくり中継まで！」

「ああー！」

クリスさんはしっかりとボールを捕球して楠木さんへボールを送る。

「おしー！ 先制点だー！」

「清水ー！ よくやった！」

市大三高側スタンドから歓声があがる。それでもグラウンドに出ているうちのメンバーは動じていない。門田さんを心配していたが杞憂だったようだ。声をかけてお互いの気持ちを切らさないようにしていく。

「門田さんー！ リラックスー！ できることを1つずつやっていきましょう！」

「影次も無理するような場面じゃないからな！」

「はいー！」

次の打者は真中さん。打撃は正直凡庸であるが、気合いのはいりかたが半端ではない。

キーン！

鋭い打球がセンター方向へと飛んでくる。ワンバウンドしたボールを亮さんがダイビングキャッチをすると

「亮介！」

素早くグラブトスされたボールを楠木さんが捕り、2塁を踏んで1塁へ。

「アウトロー！チェンジ！」

「ナイスコンビ！」

「うちの二遊間も負けてねえぞ！」

ダブルプレーをとり、1失点でピンチを切り抜ける。

点が入ると試合が動くとはよく言われるが

「ストライク！バッターアウト！」

3回表、門田さん、純さんが打ち取られ、亮さんはなんとか四球で出塁するも、楠木さんはスライダーに手が出ず三振してしまう。

好投を続ける真中さんに対して、純さんもギアを上げ始めて、3回裏は2アウトから神宮寺さんにツーベースヒットを打たれたものの、宮川をチェンジアップで翻弄しホームを踏ませない。

4回表、先頭打者として迎えた俺の第2打席、真中さんは深呼吸をしてこちらを睨んでくる。

勝負か？

そう感じ、バットを構えて待ち受ける。初球、アウトコース外へ外れるストレートで1ボール。

今日は徹底的に勝負しないのか？と考えるが、2球目、インコースからホーム直前で大きく横滑りしていくスライダーを空振りする。

なるほど、確かにこれだと哲さん、クリスさんの2人が手こずるのも分かる。スライダーのみで言えばキレイだけは武藤さんのもの以上と言える。続けてスライダーがくるが

ガキイ！

「ファール！」

1塁方向へと鋭い打球が飛んでいき、ラインから右側へときれていく。思った以上に曲がるが、次は捉えると意気込む。

「ボール！」

インコース内側へ外れるストレートを見逃して2ー2の平行カウントへ。ストレートかスライダーのどちらがくる!!

アウトコースギリギリのところへボールが投げられる。

ストレート！もらった！そう思いスイングしようとするが、ボールの軌道に僅かに違和感を感じてバットを止める。すると弾かれたようにボールがホームベース直前で曲がるのは見えたが、追いきれなかった。

「ボール！」

ふうーつと深く息を吐き、今のボールがなんだったのかを考える。ボールに目がついていかなかったのは久々で、少しワクワクしながら1度打席を外して頭のなかで整理する。

握りに変わりはなさそうまでストレートと同じ速さ。軌道はストレートにしては気持ちが悪く、初見であれば直前に目がついていかないうボール。ミットを見た限りは自分から離れていく方向へと曲がる感じ。

「使い勝手のよさそうなボールだな」

思わず声に出してしまう。

ストレートと見間違えそうになるボールだが、おそらくは高速スライダー。下手にストレートと思って打ちにいけば空振りする、決め球になりうる魔球と言っているだろう。

球速は140キロないが、キレがおかしいことになっている。このボールからは真中さんの意地みたいなものを感じるが、くるとわかっ
ていれば打てるように感じる。

ギーン！

「ファール！」

続けてインコースへ投げられた高速スライダーを軽くカットすると、真中さんは驚いたような顔をする。確かにキレはいいが武藤さんのスライダーよりも球速は遅いし、ボール自体の力は劣っている。次は確実に捉える。そう思って全身の余計な力を抜いてバットを構える。

こい！

キーン！

より変化量の大きいスライダーをジャストミートするが、ファールゾーンへ飛んでいく。

キーン！

続く高速スライダーもジャストミートするが、真中さんの執念か、レフトライン近くに落ちたものがファールの判定を受ける。フルカウントから繰り広げられる攻防に、スタンドから一喜一憂の声をあげる者、息を大きく吐き出す者、変わらず応援し続ける者がいた。

少し気持ちが昂りすぎているか、そう思って深呼吸をする。気づけば口の中がカラカラであったため、口を少し動かして唾液を出し、口の中を潤す。ベンチに戻ったら飲み物欲しいなどと気楽に思いながらバットを構え直す。

じつと真中さんと睨み合い、次の球種、コースは何だと考える。む？これは

キーン！

低めに外れるストレートを掬い上げ、左中間へと運んでいく。

ゴオン！

フェンスに直撃したボールを確認して2塁を陥れる。真中さん、最後の最後で弱気になつてははずしてきたか。

「おつしやあああ！影次ナイバッチ！」

「結城も続けよー！」

「打の青道らしいところ見せろー！」

この試合初めて得点圏にランナーが、しかもノーアウトで出たことで青道側スタンドが盛り上がる。ここで市大三高の田原監督は伝令を送る。

これはチャンスかな？と思ひ、その間に1塁コーチャーの真木を呼んでバツティンググローブを渡しながら小声で

「スライダーだけじゃなく高速スライダーがやばい。ストレートの球速で曲がるから、ストレートと思つて振りにいくと視界から消えるぞ」

「それは本当か？」

「ああ、切り札を用意してたみたいだ。また使ってくるかわからないが監督に伝えといてくれ」

「わかった」

そう言つて真木は早足でベンチに情報を伝えに行く。ベンチに一旦戻っていた哲さんにも伝わつたみたいで、少し驚いたような顔をした後に打つ気満々のオーラを出している。あれを見るとやっぱ頼もしく感じるな。

哲さんと真中さんの対戦を2塁上で見守る。

パアン！

「ストライク！」

哲さんは初球のスライダーをじっくりと観察する。今のスライダーを見る限りは真中さんは持ち直したみたいだ。夏とは違つて精神的にはやはりしぶとそうだ。

2球目のインコースのストレートをファールにして2ストライクとなると、哲さんは1度打席を外して、タイミングをとる素振りを見せる。続く3球目

「ファール！」

アウトコースへのスライダーについていき、バットに当てて成功するが、鋭い打球が1塁線をきれる。

「哲！スライダーについていけてるぞ！」

「キャプテンー！うてー！」

声援をうけ、更に哲さんのオーラが膨れ上がる。それに対して、真中さんはキャッチャーのサインに頷き、4球目のボールを思いつきり投げる。

一瞬の静寂の後、審判の宣告が響き渡る。

「バッターアウト！」

「じゃああー！」

高速スライダー。新たな武器で哲さんを空振り三振に仕留めると、真中さんは雄叫びを上げ、それに呼応するように市大三高側の内野陣、ベンチ、スタンドから声の圧がくる。

今日の真中さんは別格だなと思わずにはいられない、かなりキレのある高速スライダーであった。

「5番 レフト 滝川くん」

若干勢いを削がれた青道だが、いまだに1アウト2塁のチャンス。クリスさん、御幸へと打順が回るため、最低でも同点には追い付いておきたいのだが、哲さんですら2連続で三振させられたという事実がどう影響してくるか。

打席に入るクリスさんを見る限りは影響はなさそうで、ネクストサークルにいる御幸は真中さんを凝視している。御幸は集中力にムラがなければいい打者なのにもつたいない。いつもこの状態でいてもらいたいものだ。

「セーファー！」

そんなことを考えていると、牽制球がきたので試合に集中してく。

ガキイ！

クリスさんは6球目のアウトコースのスライダーになんとか当てて、バットを振り切る。ゴロだと判断してスタートをきり、3塁へスライディングして到達する。

「アウトロー！」

セカンドゴロで2アウト3塁となり、バッターはチャンスに強い御幸。普段のふざけたような感じはなく、青道の打者として恥ずかしくない雰囲気醸し出している。

ヒツティングマーチの狙い打ちが青道側スタンドから聞こえてくる。今分かっている球種はストレート、スライダー、カーブ、高速スライダーの4つ。できれば決め球であるスライダーか高速スライダーを狙い打って欲しいが欲張りすぎか。

声をかけようかと思ったが、いつも以上に集中しているように見える。あいつもここで点を取っておかないと、試合が決まってしまうのだから分かっていいるのだろう。

「御幸ー！打てやー！」

「青道の打点王ー！」

息を吐きながら真中さんの投球フォームを見つめる。何か違うはないか、夏には投げていなかったはずのボール。ストレートと同じ球速で曲げているのならどこかに無理が出ているはず、そう考えて3塁側から癖を探っていく。

「ストライクー！」

御幸は初球のストレートに反応を見せずに見送る。これに反応を見せないということは、スライダーに狙いを絞っているのだろうか？ そう疑問に思いながら見守る。

ギイン！

初見であるはずの高速スライダーに御幸が食らいつく。今のスイ

ングを見る限りは高速スライダーに山を張っていたが、思っていたよりも変化が大きかったのであろうか？

どんな形でもいい！御幸！ここで打ってくれよ！

そう思いながら3塁から真中さんへプレッシャーをかける。

3球目、真中さんがクイックで投げたボールはアウトコースの更に外へ投じられる。それを御幸はおそらくスライダーだと判断したのであろう。高速スライダーに合わせてとっていたタイミングを崩されつつも、上体を粘り強く残し、スライダーに合わせてバットを振り切った。

パン！

「バッターアウト！チェンジ！」

ここでカーブかよ。おそらく御幸が思い描いていたであろう軌道よりも、沈み込むような軌跡をたどって、キャッチャーのミットへとボールは吸い込まれていった。

4回表終了時点で青道はわずかに1安打。この数字に前チームとの力の差が如実に現れていた。

秋季東京都大会3回戦 市大三高戦 part3

御幸が空振り三振をして4回表が終わると、ポツポツと雨が降ってくる。小降りではあるが、少しだけ気温が落ちたように感じる。先程までは俺たちを照らしていた太陽は、今となっては雲に隠れている。

4回裏、先頭打者の大前さんがソロホームランを放ち、市大三高側は盛り上がるが、純さんは後続をなんとかシャットアウトする。その後、お互いに出塁すら許さずにズルズルと試合は進んでいった。

次に試合が動いたのは6回表。

カキイン！

手にはとても軽く心地よい感触が残り、仕事をしてくれた黒バットを労うように、優しく地面へ置いてダイヤモンドを一周する。右手を突き上げ青道にも打つ力があることをアピールする。

青道側スタンドやベンチから歓声があがるが、俺が欲しいものはない。真中さんを何がなんでも攻略するというチームの姿勢。まだうちのチームには実力は勿論のこと、前チームと比べて点を獲ろうという執念が足りない。

「影次！ナイスバッティング！」

「哲さん！ありがとうございます。フロントドアの高速スライダーでしたが4回よりはキレがなかったです」

そう言つて哲さんの背中を軽く叩く。

「何がなんでももう1点欲しいですよ。打の青道がエースを見殺しにするんですか？キャプテン、綺麗な形ではなくていつものしぶとさを見せてくださいよ」

哲さんが何か理解したような顔になったため、そこで話をやめてベンチへ向かう。哲さんの打席を見ながら改めて分析する。

4回表の攻撃、哲さんが内野ゴロでランナーを進塁させさせていれば、4回の時点で同点にはなっていたのだ。哲さん自体正式に4番になった試合は数少なく、今日の試合では、自分が点を獲らねばならな

いという意識が強すぎたように感じる。

その結果が2三振。決めにいこうとして無駄に力が入っていたのである。俺たちの野球は本来、後ろへ繋いで攻め続けるもの。バッター、ランナーがそれぞれ相手にプレッシャーをかけ続けて相手を攻略する。

それが今日の試合、チーム全体ではできていない。真中さんの闘志に当てられて、哲さんだけでなくほとんどのバッターがその打席で勝負を決めようと、気持ちだけが前かかりになっている。いつもと変わらない打撃ができてるのは亮さん、俺、クリスさんくらいであろうか。

キーン！

「哲ー！ナイバッチ！」

「おおー！打ち始めたな！このままいけー！」

ツーベースヒット。それもただのヒットではない。真中さんの高速スライダーを狙い打つてのものである。余計な気負いが消えた哲さんはしつかりとミートして左中間へとボールを運んでいった。

「5番 レフト 滝川くん」

数少ないチャンスをものにしたい、そんな場面で経験豊富なスラッガーであるクリスさんの打順となる。2アウト2塁、一打同点の機会。

前の打席ではスライダーについていくことができ、非常に期待ができるのだが、高速スライダーを見ていないのが懸念ではある。ポツポツと降っていた雨は若干勢いを増してきており、いつの間にか小雨とは呼べないくらいの密度となっている。

グラウンドは水分を含み、雨粒はベンチの屋根をテンポよく叩く。ふとスタンドに目を向けると各種色鮮やかな雨合羽を着こんだ人々や

「若菜！こんな降るって聞いてねえよ！」

「傘くらいもってなさいよ！」

「栄ちゃん！俺そう思ってた傘もうひとつもってるよ！」

「でかしたー！」

といった声も聞こえる。近所の子供たちであろうか？しかし最初のやつの声でかかったな。聞いたことあるような気がしたが気のせいかな？

打席にたつクリスさんは雨など気にせず、真中さんの一挙手一投足を見逃さぬよう集中している。真中さんはマウンドをしつかり踏みしめてボールを投げ込む。

「ボール！」

ホームランを打たれた直後に訪れたピンチ。力んでしまったのか、雨でボールが滑ったのか。それは真中さんにしかわからないが、ストリートがアウトコースよりも遠いところに外れる。

「ナイセン！クリスさんボール見えてるよ！」

「打てる球絞ってー！まだストライクないよー！」

ベンチだけでなくスタンドにいる青道野球部員も声を出して、クリスさんの打撃を後押ししていく。2球目は真中さんはマウンドに足をとられてワンバウンドとなる。

キャッチャーの清水さんはぬかるみ始めた地面から、不規則なバウンドをしたボールにも関わらず、体で正面に弾いてランナーを進めない。2塁ランナーの哲さんはそれを見て感心したような顔をしている。

「ノーストライク！ボールよく見て！全く入る気配ないよー！」

「雨強くなってるぞ！打球のバウンド気を付けろ！」

両チームとも雨に負けられないよう大声で投手、打者を盛り立てていく。

キーン！

ザーツと降る雨のなかで甲高い金属音が響きわたる。視界を覆い尽くすような縦線を切り裂く白い光は、三塁手のグローブを避けるようにホップすると、誰もいない地面へと着弾した。

「ファール！」

その場にいる全員が息をするのを忘れて見守った打球は、レフトラインのギリギリ左側に落ちた。雨の音だけが聞こえていた耳に、ざわめきが届き始める。

クリスさんが打ったのは、真中さんの切り札である高速スライダー。予想していたよりも曲がらなかったのであろうか、そのぶん引っ張るような形になってしまったようだ。

1ストライク2ボール。俗に言うバッティングカウントというやつだが、今日の真中さんを安易に打ちに行くというのはよくない。うまく指がかからなかったのを気にしてか、真中さんはロージンバックをこれでもかと握り、ボールがあまり濡れないようにグローブの中に素早く隠す。

あれだけ丹念にボールを気にかけている真中さんに、コントロールミスなどは期待できないが、ここで打たれば風向きが変わるであろう重要なターニングポイント。いくらエースと言えども緊張は感じているだろう。

真中さんとクリスさん、両者が集中力を高め睨み合う様子を固唾を呑んで見守る。クリスさん！頼みます！

「ボール!!」

ふうーつと息を吐いて力を抜く。1ストライク3ボール、ボール球をもう使えない以上完全な打者有利か。真中さんが再びロージンを持つと、急に雨の勢いが弱くなり、雲の隙間から太陽の光が差し始める。

パアン！

キレを取り戻したスライダーがアウトコース低めギリギリのところを決まる。これでフルカウント。雨の勢いは更に弱くなって小雨となる。先程のようなコントロールミスを期待してはダメだ。クリスさんがやるしかない。

真中さんはマウンドをしっかりとらして、ウィンドアップポジ

シヨンをとる。

「走った！」

当然だろう、2アウトでフルカウントの場面だ。走らない意味がない。

キーン！

鋭い打球が3遊間を襲う。シヨートの神宮寺さんが逆シングルでグローブを打球へと伸ばす。

革をはたくような音がすると、その場に落ちているボールを拾って、神宮寺さんは1塁を見る。

「投げるな！」

サードの大前さんが大声をあげて神宮寺さんを制止する。

声をあげた大前さんの目線の先には、軽くオーバーランをしてホームを狙おうとしていた哲さんの姿があった。

シヨート強襲の内野安打として記録されたが、水分を含んだ土でなければバウンドがもう少し高く、グローブの中におさまって1塁フォースアウトであったかもしれない。

「6番 キャッチャー 御幸くん」

次の打者がコールされると、雨が止んで活気を取り戻してきた青道側スタンドから歓声があがる。雑誌で特集されていたからであろうか、御幸への声援は他のメンバーよりも大きい気がする。

新チームになってから、哲さん、クリスさんがホームランを狙わずに、後ろへ後ろへと繋ごうとしているのもあるが、なんだかんだで試合を決める場面にチャンスで御幸に回ってくる。

1人のバッターとして、そういった運を羨ましく思うが、持っている男なのだろう。やる時はやってくれるという期待感があり、自然と任せても大丈夫と思ってしまうのが少し悔しい。打力では俺の方が圧倒的に勝っていると思うが、クリスさんに負けないようにと隠れて

努力しているのを知っている。

「決めろよ、御幸」

大きくなったスタンドからの声でかき消されて、聞こえないはずなのに、御幸はこちらを向いて真剣な顔で頷く。4回の打席もそうだが、チャンスの時に限って自分の後ろを任すことのできる打者に成長するかもしれないなど、唯一期待を持って始めた同級生の打席での振る舞いを見届ける。

初球から3つ続けてスライダーを投げて2ストライク1ボールとなるが、その間、御幸はバットを全く振らない。

スタンドから積極的にいけよという怒声などが聞こえるが、御幸は完全に真中さん以外を意識の外に置いている。ストレート、スライダー、更には高速スライダーにも食らいついていく。

粘りに粘った11球目、スライダーと同じような軌道で深く沈み込むようなボールを、待ち焦がれていたようにバットが迎えにいく。

カキイン！

ライナー性の打球がライト方向へとぐんぐん伸びていく。市大三高 ライトの中津さんはフェンス手前で立ち止まると、クツションボールを捕球しようとするが、地面で思うほどバウンドせずに、転がったボールをフェンス側に捕りに行く形になる。

ボールが内野に返ってきた頃には、御幸は2塁に到達し、ホームでは哲さんとクリスさんがハイタッチしていた。

逆転。真中さんは御幸の打球が直撃したフェンスを見つめたまま、ボーツとしている。

この試合始まって初めてのリードに、青道側スタンドからは大きな歓声があり、増子さんが打席に立とうとすると、市大三高側からタイムが要求される。

「守ります市大三高、選手の交代をお知らせします。ライトの中津くんに代わりまして、天久くんが入りピッチャー。ピッチャーの真中くんがライト。6番 ピッチャー 天久くん 背番号10。8番 ラ

イト 真中くん。以上に代わります」

エースの降板。いささか早すぎる交代のように思えるが、雨の中でも切らさなかった緊張の糸が切れているように見える。それでも下げないのは真中さんがエースだからであろうか。牛乳を吸った後のボロ雑巾のようになった真中さんは、大前さんに背中を強く叩かれ、その場で顔面から緩くなった土へダイブする。

声は届かなかったが、「戻ってこいよ」と言っているように思えた。

ドオン！

市大三高の沈痛なムードをもともしない態度で、天久は投球前練習を始める。夏よりも質が良くなり、140キロを越えたように思えるストレートがミットに突き刺さる。

真中さんの顔が真っ黒になっているのを見て、笑うのを我慢して投げているのが分かる。真中さんがタオルで顔を拭いている間もチラチラとその方向を目だけで確認し、笑うのを我慢しストレートを投げていく。

ふざけているようではあるが、素材は一級品。夏では青道打線に対して1年生ながら真っ向勝負していた強者だ。ある意味真中さんよりも警戒しなければならぬ。

パアン！

投げた後にこちらを見て嫌な笑みを浮かべてくる。こちらに見せつけるように投げた縦のスライダー。夏までは横に変化するスライダーだったはず。何か掴んだのか？同世代のライバルに最大限の警戒をする。

パアン！

「ストライク！バッターアウト！」

増子さんの大振りをかわすように、カーブと横変化のスライダーの
みを使った組み立てで、簡単に三球三振でアウトをとると、天久はこ
ちらをじつとりと見てくるのであった。

秋季東京都大会3回戦 市大三高戦 part 4

夕立にしては早い時間に降った雨が完全にやんで、グラウンドを太陽光が照らしている。冷えて心地よかった風の温度が上がり始め、グラウンドの土に含まれる水分が空気中へと解き放たれていく。

金属音が響き、スライス回転のかかったボールを追って懸命に背走する。左手を懸命に伸ばすが届かず、俺の目の前でボールが跳ねる。泥にまみれたボールが急速に勢いをなくしてその場にとどまるのを見て、右手でそのまま掴むと、滑らないように縫い目を指で探して中継に入った楠木さんへ送球する。

6回裏、市大三高の先頭打者 神宮寺さんが放ったセンター後方へのツーベースヒット。打たれたのは純さんが決め球に使っているフォーク。チェンジアップの後のストレートを見せ球に、インコース低めに鋭く落ちる変化をしたボールを、体の回転だけで上手く運ばれた形である。

強打の市大三高で1年生から上位打線を担うバッターは、やはりものが違うなと思わされた一打であった。チーム事情から2番を打っているのだろうが、全国で戦った高校のクリーンナップにいてもおかしくない。

チームから信頼されている打者がヒットを打つと、チームとして勢いがつく。ノーアウト2塁の局面で、ここまでノーヒットの3番 宮川。勢いそのままに初球のストレートを打ち、ゲッツーシフトで2塁ベース寄りにいた亮さんの真上をボールが越えていく。

前へと猛ダッシュし、グローブを突き出すが、ボールが地面に着くのが早かった。ショートバウンドで捕球するとすぐさまホームへ向かって低く力強い送球をする。

3塁にたどり着いていた神宮寺さんはその場でストップし、バッターランナーの宮川は、カットに入った純さんを見て軽めのオーバーランにとどめる。

いまだノーアウト1、3塁のピンチ。打者は前の打席でホームランを放っている市大三高の主砲 大前さん。

先程の雨が嘘だったかのように雲がなくなり、夏よりは弱くなったとはいえ、日差しが容赦なく照りつけてくる。下から熱気が上がってきて、蒸されているような感覚になる。

普通に立っているだけでも少しづつ体力を奪われそうな状況だが、純さんは大丈夫だろうか？少し心配しながらも、自分にできることはないかと頭を働かせる。

3―2と1点リードしている場面で、投手陣に不安があるのは俺達の青道だろう。真木が1、2回投げるにしてもまだ6回裏で、4回相手の攻撃を防がねばならないのだ。川上、川島には荷が重い気がする。

指示された守備位置は長打警戒のため深めで、同点ならいいと監督は判断したのだろう。

「ボールの表面に水分つきますから！結構滑りやすいです！注意していきましよう！」

「おう！低ければ中継がとってくれるからな！高め厳禁で！」

思い付いたことをポンポンと口に出して、外野手同士で声掛けあつていく。

キーン！

大前さんは5球目のスライダーを軽打して、レフト方向へとボールが飛んでいく。

「クリスさん！伸びます！バックバック！」

1歩目に躊躇したクリスさんの遙か頭上をボールが越えていく。フェンスにぶつかって鈍い音をたてたボールをクリスさんは捕球して、中継にはいった楠木さんへ送球する。

「ボール3つ！」

楠木さんはすぐさま反転して3塁へと送球するが

「セーフ！」

3―3の同点となりいまだノーアウト、ランナーは1、3塁のピンチ。バッターは5番の星田で純さんにボールについてきている。

ベンチからタイムがかかり、楨原さんが伝令としてマウンドへ向

かっっていく。

純さんの続投か……おそらくエースとして試合を任せるといふことだろうが、星田と7番の清水さんは純さんのボールに対応してきている。個人的にはかなり危険な賭けな気がする。

首を振って不安感を消す。

エースを信じなければ。正直なところ、武藤さんよりは実力が低いことはわかっているが、このチームがチームとしての体裁を保っていたのは、純さんがエースとして揺るぎない活躍をしていたから。ここで支えないでいつ報いればいいのか。

純さんで打たれたら仕方ない。その時の覚悟を決めてセンターを守る。

その数瞬後、バットとボールの衝突音が木霊するのをBGMに、ボールがライトフェンスを越える光景を見ることとなった。



記者である峰は記者席から、9回表青道側の攻撃を見ていた。ふと電光掲示板に目を向ける。

高校名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	青道	0
0	0	0	0	3	0	4	2	0	0	0	1
6	1	2									1

「7回は三者凡退であったが、8回に天久くんから4点を奪う猛攻を見せ、9回には小湊くん、楠木くんが倒れるが、2アウトから西くんの四球、結城くんがヒット。クリスくんと御幸くんの連続タイムリーで2点を返したが、流れを変えるために再びマウンドに真中くんがあがった」

「バッターアウト！ゲーム！」

「ここまでか。市大三高エースが最後にマウンドへ戻って増子くんを

簡単に抑えて見せた。これで市大三高はエースに経験を積ませ、次期エース候補だが、サボり癖のある天久くんと同世代における全国レベルの打者を経験させ、成長を促したのだろう。打線にとっては伊佐敷くんを打ち崩したというのは自信になるだろうな」

うんうんと頷いて情報を書き出していく。

「青道の強力打線は格落ちは仕方ないものの、クリーンナップと御幸くんがずば抜けているな。総合的にも全国屈指の打線と言っているだろう。だが投手力では市大三高の方が上だった」

「新チームを作るのに1ヶ月ほど差があつたが、その影響がでかかつたな。市大三高は各人が地に足つけていたのに対して、青道は空回りする場面が多かつたように感じる。実際の実力としては拮抗、いや青道の方が上だったかもしれないな」

そう結論付けて撤退の準備をする。

「夏の西東京大会、中心となるのはやはり市大三高、青道の2校だろう。そこにフォームを修正して復活してきた成宮くん率いる、1年生主体の稲城実業がどう絡んでくるか見ものだな。来年の夏も熱そうだ」

そう言つて峰は球場を後にした。

……

青道を破つた市大三高はトーナメントを駆け上がり、決勝で稲城実業と戦うこととなった。一皮剥けた真中と1年生エース成宮との戦いは投手戦となると思われたが、市大三高打線は成宮を堅実に攻略していく。

穴がなく総合力の高い打線に対して、まだ体のできあがっていない成宮は7回4失点でノックアウト。後続の井口も抑えきれずに、稲城実業は市大三高に対して完全な力負けを喫した。

投げては真中が1失点完投勝利をあげ、東京では青道以外に敵なしという姿を堂々と見せつけた。

いいことがあるれば悪いことも起こる。真中がエースとして覚醒す

るのに対して、天久はチームから距離をとるようになり始めた。かなり不安定な次期エースに対して、チームは見守ることにしたようであった。

時が流れ3月に入ると、甲子園の地に高校球児が足を踏み入れる。東京からはエース真中、2番手天久を擁する神宮大会ベスト4である市大三高、新2年生エース成宮、2番手井口を擁する稲城実業の2チームが春の甲子園で躍動した。

稲城実業はオフに鍛えたためか、得点力の向上と成宮の完成度が上がっており、春の甲子園ベスト8を記録した。

それに対して、市大三高は圧倒的な力を見せつけ、相手高校を蹂躪して春の甲子園覇者となった。特にエース真中は3種の魔球スライダーを操るプロ注目投手として注目され、大前は世代No.1打者の座を西邦 佐野と競う逸材と言われるようになった。

そういった栄光の陰で、青道ナインは徹底的な基礎訓練と紅白戦で実力を磨き、雌伏の時を過ぎ、新年度を迎えることとなった。また、甲子園が終わると、唯一真中を攻略した打線こそが青道打線であるという記事が、人々の目に届くこととなったのである。

春休み明け

新入生の入寮を明日に控えた3月下旬のある日。一昨年や昨年よりも早く新入生が合流することとなったのだが、特別バタバタと忙しい日々を送ることはなく、落合コーチはのんびりと監督室で書類整理をしていた。

太陽が姿を現さない早朝の5時であるためか、いささか肌寒い。試しに息を長く吐いてみると、別に白い空気が出るわけでもないが、身を震わせるには十分な気温であった。

ドアをノックする音が聞こえ、片岡監督が入室してくる。

「おはようございます」

「片岡さん、おはようございます。今年の新入生はネームバリューで言えば豊作ですな」

そう言って野球部志望者リストを片岡監督に渡す。

「実績のみで言えばエース候補として東条 秀明、向井 太陽。将来の野手レギュラー候補としては金丸 信二、南野 辰貴、佐々木 伸介、高津 広臣。核となりそうな選手が多いですな」

「うむ、それ以外にも中学生では無名だった結城みたいな選手がいるかもしれない。今年度の新1年生は、影次を中心としたクリーンナップに惹かれて希望者が多い。夏の甲子園優勝校であることも一因だが、昨年の秋、市大三高に対して唯一互角に渡り合ったことが大きいだろうな」

「そうですなあ」

そう返事をしながら、あの時から成長した現戦力を思い返す。

1番 セカンド 小湊 亮介（左打ち）

強化されたミート力、打撃技術は全国でも通用するほど磨きあげられた。攻める守備と言っていい自分だけの武器を手に入れ、小柄ではあるがボールに食らいつく姿勢は見事。

要所で毒づき、味方を発奮させるような言葉がけは、前チームでは見られなかった独特な雰囲気醸し出している。

2番 サード 増子 透 (右打ち)

大振りをやめさせ、オフの間に片岡監督が付きつきりでシャープでコンパクトなスイングを身につけた。率が向上し、バントなどの小技も上手くこなすことができるため、長打力と堅実さが同居する打撃の鬼。

超攻撃型2番打者として、打線を引っ張る側へと逞しく成長した。守備での雑さは残るものの、体をはったプレイは魅力的。足は速い。

3番 ファースト 結城 哲也 (右打ち)

長打、巧打共に熟す中距離バッター。弱点はなく、得点圏にも強い頼れる強打者。課題であったパワーをオフの間に強化し、長打率を向上させた。

背中で引っ張るだけでなく、影次を介して2年生へ指導する機会が増え、自他共に認めるキャプテンとして成長を見せている。

4番 センター 西 影次 (右打ち)

オフの期間に更なる成長を遂げた怪物打者。秋の国体で高校通算二桁本塁打を達成したが、春の段階で既に40本塁打を達成した。試合数よりもハイペースで本塁打を放つ姿は、兄とは違った可能性を感じさせられる。

4番に復帰させると気負うことなく率を向上させるなど、生粋の4番打者であるのだろう。片岡監督と相談し、東同様打順固定することとした。

5番 レフト 滝川 クリス 優 (右打ち)

バランスのよい強打者で、パンチ力は増子と肩を並べる。外野手としての守備面でも成長を遂げた。キャッチャーとしても優秀で、御幸の相談役兼2番手キャッチャーとして補佐を積極的にこなしている。

将来的に青道の柱となる御幸に対して、かなり厳しめに指導する姿は頼もしく感じる。2軍投手陣をメインで指導する姿も見られるな

ど、後進の教育に興味を示しているようだ。

6番 ショート 倉持 洋一（左打ち）

本格的に代走要因として固定されそうであったためか、率のよい左打席に専念し始めた。クリーンなヒットを狙うスタイルから、何かなんでも出塁し、ランナーをどんな形でも返そうとするスタイルへと変化を遂げる。

守備面、走塁面ではオフに徹底的に体に叩き込んだため、秋のようにかっこつけるだけの中身の伴わないプレイはしないであろう。すぐ後ろに迫る楠木の圧力を受けながらも、なんとかレギュラーを死守している。

7番 ピッチャー 伊佐敷 純（右打ち、右オーバースロー）

しぶとい打撃でなんだかんだ出塁率が良い。右方向への打撃がうまく、小技も器用にこなす。倉持を1番と見立てた2番打者の立ち位置として機能する。

投手としては最速143キロの直球、ツーシーム、スライダー、フォーク、チェンジアップを武器に相手を打ち取るピッチングを繰り広げる。

8番 キャッチャー 御幸 一也（左打ち）

得点圏に非常に強いバッター。今では得点圏だけではなく、ランナーのいない場面でも打てるようになったが、まだまだムラがあるため、上位を打たせるには成長が必要であろう。

クリスからよく発破をかけられているようで、1年生の初期よりも必死に練習をこなすようになった。ポジションを脅かすライバルが年下に現れれば、更なる成長を見込めそうだがどうであろうか。

以上がスタメンとして固定されているメンバーであり、9番ライトが流動的である。門田、坂井、白州の3人の実力が拮抗しており、新入生がパイスになればと言ったところであろうか。

打線は全国でも上位で、市大三高と比べて見劣りするどころか、こちらの方が上と言っても問題ないような陣容である。強いて言えば、7番を任すことのできる巧打のうまい選手がいれば、伊佐敷が投手に専念できるくらいか。

投手陣は安定感のある伊佐敷に加えて、身長が2mに迫る次期エース候補の真木。怪我から復帰してスローカーブを習得し、緩急を更につけることができるようになった丹波。メンタル面で持ち直し、シンカーはまだ封印しているが、ストリートとスライダーをコントロールよく投げ込める川上。この4本柱が中心となってくるであろう。

充実した戦力に目を細めるが、西東京という魔境には倒さなくてはならない強豪が2チーム存在する。

1つ目は稲城実業。左腕 成宮をエースとした2年生主体のチーム。怪物世代で青道に有望株が集まったのと同様に、2年生の世代では成宮の呼び掛けで神谷、白河、山岡、矢部といった近隣シニアの有望株が稲城実業に集中している。おそらく来年は、甲子園への最大の壁として立ちはだかつてくるであろう。

しかし、現段階でも未完成ではあるが才能に溢れ、爆発力は侮れないチームとなっている。春の甲子園ベスト8という実績を獲得し、チームをまとめているのが4番、キャッチャー、キャプテンである原田である。プロ注目の逸材とされていて稲城実業のキーマンとして注意しておきたい。

2つ目として挙げられるのが、夏の大本命とされる春の甲子園覇者市大三高。スライダーのスペシャリストとして持ち上げられるエース 真中に加えて、潜在能力は真中を越えると言われている天久を中心とした磐石な投手陣。

神宮寺や主砲 大前を中心としたタレント揃いの超強力打線は、並みの投手ではこんがり炎上してしまうであろう。その打線に、U-15で4番 キャプテンをしていた北川 大雅（現阪神 北川 小虎の弟）が加わるため、手がつけられない。明らかに今夏最大の障害であ

る。

「戦力はいくらあってもいいですからな。打線としては外野手に1人、2人いいのが入ってくると、影次をショートのとして使うことができる。そうなれば穴はなくなりそうですね」

「ええ、倉持、楠木もいいショートですが、打撃に関しては正直なところ物足りないところが多い。本人への指導はもちろん、他の選手の能力を底上げし、更に打線の完成度を上げていく。その上で新入生がどうチームに絡んでくるか」

片岡監督の言うことがもつともだとして頷き、コーヒーをいれる。

「まだ寒いですからな。片岡さんもどうですか？」

「ありがとうございます、いただきます」

ポットから注ぎたてなので約90℃であろうか、湯気をたてたコーヒーをいれたカップを、いつの間にか座っていた片岡監督の前にあるテーブルに置く。空気中へ消えていく湯気を見ながら、片岡監督の正面に座ってリストを見直す。

「早いうちに紅白戦を」

言いかけて止める。お互い考えることは同じようだ。お先にと促すと、片岡監督が話し始める。

「早めに紅白戦をして、固定化されてきたレギュラー陣に脅威を与えそうな選手を見出だし、春期大会へ帯同させる」

「ちようど良い刺激になるでしょうし、1軍、2軍の入れ換えも積極的に行いましょう。1年生の体はできていないでしょうが、劣勢であればあるほど選手の真価が問われる。そしてそれが期待できる実績を持った選手が揃っている」

「ああ、次世代を担うことができる人材が出てくるか、そんなものは新入生にはいないのか。それとも、新たな怪物としてレギュラーすらも獲得するものができるか。教育者としては失格かも知れないが、期待せずにはいられないな」

「フツ、片岡さんも男ですなあ」

ほどよく冷めてきたカップで乾杯して、ちびちびとコーヒーを飲

む。まだ結構熱い。少しやけどした舌を気にしながら、お互いに舌足らずになったのをスルーして、本日の練習メニューを再確認するのであった。

入寮日

新入生がくると伝えられている当日、太陽が水平線を照らし始めた頃に、影次は一人素振りをしていた。新入生として来ると知っているのは、松方シニアの後輩である東条と金丸2人のみ。

自分が中学3年生の時に、松方シニアで3番を打っていた北川は、兄の母校で野球をやりたいたいのことで、因縁のライバル 市大三高へと進学している。今からでも戦うのが楽しみだ。

自分の思い描く理想のスイングを目指して素振りをし、合間で高校生になって初めてできる後輩のことを考えていると、オフであるはずなのに、純さんと丹波さんがバットとタオルを持ってこちらへやってくる。

「影次、早いな！後輩が来るのを楽しみにして寝れなかったか？」

「純さん！おはようございます！丹波さんもおはようございます！知り合いが市大三高に入ったので、負けてられないと思って素振りですよ」

「おう！あの北川 大雅だろ？かなりの逸材だと高島副部長が言っていたが、実際どんなもんだ？」

「あー、タイプ的には増子さんに近いかもしれないですね。お兄さん同様パワーがあるので、コンパクトなスイングで率も残せるパワーヒッターって感じですよ」

増子さんみたいな打者が、市大三高打線に追加されるのを想像したのか、純さんは勝負が楽しみだと言わんばかりの笑みを浮かべ、丹波さんは嫌そうな顔をしている。

その反応を見て、いつものマウンドでの2人の姿を思い出す。強打者に真っ向勝負を仕掛けるのが純さん。強打者を煙に巻こうとして、緩急でかわそうとするのが丹波さん。

純さんは正捕手である御幸のリードと相性がいいのだが、丹波さんは御幸に対して首を振ることが多い。そのため、丹波さんが先発の時はクリスさんがマスクを被ることがあるのだが、御幸が正捕手になってから既に半年以上経過している。いい加減どちらかが合わせるな

どしてほしいものだ。

スローカーブを覚えて緩急を巧みに使い始めた丹波さんは、今となっては純さんや、真木と並ぶエース候補と言ってもいい。しかし、御幸との関係だけでなく、打たれ始めると腕の振りが鈍り、急激にキレがなくなる癖を改善できていないことも重なって、純さんと真木の2人に一歩劣った評価を受けている。

「純さんと丹波さんはシャドーですか？」

と聞くと、珍しく丹波さんが

「ああ、お互いにフォームチェックして、悪いところがないか指摘し合うことにしたんだ」

と返してきた。

「あー…腕の振りは大事ですもんね…」

「ああ、次の試合ではしっかりと最後まで投げきるつもりだ」

丹波さんはそう言うと、シャドーピッチングをし始める。素振りをしながら横目で様子を確認するが、特段悪いところは見られない。純さんもそう感じたようで

「しっかりと腕振れてんじゃねえか！それをずっとやってればいいんだよ」

「できたらいいんだけどなあ」

相手に向かって一直線の純さんと、相手に身構えてしまう丹波さんでは、タイプが違いすぎて少し難しかったようだ。要は心持ちの問題だとは思うのだが、後輩の俺からそういうことを言うのは憚られる。

「新入生に有望なピッチャーが来るんだろうな…俺達は昨年夏の甲子園覇者だもんな…」

純さんの言葉を聞いて、丹波さんの口元が引きつくの俺は見逃さなかった。

…

夕食と風呂を終え、体が鈍らないようにストレッチをして、自分のからだの動きを確認していく。少しでもズレがあれば、今日はどうい

う感覚で動けばいいのかを模索して、実践していく。

春期東京都大会のために疲労抜きをしているため、身体のキレは良い。全身が思いどおりに動くことに満足して、タオルで汗を拭く。

ふうーつと力を抜くように息を吐いて、ぐつと伸びをする。

「そういうえばそろそろ新入生が入寮する時間か」

寮の自室に戻ると、ルームメイトのクリスさんが市大三高エース

真中さんの映像を分析していた。

「クリスさんお疲れさまです」

「ああ、春の甲子園大会の映像を見直していたんだが、真中のスライダーが1種類増えていたのが話題になっていたよな」

「そうですね、確か曲がらないスライダーでしたっけ？」

そう聞くとクリスさんは頷く。

「真中の高速スライダーは実際に横への変化量が大きいのが、このスライダー？はスライドするのではなく若干沈む。ムービング系統のボールだとは思ってたがな」

「真中さんのインタビューで、あれはスライダーですの一点張りでしたよな」

「明らかにカットボールだと思うがな」

「あれだけお立ち台でキメ顔で言われたら仕方ないですよな」

2人してため息をつく。青道のスコアにはカットボールと書いてもらうようお願いしよう。そんな話をしていると廊下が騒がしくなる。どうやら新入生達がきたようだ。ノックの音がしたため、入ってくるように促すと、記憶よりも少し凛々しくなった懐かしい顔が入ってくる。

身長はそこまで高いわけでもないが、並みの新入生よりは鍛えられているのがわかる。短い金髪に少しきつそうな目つきが特徴的だ。気の強そうな雰囲気の中に、確かに新入生らしい初々しさと、少し緊張した感じを受ける。

「松方シニア出身の15歳！金丸 信二です！これからよろしくお願
いいたします！」

と頭を深々と下げてくる。新入生はそりや15歳が多いだろうな

と思いつながらも、頭を下げている相手が誰なのかよくわかっていない様子に、どこか肝心なところを見逃す金丸らしいなとつい笑ってしまった。

返事がないことに疑問を持ったのか、金丸が顔を上げたタイミングで

「入学おめでとう。だいたい1年ぶりかな？同室の2年生 西 影次だ。こちらは3年生の滝川さんだ。」

「金丸、はじめましてだ。3年生の滝川だ。よく下の名前、クリスで呼ばれることが多いから、そつちで呼んでもらって構わない」

「はっ！はいっ！よろしくお願いします！」

簡単に寮のルールを説明し、荷物の整理をクリスさんと共に手伝う。恐縮して遠慮していた金丸を押しきって、さつさと部屋を片付ける。その間にも寮での話をして親睦を深めていく。

「ええ!?毎食^ご飯^ご3杯がノルマですか!？」

「ああ、最初はきついと思うけど、最初からしつかり食いきる努力をしたやつは、今はほとんどが1軍に在籍しているぞ。体が資本だから結構大事。食えるやつは強いよ」

ほえくとなんとなくびっくりしたような顔をしている金丸に、身体的に成長していても、中身はそう変わっていないと安堵する。たぶん^ご飯^ご3杯の恐ろしさがわかっていないな。まあ、明日実感するだろう。クリスさんが

「周りの部屋は遅くまで起きている場合があるが、この部屋は早めに寝て、早く起きるようにしている。22時に寝て4時起床で俺たちはやってきているが、金丸はどうする?」

と聞くと、金丸は

「青道で4番、5番を打っているお2人がやっていることなので、真似したいと思います!」

と言うので、さつさと寝る準備をする。

「明日は6時から朝練だからな。自己紹介があるから何か考えとけよ」

「はい！わかりました！」

「無理はするなよー」

……

「完全に寝てるな」

「ですね」

今の時刻は4時5分。クリスさんと俺は軽く動ける服装に着替え、バットを持って中庭へ出る準備を終えていた。金丸は夜遅くまで寝付けず、今はぐっすりと寝ている。

「練習の30分前に起こしましょうか」

「そうだな。環境が変わったばかりだから無理に起こすのはかわいそうだな」

そういうわけで、中庭に出ると先客がいた。

「おはようございますー！」

「おはようー！」

挨拶すると複数の挨拶が返ってくる。真木、御幸、純さん、亮さんの4人に俺とクリスさんを加えた6人で、オフの日以外は毎日4時過ぎから自主練習をしている。だが、今日はそのメンバーに加えて1人、見慣れない顔があった。

「はじめまして！新入生の南野 辰貴です！城南シニア出身です。よろしく願います」

素振りをしながら話を聞いていくが、去年稲城実業からプロへ行つた南野さんの弟さんらしい。ポジションはキャッチャーがメインだが、外野やファーストも一通りこなせるようだ。

兄と同じように黒髪だが、髪質はストレートで癖がない。体は1年生にしては大きいものの、力を適度に抜いた入りからのスイングは、決して力任せではない確かな技術を感じさせる。

南野の素振りを見ていた御幸は、焦るように、そして楽しそうに素振りを再開する。1軍にすぐにも上がってきそうな逸材で、更に御幸と同じキャッチャーというポジションなのだ。それは焦るだろう。

これが刺激になって、チャンス以外でも集中力を切らさないようにならばなと思うとともに、自分のポジションにもライバルがくるかもしれないと、より一層自身の素振りの質を高めていくのであった。

この1週間後、春の大会が始まる。

閑話：がんばれ！かねまるくん！①

ついに！ついに足を踏み入れた青道高校！

強豪ひしめく西東京の中でも突出した3校のうちの1つであり、昨年の甲子園春夏連覇を達成した名門である。同地区に今年の春甲子園を制覇した市大三高、ベスト8を達成した稲城実業と合わせて西東京の3強として、全国から恐れられている。

今夏の甲子園で西東京勢4連覇が期待され、その3校が進学先としてかなり注目を集めていたが、その中でも青道は魅力的であった。

まず第一に、打者として成長するのであれば、市大三高や稲城実業よりも青道と言われている。昨年度のチームではスター揃いだっただけで、スタメンのみならず、背番号2桁メンバー主体で組んだ打線で、都内の強豪校をコールドで下すなど、育成力の強さを見せつけていた。

2つ目として挙げられるのが投手陣である。3年生にはエースの伊佐敷さん、2年生には次期エースとなるであろう真木さんがいる。各学年に軸となるであろう投手がいるのは大きい。

それに加えて、春夏連覇の立役者であるドラフト1位指名された武藤さん、大学へ進学した井手さんの2枚看板は記憶に新しく、今年も有望な投手が進学するであろうと噂されている。現に、同じ松方シニア出身の東条 秀明が進学しているのだから、これに関しては嘘はないだろう。

また、滝川さん、御幸さんといった全国有数のキャッチャーが在籍しているのは大きい。おそらく兄と同じく稲城実業へ進学したであろう、城南シニアの南野 辰貴と張り合えるのはこの2人だろうな。……U-15の3番キャッチャーめ……次は必ず倒す！

最後に、プロ注目の選手が多いことが挙げられる。その中でも特にクリーンナップとキャッチャーの御幸さんに注目する記事は多い。ちなみに、市大三高では神宮寺さん、大前さん、真中さん、天久さんに、稲城実業では原田さん、成宮さんにスカウトが注目しているとされている。

そんなすごい高校に進学し、荷物を持って寮に入ると、いきなり叫

び声が聞こえた。何だ？と疑問に思うが、周りには焦るような雰囲気は見られなかった。いつものこと……なのだろうか？……

気を取り直して廊下を歩き、自分の名前が書いてある部屋を見つけた。自分の名札の隣に2つ札がかかっているが、あえて見ないようにして、変に緊張しないように気を付ける。

ドアをノックし返事があったので、勢いよく開けて頭を下げながら「松方シニア出身の15歳！金丸 信二です！これからよろしくお願いいいたします！」

と挨拶をしたが返事がない。疑問に思って頭を上げると、自身が憧れにしている選手が2人いた。

青道の4番 西 影次さん。松方シニアでお世話になった異次元のスラッガー。打ってほしい時に必ず打つイメージがあり、俺にとつては4番と言えばこの人だ。市大三高に行った外面のみ野郎とは大違いだ！

西さんの後ろに見えるのは滝川・クリス・優さん。全国トップレベルのスラッガー。落ち着いた雰囲気は打席に立つと消え、野性的になる姿にカッコいいと思う人は多いのではなからうか。

そんな2人が目の前に立っていた。何を話したのかあまり覚えていないが、いつの間にか寝ることになっており、気づけば入寮1日目は終わっていたのだった。

……

「やっべえー寝過ぎしたー！」

部屋にかけてある時計が5時20分を示しているのを見て、寝ぼけた頭が一瞬で覚醒する。男 金丸 信二 15歳、憧れの先輩2人との約束を初っぱなから破っていた。

焦りながらも手早くジャージに着替えると、自分の机の上に置き手紙があることに気がつく。

「夜寝れてなさそうだから起こさなかった。俺達が戻る前に目が覚め

たなら、ストレッチをして身体をほぐしておくように。滝川より」

手紙を手にとって声に出して読み、先輩たちが遅刻したやつは見捨てるスタイルではなかったことに安心する。言われた通りにストレッチをしながら、昨日はよく確認できなかった部屋を見渡す。

部屋はそこそこ広く、3人で生活するぶんには充分な大きさで、とても綺麗に片付けられている。本棚には野球雑誌や人体の解剖書のようなものが並び、スポーツ医学書の数が多いように見える。

他にも特徴的なのはDVDの量で、それぞれ日付と対戦高校の名前が書かれている。また、それに対する分析をしたと思われるノートのページ数が書いてあり、持ち主がかなり几帳面な性格であることが推察される。

勝手に見るのは悪いよなど元の位置に戻して、ストレッチを再開すると、ドアが開き、クリスさんが顔を覗かせる。

「おはよう！よく眠れたか？」

「おはようございます！なかなか寝付けなくて寝坊してしまいました！すいません！」

頭を下げようとすると止められ

「初日から無理する必要はないからな。徐々に慣れていけばいい」「はいっ！」

なんて優しいんだと心の中で涙を流し、ストレッチを継続していく。2分ほど遅れて西さんも部屋に戻ってくる。

「おはよう！金丸起きたか！6時から朝練始まるから、10分前には移動するぞ！このバナナとヨーグルト食べとけ」

「はいっ！寝坊してすいませんでした！」

「いいよいいよ。食べながら自己紹介考えとけよ」

そういえばなにも考えてなかったと焦るが、トップバッターではないだろうしと、バナナとヨーグルトを食べることに集中する。口を軽くゆすいで、ストレッチの続きをしていると

「影次、金丸、そろそろグラウンドに行くぞ。道順を覚えるようにな。付いてきてくれ」

とクリスさんに言われたので、大人しく2人の後について歩く。グ

ラウンドにつくと、先輩らしき集団と、同級生らしいおどおどとした人が大部分を占めている集団があった。

「お前はあつちな」

と指差された同級生らしい集団に混ざる。前と後ろの2列になっていたのので、前の列に並ぶ。

「信二！おはよう！」

と声をかけられたので、その方向を向くと、同じ松方シニア出身で、エースを務めていた東条 秀明がいた。

「おう！東条はよく眠れたか？」

「ぼちぼちかな。優しい先輩たちでよかったよ」

「こつちもいい先輩だったけど緊張したわ」

「え？信二が緊張？誰だったの？」

「西さんと滝川さんの2人」

「うわ、思ったよりすごい部屋だったんだね」

右手で軽く自分の頭をかき

「やばかった」

と言った直後に、あのテレビで見たことのある片岡監督と落合コーチがこちらに歩いてくるのが見えたため、私語をやめる。周りを見てみると、いつの間にか部員が集まってきていたみたいだ。

「おはようございます！」

「おはようございます！」

各々が挨拶をするが、片岡監督と落合コーチは無言で1年生が作る集団の前にやってくる。

「これで入部希望者は全員か？」

「ええ、遅刻などがなければこれで全員ですねえ」

「うむ、まずはこちらから順番に、しっかりと大きな声で自己紹介をしてもらおうか」

その言葉を皮切りに、右端の前列から順々に自己紹介を始めていく。途中何人が聞き覚えのあるビツクネームがあった。

「ピッチャー志望の向井 太陽です！全国一の打撃陣がいる青道こそ、世代No.1ピッチャーの俺が入るのにふさわしいと思って入学

しました。よろしくお願いします」

「キャッチャー志望の南野 辰貴です。外野、ファーストもできます。兄を追い詰めた打線を育て上げた片岡監督の指導を受けたくて入部しました。4番でキャッチャーになるんで、よろしくお願いします」

「外野手志望の佐々木 伸介です！怪物世代に憧れて入部しました！精一杯頑張りますのでよろしくお願いします！」

周りもざわめいたこの3人は、全員シニア時代にU-15代表選出歴がある、将来を嘱望されたスター選手たち。こいつらに負けられねえ。東条と俺の自己紹介でも騒がしくなる感じはあつたが、あの3人ほどではなかった。

自己紹介が中盤に差し掛かった頃である。前列の左端のやつの自己紹介が終わった瞬間に

「あー！こいつ！遅刻したのに列に紛れ込もうとしているぞー！」

というわざとらしい声がグラウンドに響き渡った。

時が止まったように感じる重苦しい雰囲気、グラウンドを包み込む。

みんなが向いている方向を見ると、きよとんとした顔をした黒い短髪の野郎が、ランニングするようなポーズで固まっているのが見えた。

「あ……いや……その」

「初日から遅刻とはいい度胸だ。しかもバレないように忍び込もうとするその腐った根性！気に入らん！朝練が終わるまで走っておけ！」

監督がそう言うと、先輩たちの方へと歩み寄り、

「こいつと同室の上級生は監督不行き届きだ。また、どきくさに紛れて新入生をたぶらかした大バカ者。お前らも午前中は走っておけ！」

「はいはいー！」

そう言っておそらく御幸さんだと思うが、眼鏡をかけた人と、ヤンキーっぽい人。あの大きいのはたぶん増子さんかな？その3人が遅刻した新入生と走り始めた。

アクシデントはあったが、全員が自己紹介を終え、全体の挨拶、スタッフやマネージャーの紹介、改めての監督、コーチ、キャプテンからの挨拶があった。

その後は新入生同士で軽くキャッチボールをして朝練が終了となり、朝御飯の時間となった。

初日から遅刻した例のあいつは、ずっと走らされていたからか、ご飯2杯目で吐きそうになっていたのは笑えたが、吐くなら是非とも見えないところでお願いしたかった。

閑話：がんばれ！かねまるくん！②＋おまけ

腹が重い。

朝から運動はしたものの、ご飯3杯はさすがに多かった。グラウンドへ戻って軽くストレッチをして、次の練習へと備える。ご飯3杯を1番最初に食べきったのは南野で、更におかわりもしていた。

西さんに食える選手は強くなると言われたのを思い出す。向井は厳しそうだったが、佐々木はしつかりと食べきっていた。俺もなんとか完食はしたが、かなり苦しい。だが、ここで妥協すると差は開くばかりだ。負けられねえ。

途中、野手として中学時代にかなり実績のある高津を見ると、ほとんど食べれていなかった。体も小さいし、もしかしたらああいった奴が脱落していくのかもな。

まあ、そんなことより今自分ができることをやらねえと。腹に負担がかからないように軽く体を動かす。東条もなんとか食べきったみたいで合流して、ペアでストレッチをする。

「信二、次は何すると思う？」

「先輩たちはバッティング練習してるからなあ。俺達は守備練習とかか？」

「軽くキャッチボールしてたしそうかな？」

ストレッチをしばらく続けていくと、そろそろとご飯3杯食べきったであろう同級生が出てくるが、苦しい顔をしている者がほとんどであった。

「1年生集合ー！これより希望のポジションに分かれての能力テストを行う。スパイクにはきかえてBグラウンドに集まれ！」

「はいっー！」

Bグラウンドに行く準備をして、駆け足で移動しようとする時、

「うわあああああー！」

という声が聞こえ、何事かと叫び声のした方を向くと、片岡監督と

遅刻野郎が向き合っていた。

「ね……寝坊したのは自分の気持ち甘かったから……言い訳するつもりはありません。けど……俺は……」

「エースになるためにここに来てるんだ！その気持ちだけは誰にも負けるつもりねーっすから！」

そう言いきり、遅刻野郎は真剣な目で片岡監督をじっと見つめる。すると、片岡監督は深く息を吐いて

「エースになるなら規律を守れ。まだ1年だが来年入ってくる後輩の模範となれるように、後ろ暗いことをするな！胸をはって生きていけるように筋を通せ！」

「うぐっ！はっはい！ボス！」

「……監督と呼べ……まずは寝坊したことの謝罪をしろ」

「むむ、不肖沢村！初っぱなから寝坊してしまい！すいませんでした！」

そう言うと、遅刻野郎、もとい沢村は頭をしつかりと下げる。こいつはあれか。嫌なことは誤魔化す、せこいやつかと思ったら、実際はただのバカなのかもしれない。

「謝罪を受けとる。今まではどんな環境だったかわからないが、1つのチームとしてやっていく以上、最低限の礼儀は必要となる。同室は増子と倉持か……うーむ……とりあえずは練習への参加を許可する」
「本当ですか！」

「ああ。だが、自分から謝罪することはできていなかったからな。練習終わりに罰走を課す。エースになるにはランニングは必須だ。真剣に取り組むように」

「イエス！ボス！」

「監督だ」

やり取りに肝が冷えたが、とりあえずなんとかなったようで胸を撫で下ろす。初日からトラブルなんて避けてほしいぜ。

腹に物がたまった状態での能力テストは厳しいものがあつたが、今できる精一杯をやっていく。遠目で沢村が遠投しているのを見たが、

カーブを投げていたのは傑作だった。

その様子を見ていた西さんとか、主力選手の中には目を細める人がいたが、何かあったのだろうか？1通り能力テストを終え、今日の練習が終わる。

俺と東条はそこそこの結果を出したが、同じく注目されていた高津も肩と足の早さはそこそこので、微妙な感じであった。

能力テストで頭角を表していたのは、投手では向井 太陽が挙げられる。上級生と比べると身体は小さいが、コントロールが抜群で、キャッチャーの構えるところに、寸分の狂いもなく投げ込んでいた。直球、変化球を巧みに操る様子は東条に火をつけたようだった。

野手においてはやはり南野、佐々木がずば抜けていた。遠投での好成績はもちろん、走塁面でもかなりの成績を残した。

しかし、南野ですら上級生が投げたキレのある変化球や直球をこぼす姿が見られたのは、高校野球の実力が高いため、仕方がないと言わなければならない。他の捕手組もポロポロとボールをこぼす場面が目立っていた。

俺自身、成績がトップではないことに悔しいという思いはあるが、高校野球は実力主義。嫉妬してばかりではいけない。せっかくなりスさん、西さんと同室になったんだ。積極的に一緒に自主練習をして、1軍に這い上がってやる。そう決意する練習初日となった。



同じ左投げで、上から投げるのと横から投げるの違いはある。遅刻をして、ボスに怒られたときはどうなるかと思っただが、地元みんなの期待を裏切らずにすんだ、そう安心した後の出会いだった。

投げているボールはたぶんそこまで変わらないと思う。体の大きさも負けてねえ。わざわざ志願した御幸 一也が構えたところに、寸分変わらず投げられるボール。自分の手足のようにボールを操って、自己を表現していく。

向井 太陽

隠れながら自己紹介は聞いていた。全国一の打撃陣にふさわしいのは、世代No. 1の俺だと言っていた。どうせ口だけのやつだと思っていたが、そんなことはない。明らかに自分とやっていることの次元が違う。

「最高のピッチングってやつは投手と捕手が一体になって作り上げる作品だろ？」

急造で組んだバッテリーなのに、おそらくキャッチャーの要求するボールを、高精度でその要求を越えるボールを投げ込む姿。これが御幸 一也の言っていたことかと直感させられる。

それだけ、というには衝撃的であったが、向井が次に言った言葉に更に驚かされた。

「次は右打者のアウトコース低めを掠めるボールを走りますね」

最初に聞いた時は、そこまで細かい調整なんてできるわけがないだろう。そう反射的に思った。

パアン！

一瞬の間があいて

「向井！ストライクだ！どんぴしゃ！ナイスボール！」

と御幸 一也が言った。

その言葉が示すのはつまり、向井が有言実行したということ。向井が御幸 一也のミットに続けて投げるのを真剣に見る。これが強豪、全国レベルのエリートピッチャーかと冷や汗が出てくる。地元に置いてきた仲間の顔が脳裏に浮かぶ。

「負けられねえ」

そもそも俺はまだ1球もボールを投げちやいねえ。見学にきたときの三振をとった感覚をもう一度味わいたい、ここで成長したいという思いもある。そして何より、泣きながらも笑顔で見送ってくれた赤城中のみんなの期待に応えたい。

「お願いしますー！」

向井の順番が終わり、自分の出番がくる。キャッチャーは変わらず

御幸 一也で、こちらに歩いて向かってくる。

「朝は悪かったな」

とニヤけながら話しかけてくるのは非常にムカつく。

「あんたのせいで結構ヤバかったんだぞ！」

「悪い悪い！でもまあここに立ててるんだからいいじゃねえか」

と笑いながら背中を叩いてくる。納得はできないが、ボールを受けるのはこいつだ。俺が大人になって我慢してやる。そんなことよりも、あのときの続きを！エリートなんかには負けていられるもんか！自分の力を試すんだろ！沢村 栄純！

「早くやりましょうよ」

「ん？」

「あいつじゃなくて俺がエースになるんだ。俺はアンタにボールを受けてもらいたくてここにきたけど、それだけじゃダメだ。あいつには負けたくない」

そう言うと、御幸 一也はきよとんとした顔をした後に笑い始める。

「なにがおかしい！」

「いや、なに、あの投球を見て東条以外は意気消沈しててな。あいつら以外はダメだと思ってたけど、お前はそんなやつだったよな。いいぜ、今できる全てを俺にぶつけてみるよ。受け止めてやる」

自分はマウンドに立ち、御幸 一也は座ってミットを構える。その的に向かって、全力で持ちうるもの全てを出しきるように、監督が止めるまで投げ続けた。

不安の種

新入生を迎え、青道高校は春季東京都大会への準備を進めていた。生活リズムを整え、早寝早起きを継続し、パフォーマンスの質を高めていく。4月にはいると、大会登録メンバーの発表があった。

背番号	学年	名前	ポジション	1	3年生	伊佐敷 純																																																												
ピッチャー	2	2年生	御幸 一也	キャッチャー	3																																																													
3年生	結城 哲也	ファースト	4	3年生	小湊 亮介	セカンド	5	3年生	増子 透	サード	6	2年生	倉持 洋一	ショート	7	3年生	滝川・クリス・優	レフト	8	2年生	西 影次	センター	9	3年生	門田 将明	ライト	10	2年生	真木 洋介	ピッチャー	11	3年生	丹波 光一郎	ピッチャー	12	3年生	榎原 悠翔	ピッチャー	13	3年生	宮内 啓介	キャッチャー	14	3年生	田中 晋	ファースト	15	3年生	遠藤 直樹	セカンド	16	3年生	楠木 文哉	ショート	17	2年生	樋笠 昭二	サード	18	2年生	白州 健二朗	外野手	19	3年生	坂井 一郎	外野手

「なあ、御幸」

「どうした？影次」

「登録枠一つ空けてあるのは、やっぱり1年生入れるためだよな？」

そう聞くと、御幸は一旦素振りをやめて、バットを地面に置く。4月になったとはいえ、日が落ちてからある程度時間の経過した20時頃の気温は肌寒い。

みんなが使っている室内練習場や中庭ではなく、俺と御幸、真木の3人で使っている、少し離れた場所で自己鍛練をしていた。そんな折の会話である。今は御幸と俺の2人だけだ。

「今年は豊作らしいからな。俺が受けたやつでは向井が飛び抜けてたわ。他にも面白そうなのはいただけだな。あれは即戦力じゃ

ねえわ。打者としていいやつ、影次目線で誰かいたか？」

「期待していた金丸はまだまだだったな。くるとしても秋以降だろう。今の時期に上がってくるとしたら南野か佐々木だろうな。俺だったら春は向井の情報を隠すよ」

「だよなあ。外野手でレギュラーなのは、現状守備がいい門田さん。白州もいい線いってると思うけど、あいつアピールが下手すぎるんだよな」

言われてみると確かに、白州は練習ではいい動きをしているが、試合でこれはという活躍をしたのを見ていない気がする。いや、いい仕事をしたなとは思うんだが、基本的に地味なのだ。

「打撃に穴がなく、守備と走塁も堅実な外野手。総合力ではレギュラーとつてもおかしくないとは思うけどな」

御幸の言葉に頷くことしかできない。

「話を戻すけど、バッティングのみなら南野だが、外野守備がよりできるのは佐々木だから、どっちが上がってもおかしくなさそうだな。キャッチャーとしての南野はどうだ？」

「新入生のなかでは一番上手いけどなあ。川上のボールはとれてたけど、楨原さんクラスになるとポロポロこぼしてたから、現状は使えないだろうな」

「特集されてた記事に強打の捕手！ってでっかく書かれてたもんな。守備に関してはあまり触れられていなかったから、そういうことかなとは思っていたけど。あの記事には稲城実業に進学か!?ってあったけど、青道に来るんだからどうなるか分からないよな」

今度は御幸がうんうんと頷いている。

「南野のキャッチングが急成長したら、御幸の立場危うくなるけどどうよ？」

「あいつは外野手、ファーストいけるから、そっちメインになるとは思うけどな。打線の厚みを考えると自然とそうなるだろ。まあキャッチャーとして争うなら負けねえよ」

「打線の厚みのことを考えるんなら、チャンス以外でももつと打てるようになろうな」

「うぐつ」

「それに、新チームでクリーンナップが俺以外1年生とか嫌だからな？」

そう言うと、御幸は苦笑いしながら頬をかく。1軍にいる2年生では、倉持は内野安打製造機。白州は地味な仕事人。御幸は得点圏のみの男。樋笠は不安定感ある打撃。

「今のままだと、上位打線で貯めたランナーを返す。ただそれだけの残塁処理係になってしまいうぞ？チャンスメイクもできるバッターにならないと、上位打線は厳しい。現状、俺達2年生は結構つらい立ち位置なんだよな」

3年生が頼れるという状況で隠れているが、実際のところ、野手として打撃に信のおける存在が、1軍の2年生には少ないのである。最近御幸、倉持、白州に少し成長が見られたくらいであろうか。現チームでは下手すると、南野や佐々木のバッティング次第では、更に1軍の2年生が減る可能性もある。

御幸は打点バグで評価がすごく高く、倉持は圧倒的な足の速さで目立っているからな。なおさら白州に長所が何も無いように見えてしまう。

白州よ、目立って生き残ってくれ！ついでに樋笠も！

そう思わずにはいられない。一緒に入學した仲間としては結構気になる場所であった。

「分かっているけどな。1年生投手が入ってきて結構大変なんだぞ。手がかかるしな」

「大半はクリスさんに押し付けてるだろ？」

「ばれてら」

そう言って御幸は舌を出す。

「当然だ。チャンス以外でも、もつとしつかり集中できるようにしないと、痛い目を見るのはお前だけじゃないぞ。引っ張られるだけの、先輩たちに甘えるだけでいい時期は過ぎている」

「……」

「それに丹波さんのことも考えないとな。相性とか関係なく――」

「ああ！もうわかってるって！やればいいんだろ？やれば！丹波さん何か言うとすぐへこんで、その姿見せないようにどつか逃げるから大変なんだぞ！あの無駄にプライドの高い心臓スペランカー野郎が！」
少し貯まっていたものを吐き出すように、御幸は声を荒げるが、俺や真木の前では時々こうなるのでビツクリはしない。ガス抜きは結構大事だ。

「丹波さんにも問題があるのは分かる。けど丹波さん先発の時に、いつもお前が打線から外れるだろ？そうなるとう上位で貯めたランナーを返す人がいなくなるんだよな」

「あー…確かに丹波さん先発だと俺はベンチだもんな…」

「先発は不安定で得点力は低下する。デメリットしかないからな。肝心な時にこれが響かなければいいけどなあ」

御幸と同時にため息をついた。

……

春季東京都大会、1回戦は純さんが5回を零封して17-0で、2回戦は真木が5回1失点と、秋からの復活をアピールして22-1で勝利をおさめた。

特に2回戦では、ライトに純さんが入ることで、想定以上に下位打線の厚みが増し、青道高校！昨年並みの破壊力！といったネットニュースが出るほどの脅威を、他のチームに与えていた。

その流れで3回戦に乗り込んだ青道は、3本柱の1人である丹波さんを先発のマウンドに送ったのだが

「ボール！フォアボール！」

「連打くらって失点して、次の回には連続フォアボールかよ！」

「丹波ー！しっかりしろー！」

3回までは安定したピッチングを見せていた丹波さんが、4回にシングルヒットを打たれると、あつという間に3点を献上する。なんとか守備のファインプレーで3アウトをとるが、つづく5回にも連続フォアボールでノーアウト1、2塁のピンチとなっていた。

打線は後攻ながらも7得点をあげているが、ピッチャーがしっかりと抑えてくれないと試合に締まりがない。投球のテンポが悪いことに加え、純さんや真木のように打撃が良いわけではないので、打線のストッパーになっており、ここまでいいところなしであった。まさに懸念通りの展開である。

5回表時点の青道オーダー

打順	名前	ポジション	打席	1番	小湊 亮介	セカン	
ド 左	2番	伊佐敷 純	レフト	右	3番	結城 哲也	
ファースト	右	4番	西 影次	センター	右	5番	滝川・
クリス・優	キャッチャー	右	6番	増子 透	サード	右	
7番	楠木 文哉	ショート	右	8番	門田 将明	ライト	
右	9番	丹波 光一郎	ピッチャー	右			

丹波さんに安心感を与えるためであろうか、3年生で固められた内野陣に、守備力を重視した外野陣。確かに丹波さんの心理的にはいいのであろう。だが、守備以外はどうか。

打線は4回7得点と、普通の高校であれば機能しているように思えるが、うちは打の青道である。下位打線で流れが完全に途切れてしまっているのはいただけない。いつもは御幸が7番や8番にいたおかげで、とりあえず後ろに回しておけば大丈夫という安心感があったのだが、今日はそれが無い。

それが上位打線の選択肢を狭めていた。楠木さん、門田さんも悪いバッターではないのだが、得点圏の御幸と比べると分が悪かった。「やっぱりこのチームの打線に御幸は必要だよな。下位打線にいいつがある」と爆発力が違うわ」

自分の中における御幸の評価を更に上げる。現実逃避気味に打撃のことを考えていたが、今はノーアウト1、2塁のピンチ。

自分たちが話していたことは当然、監督やコーチも考えているわけだ。今日のスタメンに監督からあらかじめ伝えられているのは、同点あるいは5点とられるまでに丹波さんが立ち直らなければ、すぐさま

槇原さんに交代するということ。

すんなりと抑えるときもあれば、弱気になってボコス力打たれるときもある。そんな不安定な投手を、今の豊富な投手陣に残しておく意味はない。一発勝負のトーナメントに不安要素は減らしておきたい。厳しいようにも思えるが、夏にベンチ入りできるかどうか、丹波さんへの試練だな。

周りを見渡すと、3年生メンバーは少し浮かない表情をしている。それもそのはず、同級生の、それも最後の夏に使ってもらえるかどうかを左右する試合だと、間接的に言われているのだ。2軍では川上、川島の2年生コンビが、落合コーチのもとで力をつけてきており、新入生に向井、東条という有望株もいる。決して脅しだけではないだろう。

そんな状態でも、結局やることは変わらない。打者とケースに合わせ、シフトを敷き、投手を盛り立て傷口を広げない。これに尽きる。精神的に大人びているメンバー揃いなのもあって、これくらいピンチは何でもないが、丹波さんだけがマウンドでテンパっていた。

ピスタチオの意地

青道高校でエースになる。丹波からその言葉を聞いたのはいつ頃だっただろうか。確か1年生の秋、同級生の真中が市大三高のエースになったと聞いた時が初めてだったはずだ。

ちやうど俺が正捕手として背番号をもらい、岸谷さんと藤谷さんに助けてもらいながら、投手陣のとりまとめなどを教えてもらっていた頃だ。丹波と槇原が育成枠として1軍に昇格し、藤谷さんに怒られながらも、指導してもらっていたのを覚えている。

最初は憧れである真中が通用せずに、1年の秋大会ですぐに姿を消したことに動揺し、丹波はまともな結果を残せていなかった。特に1度打たれると、真中が打ち込まれる姿を連想するからか、崩れることが多かった。そこからノミの心臓というイメージが付き、そのイメージの通りに打ち込まれる投手だと評価を落としていった。

2年生の夏には丹波は純粋な力不足と評価不足で、俺は怪我でお互いに20人枠から漏れ、スタンド要員となった。エースの武藤さんにサウスポーの井手さん。潜在能力抜群の真木に、2年生ながら安定感のある伊佐敷の壁は厚かった。

ストレートとカーブを磨いたが、20人枠に入れないことに葛藤はあっただろう。それでも夏の大会中にしっかりと現状を受け止め、試合を観る横顔は、秋以降は飛躍してくれるだろうと、そんな期待感を抱かせてくれていた。実際、徐々に投球は安定してきていたのである。

そんななかで、直接対決前日に連絡を取った真中がまたしても、そしてよりにもよって目の前で、1アウトも取れずに降板するという現実を突きつけられた。持ち直しかけていた丹波は、自身に味方するはずの打線に憧れを踏みにじられてしまった。

それを見た次の日、ノミの心臓が満を持して復活したのである。ストレートもカーブも悪くない。特に縦に落ちるカーブは全国クラスと言ってもいいくらいだった。この2球種だけでも通用すると思わせる実力はあるのに。

新チームではキャッチャーとして出場を許されず、試合中は外野から見ていることしかできない自分が悔しかった。そして丹波はそのまま怪我をして、秋大会では1軍から姿を消してしまった。

時は流れて怪我から復帰し、練習を再開したが、復帰してからも打たれるとどうしようもなかった。しかし、真中が春の甲子園を制覇したのを見て、思うところがあつたのだろう。ようやく丹波に変化が訪れた。

まず、打たれてもしつかり腕を振って投げるようになった。これはいい変化で、打たれたときもストレート、カーブ、そしてスローカーブをしつかりと投げ込むことができていく。

次に悪い変化だが、カーブ、スローカーブがゾーンに入らなくなつてしまったのだ。配給の軸となるボールが使えなくてはどうしようもない。

これでは試合を作ることができない。キャッチャーとしての勘を取り戻した俺と、その問題点を修正しようと2人で話し合うも、進展は今のところはない。

練習試合の相手が弱小であつたため、春大会前は通用したが、今戦っている相手は都内でも中堅く強豪を行き来する春日一。1巡目はストレートをゾーンに集め、カーブとスローカーブを見せ球にして打ち取っていた。それに相手に対応し、2巡目からは思いきつてストレート以外を捨ててきたのだ。

それが4回での乱調とも取れる3失点。春日一をストレートのみではなく打ち気をそらすように、カーブやスローカーブを混ぜるが、入らないものと割りきられているため、効果が薄い。結果としてはいつもの丹波と同じように見えるが、腕の振りは決して変わってはいないし、ボールも初回と同じだ。

俺よりもキャッチャーとしてのセンスが上回っている御幸なら、今の丹波をなんとかできるかもしれないが、丹波自身が御幸を避けている。ここは俺が丹波をコントロールするしかない。

カーブとスローカーブが入らないため、際どいところへストレートを投げようとすればするほど、ボールは思いどおりのコースへいかな

い。5回の先頭から2人を歩かせると、ベンチからタイムがかかり、マウンドへ内野が集まる。

伝令としてやってきたのは槇原で、その姿を見た丹波は緊張した顔をしている。俺が

「丹波、投手交代じゃないぞ?」

と言うと丹波は顔を真っ赤にして大きく息を吐く。槇原は

「落合コーチから伝言で、お前ならストレートだけでも抑えられる打線だ。気楽でいい。ただ、下半身の体重移動に神経を集中させるように、だそうだ」

「下半身の体重移動?常にやっているが」

「うまくできてないってさ。より下半身を意識しろだ」と

丹波の言うとおり体重移動はできているはずだが。わざわざこれを言うには意味があるはずだ。そう考えていると槇原が去り際に小さな声で耳打ちしてくる。

「常に力みがある。腕は振れてはいるけど硬くなって、特にカーブ、スローカーブの時に指がかかりすぎているかもだつてさ」

もう少し詳しく聞きたかったが時間なので仕方ない。

「丹波」

「なんだ?」

「体重移動はできてると思う。もつと腰あたり、腹筋や背筋とかを意識して投げてみてくれ」

「わかった」

そう言葉を交わしてホームへと戻る。徐々に腕に力みがある状態になるのだとしたら、ずつと受けている俺にもわかるはずだが、正面より横から見た時の方がわかりやすいのだろうか?

試しに体幹を意識するようには言ってみたが、果たしてどうであるか。ストレートのサインを出して、右打席にいる2番打者のアウトコースよりも外にミットを構える。

丹波がセットポジションから始動し、ムチのようになつた右腕からボールが放たれる。

バアン！

「ボール！」

打者は思わずこちらを振り返り、自分の目が見開くのがわかる。タイムを取る前よりキレが圧倒的に増し、軌道から予測したところよりも高めにボールがきた。打者の反応からして、質が違いすぎてびつくりしたのであろう。打席を外して素振りをし、調整している。

「ナイスボール！」

投げた本人も驚いているようで、返球を弾き、あわや進塁されかけますが、なんとかボールを拾い直して周りを威嚇する。手応えがあつたからって、頼むから変な方向へいかなくてくれよ。そう願いつながらインコースにミットを構える。コースに決まらなくてもいい。今のお前ならいける。

バアン！

「ストライク！」

多少甘いコースへきたが、バッターは手が出ない。続いて高めに要求したストレートはゾーンよりも上にいくが、バットには当たらず2ストライクボールとなる。

「よっしゃー！丹波！追い込んだ！」

「最初からやれや！」

野次は飛んでくるものの、飛ばしたやつは笑顔を浮かべている。これで追い込んだ。不安要素はあるが、丹波といえはこれだろう。サインを出してミットをアウトコース低めに構える。丹波はいつになく気合の入った表情で頷く。

「腹筋意識しろよ！」

そう言うと、丹波はハツとした顔をした後に微かに笑う。……こい……ここに投げ込んでこい！

ほどよく力の抜けた鋭い腕の振りから放たれたボールは、絶好球と思つてフルスイングした打者のバットを、まるで鎌で切り裂いたよう

な軌道で、ホームベース直前の急激な変化でぐり抜け、ついではかりに俺の構えているミットの更に下を抉っていった。

「走れ！ボールとすんな！」

「クリス！後ろだ！」

くそっ！キレがありすぎてギリギリ体が追い付かなかった！すぐさま反転してボールを取りに行くが、振り逃げによりノーアウト満塁となる。タイムを取って丹波の元へ向かう。

「すまん！クリス！」

「ナイスボールだったぞ丹波」

「え？でもコントロールが」

「いや、俺の想像を越えたカーブだった。」

そう誉めると丹波は若干顔を赤くする。様子をうかがうが、特に焦ったような感じはない。

「ストレートとカーブの両方良い感じだった。次は止めてみせる。信じて投げてくれ」

そう言うと丹波は深く頷く。

ホームに戻ろうとすると、3番打者と視線が交錯するが気にせず、次の配球を考える。ストレートの質だけでも押せそうだが、カーブをやはり有効的に使いたい。この3番も右打者で、力というよりは技術で打ってくるタイプ。

インコースにストレートを要求する。丹波は特に緊張した様子を見せずにボールを投げ込んでくる。

ギーン！

「セカンド！」

小湊がしっかりと落下点に入りポップフライを難なく処理する。

「1アウト！」

「丹波いいボール投げるじゃねえか！いつもそれやれ！」

丹波にも笑顔が見られる。だがここで俺も喜びを表して気を抜いてはいけない。次は左打ちの4番、ここまで2打数2安打と完全に丹

波に合っている。先程とはキレが違つて別物になつてはいるが、しっかりとネクストサークルでタイムリングをとつていた。

3番は完全にストレートを狙いだつたから、簡単に打ち上げてくれたが、この打者にあまり隙は見られない。アウトコースに入らなくてもいいからストレートを。ミットを構え、丹波の目を見ると、丹波はしっかりと領きストレートを投げる。

「ボール！」

わずかに低めに外れたストレートの、反応を見せるがバットは出してこない。こいつもストレートを狙つているか？ならばインコースにカーブを、甘くてもいいから投げ込んでこい。若干甘めのところに構えると、丹波は少し目を見開くが領く。

パァン！

一瞬の間が空いて審判はコールする。

「ボール！」

ふうーつと打者は息を吐き、丹波は渋い顔をする。あまり顔に出してほしくはないが仕方ない。手が出なかつたような感じであるが、変化量が増えたぶんコースを外れた。できれば甘いところでも入れて欲しかったが仕方ない。

続く3球目でインコース高めのストレートを見せた。1ストライク2ボールとバッティングカウントであるが、この打者はどうかるか。低めのカーブを要求すると、ワンバウンドのボールとなる。なんとか体で止め、追加点は阻止したがこれ以上ボール球は使えない。

次のボール、ストレートの質を信じて押しきるか、カーブを要求して一か八かの勝負をするか。カーブがワンバウンドした映像が頭をよぎる。ストレートを選択し、アウトコースにミットを構える。投げる直前の丹波の顔を見てハツとする。

キーン！

綺麗な金属音が響き、右中間にボールが飛んでいく。……甘いコー
スへ……自分の迷いが丹波に伝わったのか、得意球のカーブを避けて
守りに入ったからか。完璧に捉えられた打球はバウンドすると、急激
に球足が遅くなる。

「ボール・内野へしつかり！」

やや深めに守っていた影次が懸命にボールを拾いに行き、すぐさま
小湊へ送球する。ランナーが2人還って、7ー5の2点差、1アウト
1、3塁となる。

すると丹波と俺の交代が告げられ、いつの間にか準備していた伊佐
敷がピッチャー、御幸がキャッチャーに入る。冷静に周りを見ること
ができていると思っていたが、気負っていたのは丹波だけじゃなかつ
たらしい。

「すまん」

互いに謝り、顔を見合わせて苦笑いする。さて、2人で片岡監督の
説教を受けに行くかと、歩幅を合わせて青道側ベンチへと駆け足で向
かっていった。



センターから見ていて、あのボール打ちたいな。そう思わされる
ボールを、丹波さんは一瞬ではあるが投げていた。最後はいつもの
ボールだったが、あのカーブは真中さんのスライダーにも匹敵する魔
球だと直感した。

7ー5の2点差まで迫られ、1アウト1、3塁。いかに安定感ある
エースの純さんとはいえ、流れを掴んだ打線というのは怖い。

しかし、御幸はクリスさんとは違い、投手の本能を掻き立てるよう
な、一貫した攻めるリードで、簡単に無失点で切り抜けて見せた。

バランスのとれたリードをするクリスさんと、嵌まると強い攻めた
リードに徹する御幸。ピッチャーが強かった去年の投手陣だと、クリ
スさんのリードが光るだろう。しかし、今年のようにキャッチャーが
手を引っ張ってあげないといけない投手陣だと、要所では御幸のリー

ドの方がベストな場合が多く見られる。

エースが吠えて流れを完璧に変えることができた。ピンチを切り抜けた後にチャンスがくる。手繰り寄せられたチャンスをものできる打線が、うちのチームには存在している。

カキイン！

ネクストサークルから、哲さんがダイヤモンドを一周するのを見守る。打者一巡を越える猛攻でこの回9得点目。哲さんのスリーランホームランで16ー5の11点差がつき、5回ワールド勝ちを記録した。

ベンチへと目を向けると、真剣な顔で話し合う丹波さんとクリスさんの姿があった。そこには打たれて降板させられた投手とは思えない、しっかりと前を向いたエースもどきの顔があった。

次なる相手

4回戦を前日に控えた練習中のことである。

パアン！

「ボール！」

シートバッティングで、明日登板予定のない丹波さんと、1軍に昇格した唯一の1年生 南野との対戦を見ていた。3回戦以前とは違い、適度に力の抜けたフォーム。ストレートはキレを増し、カーブは魔球へと進化。スローカーブは決め球へと昇華した。

化けるやつは一瞬で化ける。その言葉を片岡監督から聞いたことはあるが、これはやりすぎだろう。信頼感は純さんの方が上だが、この状態を維持できるなら、実力的には丹波さんの方がエースにふさわしい気がする。精神面は考慮しないのであればだが。

ケースは1アウト満塁で前回降板した状況とほぼ同じで、打者である南野は左打者。南野は今までのバッティングを見る限りは、大振りをせずに、鋭いスイングで確実にボールを捉える中距離バッターに思える。

現在は1ー1の平行カウントで、初見のカーブを南野は、見極めたというよりは手が出なかつたようだ。南野は力みを取るように体をよじつてからバットを構える。インコースのストレートを観察するように見逃して2ストライク1ボールとなる。

丹波さんは大きく息を吐いて、クリスさんのサインに頷くと、4球目をしっかりと投げ込んでいく。バックドアとなるカーブが、ゾーンに挟り込んでいく。

パアン！

「バッターアウト！」

南野のバットは当たらず、クリスさんはしっかりとカーブを捕球す

る。

「ナイピッチャー！丹波いいぞ！」

「前の試合でそれができてたらな！」

さっきのカーブは3回戦のときとは違って、ゾーンにしつかりとコントロールされていた。まだ完璧にゾーンの内外と投げ分けることはできないが、それでも十分使えると思わせるボールとなっていた。丹波さんも少しずつ修正してきているようだ。

南野のバッティングに関しては、まだまだ遠慮がある。というよりは慎重になりすぎていると言った方が的確であろうか。中学時代では経験し得なかったキレのあるボールに対して、どこか受け身になっているように感じる。

単純なバッティング練習では良い打者だと思えるので、1軍の経験を大事にしてもらいたい。先程は、追い込まれる前に投げられた、インコースのストレートを打ちにいっていればまた違った結果だっただろう。

スイング自体は悪いものではないし、本人の考え方があってであろうから、見守ることにする。まだ入ったばかりの1年生、色々やってみればいいと思う。

丹波さんは、続く哲さんにタイムリーツーベースを打たれるが、チャンス時の御幸をカーブで抑え、雄叫びを上げた。打たれると弱気になる、腕の振りが鈍くなる弱点を、ある程度は克服できたのではないかと感じる投球だったためか、見学していたOBから拍手が贈られ、丹波さんはそれに対して嬉しそうにしていた。



ドラフト注目のキャッチャー 原田 雅功を擁する稲城実業は、午
前中にベスト8を決めていた。原田は昼食を軽く取ってから、ベンチ
入りメンバー全員を引き連れて、勝者が準々決勝の相手となる4回
戦、青道―帝東の好カードをスタンドから見ている。

青道は2年生の真木が先発で、帝東は右腕エースの下松が先発。青

道はフルメンバーで勝ちにきているため、圧倒的に青道有利だろうな。そう思いながらしつかりと青道のオーダーを確認する。

青道 スターティングオーダー

打順	名前	ポジション	打席	1番	倉持	洋一	ショール
ト	左	2番	小湊 亮介	セカンド	左	3番	結城 哲也
		ファースト	右	4番	西 影次	センター	右
		川・クリス・優	レフト	右	6番	増子 透	サード
		番	御幸 一也	キャッチャー	左	8番	真木 洋介
		チャー	右	9番	白州 健二郎	ライト	左

市大三高の神宮寺、平川の二遊間と比べても、遜色ないと個人的には評価している、倉持と小湊のコンビ。倉持は打者としてはそうでもないが、泥臭くても出塁に拘るようになったように思える。走者としてはうちのカルロス並みと言っていいだろう。

この試合で2番にはいった小湊は選球眼、当て感共に優秀で、まさに2番といった選手。倉持の成長でようやく収まるべきところに収まったような形か。

クリーンナップは去年の怪物打線に当たり前のように組み込まれていた、結城、西、滝川の3人。正直言うと、この3人に対しては今の成宮ですら、打ち取れるビジョンが浮かんでこない生粋の強打者。2年生ながら4番に座る西はその中でも別格で、あの成宮本人からも弱音を聞いたことがあるほど。要注意だろう。

更にその後ろにも増子、御幸といった打者が続くため、得点力であれば市大三高よりも怖い。夏の前哨戦としてチェンジアップを封印した状態で挑むつもりだが、果たしてどうなるか。

初回から青道はガンガン帝東を攻め続け、エース 下松を疲弊させてあつという間にノックアウトした。春の甲子園前の練習試合で、俺達を相手に好投していた投手を、難なく攻略する姿に啞然とする。

3回表、先攻の青道は軽々と得点を積み上げて12-0と大量リ

ドをしていた。噛み合い、完成しつつある今季青道打線の破壊力を目の当たりにして、隣にいる成宮でもさすがに口元を引くつかせ、カルロスや白河は苦い顔をしている。

「あいつ更に強くなつてやがる」

とカルロスが呟けば、

「西の三振はあの兵藤さん相手以来記録なしか？……それであるの長打力……今大会5本目のホームラン。やばすぎる」

白河が冷や汗をかきながらぼやく。

「ふん！去年よりは怖くないと思うけどな！それに敵はでっかければでかいほど倒しがいいがあるつてもんでしょ！」

成宮は強がるが、成す術なく降板し、最後にいたっては暴投した帝東エースが項垂れているのを見て、そこに去年の自分を重ねたのか少し青い顔をしている。これではいけない。戦う前から負けている。

「春の甲子園には俺達がいってたが、やはり本命としてはこの青道と市大三高が飛び抜けている。そういった評価が一般的だし、俺もそう思っている。というより思わされた」

周りのチームメイトは何も言わず、先を促してくる。

「努力量では負けていない。来年はうちが本命と言われているが、俺達は甲子園で、今のチームでベスト8と実力を示してきた。決して俺達は弱くない。胸を張って青道と戦うぞ」

「「おうー」」

俺が揺らげばチームが揺らぐ。甲子園で当たったチーム以上の圧力を感じる青道に対して、臆していないと言えば嘘になる。俺達の代で夏を制覇できなくても、確かな才能を感じさせる成宮たちにせめて何かを残してやりたい。そう思った。

いやでも勝ちてえな。

……

試合は結局、青道が5回16-0でコールド勝ちをおさめた。東京

都の5強と数えられた帝東を圧倒する青道の存在に、各校の偵察班は頭を抱えている。

昨年同様、並みの投手では抑えることが難しい打線。そして、今日に至っては、好投手ですら相手にしなかつたため、去年の青道1強状態を思い出した人が多かつたみたいだ。

「鳴、次の試合は全力で抑えにいくぞ」

「雅さん！それってアレを投げていいってこと？」

「アレはダメだ。夏に残しておけ」

「……まあ、そうだよね……あれだけの打線だし、油断もできそうにないね」

「そういうことだ。春は俺達が結果として甲子園にいったが、王者青道と直接戦ったわけではない。それに俺が稲実に入ってから1度も直接対決で勝ったことはない。負け続けているんだ。その因縁をここで断つぞ」

そう言ってお互いに拳をぶつける。青道―帝東の試合を見て弱気になっていたが、言葉にすることで決意が固まった。あの南野さんですら神経を磨り減らして投げ込んだ怪物打線。それと比べるとクリーンナップ以外は劣ってはいるが、十分全国一と言える打線だろう。

そして、うちに入ると期待していた南野さんの弟が、青道の背番号20をつけてベンチ入りしているのを見て、歯ぎしりする。うちに入っていれば、今は基礎練習を主にさせている降谷とコンビを組ませたのに。

実際うちの捕手事情はかなり悪い。俺と控えの3年生捕手以外に、成宮や降谷のボールを十全に捕れる捕手は不在で、なんとか1年生の多田野が、必死に根性で付いていこうとしているくらいだ。

現チームでは俺が投手陣をリードしてやれるが、秋以降は成宮に捕手陣をリードしてもらわねばならない。この生意気な後輩がしつかりと多田野たちを導けるか疑問ではあるが、それはこいつらの問題か。今は全力で青道を、市大三高を破ることに注力しようと気合いを入れ直した。

春季都大会 準々決勝 part 1

朝、いつも通りに起きて素振りをし、自身の状態を確認する。うん、思いどおりに動く。

4月に入ってはいるが、いまだ太陽は出ず、ほとんど暗闇である。少しだけ辺りを照らす外灯がポツンと寂しくあるのみで、そこを中心として朝型のメンバーで自主練習をする。

同室の金丸はやや遅れてではあるが合流し、積極的に自主練習に参加してくる。実力的にはまだまだだが、根性があるため今後に期待したい後輩だ。

しっかりと体をならして、動けるように調整すると、朝食を比較的軽めにとって腹ごなしをし、バスへと乗り込む。今日の朝9時から行われる第一試合。青道―稲城実業の試合を見に来ようと、既に球場にきている人もちらほらと見受けられる。

アップを終え試合前ノックをこなし、両チームのオーダーを確認する。

後攻 青道 スターティングオーダー

打順 名前 ポジション 打席 1番 倉持 洋一 ショート
左 2番 小湊 亮介 セカンド 左 3番 結城 哲也
ファースト 右 4番 西 影次 センター 右 5番 滝川・クリス・優 レフト 右 6番 増子 透 サード 右 7番
伊佐敷 純 ピッチャー 右 8番 御幸 一也 キャッチャー 左 9番 門田 将明 ライト 右

先攻 稲城実業 スターティングオーダー

打順 名前 ポジション 打席 1番 神谷 カルロス センター 右 2番 白河 勝之 ショート 右 3番 吉沢 秀明 サード 右 4番 原田 雅功 キャッチャー 右 5番 成宮 鳴 ピッチャー 左 6番 山岡 陸 ファースト

右 7番 平井 翼 セカンド 左 8番 梵 勝美 レフト
右 9番 富士川 慎也 ライト 左

センターの守備について周りを見回すと、これまでよりも多くの観客がスタンドに入っているのがわかる。チームとして場数を踏んできたからか、うちには気負った選手はおらず、声を積極的にかけあう。試合が始まると、純さんはいつも通りボールを低めに集めて、神谷、白河を簡単にゴロで仕留める。3番の吉沢さんに対してはチェンジアップを見せ球に、最後はフォークで三振を奪って初回を切り抜けた。

1回裏、先頭の倉持は後ろにボールを見せようと、打てるボールを見逃してしまい、結果として3球目のカーブを引っかけて、セカンドゴロに終わる。

亮さんに何か呟かれた倉持はギョツとした顔をしてこちらを見ていたが、何を言われたのだろうか？いつものチクチク言葉だろうしスルーでいいか。

2番の亮さんはファールで粘り、成宮をイライラさせていく。

キーン！

亮さんは、10球目のスライダーをレフト線にポトリと落として、シングルヒットで後ろへと繋げる。通常なら2塁まで行けそうだが、レフトがしっかり前に守っていたようだ。1塁上で亮さんがニコニコと煽るように成宮を見て、それに対して成宮は更にイライラとしていく。

「3番 ファースト 結城くん」

流星に哲さんがバッターボックスに入るとスイッチが入ったのか、イライラした雰囲気はあるものの、集中力が増したように見える。成宮は持ち球であるスライダー、カーブ、フォークを駆使して打ち取るうとするが、哲さんはことごとくファールで粘る。

「ボール！フオアボール！」

「なにやってんだー！成宮ー！」

「しっかりしろやー！」

成宮に対して一般客から野次が飛ぶが、際どいところを攻めての四球だから仕方ないだろう。右打席に立つと成宮がニヤリと笑う。初球のストレートが原田さんの構えたミットにおさまる。

「ボール！」

アウトコースの低めへと外れる。スピードは出ているが、キレとコントロールではOBの井手さんには及ばない、そういつた評価をくだす。なるほど、これなら亮さんと哲さんが成宮のボールを、それほど苦にしていなかったのに納得がいく。いいピッチャーだけど、それを上回る井手さんを知っている俺達なら打てる。

それでもしっかりと球筋を見ておきたい。2球目のカーブがインコースに決まるのを見送り、3球目のストレートが高めに外れるのを観察する。動きがないのを不気味に思ったのか、成宮の表情が若干曇る。

4球目、インコースのストレートを思いつきり引っ張る。

カキーン！

ライナー性の打球はグングン伸びていくが、レフトポールの左側スタンドに着弾する。

「ファ、ファール！」

おお、というどよめきと共に、成宮を心配するような声が稲城実業側スタンドから聞こえ始める。思った以上にキレがなくて打ち損じた。春の甲子園での疲れが抜けていないのか？それともスロースターターだからだろうか？本調子ではなさそうだ。再びバットを構えると、成宮がサインに首をふり続ける。

打ち合わせミスでもあったのか、キャッチャーの原田さんはタイムを取って、成宮のいるマウンドへ走っていく。軽く素振りしながら2人のやり取りを見ると、強情？な成宮を原田さんが説得しているよ

うだ。

とりあえずは結論が出たのか、原田さんがホームへと戻ってくるが、成宮の表情は何かを我慢するような感じだ。何かやろうとして止められたのか？だとしたら今までの球種でくるはずだ。バットを構え、成宮の様子を窺う。

不満そうな表情のまま領き、投球モーションにはいる。スイングを始動するが思ったよりボールがこない。

「っ！」

足元を崩されるが粘って腕だけを残す。

パアン！

「ストライク！バッターアウト！」

なんとか踏ん張って残していたバットの下を、ボールがぐり抜け、空振り三振となる。今のは……チェンジアップか……？成宮を見るとこちらをニンマリとした笑顔で見ている。感情的なイメージが強かったが、さっきの不満顔は演技らしい。

「やられた。次は打つからな」

「へんっ！何度だって同じ結果だよ」

すれ違うクリスさんに、チェンジアップのキレは井手さん並みで、若干右打者から離れていくスクリーン気味の変化をすることを伝える。

「クリーンナップと亮さん、チャンスの時の御幸とかだったら打てそうですね」

「なかなかいい変化球みたいだな」

「ええ」

ついでにネクストの増子さんにも情報を伝え、ベンチにも共有する。片岡監督に

「影次、あれを打てるか？」

と聞かれたので

「初見じゃなければ打てます」

と答える。その言葉を聞くとベンチの雰囲気は安心感のあるものとなり、成宮が緩急を使うということに落ちかけたテンションが回復したように感じた。4番打者としてぶれない、安心感を与える姿を見せ続ける。

兄貴は4番というわけではなかったが、常に心がけていたであろう態度。自分ではまだあの域に達しているとは思えないが、せめて行動だけでもそれを真似しようと、オフ明けから心がけている。

キーン！

クリスさんは浮いたストレートを強打する。打球はレフト方向への強いゴロとなるが、ショートの内野手が追い付き、1塁へと送球する。

「アウト！」

「あつぶねー！」

成宮のボールは調子に乗ったためか浮わっていたが、ボールの質は俺を打ち取ったことで上がっているように見えた。さつとスコアブックを見ると、成宮の球数は1回で30球を越えている。先発を担う成宮との対戦は初めてであるが、他校戦ではスロースターターなのが目立っていたから、球数を稼ぐだけでなく、できれば先制したかったが仕方がない。気を取り直して守備につくのであった。

純さんは4番 原田さんから始まる稲城実業打線を三者凡退に仕留め、すぐに2回裏、青道の攻撃へと移る。ベンチに戻った俺達に片岡監督は指示を出す。

「チェンジアップは球筋を見るだけで捨てていい。他の甘い球を狙っていけ。相手の隠していた球種を見れるだけでも今日の試合は価値がある」

「はいっ！」

先頭の増子さんは粘るがサードゴロ、純さんは四球で出塁する。

「8番 キャッチャー 御幸」

御幸がバッターボックスに入ると、成宮のテンションが若干上がった

たように見える。初球、何かを諦めたような原田さんからサインが出ると、成宮は思いきって振りかぶる。ブレーキのよく効いたボールが、御幸を斬り捨てるように急激に落ち、ベース上でワンバウンドする。

「ボール！」

なんだろうな。俺と御幸に対しての対抗意識が強いのか。見せつけるように新球種を投げってくる。1塁ランナーの純さんへのケアは十分で、盗塁は難しそうだ。それでも普段から口うるさく言っているからか、御幸は前よりは集中できているようだ。

「ストライク！バッターアウト！」

それでも中途半端で、都内N.O. 1左腕と言われている成宮の球は打てなかった。ここから更に成宮のエンジンがかかり、9番の門田さんはバットに当てることすらできず、三球三振に仕留められた。

春季都大会 準々決勝 青道―稲城実業の試合は、点取り合戦になると多くの人々が期待するなか、投手戦の様相を見せ始めていた。

春季都大会 準々決勝 part 2

試合展開が落ち着き始め、両チームのエースはテンポよく投げ込んでいく。3回表、純さんは先頭打者の平井さんを歩かせてしまいが、続く梵さんをショートフライに、9番 富士川さんをセカンドゴロからのダブルプレーで切り抜ける。

純さんの投球に呼応するように、成宮も徐々にギアを上げていく。1番から始まる青道打線に外角攻めを基本として、倉持と亮さんを力で抑え込む。

「3番 ファースト 結城くん」

「キャプテンー！」

「哲ー！頼むぞー！」

哲さんへの声援がグラウンドを埋め尽くす。プロ球団からのスカウトがよく訪れる青道の中でも、かなりの人気と実力を誇るキャプテンが、稲城実業エース 成宮と対峙する。

気温が上昇してはいるが、まだ少し肌寒い。しかし、そんな微妙な気温を感じさせないほど、キャプテンvsエースの対決を見て、スタンドでは熱狂的に応援するファン達がいた。

初球、先ほどとはうってかわって、インコースへのストレートがミットを揺らす。

「ストライクー！」

「おおー！」

「146キロ！自己最速更新してるじゃないか！」

これまで観察してわかったのだが、成宮はスロースターターだっただけでなく、今日は初回から身体全体の動きが硬かったようだ。球数を多く消費したことで硬さがとれ、十全な動きができるようになったが、その代償としてスタミナを無駄に消費している。

その一方で、ボールの質自体はかなり良くなり、哲さんでもついていくのがやつのようだ。5球目、アウトコースのカーブをファールにして2ー2の平行カウントとなっている。

お互いに一息つき、哲さんはバットを力感なく構え、成宮は適度

に脱力して原田さんのサインを覗き込む。特等席であるネクストには、哲さんの必ず打つ、打って繋げるといふ強い意志が伝わってくる。無意識にバットを強く握りしめていた手を緩め、

「哲さん！俺に回してくださいね！」

と叫ぶと、ヘルメットの鍔を左手で軽く触って返してくれる。

成宮がサインに頷き、静止するとスタンドからの声が弱まり、マウンドの成宮に視線が集中する。その視線をもともせず、成宮は打球動作を開始し、渾身の力でボールを指先から放った。

ミットに向かって直進するボールが、ホームベース上でバットに弾かれると、ショート白河のグローブを避け、左中間を破ってバウンドする。

歓声を受けながら哲さんは、2塁を陥れてガッツポーズをする。最近自身は自身のバッティングで流れを作るなど、更にキャプテンの貫禄が出てきたな。そんなキャプテンが作ってくれたチャンス。ここでものにしないと

「4番 センター 西 影次」

この打順に俺がいる意味がない！

少し気合いを入れてバッターボックスに入る。前の打席では、初見のチェンジアップにやられたが、流れをこちらに持つてくるためには、今回はやられるわけにはいかない。

適度に力を抜いて、成宮を観察する。ボール自体のキレは良くなっているが、コントロールが抜群にいいわけではない。何よりここまでチェンジアップは俺と御幸に投げた2回だけで、ただの見せ球だった可能性がある。

身体を軽く捻って、ぐつと腕を伸ばしてからバットを構える。ストレート、カーブ、チェンジアップは見る事ができた。後はスライダーとフォークを打席では見せてもらっていない。

軽く息を吐いて呼吸を整える。先程は慎重にアウトコースから入って、途中インコースについてからのチェンジアップで決めてきた。今回はどう攻めてくるか。2アウト2塁の場面だが、積極的に4番に勝負を仕掛けてくるだろうか？

初球、インコースのストレートが外れて、ボールカウントが1つ増える。2球目もインコースヘスライダーが外れて2ボールとなる。ここまで反応を見せていないが、投げづらそうにしているのが分かる。というか表情に出ている。

いまだにストライクカウントはないため、アウトコースに山をはって待つてみる。成宮がボールを放つと同時に、俺は思い切り左足を踏み込む。

「ボール！」

アウトコース、打ち頃の高さから鋭く落ちるフォークを、完全に見切つて見逃す。昨年の兵藤さんのフォークと比べると、質としては低いな。再び軽くストレッチをしてバットを構え、余分な力を抜く。

4球目は甘い球のみ狙つて待つていると、アウトコースの厳しいところヘスライダーが決まり、1ストライク3ボールとなる。見せ球と思われるチェンジアップは来ないと思うが、次はどうくるか。球筋はすべて確認しているため、1球は余裕を持つて見逃すことができる場面。

成宮が領き、放たれたボールはインコースへと厳しく挟り込んでくる。

パン！

「ストライク！」

こういつた緊迫した場面で、インコースヘのスライダーを投げ込める。2年生ながらさすが稲城実業のエース。ゆつくりと地面をならしてバットを構え、成宮の様子を窺う。逃げるなら3ボールの時点で外すはず。決め球として使えそうなのはストレート、スライダーの2球種。これにチェンジアップが絡んでくるかどうか。

どんなボールにも対応できるように、身体全身から力を抜いて、バットに手を添えるだけのイメージで打席に立つ。成宮は地面を蹴りあげ、腕をしならせる。

ギイン！

詰まった打球がサード方向へ飛んでいく。

「ファール！」

サードの吉沢さんはグローブを伸ばすが、ギリギリ届かず、ボールはファールゾーンへ落下する。スライダーを追いきれなかった。自分のなかで成宮の変化球を上方修正して次のボールを待つ。

ギイン！

「ファール！」

更に3球粘り、お互いに集中を増して勝負に入れ込んでいく。サインを見て、成宮がより意気込んだ顔になる。もしかして思いながらも首を1度回してバットを握る力を調節する。風は特になく、強くなってきた日差しはとても心地よい。

下半身をより意識して次のボールを待つ。成宮は腕をしつかりと投げ込んできた。腕の振りは鋭く、ブレーキの効いたボールが、少し高めの位置から急激にスクリー方向へとスライドする。下半身は若干崩されたが、ヘッドの位置はそのままバットを振り切る。

鈍い音をたててボールが速い球足で転がっていく。ファースト山岡のグローブとセカンド 平川さんのグローブの間を鋭く破り、ライト 富士川さんが捕球して内野がボールを受け取った頃には、哲さんがホームを踏んで喜びをあらわにする。俺は1塁上でガッツポーズをして

「なんとか対応できたか」

と呟いた。

続くクリスさんの左中間へのヒットで、2アウト1、3塁とチャンス拡げるものの、増子さんは空振り三振となり攻守交代となる。

ノリにのってきた成宮からの先制点で状況は動き出す。4回表、稲城実業は1番 神谷からの好打順。ボールを引き付けるバッティ

ングで、しぶとくレフト前のテキサスヒットを放ってくる。神谷は1塁上から盗塁を仕掛けようと揺さぶってくるが、純さんは丁寧な牽制とそこそこのクイックで盗塁をさせまいとする。しかし

「セーフ！」

神谷は抜群のスタートをきって2塁を陥落させる。スイングで盗塁のアシストをした白河はスリーバントではあるが、しっかりとバントを決めて1アウト3塁となる。この試合初めてのピンチでクリーナッツを迎える。

▽

「3番 サード 吉沢くん」

吉沢が呼ばれるのをネクストに入りながら聞く。1点ビハインドになった直後の攻撃で、後輩が作ってくれたチャンス。自分がキャプテンとして、エースの相棒として、4番としてできること。確実にこの回で少なくとも同点に持つていくこと。タイミングをとりながら軽く素振りをする。

青道エースである伊佐敷は小柄ながらも、身体全身を大きく使ったピッチングをする。140キロを越える直球、ツーシーム、スライダー、フォーク、チェンジアップを丁寧に低めに集めてくるピッチャー。コントロールはピンポイントではないものの、毎回試合を安定してつくる様は敵ながら見事というしかない。大崩れしない印象がある。

吉沢に対してストレートを軸に強気の投球をしてくる。キャッチャーが御幸の時にハマると、ズルズル完投を許してしまうチームが多い。今日もインコースへのストレートが多く、それに手を出そうとするとスライダーで逃げる配球も混ざってきてかなり厄介だろう。

「アウト！」

吉沢がファーストフライに倒れ、悔しそうな顔をして戻ってくる。俺は吉沢の右肩をポンツと叩き、

「次は頼むぞ。この回は俺がやってくる」

「すまん、任せた」

バッターボックスに入る。

「雅さん！後ろには俺がいるからねー！」

「原田ー！ー本頼むぞー！」

周りからの声、信頼に後押しされてバットを短く構え、手から余分な力を抜く。チラツと御幸が俺の手元を見てくる。ここで点を取れなければそのまま負ける。やるしかない。

初球、アウトコースへボールがくる。短く持ったからといって御幸が安直に要求するか？バットを振りたくなるのを懸命に下半身で押し留める。

「ボールー！」

わずかに低めに外れるチェンジアップの軌道を目に焼き付けられてしまう。あわよくば簡単にゴロで終わらせようとしてきたか。おそらく次は速球系だろうが、まだストライク2つぶんの余裕がある。あえてチェンジアップのみに絞る。

パン！

「ストライクー！」

外へのスライダーを見逃して1ー1の平行カウントになる。伊佐敷の表情からは何も読み取れない。バットを構えて相手を見据える。必ずこのバッテリはインコースを見せてくるはず。それをたたく！

伊佐敷が投球動作を開始して、ダイナミックなフォームでボールを投げ込んでくる。アウトコースへのストレートを見逃す。

「ストライクー！」

2ストライク1ボールとバッター不利のカウントとなる。これでコースに拘ることもできなくなった。ここからどうするか。

「雅さんー！ごちゃごちゃ考えすぎ！バッティングなんてきたボールを打っただけでしょ！」

うちのエースの言葉に脱力する。いつの間にか変な力が入って

いたか。センスで打ってる成宮とは違うし、俺は読んで打つタイプなんだがなと思いつつ、成宮の普段と変わらない態度が少し笑えてくる。俺は4番だからよ。ここでやるしかないよな。

伊佐敷が投げたボールは、インコースから逃げていく。それをバットでなんとか絡めとり、前へと押し出す。反応したショート 倉持が俊足を発揮し、ボールへと追いついていく。その行方を確認することなく1塁へと走りだす。

周りの歓声、悲鳴がうるさいが、1塁を駆け抜けた後に、審判の声が耳に届く。

「セーフ！」

どうなったかわからないが、吉沢がホームで成宮とハイタッチをしているのを見て、同点に追い付いたのを把握する。俺が見ていることに気がつくのと、成宮はこっちに向かって手を軽く上げる。

頷くことで返事とすると、バッターボックスに成宮が入る。その初球、

カキーン！

伊佐敷にしては不用意であった甘いストレートを、成宮は強振する。2アウトであるため懸命に走るが、3塁ランナーコーチャーの矢部が、

「入った！ 鳴のやつやりやがった！」

と言うのを聞いて審判を見ると腕を回している。ホームで待っていると、鳴が満面の笑みで還ってきた。

「出来すぎだな」

「いつもこれくらいはできるんだけどね！ 譲ってあげてるだけなんだから」

こんな時も生意気な後輩のヘルメットをとって頭を撫でまくる。

「なにすんのさ！ 雅さんー！」

「勝つぞ」

「っー！」

「この試合勝つぞ」

「……もちろん……」

青道との戦いの中で更に成長する後輩を頼もしく思いながら、俺は次の回の配球を頭の中で組み立てていくのであった。マウンド上の伊佐敷を見ると、へこむどころか、かえって闘志を燃え上がらせているようだった。

春季都大会 準々決勝 part 3

鳴のバッティングは完璧と言うしかなかった。甘めのストレートを見逃さず一閃。カんでライト方向へ引っぱり張りすぎることもなくスタンドイン。これで3という数字がボードに刻まれ、稲実の2点リードとなった。

それから更に、うちの打線は青道ナインを攻めたてる。2アウトながらも山岡がツーベースを放ってチャンスを演出すると、平井のタイムリーヒットで追加点を奪う。伊佐敷はなんとか、続く梵をショートゴロに仕留める。4失点で4回表を切り抜けた伊佐敷を見るが、悔しさを滲ませてはいるが心は折れていなさそうだ。やはり難敵と気を引き締める。

打撃力のある青道相手だと、普通の高校であれば3点差はまだ危険である。しかし、ホームランまで放って完全に投打共に覚醒した鳴は、5回裏に結城のツーベースと、続く西のホームランで2点を奪われたものの、直後の滝川への四球を除いて出塁を許していない。伊佐敷からじわじわと点を奪い、気がつけば7回裏が終了し、試合の幕切れが見え始めていた。

0	0	4	1	0	1	4	5	6	7	8	9	稲実	0
0	0	4	1	0	1	4	5	6	7	8	9	青道	0

相手チームに目を向けると、ファーストライナーに倒れた小湊を青道メンバーがベンチ前で迎え、片岡監督の指示を仰いでいる。相手に焦った様子はなく、それどころか滝川などは鳴の様子を観察するよきな素振りすら見せている。

視線の先にいる鳴は態度には出していないが、小湊やクリーンナップを中心に球数を稼がれているため、7回終了時点で120球を優に超えている。ハイペースでスタミナを消耗しているため、8回裏が限界だろうか。

8回表、稲城実業の攻撃は5番の鳴から始まる。8回表からは門田と交代してグラウンドの土を踏み、伊佐敷からマウンドを引き継いだ長身の男。中継ぎとしての登板経験豊富な青道の3年生ピッチャーの槇原は、力強いフォームからボールを投げ込んでいく。(ここはエースとして打つのを我慢し、鳴には体力を温存してほしいところだが)

キーン！

初球にも関わらず、絶好調の鳴は逆球となったアウトコース低めのストレートを流し打ちして、2塁まで到達する。

(御幸に視線を向けながら膝に手をつけているが、あれはどや顔してゐるな。表情には出していないが結構疲れがあるだろうに)

続く山岡は初球を見逃し、2球目のカーブを狙い打つ。反応良くスタートをきっていた成宮は3塁に進塁するが、一二塁間への強いゴロを小湊が横っ飛びで止め、1塁フォースアウトとなる。

「ナイス亮さんー！」

「いいぞー！」

相手が小湊のファインプレーで盛り上がるなか、国友監督が静かに隣に来て話しかけてくる。

「裏のクリーンナップ相手は成宮に任せる。少なくとも次の回からは、どんな試合展開だろうが井口に投げさせる」

「流石に鳴の球数が多すぎますか」

「ああ：青道打線は全国でも最上位。気の抜けない打者が2番から8番までと多すぎる。いかにスタミナ豊富な成宮でも、あの投球をこれ以上は難しいだろう。夏なら投げさせるかもしれないが、今はあまり無理する場面でもない。それに春甲子園の疲れは表には出さないようにしているが、若干残っているように見えるからな」

その言葉に頷き、井口のウォームアップを手伝いに行く。3塁上の鳴はまだ俺が投げるのに何準備してるの！と怒ったジェスチャーをしているが、槇原の牽制に黙らされていた。

そこから槇原を攻め続けて、平井はコンパクトなスイングで、タイムリーヒットを打ち1点を追加すると、梵は綺麗なセンター返しを披露してランナー1、2塁とチャンスを広げる。

「フォアボール！」

富士川が四球で満塁となると、流石に青道ベンチに動きが見られた。井口の相手を3年の控え捕手に任せて、ちょうど給水して戻ってきた鳴に話しかけようとすると

「井口さんが準備してるし、裏から交代なんでしょ？」

と悔しさを我慢するような表情で鳴が聞いてくる。

「次のクリーンナップを抑えれば俺たちの勝ちだ。この回、裏の守りはエースのお前でいくそうだ」

「流石にあの3人にはもうしつかりとチェンジアップ使わないとね。」

そう話していると、グラウンドが騒がしくなったので目を向けたところ、丹波がマウンドで投球前練習をしていた。

「あーあ、槇原さんを諦めちゃったんだ」

と成宮は苦々しい顔で言う。

「御幸がインコースに構えたミットに逆球を投げて痛打され、簡単に追加点を与える。更に連打の末フォアボール。鳴がやっても交代だろうな。」

「俺はエースだから替えられないし！エースだから！」

疲れが飛んだのか鳴が騒がしくなってきたので黙らせ、グラウンドに意識を戻す。

「1番 センター 神谷くん」

青道にとどめを刺そうと、気合を入れたカルロスがバッターボックスに立つ。しかし

「ストライク！」

低めではあるが甘いところに投げられたストレートを、カルロスは空振りする。

「丹波さんのストレートって、あんなにキレがあつたっけ？」

「いや、カルロスが空振りするほどとは思っていなかったが」

カルロスは2球目のストレートに辛うじて当ててファールにする

が、次のカーブを見逃し三振に切って取られた。

(おいおい：打線だけでも厄介なのに丹波が一皮剥けるとか：昨年の井手さんや武藤さんみたいに立ちはだかる壁となるか)

続く白河は粘るがカーブを空振りして3アウトとなり、うちの攻撃は1点止まりとなった。

高校名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	稲実	0
0	0	4	1	0	1	1				青道	0
0							0	0	1	0	2
										0	0

丹波が披露した圧巻のピッチングに、球場全体が王者青道寄りの空気になる。成宮がマウンドに向かうが、これから迎えるは青道のクリーンナップ。

結城は強靱なメンタルと、磨き上げられた技術を持つアベレージヒッター。西は超人的な身体能力と、動体視力を誇る天性のアーチスト。滝川はパワーと技術を併せ持つ超高校級の強打者。

いずれも怪物世代の打線に食い込んでいた傑物。一筋縄ではいかないだろうと考えつつホームベース後ろに陣取る。

「お願いします」

その声が聞こえた方に目を向けると、強打者特有のオーラを感じさせる相手キャプテンの姿があった。甘い球を見逃さず確実にヒットゾーンへと1球で運ぶ打撃技術は、去年の好打者である柳さんを思い出させるものがある。

ここまで四球、二塁打、二塁打の3打席3出塁という結果を叩き出しており、その驚異的な対応力に完全にやられている。しかし、ここで出塁を許してしまうと、完全に青道のペースとなってしまうため、確実に抑えておきたい。

鳴の度胸を信じてインコース低めへとミットを構える。

「ボール！」

攻める気持ちは出すぎたか、内側へとストレートが外れる。結城は

反応を見せず、静かに鳴の動きに集中を高めているのがやりにくい。2球目は外に構えてわざと外すが

ギイン！

初見のチェンジアップに当ててはきたが、結城はバットを振り切ることができず、完全に態勢を崩していた。

(少し浮いてしまったが、結城ですらついていくのがギリギリか？…この緩急があればいけるか？…)

そう考えて今度はインコース高めにストレートを要求する。そのボールに対してバットが動くことはなく、簡単に2ストライク1ボールとなる。1球インコース高めに外れるストレートを、見せ球として使う。そして最後に決め球としてチェンジアップを要求する。

(これだ！アウトコース低めいっぱいの絶妙なところ！)

キイン！

甲高い金属音が響き、ボールは綺麗にスライスしながら、グラウンドへと飛び出す。セカンドを守る平井のグローブを掠めて、ボールがグラウンドを駆けていく。打球が速かったため、ライトの富士川がワンバウンドしたボールを丁寧に捕球して、ノーアウト1塁となる。

「ランナー1塁・ケース意識しろよー！」

そう口にするとともに、結城に対して警戒心を強める。

(1回見ただけでその打席で完璧にアジャストされた？もしかしたら癖でもあるのか？)

「4番 センター 西くん」

深く思考する間もなく、次の打者がバーターボックスに立ちほだかる。中学時代、そして先程の打席で鳴からホームランを放っている青道の主砲。ここまで3打席2安打と、打席を経るごとに鳴のボールに対応してきている。

厄介なのが、おそらくボールを目で完全に追ってバットを振ってく

るため、配球で目線を外したり、タイミングをずらしたりしても当ててくること。第1打席のように想定外の軌道でないと、なかなか三振を奪うことが難しい。

ただ、傾向としては初球や1ストライク目でバットを振ってくることが少ない。

(慎重になりすぎてもいけない。ここはまず1つストライクをもらって有利にいこう)

「ボール！」

打ち気をそらすために、バックドアのゆるいカーブでカウントを取ろうとするが、わずかに外に外れる。成宮の表情を見るが臆したような感じではない。

ここでふと西の様子を窺うと、確実に甘い球を見逃すまいと、集中力を更に増しているようだ。アウトコース低めにスライダーを要求すると鳴は首を振ってくる。ストレーターのサインで首を縦に。

(前の打席で完璧にストレートを運ばれたのに、ここでストレートを投げたいか。攻める気持ちは確かに大事で、強気なのはいいがこれは無謀：しかし監督からは経験を積ませろと言われている：今後に繋げるために腹をくくるか。いや、今日の鳴ならばもしかしたら)

チラッとブルペンを見ると井口の準備はできている。深呼吸をしていつものようにミットを構え、ボールの感触を待つが、綺麗な金属音と観客の歓声が先に耳に届く。目線を上げると、ライトスタンドを呆然と見つめる鳴の頭から帽子が落ちるところだった。

鳴に声をかけるために駆け寄ろうとしたが、後ろから足音が聞こえてきたため振り向くと、こちらを見透かすような目をした滝川がこちらを見ていた。

春季都大会 準々決勝 part 4

自分の手にホームランの感触が残るうちに、クリスさんがバットを振り抜くと1拍、グラウンドの時間が止まる。クリスさんが悠然と1塁へと歩み始め、自分は打球の行方を確認した御幸たちと歓声を上げハイタッチする。

2者連続ホームランで稲実に1点差へと迫り、スタンド席からの応援にも熱が入る。成宮から代わったばかりの井口さんは苦々しい顔をしてはいるが、初球をスタンドに運ばれたことで目が覚めたのか、映像で見たときよりも鋭い目をしている。しかし、井口さんの目の前にいる男はどうだろうか。

金属バットと衝突して軽い音を奏でたボールは、三塁線の内側をなぞるように転がる。

「キャッチャー！」

バッターの増子さんはパワーがあるため、下がり気味だった稲実サードの吉沢さんが原田さんに声をかける。

「あっ！」

キャッチャーの原田さんはボールをお手玉し投げられない。増子さんのセーフティバントが成功し、同点のランナーがノーアウトで1塁へ。

「しゃー！逆転するぞ！オラァー！かかってこい！」

打席に立った純さんが叫び、それに呼応して青道の応援が激しくなる。

「タイム！」

同点になれば勢いでそのまま勝負が決まってしまうかねない、そんなギリギリのラインで相手の国友監督がタイムを要求する。伝令に駆け出したのは、帽子を深くかぶって目元を隠した成宮だった。

稲実ナインが集まっている間に、クリスさんが話しかけてくる。

「成宮の性格を読んでのストリート待ちは完全に当たったな」

「はい！クリスさんの言った通り、ファーストストライクはストリートでした。変化球だったら見逃してましたね」

「それでいい。井口の初球を狙って原田から崩したかったが」

クリスさんはそう言いかけてグラウンドに目を移す。その先には引き締まった表情ながらも、成宮に対して謝り、時には笑顔を浮かべる原田さんがいた。

「立ち直ったな……ここからの攻撃が大事になるな……」

「ですね」

自分の失点を挽回したいと思っているであろう純さんは、ピッチャーを本職とはしているものの打撃が良く、出塁率を高水準にキープしている。また右方向にも臨機応変に打てる。期待を込めて打席を見守っていると

「走ったー!」

稲実のセカンド 平井さんの声がグラウンドに響く。純さんがフルスイングで空振りすると、ワンテンポ遅れて原田さんが2塁へと送球する。

「セーフ!」

増子さんは完璧に盗塁を決めて、ノーアウトで得点圏にランナーがいく。純さんが吠えるのを聞きながら横を見ると、この試合出塁なしの倉持が悔しげに拳を握っている。

(そりやそうだよな)

と納得していると、主審の声が聞こえてくる。1ストライク1ボールとなり、井口さんは深呼吸をしてマウンドをならしている。純さんは口では色々吠えているが、視線はしっかりと井口さんを捉え、集中しているように見える。3球目のインコース高めのレストランを見極め、1―2のバッティングカウントとなる。

ギーン!

鈍い音が聞こえ、ボールはセンター方向へと転がっていく。

「これは抜けるぞー!」

そういった声を、希望を断つようにショートの白河が追いつき、回転してから1塁へと送球する。ボールと純さんはほぼ同時に1塁に

到達する。一瞬の間があり、

「アウトー！」

「くそつたれが！」

審判の声を聞いた純さんが地面を叩き叫ぶ。しかし、アウトにはなったものの、ランナーは3塁へと進んでいる。そして次のバッターは

「8番 キヤッチャー 御幸くん」

逆転のチャンスに、この試合で1番の声援が御幸の背中を押す。いつも通り不敵に笑みを浮かべながら、バッターボックスへと入っていく。

「ここで打てよー！」

「油断するんじゃねえぞゴラァ！御幸ー！」

いつも通り構えた御幸に対して、井口さんは真っ向勝負を挑んでくる。初球のインコース低めギリギリ一杯に入るストレートを見逃して1ストライク。2球目は内側へ挟りこむようなスライダーに、なんとか御幸は当てるが追い込まれてしまう。

(ここで御幸が打たないと、2アウト3塁で丹波さんか：代打を出す場面になるからまずいな：勝っていれば丹波さんを打席にそのまま送り出す選択ができた。この負けている状況なら監督は代打を出すはず。そうなれば残りの投手は、疲労のある純さんと昨日投げた真木のみになる。夏あたりになれば大丈夫だろうけど、まだ真木は本調子じゃないんだよな)

そんな思いとは関係なく状況は進んでいく。御幸もそれが分かっているのだろう、際どいボールにも手を出してなんとか粘っていく。7球目のアウトコースの低めに外れるストレートを見極め、カウントを2—2まで整える。

「井口ー！ここで男を見せろ！」

「御幸ー！得意のチャンスやろ！打てや！」

両者に懸命な応援が飛んでくるなか、井口さんの雰囲気には違和感を感じる。何かしてくるかと思しむが、特にベンチが動いたり、野手が特別なサインを出している様子はない。そして、井口さんが投球モ―

「たはは、あの場面でシュートかよ」

キャッチャー防具をつけながら、御幸は監督に井口さんが投げた新球種の特徴を楽しげに伝えていく。御幸の打席で井口さんが最後に投げたボールが気になるが、センターの守備につかねばならないため、聞いている途中ではあるが外野へ走っていく。9回表、稲実の攻撃もクリーンナップから。油断ならないバッターが続くが、ここは無失点で切り抜けたところ。

マウンド上の丹波さんは気負うことなく、堂々とした姿を見せている。長い間怪我やメンタル面に悩まされていたが、これが本当の丹波さんかと心にくるものがある。

「3番 サード 吉沢くん」

しかし、それは稲実の3年生にも言えること。それぞれ壁を乗り越え、結果を出してきたからこそこの場に立っている。先程は見事な連携プレーで魅せた吉沢さんが右打席に入る。何が何でも塁に出てやるという気持ち伝わってくる。

丹波さんは初球カーブをインコースへ投げるが、吉沢さんは避ける素振りを見せない。

「ストライクー」

フロントドアのカーブは、自分の体に向かってくるように感じるはずだが、気持ちで向かってくる。

「さあボールくるぞー！声出せー！」

「丹波！こつちに打たせてこい！」

「いったれー！」

各々が声を出して丹波さんを盛り上げていく。2球目のストレートに吉沢さんは空振りする。

「追い込んだぞー！打ってくるぞー！」

更に気を引き締めて足を軽く動かす。

キーン！

ボールは二遊間を転がっていく。亮さんがなんとか追いつくが、グローブから弾いてボールが転がる。

「倉持！」

反応した倉持が右手で拾って投げようとするが、その頃には吉沢さんは1塁に到達していた。ノーアウトランナー1塁、そして打席には4番キャプテンの原田さん。

丹波さんが2つ続けて、低めのカーブをゾーンに投げると、原田さんは2球目のカーブにバットを当ててカットしてくる。両者睨み合い、外のストレート、低めに外れるスローカーブを見極められ、2とカウントが進む。

「ランナー走った！」

「ボール！」

吉沢さんは走る素振りを見せただけで帰塁する。

「ボール！フォア！」

フルカウントになって丹波さんに力みが出たか、カーブが大きく外に外れてノーアウトランナー1、2塁となり、得点圏へとランナーが進む。5番に入った井口さんがバントを丁寧決め、1アウトランナー2、3塁となった。

「6番 ファースト 山岡くん」

打席には長距離砲の山岡、そしてネクストサークルには好打者の平井さんが控えている。これが丹波さんにとって、この試合初めての自分が招いたピンチとなった。

春季都大会 準々決勝 part5

3 塁に吉沢、2 塁に原田がいるのを見て悔しさが込み上げてくる。それはこの1アウトランナー2、3 塁のピンチ、これのきつかけになつたのが自分のエラーだったから。1 歩目は良かったものの、普段練習では取れている打球であるからこそ丹波に、そしてチームに申し訳無さがある。片岡監督を見ると、こちらを信じている目をしていて、どこかで挽回しなければと思わされる。

「外野タッチアップあるぞ！内野は4つ意識！スクイズも警戒！稲実はやってくるぞ！」

「これ以上離されるわけにはいかないぞ！」

「丹波ー！攻めていけ！変わるんだろうが！」

プレーで足を引っ張ってしまった。そう感じたのならそれは声かけやプレーで地道に返していくしかない。内野全体が気持ち少しだけ前進し、小刻みに足踏みして次の打球に備える。

打席にいる山岡は率は低いものの一発があるバッター。速い打球が予想されるため、内野で止めてさえしまえば、3 塁ランナーを牽制しつつ1 塁でアウトを取れる。

丹波は初球カーブで空振りを奪うと、続く高めストレートでも空振りを奪い、簡単に2 ストライクと追い込む。

(1つアウトもらって腕の振りが戻った？ランナーが出たり打たれたりしたら崩れることが多かったけど、前の登板で何か掴んでから練習でもいい投球していたことに何か関係が？まだ不安定なところもあるけど、1 試合でこんなに変わるもんなんだね。そしてそれを後押しする強気のリード)

「ストライク！バッターアウト！」

(あんなに組むの避けてたのに…なんだ…意外に相性いいんじゃない。クリスがあっさり御幸にキャッチャー譲ったのは納得いかなかったけど、こう見せられるとね)

インコース低めのフロントドアとなるカーブに手が出ず、山岡は3 球で三振となり2アウトに。

「ナイピッチ！」

「丹波ええぞー！」

「2アウト！内野ゴロは確実に1つで！外野は前進！余計なランナー返さないよー！」

内野は定位置に戻りセーフティバントも警戒する。打者は左打ちの平井で、ここまでヒットも出ているバッター。2アウトではあるが、なにかしてきそうな雰囲気がある。

ギーン！

「フアール！」

これまで原田以外の打者は当てることすらできていなかったカーブに、平井は初見で軽く当ててくる。

(2年生に注目が行きがちだけど、やっぱりこいつもいい打者だ)

「丹波！相手は捉えきれない！押し続けていけ！」

哲の声に丹波は目を合わせることで返し、セットポジションからアウトコース低めにストレートを投げきる。

「ストライク！」

「うっしや！追い込んだぞー！そのままいけやゴラア！」

深く息を吸って適度に脱力する。

キーン！

綺麗な金属音が聞こえるやいなや、背走してボールを追いかける。

(1歩目は完璧！純は…突っ込んできてる…!?)

「任せた！」

「うおらあああ！」

自分は横に逸れ、純は懸命に走ってグローブを突き出して飛び込み、ボールを巻き込んで転ぶ。

「まわれまわれー！」

稲実の走者が純の態勢を見て更に次の塁に進み始めるが、純は飛び

坂井がストレートを打ち損じ、ファーストの山岡が捕球して1アウトとなる。ネクストサークルに向かう際に坂井に

「ボールがキレイてる。かなり気合入ってるぞ」

という言葉をもらい、井口の表情を見ると鬼気迫るものを感じる。(そういえば点差とかは違うけど、状況としては去年の夏と同じかな？去年は南野さんからスイッチした成宮が敬遠失敗。同点になってから登板した井口が、後続を抑えきれずうちの勝ちだったよね)

井口は右腕をしながら力一杯に倉持を圧倒する。初球のストレートをインコース高めに投げて、倉持の上体を起こす。そして2球目にインコースの低めに外れるカーブで空振りをとって簡単に追い込む。

「倉持ー！ボールしっかり見ろー！」

「青道を代表してその場に立ってんだろうが！」

「タイムー！」

倉持は1度打席を外して深呼吸をし、軽く素振りをして打席に戻る。そしてボールは

ギーン！

鈍い音をたてて1塁線上を転がっていく。ノロノロと転がるボールは、山岡の目の前でゆっくりと止まった。

「セーフー！」

アウトになれば絶体絶命の場面。そこでスリーバントを決めた倉持に感心する。

(試合では左に専念してるアピールしてるけど、俺たちは右でも素振りしてるってこと知ってるんだから。でも表情を見るに、塁に出るために形にこだわらない覚悟が決まったみたいだね。まったく…色々考えすぎたりかっこついたり忙しいんだから…)

打席に入って肩幅ほど足を開き、ネクストサークルに入った哲を、そして影次、クリスを見る。

（そう、俺たちにはこんな頼れるバッターが後ろにいるんだ。迷うことなんてない。繋げるんだ！）

「走った！」

キーン！

初球、インコースへシュート気味に来たストレートを、適度に力を抜いたスイングで捉え、ライト線目掛けてバットを回しきる。

「フェア！」

「ヒヤハ！」

あらかじめスタートをきっていた倉持が2塁、3塁を蹴り、ホームを楽々陥れる。

（力んだが故のナチュラルシュートだったか。御幸、話が違うじゃん。さては丹波と久々に試合で組んで集中してなかったな？でもこれなら大丈夫だろうな）

2塁上でガッツポーズをすると、青道側の観客席に自分よりも前髪は長い、同じ髪型をしている小さい影を見つけて手を振る。

（春市、今年の夏は俺たちが甲子園に連れてってあげるよ。でもまずは関東大会へ）

「3番 ファースト 結城くん」

「タイム！」

1アウト2塁で1打サヨナラの場面、ここからは青道が誇るクリーンナップ。自分が逆立ちしても勝てないであろう3人が並ぶ。天才2人の前を打つことが許された、努力を積み上げ続ける秀才。同級生ながら自分が背中を追い続けたキャプテンが打席に入る。

それは無駄なボールを振らない。稲実のタイム後、相手バッテリはボールが先行し、マウンド上の井口は汗まみれになっている。曇りなき目で見極め、下半身から始まった動きが完結すると、打球は弾丸を思わせるような伸びを見せ、バックスクリーンへと叩き込まれていった。

ホームをしっかりと踏みしめ、1歩、2歩と進んで反転する。隣り

合った影次と、後ろから迫ってくる多くの聞き慣れた足音をBGMに、軽く笑いながらホームを踏みしめて片手を上げる哲を迎えた。

▽金丸視点

「先輩たちやべー！選抜ベスト8の稲実に競り勝った！」

「キャプテンのホームランやばかった」

「クリーンナップ全員ホームラン打った感じ？」

観客席からは歓声よりもどよめきの方が大きかった。改めてスコアボードを見る。

高校名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	稲実	
0	0	0	4	1	0	1	1	0	7	0	0	1
0	2	0	0	0	3	3	?	9				

選抜では成宮さんと井口さんのダブルエースが、3試合で計4失点と全国区であることを示した稲実投手陣を、後半一気に攻略しての勝利に脱帽する。それとともに、改めてすごい学校に入ったのだと身震いする。

「秀明！やっぱうちの打線は強いな」

「うーん」

「勝ったのに浮かない顔してどうしたんだよ？」

そう聞くと秀明は周りを軽く見てから、小さい声で

「エースの伊佐敷さんは、ゾーン勝負でテンポはいいけど、全国区の打線だと2巡目には対応されちゃうね。コントロールがとても良いわけでもない。植原さんも打たれ続けてたし、投手陣は付け入る隙もありそうだなって」

「ま、まあ去年の武藤さん、井手さんに比べると厳しいけど」

「うん、決めた」

そう言って秀明はこちらを力の籠もった目で見てくる。

「高校では投手に専念するよ。向井じゃなくて俺が青道のエースに

なって、甲子園で優勝する」

ペットボトルの蓋を開けて一気飲みすると続けて

「そのためには南野、佐々木以上のバッターも必要になるんだけど…
信二がなってくれるよね…?」

「うぐ、あいつら以上のバッターか。」

いきなりの展開にビビったが、向き合って固く握手をする。

そんなことをしていると、父兄や高校野球ファンが多くいる席から
のざわめきが広がってくる。耳を澄ますと

「は?市大三高が準々決勝で敗退した?」

地元スポーツWEBニュース

春季東京都大会 昨年夏の覇者が逆転サヨナラV

春季東京都大会は本日、準々決勝4試合が各地にて行われた。その1つの試合で昨夏の甲子園覇者 青道高校が、今春の選抜ベスト8 稲城実業を9―7のサヨナラ勝ちで破り、準決勝進出を決めた。

最後まで打って打って打ちまくる。我らが憧れた青道が帰ってきた。最後まで諦めず、最終回に2番 小湊 亮介（3年生）のタイムリーツーベースで同点に追いつくと、最後は主将 結城 哲也（3年生）が勝負を決めた。

試合序盤は両校エースが要所を締める、どちらかという投手戦の始まりを思わせる落ち着いた滑り出しであった。試合が動いたのは3回裏、青道高校の攻撃で主将の結城 哲也（3年生）が2塁打でチャンスを演出すると、4番 西 影次（2年生）がしぶとく内野手の間を破るヒットで先制点をあげた。

その先制点を口火に点の取り合いが始まり、両校打線が互いにエースを攻め立てた。4回表には稲城実業の主将である原田 雅功（3年生）が同点打を放つと、続くエース成宮 鳴（2年生）が2ランホームランで突き放す。対する青道高校は主砲である西 影次（2年生）が2ランホームランを2度放つなどで反撃。序盤の静けさはなんとやら、壮絶な打撃戦へとシフトしていった。

両校とも主将を含めたドラフト候補たちが活躍し、最後は青道高校の主将 結城 哲也（3年生）が打撃戦の締めにあざわしい、豪快な弾丸ライナーをバックスクリーンに叩き込んで試合は終了した。



秋の雪辱を果たした黒土館エース 圧巻の投球

春季東京都大会は本日、準々決勝4試合が各地にて行われた。プロ

注目打者3人がクリーンナップを打つ青道高校と、プロ注目バッテリー擁する稲城実業の試合が終了した同時刻、○○球場にて黒土館エース財前 直行(3年生)はマウンド上で雄叫びを上げた。

財前 直行(3年生)は9回を被安打1無四球16奪三振の好投で、選抜覇者 市大三高打線を終始圧倒した。内容としては8回1/3まで完全試合投球を継続していた。

秋季東京都大会では夏の連投により右肩に違和感を覚え、満足な投球ができなかった。後輩ピッチャーが登板するのを4番主将として支えたが、背番号1は一度もマウンドに上がることはなく、黒土館は3回戦で姿を消した。

黒土館は苦しい時期を乗り越えたエースを、2年生中心の野手陣が支える。初回、立ち上がりが不安定であった市大三高エース真中 要(3年生)から3番 松原 南朋(2年生)が四球を選んで出塁すると、4番 財前 直行(3年生)が繋いでチャンスをはひろげる。そこから5番 乾 憲剛(2年生)が死球となり2アウト満塁になると、6番 梅宮 聖一(2年生)が走者一掃のタイムリーツーベースを放って先制点をあげ、それがそのまま決勝点となった。

初回以降、市大三高エース真中 要(3年生)はランナーは出すものの、要所を締めるピッチングでチームを鼓舞する。しかし、選抜で猛威を奮った打線は黒土館エース財前 直行(3年生)の前に沈黙した。

黒土館エース財前 直行(3年生)は今大会最速154キロの直球を中心に、ツーシームやカットボールのムービング系で内野ゴロを打たせ、スライダーとフォークで打者を翻弄した。

一方で、敗れた市大三高にもいいニュースはあった。北川 小虎(現阪神)の弟であり、昨年のU-15では4番キャプテンを務めた北川 大雅(1年生)が、代打として高校初打席で世代最強右腕を打つてみせたのだ。完全試合を期待する雰囲気の中、芯で捉える度胸を持った次世代の強打者にも今後注目していきたい。

巻き起こる新旋風敗れる

春季東京都大会は本日、準々決勝4試合が各地にて行われた。2年生の2枚看板を中心とした薬師高校は、ここまで下馬評を覆してトーナメントを駆け上がっていた。その勢いに待ったをかけたのが古豪仁王学舎であった。

両校打線ともそれなりの力はあるが、今試合はエース同士による投手戦が展開された。薬師高校は2枚看板の1人 楊 舜臣（2年生）が、ストライクゾーンを幅広く使うクレバーな投球を繰り広げるのに対し、仁王学舎エース磯端 勇氣（3年生）は、140キロを超える剛球とフォークの組み合わせで力を見せつけた。

序盤、中盤と睨み合いが続くなか、先に動いたのは薬師高校であった。流れを変えるために8回裏に好投していた楊 舜臣（2年生）から、もう1人のエース 真田 俊平（2年生）にスイッチするが、3球目を投げた後に右足を抑えてうずくまった。

マウンドに戻った楊 舜臣（2年生）は再び打たせて取るピッチングをするが、野手のエラー絡みで失点を積み重ねた。薬師高校に劣勢を跳ね返す力はなく準々決勝で姿を消すこととなった。



春季東京都大会 ベスト4出揃う

春季東京都大会は本日、準々決勝4試合が行われたが、仙泉学園が成孔を3―0で破ってベスト4入りを決めた。長打力ある強力打線に定評のある成孔打線を、仙泉学園1年生の天才ピッチャーが完璧に抑え込んだ。

仙泉学園の1年生である今井 次郎は、左投げ左打ちの外野手兼投手。昨年のU―15では1番 ライトとしてリードオフマンを務めた。ピッチングセンスも抜群で、本郷 正宗（巨摩大藤巻）と左右の2枚看板としてチームを勝利へ導いた。

今日の試合では最速141キロの速球に、スライダーとシュートを織り交ぜて三振の山を築き上げた。大振りしてくる打線に真っ向勝負を挑み、自身の才能をこれでもかと発揮した。9回を1人で投げきり無失点、打っては4打席で3安打と全ての得点に絡む活躍であった。

怪物世代が高校を去って寂しくなった高校野球に、本郷 正宗（巨摩大藤巻）や今井 次郎（仙泉学園）を代表とした世代が参入し、新たな高校野球の歴史が刻まれていくことだろう。